『福音の回復』　第二巻
【「神の福音」の真実（応用編）】

あいさつ

人の「真実な姿」は、神がアダムを造られた際の彼の姿である。その姿と私たちの「現状の姿」との間に違いがあれば、その違いを埋めるのが「神の福音」ということになるが、人の「現状の姿」が人の「真実な姿」と同じであれば、神は人に対して何もする必要はないので、そこには「神の福音」は存在しない。しかし、神が人に「神の福音」を啓示されたということは、そこには違いがあることを意味する。ならば、人の「真実な姿」と人の「現状の姿」との間に、一体どのような違いがあるか。その違いを特定できれば、人の問題も分かり、「神の福音」の真実も知ることができる。

そこで、『神の福音』第一巻では、人の「真実な姿」と人の「現状の姿」との違いを特定し、その違いを引き起こした「出来事」も明らかにした。それは、アダムの罪に伴い「死」が入り込むという出来事であった。「死」は、まさしく神に似せて造られた人を真っ向から「否定」する運動であり、その運動が入り込んだ結果、人の体は滅びるしかない「死の体」になった。これが人の抱える「究極の問題」である。

また、「死の体」になったことで、すなわち有限になったことで、無限の神が認識できなくなり、不安が生じ、見える安心をむさぼる罪を繰り返すようになった。これが人の抱える「現実の問題」である。この二つの問題から、それぞれの問題に対応する「神の福音」を、第一巻では見てきた。その福音を一言でいえば、神に似せて造られた人を「否定」する運動を「否定」することであり、「否定」の「否定」が「神の福音」の真実である。これが第一巻の話であり、第二巻では、見てきた福音を他の視点から見ていく。そこで副題を、【「神の福音」の真実（応用編）】とした。

表記について

『福音の回復』での聖書の引用は新改訳聖書第三版を使用する。そうでない場合は、その都度聖書訳名を表記する。ただし、その場合の聖書箇所の表記は、新改訳聖書第三版の表記を基に本書独自の「略語」を用いる。例えば、新共同訳は「コヘレトの言葉」と表記するが、新改訳聖書第三版は「伝道者の書」とするので、本書は「伝道者」と記す。以下、『福音の回復』で引用した聖書箇所の「略語」の一覧である。

－旧約聖書－

本書の「略語」	新改訳 第三版 新改訳 2017	口語訳	新共同訳 聖書協会共同訳
創世記	創世記	創世記	創世記
出エジプト	出エジプト記	出エジプト記	出エジプト記
レビ記	レビ記	レビ記	レビ記
民数記	民数記	民数記	民数記
申命記	申命記	申命記	申命記
ヨシュア記	ヨシュア記	ヨシュア記	ヨシュア記
士師記	士師記	士師記	士師記
Ⅰサムエル	サムエル記第一	サムエル記上	サムエル記上
Ⅱサムエル	サムエル記第二	サムエル記下	サムエル記下
Ⅰ列王記	列王記第一	列王紀上	列王記上
ネヘミヤ	ネヘミヤ記	ネヘミヤ記	ネヘミヤ記
ヨブ	ヨブ記	ヨブ記	ヨブ記
詩篇	詩篇	詩篇	詩編
箴言	箴言	箴言	箴言
伝道者	伝道者の書	伝道の書	コヘレトの言葉
イザヤ	イザヤ書	イザヤ書	イザヤ書
エレミヤ	エレミヤ書	エレミヤ書	エレミヤ書
エゼキエル	エゼキエル書	エゼキエル書	エゼキエル書
ダニエル	ダニエル書	ダニエル書	ダニエル書
ホセア	ホセア書	ホセア書	ホセア書
アモス	アモス書	アモス書	アモス書
ミカ	ミカ書	ミカ書	ミカ書

－新約聖書－

本書の「略語」	新改訳 第三版 新改訳 2017	口語訳	新共同訳 聖書協会共同訳
マタイ	マタイの福音書	マタイによる福音書	マタイによる福音書
マルコ	マルコの福音書	マルコによる福音書	マルコによる福音書
ルカ	ルカの福音書	ルカによる福音書	ルカによる福音書
ヨハネ	ヨハネの福音書	ヨハネによる福音書	ヨハネによる福音書
使徒	使徒の働き	使徒行伝	使徒言行録
ローマ	ローマ人への手紙	ローマ人への手紙	ローマの信徒への手紙
Ⅰコリント	ｺﾘﾝﾄ人への手紙第一	ｺﾘﾝﾄ人への第一の手紙	ｺﾘﾝﾄの信徒への手紙一
Ⅱコリント	ｺﾘﾝﾄ人への手紙第二	ｺﾘﾝﾄ人への第二の手紙	ｺﾘﾝﾄの信徒への手紙二
ガラテヤ	ガラテヤ人への手紙	ガラテヤ人への手紙	ｶﾞﾗﾃﾔの信徒への手紙
エペソ	エペソ人への手紙	エペソ人への手紙	ｴﾌｪｿの信徒への手紙
ピリピ	ピリピ人への手紙	ピリピ人への手紙	ﾌｨﾘﾋﾟの信徒への手紙
コロサイ	コロサイ人への手紙	コロサイ人への手紙	ｺﾛｻｲの信徒への手紙
Ⅰテサロニケ	ﾃｻﾛﾆｹ人への手紙第一	ﾃｻﾛﾆｹ人への第一の手紙	ﾃｻﾛﾆｹの信徒への手紙一
Ⅱテサロニケ	ﾃｻﾛﾆｹ人への手紙第二	ﾃｻﾛﾆｹ人への第二の手紙	ﾃｻﾛﾆｹの信徒への手紙二
Ⅰテモテ	テモテへの手紙第一	テモテへの第一の手紙	テモテへの手紙一
Ⅱテモテ	テモテへの手紙第二	テモテへの第二の手紙	テモテへの手紙二
テトス	テトスへの手紙	テトスへの手紙	テトスへの手紙
ヘブル	ヘブル人への手紙	ヘブル人への手紙	ヘブライ人への手紙
ヤコブ	ヤコブの手紙	ヤコブの手紙	ヤコブの手紙
Ⅰペテロ	ペテロの手紙第一	ペテロの第一の手紙	ペトロの手紙一
Ⅱペテロ	ペテロの手紙第二	ペテロの第二の手紙	ペトロの手紙二
Ⅰヨハネ	ヨハネの手紙第一	ヨハネの第一の手紙	ヨハネの手紙一
Ⅱヨハネ	ヨハネの手紙第二	ヨハネの第二の手紙	ヨハネの手紙二
Ⅲヨハネ	ヨハネの手紙第三	ヨハネの第三の手紙	ヨハネの手紙三
ユダ	ユダの手紙	ユダの手紙	ユダの手紙
黙示録	ヨハネの黙示録	ヨハネの黙示録	ヨハネの黙示録

聖書 **新改訳 第三版**：新日本聖書刊行会　発行
聖書 **新改訳 2017**：新日本聖書刊行会　発行
聖書 **口語訳**：日本聖書協会　発行
聖書 **新共同訳**：日本聖書協会　発行
聖書 **聖書協会共同訳**：日本聖書協会　発行

本書は研究論文ではないので、引用や参考文献の表記はその都度文中で行い、文献での番号は以下の「凡例」に従う。加えて、日本語の翻訳があるものは翻訳表記とし、翻訳がないものは原典表記とする。

凡例（第二巻で引用した書籍の記号について）

◆ **カント**

- **『純粋理性批判』**BXVI とあれば、「B」は第二版、ローマ数字「XVI」は序言の段落、その箇所がアラビア数字であれば頁数
- **『たんなる理性の限界内の宗教』**A126 とあれば、「A」はアカデミー版カント全集第 6 巻、「126」は頁数
- **『諸学部の争い』**W273 とあれば、「W」は Immanuel Kant Werkausgabe. Band XI. Herausgegeben von Wilhelm Weischedel. Suhrkamp 1964 Frankfurt am Main. 版、「273」は頁数
- **『たんなる理性の限界内の宗教のための準備原稿』**A110 とあれば、「A」はアカデミー版カント全集第 23 巻、「110」は頁数

◆ **キェルケゴール**

- **『不安の概念』**（423-424）とあれば、（423-424）は「セーレン・キェルケゴール全集」第二版第四巻に於ける頁数（Søren Kierkegaard Samlede Værker Udgivne af A. B. Drachmann, J. L. Heiberg og H.O.Lange. Anden Udgave. Fjerde Bind. Kjøbenhavn. Gyldendalske Boghandel, Nordisk Forlag.1923.305-473 に於ける頁数）
- **『遺稿集』**第二版（日誌）Pap.X 4 A 600 とあれば、「Pap. X 4」は**『遺稿集』**第二版、「日誌」第 10 巻の 4 で、「A 600」は A 部の 600 番を指す
- **『後書』**34 とあれば、**『後書』**は**『哲学的断片への結びの学問外れな後書』**の略であり「34」は、「セーレン・キェルケゴール全集」第三版第九、十巻に於ける頁数（Søren Kierkegaard Samlede Værker. Bind9.10. Gyldendal. 1963. Tekst og Noteapparat gennemset og ajourført af Peter P.Rohde.に於ける頁数）

『福音の回復』　第二巻

【「神の福音」の真実（応用編）】

―目次―

序論 ……7 頁

第一章　**「神の福音」の真実のまとめ** ……9 頁

第二章　**「神の愛」の中に留まる** ……23 頁

第三章　**「神の裁き」**……32 頁
―「神の裁き」とは何なのだろう ―　32 頁／
―「神の裁き」の真実 ―　40 頁／

第四章　**「神の怒り」**……52 頁
― ノアの時代の大洪水 ―　52 頁／
―「罰」は必要なのか ―　71 頁／
―「絶望」の三つの段階 ―　92 頁／

第五章　**「癒やし」** ……98 頁
―「病気」について ―　98 頁／
―「罪」の正体 ―　107 頁／
―「癒やし」の話 ―　120 頁／
―「悪霊」を追い出す ―　131 頁／
― 日常の視点から見る「癒やし」―　138 頁／
― 真の「癒やし」―　142 頁／

第六章　**「再結合」** ……153 頁
― 神との「再結合」―　153 頁／
―「罪を悔い改めよ」―　172 頁／

第七章　「苦しみ」から「苦しみ」へ ……194 頁
ー「苦しみ」について ー 194 頁／
ー「苦しみ」をも賜った ー 208 頁／
ー「闇」から「光」へ ー 214 頁／
ー 総括 ー 227 頁／
ー キリスト教の考察 ー 238 頁／

第八章　「信仰」と「妄想」 ……245 頁
ー「信仰」と「妄想」の特徴 ー 246 頁／
ー 神は「妄想」と戦われる ー 253 頁／
ー 神からの「信仰」ー 258 頁／
ー「十字架」の意味 ー 269 頁／
ー クリスチャンの生き方 ー 277 頁／

第九章　「愛」が神から流れ出ている ……289 頁
ー 三位一体の神 ー 289 頁／
ー「愛」の流れ ー 295 頁／
ー「愛」の実際 ー 301 頁／
ー「愛」に反抗する思い ー 306 頁／
ー 神による「癒やし」ー 312 頁／
ー 繰り返すー 321 頁／
ー 新たな「規定」ー 330 頁／

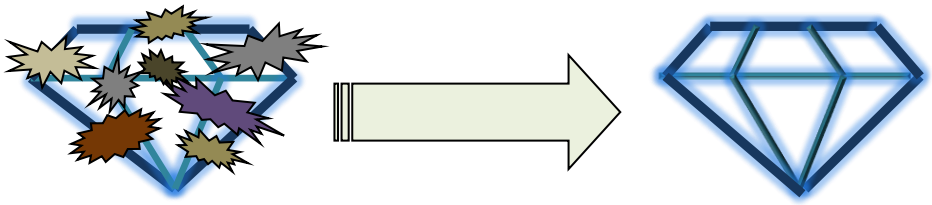
第十章　「勝利者」と「敗北者」 ……348 頁
ー「敗北者」の話 ー 348 頁／
ー「勝利者」の話 ー 353 頁／
ー「責め」の意識 ー 358 頁／

付録 ：「惑わしの仕組み」 ……371 頁
ー 死のとげは罪 ー 383 頁／

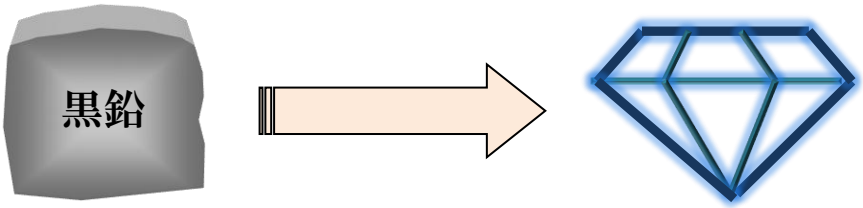
【「神の福音」の真実（応用編）】

序論

『福音の回復』第一巻では、「神の福音」の真実を見てきた。それは、神に似せて造られた「良き者」を「否定」するものを「否定」する、という話であった。ダイヤに喩えると、ダイヤに付いた泥を洗い流し、元の輝きを取り戻すという話であった。



だが、「神の福音」は一般に、堕落した人間を神が「良き者」にする話として理解されている。「ダメな者」を「良き者」にする話として捉えられている。人を黒鉛に喩えるなら、神は黒鉛を叩いてダイヤに変えるという話である。



この誤解は、人を知る「人間的な標準」の眼鏡による。その眼鏡は人の価値を行いで判断するので、そこでは誰の行いも不十分となり、誰もが堕落した「ダメな者」となる。そして、人はそれを前提に「神の福音」を知ろうとするから、「神の福音」は「ダメな者」を「良き者」にする話となる。そこで、聖書は次のように警告している。

> 「ですから、私たちは今後、人間的な標準で人を知ろうとはしません。かつては人間的な標準でキリストを知っていたとしても、今はもうそのような知り方はしません。」（Ⅱコリント 5:16）

この警告からも分かるように、キリストが明らかにされた福音を、「人間的な標準」の眼鏡を通して知ろうとするのは誤りである。大事なことは、人は神に似せて造られた「良き者」であるということである。「神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった」（創世記 1:31）。これが、人の「真実な姿」である以上、

罪を犯してしまう「現状の姿」は、あくまでも病気の姿ということになる。医者は病人に対し、人間であることを変えるのでなく、人間本来の機能ができなくなった原因を特定し、治療するが、「神の福音」もそれと全く同じである。「神の福音」は、人は神に似せて造られた「良き者」であり、それは神の「栄光」の姿なので、その「栄光」の姿をしている私たちについた泥を洗い流し、「栄光」から「栄光」へと、主と同じ姿に戻していくのである。

> 「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」（Ⅱコリント 3:18）

つまり、「神の福音」の真実は、人への「否定」を「否定」することである。神が造られた人の「真実な姿」は「良き者」であるから、「非常に良かった」（創世記 1:31）、神は「良き者」を「否定」する泥を洗い流し、再び「良き者」としての姿に戻すのである。それは、間違っても「ダメな者」を「良き者」にする話ではない。端的に言えば、それは「否定」の「否定」である。

「神の福音」の真実 ⟶ 否定 の 否定

以上が、『福音の回復』第一巻で見てきた福音の骨子である。そこで、続きの第二巻では、見てきた「神の福音」の真実を別の視点から見ていく。そうすれば、「神の福音」がより立体的に見えてくる。

尚、本書の最後に「付録」がある。それは、「惑わしの仕組み」を書いたものであり、それを先に読まれても面白い。いや、その方が本書を楽しく読めるかもしれない。そこでは、先に述べた「人間的な標準」の眼鏡が、いかに人を惑わすかを説明している。では、第一巻で見てきた「神の福音」の真実を、別の視点から見ていくに当たり、『福音の回復』第一巻で述べた、「神の福音」の真実のまとめをしておこう。ただし、単なるまとめではなく、『福音の回復』補巻Ⅰで述べた、人の中心は神との関係であるという話を基に、第一巻で述べた「神の福音」の真実のまとめを行う。

第一章　「神の福音」の真実のまとめ

悪魔は蛇を使って人を欺き、罪を犯させた。「蛇が悪巧みによってエバを欺いたように」（Ⅱコリント 11:3）。その罪によって「死」が入り、こうして「死」が全人類に広がった。「ひとりの人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして死が全人類に広がった」（ローマ 5:12）。その結果、人の「現状の姿」は滅びに向かう「死の体」となり、すべての人が「死人」と同じになった。「アダムにあってすべての人が死んでいるように」（Ⅰコリント 15:22）。この現実が、人に「死の恐怖」（ヘブル 2:15）を抱かせた。それで人は、神ではなく、見える安心をむさぼる「罪人」になった。「死」が人の存在を「否定」したので、人は見える安心を巡って争う「罪人」になった。まさしく「罪」は、「死」による**とげ**（否定）として誕生したのである。「死のとげは罪であり」（Ⅰコリント 15:56）。聖書はこのことを、端的に教えている。

> 「それゆえ、ちょうど一人の人を通して罪がこの世に入り、罪を通して死が入り、まさしくそのように、全ての人たちに死が広がった。その結果、全ての人が罪を犯すようになった。」（ローマ 5:12　私訳）
>
> 尚、この私訳は Joseph A. Fitzmyer による英訳を日本語にしたものである。この英訳は、新約聖書のギリシャ語辞書としては最も学術的に優れているとされるドイツ語の Walter Bauer の辞書を、Danker 監修の下で英訳された第三版の 365 頁に記載されている。詳しくは、『福音の回復』第三巻で述べる。

そこで、神は人を「否定」する「死」を「否定」する。神は人を非常に「良き者」として造り、「神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった」（創世記 1:31）、人を徹底して「肯定」するので、人を「否定」するものを「否定」するのである。これが「神の福音」であり、その詳細を『福音の回復』第一巻で述べた。この章では、それを『福音の回復』補巻Ⅰで述べた、人の中心は神との関係であるという視点を基に、「神の福音」の真実のまとめをしたい。そのまとめは、「人の造り」のまとめから始まる。

❖ 「人の造り」のまとめ

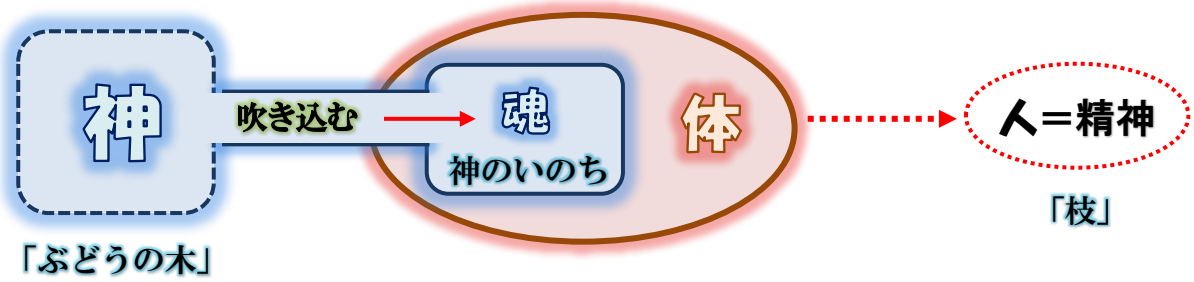
人とは、「体」からの情報を認識し、思考する「精神」（意識）である。「精神」が認識できるのは、不動の「物差し」に支えられているからであり、物差しがなければ良い悪いの判断は何もできないので、認識には至らない。また、「精神」が思考できるの

は、目的地に向かって動き続けているからであり、そのおかげで、そこに至るにはどうすればよいかと思考できる。したがって、「精神」が機能するには、不動の「物差し」と、目的地に向かって動き続ける不動の「運動」とに支えられている必要がある。そうでないと、「体」が持ち込む情報を認識し、思考することはできない。

そこで、神は最初に「体」を大地のちりで造り、そこに、人である「精神」（意識）が機能するために必要な「物差し」と、目的地に向かう「運動」の両方を兼ね備えた「**いのち**」を吹き込まれた。それは不動の「物差し」であり、不動の「運動」でなければならないので、その両方を兼ね備えた「**いのち**」は不動の「**いのち**」であり、不動は神しかおられないので、それは神の「**いのち**」であった。この「**いのち**」が吹き込まれたことで、「精神」は機能するようになり、人は生きるものとなった。

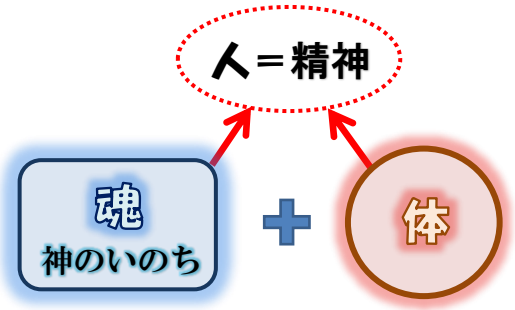
> 「神である【主】は、その大地のちりで人を形造り（体）、その鼻にいのちの息を吹き込まれた（魂）。それで人は生きるものとなった（精神が機能するようになった）。」（創世記 2:7　新改訳 2017）　※（　）は筆者が意味を補足

吹き込まれた「**いのち**」は三位一体の神の「**いのち**」なので、ここでの「**いのち**」は複数形となっている（「ハイイーム」[חַיִּים]）。その「**いのち**」は「魂」と呼ばれた。つまり、人である「精神」は「魂」と「体」によって機能するのである。それでイエスは、「**体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな**」（マタイ 10:28　新共同訳）という言い方をされた。このように、人は神の「**いのち**」に支えられ、生かされている存在であり、喩えるなら、神がぶどうの木であれば、人は「枝」という関係である。「**わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です**」（ヨハネ 15:5）。



これが「人の造り」であり、この造りで重要な点は、「体」の持ち込む情報を認識し、それを以て思考ができるのは、全て神の「**いのち**」のおかげであるということである。それはつまり、人は神の中で生き、動き、存在しているということである。「**私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです**」（使徒 17:28）。このように、人

は神の「いのち」に、すなわち神に支えられている。同時に、認識に必要な情報を持ち込む「体」にも支えられている。その二つがあって機能するのが、人である「精神」である。それを図にすると次のようになる（補巻Ⅰ-4 頁「人とは何か」）。



これは、神の前にはあなたしかいないということであり、あなたの前にも神しかおられないということである。平たく言えば、神と人とは一つであり、人が苦しむときは、いつも神も苦しみ、人を背負い抱いておられるということである。

> 「彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって主は彼らを贖い、昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた。」（イザヤ 63:9）

「彼らを背負い」とは、神が全ての人を一緒に背負っているというのではなく、一人一人を個別に背負っているということである。それゆえ、「苦しみのうちに、私が【主】に呼ばわると、主は私に答えられた」（詩篇 120:1）とある。

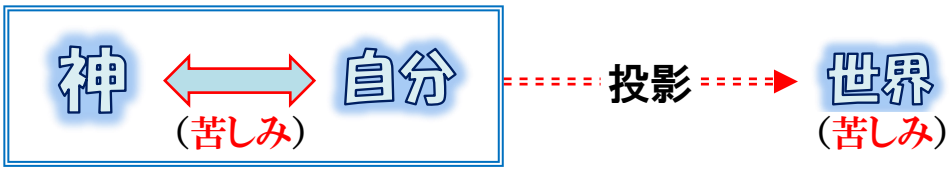
そして、神が人を背負っているということの意味は、神は人を無条件で「肯定」しているということであり、神の前には背負っている一人の人しかいないということである。そのようにして、神は全ての人を、一人一人個別に背負っておられる。そうされるのは、神にとって一人一人が神のからだの大切な各器官であり、比較できないからである。「あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとりは各器官なのです」（Ⅰコリント 12:27）。すなわち、神の前には一人のあなたしかいない（補巻Ⅰ-33 頁「体と器官との関係」）。

このように、人は神に支えられている。神が人を背負い、人を無条件で愛している。そうであるからこそ、人は認識し、思考することができる。これが「人の造り」であり、人の中心は、まさしく神との関係なのである。神との関係の中で生きている者が、人との関係の中でも生きている。したがって、人は神に愛されている自分を知ること

に応じて人を愛せるようになる。人を愛せるかどうかは全て、神に無条件で愛されている自分を知ることに懸かっている。大切なのは、人の中心となる神との関係である。そこで、人の中心については、さらに見ておく必要がある。

❖ 人の中心

人の土台は神である。人は神の前では一人であり、「私はいつも【主】を前にしています」（詩篇 16:8　新改訳 2017）、人の前にも神しかおられない。「人の道は【主】の目の前にあり」（箴言　5:21）。これが人の中心であり、人は神との関わりの中で生きている。具体的には、神の「いのち」である「魂」が「神の思い」を人に発信し、人はそれを心の声として聞き、「神の思い」を道徳行為の規範にして生きている。そこでは神が人を監視し、誤った道に進むと警告する。こうした神との関係が人の中心にあり、それを基盤に人は隣人と関わっている。ゆえに、人が感じる「苦しみ」の根本は神との関係が上手くいっていないことで生じ、それがこの世界に投影される形になる。



要するに、私を支えているのは人との関係ではなく、神との関係が私を支えているということである。その神との関係を知るために、この世界がある。この世界は、まさしく神との関係を映し出すスクリーンである。そのため、この世界で手にする富は何も残らない。全て消えてしまう。いつまでも残るのは、神との関係の中で手にする、神への信仰と希望と愛だけである。

> 「こういうわけで、いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です。」（Ⅰコリント 13:13）

このように、人の中心は神との関係である。いや、神との関係が全てであり、その関係を知るのがこの世界である。それでパウロは、こう言い切ったのである。

> 「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。今私が肉において生きているいのちは、私を愛し、私のためにご自分を与えてくださった、神の御子に対する信仰によるのです。」
>
> （ガラテヤ 2:20　新改訳 2017）

パウロは、私の前には神しかなく、神の前にも私しかいないことを、「**もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです**」と言い、この神との関係を支える「信仰」が、この世界に投影されるので、「**今私が肉において生きているいのちは、私を愛し、私のためにご自分を与えてくださった、神の御子に対する信仰によるのです**」と言った。つまり、この世界で「**苦しみ**」を覚えたのなら、それは神との関係が上手くいっていないといことのサインであって、人は神と一対一で生きている「単独者」なのである（補巻Ⅰ-25 頁「人は「単独者」である」）。

そして、中心の神と関係は、神に無条件で愛されている関係であり、それを知れば知るほど隣人を愛せるようになる。しかし、入り込んだ「死」のせいで、人は中心の神が見えなくなった。そのため、神に無条件で愛されている自分を知ることができなくなり、こんな自分が無条件で愛されるはずがないと、頑なに自分を「否定」するようになった。そのせいで、隣人に対しても怒りを覚え、「否定」してしまう（裁いてしまう）。そこで、「**神の愛**」がその「否定」を「否定」するのである。それは、神に無条件で愛されている自分を知るようにするということである。これが「神の福音」であり、それを一言でいえば「否定」の「否定」である。

そこで今度は、「否定」の「否定」の具体的な中身を見ていきたい。最初は、人の体を「否定」し、「死の体」にした「死」を「否定」する「神の福音」である。それは、「死の体」に対し、朽ちない「**霊の体**」を着せることである。聖書はこれを、「**霊の体が復活するのです**」（Ⅰコリント 15:44　新共同訳）と教えている。

❖ 「霊の体」を着せる

入り込んだ「死」が「永遠性」であった人の体を「否定」し、必ず滅びる「有限性」の「死の体」にしてしまった。「死の体」が滅びれば（肉体の死）、人である「精神」も滅びる。なぜなら、人である「精神」が機能するには、「魂」と「体」とは不可欠だからである。パウロはそのことを、「**私は本当にみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか**」（ローマ 7:24　新改訳 2017）と訴えた。これこそが、人が抱える「究極の問題」である。イエスはこうした人間の姿を指して、「**死人**」（ヨハネ 5:25）と呼ばれたのである。

そこで、神は人に入り込んだ「死」を「否定」する福音を実行に移された。それは、朽ちない「**霊の体**」を着せることである。そのために、神は神の救いを直接人に呼び

かけられる。人の中心は神との関係であり、神と人とが一対一で向き合っているので、神は神の救いを人に直接呼びかけられる。その呼びかけは、人の潜在意識に対して行われるので、人が潜在意識で神の呼びかけを信じる応答をすれば、神が「死人」に「霊の体」を着せてくださる。その神の呼びかけは、三位一体の神の聖霊が、神の「いのち」である「魂」を介して行われる。聖霊が、キリストによって成し遂げられた福音を、すなわち神の子の声を「死人」に語り、それを「死人」が聞き、信じるという応答をすることで、神は「死人」に「霊の体」を着せ、「生きる者」にされるのである。

> 「まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。」（ヨハネ 5:25）

このやり取りを、イメージ化するとこうなる。「死の体」によって、死の恐怖に支配された「死人」に神が呼びかけ、救いの御手を差し伸べられる。そこで「死人」が、差し伸べられた御手を掴むと、神がその者を「死」の世界から「いのち」の世界に引き上げてくださる、ということである。これを、朽ちない「霊の体」を着せられるといい、「永遠のいのち」を持つようになるという。

このように、「神の愛」は、人の存在を「否定」する「死の体」を、「霊の体」で「否定」し、「死人」であった私たちは「生きる者」にする。この出来事が神との和解であり、神との関係の回復である。ここで重要なのは、神が人を直接救うということである。神が人の心に直接語り、それを人が聞き、信じるという応答をすることで人は救われる。牧師が人に「神の言葉」を語り、人がそれを聞いて信じるから救われるわけではない。神ご自身が人の心の「神の言葉」を語り、人がそれを聞いて信じるから救われるのである。ただし、それは潜在意識での出来事なので、人には意識できない。しかし、牧師が人に「神の言葉」を語り、人がそれを聞いて信じるなら、その人は神が直接語られた「神の言葉」を信じた者である。つまり、牧師が語るキリストの言葉を信じ、キリストを信じている者は、すでに「霊の体」を着せられ、「永遠のいのち」を持っているのであって、「死」の世界から「いのち」の世界に移された者である。

> 「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じている者は、永遠のいのちを持っていて、裁きに会うことがなく、すでに死からいのちに移った状態にあるのです。」
>
> （ヨハネ 5:24　私訳）

すなわち、牧師が語る「神の言葉」を信じられる者は、神が人に直接語られた「神の言葉」を信じた者なのである。人の中心は神との関係であり、それが人との関係に投影されるので、そうなる。ヨハネ 5:24 は、そのことを教えている。また、金持ちとラザロの譬え（ルカ 16:19-31）も、そのことを教えている。

❖ 金持ちとラザロの譬え

金持ちは、贅沢に暮らしていた。そこにラザロがいた。彼は金持ちの食べ残しで腹を満たしていた。二人は死ぬと、ラザロは天に引き上げられ、金持ちはよみに落とされた。ラザロは神との関係を築き、金持ちは神との関係を築いていなかったからである。そこで、金持ちは天にいるアブラハムに、自分の兄弟だけでもよみに落とされないよう、彼らに言い聞かせてほしいと頼んだ。しかし、アブラハムは、彼らには「**モーセと預言者との教え**」があるので、その教えに耳を傾けないのなら、たとえ誰が死者の中から生き返って「神の言葉」を伝えても、彼らは聞き入れはしないと言った。

> 「アブラハムは彼に言った。『もしモーセと預言者との教えに耳を傾けないのなら、たといだれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない。』」（ルカ 16:31）

この譬えでイエスは、「モーセと預言者との教え」に耳を傾けない者は、誰がその者に「神の言葉」を語ろうとも、その者は聞かないと言われたのである。では、「モーセと預言者との教え」とは、何を指すのだろう。それを一言でいえば、それは「神の律法」である。この「神の律法」は人の心に記されているので、「律法の命じる行いが自分の心に記されている」（ローマ 2:15　新改訳 2017）、「モーセと預言者との教え」は、神が人の心に直接語る「神の言葉」を指す。すなわち、神が人の心に直接語る「神の言葉」に耳を傾けないのであれば、誰が「神の言葉」を語ろうとも、その者は聞き入れないということである。それはなぜか。人の中心は神との関係であり、その関係が周りの人との関係に投影されるからである。

このように、人を救うのは神である。人が人を救うのではない。ならば、周りの人は何のためにいるのだろう。それは、人の中心は神との関係であり、その関係が周りの人との関係に投影されるので、自分と神との関係がどうなっているかを知るためである。というのも、神と人との関係は潜在意識での関係なので、その関係がどうなっているかは分からないからである。「**霊の体**」を着せられ、「永遠のいのち」を持つようになっても、すなわち神との関係が回復し、救われても、人はそれを意識できないの

で、それを意識するには、人から神であるイエス・キリストのことを伝えてもらうしかない。つまり、人との関係の中で神との関係を知るしかない。そのために、周りの人は必要である。では、救われたことを意識できるようになるまでの話をしたい。

❖ 救われたことを意識できるようになるまで

「霊の体」は永遠性の体なので、「霊の体」を着せられると、同じ永遠性の神を具体的に知ることができる。そのため、キリストについての御言葉を聞くと、今度はキリストを信じる信仰が生起するようになる。「信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです」（ローマ 10:17）。つまり、周りの人からキリストの福音を聞かされることで、心の中に葛藤は起きるものの、キリストへの信仰が芽生えるのである。こうして、人との関わりの中で、神への信仰を持った自分を知るようになる。「霊の体」を着せられ、「永遠のいのち」を持たせてもらったことで、見えなかった神を知り、イエス・キリストを知るようになる。

> 「その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。」（ヨハネ 17:3）

ということは、周りの人との関わりの中で、キリストへの信仰を告白できるようになった者は、もう「永遠のいのち」を持っていて、裁きに会うことがなく、すでに「死」から「いのち」に移った状態にあるということである。

> 「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じている者は（信仰を告白する者は）、永遠のいのちを持っていて、裁きに会うことがなく、すでに死からいのちに移った状態にあるのです。」（ヨハネ 5:24　私訳）※（　）は筆者が意味を補足

こうして、意識できなかった神との関係を、周りの人との関係の中で意識できるようになる。これが救いの自覚である。つまり、人は神の呼びかけに心で応答することで救われ（義とされ）、周りの人との関係の中でイエス・キリストを信じられるようになり、それを告白することで、救われたことを意識できるようになるのである。

> 「人は心に信じて義と認められ（潜在意識）、口で告白して救われるのです（救われたことを意識できる）。」（ローマ 10:10）※（　）は筆者が意味を補足

このように、神の呼びかけに応答し、神との関係が回復し救われたなら（潜在意識）、その事実を、人は人との関わりの中で知るようになる（顕在意識）。神が死という「否定」を「否定」してくださったことを、人との関わりの中で知るようになる。というのも、人の中心は神との関係であり、その関係が人との関係に投影されるからである。それはちょうど、電灯の明かりがつくかどうかで、見えない電気の存在を知るようなものである。人も自分の中心は見えないが、人とどのように関わるかで、見えない神との関係を知ることができる。イエスはこれを、「**あなたがたは、実によって彼らを見分けることができます**」（マタイ 7:16）と言われたのである。

では、救われたことを意識できるようになったのなら、次はどうなるのか。神は、さらに人を「否定」するものを「否定」する。それは、自分は愛されるはずのない「ダメな者」という自己への「否定」を「否定」するのである。というのも、自己への「否定」が、見える安心をむさぼる罪の原動力となって人を苦しめているからである。これが、人の「現実の問題」である。そこで、「否定」の「否定」である「神の福音」は、次は自己への「否定」を「否定」する。そのことで、人は無条件で愛されている自分を知るようになる。

❖　無条件で愛されている自分を知るようになる

神の力は、人の「弱さ」のうちに完全に現れる。「**わたしの力は、弱さのうちに完全に現れる**」（Ⅱコリント 12:9）。言い換えるなら、神の力は人の限界を補い、その人を完全な者にする（義とする）。そこで、神は完全な者の姿を「神の律法」とし、その律法を一人一人の心に書き込み、それに従えなければ一人一人を責め続ける（心の声）。そうすれば、人は自分の限界に気づくことができ、神に助けを求められるようになる。律法に従えない限界を罪といい、「**罪とは律法に逆らうことなのです**」（Ⅰヨハネ 3:4）、神に助けを求めることを、神の前で罪を言い表すというが、罪を言い表すと、「**神の愛**」が起動し、神はその罪（限界）を無条件で赦してくださるのである。

> 「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」（Ⅰヨハネ 1:9）

罪が無条件で赦されることで、人は神に無条件で愛されていることを知る。これを繰り返すことで、自分は愛されるはずのない「ダメな者」という自己への「否定」が「否定」されていき、ますます無条件で愛されている自分を知るようになる。それに伴い、ますます神を愛せるようになっていく。多くの罪が赦されれば、それだけ神を多く愛

せるようになっていく。「多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさで分かる」(ルカ 7:47　新共同訳)。そして、その神との関係が人との関係に投影されるので、神を多く愛する者は、人を多く愛するようになる。

このように、救われたことを意識できるようになった者に対し、神は「神の律法」を突きつける。それを「心の声」という。それだけではない。神は「神の律法」を、聖書の教えとしても突きつける。そのことで誰もが罪人であることを自覚でき、自分の限界を知ることができる。その際、自分の限界を神の前で承認できれば、人は無条件で愛されている自分を知るようになる。それにより、神は人が抱く自己への「否定」を「否定」する。これが、人の「現実の問題」を解決する「神の福音」である。

そして、無条件で愛されている自分を知るようになることで、正しい神との関係が築かれていく。それは、「だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされる」(ルカ 14:11)という関係である。自分の限界を知って神の前に低くなれば、神が引き上げてくださる関係である。神と人との関係は、「神の律法」が行える人を神が称賛し、報酬を与えるというものでは決してない。人が「神の律法」を行えない不足を、神が補ってくださるという関係である。なぜなら、誰もが「神の律法」を行えない罪人だからである。「もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです」(Ⅰヨハネ 1:10)。そして、無条件で愛されている自分を知ることで築かれる神との関係は、人との関係に投影される。

❖　神との関係は人との関係に投影される

キリスト者は神の戒めを知っている。それは、「隣人を愛せよ」である。しかし、隣人を愛するには、自分が神に愛されることを知るのが先である。まず、神に愛されている自分を知り、神を愛せるようになるのが先である。なぜなら、神との関係が、そのまま人との関係に投影されるからである。その順序を、聖書は次のように教えている。

> 「わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです。」(Ⅰヨハネ 4:19　新共同訳)

そこで、神は人となって来られ、たとえ人が罪人であっても愛していることを十字架で明らかにされた。「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます」(ローマ 5:8)。神はこの十字架の愛を人に受け取らせるため、人の罪を責

め立て、罪を赦す「神の愛」を提示される。そのことで、人の中に神への信仰、希望、愛を育て、「苦しみ」から解放しようとされる。こうして、神に愛されている自分を知るようになり、兄弟を愛せるようになっていく。ということは、目に見える兄弟を愛せない者は、神に愛されている自分を知らないので、目に見えない神も愛せない中にあるということである。それで聖書は、次のように教えている。

> 「神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。」（Ⅰヨハネ 4:20）

このように、神との関係は人との関係に投影される。そこで、神は徹底的に人との関係を築こうとする。友と呼べる関係を築こうとされる。「わたしはあなたがたを友と呼びました」（ヨハネ 15:15）。そのことで、隣人も愛せるようにしようとされる。つまり、神に愛されている自分を知って神を愛することが先であり、隣人を愛することは次になる。それゆえ、第一の戒めは神を愛することであり、第二の戒めが隣人を愛することなのである。それは、人の中心が「神の畑」（Ⅰコリント 3:9）であり、そこでは神が栽培する、いつまでも残る神への信仰、希望、愛しかないからである。「こういうわけで、いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です」（Ⅰコリント 13:13）。したがって、中心で神への愛が栽培できなければ、どれだけ隣人に尽くそうとも、また自分の体を差し出そうとも、何の益にもならない。

> 「全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。」
>
> （Ⅰコリント 13:3　新共同訳）

まことに、神との関係が人の中心であって、その関係は人との関係に投影される。ということは、人との関係で覚える「苦しみ」の原因は、人との関係に起因するのではなく、神との関係が上手くいっていないことに起因するということになる。だが人は、そのことを知らないので、「苦しみ」の原因は人にあると信じて人を責める。これは、全く以て的外れの対応であり、正しい対応は、誰かに怒りや憎しみを覚えたのなら（「苦しみ」の感情を覚えたのなら）、隣人を愛せない自分の限界（罪）を認め、神に助けを乞うことである。そうすれば、こんな罪人であっても、愛されている自分を知るようになり、愛せなかった隣人も愛せるようになっていく。

ただし、隣人を愛せるようになるという「愛」は、神と一つになることを目指す交わりである。「私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです」（Ⅰヨハネ 1:3）。交わりを通して、神と一つになることを目指すのが、隣人を愛するということである。なぜなら、神から出た「愛」は神に向かうからである。「すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです」（ローマ 11:36　新共同訳）。したがって、神に愛されている自分を知るようになると、人を愛せるようになるというのは、神の福音を伝えられるようになるということである。「私はすべてのことを、福音のためにしています」（Ⅰコリント 9:23）。人から良く思われる関係を築くことが、「愛」なのではない。では、総括をしよう。

❖ 総括

人とは、「体」からの情報を認識し、思考する「精神」（意識）である。では、なぜ認識ができ、思考ができるのかといえば、認識に必要な「物差し」と、思考に必要な目的地に向かう「運動」とを持っているからである。その目的地は「神」であり、認識に必要な「物差し」は「神の思い」である。つまり、人は神の「いのち」に支えられ、神に向かって生きている。「すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです」（ローマ 11:36　新共同訳）。これが人の中心であって、それは神と一対一で向き合っている自分であり、神に背負われている自分である。この中心を持った者が、この世界で暮らしている。そのため、中心の神との関係が、そのままこの世界に投影される。言い換えれば、人の中心は全く見えないので、神との関係がどうなっているのかを、見える世界での人との関係で知るほかない。

正確にいえば、人の中心は見えないのではなく、見えなくなったのである。人には、自分の外側しか（裸しか）見えなくなった。そうなったのは、アダムとエバが蛇に欺かれ、食べてはならないと言われていた実を食べたことに起因する。「このようにして、ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った」（創世記 3:7）。これは、人の体は永遠性の神を認識できない有限性の体になったということであり、この出来事を「死」が入り込んだという。その結果、人は見えなくなった神との関係を、人との関係で知るしかない状況になった。

さらに言えば、有限性の体は滅びるので、それが滅びて大地に帰ると、人を支えていた神の「いのちの息」（創世記 2:7）は神に帰ってしまう。「塵は元の大地に帰り、息はこれを与えた神に帰る」（伝道者 12:7　聖書協会共同訳）。そうなると、何かを認識し思考する「精神」は、すなわち人は消滅する。これこそが、人の「究極の問題」で

ある。そこで神は、人が生きている間に人を救おうとされる。人の中心は神との関係なので、神が呼びかけ、人がそれに応答することで、人を救おうとされる。それは朽ちない「**霊の体**」を着せるということであり、それが神との関係回復を意味する。

しかし、人は神の呼びかけである「**御霊の思い**」とは別に、入り込んだ「死」によって生じた「**肉の思い**」の呼びかけも聞くようになった。「**御霊の思い**」は「永遠のいのち」があるから、この御手に掴まれと言い、「**肉の思い**」は、「永遠のいのち」などないから、この世での可能性を楽しめと言い、神に敵対してくる。

> 「肉の思いは死ですが、御霊の思いはいのちと平安です。なぜなら、肉の思いは神に敵対するからです。それは神の律法に従いません。いや、従うことができないのです。」（ローマ 8:6-7　新改訳 2017）

こうして、人の中心では「**御霊の思い**」と「**肉の思い**」とを聞くことになった。そうなると人の中心では、どちらを信じればよいのかと葛藤が起き、不安に満ちる。そこで神は、人が神の呼びかけに応答できるように人の心に「光」を照らし、この世の可能性に「**空しさ**」を覚えさせ、絶望へと追い込む。この絶望が、神の呼びかけに応答できる機会をもたらすので、その絶望の際に、神の呼びかけに応答できれば、神との関係が回復する。これが、人の「究極の問題」を解決する「神の福音」の「第一ステージ」であり、人を絶望に追い込む神の働きが、福音の「第三ステージ」である。

神との関係が回復した者は朽ちない「**霊の体**」が着せられ、「永遠のいのち」を持つようになり、「神の国」に属するようになるので、今後は「聖霊」の助けを直接受けられるようになる。そのおかげで、人との関わりの中で聖書の言葉を聞くと、それが信じられるようになり、やがてキリストへの信仰を告白できるようになる。「**聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます**」（ヨハネ 14:26）。そのことで、自分が救われたことを自覚できるようになり、洗礼を受けるようになる。それからは、神との関係を、教会での生活を土台に築いていくようになる。

正確に言えば、目には見えない神との関係を、教会での生活を通して知るようになる。礼拝を守り、献金を守り、感謝の祈りを捧げる日々を送ることで、心が神に向いていることを知ることができる。そして、毎週の説教を聞くことで、聖書を読むことで、神が人の心に直接語っている「神の思い」を確認できる。それを確認できれば、自分

の限界に気づかされ、神にあわれみを乞うことができる。そのことで、神への信仰、希望、愛が大きく実っていき、神に無条件で愛されている自分をますます知るようになる。それに伴い、ますます兄弟姉妹を愛せるようになり、教会を愛せるようになる。というのも、教会は目には見えない神、キリストの具現化だからである。「**教会はキリストの体であり**」(エペソ 1:23　新共同訳)。これが、福音の「第二ステージ」である。それは一言でいえば、自分の「真実な姿」を知るようになるステージである。人を愛せないという「現実の問題」を、解決するステージである。

このように、人は神によって支えられているという造りが分かれば、「神の福音」も正確に知ることができる。この「人の造り」で大切なのは、人の中心は神との関係であるということである。それは、一対一の関係である。この神と人との関係を保証するのが『人格』であり、『人格』は徹底した自由であり、誰もが神の呼びかけに対し、一対一で自由に応答できるようになっている。つまり、神と人との関係は、神が人に呼びかけ、人のうちに願い起こさせ、人がそれを選択することで築かれていく。

> 「**あなたがたのうちに働きかけて**（呼びかけて)、**その願いを起させ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされるところだからである。**」（ピリピ 2:13　口語訳）※（　）は筆者が意味を補足

この神の呼びかけは、神が直接、人の潜在意識に対して行うので、人の体の制約を受けることはない。それゆえ、体に重度の障害があっても、体がキリストの福音を肉の耳で聞くことができない場所や時代にあっても、そうしたことに関係なく、誰であれ神の呼びかけを聞くことができる。それは、誰であれ救われる機会を有しているということである。それで聖書に、「**神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます**」（Ⅰテモテ 2:4）とある。そして、神の呼びかけに応答して救われたなら、新たに始まった神との関係を、人との関係を通して知るようになる。

以上が、『福音の回復』第一巻で述べた「神の福音」の真実を、『福音の回復』補巻Ⅰで述べた、人の中心は神との関係であるという視点からのまとめになる。この第二巻では、それを別の視点で見ていく。最初は、「**神の愛**」に留まるという視点である。

第二章　「神の愛」の中に留まる

人の「現状の姿」は「死の体」であり、滅びに向かう「死人」である。「アダムにあってすべての人が死んでいるように」（Ⅰコリント 15:22)。滅びに向かう「否定」は「死の恐怖」を抱かせるので、人は見える安心をむさぼってしまう。聖書はそれを「偶像礼拝」と呼び、「このむさぼりが、そのまま偶像礼拝なのです」（コロサイ 3:5)、それを「罪」とする。なぜなら、そこには「神」がいないからである。あるのは、見える安心を巡っての「争い」である。この「争い」がさらに人を「否定」し、人を苦しめる。こうして、「死」が人の体を「死の体」にし、見える安心をむさぼる「罪人」にし、徹底的に人を「否定」する。そこで、神は人を「否定」する運動を「否定」するために立ち上がられた。神は人を非常に「良き者」として造られたので、「神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった」（創世記 1:31)、人を徹底して「肯定」される。これが「神の福音」である。

このように、「神の福音」は人を「否定」する運動への「否定」である。神は人を「良き者」として造られたので、それを「否定」する運動を「否定」するのが「神の福音」の真実である。それを『福音の回復』第一巻で見てきた。この第二巻は、その福音を別の視点から眺めていく。最初は、「神の愛」の中に留まるという視点からである。

❖ 「神の愛」の中に留まる

イエスは十字架に架かられる前、弟子たちに次のことを話された。

> 「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました。わたしの愛の中にとどまりなさい。」（ヨハネ 15:9）

イエスはここで、「父がわたしを愛されたように」と言われたが、父と子は異なる位格であっても「一つ」の実体なので、父は御子イエスを無条件で愛し、そのままで「肯定」しておられる。それと同じように、イエスも人に対し、「あなたがたを愛しました」と言い、弟子たちを無条件で愛し、「肯定」してきたことを告げられた。そして、「わたしの愛の中にとどまりなさい」と言われた。ならば、「神の愛」の中に、すなわち神の「肯定」の中に留まるとはどういうことなのだろう。「神の愛」は見えないが、どのようにすることが留まることになるのだろう。そこで、イエスは続けて言われた。

「もし、あなたがたがわたしの戒めを守るなら、あなたがたはわたしの愛にとどまるのです。それは、わたしがわたしの父の戒めを守って、わたしの父の愛の中にとどまっているのと同じです。」（ヨハネ 15:10）

イエスは、「神の愛」に留まるというのは「戒め」を守ることだと言われた。その「戒め」は「愛する」ことに集約され、まず神を愛することを命じている。

「そこで、イエスは彼に言われた。「『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』これがたいせつな第一の戒めです。」（マタイ 22:37-38）

なぜ神を愛することが第一の戒めかというと、人の中心にあるのは、神との関係だからである。人の土台となる「岩」は神であり、「神こそ、わが岩」（詩篇 62:2）、人は神に支えられている。喩えるなら、神がぶどうの木なら、人はその枝である。「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です」（ヨハネ 15:5）。つまり、枝は、自分の木と単独で向き合った関係にあるのと同様、人も、自分を支える神とは単独で向き合った関係にある。神の前では、人は一人であり、人の前にも神しかおられないということである。それゆえ、まず神を愛することを命じている。

そして、人は神の前で一人なので、キェルケゴールは人のことを「単独者」と呼ぶ（『後書』）。この「単独者」が、この世界で暮らしている。であれば、神との関係が、そのままこの世界に投影されることになるので、人との交わりが、そのまま神との交わりを意味する。「私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです」（Ⅰヨハネ 1:3）。そのため、どれだけ人を愛せるかで、どれだけ神を愛しているかを知ることができる。それで聖書は、次のように教えている。

「神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。」（Ⅰヨハネ 4:20）

このように、「神の愛」に留まるというのは、神の戒めを守るということであり、それは神を愛するということである。そして、神をどれだけ愛しているかは、人をどれだけ愛しているかで分かる。神を愛せるなら人も愛せるのである。それで、神はまず神を愛することを人に命じ、次に人を愛することを命じられた。

ただし、愛する対象である「人」には「自分」も含まれるので、自分を愛せない者は神を愛していないことになり、隣人も愛せないことになる。ゆえにイエスは、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」（マルコ 12:31）とも言われたのである。では、「愛する」とはどういうことなのかを説明したい。

❖ 「愛する」とは

「愛する」とは、関係を築くことであり、愛の反対は、無関心である。

「愛する」＝「関係を築く」　　「愛の反対」＝「無関心」

とはいえ、人との関係を築くためには人の期待に応える必要がある。例えば、親との関係を築きたい子は、親の期待に応える必要がある。その際、親が子に期待するのは成績が良いことである。誰もが人の価値を人と比べることで知ろうとするので、少しでも成績が良いことを親は子に期待し、少しでも価値ある者になることを願う。子はそれに応えることで親との関係を築こうとするので、勉強を頑張る。こうして、子は勉強という「行い」で、親との関係を築こうとする。

これは、子と親だけの話ではない。大人も同じである。大人も、人の期待に応える「行い」で関係を築くのである。平たく言えば、少しでもほめられる「行い」を頑張り、少しでも周りから良く思われようとするということである。良く思われることが、この世界に於ける人と人との関係作りである。人は、そこから自分の価値を測ろうとする。周りと自分の「行い」を比べることで、すなわち何ができるかを比べることで、自分の価値を測ろうとする。すると、必ず自分よりも勝る人がいることに気づく。たとえ今は一番でも能力は衰えるので、必ず自分よりも勝る人が出てくる。そうなると、自分の価値は「否定」されることになるので、人は人との関係を築くことで、自分を「否定」するようになっていく。

このように、「愛する」とは関係を築くことであり、人の場合、その関係を「行い」で築こうとする。相手の期待に応える「行い」で築き、少しでも自分を高くしようとする。しかし、期待に応えることが無理なら、怒らせる「行い」をすることで自分に振り向かせ、関係を築こうとする。また、関心を引く物を身にまとうという「行い」で自分に振り向かせ、関係を築こうとする。さらには、力尽くの「行い」で、一方的に関係を築こうとする。しかし、どのような形であれ人が人との関係を築こうとするのは、「愛する」ことを本質に持つ神に、人は似せて造られたからである。そして、「愛

する」とは関係を築くことだからである。では、神との関係を築くのにも「**行い**」が必要なのだろうか。

❖ 神との関係を築く

愛するとは、関係を築くことである。そこで、人が人との関係を築くためにするのは、相手の期待に応える「**行い**」である。そのため、神との関係を築く際も、人は神の期待に応える「**行い**」で、神との関係を築こうとする。神が人に命じている律法の「**行い**」で、神との関係を築こうとする。律法の「**行い**」を達成することで、神を愛そうとする。そうなると、律法の「**行い**」を達成できない者は神を愛せないことになる。というより、律法の「**行い**」を達成するのは不可能である。なぜなら、律法の「**行い**」の一つでもできなければ、全てができなかったと見なされるからである。

> 「律法全体を守っても、一つの点でつまずくなら、その人はすべてを犯した者となったのです。」（ヤコブ 2:10）

神の律法は全て、神の「**全き愛**」（Ⅰヨハネ 4:18）につながっているので、一つでもできなければドミノ倒しのようになり、全てができなかったとなってしまうのである。神の前では 99%できましたではダメで、100%でなければならない。これでは律法の「**行い**」を達成することは不可能なので、神の律法が書かれた聖書は、全ての人を罪人にしてしまう。「**聖書は、すべてのものを罪の下に閉じ込めました**」（ガラテヤ 3:22 新改訳 2017）。したがって、神を愛することが律法の「**行い**」を達成することであれば、誰一人神を愛せないことになる。誰一人、神との関係を築けないことになる。これでは、人を助ける「神の福音」を誰も受け取ることができないので、神との関係を築くのに必要なのは、律法の「**行い**」ではないという結論になる。ならば、神との関係はどのようにして築けるのだろう。

確かに、神は律法の「**行い**」を命じているが、それは「**行い**」ができる者に褒美を与え、そのことで関係を築くためではない。律法の「**行い**」ができない者を見つけ出し（罪を明らかにし）、その者を助けるためである（罪を赦すためである）。そのようにして、神は人との関係を築かれる。したがって、神が人に期待するのは、律法の「**行い**」ができない自分の「弱さ」を承認することである。そうすれば、その「弱さ」に神の恵みが完全に現れ、神との関係が築かれていくのである。

「しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。」（Ⅱコリント 12:9）

したがって、人が神を愛するというのは、律法の「行い」を実行することから、すなわち神の命令を守ることから始まる。「神を愛するとは、神の命令を守ることです」（Ⅰヨハネ 5:3）。それは、本来であれば重荷にはならない「行い」であったが、「その命令は重荷とはなりません」（Ⅰヨハネ 5:3）、悪魔の仕業で「死」が入り込んでからは神が見えなくなり、神の命令は実行が困難な重荷になった。そのため、神の命令を守ろうとすればするほど重荷に気づかされ、自分の「弱さ」を承認できるようになり、そこに神の恵みが働き神との関係が築かれていく。つまり、神の命令に従うことで自分の重荷（弱さ）を知り、その重荷を神のところに持っていけばよいのである。そうすれば神が休ませてくれるので、そこに神と人との関係が築かれていく。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（マタイ 11:28）

こうして、神と人との関係は自分の重荷を神のところに持ってくことで築かれる。それは、人が自分の「弱さ」を承認し、神が人の「不足」を補うことで築かれる関係である。それゆえ、人は自分の「不足」を神に差し出せばよい。神の律法をこれほどまで実行することができたと、良い成績を神の前に差し出すのではなく、神の律法がこれほどできませんでしたと、悪い成績を差し出せばよい。そうすれば、神が悪い成績の人の「不足」を補い、その人を満点（義人）にしてくれるのである。こうした神と人との関係を教えるために、イエスは譬えを話された。その譬えは、良い成績を神の前に差し出したパリサイ人の話から始まった。

「パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』」（ルカ 18:11-12）

そして、イエスの譬えは、悪い成績を神の前に差し出した取税人の話へと続く。

「ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』」
（ルカ 18:13）

そして、この譬えの締め括りとして、神が悪い成績の人の「不足」を補い、その人を満点にするとイエスは言われた。

「あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」（ルカ 18:14）

このように、神との関係を築くのに必要なのは律法の「**行い**」の達成ではなく、律法の「**行い**」ができない自分の「弱さ」への承認である。それは、神の前に自分の罪を言い表すということであり、そうすれば神は真実な方なので、その罪を赦してくださる。「**もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます**」（Ⅰヨハネ 1:9）。この赦しの恵みで、神と人との関係は築かれていく。それは、「**自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされる**」関係である。人の「否定」（罪）を神が「否定」し、人を「肯定」する関係である。「罪人」を「義人」にする関係である。

そして、神に「肯定」されている自分を知れば、人は自分を愛せるようになる。それに伴い、隣人も愛せるようになる。間違っても「**自分を愛する**」というのは、自分で自分を、「**お前は大丈夫だ**」と言い聞かせたり、「**自分は立派な人間だ**」と思い込ませたりすることではない。それはただ、神によって「肯定」されている自分を知ることである。そこで聖書は、人への神の「肯定」を様々な言葉で言い表している。

❖ 人への神の「肯定」

「**神の愛**」は人への「否定」を「否定」し、すなわち人の罪を赦し、人を「肯定」する。それを何の差別もなく、無条件で行われる。それゆえ、人がすることは、ただ神の前に自分を苦しめている「否定」を差し出すだけでよい。それによって神との関係が築かれていくので、これが神を愛することの実際になる。そこで聖書は、誰もが神の前に自分を苦しめている「否定」を差し出せるように、神が抱いている変わらない人への「肯定」の思いを、様々な言葉で言い表している。例えば、次のように。

「神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった。」（創世記 1:31）

「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。」
（ヨハネ 10:28）

「私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」（ローマ 8:38-39）

「たとえ罪を犯しても、御父のもとに弁護者、正しい方、イエス・キリストがおられます。」（Ⅰヨハネ 2:1　新共同訳）

他にも、人を「肯定」する神の言葉はたくさんある。例えば、「**恐れるな**」（イザヤ 41:10）である。人は様々な場面で「恐れ」を覚え、自らを「否定」してしまうが、神はそれに対して「**恐れるな**」と語り、人が抱く「否定」を「否定」し、人を無条件で「肯定」される。こうした「神の言葉」を信じ、自分に対する神からの無条件の愛を、すなわち神の「肯定」を受け取ることが「**神の愛**」の中に留まることを意味する。そうすれば、人は自分を「否定」しないで「肯定」するようになり、それがそのまま隣人を愛する「肯定」につながっていく。

このように、「**神の愛**」は人への「否定」を「否定」し、人を「肯定」する。それが、人の中心で行われている。神がぶどうの木なら、人はその枝なので、「**わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です**」（ヨハネ 15:5）、神は直接人を「肯定」する。それはつまり、人への神の「肯定」を受け取るよう、神が迫っているということである。そうである以上、人への神の「肯定」を受け取ることが、神を愛するということであり、それは神の命令を守ることから始まる。「**神を愛するとは、神の命令を守ることです**」（Ⅰヨハネ 5:3）。命令を守ろうとすれば、それができない自分の罪に気づくことができ、罪が赦される人への神の「肯定」を受け取れるようになるからである。この受け

取りが、神を愛するということである。神が「肯定」する自分を受け取ることができれば、隣人も愛せるようになる。これを、「神の愛」の中に留まるという。まさしく「愛」とは「肯定」であり、相手をそのままで受け入れる「統合運動」である。

❖ 「愛」とは「肯定」である

「愛」は、三位一体の神から始まった。「神は愛です」（Ⅰヨハネ 4:16)。その神は父と子と聖霊であり、それは互いを無条件で「肯定」する関係なので、そこには一つの思いしかなく、一つの実体しかない。そうしたことから、神も人に対して、神と一つとなる「統合運動」を展開される。「それは、わたしたちが一つであるように、彼らも一つであるためです」（ヨハネ 17:22)。それゆえ神は、「神の愛」に留まりなさいと言われる。そして、聖書はその「愛」の実際についても、具体的に教えている。

> 「愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、不正を喜ばずに真理を喜びます。すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます。」
>
> （Ⅰコリント 13:4-７）

聖書は、「愛」とは無条件の「肯定」なので、その実際は、「寛容であり」、「親切であり」、「ねたまず」、「自慢せず」、「高慢にならない」ことだとする。こうした行いは、確かに相手を無条件で「肯定」するものである。

さらに、「礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず」も同様に、相手を無条件で「肯定」する。また、「不正を喜ばずに真理を喜びます」は、人への「否定」を喜ばずに、人への「肯定」を喜ぶことを意味するので、これも相手を無条件で「肯定」するものである。

そして、「すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます」とは、襲いかかってくる「否定」と戦い、何があっても人を「肯定」する「神の言葉」を信じ続けるということであり、これは神の「肯定」を受け取ることを意味する。

このように、「愛」とは無条件の「肯定」であり、相手をそのままで受け入れる「統合運動」である。ゆえに、「神の福音」は、この「神の愛」に人を留まらせることである。

神の「肯定」を受け取らせ、神と「一つ」となることを目指すのが「神の福音」である。このことは、イエスが次のように祈られたことからも分かる。

> 「それは、父よ、あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにいるように、彼らがみな一つとなるためです。また、彼らもわたしたちにおるようになるためです。」（ヨハネ 17:21）

まことに「神の愛」は「統合運動」であり、それゆえ相手を無条件で「肯定」する。つまり、「愛」とは「肯定」である。その「愛」である神に人は支えられている。

以上が、「神の愛」の中に留まるという視点から見た「神の福音」である。その福音は、一言でいえば人への「否定」を「否定」することである。人への「否定」を「否定」するのが、「神の愛」である。こうした「神の愛」が分かると、「神の裁き」の真実も見えてくる。それは、人を「否定」するものを「否定」することであると。「神の裁き」の対象は人ではなく、人への「否定」であると。しかし、人は「神の裁き」と聞くと、その対象は人だと思ってしまう。いずれにせよ、聖書には「神の裁き」という言葉があるので、次は、「神の裁き」という視点から「神の福音」を見てみたい。

第三章　「神の裁き」

新約聖書は、キリストの十字架による福音を証ししている。それは罪を赦し、人を裁かない「神の愛」である。だが同時に、新約聖書は「神の裁き」も教えている。例えば、「私たちは、神の裁きがこのようなことを行う者の上に正しく下ることを、知っています」（ローマ 2:2　聖書協会共同訳）のように。また、「それは、すべての口が塞がれて、全世界が神の裁きに服するようになるためです」（ローマ 3:19　聖書協会共同訳）のように。さらには、「私たちは皆、神の裁きの座の前に立つのです」（ローマ 14:10　聖書協会共同訳）のように。このように、新約聖書は「神の裁き」があることも教えている。では、この「神の裁き」は、人を裁かない「神の愛」の福音とどう調和するのだろう。ここでは、「神の裁き」という視点から「神の福音」を見てみたい。

－「神の裁き」とは何なのだろう－

人は「神の裁き」と聞くと、神が罪を犯す者を裁くことだと思ってしまう。そして、神に裁かれるというのは、罰を与えられることだと思ってしまう。というのも、この世界では罪を犯せば裁かれ、罰を受けるのが標準だからである。そのため、「神の福音」には、救いと裁きの両面があるとすることで調和させようとする。そうなると、本書がこれまで述べてきた福音に対しては疑問を抱くことになる。本書は、人を「否定」するものを「否定」するのが、すなわち人を「肯定」するのが福音であって、神は人を裁かないことを述べてきたからである。しかし、たとえ聖書に「神の裁き」と書かれた箇所があったとしても、聖書は神が人を裁くという考えを一刀両断に切り捨てている。例えば、聖書によれば、イエスは次のように言われたことを証ししている。

> 「はっきり言っておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁かれることなく、死から命へと移っている。」（ヨハネ 5:24　新共同訳）

> 「あなたたちは肉に従って裁くが、わたしはだれをも裁かない。」
>
> （ヨハネ 8:15　新共同訳）

「わたしの言葉を聞いて、それを守らない者がいても、わたしはその者を裁かない。わたしは、世を裁くためではなく、世を救うために来たからである。」
（ヨハネ 12:47　新共同訳）

イエスは明確に、誰をも「裁かない」と繰り返し言われたのである。実際、イエスは人の罪を裁くどころか赦された。例えば、姦淫の現場で捕らえられた女が連れてこられた時も、人々は彼女に石打ちの裁きを下すよう求めたので、イエスは彼らに、「罪を犯したことのない者が最初に石を投げなさい」と言われた。すると、一人ずつ去っていったので彼女に、「わたしもあなたにさばきを下さない」と言われたのであった（ヨハネ 8:11　新改訳 2017）。ということは、いくら「神の裁き」と書かれた箇所があったとしても、それは人が考える裁きではないということになる。ならば、どのような意味で使われているのだろう。「神の裁き」とは何なのだろうか。ここではそれを考察する。それには、人の現状がどうなっているのかを知る必要がある。

❖　人の現状

人とは、「体」からの情報を認識し、思考する「精神」（意識）である。「精神」が認識できるのは、不動の「物差し」に支えられているからであり、「精神」が思考できるのは、目的地に向かって動き続けているからである。したがって、「精神」が機能するには、不動の「物差し」と、目的地に向かって動き続ける不動の「運動」とに支えられている必要がある。そうでないと、「体」が持ち込む情報を認識し、思考することはできない。そこで神は、情報を収集できる「体」を大地の塵（ちり）で造り、そこに「物差し」と「運動」を兼ね備えた、神のいのちの「息」を吹込まれたのである。それで、人である「精神」は機能するようになった。その「息」は「魂」と呼ばれた。

「神である【主】は、その大地のちりで人を形造り（**体**）、その鼻にいのちの息を吹き込まれた（**魂**）。それで人は生きるものとなった（**認識し、思考する「精神」が機能するようになった**）。」
（創世記 2:7　新改訳 2017）　※（　）は筆者が意味を補足

そのため、仮に「体」が塵となって大地に帰るような事態になれば、そこに吹き込まれた「息」は住む場所がなくなるので、これを与えた神に帰ることになる。「塵は元の大地に帰り、息はこれを与えた神に帰る」（伝道者 12:7　聖書協会共同訳）。そうなれ

ば、人である「精神」を支えていた「体」も「魂」もなくなるので、「精神」は存在しなくなる。これは、人の消滅を意味する。では、人の現状はどうなっているのだろう。

悪魔の仕業でアダムは罪を犯し、その罪に伴い死が入り込んだ。「**一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだ**」（ローマ 5:12　新共同訳）。その死はすべての人に及び、「**死はすべての人に及んだのです**」（ローマ 5:12　新共同訳）、人の「体」は朽ちる「**血肉のからだ**」になった。そうなると、「体」は塵となって大地の土に帰るしかない。「体」が土に帰るなら、人を支えていた神のいのちの「息」も神に帰るので、人は消滅するしかない。こうして、誰もがアダムにあって死んだ者となった。「**アダムにあってすべての人が死んでいるように**」（Ｉコリント 15:22）。それは、「**血肉のからだ**」では「神の国」を相続できないということである。「**血肉のからだは神の国を相続できません**」（Ｉコリント 15:50）。したがって、「**血肉のからだ**」が機能しなくなる「肉体の死」を迎えれば、人である「精神」は完全に消滅し、「**虚無**」に服するのである。「**被造物が虚無に服した**」（ローマ 8:20）。これこそが、人の「究極の問題」であった（第一巻 83 頁「－究極の問題－」）。

このように、人の現状は「**死人**」である。生きているように見えても滅びが確定している以上、それは実質、死んでいる者である。「**あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者**」（エペソ 2:1）。その者の運命は「**土に帰る**」（創世記 3:19）のであって、その存在は完全に消えてしまう。そうであれば、「**死人**」が罪を犯したからと裁いても何の意味もない。裁いて罰を与えなくても、その者は滅びてしまうからである。それゆえ、神は人の罪を見ても裁かない。「**わたしの言葉を聞いて、それを守らない者がいても、わたしはその者を裁かない**」（ヨハネ 12:47　新共同訳）。では、神は「死人」に対して何ができるのか。それを知れば、「**神の裁き**」の中身も見えてくる。

❖ 「死人」に対して何ができる？

人の現状は「**死人**」なので、「**死人**」を罰することに何の意味もない。大体にして、「**死人**」に対し、どのような罰があるというのか。もう死んでいるので、何もできない。この世界に「死刑」以上の罰がないように、生まれながらに「**死人**」である私たちを、これ以上は何を以て罰するというのか。この世的な言い方をするなら、人は既に最高刑で裁かれた状態にあるということである。「**死人**」が神の言うことを聞かないからと罰したところで、既に裁かれた状態にある以上、裁いても全く意味がない。「**死人**」を蹴ったり殴ったりしても、何の意味もない。というより、いくら罰したところで死んでいるのだから、それは「**死人**」に対して何もしないのと同じである。

ならば、神は「死人」に対しては何もできないのだろうか。いや、できることが一つだけある。それは、「土に帰る」という「死人」の運命を変えることである。つまり、神が「死人」に対してできる唯一のことは、罰を与えることではなく、「死人」を生きるようにすることである。神は死んでいたラザロをよみがえらせたように、「死人」を生きるようにすることならできる。それで、イエスは次のように言われたのであった。

> 「わたしの言葉を聞いて、それを守らない者がいても、わたしはその者を裁かない。わたしは、世を裁くためではなく、世を救うために来たからである。」
> （ヨハネ 12:47　新共同訳）

このように、神が「死人」に対してできることは、「死人」を救うことしかない。そこで、「死人」が土に帰ってしまう前に、何としても「死人」を助けようと、神は「この御手に掴まれ！」と、神の子の福音を聖霊が「魂」を介して呼びかけてくださる。その神の子の呼びかけを聞いて救いの御手に掴まるなら、「死人」は生きるようになるので、イエスは次のように言われた。

> 「まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。」（ヨハネ 5:25）

まことに神の子の福音を聞く者を、すなわち神の呼びかけに応答する者を、神は救われる。神はその者を、「死人」から「生きる者」にしてくださる。これは全て神の一方的な意志なので、神は、「わたしは自分のあわれむ者をあわれみ、自分のいつくしむ者をいつくしむ」（ローマ 9:15）と言われたのである。この意志が「神の裁き」であり、それは「死人」と「生きる者」とを「分ける」ことにほかならない。つまり、「神の裁き」は人を生かす「肯定」なのであって、「死」から「いのち」に移す「救い」である。それは、人の罪を赦す「神の愛」と同じであり、「神の裁き」は「神の愛」の作業の裏側を述べている。いずれにせよ、「神の裁き」は人を生かすために、「死人」と「生きる者」とを「分ける」作業になるので、このことから神が人に問う罪が確定する。

❖　神が人に問う罪

悪魔の仕業でアダムは罪を犯し、その罪に伴い入り込んだ「死」が神と人とを「分離」させたので、アダム以降の人は死んだ状態で生まれてくることになった。「あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者」（エペソ 2:1）。それゆえ、三位一体の神

である聖霊は「魂」を介し、キリストの福音を死に捕らえられた人の心（霊）に語るのである。「その霊において、キリストは捕らわれの霊たちのところに行って、みことばを語られたのです」（Ⅰペテロ 3:19）。聖霊は誰に対しても、「この御手に掴まれ！」と呼びかけてくださる。この呼びかけに応答すれば救われるが、拒めば、人は神と「分離」したままなので、肉体の死と同時に滅びてしまう。したがって、神が人に問う唯一の罪は、「この御手に掴まれ！」という神の呼びかけを拒むことである。神の呼びかけを拒むことは、呼びかけてくださる聖霊をけがすことであり、そのようなことをすれば滅びが確定するので、聖霊をけがす者だけが罪に問われる。それ以外のことは赦されるので、イエスは次のように言われたのであった。

> 「まことに、あなたがたに告げます。人はその犯すどんな罪も赦していただけます。また、神をけがすことを言っても、それはみな赦していただけます。しかし、聖霊をけがす者はだれでも、永遠に赦されず、とこしえの罪に定められます。」（マルコ 3:28-29）

「魂」を介して行われる聖霊による人への呼びかけは、イエス・キリストの呼びかけでもあるので、「聖霊をけがす」とは、イエス・キリストを信じないことを意味する。それでイエスは、罪を次のように定義された。「罪についてとは、彼らがわたしを信じないこと」（ヨハネ 16:9　新共同訳）。信じないことが人の生死を確定するからである。

これは一見すると、神が人の罪を裁いているようにも見えるので、イエスは、「わたしを拒み、わたしの言葉を受け入れない者に対しては、裁くものがある。わたしの語った言葉が、終わりの日にその者を裁く」（ヨハネ 12:48　新共同訳）とも言われたのである。神の呼びかけとなる「神の言葉」は人を救うが、それを信じないで拒んでしまえばそのまま滅びるので、「わたしの語った言葉が、終わりの日にその者を裁く」と言われたのであった。これは、死んでいる人の側が神の呼びかけを信じなければ、人は死んだままであるということであって、信じない者は既に裁かれているということである。「信じない者は既に裁かれている」（ヨハネ 3:18　新共同訳）。ここで「裁く」と訳されているのが「クリノー」［κρίνω］で、本来の意味は「分ける」であり、信じない者は神と分けられた状態にある、ということである。

このように、神が人に問う罪は、神の呼びかけを信じないことだけである。神は信じない罪だけを裁かれる。神の呼びかけを信じない「死人」を、神の呼びかけを信じて「生きる者」になった者と「分けられる」。神は、「死人」に呼びかけ、その呼びかけを

信じる者を死から「分け」、「生きる者」にされる。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです」（ヨハネ 5:25）。これが「神の裁き」（分ける）であり、それは「救い」を意味する。であれば、「神の裁き」は「終わりの時」の話になる。

❖ 「終わりの時」の話

人とは思考する「精神」であり、「精神」が思考できるのは、神の「いのち」である「魂」が「精神」に呼びかけているからである。その呼びかけが、「体」が収集する情報を認識する際の物差しとなり、思考を可能にしている。つまり、人は思考できる以上、神は「魂」を介し、人に呼びかけておられるということである。その呼びかけを聞くことで、それは実質、神であるキリストと出会っている。その出会いが、キリストを信じる「信仰」に立つのか、それとも信じない「不信仰」に立つのかに分ける裁きとなる。信じる者は「生きる者」とされ、信じない者は「死人」のままである。「御子を信じる者は裁かれない。信じない者は既に裁かれている」（ヨハネ 3:18　新共同訳）。これが「神の裁き」である。すなわち、人が神の呼びかけに応じないで闇の方を好むのなら、それが、もう裁きになっているということである。

> 「光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっている。」（ヨハネ 3:19　新共同訳）

そうなると、これはもう、生きるか死ぬかを決定する「終わりの時」の話である。人が裁かれる「終わりの時」は、これから来るのではなく、すでに神の呼びかけにより、光であるキリストと出会ったことで始まっている。呼びかけを聞いて応答するなら、その者は「死」から「いのち」に移されるからである。それは、「永遠のいのち」を持つようになるということである。

そして、「永遠のいのち」を持ったなら、キリストについての御言葉を聞くことで、キリストを信じられるようになる。「その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです」（ヨハネ 17:3）。ということは、キリストを信じている者は「永遠のいのち」を持っているということになる。そうであれば、その者は生死を分ける裁きに会うことはもうない。その者にとっての「終わりの時」は終了している。それでイエスは、次のように言われたのである。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じている者は、永遠のいのちを持っていて、裁きに会うことがなく、すでに死からいのちに移った状態にあるのです。」

（ヨハネ 5:24　私訳）

要するに、「神の裁き」というのは、見える世界を神が裁くことではなく、すなわち劇的な宇宙的事件ではなく、人を「死」から「いのち」に移すことである。神が人に呼びかけることで、人の中に神の救いの御手に掴まる「信仰」を生起させ、その「信仰」を人が選択することで、人は「死」から「いのち」に分けられるのである。これが「神の裁き」である。そうである以上、心の奥で神の呼びかけを聞き、キリストと出会う時が「終わりの時」のキリストの「来臨」なのであって、それこそが「終わりの時」の出来事である。

「キリストは、世の始まる前から知られていましたが、この終わりの時に、あなたがたのために、現れてくださいました。」（Ⅰペテロ 1:20）

したがって、キリストの「来臨」はいつの時代も神の呼びかけを聞く“今”であり、神は「死人」を救おうと“今”呼びかけてくださっている。「死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです」（ヨハネ 5:25）。その呼びかけは「聖霊」が担当し、「聖霊」なる御霊はキリストを証しするので、「御霊がわたしについてあかしします」（ヨハネ 15:26）、人は「聖霊」を通してキリストと出会い、「キリストの言葉」を、すなわち「神の子の声」を「潜在意識」で“今”聞いている。それゆえ、「神の子の声」に応答するなら（信じるなら）、その者は「死人」から「生きる者」になると、イエスは言われたのである。「死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです」（ヨハネ 5:25）。

つまり、「死人」を「生きる者」にするのは「キリストの言葉」であって、それを伝えるのが「聖霊」である。ということは、「聖霊」の働きを無視するなら、すなわち「神の子の声」を聞いても応答しなければ、その者は「死人」のままなので、キリストはそのことを、「聖霊をけがす者はだれでも、永遠に赦されず、とこしえの罪に定められます」（マルコ 3:28-29）と言われたのである。

このように、「神の裁き」は「終わりの時」の話である。「終わりの時」は、見える歴史の終末を指すのではなく、「聖霊」によって人がキリストと出会う時を指す。その

時、「聖霊」が語る「キリストの言葉」は、「死人」のままでいるのか、それとも「生きる者」になるのかを問う。神の救いの御手に掴まるのか、掴まらないのかを問う。それゆえ、この「聖霊」の呼びかけに応答し、神の救いの御手に掴まるなら、その者は「死」から「いのち」に移され、「生きる者」になれる。こうして、「死人」を死から分け、「生きる者」にすることが「神の裁き」であり、それが「終わりの時」である。これは『福音の回復』第一巻で述べた、福音の「第一ステージ」の話であり、まさしく「神の裁き」とは、神が人に罰を与えることではなく、死という人への「否定」を「否定」することなのである（第一巻 105 頁「第四章 福音の「第一ステージ」」）。

ただし、神の呼びかけも、それに対する応答も、人の潜在意識の中で行われるので意識できない。しかし、神の呼びかけに応答し「生きる者」となったなら、すなわち「永遠のいのち」を持つようになったのなら、キリストについての御言葉を聞くことで、イエス・キリストを知るようになり、信じられるようになる。「その永遠のいのちとは、（中略）イエス・キリストとを知ることです」（ヨハネ 17:3）。

以上のことが分かれば、冒頭で取り上げた御言葉、「私たちは、神の裁きがこのようなことを行う者の上に正しく下ることを、知っています」（ローマ 2:2　聖書協会共同訳）、「それは、すべての口が塞がれて、全世界が神の裁きに服するようになるためです」（ローマ 3:19　聖書協会共同訳）、「私たちは皆、神の裁きの座の前に立つのです」（ローマ 14:10　聖書協会共同訳）の意味も分かる。それは、誰もが「死人」なので、彼らを「生きる者」にするということである。これを「神の裁き」という。

さて、いくら人が「生きる者」になっても、人の中に「死」を持ち込んだ悪魔を滅ぼさなければ、すなわち「死」を司る悪魔が滅ぼされなければ、「死をつかさどる者、つまり悪魔を」（ヘブル 2:14　新共同訳）、あのエデンの園で起きたことが再び起きてしまう。人が天国に行っても、再び人は悪魔に欺かれ、「死人」に逆戻りしてしまう危険性がある。そこで、「神の裁き」には続きの話がある。それは、人への「否定」を持ち込む力を持った悪魔を滅ぼすことである。そこにこそ、「神の裁き」の真実があるので、それも見ておこう。そうすれば、「神の福音」の真実が、より深く見えてくる。

－「神の裁き」の真実－

「神の裁き」は、人への「否定」を「否定」することである。人への「否定」は「死」から来ているので、「死」を「否定」し、人を「死」から「いのち」に移し、人を救うのが「神の裁き」である。その「神の裁き」は、神の呼びかけを聞くことで行われる。つまり、神の呼びかけを聞き、神を信じる者は「永遠のいのち」を得、もう裁かれることはなく、「死」から「いのち」に移っているということである。

> 「はっきり言っておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁かれることなく、死から命へと移っている。」（ヨハネ 5:24　新共同訳）

このように、人を「死」から「いのち」に移し、「生きる者」にすることが「神の裁き」である。なぜなら、人は生まれながらに滅びゆく「死人」なので、「あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者」（エペソ 2:1）、神は「死人」に対しては、救うことしかできないからである。人を救うには、人を否定する「死」を否定しなければならないので、「神の裁き」の向かう先は「死」である。「死」はこの世を支配するので、この世の支配者が裁かれる。それでイエスは、次のように言われたのであった。

> 「また裁きについてとは、この世の支配者が裁かれたことである。」
> （ヨハネ 16:11　聖書協会共同訳）

イエスはここで、「神の裁き」の真の対象は、「この世の支配者」であることを明らかにされた。それは「死」であり、「死」をつかさどる「悪魔」である。「死をつかさどる者、つまり悪魔を」（ヘブル 2:14　新共同訳）。これが「神の裁き」の真実である。では次に、その真実を見ていく。それには、「悪魔」とは何なのかを知る必要がある。

❖ 「悪魔」とは何なのか

イエスは、「悪魔」については次のように教えられた。

> 「悪魔は初めから人殺しであり、真理に立ってはいません。彼のうちには真理がないからです。彼が偽りを言うときは、自分にふさわしい話し方をしているのです。なぜなら彼は偽り者であり、また偽りの父であるからです。」
> （ヨハネ 8:44）

イエスによると、「悪魔」は「偽りの父」であり、「偽りの情報」の元締めである。言うまでもないが、「偽りの情報」は真理を否定する情報であり、真理は神の「いのち」なので、「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです」（ヨハネ 14:6）、「偽りの情報」は神の「いのち」を否定する「死」の運動である。すなわち、「偽りの父」である「悪魔」とは、「死」の運動である。「死をつかさどる者、つまり悪魔を」（ヘブル 2:14　新共同訳）。この「悪魔」が、「サタン」と呼ばれている。「悪魔とか、サタンとか呼ばれて」（黙示録 12:9）。では、「サタン」とはどのような意味なのだろう。

「サタン」という言葉は、「敵対者」を意味するヘブライ語「サーターン」［שָׂטָן］から来ている。その「サーターン」は、特定の誰かを指す言葉ではなく、「敵対者」という意味であり、それに定冠詞を付けることで特定の誰かにし、それを「サタン」と訳している。そして、ヘブライ語をギリシャ語に訳したイエスの時代の七十人訳聖書は、「サーターン」を「敵対者」を意味するギリシャ語「ディアボロス」［διάβολος］と訳した。「ディアボロス」も「敵対者」を意味する言葉であり、特定の誰かを指す言葉ではない。それは「反抗する運動」を意味するが、この「ディアボロス」に定冠詞を付けることで特定の「敵対者」とし、それを「悪魔」と訳している。つまり、「悪魔」も「サタン」も、意味は「反抗する運動」を展開する「敵対者」であって、それは元来、固有名詞ではない。大事なことは、「悪魔」とは神に「反抗する運動」であり、神は「真理」なので、神に「反抗する運動」は「真理」を否定する「偽りの情報」を指しているということである（第一巻 216 頁「「サタン」について」）。

このように、「悪魔」の実体は神に逆らう悪い運動である。それは運動であって、姿形のない「霊」である。それで「悪魔」を、「空中の権威を持つ支配者」と呼び、その姿を「霊」として教えている。「空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている 霊」（エペソ 2:2）。それは「悪い霊」なので、「悪霊」という。例えば、「もろもろの悪霊に対するものです」（エペソ 6:12）の「悪霊」は、「悪い＋霊」の二語からなる。他にも、ルカ 7:21、使徒 19:12, 13, 15, 16 で同様の形が使われている。さらに言えば、「偽りの情報」の見える象徴が「偶像の神」なので、新約聖書で「悪霊」を言い表す際の大半は、「悪い＋霊」ではなく、当時の「偶像の神」を言い表す言葉「ダイモニオン」［δαιμόνιον］が使われている（第一巻 217 頁「「悪霊」について」）。

いずれにせよ、「悪魔」は「悪霊」であり、それは神に逆らう悪い運動である。その神は「いのち」なので、それに逆らう運動は「死」の運動を指す。「偽りの情報」は全て、

「死」の運動から出ていて、「死」による「偽りの情報」によって人は罪を犯す。「死のとげは罪であり」（Ⅰコリント 15:56）。そのため、罪を犯している者は誰であれ、「死」の運動をつかさどる「悪魔」から出た者となる。そこで、「悪魔」のしわざを打ち壊すために、神が人となって来られた。

> 「罪を犯している者は、悪魔から出た者です。悪魔は初めから罪を犯しているからです。神の子が現れたのは、悪魔のしわざを打ちこわすためです。」
> （Ⅰヨハネ 3:8）

ならば、神に逆らう悪い運動の「悪魔」（悪霊）は、すなわち「サタン」は、一体どこから来たのか。それは神からではない。「悪魔」は初めから、神である真理に逆らう者であった。「悪魔は初めから人殺しであり、真理に立ってはいません」（ヨハネ 8:44）。そうなると、「悪魔」は初めからいたことになるが、初めは神しかおられなかったと聖書は教えている。すべてのものは、神から出たことを教えている。「すべてのものは、神から出て」（ローマ 11:36　新共同訳）。これはもう、理性では理解不能である。そうした場合、分からなくても信じますという「信仰」が求められる。そもそも、私たちは神がどこから来たのかも分からない。分からないが、聖書の言葉を信じ、聖書が教える神を理性では分からなくても信じている。それと同じである。よって、真理に逆らう「悪魔」は神から出たのではないというイエスの言葉を信じ、初めは神しかおられなかったという聖書の言葉を信じるのである。

以上が、「悪魔」についての概略である（第一巻 214 頁「「悪魔」について」）。この概略が分かれば、「神の裁き」は人が対象ではなく、「偽りの情報」を以て「この世の支配者」となった「悪魔」であることが分かる。その「悪魔」の実体は「死」の運動なので、「神の裁き」は「死」を滅ぼすことだと分かる。それは、人を「死」から救い出すことであり、人を救うのが「神の裁き」の真実である。では、こうしたことを踏まえて、改めて「神の裁き」の対象を考えてみたい。

❖ 「神の裁き」の対象

イエスによると、「神の裁き」の対象は「この世の支配者」であり、それは「悪魔」である。「悪魔」は「死」の運動であり、「否定」をつかさどる「闇」なので、「闇」が「神の裁き」の対象である。そしてイエスは、「この世の支配者が裁かれた」（ヨハネ 16:11 聖書協会共同訳）と言い、「闇」に対する裁きを「現在完了形」で話された。先述したように、「裁く」と訳されている言葉は「クリノー」［κρίνω］で、本来の意味は「分

ける」なので、イエスはここで、神はすでに「闇」を分けたと言い、それこそが「神の裁き」であるとされたのであった。これは一体、どういうことなのだろう。

「闇」の存在は、「光」なしに気づくことはできない。「闇」の中だけで暮らし、一度も「光」を見たことがなければ、自分が「闇」に支配されていることには気づきようがない。しかし、「光」を見たなら「闇」に気づき、「光」が「闇」を分けることになる。そこで、「いのち」である神が「闇」の世界に来られた。その「いのち」は人の「光」だったので、「光」が「闇」の中に輝いた。その方が、イエス・キリストである。

> 「この方にはいのちがあった。このいのちは人の光であった。光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった。」（ヨハネ 1:4-5　新改訳 2017）

こうして、「闇」は「光」によって分けられた。すなわち、この世を支配する「闇」は、「光」として来られた神に、裁かれた（分けられた）ということである。それでイエスは、「この世の支配者が裁かれた」と「現在完了形」で言われたのである。そして、神が分けた以上、「闇」である「悪魔」、すなわち「死」は、神によって滅ぼされる運命となった。実際、神であるイエスはご自分の十字架の死によって「悪魔」を滅ぼし、「死」を滅ぼされた。そのことの証しが、十字架の死からの復活であった。

> 「ところで、子らは血と肉を備えているので、イエスもまた同様に、これらのものを備えられました。それは、死をつかさどる者、つまり悪魔を御自分の死によって滅ぼし、死の恐怖のために一生涯、奴隷の状態にあった者たちを解放なさるためでした。」（ヘブル 2:14-15　新共同訳）

ここで聖書は、イエスが十字架の死と引き替えに、「死をつかさどる者」である「悪魔」を滅ぼしたという。それは、人々を「死の恐怖」の奴隷から解放するために、人を支配していた「死」を滅ぼしたということである。「死」を滅ぼしたことの証しが、「死」からの復活になるので、それを証しするために死なければならなかったということである。そして、死から復活することで「死」を滅ぼしたことを証しし、死ぬことのない不滅の「いのち」を明らかに示されたのであった。

> 「それが今、私たちの救い主キリスト・イエスの現れによって明らかにされたのです。キリストは死を滅ぼし、福音によって、いのちと不滅を明らかに示されました。」（Ⅱテモテ 1:10）

このように、「**神の裁き**」の対象は、人の支配者となった「死」である。その「死」の運動が「悪魔」なので、「悪魔」のしわざを打ち壊すために、神が人となって現れた。「**神の子が現れたのは、悪魔のしわざを打ちこわすためです**」(Ⅰヨハネ 3:8)。つまり、人を「否定」する「死」を滅ぼすことが「**神の裁き**」であり、その裁きは主キリスト・イエスによって実行され、「死」は十字架で滅ぼされたのである。そのことで、神は人に対し、「**あなたは死に値しない**」という判決を下すことができるようになった。そうである以上、「**あなたは死に値しない**」という「**神の裁き**」を受けるために、私たちは大胆に恵みの御座に近づこうではないか、となる。

> 「ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。」
> (ヘブル 4:16)

恵みの御座に近づくことが信仰であり、近づくことで、「**神の裁き**」を、すなわち「**あなたは死に値しない**」という判決を受け取ることができる。だが、誰もが「**神の裁き**」を誤解している。それは律法に違反する罪を犯す者に、神が罰を与えることだと思い込んでいる。イエスは、そうした世の誤りを十分に理解していたので、「**裁きについて、世の誤りを明らかにする**」(ヨハネ 16:8　聖書協会共同訳)と述べてから、「**裁きについてとは、この世の支配者が裁かれたことである**」(ヨハネ 16:11　聖書協会共同訳)と言われたのである。すると人は、神はアダムとエバが罪を犯した時、彼らを裁き、罰を与えたではないかと思うかもしれない。しかし、それが誤りであることは『福音の回復』第一巻の第七章で十分に説明した。では、その要点を再度確認しておこう。

❖　神はアダムとエバは罰を与えた？

「悪魔」は蛇を使ってアダムとエバを欺き、罪を犯させた。その時、神は罪を犯した二人を裁き、罰を与えたのだろうか。そのようなことはなさらなかった。あの時、神が裁き、罰を宣言された先は、彼らを欺いた「悪魔」に対してあった。「悪魔」に操られた蛇の姿を人が忌み嫌う姿にすることで(創世記 3:14)、間接的に「悪魔」を裁き、蛇を「悪魔」への注意喚起の象徴にされた。それから、「悪魔」に対する直接的な裁きについては、神は次のように宣言されたのである。

> 「彼(**イエス**)はお前(**悪魔**)の頭を砕き(**滅ぼし**)／お前は彼のかかとを砕く(**十字架に架ける**)。」(創世記 3:15　新共同訳)　※(　)は筆者が意味を補足

神が宣言された「悪魔」への裁きの内容は、イエスが十字架によって悪魔を滅ぼすというものであった（第一巻 284 頁「神の裁き」）。このことは実行されたので、聖書は、「死をつかさどる者、つまり悪魔を御自分の死によって滅ぼし」（ヘブル 2:14　新共同訳）と証ししている。逆に、罪を犯した二人に神がしたことは、裁いて罰を与えることではなく、「皮の衣」で着物を作って着せ、彼らの「恐れ」（否定）を締め出すことであった。「神である【主】は、アダムとその妻のために、皮の衣を作り、彼らに着せてくださった」（創世記 3:21）。「皮の衣」を作るには動物の犠牲が必要であるが、この犠牲こそ十字架でのイエスの犠牲を示した「型」であった（第一巻 282 頁「－「第二ステージ」の検証－」）。

さらに言うと、神がアダムとエバをエデンの園から追放したのも罪への罰ではなく、「信仰」によって神からの「義」を受け取らせるためであった。というのも、追放されれば神が見えなくなるので、神との関わりは「信仰」での関わりになるからである。見えない神に近づくには、もう神に引き寄せてもらうしかなく、それには神により頼む「信仰」が必要となるからである。これを「信仰」による神の「義」という。神の「義」とは、神により頼む者を神が引き寄せ、正しい者として認めてくださることである。したがって、エデンの園からの追放は神が見えなくなる出来事だったので、それはまさしくイエスが言われた、「義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなること」（ヨハネ 16:10　新共同訳）の「型」であった。そうである以上、エデンの園からの追放は罰ではなく、それこそが神からの恵みであったということである（第一巻 292 頁「－「第三ステージ」の検証－」）。

このように、アダムとエバに神は罰を与えられなかった。人は「悪魔」が操った蛇を通して欺かれたので、「蛇が悪巧みによってエバを欺いたように」（Ⅱコリント 11:3）、それは今風に言えば、「オレオレ詐欺」にあったようなものなので、見てきたように神はアダムとエバをあわれみ、罰を与える裁きはなさらなかった。逆に、神は彼らを欺いた「悪魔」を、罰を以て裁かれたのである。その罰は、「悪魔の仕業」である「死」を滅ぼすことであった。というのも、人は一生涯「死の恐怖」の奴隷となり、「一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々」（ヘブル 2:15）、「死」が「この世の支配者」となっていたからである。

それで、「神の裁き」は「死」に向けられた。「死」は「この世の支配者」なので、「この世の支配者」が裁かれることに向けられたのである。イエスはこのことを、「裁きに

ついてとは、この世の支配者が裁かれたことである」(ヨハネ 16:11　聖書協会共同訳)と言われたのであった。神は人に罰を与えるのではなく、人を「死の恐怖」の奴隷から解放し、「一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした」(ヘブル 2:15)、人に自由を得させるために、「死」を滅ぼされた。つまり、「悪魔の仕業」である「死」を滅ぼすことこそが、「神の裁き」の真実である。「神の子が現れたのは、悪魔のしわざを打ちこわすためです」(Ⅰヨハネ 3:8)。

❖ 「悪魔の仕業」を滅ぼす

「神の裁き」は昔から変わらない。それは、神が造られた非常に「良き者」を「否定」する「悪魔の仕業」を滅ぼすことであった。イエスはそのことを、「わたしがこの世に来たのは、裁くためである」(ヨハネ 9:39　新共同訳)と言われたのである。そして続けて、「こうして、見えない者は見えるようになり、見える者は見えないようになる」(ヨハネ 9:39　新共同訳)と言われた。「見えない者は見えるようになり」とは、見えなくさせている「否定」を裁いて見えるようにするということであり、「見える者は見えないようになる」とは、見えていると思わせている傲慢の「否定」を裁いて、本当は見えていないことに気づかせ、神にあわれみを乞えるようにするということである。これが「神の裁き」であり、それは「悪魔の仕業」を滅ぼすことであった。

その「悪魔の仕業」は、アダムの罪を介して「死」を持ち込み、被造物を虚無に服させることであった。そこで神は、この「死」による「否定」を排除し、再び被造物に「いのち」を得させる。「死」から、「いのち」に分けるのである。これが「神の裁き」であり、「神の裁き」は被造物に希望をもたらすので、被造物はそれを実行する神の子が現れるのを切に待ち望んでいると聖書は教えている。「被造物は、神の子たちが現れるのを切に待ち望んでいます」(ローマ 8:19　聖書協会共同訳)。さらに聖書は、切に待ち望んでいる理由も教えている。それは、被造物が虚無に服したからだという。

> 「被造物が虚無に服したのは、自分の意志によるのではなく、服従させた方によるのであり、そこには希望があります。それは、被造物自身も滅びへの隷属から解放されて、神の子どもたちの栄光の自由に入るという希望です。」
> (ローマ 8:20-21　聖書協会共同訳)

ここに、「被造物が虚無に服したのは」、すなわち「死」が入り込んだのは、「服従させた方」によるとある。これは敬語なので、その方とは「神」だと思うかもしれないが、ギリシャ語には敬語はない。ここでの「服従させた方」とは「服従させた者」であり、

それは「アダム」のことを指している。ここではアダムの罪によって「死」が入り込んだことが述べられているのである。そのことは、この教えの手前に、「一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、すべての人に死が及んだのです」（ローマ 5:12　聖書協会共同訳）と書かれているとおりである。つまり、「そこには希望があります」となるのは、「死」が入り込み、被造物が虚無に服するようになったのは、「神」がなさったことではなかったので、神の被造物は「死」から贖われるのを、「切に待ち望んでいます」（ローマ 8:19　聖書協会共同訳）とある。

このように、「神の裁き」は「悪魔の仕業」を滅ぼすことであって、それは「死」を滅ぼすことを意味する。この「死」が、神と人とを「分離」し、人に「不安」を抱かせ、見える安心をむさぼる罪の行為に向かわせているから、神は「死」を滅ぼされる。罪を犯す者は、「死」をつかさどる「悪魔」から出た者ゆえに、神は「悪魔の仕業」を滅ぼすのである。そのために神が来られた。「罪を犯している者は、悪魔から出た者です。（中略）神の子が現れたのは、悪魔のしわざを打ちこわすためです」（Ⅰヨハネ 3:8）。これが、「神の裁き」である。そうなると、神は全ての人を救われるのだろうか。全ての人は救われて天国に行けるのだろうか。実は、そうはならないので、そのことも触れておきたい。

❖　全ての人が救われる？

「死」の状態から救われ、「いのち」に移されるには、神が差し出す救いの御手に掴まる必要がある（信仰）。なぜなら、神は人に『人格』を持たせたからである。『人格』とは徹底した自由であり、その自由は選択であって、選択に全責任を負うことである。それゆえ、選択を通して『人格』は生成されていく。神は人をそのように造られたので、あくまでも神の側は「救い」の御手を差し伸べるだけであって、それに掴まるかどうかの選択は人の側でしなければならない。したがって、いくら「神の裁き」は「悪魔の仕業」を滅ぼすことだといっても、すなわち「死」を滅ぼすことだといっても、自動的に全ての人が「死」から救われるという話にはならないのである（第一巻 108 頁「『人格』について」）。

イエスはそのことを教えるために、「わたしの言葉を聞いて、それを守らない者がいても、わたしはその者を裁かない。わたしは、世を裁くためではなく、世を救うために来たからである」（ヨハネ 12:47　新共同訳）と言われた続きで、「わたしを拒み、わたしの言葉を受け入れない者に対しては、裁くものがある。わたしの語った言葉が、終わりの日にその者を裁く」（ヨハネ 12:48　新共同訳）とも言われたのである。した

がって、神が差し出す救いの御手に掴まるかどうかは各自が選択しなければならない。差し出された「救い」の御手を掴み、キリストにつぎ合わされた者だけが、「悪魔」を滅ぼし、「死」を滅ぼしたキリストの御業を享受できる。その者は、キリストがそうであったように、肉体の死を迎えた時に必ず復活する。

> 「もし私たちが、キリストにつぎ合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活とも同じようになるからです。」
> （ローマ 6:5）

その時までは「死の体」を持つので、「死の力」と戦う必要がある。それは、「死の力」を持つ「悪魔」との戦いである。「悪魔」は滅ぼされても、「悪魔」によって持ち込まれた「死」の世界は健在なので、その世界で暮らす限り「悪魔」との戦いは続く。しかし、キリストは十字架で「悪魔」に勝利しているので、「**その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし**」（ヘブル 2:14）、そのキリストにつぎ合わされた私たちも勝利し、「死の体」を脱ぎ捨てる終わりの日に復活するという運びとなる。それで聖書は、「**ですから、私の愛する兄弟たちよ。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい**」（Ⅰコリント 15:58）と教えている。

このように、神は「悪魔の仕業」を滅ぼすために来られ、神はご自分の十字架でそれを滅ぼされたが、それは全ての人が救われることになったということではない。あくまでもそれは、キリストの体を通して起きたことなので、私たちがキリストの体につぎ合わされない限り、その出来事は無効となる。そして、キリストにつぎ合わされるには、神の呼びかけに応答するしかない。神の呼びかけに応答する「信仰」によってキリストにつぎ合わされ、世（死）に勝利できる。「**世に打ち勝つ勝利、それはわたしたちの信仰です**」（Ⅰヨハネ 5:4　新共同訳）。ゆえに、応答しない者は救われない。このことが分かれば、「**神の裁き**」を説明している次の御言葉の意味も分かる。

❖ 「裁き」の御言葉の意味

> 「神の前で、そして生きている者と死んだ者とを裁かれるキリスト・イエスの前で、その出現と御国とを思い、私は厳かに命じます。」
> （Ⅱテモテ 4:1　聖書協会共同訳）

「生きている者と死んだ者とを裁かれる」の「裁く」の原語も「クリノー」で、本来の意味は「分ける」であり、ここでは継続的な動作を表す「現在形」の分詞「メルロー」[μέλλω] と組み合わせて使われているので、キリストは今も分け続けているという意味である。それは、いつの時代であっても、神は今まさに呼びかけているということであって、将来、神の声を聞いて裁かれるということではない。“今”神の呼びかけに応答する者は「死んだ者」から「生きている者」に分けられるということである。これはイエスが言われた、「死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです」（ヨハネ 5:25）と同じである。そして、「死人」が神の呼びかけに応答し「生きる」ようになると、必ず将来、キリストによって御国に引き上げられるので、「その出現と御国とを思い」とある。つまり、ここでは、第一巻で見た福音の「第一ステージ」に於ける神の御業が、神が人を裁く（分ける）という表現で書かれている。では、次の「裁き」はどうだろう。

> 「私たちが真理の認識を得た後にも、故意に罪を犯し続けるならば、罪のためのいけにえは、もはや残っていません。恐ろしい裁きと、逆らう者たちを焼き尽くす激しい火とが待ち受けているだけです。」
>
> （ヘブル 10:26-27　聖書協会共同訳）

ここでは、「永遠のいのち」を受け取ったキリスト者が、罪を犯し続けるなら滅びるしかないとある。しかし、聖書の教えの「憲法」はイエスの言葉なので、そのイエスが、「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません」（ヨハネ 10:28）と言われた以上、ここは起こり得ないことを述べていることが分かる。その意図は、「永遠のいのち」を持ったなら、神は人を苦しめている「否定」の泥（罪）を容赦なく洗い流す方なので、その神の覚悟を伝えるためである。その神の覚悟を、ヘブル書は「恐ろしい裁き」という言葉で言い表し、人の側は罪を取り除く神の「赦しの恵み」を万が一にも拒むことのないようにと、あえて起こり得ないことを、すなわち「逆らう者たちを焼き尽くす激しい火とが待ち受けているだけです」と述べることで強調している。

さらに、ヘブル書は続けて、「モーセの律法を破る者は、二、三人の証言に基づいて、情け容赦なく死刑に処せられます」（ヘブル 10:28　聖書協会共同訳）と、起こり得ないことを再び述べている。そのことで、「赦しの恵み」を万が一にも拒むことのないようにと励ましている。それはちょうど、親が子どもの道を真剣に是正しようと、子どもに対する親の真剣な覚悟を伝える時、「そんなことをすれば、お前は滅びるぞ！」と

言うようなものである。それは、まさしく教訓としての表現なのである。「それが書かれたのは、世の終わりに臨んでいる私たちへの教訓とするため」(Ⅰコリント 10:11)。つまり、ここでは、第一巻で見た福音の「第二ステージ」が、神が人を裁くという表現を使うことで、教訓として書かれている。こうした逆説的な言い方はヘブル書 6:4-6 にもある（第一巻 195 頁「「死」に戻ることはできない」)。では、次の「裁き」はどうだろう。

> 「語っておられる方を拒まないように注意しなさい。なぜなら、地上においても、警告を与えた方を拒んだ彼らが処罰を免れることができなかったとすれば、まして天から語っておられる方に背を向ける私たちが、処罰を免れることができないのは当然ではありませんか。」（ヘブル 12:25）

似たような意味の御言葉に、「まして、神の御子を踏みつけ、自分を聖なるものとした契約の血を汚れたものとみなし、恵みの御霊を侮る者は、どんなに重い処罰に値するか、考えてみなさい」（ヘブル 10:29）がある。これらの御言葉は、救われてからも神の呼びかけは継続するが、それを無視するようになると罪（否定）は洗い流されないので、その人には罪による苦しみが継続し、安息がないことを教えている。それを、「処罰を免れることができない」、あるいは、「どんなに重い処罰に値するか、考えてみなさい」と、表現している。つまり、人への「否定」を「否定」する「神の裁き」を、ここでは「処罰」という言葉で言い表している。また、「すべての違反と不従順が当然の処罰を受けたとすれば」（ヘブル 2:2）の「処罰」も、神の呼びかけを無視するなら（不従順なら)、罪の泥が洗い流されないので安息がないということである。

まことに、イエス・キリストが言われた「裁き」の意味が分かれば、こうした御言葉に書かれている「裁き」や「処罰」の意味も正確に知ることができる。というのも、キリストの語られた言葉が「憲法」だからである。聖書はキリストを証しする書なので、「その聖書が、わたしについて証言しているのです」（ヨハネ 5:39)、本体はキリストにある。「これらは、次に来るものの影であって、本体はキリストにあるのです」(コロサイ 2:17)。それゆえ、キリストの語られた言葉が「憲法」であり、キリストの語られた言葉に違反する解釈はあり得ないことになる。そのキリストが、「わたしは、世を裁くためではなく、世を救うために来た」（ヨハネ 12:47　新共同訳）と言われた以上、それが「憲法」であって、それを基にこうした御言葉を見ていかない限り、誤った意味に解してしまう。逆に、それを基にするなら、こうした解釈にしかならない。

これが、ルター以来プロテスタントで叫ばれてきた、聖書は聖書で解釈するということである（第一巻 301 頁「－聖書の読み方の基本－」）。

このように、「神の裁き」の意味は、人への「否定」を「否定」するということである。人への「否定」の頂点が「死」であり、それは「悪魔の仕業」によるので、「神の裁き」の真実は「悪魔の仕業」を滅ぼすことである。そもそも人の土台は神ご自身であり、人はすでに神によって受容されているので、神は人を裁けない（分けられない）。実際、イエスは、人がする最悪の罪の行為、すなわちイエスを殺すことに対しても、「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです」（ルカ 23:34）と祈られた。とはいえ、「悪魔の仕業」を滅ぼす「神の裁き」を最後まで拒むなら、神から貸し出されていた神からの「いのち」である「魂」は、すなわち「いのちの息」（創世記 2:7）は、「肉体の死」と同時に神に返却されるので、その人は滅んでしまうしかない。「塵は元の大地に帰り、息はこれを与えた神に帰る」（伝道者 12:7 聖書協会共同訳）（第一巻 83 頁「－究極の問題－」）。

以上が、「神の裁き」の真実であり、「神の裁き」の結論は、キリストが、「裁きについてとは、この世の支配者が裁かれたことである」（ヨハネ 16:11　聖書協会共同訳）と言われた以上、「神の裁き」は人が対象ではなく、人を支配する「死」が対象であるということである。その「死」は、「悪魔の仕業」によるのであり、「死をつかさどる者、つまり悪魔を」（ヘブル 2:14　新共同訳）、その「死」が人の存在を「否定」するので、それを「否定」するのが「神の裁き」である。これは第一巻で見てた「神の福音」の真実と全く同じである。さて、この話から、「神の怒り」の真実も見えてくる。そこで次に、「神の怒り」という視点から「神の福音」を見てみたい。

第四章　「神の怒り」

人は神に似せて造られたので非常に良かった。「神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった」（創世記 1:31）。人の本来の姿は、「良き者」であった。ところが、悪魔の仕業で人の活動を制限する「死」が入り込み、その制限から人には神が見えなくなった。その結果、人は「良き者」である自分を認識できなくなって不安を覚え、見える安心を求めるようになった。こうして、入り込んだ「死」が人を苦しめるとげとなり、見える安心をむさぼる「罪」の原動力となった。「死のとげは罪であり」（Ⅰコリント 15:56）。そこで、神は「良き者」への制限、すなわち「死」による「否定」を洗い流し、「良き者」という本来の姿を人が知るようにされる。悪魔の仕業で入り込んだ「死」に対して怒りを覚え、何としても人を助けようとされる。つまり、人の罪は人の本質とは関係がなく、それは人の中に住み着いた「死」によって生じた「罪」によるので、「それを行っているのは、もはや私ではなく、私のうちに住みついている罪なのです」（ローマ 7:17）、神は人に対しては「あわれみ」を覚え、人への「否定」を「否定」されるのである。これが「神の福音」の真実である。

だが、「そんなはずはない！」と言って、それを信じない人は多い。なぜなら、「神の怒り」という言葉が旧約聖書には頻繁に出てくるからである。神が悪人に怒りを覚え、悪人を罰した話は旧約聖書の定番である。中でも、ノアの時代の大洪水の話は有名である。あの記事を読む限り、神は人の罪を見れば「あわれみ」を覚えるのではなく、怒りを覚え、罰する方となる。そうなると、神は罪を犯す者を「ダメな者」と見なし、その者に罰を与え、罰によって「良き者」に造り変えるのが「神の福音」となる。これは、本書が述べてきた福音とは真逆の理解である。そこで、あの大洪水の話は本当に神が人の罪を見て怒りを覚え、罰を与えた出来事であったのかを検証してみたい。そのことで、「神の怒り」の真実を明らかにし、「神の福音」を眺めてみたい。

－ノアの時代の大洪水－

ここではノアの時代に起きた大洪水の話を検証し、「神の怒り」の真実を明らかにする。だが、その前に押さえておかなければならないことがある。それは、誰もがアダムにあって死んだ者であり、「アダムにあってすべての人が死んでいるように」（Ⅰコ

リント 15:22)、滅びる運命にあったということである。そこで神は、実質「死人」となった者に呼びかけ、それに応答する者を救ってこられた。その初めがアダムであり、神は彼に、「あなたは、どこにいるのか」（創世記 3:9）と呼びかけ、アダムはそれに応答したので救われた。それは、アダムと一緒にいたエバも同様であった（第一巻 278 頁「－「第一ステージ」の検証－」）。そうであれば、それと同じ福音がノアの時代の人たちにも適用されたはずである。適用されていれば、「神の怒り」の真実も見えてくるので、同じ福音がノアの時代の大洪水の話でも適用されていたのかを検証したい。

❖ 大洪水の話を検証

神が人となって来られたのがイエス・キリストである。「人となって来たイエス・キリスト」（Ⅰヨハネ 4:2)。そのキリストは、神が人に、永遠の昔から与えていた福音（恵み）を明らかにされたのである。

> 「この恵みは、キリスト・イエスにおいて、私たちに永遠の昔に与えられたものであって、それが今、私たちの救い主キリスト・イエスの現れによって明らかにされたのです。」（Ⅱテモテ 1:9-10）

その福音は、入り込んだ「死」によって神と分離し「死人」となった人を、「死」から救う恵みである。神との関係を回復する恵みである。「死人」が神の子の声を、すなわちキリストの声を聖霊によって聞き、その声に応答するなら（信じるなら)、「死人」が「生きる者」になる（神との関係が回復する）という恵みである。この恵みはアダムの時から実行されていたが、それを人となって来られたキリストが、「まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです」（ヨハネ 5:25）と、明らかにされたのである。

要するに、アダムにあって死んでいた者たちを死から救い出すために、キリストは死んでいた人の霊（潜在意識）に対し、いつの時代も神が人に貸し出した神の「いのち」である「魂」を介し、“今”呼びかけてこられたということである。当然、そこにはノアの時代の人たちも含まれていたので、聖書は次のように証ししている。

> 「その霊において、キリストは捕らわれの霊たちのところに行って、みことばを語られたのです。昔、ノアの時代に、箱舟が造られていた間、神が忍耐して待っておられたときに、従わなかった霊たちのことです。」
>
> （Ⅰペテロ 3:19-20）

しかし、ノアの時代、神の呼びかけに応答したのはノアの家族、八人だけで、それ以外の人たちは神に反抗した。そうなると、神を受け入れたノアの家族は、反抗する大多数の者たちに憎まれ、殺されてしまう危険があった。というのも、ノアの家族は神の呼びかけに応答したことで、もう「死」が支配するこの「世」のものではなくなってしまい、「世」からは憎まれる存在になったからである。キリストも「世」のものではなかったので、「世」からは憎まれ、最後は殺されてしまったのと同じである。

そこでキリストは、「世」のものではなくなった弟子たちに対し、「**あなたがたは世のものではなく、かえってわたしが世からあなたがたを選び出したのです。それで世はあなたがたを憎むのです**」（ヨハネ 15:19）と言われたのである。つまり、ノアの家族は憎まれ、殺されてしまう危険の中にあった。キリスト教の歴史を見れば、そうした迫害を避けることができないのは明らかである。いつの時代もキリスト者は「世」から憎まれ、中には殺された者たちもいたからである。そこでキリストは、弟子たちが危険から守られるように祈られた。

> 「わたしは彼らにあなたのみことばを与えました。しかし、世は彼らを憎みました。わたしがこの世のものでないように、彼らもこの世のものでないからです。彼らをこの世から取り去ってくださるようにというのではなく、悪い者から守ってくださるようにお願いします。」（ヨハネ 17:14-15）

この祈りで示されたキリストの思いは変わることがないので、「**イエス・キリストは、昨日も今日も、とこしえに変わることがありません**」（ヘブル 13:8　新改訳 2017）、神はノアの家族に対しても、「悪い者」から守ろうとされた。さらに言えば、もし彼らが「悪い者」に殺されてしまうと、アダム以来、語り継がれてきた「神の言葉」は完全に断たれてしまう。これは人類の救いにとって、まさしく危機的な状況を意味する。そこで、神は大洪水を起こし、ノアの家族だけを箱舟で助け、「神の言葉」を守る決心をされたのである。ゆえに神は、大洪水でノアは恵みを得たと言われた。「**しかし、ノアは主の前に恵みを得た**」（創世記 6:8　口語訳）。

このように、ノアの時代の大洪水は、ノアの家族を「悪い者」から守るためであり、罪人に罰を与えた話ではない。あくまでも大洪水は、ノアの家族を守るためであり、そのことで「神の言葉」を守ろうとしたのである。というのも、彼らはキリストの呼びかけに応答し、救われたからである。つまり、今日と同じ福音が、ノアの時代でも

適用されていたということになる。そうである以上、あの大洪水は、何としても人を救おうとする神の愛を示した「型」であったということになる。

> 「わずか八人の人々が、この箱舟の中で、水を通って救われたのです。そのことは、今あなたがたを救うバプテスマをあらかじめ示した型なのです。」
> （Ⅰペテロ 3:20-21）

まことに大洪水は、神が人の罪を見て怒り、罰として人を滅ぼしたという話ではない。というより、そもそも神は誰も滅ぼしてはいない。

❖ 誰も滅ぼしてはいない

神と人とを分離する「死」が入り込んで以来、誰もが滅びる運命となり、その姿は、実質死んでいた。そこで、神は死んでいた人たちを助けようと、ノアの時代も、救いの御手を差し伸べられた。だが、ノアの家族以外は助けを拒んだので、その者たちの滅びは確定してしまった。「聖霊をけがす者はだれでも、永遠に赦されず、とこしえの罪に定められます」（マルコ 3:29）。そうである以上、神が彼らを大洪水で滅ぼしたわけではない。彼らはすでに死んでいたのであって、神の助けを信じなかった時点で、既に裁かれていた。「信じない者は既に裁かれている」（ヨハネ 3:18　新共同訳）。

そこで神は、既に裁かれていた者たちを、すなわち神と分離し死んでいた者たちを、大洪水によって土に帰るのを早めたにすぎない。そうすることで、死んでいた者たちがノアの家族を殺害することのないようにし、神との関わりに欠かせない「神の言葉」を守られたのである。とはいえ、その神意を当時の人たちが理解するのは困難だった。それゆえ、神はノアに対して「永遠の契約」を立て、「さあ、わたしはわたしの契約を立てよう」（創世記 9:9）、ご自分の変わらない思いを語られた。

> 「すべて肉なるものは、もはや大洪水の水では断ち切られない。もはや大洪水が地を滅ぼすようなことはない。」（創世記 9:11）

神はここで、「滅ぼすようなことはない」と語り、滅ぼすことは神意でないことを示された。したがって、あの大洪水は人類を助けるためであって、「ダメな者」に罰を与えた話では決してなかったということになる。このことは、神が大洪水を起こすに至った理由を記した聖書箇所を見ると、さらによく分かる。

❖　大洪水を起こすに至った理由

神が大洪水を起こすに至った理由が、創世記 6:5-6 に書かれている。原文はヘブライ語であるが、問題は、そのヘブライ語をどう解釈し、どのように訳すかである。初めに、その箇所の日本語訳を見てみよう。

> 「【主】は、地上に人の悪が増大し、その心に図ることがみな、いつも悪に傾くのをご覧になった。それで【主】は、地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた。」（創世記 6:5-6　新改訳 2017）

今日の聖書は、どの訳も概ねヘブライ語をこのような意味に訳している。神が人の悪をご覧になって、人を造ったことを激しく後悔している様子に訳している。それゆえ、大洪水を起こすに至ったとする。ならば、七十人訳聖書はこの箇所をどのように訳していたのだろう。それを確認するに当たり、予備知識として、まず七十人訳聖書についての簡単な説明をしておきたい。

❖　七十人訳聖書について

イエスの時代になると、ユダヤ人たちはヘブライ語ではなくアラマイ語を日常語として使うようになり、かつてのヘブライ語は専門家にしか読めなくなっていた。また、イスラエルの地では紀元前 4 世紀頃からギリシャ語が広く公用語として使われるようになった。そこで、ヘブライ語で書かれた聖書を公用語でも読めるようにと、紀元前 3 世紀頃からギリシャ語に訳す作業が始まり、訳された聖書は七十人訳聖書と呼ばれた。こうして、七十人訳聖書がイエスの時代に読まれる『聖書』となった。したがって、「聖書はすべて、神の霊感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です」（Ⅱテモテ 3:16）とある「聖書」は、七十人訳聖書を指していた。

さらに言えば、ヘブライ語は、「概念」を言い表す「言葉」を使うことで、そこから多くの意味を表現するという特徴があった。そのため、単語の数は少なかった。そのヘブライ語で旧約聖書の大半は書かれていたので、それをギリシャ語に訳す際は、書かれた「言葉」の「概念」から、神が何を人に伝えようとされたかを推し量り、その上で語句が豊富なギリシャ語に訳す必要があった。それは、まさしく神の思いを推し量る作業となるので、「聖書（七十人訳聖書）はすべて、神の霊感によるもの」（Ⅱテモテ 3:16 ※（　）は筆者が意味を補足）となった。無論、原典のヘブライ語の聖書が書かれた際も、それは神の思いを表記する以上、「神の霊感によるもの」であった。いずれにしても、ヘブライ語の「言葉」には「概念」を言い表すという特徴があった。

例えば、ヘブライ語に「エメト」[אֱמֶת]という言葉がある。この言葉は「**堅固であること**」、「**変わらないこと**」、「**長持ちすること**」、「**信頼できること**」という「概念」を言い表している。七十人訳聖書はそれを、例えばイザヤ 39:8 の「エメト」を「ディカイオシュネー」[δικαιοσύνη]（意味は：「**義**」）と訳したり、エレミヤ 33:6 の「エメト」を「ピスティス」[πίστις]（意味は：「**信仰**」）と訳したり、ネヘミヤ 7:2 の「エメト」を「アレーテース」[ἀληθής]（意味は：「**真実な**」）と訳したりしている。ならば、「**義**」と「**信仰**」と「**真実な**」は同じ意味かといえば、それは同じではない。だが、ヘブライ語では同じ言葉なので、訳す際は「**神の霊感**」を必要とする。

また、ヘブライ語に「ナーハム」[נָחַם]という言葉がある。この言葉は、安堵しようとする行為の「概念」を言い表している。馬が息を切らすと呼吸を整えて安堵しようとするが、人も呼吸が乱れるほどの精神状態になると、何としても呼吸を整えて安堵しようとする。その行為の「概念」を言い表している。だが、何が原因で呼吸が乱れるほどの精神状態になったかによって、「**安堵しようとする**」行為も異なってくるので、例えば、呼吸が乱れるほどの精神状態になった原因が、人への激しい怒りであれば、「**敵を討つ**」ことで安堵しようとするので、その場合の「ナーハム」の意味は「**恨みを晴らす**」となる。あるいは、呼吸が乱れるほどの精神状態になった原因が、自分の失敗であれば、人は「**後悔する**」ことで安堵しようとするので、その場合の意味は「**悔やむ**」となる。あるいは、呼吸が乱れるほどの精神状態になった原因が、大切な者を失った激しい悲しみであれば、人は「**自分を慰める**」ことで安堵しようとするので、その場合の意味は「**自分を慰める**」となる。また、呼吸が乱れるほどの精神状態になった原因が、大切な者が苦しむ姿を見てのことであれば、人はその人を「**あわれむ**」ことで安堵しようとするので、その場合の意味は「**あわれむ**」となる（参考：The Brown-Driver-Briggs Hebrew and English Lexicon）。

そこで、七十人訳聖書は、例えば創世記 27:42 の「ナーハム」を「アペイレオー」[ἀπειλέω]（意味は：「**恨みを晴らす**」）と訳し、出エジプト 32:14 の「ナーハム」を「ヒラスコマイ」[ἱλάσκομαι]（意味は：「**あわれむ**」）と訳し、I サムエル 15:35 の「ナーハム」を「メタメレオー」[μεταμελέω]（意味は：「**悔やむ**」）と訳し、イザヤ 40:1 の「ナーハム」を「パラカレオー」[παρακαλέω]（意味は：「**慰める**」）と訳している。ならば、「**恨みを晴らす**」と「**あわれむ**」と「**悔やむ**」と「**慰める**」は同じ意味かといえば、それは同じではない。だが、ヘブライ語では同じ言葉なので、訳す際は「**神の霊感**」を必要とする。

このように、ヘブライ語は「概念」を使って色々なことを表現する。加えて単純な文法なので、子どもが書くような文章になる。ならば、ギリシャ語はといえば、語彙が多く、そこには豊かな文法表現もあるので、大人が書くような文章が書ける。したがって、ヘブライ語で書かれた聖書をギリシャ語に翻訳するとなれば、それまでは言い表せなかった神意も言い表せるようになる。とはいえ、誤った神意を言い表す可能性も起こり得るため、訳す際は「神の霊感」を必要とした。ゆえに、七十人訳聖書は「神の霊感」によって訳され、イエスの時代に於いてはヘブライ語の聖書ではなく、その七十人訳聖書が、キリスト教徒にとっての「聖書（旧約聖書）」となった。「聖書（七十人訳聖書）はすべて、神の霊感による」（Ⅱテモテ 3:16 ※（　）は筆者が意味を補足）。もちろん、ヘブライ語の聖書も使われていたが、それは専門家の間での話であった。ただ残念なことに、イエスの時代に使われていた七十人訳聖書の完全な「祖型」が今日では分からない。というのも、異なる訳の七十人訳聖書が多数存在するからである。それでも概ね中身は一致しているので、それらの訳は大いに参考になる。

では、以上の話を踏まえ、大洪水を起こすに至った経緯が記されている創世記 6:5-6 の記事を、イエスの時代の「聖書」、七十人訳聖書はどう訳していたのかを見てみたい。その訳を見ると、ただただ驚嘆する。

❖　イエスの時代の「聖書」

神が大洪水を起こすに至った理由が、創世記 6:5-6 に書かれている。それは今日、概ね、「【主】は、地上に人の悪が増大し、その心に図ることがみな、いつも悪に傾くのをご覧になった。それで【主】は、地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた」（創世記 6:5-6　新改訳 2017）と訳されている。しかし、イエスの時代の「聖書」（七十人訳聖書）は、「神の霊感」によって次のような意味に訳していた。

> 「神は、地上に悪が増大し、来る日も来る日も、誰もがみなその心の中で、ひたすら苦しみを抱いているのをご覧になった。それで神は、地上に人を造ったことを思い巡らし、考えた。」（創世記 6:5-6　七十人訳聖書の私訳）
>
> 尚、使用した七十人訳聖書は、近年編纂された「ゲッティンゲン版七十人訳」

神は、来る日も来る日も、誰もが心の中で、「ひたすら苦しみを抱いているのをご覧になった」ので、彼らを造ったことを「思い巡らし」、何としても助けようと、「考えた」という。しかし、今日の聖書は同じヘブライ語を、神は人の心がいつも悪に傾くのを

ご覧になり、「地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた」と訳している。全く異なる意味に訳している。この違いは、原文のヘブライ語の「ラ」[רַע]（「悪い」）と、「ナーハム」[נָחַם]（「悲しむ」、「あわれむ」、「思い直す」、「恨みを晴らす」）を、どう訳したかで生じた。「ラ」は「悪い」という概念であり、「ナーハム」は先述したように、「安堵しようとする」行為の概念である。では、詳しく見てみよう。

今日の日本語の聖書は、「ラ」が含まれる箇所を、「いつも 悪 に傾く」と訳している。七十人訳聖書は、「ひたすら 苦しみ を抱いている」と訳している。この違いは、ヘブライ語の「ラ」の「悪い」という概念を、どう解釈するかで生じる。というのも、「悪い」といった場合、「悪い人」のように「悪」を指して使う場合もあれば、「健康状態が悪い」のように、「苦しみ」を指して使う場合もあるからである。どちらの意味に取るかは訳す人に懸かってくるが、「神の霊感」による七十人訳聖書は「苦しみ」を言い表していると解し、ギリシャ語では「ポネーロス」[πονηρός]と訳した。意味は「苦痛の激しい」、「苦しい」、「つらい」である。

次に、今日の日本語の聖書は、「ナーハム」が含まれている箇所を「地上に人を造ったことを悔やみ」と訳している。七十人訳聖書は、「地上に人を造ったことを思い巡らし」と訳している。この違いはヘブライ語の「ナーハム」が言い表している「安堵しようとする」行為を、どう解釈するかで生じる。というのも、先述したように、呼吸が乱れるほどの精神状態になった原因が何であるかによって、「安堵しようとする」行為である「ナーハム」は、「あわれむ」や「慰める」といった意味にもなれば、それとは真逆の、「悔やむ」や「恨みを晴らす」といった意味にもなるからである。つまり、「ナーハム」を使って「愛」の思いを言い表すことも、真逆の「怒り」の思いを言い表すこともできてしまうのである。そこで、どう解釈するかは解釈する人に懸かってくるが、今日の日本語の聖書はこの箇所の「ナーハム」を、「怒り」の思いを言い表していると解した。しかし、「神の霊感」による七十人訳聖書は「愛」の思いを言い表していると解し、ギリシャ語では「エンテュメオマイ」[ἐνθυμέομαι]と訳した。意味は「思い巡らす」であり、人へのあわれみを強く言い表した表現にしている。

この「エンテュメオマイ」は、ヨセフの妻マリヤが身重になったとき、ヨセフは愛する妻を絶対にさらし者にしたくなかったので、何としても彼女を助けようと思いを巡らしたが、「彼がこのことを思い巡らしていた」（マタイ 1:20）、その時の「思い巡らしていた」が「エンテュメオマイ」である。それは明らかに、マリヤへのあわれみを言い表していた。したがって、七十人訳聖書がこの箇所の「ナーハム」を「エンテュ

メオマイ」と訳した意図は、ヨセフの用例と同じように、神のあわれみを言い表すためであった。「ナーハム」には「**あわれむ**」という意味があるので、それを「エンテュメオマイ」で言い表したのである。

ただし、アウグスティヌス（354-430）は、創世記 6:5-7 の七十人訳聖書を底本にして訳された古代ラテン語訳聖書を引用し、神に於ける「**思い巡らす**」の意味を、神は罪を犯した人に対して怒り、罰を与えようと「**思い巡らした**」と解した。要は、神は人を造られたことを、「**悔やんだ**」と解したのである（『神の国』第 15 巻 第 25 章）。しかし、創世記 6:5 を古代ラテン語訳ではなく、七十人訳聖書で見てみると、そこには、「**神は、地上に悪が増大し、来る日も来る日も、誰もがみなその心の中で、ひたすら苦しみを抱いているのをご覧になった**」と書かれている以上、彼の解釈には無理がある。大体にして、神の「ナーハム」を「**悔やむ**」と解すること自体、根本的に間違っている。なぜなら、神は全てを知る方であって人間ではないので、そもそも神には「**悔やむ**」ことなどあり得ないからである。聖書は、そのことを明確に教えている。

> 「実に、イスラエルの栄光である方は、偽ることもなく、**悔いる**こともない。
> この方は人間ではないので、**悔いる**ことがない。」（Ⅰサムエル 15:29）

神には「**悔やむ**」ことなどあり得ないので、聖書は他でも、「**神は人間ではなく、偽りを言うことがない。人の子ではなく、悔いる**ことがない」（民数記 23:19）と教え、「**わたしは悔いず、取りやめもしない**」（エレミヤ 4:28）と教えている。それゆえ、創世記 6:6 に書かれている神に於ける「ナーハム」を、神は悔やんだと解すことは誤りであり、それは断じてあり得ないのである。ということは、今日の日本語の聖書は概ね創世記 6:6 を、「**それで【主】は、地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた**」と訳しているが、そのような訳はあり得ないということになる。

このように、イエスの時代の「聖書」は、今日私たちが使っている聖書とは全く異なる意味に創世記 6:5-6 を訳している。今日の私たちの使っている旧約聖書は、ヘブライ語から直接訳されているが、そこに「**神の霊感**」が働かなければ、イエスの時代の「聖書」のようには訳せないということである。だが、私たちが訳す際に使うのは「**神の霊感**」ではなく、「**罪には罰**」という「人間的な標準」なので、このような訳になってしまうということである。

ところで、続きの創世記 6:7 は今日、「主は言われた。「わたしは人を創造したが、これを地上からぬぐい去ろう。人だけでなく、家畜も這うものも空の鳥も。わたしはこれらを造ったことを後悔する。」」（創世記 6:7　新共同訳）と訳されている。それゆえ、この話には納得がいかない人もいるかもしれない。そこで、創世記 6:7 にも触れておきたい。実は、創世記 6:7 で「後悔する」と訳されている箇所も「ナーハム」であり、創世記 6:6 と同じである。であれば、この箇所も七十人訳聖書では「エンテュメオマイ」と訳されていたのかというと、ここは専門的な説明が必要である。

❖ 創世記 6:7 の「ナーハム」

七十人訳聖書といっても、そこには微妙に異なる訳の写本がたくさんある。そこで、異なる訳の写本を集め、七十人訳聖書の「祖型」を復元しようとするプロジェクトが、すなわちイエスの時代に一般に使われていた「聖書」の訳を探ろうとする作業が、ドイツのゲッティンゲン大学で進められている。それは、「ゲッティンゲン版七十人訳」と呼ばれている。この作業は未だに完成されておらず、今なお進められている。ただし、創世記の復元が終わっているので、その異読欄を見ると、創世記 6:7 の「ナーハム」は、四種類の訳の写本に分けられることが分かる。一つ目は、創世記 6:6 の「ナーハム」と同じように、「エンテュメオマイ」［ἐνθυμέομαι］（思い巡らす）と訳している写本であり、二つ目は「テュモー」［θυμόω］（激怒する）と訳している写本であり、三つ目は「メタメロマイ」［μεταμέλομαι］（後悔する）と訳している写本であり、四つ目は「メタノエオー」［μετανοέω］（心を変える）と訳している写本である。

では、この四つのうち、どの訳が「祖型」なのか考えてみたい。初めに、「祖型」であることが疑わしい訳を排除しよう。一つ目は「メタノエオー」（心を変える）である。というのも、これは一人の教父が著書の中で一度だけ引用した写本の訳で、数多く残っている七十人訳聖書の写本の訳には全く出てこないからである。それゆえ、この訳が「祖型」であるはずもないので排除できる。次に排除できる訳は、「メタメロマイ」（後悔する）である。この訳が最初に登場する写本は 10 世紀に書かれた、写本番号「121」の「Venice, Bibl. Marc. Gr. 3. X. Century.」であり、時代としてはかなり新しい。しかも、「メタメロマイ」の記載が欄外記載（121^{mg}）になっている。それゆえ、この訳が「祖型」でないことは明らかなので排除できる。

以上の考察から、「祖型」の可能性がある訳は「テュモー」（激怒する）と、「エンテュメオマイ」（思い巡らす）の二つだけとなる。ならば、どちらが七十人訳聖書の「祖型」なのだろう。神が「ナーハム」という言葉を使うとき、人への愛ゆえに、人を苦しめ

る罪への激しい「**怒り**」が含まれるので、「テュモー」でも良さそうな気はする。だが、やはりこの場面では適切とは言えない。というのも、前節の「ナーハム」は「エンテュメオマイ」と訳されていたのだから、同じ言葉がすぐ続けて使われている以上、ここも「エンテュメオマイ」という意味に訳されていたと考えるのがごく自然だからである。それだけでなく、「**激怒した**」という意味に訳すと、人はどうしても大洪水を罰として受け止めてしまう。それゆえ、「**神の霊感**」が働いた七十人訳聖書に於いては、そのように訳されたと考えることは困難である。したがって、この箇所も、「エンテュメオマイ」（**思い巡らす**）と訳されていたと推測するのが適当である。

しかし、一般に七十人訳として広く知られているのは、5 世紀に書かれたアレクサンドリア写本であり、その写本では、「テュモー」（**激怒する**）と訳されている。これ以上古い主な七十人訳というと、4 世紀に書かれたヴァチカン写本とシナイ写本があるが、残念ながら、そこには今回知りたい創世記の箇所が欠如している。他に、断片として見つかった 2-3 世紀の写本（写本 911：Berlin Staatl.Mus.,Fol.66.）には創世記 6:7 があったが、その訳も「テュモー」となっている。そうなると、「祖型」は「テュモー」ということになるのだろうか。「ゲッティンゲン版七十人訳」はそう判断した。

ちなみに、ギリシャ語の「テュモー」という言葉は、「**激怒する**」ことを連想させるが、元来この言葉は、「**激しい感情の爆発**」を意味する。であれば、何としても助けたいという「**あわれみ**」も「**激しい感情の爆発**」なので、同じ「テュモー」で表現することができる。つまり、この言葉は悪い意味にも、良い意味にも解せる言葉であって、田川氏によると、悪い意味での場合には形容詞が付くという（参考：田川建三著『新約聖書 訳と註 第七巻』作品社 480 頁）。したがって、この場合の「テュモー」には何の形容詞も付いていないので、「**激怒する**」ではなく「**あわれむ**」という意味になる。とはいえ、「テュモー」は「**激怒する**」と解される危険性が常にある。そこで、この箇所の「ナーハム」を、七十人訳聖書は本当に「テュモー」と訳したのかを検証してみたい。どう検証するかというと、古い時代の七十人訳聖書の写本がなくとも、古い写本の中身を知る方法があるので、それによって検証できる。それは、教父の著書で引用された聖句を見ればよいのである。

私もそうだが、聖句を引用して文章を書くことが多々あり、その場合、一字一句間違いのないように慎重に書き写す。そこで、教父が引用した聖句を見れば、当時使われていた七十人訳聖書の訳を正確に知ることができるというわけである。したがって、5 世紀以前に書かれた教父の著作の中に創世記 6:7 の聖句があれば、そこからアレク

サンドリア写本よりも古い七十人訳聖書の訳を知ることができる。ゆえに、創世記 6:7 の「ナーハム」に於ける七十人訳の「祖型」は、教父が引用した七十人訳聖書の訳を調べてからでなければ決定することはできない。では、この箇所の聖句を引用した教父の著作を、「ゲッティンゲン版七十人訳」の異読欄を参考に見ていこう。ただし、その異読欄には疑わしい記載があり、発行元のゲッティンゲン大学に確認したところ、それは誤りであったという返事を頂いた。疑わしい記載というのは、一つは写本の表記ミスであり、「Phil Ⅱ 68.8^{HU}」は「Phil Ⅱ 68.8^{HP}」である。もう一つは、記載された写本「Chr Ⅳ414」には、該当する聖句がなかったことである。そこで、ここでは異読欄を訂正したものを基に教父の引用を見ていく。

最初は、イエスと同時代のフィロン（BC25 年頃-AD45/50 年頃）である。彼は、「神の不動性」（創世記 6:4-12 の注解書）の中で創世記 6:7 の御言葉を引用している。そこでの訳は、何と「エンテュメオマイ」（思い巡らす）であった。ただし、「テュモー」（激怒する）とする写本もあった（参考：L.Cohn & P.Wendland「アレクサンドレイアのフィロン全集Ⅱ」Opera, Berlin 1896ff. 68 頁 8 行目と欄外）。

次に、初代教会最大の神学者オリゲネス（185 年頃-254 年頃）である。当時、異なる訳の七十人訳聖書が出回っていたので、彼はそれを精査し、イエスの時代に使われていたと思われる七十人訳聖書を、すなわち七十人訳聖書の「祖型」を導き出し、「ヘクサプラの七十人訳」とした。またオリゲネスは、ユダヤ教徒たちがキリスト教徒たちの使う七十人訳聖書に反発し、彼らが独自に作った三つのギリシャ語訳もあったので、それらと「ヘクサプラの七十人訳」とを互いに比較できるテキストを作り、「ヘクサプラの七十人訳」に権威を持たせた。しかし、その大半は 638 年イスラム教徒のパレスチナ侵入の際に消失してしまったが、消失しなかったものの中に創世記の 6:7 があったのでそれを見ると、その箇所の「ナーハム」は「エンテュメオマイ」（思い巡らす）と訳されていた（参考：Frederick Field 編 『Origen Hexapla』Published 1875 by Clarendon Press in Oxford. 23 頁）。

次は、ヨアンネス・クリュソストモス（344 年頃-407 年）であるが、彼は著作の中で創世記 6:7 の聖句を二度引用している。彼は、その時代のキリスト教界に於いて最も有名な説教家であり、コンスタンティノープル大主教も務めた。その彼が引用した創世記 6:7 を見ると、それも「エンテュメオマイ」（思いめぐらす）という訳であった。しかも、彼は引用の際、神の本性は変わらない不変性なので、この箇所の意味を「神

が後悔した」と読むのは誤りであるとした（参考：ミーニュ編 「ギリシア教父全集」の 47-64 巻にある「ヨアンネス・クリュソストモス全集」項目Ⅶの 192 欄）。

さらには、キュリロス（376 年-444 年）とテオドレトス（395 年頃-457 年頃）の引用も、その箇所は「エンテュメオマイ」である（参考：シュテーリン編「ギリシア・キリスト教著作家全集」の中の「アレクサンドレイアのキュリロス全集」Ⅱ巻の 56 頁、ミーニュ編『ギリシア教父全集』の 80-84 巻にある「キュロスのテオドレトス全集」項目Ⅰの 101 欄、156 欄）。ところが、この後、七十人訳聖書として一般に広く知られている 5 世紀のアレクサンドリア写本になると、なぜか「テュモー」（激怒する）になっている。それ以前の教父たちは揃って、「エンテュメオマイ」（思い巡らす）と訳された七十人訳聖書を使っていたが、突如として訳が変わってしまったのである。

以上の考察から、イエスの時代は「エンテュメオマイ」の訳で読まれていたことは疑う余地もない。すなわち、神は人を造られたことを、後悔などしていなかったということである。ところが、今日の聖書を見ると、創世記 6:7 の「ナーハム」を、神は人を造られたことを「後悔した」という意味にこぞって訳している。例えば、新改訳第三版は「わたしは、これらを造ったことを残念に思う」と訳し、新共同訳は「わたしはこれらを造ったことを後悔する」と訳し、新改訳 2017 は「これらを造ったことを悔やむ」と訳し、聖書協会共同訳は「私はこれらを造ったことを悔やむ」と訳している。それは、「神の霊感」によって訳された七十人訳聖書の訳とは、全く異なる。

このように、創世記 6:7 の「ナーハム」は神のあわれみを言い表しているのであって、神は人の悪を見て怒り、人を滅ぼしたわけではない。神が大洪水を起こされたのは、「神の言葉」を継承する人類を助けるためであり、あくまでも人をあわれみ、人を救うためであった。それで神は、「すべて肉なるものは、もはや大洪水の水では断ち切られない。もはや大洪水が地を滅ぼすようなことはない」（創世記 9:11）と神意を語り、それを「永遠の契約」とされた。それでも人は、神意を誤解し続けたので、その後も神は「永遠の契約」を立てて神意を明らかにすることで、「神の怒り」や「神の裁き」の誤解を解こうとされた。ならば、その「永遠の契約」を見てみよう。

❖ 「永遠の契約」

神はご自分の思いが誤解されることのないようにと、ノアに「永遠の契約」を立てられた。その後、神はアブラハムにも「永遠の契約」を立て、ノアに明らかにした神意

に肉付けをされた。そのことで、人が神の思いを正しく知り、神の思いを誤解しないようにされた。その契約の内容は、次のとおりである。

「わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に、そしてあなたの後のあなたの子孫との間に、代々にわたる永遠の契約として立てる。わたしがあなたの神、あなたの後の子孫の神となるためである。わたしは、あなたが滞在している地、すなわちカナンの全土を、あなたとあなたの後のあなたの子孫に永遠の所有として与える。わたしは、彼らの神となる。」(創世記 17:7-8)

この内容を端的に言うと、神が人を救って「子孫の神」となり、彼らに「カナンの全土」を、すなわち「安息」の地を与えるというものである。それは「死人」に「霊の体」を着せて「生きる者」とし、付着した「否定」を洗い流し、「平安」を得させるということである。その後、神はダビデにも「永遠の契約」を語られた。

「まことにわが家は、このように神とともにある。とこしえの契約が私に立てられているからだ。このすべては備えられ、また守られる。まことに神は、私の救いと願いとを、すべて、育て上げてくださる。」(Ⅱサムエル 23:5)

ここに「私の救いと願い」とあるが、「救い」とは「霊の体」を着せられることであり、「願い」とは「否定」の泥が洗い流されることである。その全てを、神が成し遂げてくださるという。つまり、「救い」は人の力でするのではないということである。その後、神はエレミヤにも「永遠の契約」を語り、さらに肉付けをされた。

「彼らの時代の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうだ。――【主】の御告げ――わたしはわたしの律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを書きしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。そのようにして、人々はもはや、『【主】を知れ』と言って、おのおの互いに教えない。それは、彼らがみな、身分の低い者から高い者まで、わたしを知るからだ。――【主】の御告げ――わたしは彼らの咎を赦し、彼らの罪を二度と思い出さないからだ。」(エレミヤ 31:33-34)

この内容を端的に言うと、神は人を救い、「彼らの神」になるということである。そのために、人の罪を赦すということである。神はここで、人を「否定」するものを「否

定」することの実際を明らかにされている。それは、「赦しの恵み」にほかならない。その後、神はエゼキエルも「永遠の契約」を語り、さらに肉付けをされた。

> 「わたしは彼らと平和の契約を結ぶ。これは彼らとのとこしえの契約となる。わたしは彼らをかばい、彼らをふやし、わたしの聖所を彼らのうちに永遠に置く。わたしの住まいは彼らとともにあり、わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。わたしの聖所が永遠に彼らのうちにあるとき、諸国の民は、わたしがイスラエルを聖別する【主】であることを知ろう。」
>
> (エゼキエル 37:26-28)

これは、神が人を永遠に「肯定」するということであり、ここでも神は人を「否定」するものを「否定」することを言い表している。その後、神はイザヤにも「永遠の契約」を語り、さらに肉付けをされた。

> 「わたし、【主】は、義をもってあなたを召し、あなたの手を握り、あなたを見守り、あなたを民の契約とし、国々の光とする。こうして、見えない目を開き、囚人を牢獄から、やみの中に住む者を獄屋から連れ出す。」
>
> (イザヤ 42:6-7)

「やみの中に住む者を獄屋から連れ出す」とは、神は人を「否定」するものを「否定」するということである。神は、イザヤには次のようにも語られた。

> 「このことは、わたしにとっては、ノアの日のようだ。わたしは、ノアの洪水をもう地上に送らないと誓ったが、そのように、あなたを怒らず、あなたを責めないとわたしは誓う。たとい山々が移り、丘が動いても、わたしの変わらぬ愛はあなたから移らず、わたしの平和の契約は動かない」とあなたをあわれむ【主】は仰せられる。」(イザヤ 54:9-10)

ここで神は、「あなたを怒らず、あなたを責めない」と誓い、これこそが神の変わらない契約であり、変わらない愛であるとされた。ゆえに、神はこう言われた。

> 「耳を傾け、わたしのところに出て来い。聞け。そうすれば、あなたがたは生きる。わたしはあなたがたと永遠の契約を結ぶ。それは、ダビデへの確かで真実な約束である。」(イザヤ 55:3　新改訳 2017)

ここで神は、「永遠の契約を結ぶ」と言われた。それは、「聞け。そうすれば、あなたがたは生きる」というものである。つまり、神の呼びかけに応答する者は生きる者になるという約束である。これをイエスは、「死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです」（ヨハネ 5:25）と言われた（第一巻 177 頁「旧約聖書に見る救いの教え」）。こうして、神はノアに立てられた「永遠の契約」に、各時代の人たちの状況に合わせて肉付けをしてこられた。それは一口に言えば、神は人を「否定」するものを「否定」し、人を永久に「肯定」するということである。神はそれを「永遠の契約」として人に語ることで、「神の怒り」と「神の裁き」の意味を人が取り違えることのないようにされたのである。

さて、新約時代になると、神は人となって来られた。「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた」（ヨハネ 1:14）。その方はイエスと呼ばれ、「永遠の契約」で語ってこられたことの実際を見せてくださった。それは人を決して裁かない姿であり、人を真剣に愛する姿であった。そのことで、人に対する「神の思い」が誤解されることはもうなくなった。ゆえに、昔のように「神の思い」を「永遠の契約」として語る必要はなかった。ただ、ご自分を信じなさいと語るだけでよかった。そこで、イエスはご自分を信じて飲む杯を「新しい契約」とされたのである。

> 「食事の後、杯も同じようにして言われた。「この杯は、あなたがたのために流されるわたしの血による新しい契約です。」（ルカ 22:20）

このように、神が語られた「永遠の契約」からも、ノアの時代の大洪水は決して「罪には罰」ではなかったことが分かる。むしろそれは、人を救おうとする神の「あわれみ」であった。しかし、大洪水で滅んだ者たちについて、彼らは大洪水の前に死んでいたという事実を人は知らないので――いや、神は死んでいた彼らを救おうとされたが、彼らがそれを拒んだという事実を知らないので、大洪水に於ける神意を誤解してしまう。そもそも、聖書はキリストを証しする書である。「その聖書が、わたしについて証言しているのです」（ヨハネ 5:39）とあるように、聖書の本体はキリストにある。「本体はキリストにあるのです」（コロサイ 2:17）。ゆえに、キリストの語られた言葉こそ「憲法」であり、その基準でノアの大洪水の話を見るなら、そこに描かれているのは「罪には罰」ではなく、キリストが十字架で明らかにされた神の「あわれみ」であったことが、はっきり見えてくる。ペテロも、その基準で見て解説している。

❖ キリストの言葉で見る

キリストの弟子であったペテロは、キリストの言葉でノアの大洪水の話を見た。それによると、その出来事の意味は次のとおりだという。

> 「昔、ノアの時代に、箱舟が造られていた間、神が忍耐して待っておられたときに、従わなかった霊たちのことです。わずか八人の人々が、この箱舟の中で、水を通って救われたのです。」（Ⅰペテロ 3:20）

ペテロは、ノアの時代の大洪水の話をキリストの言葉を通して見るなら、それは神の呼びかけに応答した八人が、「**水を通って救われた**」話であることが分かるとした。つまり、それは「死人」が「生きる者」になった話であり、「死」から「いのち」に移された話であったということである。というのも、キリストは、「**死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです**」（ヨハネ 5:25）と言い、その者は、「**死からいのちに移っているのです**」（ヨハネ 5:24）と言われたからである。それでペテロは、それは「**水を通って救われた**」話であるとし、その続きで、「**今あなたがたを救うバプテスマをあらかじめ示した型**」（Ⅰペテロ 3:21）であったと述べた。それは、「**罪には罰を示した型**」であったとは言わなかったのである。

このように、「人間的な標準」は「**罪には罰**」なので、それを眼鏡にしてノアの時代の大洪水の話も見ると、それは「**罪には罰を示した型**」になってしまう。だが、「人間的な標準」の眼鏡を外し、キリストの言葉を眼鏡にして大洪水の話を見るなら、それは、「**今あなたがたを救うバプテスマをあらかじめ示した型**」となり、「**罪には罰**」ではなく、神の「**あわれみ**」の話になるのである。そこで、聖書は次のように警告する。

> 「ですから、私たちは今後、人間的な標準で人を知ろうとはしません。かつては人間的な標準でキリストを知っていたとしても、今はもうそのような知り方はしません。」（Ⅱコリント 5:16）

この警告に従ってノアの時代の大洪水の話を読めば、それは「**罪には罰**」ではなく、神の「**あわれみ**」の話であることはすぐに分かるが、ここではあえて原文の意味を深く知ることで、それは神の「**あわれみ**」であったことを説明してきた。それは、「人間的な標準」にどれだけ人が惑わされているかを知ってもらうためであった。では、大洪水以外の話はどうなるのだろう。

❖ 大洪水以外の話は？

ノアの時代の大洪水での「神の怒り」は、人への「否定」の「否定」であり、それは人への「肯定」であることが分かったが、旧約聖書には他にも神が人の罪を見て怒り、罰を与えているかのように読める箇所は多々ある。しかし、大洪水の話は「罪には罰」ではなく神の「あわれみ」であった以上、他の箇所はみな右に倣えとなる。それゆえ、いちいち取り上げるまでもない。「神の怒り」はどれも、結論は「罪には罰」ではなく、神が人への「否定」を「否定」することであって、それは人に対する神の「肯定」である。そもそも神は人を背負っておられるので、「わたしは背負う」（イザヤ 46:4）、すなわち人は神の部分なので、「私たちはキリストのからだの部分だからです」（エペソ 5:30）、「神の怒り」は人を苦しめる「否定」に向かうのであって、人に向かうのではない。それはあくまでも、人を助けるためである。

一体誰が、自分の子が病気で苦しんでいるのを見たとき、自分の子に怒りを覚えるというのか。怒りを覚える先は、我が子を苦しめている病気に対してである。神も、全く同じである。神の目には、人を苦しめている罪は病気なので、人の罪を見たなら何としても助けようと、「神の怒り」は罪という病気に向かうのである。それでイエスは、「医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです」（マルコ 2:17）と言われた。このことが分かれば、例えば次のような御言葉の意味も正しく知ることができる。

> 「第二の、別の御使いが続いてやって来て、言った。「大バビロンは倒れた。倒れた。（神の）激しい御怒りを引き起こすその不品行のぶどう酒を、すべての国々の民に飲ませた者。」また、第三の、別の御使いも、彼らに続いてやって来て、大声で言った。「もし、だれでも、獣とその像を拝み、自分の額か手かに刻印を受けるなら、そのような者は、神の怒りの杯に混ぜ物なしに注がれた神の怒りのぶどう酒を飲む。また、聖なる御使いたちと小羊との前で、火と硫黄とで苦しめられる。」（黙示録 14:8-10）※（　）は筆者が意味を補足

神に於いて、「激しい御怒りを引き起こすその不品行のぶどう酒」とは、人に罪を犯させる「死」の運動のことであり、「死のとげは罪であり」（Ⅰコリント 15:56）、それを人に飲ませたのは、すなわち「死」を持ち込んだのは「悪魔」なので、「悪魔」を「大バビロン」と呼び、「大バビロンは倒れた」と言うことで、神が「悪魔」に勝利したことを綴っている。つまり、「激しい御怒りを引き起こすその不品行のぶどう酒」とは、人を「死に至らせるぶどう酒」であり、それを略して後半では、「神の怒りのぶどう

酒」と言い換えている。全ての人はそれを飲まされたので、この「死」から救われるには、神の呼びかけに応答する必要がある。だが、応答を拒み偶像礼拝をし続ければ滅びるしかないので、拒むことを「神の怒りのぶどう酒」を飲むと言い、滅びるしかないことを「火と硫黄とで苦しめられる」と、どちらも比喩で表現している。つまり、これは神が「罰」を下すということでは決してない。これはただ、「神の怒り」は人を「否定」する「死」に向かうことを教えている。

尚、この「激しい御怒りを引き起こす」の箇所を、聖書協会共同訳は、「情欲を招く」と訳している。これは「テュモス」[θυμός]の訳であり、それは「激しい感情の爆発」を意味する。ところが原文では、「テュモス」の主体は誰であるかが明白でない。そのため、「神」を主体にも、「人」を主体にも解せるので、新改訳は「神」を主体に、聖書協会共同訳は「人」を主体に解して訳している。だが、文脈で読むなら続きに「神の怒りのぶどう酒」とあるので、明らかに「激しい感情の爆発」の主体は「神」を指している。さらに、「激しい感情の爆発」が起きた理由も、「大バビロン」が「不品行のぶどう酒」を、すなわち人に罪を犯させる「死」を、「すべての国々の民に飲ませた」からだと書かれている以上、「神の怒りのぶどう酒」とは、「**死に至らせるぶどう酒**」を意味する。それは、「**罰のぶどう酒**」では決してない。神が「罰」を下す相手は、すなわち裁く相手は、あくまでも「不品行のぶどう酒」を飲ませ、「この世の支配者」となった「大バビロン」である。ゆえに、「大バビロンは倒れた。倒れた」と書かれている。これについては、すでにイエスが、「また裁きについてとは、この世の支配者が裁かれたことである」（ヨハネ 16:11　聖書協会共同訳）と言われている。すなわち、「神の子が現れたのは、悪魔のしわざを打ちこわすため」（Ⅰヨハネ 3:8）であり、悪魔が「大バビロン」である。

このように、大洪水以外の話も、聖書に書かれている「神の怒り」の中身は人を「否定」する「悪」に対してであり、それは人に対する「肯定」である。ここでは「神の怒り」という視点から「神の福音」を眺めてきたが、それは『福音の回復』第一巻で見た「神の福音」の真実と全く同じである。しかし、それでも人は、神は人の罪を見て怒り、人に「罰」を与えると思ってしまう。なぜなら、この世界では「罰」は罪を犯すことへの抑止になるからである。そのため、神も人が悪の道に進まないように「罰」を与えると思ってしまう。そこで、「罰」は本当に必要なのかも論じておきたい。

－「罰」は必要なのか－

本書『福音の回復』第二巻では、第一巻で述べた「神の福音」の真実を別の視点から確認している。福音の真実は、人への「否定」を「否定」することだったので、その福音を、「**神の愛**」の中に留まるという視点、「**神の裁き**」という視点、「**神の怒り**」という視点から確認してきた。どの視点も第一巻で述べたのと同じように、人を「否定」するものを神が「否定」するという話であった。要するに、神は人を苦しめるものを取り除くのである。したがって、そこには「**罪には罰**」という考えはない。あるのは人をありのままで受容する、「**罪にはあわれみ**」である。そもそも人は「死人」であって、そのままでは滅びるので罰を与えても意味がない。

しかし、人には「**罪には罰**」という標準があるので、神も人と同じように、「**罪には罰**」を以て人を裁くと思ってしまう。というのも、「罰」は「罪の行為」に対しては一定の抑止力を発揮するからである。そのため、神も人を「罪の行為」から贖い出すために、「**罪には罰**」という対応をされると思ってしまう。そのことを示した代表的な話が、ノアの時代の大洪水だと考える。また、モーセの時代も、大部分は罪を犯したので荒野で滅ぼされたが、それも「**罪には罰**」であったと考える。神も人と同じように、罪には「罰」を以て「罪の行為」を抑止されると考える。そこで聖書を調べてみると、モーセの時の話は、確かに「罪の行為」を抑止するためであったことが書かれている。

> 「にもかかわらず、彼らの大部分は神のみこころにかなわず、荒野で滅ぼされました。これらのことが起こったのは、私たちへの戒めのためです。それは、彼らがむさぼったように私たちが悪をむさぼることのないためです。」
>
> （Ⅰコリント 10:5-6）

この御言葉を読む限り、神も人の「罪の行為」を抑止するために、「**罪には罰**」という手段を執られることを認めなければならない。だが、それはあくまでも「罪の行為」という「否定」を抑止するためであって、「罪」を取り除くためではない。「罪の行為」と「罪」とは、別である。ゆえに、「罪の行為」を抑えるには「**罪には罰**」が効果を発揮しても、「罪」に対しては全く効果がない。「罪」に対しては「**罪にはあわれみ**」が、すなわち「赦しの恵み」が効果を発揮する。ここではその話をする。題して、「罪」を取り除くのに「罰」は必要なのか、である。この手の誤解は、「罪」の理解に根差すので、「罪」についての話から始めよう。

❖ 「罪」について

イエスは、「その方が来れば、罪について、義について、また、裁きについて、世の誤りを明らかにする」（ヨハネ 16:8　新共同訳）と言い、人が誤った理解をする筆頭に、「罪」を挙げられた。さらにイエスは、「罪についてとは、彼らがわたしを信じないこと」（ヨハネ 16:9　新共同訳）と言われた。「わたしを信じない」とは、神を「信じない」ということであり、神と「一つ」になることを拒むということである。

では、なぜ神と「一つ」になることを拒むことが罪かというと、神は三位一体の神であり、神は互いに「一つ」となる運動を展開されているからである。「それは、父よ、あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにいるように、彼らがみな一つとなるためです。また、彼らもわたしたちにおるようになるためです」（ヨハネ 17:21）。よって、神を「信じないこと」は、神が展開する「一つ」となる運動に逆らうことなので「罪」となる。それは、心を神に向けられない状態であって、神と「分離」していることを意味する。そこで、「罪」を言い表す場合、新約聖書では「ハマルティア」[ἁμαρτία]が主に使われている。それは「的が外れている」ことを言い表す言葉で、それを使えば、的である神と「分離」していることを言い表せるからである。

このように、神と「分離」した「**状態**」が「罪」（ハマルティア）であり、「**行為**」が「罪」なのではない。そして、神と「分離」した「**状態**」は聖書によれば、人に入り込んだ「死」によって生まれた。「死のとげは罪であり」（Ⅰコリント 15:56）。なぜなら、入り込んだ「死」は滅びに向かう「有限性」の運動を展開し、それは神が展開する「永遠性」の運動とは対峙するからである。つまり、「死」が人に入り込み、人の体は「有限性」になったことで、神を認識できなくなったのである（分離）。体による意識は、「神と異なる思い」を持つしかない事態になり、神と「一つ」になることを拒むことになった。この事態が「罪」である。ならば、「罪」と「罪の行為」の関係を見てみよう。

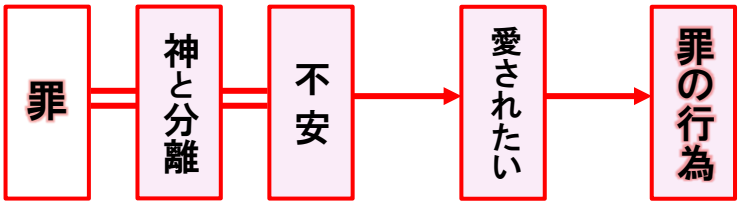
❖ 「罪」と「罪の行為」の関係

人は神の部分として造られた。「私たちはキリストのからだの部分だからです」（エペソ 5:30）。人は神の部分なので、神が持つ価値を自分の価値として持っている。当初、人はそれを意識できていたので、自分の姿を見ても恥ずかしいとは思わなかった。「人とその妻は、ふたりとも裸であったが、互いに恥ずかしいと思わなかった」（創世記 2:25）。だが、アダムが罪を犯し、「死」が入り込むと人の体は有限性になり、永遠性の神と「分離」してしまった。その結果、神の部分としての自分の価値を全く意識できなくなった。これを、心を神に向けられなくなったという。

この「状態」が「罪」であり、それは神との「分離」を引き起こさせた「死」に起因するので、「罪」の正体は「死」である。「**罪が死によって支配したように**」（ローマ5:21）。そして、神と「分離」した状態になれば、人の意識は自力で生きていくしかないとなるので、自力での食料の確保が必須となり、ここに富を巡る争いが生じるようになった（罪の行為）。また、神と「分離」した状態になれば、神の部分としての自分の価値を意識できなくなるので、自力での価値の獲得が必須となり、ここに価値の比較が起き、嫉妬や怒りが生じるようになった（罪の行為）。こうして、「死」が人に入り込み、人は神と「分離」して「罪」の状態になったことで「罪人」となり、「罪の行為」を犯すようになった。「罪の行為」を犯すから「罪人」なのではなく、「罪人」になったので、「罪の行為」を犯すのである。

この話を別の視点から述べよう。「死」という「分離」が入り込むと、すなわち「死の体」になると、人は自分の土台である神を認識できなくなるので「不安」を覚える。すると、アダムとエバが自分たちの姿を「**恥ずかしい**」と思ったように、意識は自己否定に向かう。とはいえ、土台の神はそれでも人を支え「肯定」しているので、自己否定の意識に対しては土台からの反発が起き、それが少しでも自分を着飾って愛されようとする「承認欲求」となって自己肯定に向かわせる。それは、アダムとエバがいちじくの葉で腰を覆ったように、である。しかし、自分が愛されようとする「承認欲求」は、神の戒め「**愛せよ**」に逆らう「罪の行為」にほかならない。

要するに、「罪」とは神を認識できない「分離」の「状態」であり、それは「不安」なので、この「不安」が「**愛されたい**」という願望（承認欲求）を生み、誰が愛されるかを巡って争う「罪の行為」に発展するのである。それで聖書は、カインが弟アベルと自分を比べ、どちらが愛されるかを巡って争い、アベルを殺すという「罪の行為」に至ったことを伝えている。まさしく「罪」が「罪の行為」を生じさせている。これが、「罪」と「罪の行為」の関係である。



「罪」とは、人と神を「分離」する「死」であり、「死のとげは罪であり」（Ⅰコリント15:56）、その「罪」からの力が、愛される自分を目指させ（承認欲求）、愛されるための規定となる「律法」を持たせる。「罪の力は律法です」（Ⅰコリント15:56）。すると、「律法」に違反する者を見ると「怒り」が生じるので、「愛せよ」という神の戒めに違反する。「律法は怒りを招くものであり、律法のないところには違反もありません」（ローマ4:15）。この違反が「罪の行為」であり、この原理について聖書は教えている。

> 「死のとげは罪であり、罪の力は律法です。」（Ⅰコリント15:56）

そうなると、私たちに「罪の行為」を行わせているのは自分ではなく、自分の中に住み着いた「罪」（死）ということになるので、そのことも併せて聖書は教えている。

> 「ですから、それを行っているのは、もはや私ではなく、私のうちに住みついている罪なのです。」（ローマ7:17）

このように、聖書は「罪」と「罪の行為」の関係を教えている。「罪」とは、神と人を「分離」する「死」の状態であり、この状態では自分の土台の神が認識できない。神に無条件で愛されている自分を認識できない。そのせいで、人は「不安」を覚えてしまう。この「不安」が、愛される自分を目指させ（承認欲求）、それが様々な「罪の行為」につながるのである（第一巻65頁「－「死」と「罪」との関係－」）。

さらに言えば、「体」はやがて大地に帰り、そうなると「体」に貸し出されていた神のいのちの「息」、「いのちの息を吹き込まれた」（創世記2:7）、すなわち「魂」も神に帰るので、「塵は元の大地に帰り、息はこれを与えた神に帰る」（伝道者12:7　聖書協会共同訳）、人は「体」が朽ちると「魂」も失い消滅する（第一巻83頁「「人の造り」の復習」）。この現実が「死の恐怖」となり、これも見える安心を目指す「罪の行為」に向かわせている。したがって、「死」の状態であれば「罪の行為」を犯すので、「死の体」を持つ者を「罪人」といい、「死人」という。以上が、「罪」と「罪の行為」の関係であり、聖書はそれらを区別する。

❖ 「罪」と「罪の行為」を区別する

「罪」とは、神を信じないことであり、「罪についてとは、彼らがわたしを信じないこと」（ヨハネ16:9　新共同訳）、それは心を神に向けられないことであり、神と分離し

ている状態を指す。その状態を作ったのが「死」であり、「死のとげ」が「罪」である。「死のとげは罪であり」（Ⅰコリント 15:56）。よって、「罪」の実体は「死」である。

それに対して、「罪の行為」は、神に逆らう具体的な「行い」であって「状態」ではない。両者にはつながりがあっても中身が異なるので、聖書は二つを区別する。そこで聖書は、「罪の行為」を「肉の行い」と呼んでいる。「肉の行いは明白であって、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、酩酊、遊興、そういった類のものです」（ガラテヤ 5:19-21）。また聖書は、神と分離している「状態」の「罪」を言い表すときは、主に「単数形」の「ハマルティア」［ἁμαρτία］を用い（ローマ 7:17 等）、その「状態」から生じる様々な「罪の行為」を言い表すときは、主に「複数形」の「ハマルティア」を用いている（ローマ 7:5 等）。そのようにして、聖書は二つを区別している。

具体的な例を挙げると、例えば、「バプテスマのヨハネが荒野に現れて、罪の赦しのための悔い改めのバプテスマを宣べ伝えた。そこでユダヤ全国の人々とエルサレムの全住民が彼のところへ行き、自分の罪を告白して、ヨルダン川で彼からバプテスマを受けていた」（マルコ 1:4-5）に於ける罪は、「複数形」の「ハマルティア」で、様々な「罪の行為」を指している。また、「不法を赦され、罪をおおわれた人たちは、幸いである」（ローマ 4:7）の罪も「複数形」で、様々な「罪の行為」を指している。

そして、この御言葉には、「主が罪を認めない人は幸いである」（ローマ 4:8）と続くが、この場合の罪は「単数形」の「ハマルティア」で、神と「分離」された状態を指し、そのような状態にない人は幸いだとする。他にも、「罪に対して死んだ私たち」（ローマ 6:2）での罪も「単数形」が用いられていて、それは神と「分離」された状態が終わったということであり、救われたことを言い表している。さらには、「死んでしまった者は、罪から解放されているのです」（ローマ 6:7）での罪も「単数形」で、神との「分離」を引き起こした「死」から解放されていることが述べられている。そのようにして、聖書は「罪」と「罪の行為」を区別している。

このように、「罪」は神と分離している「状態」を指し、「罪の行為」は神に逆らう「行い」を指す。そして、神の呼びかけに応答した者は神と「再結合」し、「永遠のいのち」を持っているので、その者は二度と神と分離した「状態」の「罪」には戻れない。聖書は、この事実を次のように教えている。

「だれでも神から生まれた者は、罪を犯しません。なぜなら、神の種がその人のうちにとどまっているからです。その人は神から生まれたので、罪を犯すことができないのです。」（Ⅰヨハネ 3:9）

「神から生まれた者」とは、神と「再結合」した者であり、そこには神との「分離」はもう存在しないので、「罪を犯しません」と書かれている。この「罪」は「単数形」である。また、「罪」を犯せない理由を、「神の種がその人のうちにとどまっているからです」とし、人が神と「再結合」したことが述べられている。これを「永遠のいのち」を持つという。つまり、人が「永遠のいのち」を持ったなら、もう神と人とを「分離」することはできないのである。それでイエスは、「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません」（ヨハネ 10:28）と言われた。このイエスの言葉の言い換えが、「だれでも神から生まれた者は、罪を犯しません」（Ⅰヨハネ 3:9）である。

しかし、神と「再結合」する「霊の体」を着せられてキリスト者になっても、復活までは神と「分離」した「死の体」も所有するので「不安」が継続する。そのため、「罪の行為」も継続する。そこで神は、「罪の行為」を赦すから罪を言い表すように、と言われる。それにより、神は少しでも人の「不安」を排除しようとしてくださる。

「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」（Ⅰヨハネ 1:9）

「自分の罪を言い表すなら」の罪は「複数形」で、「罪の行為」を指している。そして続きには、キリスト者であっても必ず罪を犯すことが述べられている。「もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです」（Ⅰヨハネ 1:10）。

だが、先に見た箇所では、キリスト者は絶対に罪を犯さないことが述べられていた。「だれでも神から生まれた者は、罪を犯しません」（Ⅰヨハネ 3:9）。これは矛盾しているように思えるが、「罪を犯しません」の罪は「単数形」で神との「分離」を指し、「もし、罪を犯してはいないと言うなら」の罪は、前節の「自分の罪を言い表すなら」の罪を指し、それは「複数形」で「罪の行為」を指している。それゆえ、矛盾ではない。

要するに、キリスト者は「永遠のいのち」を持っていて、「永遠のいのちを持っています」（ヨハネ 6:47　新改訳 2017）、もう神とは分離しないので、「私たちを引き離すこ

とはできません」（ローマ 8:39）、「だれでも神から生まれた者は、罪（単数形）を犯しません」（Ⅰヨハネ 3:9）とある。だが、復活までは「死の体」を持つので、「肉の行い」の罪（複数形）は犯してしまう。それで、「もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです」（Ⅰヨハネ 1:10）とある。「罪」と「罪の行為」の違いが分かれば、こうした一連の教えは全く矛盾しないことが容易に分かる。さて、以上の話から、「罪には罰」は有効かどうかが見えてくる。

❖ 「罪には罰」は有効か？

「罪の行為」を行わせているのは、自分の中の「罪」である。その「罪」の正体は「死」であり、その「死」はアダムの罪によって入り込んだ。そして、「死」は全ての人に広がり、「罪」となって人の中に住み着いた。その結果、全ての人が罪（罪の行為）を犯すようになったのである。

> 「それゆえ、ちょうど一人の人を通して罪がこの世に入り、罪を通して死が入り、まさしくそのように、全ての人たちに死が広がった（「死」が「罪」となって人の中に住み着いた）。その結果、全ての人が罪を犯すようになった。」
>
> （ローマ 5:12　私訳）※（　）は筆者が意味を補足
>
> 尚、この私訳は Joseph A. Fitzmyer による英訳を日本語にしたものである。この英訳は、新約聖書のギリシャ語辞書としては最も学術的に優れているとされるドイツ語の Walter Bauer の辞書を、Danker 監修の下で英訳された第三版の 365 頁に記載されている。詳しくは、『福音の回復』第三巻で述べる。

ここで聖書は、全ての人が「罪の行為」を犯すようになったのは、人の中に「死」が入り込んだからであって、「死」が「罪」の正体であることを端的に教えている。このことから、「罪」と「罪の行為」を取り除くには、「死」を滅ぼすしかないことが分かる。ならば、「死」を滅ぼすのに、「罪には罰」は有効だろうか。罪を犯す度に「罰」を与えれば、「死」を滅ぼすことができるのだろうか。無論、「罰」をいくら与えても、「死」を滅ぼすことなどできない。したがって、「罰」は「罪の行為」を抑止する効果はあっても、「罪の行為」を引き起こさせている「罪」（死）に対しては無力である。そうなると、「罪の行為」をいくら罰したところで「罪」はそのまま残ってしまい、そこからは別の形の「罪の行為」が芽を出す。それが「嫉妬」であり、「怒り」である。

例えば、律法学者やパリサイ人たちは、自らに課した「罪には罰」によって、彼らの「罪の行為」は見事に抑止され、その外側は実に美しいものであった。だが、彼らはイ

エスに対し、密かに「嫉妬」し、「怒り」、ついには殺害に至ったのである。この出来事は、「**罪には罰**」は見た目の「罪の行為」しか抑止できないことを証ししている。そこでイエスは、律法学者やパリサイ人のことを、次のように表現されたのであった。

> 「わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは白く塗った墓のようなものです。墓はその外側は美しく見えても、内側は、死人の骨や、あらゆる汚れたものがいっぱいです。」（マタイ 23:27）

ここでイエスは、彼らの心は神に向かず、「**あらゆる汚れたものがいっぱい**」だと言われた。このイエスの言葉が、「罰」は見た目の「罪の行為」を抑止するだけで、「罪」には全くの無力であることを証ししている。そもそも「罪」の正体は、神との「分離」をもたらした「死」なので、その「罪」を取り除くには神と「再結合」するしかない。それは、神と人との距離を縮めるということである。しかし、神が「罰」を与えるとなれば、人は神を恐れ、神からますます遠ざかってしまうので、「**罪には罰**」は、「罪」（分離）に対しては有効ではない。

このように、「**罪には罰**」は「罪の行為」には有効でも、「罪」（分離）に対しては「罰」は有効ではない。そこで、「罪」（分離）に対して神がなさった処置は、「**罪には罰**」ではなく、「**罪にはあわれみ**」であった。

❖ 「罪にはあわれみ」

人として来られた神は、「放蕩息子の譬え」（ルカ 15:11-32）を話された。それは、放蕩息子が罪を罰せられる話ではなく、罪が無条件で赦された話であった。実際、人として来られた神は、人の罪を裁くことなく赦された。こうして神は、「**罪には罰**」ではなく、一貫して「**罪にはあわれみ**」を示された。その神の思いが、人として来られた神、キリスト・イエスの次の言葉に集約されている。

> 「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（マタイ 11:28）

「**疲れた人**」、「**重荷を負っている人**」とは誰だろう。それは、自分を「否定」する運動に、自分が押しつぶされていることを自覚している人である。そして、自分を「否定」する運動が「**罪**」（死）であるので、「**疲れた人、重荷を負っている人**」とは、罪（死）から抜け出せない人を指している。その人に対して、神は、「**わたしがあなたがたを休**

ませてあげます」と言われるのである。これは、「罪（死）を赦すから（投げ捨てるから）、この御手に掴まりなさい」ということであり、神は人にそう呼びかけることで神との「再結合」を図り、人との距離を縮めようとされるのである。

こうして、キリスト・イエスは、「罪にはあわれみ」を実践された。そして、「わたしは、世を裁くためではなく、世を救うために来たからである」（ヨハネ 12:47　新共同訳）と言われたのである。これを「赦し恵み」といい、その恵みは、キリスト・イエスに於いて、「永遠の昔に与えられたもの」であったが、それが今、私たちの救い主キリスト・イエスの現れによって明らかにされた、ということである。

> 「この恵みは、キリスト・イエスにおいて、私たちに永遠の昔に与えられたものであって、それが今、私たちの救い主キリスト・イエスの現れによって明らかにされたのです。」（Ⅱテモテ 1:9-10）

つまり、神は「霊」なので、神が人に貸し出された神の「いのち」の「霊」である「魂」を介し（創世記 2:7）、いつの時代の人にも、「罪（死）を赦すから（投げ捨てるから）、この御手に掴まりなさい」と呼びかけ、その呼びかけに応答する者を救ってこられたということである。そのようにして、神との「再結合」を実現し、神との「分離」である「罪」（死）から人を贖い出してこられた。この恵みが「神の福音」であり、それは永遠の昔から与えられていたのであって、それが今、「私たちの救い主キリスト・イエスの現れによって明らかにされた」とある。

確かに、神はアダムとエバに対し、「あなたは、どこにいるのか」（創世記 3:9）と呼びかけ、彼らはその呼びかけに応答したので救われた。それゆえ、神は救われた証しに、彼らに皮の衣を着せられたのであった。「神である【主】は、アダムとその妻のために、皮の衣を作り、彼らに着せてくださった」（創世記 3:21）（第一巻 278 頁「－「第一ステージ」の検証－」）。

このように、神は、「罪にはあわれみ」の恵みを武器に、人の中に住み着いた「罪」（神との分離「死」）を取り除いていかれるのである（再結合）。「罰」を以て、「罪」（死）を取り除くわけでは決してない。ゆえに、神の呼びかけに応答し、神が差し出された御手に掴まる者は、神からの恵みによって、まさしく「罪」（死）からは解放された中に入れられる。「死」から「いのち」に移される。「死からいのちに移っているのです」

(ヨハネ 5:24)。移った者をキリスト者と呼ぶ。ならば、キリスト者はもう「罪の行為」をしないのだろうか。そうはいかない。それでも「罪の行為」は続く。

❖ それでも「罪の行為」は続く

神の呼びかけに応答した者は、朽ちない「霊の体」が着せられ、「永遠のいのち」を持つ。これを神との「再結合」という。それは、神と「分離」した状態、すなわち「罪」(単数形)に対して死んだということである。「罪(単数形)に対して死んだ私たち」(ローマ 6:2)。これが『福音の回復』第一巻で見た、福音の「第一ステージ」であった。そして、「霊の体」は「神の国」に属するため、キリストについての御言葉を聞くと、その事実を「霊の体」で確認でき、キリスト・イエスが信じられるようになる。「信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです」(ローマ 10:17)。すなわち、「永遠のいのち」が与えられると、イエス・キリストを知るようになる。「その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです」(ヨハネ 17:3)。

しかし、「霊の体」を着せられても、天国に行くまでは「肉の体」も持つので、「肉の体」の情報を受け取る「顕在意識」では、依然として神を認識できない。これは、「肉の体」に於いては、未だに神と「分離」した状態にあるということであり、「罪」の状態にあることを意味する。要するに、「肉の体」では神を認識できないので、そのことによる「不安」は健在である。そのため、見える安心をむさぼる「罪の行為」が続いてしまう。こうして、「この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです」(ローマ 7:25)となる。そうであっても、「肉の体」には有効期限があるので、最後は「霊の体」だけとなって「不安」は解消し、「罪の行為」もしなくなる。

では、「肉の体」の有効期限が終わるまで、神は何もされないのだろうか。無論、その間も神は何としても人を助けようとされる。それは、神に無条件で愛されている自分を、「顕在意識」でも認識できるようにすることである。認識できるようになれば「不安」も減少し、「罪の行為」も減少するからである。この助けが、『福音の回復』第一巻で見た福音の「第二ステージ」、「第三ステージ」になる。では、神に無条件で愛されている自分を認識できるように、神は何をなさるのだろう。

❖ 神は何をなさる?

人の中に神と人を「分離」する「死」が入り込んで以来、正確に言うと、神を認識できない「死の体」になって以来、人は、神に無条件で愛されている自分を認識できな

くなった。この状態が「罪」であり、その状態が「不安」を生じさせている。人はこの「不安」から、愛される自分を目指すようになった。そこでは互いを比べるので、嫉妬や怒りが起き、人を愛せない「罪の行為」を犯すしかなかった。さらには、「死の体」になったことで「死の恐怖」に襲われ、そこから生きたいという願望が生じ、生きるのに必要な金銭に心が向くようになった。そのせいで、少しでも多くの金銭を獲得することを巡って「罪の行為」を犯すようになった。また、多くの金銭を獲得することでも、愛されようとした。全ては自分が愛されるためにするので、それは神の戒め「**愛せよ**」に逆らう「罪の行為」であった。したがって、「罪の行為」を少しでも阻止するには、神に無条件で愛されている自分を、加えて「永遠のいのち」を持っている自分を認識できるようにするしかない。ならば、具体的に神は何をなさるのだろう。

その答えは、イソップ童話の『北風と太陽』に見ることができる。それは、旅人が着ていた外套を、北風と太陽のどちらが脱がせることができるかという話である。それによると、北風は強い風を使って、力ずくで脱がせようとしたが失敗し、旅人は前にも増して外套で身を守るようになった。他方、太陽は暖かい光を一面に注ぎ、彼をそのままで包み込んだところ、旅人は外套を脱いだという話である。

神がなさることは、この太陽と全く同じであり、罪人に愛を注ぎ、彼をそのままで包み込まれる。具体的には、罪人が意識している「罪の行為」を徹底的に赦し、無条件で人を愛される。そうすれば、固く閉ざしていた罪人の心は神に向くようになり、神に無条件で愛されている自分を認識できるようになっていく。それに伴い「不安」や「死の恐怖」は弱まり、人を愛せない「罪の行為」も弱まっていく。つまり、多くの「罪の行為」が赦されれば、多く愛せるようになるのである。そこでイエスは、この単純な仕組みを教えるために、次のような話をされた。

> 「ある金貸しから、ふたりの者が金を借りていた。ひとりは五百デナリ、ほかのひとりは五十デナリ借りていた。彼らは返すことができなかったので、金貸しはふたりとも赦してやった。では、ふたりのうちどちらがよけいに金貸しを愛するようになるでしょうか。」（ルカ 7:41-42）

イエスは、ふたりの者のどちらがよけいに金貸しを愛するようになるかと問い、多くの借金を赦された方が多く愛するようになるというシモン・ペテロの判断を正しいとされた。こうしてイエスは、「**愛せよ**」に逆らう「罪の行為」が弱まり、再び「**愛せよ**」が実行できるようになるには、多くの「罪の行為」が赦される体験をすればよいこと

を教えられたのであった。実際、多く赦される体験をし、多く愛せるようになった女性がイエスのもとに来たので、イエスは次のように言われた。

> 「だから、言っておく。この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさで分かる。赦されることの少ない者は、愛することも少ない。」
> （ルカ 7:47　新共同訳）

そしてイエスは、神を多く愛する女性に、「**あなたの罪は赦されています**」（ルカ 7:48）と言われた。つまり、人は多くの罪（罪の行為）を赦されることで、ますます神に愛されている自分を知るようになり、ますます神との距離が縮まっていき、人と神を愛せるようになっていくということである。

このように、「**神は何をなさる？**」のかと言えば、それは徹底して罪を赦されることである。「**だれかが、わたしの言うことを聞いてそれを守らなくても、わたしはその人をさばきません**」（ヨハネ 12:47）。その神の愛が、「死の体」による神の愛を認識できない「不安」と、「死の体」による「死の恐怖」を弱体化させ、「罪の行為」を減少させる。それゆえ、「罪の行為」に苦しむなら、それを神に言い表せばよい。そうすれば、神は真実な方なので、告白した「罪の行為」を徹底して赦してくださる。

> 「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」（Ⅰヨハネ 1:9）

「罪の行為」が赦されたことは、心に「平安」が来ることで知ることができる。この作業が繰り返されることで、「再結合」によって与えられた「永遠のいのち」が、「**わたしは彼らに永遠のいのちを与えます**」（ヨハネ 10:28）、豊かにされていく。「**わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです**」（ヨハネ 10:10）。それは、神との距離が縮まるということであり、こびり付いていた「否定」の泥が洗い流されていき、自分の「真実な姿」を知るようになるということである。以上の話から、「罪」に対する「罰」は不要であるというのが結論になる。

❖ 「罰」は不要である

「罪」とは、神と分離した状態である。それは、神の愛を認識できない「不安」であり、滅びる体への「死の恐怖」である。その「不安」と「死の恐怖」から、人は見える安

心を求め「罪の行為」に向かってしまう。そのため、「罪の行為」を取り除くのに有効なのは、人への神の愛と、死への勝利を明らかにしたキリストの十字架しかない。

> 「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」（ローマ 5:8）

これを「全き愛」といい、それだけが「不安」と「死の恐怖」を、すなわち「**恐れ**」を締め出すことができる。「全き愛は恐れを締め出します」（Ⅰヨハネ 4:18）。締め出せば、「罪の行為」を弱体化できる。そうである以上、「罪」を取り除くのに「罰」は不要である。「罰」は「罪の行為」を一時的に抑止するのに役立つだけで、「不安」と「死の恐怖」を生む「罪」の状態に対しては無力である。これが結論である。

とはいえ、「罪」の根本治療が間に合わず、人が危険にさらされる「罪の行為」に走った時は、神も「罰」をちらつかせてこられた。だが、それはあくまでも緊急を要する処置であり、犯した「罪の行為」への代償を支払わせることが目的ではなかった。それゆえ、「罰」をちらつかせた際は、それを思い直すことも伝えておられた。

> 「彼らがそれを聞いて（罰があることを聞いて）、それぞれ悪の道から立ち返るかもしれない。そうすれば、わたしは、彼らの悪い行いのために彼らに下そうと考えていたわざわいを（罰を）思い直そう。」（エレミヤ 26:3）
>
> ※（　）は筆者が意味を補足

ここで神は、人が「罪の行為」に走っても、その悪の道から立ち返るのであれば、「罰」を思い直すと言われた。すなわち、「罰」は「罪の行為」への抑止が目的であって、悪への代償ではないということである。イエスも、緊急の対処を必要とする「罪の行為」に対しては、「それでもなお、言うことを聞き入れようとしないなら、教会に告げなさい。教会の言うことさえも聞こうとしないなら、彼を異邦人か取税人のように扱いなさい」（マタイ 18:17）と言われた。「取税人のように扱いなさい」とは除名せよということであり、イエスも「罰」をちらつかせることで教会に危険が及ぶ「罪の行為」を抑止しようとされた。そして、聖書は除名という処罰を受けた者が神に立ち返ったなら、「その人を赦し、慰めてあげなさい」（Ⅱコリント 2:7）とも教えている。聖書は、何であれ罪人が神に立ち返ったのであれば、その者を無条件で赦して受け入れるように教え、そこにはもはや「罰」は不要であることを教えている。

このことから、なぜ聖書に「**罪には罰**」という話があるのか、それは明白である。それは、「罪の行為」を抑止するためであって、「罪の行為」に伴う苦しみから人を助けるためである。そういう意味では、それはもはや「罰」ではなく、それは人を思う神の「愛」でしかない。ゆえに聖書は、「**主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである**」（ヘブル 12:6）と教えている。となると、神が人に災いをもたらすことは決してないということになるので、神はそのことを最初の「永遠の契約」とし、ノアに示されたのであった。

> 「すべて肉なるものは、もはや大洪水の水では断ち切られない。もはや大洪水が地を滅ぼすようなことはない。」（創世記 9:11）

そして、神はノアに示した「永遠の契約」の意味を、イザヤに語った「永遠の契約」の中で解説しておられる。それは、人に対しては怒らず、責めないことであると。なぜなら、人への神の愛は変わることがないからだと、解説しておられる。

> 「わたしは、ノアの洪水をもう地上に送らないと誓ったが、そのように、あなたを怒らず、あなたを責めないとわたしは誓う。たとい山々が移り、丘が動いても、わたしの変わらぬ愛はあなたから移らず、わたしの平和の契約は動かない」とあなたをあわれむ【主】は仰せられる。」（イザヤ 54:9-10）

神は他にも、「**わたしは彼らの咎を赦し、彼らの罪を二度と思い出さないからだ**」（エレミヤ 31:34）とも言われた。それが神の本音なので、神は、「**剣は、その町々で荒れ狂い、そのかんぬきを絶ち滅ぼし、彼らのはかりごとを食い尽くす**」（ホセア 11:6）と、厳しいことを語られた際も、それは決して断罪する意味で言ったわけではなく、罪で苦しむ人を何としても助けたいという、「**あわれみ**」から発したことを告げられた。

> 「エフライムよ。わたしはどうしてあなたを引き渡すことができようか。イスラエルよ。どうしてあなたを見捨てることができようか。（中略）わたしの心はわたしのうちで沸き返り、わたしはあわれみで胸が熱くなっている。」
>
> （ホセア 11:8）

このように、「罪」に対して「罰」は不要であり、必要なのは神の「**あわれみ**」である。それは、神に愛されている自分を認識させる「赦しの恵み」であり、それだけが「罪」

に対しては有効に働く。それゆえ、キリストは十字架に架かられた。ただし、新改訳聖書第三版には、イエスの語られた言葉に、あたかも罪には「罰」があるかのように書かれている箇所があるので、その箇所の意味も見ておこう。

❖ イエスの語られた言葉

イエスは弟子たちに、「神の国」が来たという良き知らせ（福音）を宣べ伝えさせた。その良き知らせを拒否する町では大通りに出て行って、「私たちは足についたこの町のちりも、あなたがたにぬぐい捨てて行きます。しかし、神の国が近づいたことは承知していなさい」（ルカ 10:11）と言うように指示し、続けてこう言われた。

> 「あなたがたに言うが、その日には、その町よりもソドムのほうがまだ罰が軽いのです。」（ルカ 10:12）

ここで「罰が軽い」と訳されている箇所の原文は「アネクトス」[ἀνεκτός]で、それは「耐えられる」という意味であって、「罰」という意味は全くない。ここに書かれている原文の意味は、「その町よりもソドムのほうがまだ耐えやすいのです」である。岩波訳や田川訳も、原文どおりの意味に訳している。つまり、ここでイエスが言いたかったことは、神の呼びかけに応答しなければ消滅するので、すなわち「土に帰る」（創世記 3:19）ので（第一巻 85 頁「人の「体」の現状」）、その苦しみよりも、ソドムがかつて味わった天変地異の苦しみの方が、まだ「耐えやすい」ということである。大事なことは、イエスはここで、神の呼びかけを信じない罪に対して「罰」という言葉は使用していないということである。人は生まれながらに「死人」であり、信じない者はすでに裁かれていて、「信じない者は既に裁かれている」（ヨハネ 3:18　新共同訳）、すなわち「いのち」から分けられていて、滅びるしかない者であることを伝えたにすぎない。他にも「罰が軽い」と訳されている箇所があるが（ルカ 10:14、マタイ 10:15、11:22、11:24）、それらも「アネクトス」の訳であって、それは「罰」という意味ではない。また、イエスは、神の呼びかけに応答しなければ消滅するしかないことの恐ろしさを、譬えでも話された。

> 「しもべの主人は、思いがけない日の思わぬ時間に帰って来ます。そして、彼をきびしく罰して、不忠実な者どもと同じめに会わせるに違いありません。」
> （ルカ 12:46）

ここで「きびしく罰し」と訳されている箇所の原文は「ディコトメオー」[διχοτομέω]で、それは「厳罰に処する」という意味で、「罰」という意味が含まれる。しかし、これは「罪には罰」ということではなく、神の呼びかけに応答しなければ消滅するしかないことの恐ろしさを、イエスが人の目線で話された譬えである。人は生まれながらに「死人」であり、信じない者はすでに裁かれていて、「信じない者は既に裁かれている」(ヨハネ 3:18　新共同訳)、すなわち「いのち」から分けられていて、滅びるしかない者であることを伝えるための譬えにすぎない。他に、マタイ 24:51 にも「きびしく罰し」と訳されている箇所があるが、それも「ディコトメオー」の訳であり、これと同じ譬えでの話である。

また、イエスは、神の呼びかけに応答しなければ消滅するしかないことの恐ろしさを、次のような比喩でも話された。

> 「これは、書かれているすべてのことが成就する報復の日だからです。」
> (ルカ 21:22)

ここで「報復」と訳されている箇所の原文は「エクディケーシス」[ἐκδίκησις]で、「報復、処罰」という意味で、「罰」という意味が含まれる。これはイエスが、神の呼びかけに応答しなければ消滅するしかないことの恐ろしさを比喩の形式を使い、人の目線で話されたものである。罪に対して「罰」があるという話ではない。人は生まれながらに「死人」であって、それは滅びるしかない状態なので、信じない者はすでに裁かれていて、「信じない者は既に裁かれている」(ヨハネ 3:18　新共同訳)、すなわち「いのち」から分けられていて、滅びるしかない者であることを伝えた比喩にすぎない。また、イエスは、次のような譬えも話された。

> 「こうして、この人たちは永遠の刑罰に入り、正しい人たちは永遠のいのちに入るのです。」(マタイ 25:46)

ここで「刑罰」と訳されている箇所の原文は「コラシス」[κόλασις]で、これは本人の側から見た苦しみを表す言葉であり、第三者の側から見た苦しみではない。自らがした選択によって、自らが招いたと自分で意識できる苦しみを表している。例えば、自らの保身のために嘘をつき、その嘘で苦しみを味わったとしよう。その時、嘘をついた本人はこう思う。「この苦しみは自らが招いた刑罰だ」と。あるいは、「自業自得だ」と。このように、「コラシス」は自らがしたことに対して自らが意識する苦しみを

表す。「コラシス」が自らの招く苦しみを表すことは、このギリシャ語が使われているもう一箇所の用例を見ればよく分かる。

> 「愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。なぜなら恐れには刑罰が伴っているからです。」（Ⅰヨハネ 4:18）

ここで「刑罰」と訳されている箇所も「コラシス」で、聖書にはこの二箇所しかない。この場合の「コラシス」は、明らかに自らの「恐れ」に伴う苦しみを指している。この箇所の「コラシス」を見れば、それは第三者が「報い」として与える苦しみでないことがよく分かる。すなわち、イエスが言われた、永遠の「刑罰」とは、神の罰ではないということである。それは、人が自らの意志で選択した苦しみである。神の呼びかけに応答しなかったという、自らの意志で選択した苦しみであり、それは永遠の消滅をもたらすので、永遠の「刑罰」（マタイ 25:46）と、イエスは言われたのである。それは、信じない者はすでに裁かれていて、「信じない者は既に裁かれている」（ヨハネ 3:18　新共同訳）、すなわち「いのち」から分けられていて、滅びるしかないことが永遠に確定するという現実を突きつけたものである。

他にも、イエスの言われた言葉に、「人一倍きびしい罰を受けるのです」と訳された箇所があるが（マルコ 12:40、ルカ 20:47）、ここで「罰」と訳されているのは「クリマ」［κρίμα］で、意味は「決定、判決、裁き」であり、「罰を受ける」という意味ではない。律法学者たちは神の律法を知る以上、誰よりも自分の罪に気づく機会があり、誰よりも神の呼びかけに応答する機会があったにもかかわらず、そうしなかったのだから言い訳はできないということである。これに関連し、イエスは律法学者に対しては、「ゲヘナの刑罰をどうしてのがれることができよう」（マタイ 23:33）とも言われた。ここで「刑罰」と訳されているのは「クリシス」［κρίσις］で、意味は「裁き、審判」であり、この言葉は元来「分ける」を意味する「クリノー」［κρίνω］から生まれた名詞である。それゆえ、「罰」を言い表しているわけではない。

ならば、ギリシャ語には、純粋に「罰」を言い表す言葉はないのかとなるが、実はある。例えば、「ティモーリア」［τιμωρία］という言葉を使えばよい。だがイエスは、この言葉を一度も使用していない。ただし、イエスの言葉ではないがヘブル書では一度使われている。「まして、神の御子を踏みつけ、自分を聖なるものとした契約の血を汚れたものとみなし、恵みの御霊を侮る者は、どんなに重い処罰に値するか、考えてみ

なさい」（ヘブル 10:29）。ここでは、神の呼びかけに応答しなければ消滅することを人の目線に立ち、「重い処罰」と表現されているだけである。

このように、イエスの語られた言葉に、罪を罰すると言われた箇所は一箇所もない。逆に、イエスは次のように言われたのである。

> 「わたしの言葉を聞いて、それを守らない者がいても、わたしはその者を裁かない。わたしは、世を裁くためではなく、世を救うために来たからである。」
> （ヨハネ 12:47　新共同訳）

そして、聖書を読むときの注意は、聖書はイエス・キリストを証しする書なので、イエスが語られたが語られた言葉が憲法である、ということである。よって、聖書を読むときは、その憲法に準拠した読み方をしなければならない。そのイエスが、「世を裁くためではなく、世を救うために来た」と言われた以上、神の「罰」があるとする解釈は許されないのである（第一巻 301 頁「－聖書の読み方の基本－」）。

そもそも、人が「罰」だと思ってしまう災いの全ては、悪魔の仕業による「死」に起因するのであって、神から出たものは一つもない。過去に一度だけ、肉なるものを断ち切る、ノアの時代の大洪水があったが、あのようなことはもう決してしないことを神は断言されている。「すべて肉なるものは、もはや大洪水の水では断ち切られない」（創世記 9:11）。つまり、悪魔の仕業による「死」に伴って生じるようになった様々な災いを神は「静観」されるだけで、災いは、決して神から出た罪に対する「罰」ではないということである。神はそのことを教えるために、ヨブを襲った災いはサタン、すなわち悪魔の仕業によることを、次のような言い方で明らかにされたのであった。

> 「【主】はサタンに仰せられた。「では、彼のすべての持ち物をおまえの手に任せよう。ただ彼の身に手を伸ばしてはならない。」そこで、サタンは【主】の前から出て行った。」（ヨブ 1:12）

ここには、悪魔（サタン）の仕業による災いを、神が「静観」されることが書かれている。しかし、人は著しい不幸や苦難が起きれば、それは罪に対する神からの「罰」だと勝手に思ってしまう。だが、それは全く以て誤った思いである。

❖ 誤った思い

誰もが災難に遭うと、「罰が当たった！」と思ってしまう。人は著しい不幸や苦難に遭遇すると、それは罪に対する神からの「罰」だと考えてしまう。「罪には罰」は、紛れもなく人類共通の標準なので、そのように考える。そうしたことから、神のことを教える教師も、旧約時代から、「罪には罰」を教えてきた。例えば、旧約聖書の外典に「ソロモンの知恵」があるが、そこには次のことが書かれている。

> 「人は罪を犯すのに用いたまさに当のもので罰を受けるのだということを彼らが知るためである。」（知恵の書 11:16　聖書協会共同訳）

この世界での災いは、神による「罰」として考えられていた。何か不幸があれば、それは罪を犯したからだと考えられていた。例えば、生まれつき目が見えないという不幸を背負っていたなら、その者が罪を犯したか、その者の両親が罪を犯したからだと考えられていた。それでイエスの弟子たちは、「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか」（ヨハネ 9:2）と真面目に尋ねたのであった。だが、イエスはこの質問に、次のように答えられた。

> 「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現れるためです。」（ヨハネ 9:3）

イエスはここで、何か不幸があれば、それは罪を犯したことへの「罰」だとする考えを完全否定された。そこで思い出してほしい。イエスが言われた言葉が「憲法」であって、聖書を読む際は、その「憲法」と矛盾するような解釈をしてはならなかったことを。したがって、何かの災難に遭ったなら、それは罪深いがゆえに罰を受けたとする考えは誤りなので、目が見えない不幸に対し、「神のわざがこの人に現れるためです」と、イエスは言われたのであった。他にも、イエスは次のように言われた。

> 「そのガリラヤ人たちがそのような災難を受けたから、ほかのどのガリラヤ人よりも罪深い人たちだったとでも思うのですか。そうではない。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。また、シロアムの塔が倒れ落ちて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいるだれよりも罪深い人たちだったとでも思うのですか。そうではない。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。」（ルカ 13:2-5）

ここでもイエスは、この地上での災難を、それは罪深さによるとする考えを、「そうではない」と完全否定された。イエスはその証拠に、誰であれ「悔い改めないなら」、同じように滅びるではないかと言われた。ここでは「悔い改めないなら」と訳されているが、原文の意味は「向きを変える」であり、神の呼びかけに応答しないならということである。それは神が差し出す御手に掴まらないならということであり、その場合は滅びるしかないということである。そうである以上、「災難を受けたから、ほかのどのガリラヤ人よりも罪深い人たち」とする考えは、完全な誤りだと言われたのである。では、ここでの総括をしよう。

❖ ここでの総括

見てきたように、人が旧約聖書をどのように読み、どのように解釈しようとも、そこには「罪には罰」という神の考えは全くない。イエスの語られた言葉が「憲法」であって、全てである。そのイエスの言葉によれば、罪に対して神が「罰」を与えるという考えは、全く以て誤りである。ただ神は、「死」が入り込んだことで生じるようになった災いを「静観」し、そのことで人が目指す自力での自分の「肯定」を絶望に追い込み、人に神の「肯定」を受け取らせようとされるというのが事の真相になる。このことを、分かりやすく説明すると以下のようになる。

神が人に望まれていることは、一にも二にも、神との距離を縮めて神と「一つ」になることである。神は三位一体の神であって、互いが互いを無条件で受容し、「一つ」なので、神も人を無条件で受容し、人と「一つ」になることを目指される。よって、これを邪魔するものが「罪」であり、すなわち神と「一つ」になることを拒む運動が「罪」であり、それは神と人とを「分離」する「死」である。その「死」が悪魔の仕業で入り込んだので、「神の福音」は「死」を排除し、神と人との距離を縮める運動となった。その運動には、『北風と太陽』の童話のように「罰」ではなく、「赦しの恵み」の愛が必要なのである。そこで、キリストは人への愛を明らかにするために十字架に架かられた。「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます」(ローマ 5:8)。したがって、人の「罪」には「罰」は不要である、が結論となる（第一巻 270 頁「－神と人との距離を縮める－」)。

要するに、神が目指すのは真に「罪」（神との「分離」）の撲滅であり、それに連動して「罪の行為」を減らすことなのである。しかし、この世は神が言われる「罪」を知

らないので、「罪」ではなく、見た目の「罪の行為」の撲滅を目指す。それには「罰」が有効なので、「**罪には罰**」となる。したがって、この世ではキリスト者であろうとも「罪の行為」を犯せば責任が問われ、「罰」を受けることになる。その場合、神が私たちの罪を赦すと言われても、それとは別に、この世で暮らす限り「罰」は受けなければならない。この世の「罰」に対しては真摯に向き合い、自らの行動を改めていかなければならない。それがこの世に於いて、隣人を愛することの実際の歩みになる。

ただし、「罰」を受け、自らの行動を反省しても、心を神に向けなければ全く意味がない。大事なことは、心を神に向けることである。それで聖書は、「メタノエオー」[μετανοέω]という言葉を使う。これは「**方向を変える**」というのが原語の意味であり、心を神に向けなさいということである。しかし、これが「**悔い改めよ**」と訳され、「**反省せよ**」という意味に解されてしまう。「**反省せよ**」とは、心を「過去」に向けよということであり、それは神が意図するところではない。神は、人がいつも心を神に向けることを、すなわちうしろではなく、前のものに向かって進むことを望んでおられる。ゆえにパウロは、「**ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み**」（ピリピ 3:13）と述べている。

さて、以上の話から、そもそもの疑問が湧いてくる。それは、なぜ神は、「**神の怒り**」、「**神の裁き**」といった表現を聖書で用いることを許可されたのかである。神意を誤解されるような表現は初めから許可しなければよかったのに、と思えてしまう。無論、それは「罪の行為」を抑止するためではあったとしても、それなら「罰」をちらつかせれば十分ではなかったのか、と思えてしまう。何にせよ、「**神の怒り**」、「**神の裁き**」といった表現は、「**罪には罰**」を連想させ、神意である「**罪にはあわれみ**」を誤解させてしまう。ならば、なぜそのような表現を聖書は許可したのか。この疑問は、「絶望」には三つの段階があることを知れば容易に解ける。最後に、その話をしたい。

－「絶望」の三つの段階－

悪魔の仕業で「死」が入り込み、人の体は朽ち果てるしかない「有限性」になった。元々は朽ちることのない「永遠性」であった体が、入り込んだ「死」によって「有限性」になり、この世界も一緒に「有限性」になった。そのことで「永遠性」の神が認識できなくなり、神との「分離」が生じた。これは、人の土台の「岩」は神なので、「**神こそ、わが岩**」（詩篇 62:2）、人は神を知っているにもかかわらず、その神が見えなくなったということである。「永遠」を知っているのに、この世界では「永遠」が見えなくなったということである。そのことで人は「不安」を覚え、神が見えない自分の体に「恐れ」を覚えるようになり、人は自分の姿を「ダメな者」と思うようになった。それで、自分の姿を少しでも良く見せようと、何かで覆い隠すようになった。その最初がアダムとエバであり、彼らはいちじくの葉で腰を覆い隠すことで自分たちの姿を良く見せようとした。「**彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った**」（創世記 3:7）。それによって、「ダメな者」から脱出しようとした。

こうした生き方をすると、自分の姿を良く見せられる材料は「宝」となるので、そこでは「宝」を手に入れる争いが起きる。ところが、その「宝」は世に属しているので、それは朽ちる運命にある。これでは朽ちる運命の「否定」で自分を覆い隠すだけで、それでは自分への「否定」でしかない。しかし、人は世の「宝」を身にまとうことで自分を「肯定」できたと思い込んでいる。無論、神はこの事態を放置されない。神は神で、人を真実に「肯定」できる朽ちない「永遠性」の「宝」を、無償で提供されるのである。だが、人はその「永遠性」が見えないので拒否してしまう。

そこで、神は人に対し、人が手にした「宝」は無価値であって、それでは自分を「肯定」できないことに気づかせようとされる。具体的には、「有限性」になったことで避けられなくなった人の患難を神は「静観」し、加えて人に「律法」を突きつけ、自力で手にした「宝」は何の役にも立たないことを人が知るようにされる。このことは、人にしてみれば「絶望」に追い込まれることを意味するが、真に「絶望」することができれば、神が無償で提供する朽ちない「永遠性」の「宝」を受け取る勇気となる。それが、「神の福音」の「第三ステージ」である（第一巻 235 頁「第六章 福音の「第三ステージ」）。ただし、神が追い込まれる「絶望」には三つの段階がある。その三つの段階を見ていくと、なぜ聖書には「**神の怒り**」、「**神の裁き**」といった表現が使われているのかが分かる。では、「絶望」の「第一段階」から見てみよう。

❖ **「第一段階」**

人を「否定」する力の元締めは、人を滅ぼす「死」である。人はその「死の恐怖」から目を逸らすために、様々な「宝」を身にまとって生きている。「死の恐怖」に怯える自分を世の「宝」で覆い隠し、あたかも「**自分は大丈夫だ！**」と錯覚しながら生きている。そのせいで、人の心は神ではなく「宝」に向き、神が提供する「宝」、すなわち神による「肯定」を拒んでしまう。その「肯定」は、「死」を打ち負かす「霊の体」であり、それは神との「再結合」を意味する。さらにその「肯定」は、神との「再結合」を人が認識できるようにするために、人の罪を「**全き愛**」で赦し、「不安」と「死の恐怖」による「**恐れ**」を締め出す。「**全き愛は恐れを締め出します**」（Ⅰヨハネ 4:18）。そのようにして、「**神の愛**」は、悪魔の仕業で引き裂かれた人との関係の修復を目指す。その行程は、まさしく人への「否定」を「否定」することである。

しかし、これは「**神の愛**」が、人が苦労して手にした世の「宝」を奪い取ることを意味する。そうなると、人にとって「**神の愛**」は、まことに恐ろしいものに思えてしまい、「**神の怒り**」として目に映る。もとより、自分のことを「ダメな者」と「否定」するなら、そうした自分への「否定」を「否定」する「**神の愛**」は、自分に対する「**神の怒り**」として映ってしまう。ということは、「**神の怒り**」という表現を使えば、早く自分に「絶望」することができ、手にした「宝」を、また「ダメな者」とする自分を、神に差し出すことができるかもしれない。そうなれば、神からの「肯定」を受け取ることも可能になる。こうしたことから、神は人の感覚に合わせ、「**神の愛**」を「**神の怒り**」という表現で言い表すことを許可されたのである。

このように、「絶望」の「第一段階」は、「**神の怒り**」を恐れることである。「**神の愛**」は、人を「否定」する力を「否定」する運動を展開するので、朽ちる世の「否定」の宝で自らを「否定」する人にとってみれば、あるいは自分のことを「ダメな者」と「否定」する人にしてみれば、それを「否定」する「**神の愛**」は「**神の怒り**」として映ってしまう。だが、そのことは人を「絶望」へと追い込み、神からの「肯定」を受け取る勇気を持たせてくれる。したがって、人が「**神の怒り**」を恐れるのであれば、それは正しく「**神の愛**」に動かされているのであって、神によって正しく「絶望」に追い込まれている印である。そして、「絶望」の「第二段階」へと進む。

❖ **「第二段階」**

手にした「宝」（否定）を、「絶望」の「第一段階」で手放すことができなければ、神は人の心の奥底で、この御手に掴まるようにと、さらに大声で叫ばれる。すると、そ

の人のうちに、神の思いに逆らう罪責感が芽を出し、人は神の報復を恐れるようになる。人には「**罪には罰**」という眼鏡があるので、「**神の裁き**」を恐れるようになる。そのため、予期せぬ災いに遭遇すると「**罰が当たった！**」となり、自分の罪を神が罰したに違いない、と思うようになる。これが「絶望」の「第二段階」であり、それは人が手にした「宝」（否定）を「否定」する「**神の愛**」を、「**神の裁き**」として受け止める段階である。これは、自分を「否定」する力を「否定」する「**神の愛**」が、人のうちに働いている証しであり、そのように受け止めるのは正常な反応である。こうしたことから、神は人の感覚に合わせ、「**神の愛**」を「**神の裁き**」という表現で言い表すことを許可されたのである。

このように、「絶望」の「第二段階」は、「**神の裁き**」を恐れることである。私たちは「有限性」の「宝」にしがみつくので、それを「否定」する「**神の愛**」は、「**神の裁き**」という脅威に映ってしまう。だが、そのことは人を「絶望」へと追い込み、神からの「肯定」を受け取る勇気を持たせてくれる。したがって、人が「**神の裁き**」を恐れるのであれば、それは正しく「**神の愛**」に動かされているのであって、神によって正しく「絶望」へと追い込まれている印である。そして、「絶望」は「第三段階」へと進む。

❖ 「第三段階」

人は「**神の裁き**」を思うと、恐ろしさに耐えられなくなる。そうなると、「**神さま。こんな罪人の私をあわれんでください**」（ルカ 18:13）と赦しを乞うようになる。これが「絶望」の「第三段階」である。それは、神への無条件降伏であり、自らの罪を告白し、神に赦しを乞う段階にほかならない。すると、神は真実な方なので、その罪を赦し、罪を生じさせていた「悪」である「否定」を洗い流してくださる。

> 「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」（Ⅰヨハネ 1:9）

「絶望」の「第三段階」を別の言い方をするなら、それは「**神の裁き**」を思い、この世界での自らの可能性（宝）を放棄し、この世界の「富」で着飾った自分の姿を完全に「否定」してしまう段階である。「否定」した自分の姿に代わり、神が提供してくださった新たな自分の姿を、本当の自分の姿として受け取る段階である。それは、神と同じ姿であって、無限の「**肯定**」にほかならない。これを古い自分に死ぬという。「**罪**」に対して死に、キリストにあって生きるという。

「このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい。」（ローマ 6:11）

このように、「神の裁き」を思い、神への無条件降伏をすることが「絶望」の「第三段階」である。その段階に至らせるために、「神の怒り」、「神の裁き」という表現を神は許可されたのである。それは全て、人々を真に「絶望」させ、神の「肯定」を受け取らせるためである。そして神は、何度でも神の「肯定」を受け取らせるために、何度でも人を「絶望」に追い込まれる。そこで受け取る最初の神の「肯定」が、「霊の体」を着せる神の義であり、次の神の「肯定」が、不信仰を洗い流す神の義である。そのようにして、神が造られた人の「真実な姿」を、人が信じられるようにしてくださる。

しかし、「絶望」に追い込まれる「神の裁き」を思っても、なおも自らを「否定」し続け、そこから出ない人たちがいる。そして、最後の「否定」を選択する人たちもいる。それは、自らの命を断つという行為にほかならない。それでも一度は潜在意識に於いて「絶望」し、神の呼びかけに応答していれば「霊の体」を着せてもらっているので、自らの命を断っても神によって天に引き上げられる。ただし、ここで注意がいるのは、人を「絶望」へと追い込んでいるのは神ではないということである。

❖ 「絶望」へと追い込んでいるのは神ではない

ここでは「神の愛」を分かりやすく説明するために、神は人を「絶望」に追い込まれるという言い方をしたが、正確には、人を「絶望」へと追い込んでいるのは神ではない。それは、悪魔の仕業によって入り込んだ「死」であり、神はただ、救いの御手を差し伸べることで、人が「絶望」へと追い込まれていっていることに気づかせようとしているにすぎない。つまり、「死」によって生じるようになった「闇」の有様を、ただ神は「光」で照らしているだけである。「光」がなければ人は「闇」に気づけないように、神は「光」を以て、「闇」が人を滅びの「絶望」に向かわせていることに気づかせているだけである。神のなさっていることは、「闇」の中に「光」を輝かせることだけであって、神が人を「絶望」に追い込んでいるわけではない。

「この方にはいのちがあった。このいのちは人の光であった。光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった。」（ヨハネ 1:4-5　新改訳 2017）

したがって、自らの命を断つような選択をしてしまうのは「闇」の力によるのであって、神によるのではない。神は、「死」という「闇」に対し、救いの「光」を輝かせて

いるだけである。「光」によって、「闇」に覆われている姿を照らし出しているにすぎない。つまり、「闇」という「絶望」に追い込まれている人の姿を「光」によって明らかにすることで、神は人を救おうとされているというのが真実である。

このように、「神の愛」は「否定」に向かっている者を救おうと、「光」となって人に働きかけてくださる。その「神の愛」は、人を「否定」する「闇」の力を「否定」する「光」の運動なので、「否定」に留まろうとする者にとっては、「神の愛」の運動は「神の怒り」に思え、「神の裁き」に思えてしまう。だが、神はそのことで人を救おうとされる。「神の怒り」や「神の裁き」を人に思い浮かべさせることで、「絶望」の中にある自分に気づかせ、神にあわれみを乞う「勇気」を持たせようとされているのである。そうしたことから、聖書には「神の怒り」、「神の裁き」といった表現がある。では、ここまでのまとめをしよう。

❖ ここまでのまとめ

第二巻は、「神の福音」を別の視点から眺めている。そこで、第二章では「神の愛」の中に留まるという視点から、第三章では「神の裁き」という視点から、この第四章では「神の怒り」という視点から見てきた。そのどれもが、人を「否定」する力を「否定」することであった。ともすると、「神の福音」は「否定」の「否定」であり、すなわち人を「肯定」することだという話をすると、ならば「神の怒り」はどうなのか、「神の裁き」はどうなのかとなってしまうが、それは誤解であることが分かった。つまり、「神の裁き」は「否定」の元締めである「死」と、その「死」を持ち込んだ「悪魔」を裁くことであり、「神の怒り」は人を苦しめる「否定」を「否定」し、人を助けることであった。実際、ノアの時代の「神の怒り」は、ノアの家族八人を大洪水で助けた話であった。「わずか八人の人々が、この箱舟の中で、水を通って救われたのです」（Ⅰペテロ 3:20）。

まことに、「神の裁き」も「神の怒り」も、それは人を「否定」するものを「否定」する「神の愛」にほかならない。人が拠り所とする世の「富」は、人への「否定」でしかないので、「神の愛」はそれを「否定」するのである。世の「富」は何であれ失うしかない「無」であって、その「無」に自分の価値を託して希望を抱くことは、まさしく自分の存在を「否定」することなので、「神の愛」は世の「富」を「否定」する。そうなると、世の「富」にしがみつく者にしてみれば、「神の愛」は「神の怒り」、「神の裁き」として映るので、聖書は「神の愛」を、「神の怒り」、「神の裁き」としても表現する。だが、「神の愛」は「平安な義の実」（ヘブル 12:11）を結ばせるので、その実

を結ぶようになれば、「神の怒り」や「神の裁き」に対する誤解は完全に解ける。それは全て、私を本気で癒やそうとする「神の愛」であることを知るようになる。「主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである」(ヘブル 12:6)。

人は無意識に、自分を「否定」するものを「宝」にして生きてるので、「神の愛」に出会うと、とっさに自分が裁かれると思ってしまい、神に対し、自分から離れていってほしいと願ってしまう。あのペテロのように。彼は初めてイエスに出会った時、すなわち「神の愛」に出会った時、「主よ。私のような者から離れてください。私は、罪深い人間ですから」(ルカ 5:8) と叫んでしまったが、これはペテロが拠り所としていた世の「富」を排除する「神の愛」が、まことにイエスとの出会いによって、彼の中で激しく働いていたからである。

このように、「神の福音」の真実は「否定」の「否定」であり、それを別の視点から眺めると、それは「神の怒り」であって、「神の裁き」なのである。誰もが自分は死に値する「罪人」であると心の奥底では思っているので、神は私たちを「罪人」のまま神の前に立たせ、「あなたは死に値しない！あなたは無罪だ！」という判決を声高らかに下される。これが「神の裁き」の真実であり、「神の福音」の真実である。

そもそも人の土台は神なので、神は人を「否定」するものは何であれ「否定」される。そのため、こうした福音になる。つまり、そこにあるのは「罪には罰」はなく、「罪にはあわれみ」であって、それは言ってみれば、徹頭徹尾「癒やし」である。それでイエスは、「医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです」(マルコ 2:17) と言われたのである。そこで次章は、「癒やし」という視点から「神の福音」の真実を見てみたい。

第五章　「癒やし」

悪魔の仕業で「死」が入り込み、人は制約された体になった。それは滅びるしかない体であり、自分の土台の神（永遠性）を認識できない体である。この制約された体のせいで、誰もが病気を覚える「病人」になった。加えて、不安を覚え、見える安心をむさぼる「罪人」になった。つまり、「罪人」も「病人」も、「死」による制約によって生じた現象を別の視点から見ているだけで、それは同じある。そうである以上、「神の福音」は病気を癒やすことであり、それは罪が赦されることである。

> 「そこに住む者は、だれも「私は病気だ」とは言わず、そこに住む民の罪は赦される。」（イザヤ 33:24）

しかし、人が「罪人」であることは広く知られていても、その状態は「病人」であることはあまり知られていない。だが、「罪人」も「病人」も同じである。どちらも、入り込んだ「死」によって、本来の姿が制約されている状態である。したがって、「神の福音」の真実は、本来の姿に戻す「癒やし」である。そこで、「癒やし」の視点からも、「神の福音」の真実を論じたい。それは、「病気」についての考察から始まる。

－「病気」について－

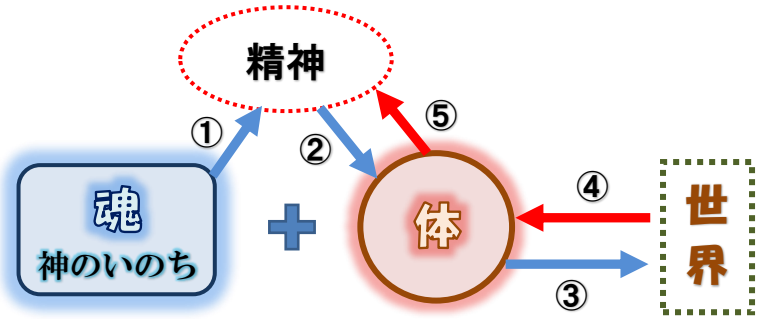
「神の福音」の真実は、まさしく「癒やし」である。だが、それを知るには、「病気」に対するある程度の知識が求められる。そこで、最初に「病気」についての知識を学び、その上で、「病人」と「罪人」との関係を明らかにしてみたい。そうすれば、「神の福音」の真実が「癒やし」であることが容易に理解できる。その知識を学ぶには、「人の造り」の復習から始める必要がある。

❖ 「人の造り」の復習

神は「大地」のちりで人の「体」を造り、その「体」に神の「いのち」を吹き込み、それが人を支える「魂」となり、人である「精神」は機能するようになった。「神である【主】は、その大地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そ

れで人は生きるものとなった」（創世記 2:7　新改訳 2017）。つまり、人とは思考する「精神」であり、それは「魂」と「体」によって機能する。

では、どのように機能するかというと、「魂」は神の「いのち」なので、「神の思い」を発信する。すると、それを受け取る「精神」が生起し、「精神」は「体」を通して「世界」を覗き込み、様々な情報の収集を開始する。そして、収集した情報と、先に受け取った「神の思い」とを統合しようとして、そこに認識と思考が生じるのである。これが、「人の造り」の概要である（第一巻 30 頁「－「人の造り」－」）。



①「魂」は神の「いのち」なので
「神の思い」を「精神」へ発信
②－③
「精神」は「神の思い」を受け
「体」を通して世界を覗き込む
④－⑤
「体」は世界の情報を収集し
「精神」に運ぶ→統合（思考）

さて、当初の「精神」は、「魂」から発信される「神の思い」を、すなわち人の存在を「肯定」する「永遠性」の情報を、「体」が収集する情報でも確認することができ、それは矛盾なく統合できた。なぜなら、神が造られた被造物（世界）は、その全てが非常に良いものであり、「神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった」（創世記 1:31）、そこには人の存在を「否定」する「死」はなかったからである。それゆえ、「精神」は「魂」からの情報を「体」からの情報でも確認でき、「平安」であった。聖書はその様子を、「人とその妻は、ふたりとも裸であったが、互いに恥ずかしいと思わなかった」（創世記 2:25）と綴っている。これが本来の人の姿であり、この姿から「病気」の真相が分かる（第一巻 40 頁「－人の「真実な姿」－」）。

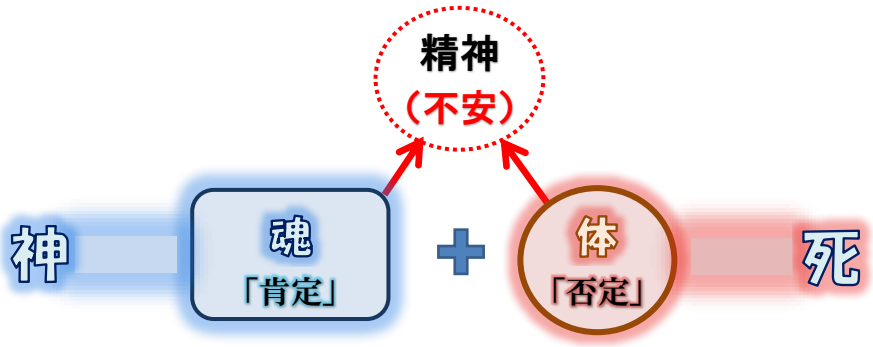
❖ 「病気」の真相

神が造られた本来の世界は、人の姿も、人を取り巻く環境も、その全てが人の存在を「肯定」する「光」の姿であった。ところが、神が創造を開始する前、そこには人の存在を「否定」する「闇」があった。「闇が大水の面の上にあり」（創世記 1:2　新改訳 2017）。「闇」は悪魔を象徴するが、その悪魔の起源は分からない。だが、悪魔は初めから神の愛に逆らう人殺しであり、真理である神の被造物ではないことだけははっきりしている。「悪魔は初めから人殺しであり、真理に立ってはいません」（ヨハネ 8:44）。そうなると、初めに神と悪魔とが存在していたということなのだろうか。聖書は、そ

れを否定する。初めにおられたのは神だけであったとする。「すべてのものは、神から出て」（ローマ 11:36　新共同訳）。これは人の理解を超えているので、ただ信じるしかない（第一巻 72 頁「－「理性」には限界がある－」）。

いずれにせよ、起源は分からない悪魔の仕業でアダムが罪を犯し、その罪に伴い「死」が入り込んでしまった。「このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです」（ローマ 5:12　新共同訳）。「死」は人の存在を「否定」する運動であり、それが入り込んだことで人の「体」は滅びに向かう「有限性」となり、「世界」（土地）も滅びゆく「有限性」となった。「土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった」（創世記 3:17）。こうして、人の「体」は様々な制約を受けることになり、これが「体の病気」の起源となった。

また、神は「魂」を介し、人である「精神」に人の存在を「肯定」する「永遠性」の情報を発信しているが、入り込んだ「死」によって「体」も「世界」も「有限性」となり、「体」は「永遠性」を「否定」する「死」の情報を収集するようになった。そうなると、人である「精神」は「魂」と「体」とに支えられているので、自分を「肯定」する情報と、自分を「否定」する情報を同時に受信することになる。それは矛盾でしかないので、この矛盾が「不安」を生み、「心の病気」の起源となった。



ちなみに、「心の病気」の「心」とは、「精神」と「魂」とを一緒にした呼び名である。とはいえ、「心の病気」とは「魂」が病むという話ではない。あくまでも人である「精神」が、「体」から「否定」の情報を受信することで苦しむことを言っている。しかし、「精神」が苦しめば、「精神」を支える神の「いのち」である「魂」も、すなわち神も苦しむことになる。「彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ」（イザヤ 63:9）。こうして、「心」の中の「精神」と「魂」は一緒に苦しみ、それを「心の病気」という。

このように、「体の病気」も「心の病気」も、人の中に「否定」（有限性）が入り込んだことで生じるようになった。人の本来の姿は「肯定」（永遠性）であり、「いのち」

であるので、それを「否定」する「死」が入り込んだことで不具合が生じ、その不具合が「体の病気」、「心の病気」と呼ばれるようになった。これが、「病気」の真相である。では、この話から、今度は「死」と「罪」と「病気」との関係を見てみよう。

❖ 「死」と「罪」と「病気」の関係

神が人を造られた時、人は神に無条件で愛されている自分を、「体」が収集する情報からも知ることができた。そこには、神と人とを分離する「隔ての壁」は何もなく、神から発信される無条件の「肯定」を確認することができた。ところが、悪魔の仕業で「死」が入り込み、「体」は滅びる「有限性」になり、「永遠性」の神を認識できなくなった。認識できるのは、「有限性」を帯びた自身の肉体（裸）だけとなった。その様子が聖書に、「このようにして、ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った」（創世記 3:7）と綴られている。この出来事を神との「分離」といい、この「分離」が「不安」の源泉である。

そして、入り込んだ「死」によって生じた神との「分離」は御心ではないので、その状態を「罪」という。「死のとげは罪であり」（Ⅰコリント 15:56）。つまり、「罪」とは行為である前に、神と「分離」した状態を指し、その状態によって生じた「不安」が見える安心をむさぼらせるので、そこから様々な「罪の行為」が生じてしまう（本書 72 頁「「罪」について」、本書 72 頁「「罪」と「罪の行為」の関係」）。

このように、神との「分離」を引き起こさせた「死」が、「罪」の正体である。「死のとげは罪であり」（Ⅰコリント 15:56）。「罪」は、まさしく「死」によって人を支配し、「罪が死によって支配したように」（ローマ 5:21）、人を「罪の行為」に走る「罪人」にしてしまったのである。加えて、神との「分離」を引き起こさせた「死」が、人の「体」を滅びゆく「有限性」にしたので、その制約から全ての人が「体の病気」を覚えるようになった。それだけではない。神との「分離」により、神に無条件で愛されている自分を確認できなくなり、そのことによる「不安」から「心の病気」も覚えるようになった。したがって、「罪」も「病気」も、「死」によって生じた症状ということになる。では次に、「病気」を分類し、「病気」同士の関係を見てみよう。

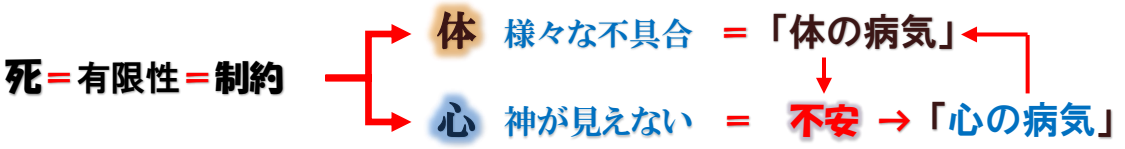
❖ 「病気」の分類と関係

「病気」は、「体の病気」と「心の病気」とに分類される。「体の病気」は、人の「体」に「有限性」という制約が、すなわち「死」が入り込んだことで生じるようになった。それはつまり、「有限性」による制約が「体」に様々な不具合をもたらし、誰もが「障

がい」を持つ者になったということである。その「障がい」が社会生活に困難をきたすと、その人は「障がい者」と呼ばれるが、それは正しい認識ではない。程度が異なるというだけで、誰の「体」であろうと老化し、朽ち果ててしまう以上、誰もが「体」の「障がい」（制約）で苦しんでいるからである。そこで、「体」が背負うようになった「障がい」（制約）の症状を総称し、ここでは「体の病気」と呼ぶことにする。

また、人の「体」に「有限性」という制約が入り込んだことで、人の「体」は自分を支えてくれている神を確認できなくなった。平たく言えば、神が見えなくなった。そのことが「心」に「不安」を抱かせ、様々な症状を「心」に引き起こした。その症状が社会生活を困難にする場合は「精神疾患」と呼ばれるが、それは正しい認識ではない。程度が異なるというだけで誰もが「心」に「不安」を抱え、様々な症状で苦しんでいるからである。そこで、「心」が背負うようになった苦しみの症状を総称し、ここでは「心の病気」と呼ぶことにする。

そして、「心の病気」は「心」だけでなく、「心の病気」が発信する「否定」の情報によって「体の病気」を煽る。加えて、「体の病気」は「体」だけでなく、「体の病気」が発信する「否定」の情報によって「不安」を増大させ、「心の病気」を煽る。こうして、それぞれの病気は、互いに「否定」の情報を流し合うことで支え合っている。



このように、病気は「体の病気」と「心の病気」とに分類され、どちらの病気も「有限性」という制約、すなわち「死」という「否定」の運動によるので、「否定」同士が互いに「否定」を増長し合う関係にある。重い「体の病気」になれば、そこから強い「否定」の情報が発信されるので、それを「心」が受けて「心の病気」は加速し、また「心の病気」が加速すれば、それは「体の病気」を加速させてしまう。例えば、心配事が増えれば（心の病気）、胃腸が悪くなる人や、皮膚に異常が現れたりする人がいる（体の病気）。また、ガンになれば「死」を予感し（体の病気）、そのことの「不安」から「うつ病」になる人もいる（心の病気）。こうして、再び「体の病気」の情報が「心の病気」に跳ね返ってくるので、最後は「心の病気」に集約される。

❖ 「心の病気」

「心の病気」は、症状の違いによって呼び名が異なる。よく知られているのが「気分障害」と呼ばれるもので、それは気分の波が症状として現れ、うつの状態だけであれば「うつ病」とされる。うつ状態と躁状態を繰り返す場合は、「躁うつ病」とされる。うつ状態では、例えば自分が価値のない人間のように思えてしまったり、躁状態では、気持ちが高揚し、ちょっとしたことにも敏感に反応し、他人に対して怒りっぽくなったり、自分は何でもできると思い込んで、人の話を聞かなくなったりする。また、「統合失調症」と呼ばれるものもあり、それは「陽性症状」と「陰性症状」とに分類される。「陰性症状」では、例えば意欲が低下し、以前からの趣味や楽しみに興味を示さなくなったりする。また、疲れやすく集中力が保てず、人づきあいを避け、引きこもりがちになったりする。他にも、「心の病気」には「依存症」、「パニック障害」、「不安障害」、「PTSD（心的外傷後ストレス障害）」など、症状の違いによって色々な病名に分類される。いずれにしても、「心」に何らかの苦しみを覚えれば、何らかの病名が付けられ、「心の病気」と診断される（参照：厚生労働省のホームページ）。

こうした「心の病気」の症状を調べていくと、誰もが気づくことがある。それは、自分にも該当する症状が必ずあるということである。例えば、誰でも意欲が低下する時があるし、誰でも自分が価値のない人間のように思える時がある。誰でも他人に怒りを覚える時があり、誰でも気分が高揚する時もあれば、落ち込む時もある。つまり、誰もが「心の病気」であって「心」に何らかの苦しみを覚えているということである。

これが「心の病気」の概要であるが、こうした「心の病気」は、先述したように自分の土台である神を認識できない「不安」に起因する。もう少し説明すると、「不安」は見えないので、「精神」は「不安」を「見える化」しようとする。そこで、困難な出来事に遭うと、見えない「不安」を無意識に見える困難に重ね、「見える化」を図る。そうなると、その困難に対して「恐れ」を抱くようになり、見えなかった「不安」が具体的な「恐れ」となる。人はその「恐れ」と戦うことで、「不安」と戦おうとする。しかし、「不安」の原因は神を認識できないことにあるので、いくら「恐れ」と戦っても「不安」の排除には結びつかない。そのため、再び困難に「不安」を重ね、それを「恐れ」にして戦うようになる。そうする中、戦った「恐れ」に勝つことができず、社会生活が難しくなると「心の病気」として扱われる。だが、真実は「不安」を覚えるようになった時点で、すでに「心の病気」になっている。これが「心の病気」のメカニズムであるが、それを今度は、聖書の教えに沿って見てみよう。

❖ 「心の病気」のメカニズム

聖書によると、人の土台は神である（創世記 2:7）。ゆえに、人は初めから神に無条件で愛されている。それは神に背負われている姿であり、「彼らを背負い、抱いて来られた」（イザヤ 63:9）、それこそが人の「真実な姿」である。ところが、聖書によると、入り込んだ「死」によって人の「体」は神を認識できない「有限性」になり、神に無条件で愛されている自分を知り得なくなった。そのことで、人は「不安」を覚えるようになり、「愛されたい」という願望が生じるようになった。だが、人から愛されるには、人の期待に応えなければならない。そのため、人の期待は愛されるための規定となり、「ねばならない」という形式の「律法」になった。例えば、「良い子でなければならない」、「成績が良くなければならない」、「美しくなければならない」等々である。

しかし、この愛されるために手にした「律法」が、人を苦しめることになった。というのも、「律法」は愛される規定であり、さらには愛する規定なので、「律法」に違反する者を見ると人は怒りを覚えてしまうからである。「律法は怒りを招くものであり」（ローマ 4:15）。例えば、「成績が良くなければならない」という「律法」を持つと、親は成績の良くない我が子に怒りを覚え、成績が良くない子も自分に怒りを覚えてしまう。その結果、人は人を愛せなくなり、このことが苦しみを生じさせる。人は元来、人を愛するという「良い行い」ができる者として造られていたので、「良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです」（エペソ 2:10）、人を愛せないことは真に人を苦しめてしまうのである。それはちょうど、動くはずの身体が動かなくなってしまうようなものである。つまり、「ねばならない」という「律法」の制限が人の自由度を奪い、神の戒め、「愛せよ」に逆らわせてしまう。そうなると、愛せないことは「罪責感」となるので、それがさらに人を苦しめる。これが「心の病気」のメカニズムであり、それは「律法」という条件なしには人を愛せなくなったことによる。そして、人を愛せない姿が「罪人」の姿であり、聖書はその姿をこう綴っている。

> 「これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。」
> （ヘブル 2:14-15）

人が一生涯「律法」に拘束されてしまった姿を、ここでは「一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々」と表現している。なぜなら、「律法」は悪魔の仕業による「死」に起源を持つからである。その「死」が「不安」を生み、「不安」が愛される自分を目指させ、愛される規定となる「律法」を持たせたからである。その「律法」が、

人を愛せなくさせる苦しみを生産し、様々な「罪の行為」を誘発してくる。「**律法による数々の罪の欲情が私たちのからだの中に働いていて**」（ローマ 7:5）。これが聖書の教える、人を苦しめる「**心の病気**」のメカニズムである。それはそのまま、「罪の行為」のメカニズムでもある。したがって、聖書は、「死」のとげとなる「不安」が「罪」の正体であり、その「罪の力」の正体が「律法」であるとする。

> 「**死のとげは罪であり、罪の力は律法です。**」（Ｉコリント 15:56）

このように、神と分離する「死」による「不安」から「**愛されたい**」という願望が生じ、その願望から愛されるための規定、「律法」を持つようになり、その「律法」によって心に自由度がなくなることを「**心の病気**」という。平たく言えば、全てが「**ねばならない**」という“必然”に感じられ、心に余裕がなくなってしまうことが「**心の病気**」である。そこで、「**心の病気**」の重い人に、「**1 から 9 までを、でたらめに言ってみて**」と言うと、順番どおりにしか言えない人がいるという。どうしても、でたらめに言うことができないのである（参考：中井久夫著『最終講義』）。これは、その人の心に余裕がないことを示している。その人を動かしているのは、もはや「**ねばならない**」という「律法」であることを示している。これが「**心の病気**」のメカニズムであり、人を愛せない「罪人」の姿である。

余談だが、人から愛されるには、人の期待に応えなければならないので、人からの期待が「律法」になることを述べたが、ならば、その期待はどこから生まれてくるのだろう。それは、人が思い描く「理想」から生まれてくる。ならば、どうして人は「理想」を思い描くのだろう。それは、人である「精神」は「魂」に動かされているからである。その「魂」は神の「いのち」の部分なので、神が「ぶどうの木」ならその「枝」なので、神を慕い求めている。「**神よ、わたしの魂はあなたを求める**」（詩篇 42:2　新共同訳）。この運動に「精神」は動かされているので、人も神を求めている。しかし、この世界は「有限性」になったので、そこに「永遠性」の神を見ることはできない。そこで、人は「有限性」の情報の中で自分が最高と思えるものを「理想」とし、それを神として慕い求めてしまうのである。そうなると、「理想」に近づくことが自分の価値になるので、親は子どもに自分の「理想」を押しつけ、子どもがそれに近づくことを期待するようになる。すると、子どもは親に愛されたいので、親からの期待は「**ねばならない**」という形式の「律法」になる。こうして、人が思い描く「理想」が、人から自由度を奪う「律法」を持たせてしまう。では、まとめをしよう。

❖ まとめ

以上が、「病気」についての話である。ここで重要なのは、「死」が入り込んだことで、誰もが「**体の病気**」になり、誰もが「**心の病気**」になったということである。「死」が入り込んだことで、人の「真実な姿」が制約され、人は「病人」になったということである。そして、苦しみを覚える「**心の病気**」のメカニズムが、そのまま「罪の行為」を犯すメカニズムになったということである。それゆえ、「病人」は「罪人」なので、罪を言い表せば、そのまま病気が癒やされることになる。「**ですから、あなたがたは癒やされるために、互いに罪を言い表し、互いのために祈りなさい**」（ヤコブ 5:16　新改訳 2017）。

さらに言えば、「死」が入り込んで以来、人は神の愛が見えない「不安」に陥り、「**愛されたい**」という願望を持つようになった。その結果、愛されるための規定となる「律法」に、人は一生涯、拘束されてしまった。その「律法」が「敵意」を生じさせ、「**敵意とは、さまざまの規定から成り立っている戒めの律法なのです**」（エペソ 2:15）、神の愛を実行する者として造られた私たちを苦しめている（**心の病気**）。「敵意」によって、自分がしたいと思う愛が実行できなくなり、自分が憎むことを行ってしまう。「**私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行っているからです**」（ローマ 7:15）。こうして、「死」による制約が人に「律法」を持たせ、人を愛せない「罪の行為」に至らせるのである。

このように、人を苦しめる「**心の病気**」のメカニズムは、そのまま人を愛せない「罪の行為」のメカニズムでもある。それゆえ、「罪人」は「死」（分離）による「病人」なので、「神の福音」は徹頭徹尾「癒やし」となる（第一巻 65 頁「－「死」と「罪」との関係－」）。ただし、「律法」のせいで「罪の行為」に至るという話だけを聞くと、「律法」が「罪」を生み出す装置のような印象を持ってしまうが、「律法」が「罪」を生み出す装置なのではない。というのは、「律法」がなくても「罪」は存在したからである。「**というのは、律法が与えられるまでの時期にも罪は世にあったからです**」（ローマ 5:13）。つまり、「罪」の正体は「死」であって、「**死のとげは罪であり**」（Ⅰコリント 15:56）、「死」は「律法」の前身である。したがって、「罪」の正体については正確に知る必要がある。そうすれば、「罪」が赦されることと「癒やし」は同じだと分かる。そこで、本章の「癒やし」の話は、「罪」の正体の話に進む。

－「罪」の正体－

私たちは、神が禁止する行為のリストを作り、また、神がするように命じている行為のリストを作り、そうした行為を守らないことを「罪」としてきた。無論、リストの行為を完全に守ることはできないが、それでも真面目に取り組んできた。そして、守れる行為が増えれば、「**これで概ね義人になれた**」と安心し、概ね「罪」から解放されたと、誇らしげになった。だが、それは同時に、リストの行為を守れない仲間を見ると、「**それでもクリスチャンなのか**」と裁くことにもなった。これが、一般になされる「罪」への対応であり、この対応がキリスト教への敷居を高くしてしまった。しかし、これは「罪」から生じる「罪の行為」に対する対応であって、聖書が教える「罪」に対してではない。ならば、「罪」の正体は何なのか。それについてはすでに述べたが、ここではそれを、これまで以上に深く把握することを目指す（本書 72 頁「「罪」について」）。そうすれば、「癒やし」の実際が分かる。では、「罪」と「罪の行為」とは別である話から始めよう。これについてもすでに述べたが、さらに深く述べてみたい（本書 72 頁「「罪」と「罪の行為」の関係」）。

❖ 「罪」と「罪の行為」とは別である

神と「分離」した状態が「罪」であり、その状態が「不安」である。この「不安」が、見える安心をむさぼる「罪の行為」に向かわせている。つまり、「罪」（不安）と「罪の行為」は別である。そのため、「罪の行為」がいくら減っても、「罪」はそのまま残ってしまう。いくら「罪の行為」を減らしたところで「罪」（不安）は残るので、そこからは別の「罪の行為」が芽を出す。というより、気づかないだけで「罪の行為」は発芽している。例えば、「**みんな**」から良く思われようとする「**この世の心づかい**」である。また、「**みんな**」の関心を得ようと「富」で自分を飾ることも、「自慢」や「落ち込み」も「罪の行為」である。さらには、「怒り」も「罪の行為」である。だが、賢い人たちは、自分の「怒り」は聖なる「怒り」だと言い（義憤）、罪ではないとする。しかし、人の「怒り」は「**愛せよ**」に逆らう立派な「罪の行為」である。「**人の怒りは、神の義を実現するものではありません**」（ヤコブ 1:20）。こうした「罪の行為」が「罪」から発芽するので、パウロは「罪の行為」を生み出しているのは「罪」だと断言する。

> 「私は、自分でしたいと思う善を行わないで、かえって、したくない悪を行っています。もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行っているのは、もはや私ではなくて、私のうちに住む罪です。」
>
> （ローマ 7:19-20）

パウロは、自分は「善」を行いたいのに、かえってしたくない「悪」（罪の行為）を行ってしまうと言う。ということは、それを行わせているのは私ではなく、私の中に住み着いた「罪」だと言い切り、「罪の行為」と「罪」とを完全に区別する。したがって、「罪」とは、「罪の行為」を行わせる「悪の力」ということになる。

では、なぜ人は「善」を行いたいと思うのか。それは、人が「善」なる神に似せて造られたからである。そのため、人は「善」なる「良い行い」をしたいと願う。「良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです」（エペソ 2:10）。人は神の「いのち」である「魂」に支えられていて、神とは一体の関係にあるので「善」を行いたいと思う。ところが、そこに「罪」が住み着き、その「罪」が自分のしたくない「罪の行為」をさせるとパウロは言う。となれば、「罪」とは「善」なる神から人を「分離」する力ということになるが、ならば、その「罪」の正体は一体何なのだろう。パウロはその正体を、同じローマ書で次のように説明している。

> 「それゆえ、ちょうど一人の人を通して罪がこの世に入り、罪を通して死が入り、まさしくそのように、全ての人たちに死が広がった。その結果、全ての人が罪を犯すようになった。」（ローマ 5:12　私訳）

ここでパウロは、人が「罪の行為」を犯すようになったのは、人の中に「死」が入り込んだからであって、「死」が「罪」の正体であることを説明している。この続きでも、そのことを、「罪が 死によって支配したように」（ローマ 5:21）と述べている。他の手紙でも、「死のとげは罪であり」（Ⅰコリント 15:56）と述べている。尚、この私訳については第三巻で詳しく説明するが、少し述べると、この訳はドイツ語の Walter Bauer の辞書を、Danker 監修の下で英訳された第三版の 365 頁に記載されている。

聖書は、まことに「罪」の正体を正確に教えている。それは「善」なる神と人とを「分離」する「死」であると。その「死」が「体」に住み着いたので、「善」なる神と人が「分離」し、人は「善」を行えなくなったということである。それゆえ聖書は、「罪」から救われたなら、「死からいのちに移った」（Ⅰヨハネ 3:14）と教え、イエスも、「死からいのちに移っているのです」（ヨハネ 5:24）と言われたのである。

ただし、人は神を土台とするので、神との「分離」というのは、土台である神を認識できなくなることであって、物理的な「分離」ではない。人の土台は未だに神である

が、それが認識できなくなったということである。この状態を、ここでは「分離」という。この「分離」のせいで、人の生き方は「的外れ」となった。そこで聖書は、「的外れ」を意味する「ハマルティア」[ἁμαρτία]という言葉で「罪」を表現する。その「的外れ」は「不安」を招くので、「罪」の正体は「不安」として認識される。その「不安」から、人は見える安心をむさぼる「罪の行為」に走るというわけである。

このように、「罪」と「罪の行為」とは別である。「罪」の正体は、神との「分離」を引き起こした「死」であり、その状態が神に逆らう「罪の行為」を引き起こす。そして聖書は、「分離」の状態の「罪」を「死に至る罪」とし、その状態から生じる「罪の行為」を「死に至らない罪」とする（Ⅰヨハネ 5:16）。前者の「分離」の状態は「死」なので、その状態を放置すると滅びることから「死に至る罪」といい、後者の「罪の行為」の中身は神に逆らう苦しみであり、滅びには通じていないので、「死に至らない罪」という。ということは、「死に至らない罪」は何であれ赦される罪であり、「死に至る罪」（分離の状態）は、御霊によって「霊の体」を着せられ、神と再結合されない限り滅びに直結するので、御霊の働きに逆らう冒涜は赦されないことになる。それでイエスは、次のように言われたのであった。

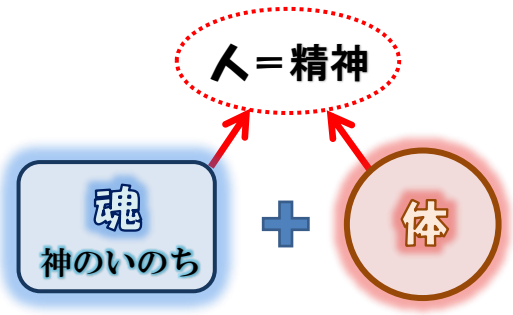
> 「だから、わたしはあなたがたに言います。人はどんな罪も冒涜も赦していただけます。しかし、御霊に逆らう冒涜は赦されません。」（マタイ 12:31）

こうした違いが分かれば、例えば、「死んでしまった者は、罪から解放されているのです」（ローマ 6:7）での「罪」は「死」のことであり、「罪の行為」ではないことも容易に分かる。なぜなら、「死んでしまった者」とは、「霊の体」を着せられたことで、滅びに至る「死」と決別した者を指すからである。そこで聖書の原文では、「罪」の中身が「死」を指す場合には、主に単数形（sin）が使われ、「罪」の中身が「罪の行為」を指す場合には、主に複数形（sins）が使われている。ちなみに、先に見た「罪から解放されている」の「罪」（ローマ 6:7）、「私のうちに住む罪です」（ローマ 7:20）の「罪」は単数形で、「死」を指している。

では、この話を人の中心から見てみたい。中心では、人は神の前では一人であり、「私はいつも【主】を前にしています」（詩篇 16:8　新改訳 2017）、人の前にも神しかおられない。「人の道は【主】の目の前にあり」（箴言 5:21）。この状態を「単独者」と言ったが、その視点から「罪」と「罪の行為」を説明したい（本書 12 頁「人の中心」）。

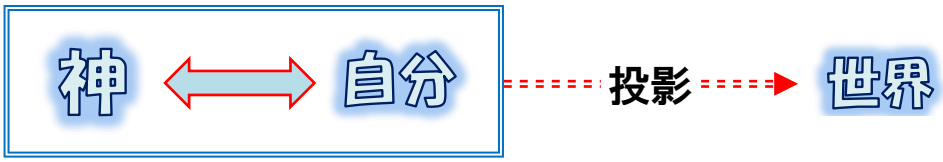
❖　人の中心から「罪」と「罪の行為」を見る

神は大地のちりで造った「体」に、神の「いのち」を貸し出された。それは「魂」と呼ばれ、そこからは「神の思い」が発信され、それによって人は生きる者となった。「神である【主】は、その大地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。それで人は生きるものとなった」（創世記 2:7　新改訳 2017）。つまり、人を支え動かしているのは神の「いのち」であり、人である「精神」は神に背負われている。神によって、人は存在している。「私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです」（使徒 17:28）。人は神の部分として造られたのである。「私たちはキリストのからだの部分だからです」（エペソ 5:30）。これを図にすると、以下のようになる。



神は人を、このように神の部分として造られたが、それは父と子と聖霊が「一つ」であるように、人とも「一つ」になるためであった。「それは、父よ、あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにいるように、彼らがみな一つとなるためです。また、彼らもわたしたちにおるようになるためです」（ヨハネ 17:21）。平たく言えば、友としての関係を築くためであった。「わたしはあなたがたを友と呼びました」（ヨハネ 15:15）。そこで神は人を背負い、人は神と一人で向き合うようにされたのである。人の中心を、神と一対一で向き合った形にされた。「私はいつも【主】を前にしています」（詩篇 16:8 新改訳 2017）。そのため、心を神に向けないことが人の「罪」となった。

つまり、神と向き合った中にある自分が、この世界で暮らしている。内部では神と関わり、外部では人と関わっている。神が人の土台なので、神との関わりが先になり、人との関わりが後になる。自分と神との関わりが、この世界との関わりに投影される。



ここで大事なことは、人は神と向き合って生きているのであって、それだけが幻ではなく、実際に存在しているということである。自分の外部の世界との関係で手にする

ものは幻であり、何も残らないということである。いつまでも残るのは、自分の内部の神との関係の中で手にする、神への信仰と希望と愛だけである。「**こういうわけで、いつまでも残るものは信仰と希望と愛です**」（Ⅰコリント 13:13）。

ならば、外部との関係で手にするものには何があるのだろう。見える富もあるが、「罪の行為」もある。外部の人との関わりに於いて不正を働いたり、苦しみを与えたり、傷つけたりすれば、それは「罪の行為」である。この「罪の行為」は、外部との関係で手にするものなので、それは所持することはできない。それゆえイエスは、「**だから、わたしはあなたがたに言います。人はどんな罪も冒涜も赦していただけます**」（マタイ 12:31）と言われたのである。

だが、人は外部の人との関わりで生じる「罪の行為」を「罪」だと勘違いする。あくまでも「罪」は、内部の神との関係で生じるものを指す。そして、内部の関係が外部に投影されるので、「罪の行為」を犯す者は、内部に於いて、神に「罪」を犯しているのである。それで聖書は、「**神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません**」（Ⅰヨハネ 4:20）と教えている。このようなわけで、神は人の内部に於ける神と人との関係を問題にされる。ところが、悪魔の仕業で入り込んだ「死」が、人の体と世界を「有限性」にしたことで、人は自分の内部におられる「永遠性」の神が見えなくなった。神に支えられている自分を認識できなくなった。これが「分離」である。その結果、誰もが心を神に向けられなくなり、神に逆らうようになった。したがって、神に逆らう「肉の思い」の正体は「死」（有限性）であり、「**肉の思いは死であり**」（ローマ 8:6）、これが人の中に住み着いた「罪」である。この「罪」が人を不安にし、人を苦しめているのであって、外部の出来事が人を苦しめているわけではない（補巻Ⅰ-6 頁「「苦しみ」の真の原因」）。

このように、人の中心から「罪」と「罪の行為」を見ると、その違いがよく分かる。人の中心（内部）は、神と人とは一対一の関係であり、その関係が外部に投影されている。そのため、心を中心の神に向けられない「分離」の状態が「罪」である。この「罪」の状態は不安を生じさせるので、人は不安を何とかしようと、外部に於ける人との関わりで、少しでも自分が良く思われる関係を築こうとする。それが互いを比べさせ、嫉妬や怒りを生み、「罪の行為」に走らせる。したがって、「罪」と「罪の行為」は別である。その「罪」の正体については、入り込んだ「死」であることを聖書は教えている。「**死のとげは罪であり**」（Ⅰコリント 15:56）。罪の原因は、悪魔の仕業で入

り込んだ「死」にあることを教えている。それで聖書は、「**罪を犯している者は、悪魔から出た者です**」（Ⅰヨハネ 3:8）とする。しかし、人は罪の原因を勘違いしたので、聖書はそれを是正する。

❖ 罪の原因の勘違いを是正する

昔から多くの人が、神がアダムに「**この実は食べるな**」と命じなければ、彼は禁断の実を食べるという罪を犯すこともなかったのにと思ってきた。神が「律法」を与えたので、それに従うか従わないかの選択が生まれ、罪が生じるようになったと思ってきた。早い話が、罪の原因は「律法」にあるということである。あるいは、人には自由意志があるので、罪は人の自由意志に原因があると思われてきた。しかし、これは勘違いである。そこで、この勘違いを聖書は是正する。その代表が、次の教えである。

> 「それゆえ、ちょうど一人の人を通して罪がこの世に入り、罪を通して死が入り、まさしくそのように、全ての人たちに死が広がった。その結果、全ての人が罪を犯すようになった。」（ローマ 5:12　私訳）

私たちの罪の原因は「律法」や自由意志にあるのではなく、アダムの罪と共に入り込んだ「死」にあることを聖書は教えている。さらに、続きにはこう書かれている。

> 「というのは、律法が与えられるまでの時期にも罪は世にあったからです。」
> （ローマ 5:13）

ここで聖書は、モーセによって「律法」が与えられる以前でも「死」は存在したので、「罪は世にあった」とする。確かに、カインは「律法」がない中、アベルを殺している。ならば、神からの「律法」は何かとなるので、続けて、「**しかし罪は、何かの律法がなければ、認められないものです**」（ローマ 5:13）と教え、罪を認めるためにあるとする。したがって、罪の原因は「死」であって、「律法」でも自由意志でもない。

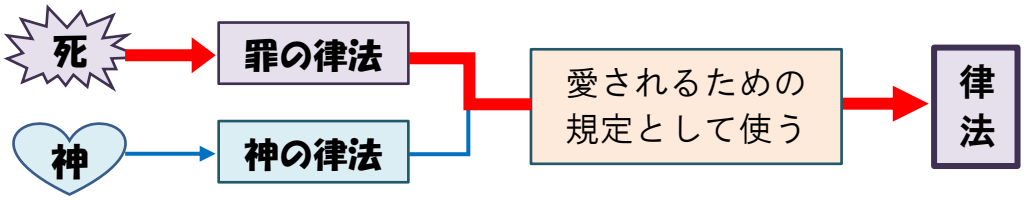
大体にして、自由意志は選択できる意志であって、罪を選択するには、すなわち「神と異なる思い」を選択するには、先に「神と異なる思い」が存在していなければならない。そして、「死」が存在しなければ、神の「いのち」を否定する「神と異なる思い」も存在しないので、いくら自由意志があっても罪を選択することはできない。それゆえ、自由意志が罪の原因になることなどあり得ない。ならば、「死」がない中で、アダムとエバはどうして罪を犯せたのかとなるが、それは悪魔が蛇を使って欺いたからで

ある。「蛇が悪巧みによってエバを欺いたように」（Ⅱコリント 11:3)。蛇が「神と異なる思い」を持ち込み、それを選択するように言葉巧みに誘導したから、罪を犯した。

このように、今日に於ける罪の原因は、途中から入り込んだ「死」であり、「律法」ではない。「それでは、どういうことになりますか。律法は罪なのでしょうか。絶対にそんなことはありません」（ローマ 7:7)。人に罪を犯させているのは「律法」でも、自由意志でもない。神からの「律法」は、ただ、罪に気づかせてくれるだけである。「ただ、律法によらないでは、私は罪を知ることがなかったでしょう。律法が、「むさぼってはならない」と言わなかったら、私はむさぼりを知らなかったでしょう」（ローマ 7:7)。こうして聖書は、誰もが罪の原因を勘違いするので、罪の原因の勘違いを是正する。それは同時に、「律法」への勘違いを是正するものでもあった。

❖ 「律法」への勘違いを是正する

「律法」には二種類あることを、人は知らない。一つは「死」に起源を持つ「律法」であり、もう一つは「神」に起源を持つ「律法」（良心）である。聖書は前者を「罪の律法」と呼び、後者を「神の律法」と呼んで、この二つの「律法」に人は仕えているとする。「こうして、この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです」（ローマ 7:25　新改訳 2017)。この二つの「律法」は、いずれも「ねばならない」という形式を持つので、見た目には同じ「律法」に見える。そのため、人は区別しないで両方に仕え、どちらも自分が愛されるための規定として使っている。



このように、「死」が人に持たせた「罪の律法」と、神が人に持たせた「神の律法」がある。しかし、「罪の律法」は「神の律法」も取り込み、愛されるための規定として人に使わせてしまう。その結果、どちらも同じ目的で使う「律法」となり、それが「罪の行為」を生じさせている。「律法は怒りを招くものであり、律法のないところには違反もありません」（ローマ 4:15)。そうであっても、それは「罪の行為」を生じさせているのであり、「罪」を生じさせているのではない。「罪」の正体は「死」（分離）であって、「死のとげは罪であり」（Ⅰコリント 15:56)、「律法」ではない。ただ、その「死」の力が愛されるための規定となる「罪の律法」を人に持たせているだけである。つまり、「死」の力、すなわち「罪の力」の具現化が、「罪の律法」である。「罪の力は律法

です」（Ⅰコリント 15:56)。こうして聖書は、「律法」への勘違いを是正する。とはいえ、「神の律法」も、「罪の律法」と同じように、愛されるための規定として使われてしまうのであれば、そもそも「神の律法」は何のためにあるのかとなってしまう。そこで、その話にも言及する必要がある。

❖ 「神の律法」は不要なのか？

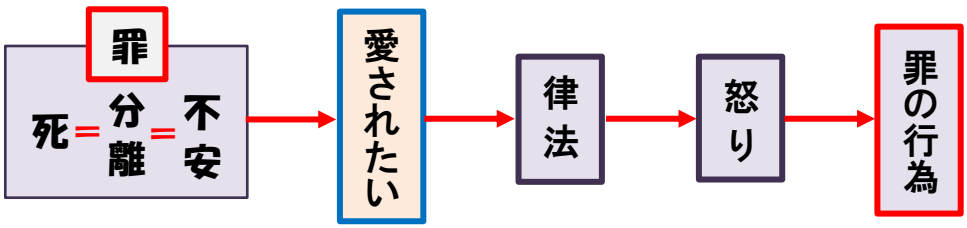
本来、モーセを介して啓示された「神の律法」は、神の「いのち」の状態の規定である。そのため、その規定の中には「罪」(sin)、すなわち「死」の運動は入り込めない。そうなると、「罪」(sin)は、すなわち「死」の運動は、入り込めない「神の律法」に反発し、あらゆるむさぼり（罪の行為）を引き起こす。「**しかし、罪はこの戒めによって機会を捕らえ、私のうちにあらゆるむさぼりを引き起こしました**」（ローマ 7:8)。ということは、「死」が「神の律法」に反発し、むさぼるという「罪の行為」に発展しないためにも、「神の律法」は不要なのだろうか。

そうはならない。なぜなら、モーセを介して啓示された「神の律法」がなくても、むさぼるという「罪の行為」は健在だからである。「罪の行為」を引き起こさせているのは「不安」であり、その「不安」は神と人とを「分離」する「死」に起因するので、モーセによる「神の律法」がなくても「罪の行為」は生じてしまうのである。それで聖書は、「**というのは、律法が与えられるまでの時期にも罪は世にあったからです**」（ローマ 5:13）と教えている。

大体にして、モーセによる「神の律法」がなければ、自分がむさぼっていても気づくことができないし、気づかなければ「罪」は死んだものになる。「**律法がなければ、罪は死んだものです**」（ローマ 7:8)。さらには、モーセによる「神の律法」とは別に、神が人の心に直接書き込まれた「神の律法」がある。「**律法の命じる行いが彼らの心に書かれていることを示しています**」（ローマ 2:15)。それは人生の指標となるので、それがなければ人生の目標も持てない。したがって、「神の律法」は聖なるものであり、良いものなのである。「**ですから、律法は聖なるものであり、戒めも聖であり、正しく、また良いものなのです**」（ローマ 7:12)。そうである以上、「神の律法」を不要とすることなどできない。つまり、問題は「神の律法」にあるのではない。人が神の愛を認識できないことの「不安」から、人生の指標となる「神の律法」を、自分が愛されるための規定として、すなわち「罪の律法」として、使ってしまうことにある。

このように、「律法」には二種類あり、一つは「死」に起源を持つ「罪の律法」であり、もう一つは「神」に起源を持つ「神の律法」である。この「神の律法」が、現状では、自分が愛されるための規定、「罪の律法」として使われているだけであって、「神の律法」は聖なるものである。大事なことは、「律法」には二種類あり、聖書はそれを区別しているということである。だが、人の側がそれを区別できないだけである。とはいえ、聖書は区別している以上、聖書を読む際は、どちらの「律法」の話をしているのかを区別して読む必要がある。例えば、「**死のとげは罪であり、罪の力は律法です**」（Ⅰコリント 15:56）の「律法」は、「罪の律法」の話をしている。例えば、「**しかし罪は、何かの律法がなければ、認められないものです**」（ローマ 5:13）の「律法」は、「神の律法」の話をしている。

しかし、どちらの「律法」であっても、それ自体が「罪」なのではない。あくまでも「罪」の正体は「死」であり、すなわち神との「分離」であり、それにより神に愛されている自分を認識できなくなった「不安」である。この「不安」が「**愛されたい**」という願望を生み、愛されるための規定を心に持たせたので、ここに「罪の律法」が誕生した。それとは別に、神が人の心に書き込んだ「神の律法」もあるが、「**愛されたい**」という願望は、「神の律法」さえも自分が愛されるための規定、すなわち「罪の律法」にしてしまったということである。こうして、それらは同じ「律法」になり、人は、「律法」に違反する者を見ると愛せなくなって「怒り」を覚えるようになった。「**律法は怒りを招くものであり**」（ローマ 4:15）。その「怒り」が、「罪の行為」を誘発する。ゆえに、「**死のとげは罪であり、罪の力は律法です**」（Ⅰコリント 15:56）となる。



ならば、「神の律法」は、どのように使えばよいのか。それは神の「いのち」の状態の規定であり、人はその神の「いのち」で造られたので、「神の律法」は人の「真実な姿」を示した指標として使えばよい。このことは、もう少し詳しく述べておきたい。

❖ 「神の律法」の正しい使い方

「神の律法」は、人の「真実な姿」を示した指標であるため、「神の律法」を行えなければ、それが人の罪（不足）ということになる。それゆえ、「神の律法」は自分の罪（不足）をあぶり出すために使うのが正しい。「神の律法」を目指すことで、「神の律法」

を行えないようにする「肉の思い」と出会い、自分の罪（不足）に気づくようにするのが正しい使い方である。そうすれば、罪（不足）を癒やせる（補える）唯一の方、イエス・キリストのもとに導かれる。このように、「神の律法」は、私たちをイエス・キリストに導く養育係として使うのである。

> 「こうして、律法は私たちをキリストへ導くための私たちの養育係となりました。」（ガラテヤ 3:24）

それはちょうど、気づかない病気を見つけ出す「CT 検査」のようなものである。「CT 検査」は隠れた病気を表にあぶり出してくれるので、それは人を医者に導く養育係となるが、「神の律法」はそれと同じである。しかし、人は「神の律法」をそのようには使わない。自分がいかに正しい人間であって、愛される価値があるかを証しするために使う（律法主義）。そのようなことをすれば、「神の律法」で裁き合うようになり、そこから数々の「罪の行為」が働いて、「死」（罪）のための実を結ぶことになる。「律法による数々の罪の欲情が私たちのからだの中に働いていて、死のために実を結びました」（ローマ 7:5）。こうした「神の律法」の使い方を、「罪の律法」と呼ぶ。「私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです」（ローマ 7:23）。

このように、「神の律法」は自分の中に潜んでいた罪をあぶり出すために使う。それが正しい使い方である。言い換えれば、それまで気づかなかった自分の病気を知るために使うということである。「死」が入り込んで以来、人の中には病原菌となる「罪」が住み着いてしまい、そこから「罪の律法」が生まれ、あらゆるむさぼりという病気の症状が起きているので、「罪はこの戒めによって機会を捕らえ、私のうちにあらゆるむさぼりを引き起こしました」（ローマ 7:8）、そのむさぼりを「神の律法」で知り、医者である神のもとに駆け込むのである。「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」（マタイ 11:28）。それが、「神の律法」の正しい使い方であって、自分の義を証しするために使うのではない。愛されるための規定として使うのではない。そのような使い方をすれば、ますます「怒り」を覚えるようになり、人を愛せなくなって苦しむことになる。

いずれにせよ、神に愛されている自分を認識できなくなった「不安」が「罪の行為」を引き起こしている。そのため、キリストは十字架を通して、罪人であっても神に愛されていることを明らかにされた。そして、この出来事によって、愛されるための規定に使用されてきた「罪の律法」を終わらせ、「キリストが律法を終わらせられたの

で」（ローマ 10:4）、私たちを責め立てる「ねばならない」という「罪の律法」、すなわち「債務証書」を無効にされたのである。

> 「いろいろな定めのために私たちに不利な、いや、私たちを責め立てている債務証書を無効にされたからです。神はこの証書を取りのけ、十字架に釘づけにされました。」（コロサイ 2:14）

こうして、キリストは「罪の律法」の呪いから、私たちを贖い出してくださった。「キリストは、私たちのためにのろわれたものとなって、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました」（ガラテヤ 3:13）。

では、話を戻そう。ここでは「罪」の正体について述べている。「罪」とは、人の中心にある神との関係を妨げ、心を神に向けさせない運動である。この運動は神と人とを「分離」させる「死」に起因する。「死のとげは罪であり」（Ⅰコリント 15:56）。その運動は不安を生じさせ、見える安心をむさぼる「罪の行為」へと促すことで、人と人との関係も壊す。それゆえ、戦うべき相手は、心を神に向けさせない「罪」であり、その戦いは「神の言葉」を信じる歩みにほかならない。こうした話をすると、「罪の行為」は放置してもよいのかと疑問が湧くので、最後にその点にも触れておきたい。

❖ 「罪の行為」は放置してもよいのか？

「罪の行為」に対しては、聖書は次のように教えている。

> 「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のみことばは私たちのうちにありません。」（Ⅰヨハネ 1:9-10）

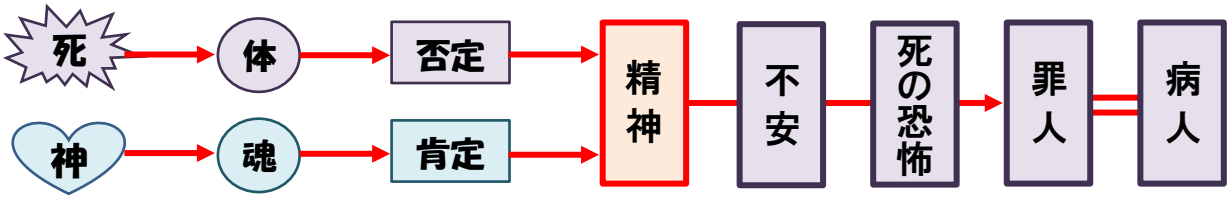
「罪を」の「罪」の原語は複数形である。それゆえ、それは「罪の行為」を指している。ここで聖書は、「罪の行為」を放置してはならないことを教えている。したがって、神が禁じた行為のリストを作り、それらを守ろうとする努力は正しい。ただし、そのことで「罪」から解放されるわけではない。「罪」はそのまま残る。大事なのは、「罪」を排除することである。病気の根を取り除き、病気にならないようにすることである。ならば、どうすれば「罪」を排除することができるのだろう。

それには「罪の行為」と戦う必要がある。その戦いは、端的に言えば人を愛する戦いである。その戦いに、真剣に身を置けば、必ず人を愛せない「不足」に気づかされる。「不足」に気づけば、「不足」を補ってくださる神の治療を求めるようになり、神との関係が築かれていく。それこそが、神との関係を築かせない「罪」の排除につながるのである。そのためにも、「罪の行為」とは戦う必要がある。

このように、聖書は「罪の行為」と戦うことも教えている。それは「不足」に気づき、神との関係を築いていくためである。しかし、多くの人は「罪の行為」を減らすことがそのまま「罪」の摘出につながると勘違いしている。そうして、「不足」に気づくことなく、「律法」の行いをどれだけ守れるかを目標とし、自分の義を証ししようとしてしまう。これこそ、パリサイ人たちが歩んだ道である。彼らは外面的には「罪の行為」を避けていたが、イエスに対しては殺意を抱くほどの「敵意」を持ったように、「**ますますイエスを殺そうとするようになった**」(ヨハネ 5:18)、この道を進めば「敵意」が増すばかりである。これらは全て、「罪」と「罪の行為」が別ものであることを理解していないことに起因する。では、簡単なまとめをしよう。

❖ 簡単なまとめ

人とは、「魂」と「体」からの情報に支えられた「精神」である。人が造られたときは、「魂」だけでなく「体」も、人の存在を「肯定」する情報を発信していたが、悪魔の仕業で「死」が入り込んで以降、「体」は人の存在を「否定」する情報を持ち込むようになった。それにより、人は「不安」を覚え、「死の恐怖」の奴隷となり、「**一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々**」(ヘブル 2:15)、見える安心をむさぼる「罪人」になった。「死の恐怖」の奴隷になったとは、「体」が朽ち果てる「死の体」になったということであるが、ここに「**体の病気**」の起源がある。そして、「精神」を支える「体」は人の存在を「否定」する情報を発信し、「魂」は人の存在を「肯定」する情報を発信するため、「精神」は全く異なる情報の狭間に立たされ、「不安」を覚えるようになった。ここに「**心の病気**」の起源がある。まことに「死」という「否定」が「体」に入り込んでからは、人は「罪人」となり、同時に「病人」となったのである。



「罪人」になった経緯については、もう少し説明しておこう。入り込んだ「死」によって神が見えなくなり、そのことの「不安」から、人は愛される自分を目指すようになった。愛されるためには周りの期待に応える必要があるため、それらの期待がそのまま「**ねばならない**」という規定（律法）となった。そのため、「律法」に違反する者を見れば「怒り」が生じ、神の戒めである「**愛せよ**」に違反する「罪人」になった。「**律法は怒りを招くものであり、律法のないところには違反もありません**」(ローマ 4:15)。同時に、愛せないということは人を苦しめ、「**心の病気**」を引き起こすことにもなったのである。つまり、「罪人」に至るメカニズムも、「**心の病気**」に至るメカニズムも同じであり、「罪人」は「病人」である。

以上が、「罪人」になった経緯であるが、人は「死」を背負ったことで「罪人」になり、「病人」になったのである。ここで大事なのは、罪を犯すから、「罪人」なのではないということである。病気になるから、「病人」なのではないということである。そうではなく、入り込んだ「死」によって「罪人」になったから罪を犯し、入り込んだ「死」によって「病人」となったから病気になるということである。すなわち、「**死**」が「**罪**」であり「**病**」なのであって、その「**死**」（神との分離）を背負った時点で、人は「**死人**」となり、「**罪人**」となり、「**病人**」となった、ということである。

だが、人はこの事実に気づかない。罪を犯す自分が、神の治療を必要とする「病人」であることに気づかない。それで、「自分が悪いから罪を犯すのだ」と思い、自力で良い人になろうとする。見た目を繕うことで、自力で「罪人」から「義人」になろうとする。しかし、罪の原因も病の原因も、人にはどうにもできない「死」に起因する以上、自力で良い人になろうとしても無駄である。そこで、神は「神の律法」を啓示された。いくら努力しても「罪人」であることに変わりがない、という現実に気づけるようにされたのである。「**すべての人を罪の下に閉じ込めました**」（ガラテヤ 3:22)。このことによって、誰もが神の治療を受けられるようになった。

このように、「死」が入り込んで以来、誰もが「罪人」になり、誰もが「病人」となった。「罪人」も「病人」も、本来の「真実な姿」が「死」によって「否定」されたことによる症状であって、その症状を別の視点から見ているだけである。このことが理解できれば、「罪人」を救う「神の福音」の真実は、「病人」を癒やすことだと分かる。そこで、いよいよ本章のテーマ、「癒やし」について見ていくことにしよう。

－「癒やし」の話－

最初に、「病気」について説明し、次に、「病人」と「罪人」との関係を明らかにした。どのような経緯で人が「罪人」に、すなわち「病人」になったのかを説明した。それは、「死」という「否定」運動が入り込んだことによってであった。人の存在を「否定」する「死」の運動が、人を「罪人」という「病人」にしたのである。そこで、神は人を癒やすために来られた。ならば、神は「罪人」という「病人」をどのように癒やされるのか、ここではそれについて見ていく。それこそが、「神の福音」の真実にほかならない。では、人を癒やすために来られた、「癒やし主」の話から始めよう。

❖ 「癒やし主」

人類は「病人」となったがゆえに、「癒やし主」を必要としていた。そこで神は、「癒やし主」を遣わすことを約束された。「まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった」（イザヤ 53:4）。この約束を知っていたバプテスマのヨハネは、来られたイエスが何者なのかを確かめようと、ご自分の弟子たちを通してイエスに尋ねた。「おいでになるはずの方は、あなたですか。それとも、私たちは別の方を待つべきでしょうか」（マタイ 11:3）。するとイエスは彼の弟子たちに、「あなたがたは行って、自分たちの聞いたり見たりしていることをヨハネに報告しなさい。目の見えない者が見、足のなえた者が歩き、ツァラアトに冒された者がきよめられ、耳の聞こえない者が聞き、死人が生き返り、貧しい者たちに福音が宣べ伝えられている」（マタイ 11:4-5）と言い、ご自分が人々を癒やしている様子を伝えるようにと命じられた。そのことによって、イエスはご自分が約束の「癒やし主」であることを明かされたのであった。

このように、神が約束された「癒やし主」はイエスであり、人を癒やすために来られた方であった。それゆえ、イエスはご自分の弟子たちにも病人を癒やす権威を与え、「天の国」が来たことを伝えさせた。「行って、『天の国は近づいた』と宣べ伝えなさい。病人を癒やし、死者を生き返らせ、規定の病を患っている人を清め、悪霊を追い出しなさい」（マタイ 10:7-8　聖書協会共同訳）。イエスは、「罪人」は「病人」であり、ご自分はその「病人」を癒やす「医者」であることを明言されたのである。

> 「医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」（マルコ 2:17）

まことに人類は、人の存在を否定する「死」の運動が入り込んで以来、人を愛せない「罪人」となったが、それは「死」に苦しむ「病人」の姿だったので、神は「癒やし主」として来られたのであった。その方がイエス・キリストであり、人への否定を「否定」する「癒やし主」であった。そこで聖書は、「癒やす」という意味を持つ「ソーゾー」[σώζω]を使い、「神の福音」を言い表した。日本語の聖書では、それは「救う」と訳されている。つまり、神は人を「救う」ために来られたというのは、人を「癒やす」ために来られたことを意味する。では、イエスがなさった癒やしの実際を見てみよう。

❖ 癒やしの実際

見てきたように、病気には「心の病気」と「体の病気」があるが、イエスが特に目指したのは「心の病気」の癒やしであった。というのも、人とは「精神」なので、「精神」の苦しむ「心の病気」が、人にとっての本当の病になるからである。さらには、「体の病気」をいくら癒やしたところで体の死は避けられないので、「心の病気」の癒やしを目指された。そうであっても、イエスは「体の病気」も癒やされた。しかし、それは目指す癒やしではなかったので、黙っていなさいと、度々注意された。「**すると、彼らの目があいた。イエスは彼らをきびしく戒めて、「決してだれにも知られないように気をつけなさい」と言われた**」(マタイ 9:30)。

さて、「心の病気」の根本原因は「不安」にある。「不安」は、人である「精神」が、「肯定」と「否定」の情報を同時に受け取るようになったことに起因する。別の言い方をするなら、入り込んだ「死」によって人は神と「分離」させられ、神に愛されている自分を認識できなくなったことに起因する。それが「不安」となり、「心の病気」を発症させ、それを「罪責感」による「否定」と、「体の病気」による「否定」が煽っている。そのため、「心の病気」を根本から癒やすには、「不安」をもたらした「死」を滅ぼすと同時に、「不安」を煽る「否定」を洗い流す必要がある。

それでイエスは、「**すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます**」(マタイ 11:28) と呼びかけられた。その呼びかけに応答してイエスのところに来るなら、「死」に打ち勝つ「霊の体」を、すなわち「永遠のいのち」を持つ者にされた。それで聖書は、「**それは、信じる**(応答する)**者がみな、人の子にあって永遠のいのちを持つためです**」(ヨハネ 3:15 ※( ) は筆者が意味を補足) と教えている。そして、「永遠のいのち」を持つ者は、永遠である「イエス・キリスト」のうちにいるので、「**私たちは、真実な方のうちに、すなわち御子イエス・キリストのうちにいるのです。この方こそ、まことの神、永遠のいのちで**

す」（Ⅰヨハネ 5:20）、「永遠のいのち」を持つ者は、キリストについての御言葉を聞くと、イエスがキリストであることを信じられるようになる。「その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです」（ヨハネ 17:3）。であれば、イエス・キリストを信じている者は、すでに「永遠のいのち」を持っている者であり、死から「いのち」（神の国）に移された者ということになるので、そのことをイエスは次のように教えられた。

> 「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じている者は、永遠のいのちを持っていて、裁きに会うことがなく、すでに死からいのちに移った状態にあるのです。」
>
> （ヨハネ 5:24　私訳）

それはつまり、信じている者は、すでに「いのち」が支配する「神の国」のただ中にあるということなので、イエスは、「いいですか。神の国は、あなたがたのただ中にあるのです」（ルカ 17:21）とも言われたのである。こうした一連の「神の言葉」から、イエス・キリストを信じている者は、「死」が支配する「世」に打ち勝った者であることが分かる。ゆえに、その事実をイエスから教えられた弟子のヨハネは、「私たちの信仰、これこそ、世に打ち勝った勝利です。世に勝つ者とはだれでしょう。イエスを神の御子と信じる者ではありませんか」（Ⅰヨハネ 5:4-5）と言った。

このように、イエスは、「死」によって生じた「不安」を「神の言葉」によって排除し、「心の病気」を根本から癒やそうとされた。これが、癒やしの実際である。しかし、いくら「死からいのちに移っているのです」（ヨハネ 5:24）と言われても、いくら「いいですか。神の国は、あなたがたのただ中にあるのです」（ルカ 17:21）と言われても、また、「死」に勝利していると言われても、それを目で見ることはできない。それは、ただ信じることでしか見ることができない。ということは、人を癒やすには、「神の言葉」を信じられる「信仰」を育てる必要がある。そこで、神が啓示された人を癒やす福音は、「信仰」に始まり、「信仰」に進ませる。

> 「福音のうちには神の義が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。」（ローマ 1:17）

神は、「信仰」を育てることで、人々を癒やされるのである。

❖ 「信仰」を育てる

癒やしには、「神の言葉」を信じられる「信仰」が必要となる。だが、「信仰」は「罪責感」による「否定」と、「体の病気」による「否定」とに攻撃され、「神の言葉」が信じられない状態にある。そこで神は、「罪責感」による「否定」と、「体の病気」による「否定」の排除に乗り出される。「罪責感」に対しては「罪の赦し」を宣言することで、「体の病気」に対しては体を癒やすことで「否定」を排除される。神はそのようにして「信仰」を育て、「心の病気」の癒やしを目指される。ゆえに、イエスはご自分のところに癒やしを求めて来た「病人」に対し、まずは「罪の赦し」を宣言された。

> 「イエスは舟に乗って湖を渡り、自分の町に帰られた。すると、人々が中風の人を床に寝かせたままで、みもとに運んで来た。イエスは彼らの信仰を見て、中風の人に、「子よ。しっかりしなさい。あなたの罪は赦された」と言われた。」（マタイ 9:1-2）

「罪の赦し」を宣言しても、それを受け取るにも「信仰」を必要とするので、イエスは「信仰を見て」、それから「罪の赦し」を宣言されたとある。次にイエスは、「体の病気」を癒やされた。「それから中風の人に、「起きなさい。寝床をたたんで、家に帰りなさい」と言われた。すると、彼は起きて家に帰った」（マタイ 9:6-7）。それによって、「信仰」を攻撃する「否定」を排除し、「罪の赦し」を受け取った「信仰」を育てられたのである。それは、神から無条件で愛されている自分の「真実な姿」を、「信仰」で知るようになることを意味する。

このように、イエスがなさった癒やしの実際は、最初に「霊の体」を着せ、次に「罪の赦し」を宣言し、さらには「体の病気」も癒やし、そのことで最初に与えた「信仰」を育て、無条件で愛されている自分の「真実な姿」を知るようにすることであった。これにより、「心の病気」を癒やされた。この作業で最も重要なのが、人である「精神」を強力に「否定」してくる「罪責感」の排除である。

例えば、姦淫の現場で捕まった女性に対してイエスは、「わたしもあなたを罪に定めない」（ヨハネ 8:11）と言われた。また、一人の罪深い女性がイエスのもとに来た際も、「あなたの罪は赦されています」（ルカ 7:48）と言われた。「罪の赦し」を宣言することで「信仰」を育て、無条件で愛されている自分の「真実な姿」を知るようにし、「心の病気」を根本から癒やそうとされた。したがって、癒やしの作業を担うのは、罪を赦す「赦しの恵み」である。そこでイエスは、「赦しの恵み」を実行するために十字

架に架かられた。それは人の病を負い、癒やすためであった。当然であるが、これは聖書で預言されていたことであった。

> 「まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。（イザヤ 53:4）

聖書は、「私たちの病を負い、私たちの痛みをになった」方が、すなわち「癒やし主」が、遣わされることを預言していた。だが、人々は「私たちの病を負い」の意味を勘違いし、「彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと」思ってしまうという。つまり、その方は「私たちの病」を負われたのに、「罪の罰」を背負われたと思ってしまう、ということである。それで聖書の預言は、続けて次のことを教えている。

> 「しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。」（イザヤ 53:5）

ここで聖書は、先の「私たちの病を負い」は、「罪のために刺し通され」ることだとし、「病」と「罪」は同じであるとした。その方は「罪の罰」のためではなく、まことに「病」を癒やすために、すなわち「罪」を取り除くために「刺し通される」ので、「彼の打ち傷によって、私たちはいやされた」としたのである。では、なぜ「癒やし主」キリストは、私たちを癒やすために「刺し通される」必要があったのだろう。なぜ十字架に架けられ、殺される必要があったのだろうか。

❖ キリストの十字架の目的

神と「分離」した状態が「罪」である。それは神に愛されている自分を認識できないので「不安」が生じ、自分は愛されるはずもないという「自己否定」に発展する。これが「心の病気」の源泉になっている。そのため、「心の病気」を癒やすには、自分がどれだけ愛されているかを認識できるようにする必要がある。別の言い方をするなら、罪が赦されることを示す必要がある。そこで、神は人を癒やすために、人となって来られた。そして、人がどれだけ神に愛されているかを示すために十字架に架けられ、殺されたのである。というのも、神が人のために「いのち」を捨てること以上に大きな愛はないからである。「人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません」（ヨハネ 15:13）。こうして、神であるキリストが私

たちのために十字架でいのちを捨てられたことで、私たちに対するご自身の愛を明らかにし、その打ち傷によって、私たちは癒やされることになった。

> 「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」（ローマ 5:8）

この十字架の言葉が神の力であり、神に愛されている自分を認識できない「不安」を取り除いてくれる。「十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です」（Ⅰコリント 1:18）。すなわち、十字架の言葉が、「心の病気」を癒やすのである。イエスの全き愛が、「心の病気」を癒やす。それでイエスは、「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」（マタイ 11:28）と言われたのであった。イエスが言われた「重荷」とは「自己否定」であり、自分も人も愛せない「苦しみ」である。イエスはその「苦しみ」を取り除くために十字架に架かり、誰であれ、神に無条件で愛されることを明らかにし、罪が赦される「赦しの恵み」を示されたのであった。それは「律法」の行いに関係なく、神の義を誰であれ「ただで」受け取れるということであり、それにより「律法」の「重荷」を終わらせた。「キリストが律法を終わらせられたので」（ローマ 10:4）。それは全て、人を癒やすためであった。

このように、キリストの十字架の目的は、人を癒やすためであった。入り込んだ「死」が神に愛されている自分を認識できなくさせる「罪」（不安）となって、「自己否定」を生じさせるようになったので（心の病気）、キリストは十字架の上で私たちの「罪」（不安）をその身に負われたのである。それは、私たちが「罪」（不安）から離れ、「自己否定」ではなく、神の「肯定」（義）の中で生きるためであった。その結果、キリストの打ち傷ゆえに、人は癒やされることになった。

> 「そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。」（Ⅰペテロ 2:24）

ここで聖書は、キリストは十字架で、「私たちの罪」を背負ったと言っているのであって、「私たちの罪の罰」を背負ったとは言っていない。そして、神が背負われた「罪」というのは、神に愛されている自分を認識できない神との「分離」なので、キリスト

は十字架で、神との「分離」を、すなわち神との「隔ての壁」を背負ったということである。したがって、十字架の意味は次のとおりである。

❖ 十字架の意味

悪魔の仕業で「死」が、すなわち神との「隔ての壁」が入り込み、神から愛されている自分を認識できなくなった。そのことで、人は愛される者を目指すようになり、周りの期待に応える生き方をするようになった。すると、周りの期待が愛されるための「律法」となり、「律法」に違反する者を見れば怒りを覚え、人を愛せなくなった（神の戒めに違反するようになった）。「律法は怒りを招くものであり、律法のないところには違反もありません」（ローマ 4:15）。まさに神との「隔ての壁」が「律法」を生み、人を愛せなくさせる「敵意」を抱かせ、人を苦しめる。これが、「心の病気」を生じさせている（本書 104 頁「「心の病気」のメカニズム」）。そこで、キリストは十字架で「隔ての壁」（罪）を打ち壊し、「敵意」を廃棄されたのである。

> 「キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。敵意とは、さまざまの規定から成り立っている戒めの律法なのです。」（エペソ 2:14-15）

キリストの十字架は私たちへの愛を明らかにされた。それにより、神に愛されている自分を認識できなかったことの「不安」が取り除かれるので、それをここでは「隔ての壁」が打ち壊されたと表現している。その十字架のおかげで「律法」は終わり、「心の病気」は癒やされていく。これが十字架の意味であり、それは人を癒やすためであった。その癒やしを受け取るには、十字架の言葉を信じる「信仰」を必要とするので、神は自らが十字架で示された「赦しの恵み」（無条件の愛）を以て「信仰」を育ててくださる。なぜなら、多くの罪が赦されれば、多く神を愛せるようになり、「多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさで分かる」（ルカ 7:47　新共同訳）、それがそのまま、神への「信仰」を成長させるからである。

このように、キリストは十字架の死を以て、人への「全き愛」を明らかにし、それによって愛されている自分が認識できないことへの「不安」を取り除き、愛されるための「律法」を不要にさせたのである。それは全て、「心の病気」を癒やすためであった。これこそが十字架の意味であり、それは神の治療であった。それは、世の治療とは全く異なる。この世では、様々な否定的な症状を抑える対症療法しかできないからである。無論、熱が出ればそれを下げなければ社会生活がままならないように、そうした

対症療法は社会生活の営みにとっては重要であり、必要である。しかし、「心の病気」は、それに加えて根本治療を必要とする。それは神のもとに行き、「赦しの恵み」によって「霊の体」を着せてもらうことから始まる。そして、「赦しの恵み」によって「罪の赦し」の宣言を受け取ることで神への愛（信仰）を育ててもらう。それはそのまま十字架の愛を知ることであり、神に無条件で愛されている自分の「真実な姿」を知ることを意味する。では次に、この話を「永遠性」の規定という視点から述べてみたい。

❖ 「永遠性」の規定

悪魔の仕業で「死」が入り込んで以来、人は自分の中心である神を認識できなくなった。神の「永遠性」で規定されている自分が見えなくなった。その結果、人は自分が何者なのか、どこから来てどこに行くのか、自分に関することが何も分からなくなった。そのことの「不安」から、人は自分が何者なのかを知ろうとした。そこで、人は自分の行い、学歴、仕事、財産、家柄、そうした「うわべ」で、自分が何者なのかを規定し、自分を知ろうとした。平たく言えば、「人の言葉」で自分を知ろうとしたのである。これを、「有限性の規定での自分」という。

だが、人はすでに、神の「永遠性」によって規定されていた。神の体の部分として、規定されていた。「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です」（ヨハネ 15:5）。人は神の部分なので、神に無条件で愛されることが規定されていた。それは、見た目が罪人であっても、義人として規定されているということである。その規定を明らかにしたのが、キリストの十字架であった。このように、神の規定の具体的な内容は、聖書を通して知ることができる。これを、「永遠性の規定での自分」という。しかし、悪魔の仕業で「死」が入り込んで以来、人の体は「有限性」に規定されてしまい、「永遠性」の規定が見えなくなった。それで人は、「有限性」の規定での自分を受け入れてしまったというわけである。これが「罪」の状態である。

そこで神は、「永遠性」の規定での自分を受け取るようにと、人の心の奥底で呼びかけてくださる。というのも、「永遠性」の規定を受け取らないと、「有限性」に規定された体が滅びると同時に、人である「精神」も滅びてしまうからである。それを避けるために、神は人である「精神」に呼びかけてくださるので、その呼びかけに応答すれば、朽ちない「霊の体」を着せられ、「永遠のいのち」を持つことになる。これを、「永遠性の規定を受け取る」といい、受け取った者を「キリスト者」という。まことにキリスト者とは、「永遠性」の規定での自分を受け取った者である。

しかし、ここからキリスト者の「苦しみ」が始まる。というのも、「永遠性」の規定での自分を受け取ったことで、これまで手にしていた「有限性」の規定を捨てなければならなくなったからである。それを捨てるということは、この世で自分を守ってくれる避難場所を捨ててしまうことなので、「苦しみ」を覚えてしまうのである。それは、この世から見捨てられるということなので、「苦しみ」を覚えてしまう。実際、イエスは「有限性」の規定を捨てたので、すなわちこの世の肩書きを全て拒否したので、人々からはさげすまれ、見捨てられてしまった。

こうして、キリスト者は自分を「永遠性」で規定したことで、「有限性」の規定を捨てなければ立ち行かなくなり、今までにない「苦しみ」を覚えるようになった。この「苦しみ」を終わらせるには、「永遠性」での規定を信じるしかない。キリストがしてくださった自分への規定に、身をゆだねるしかない。そうすれば、これまで獲得してきた自分への「有限性」の規定が、「**ちりあくた**」に思えるようになり、それを捨てられる。

> 「それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらを**ちりあくた**と思っています。」(ピリピ 3:8)

つまり、キリスト者は、キリストの規定を信じる信仰を賜ったことで、「有限性」の規定を捨てなければならない「苦しみ」をも賜ったのである。

> 「あなたがたは、キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための**苦しみをも賜った**のです。」(ピリピ 1:29)

しかし、この「苦しみ」は、「永遠性」の規定を信じることで生じるので、それは希望に通じる「苦しみ」であって、神からの恵みである。それゆえ、「苦しみ」を覚えたのなら心を神に向け、神がされた自分に対する「永遠性」の規定を思い起こすのである。それは、キリストの十字架である。キリストの十字架こそ、私たちの心に神が押された「永遠性」の規定の「刻印」である。神の規定が発効されたことを告げ知らせる「証書」が、キリストの十字架である。ここに、「**心の病気**」の癒やしがある。

このように、キリストの十字架は、神が私たちにされた「永遠性」の規定を人は見えなくなったので、それを思い出させる神の恵みである。この規定を信じることで、「**心の病気**」は癒やされていく。というのも、「**心の病気**」の原因は、「有限性」の規定で

自分を知ろうとしたことにあるからである。「有限性」の規定では、「人の言葉」で自分を規定するので、それが「心の病気」を引き起こしている。例えば、人から馬鹿にされたり、人から悪口を言われたりすると、それをそのまま自分の規定として受け取るので苦しくなり、心は病んでしまう。それを癒やすには、「有限性」の規定を放棄し、「永遠性」の規定を、すなわちキリストの十字架の言葉を受け取るしかない。これが神のなさる「癒やし」であり、十字架の言葉にこそ、人を癒やす「神の力」がある。「十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です」（Ⅰコリント 1:18)。ならば、十字架の言葉だけで病気は完治するのか。

❖ 完治するのか？

「病気」は、「体の病気」と「心の病気」とに分類される。「体の病気」は、人の中に「死」という制約が入り込んだことで生じるようになったので、すなわち「死の体」になったことで生じるようになったので、「体の病気」の完治には、「死の体」を排除する必要がある。それには、朽ちることのない「霊の体」を着せられる必要がある。そこで、神はご自分の呼びかけに応答する者に「霊の体」を着せ、「永遠のいのち」を持つようにし、イエス・キリストと共に生きられるようにする。そうすれば、「死の体」が病気になって朽ち果てても、着せられていた「霊の体」にバトンタッチすることができ（復活)、その時、「体の病気」は永遠に完治する。その時こそ、「体」にまつわる疑問の一切が消滅する時となる。例えば、運動能力の差、知的能力の差、容貌の差など、そうした生まれながらにある差に対して人は「なぜ？」と疑問を持ち、神に「不平等だ！」と叫んできたが、現状の「肉の体」が消え、神と同じ完全な「霊の体」に生まれ変わる時、なぜ生まれながらの「体」には差があるのかという疑問の一切が消滅する。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。「なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである」（黙示録 21:4)。

ならば、もう一つの「心の病気」はというと、その病気の究極の原因は、神に愛されている自分を認識できない「不安」にあるので、神は、人が神に愛されている自分を知るようにすることで癒やされる。そこで神は、無条件の「罪の赦し」を人に受け取らせることで、神に愛されている自分を知るようにさせ、人を癒やしていかれる。人が手にした「有限性」の規定を放棄させ、十字架で明らかになった「永遠性」の規定を持たせることで、人を癒やしていかれる。この治療は、「不安」が完全に生じなくなる「その時」まで続けられる。「その時」とは、「死の体」から「霊の体」にバトンタッチされる復活の時を指す。すなわち、「肉体の死」と共に、「神の国」に移住する時である。「その時」はもう、この世が発信する「否定」の情報は「精神」に持ち込まれ

なくなり、着せられた「霊の体」が持ち込む「神の国」の「肯定」の情報だけとなるので、「心の病気」も完治する。これについては、もう少し肉付けしておく。

私たちがこの世界で見ている自分は、「死」が入り込んで以来、「有限性」という鏡に映る自分であって、それは「真実な姿」のほんの一部にすぎない。そのせいで「不安」を覚え、心が病んでしまった。そこで最初に、神は「神の国」に属する「霊の体」を人に着せ、聖霊の助けが得られるようにしてくださる。「聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます」（ヨハネ 14:26）。その助けによって、人はキリストの十字架の意味を知ることが可能になり、すなわち神に無条件で愛される自分の「真実な姿」を（「永遠性」の規定を）知ることが可能となる。こうして、「心の病気」は癒やしに向かう。しかし、自分の「真実な姿」を完全に意識できるようになり、「不安」がきれいに排除されるには、「有限性」の規定の支配が終わる復活の時まで待たなければならない。その時には、私が神に完全に知られているのと同じように、私も完全に自分の「真実な姿」を知ることになるので、「不安」は排除される。ここに、「心の病気」も完治する。そのことを、聖書は次のように教えている。

> 「今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、その時には顔と顔とを合わせて見ることになります。今、私は一部分しか知りませんが、その時には、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることになります。」（Ⅰコリント 13:12）

このように、「体の病気」も「心の病気」も、「有限性」の規定を行使する「死」の支配が終わる復活の時に完治する。この完治を可能にしたのが、キリストの十字架である。なぜなら、十字架は「死」の力を持つ悪魔も滅ぼし、「その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし」（ヘブル 2:14）、「死」を脱ぎ捨てる復活を可能にしたからである。まことに「神の福音」の真実は、人への「否定」を「否定」し、人が自分の「真実な姿」を認識できるようにすることであり、それがそのまま人の「癒やし」となる。では、イエスは人を癒やす際、なぜ「悪霊」を追い出されたのだろう。「悪霊」と病気とに、どのような関係があるのだろう。そもそも「悪霊」とは、何なのだろうか。そこで、「悪霊」を追い出すという視点からも「癒やし」を論じてみたい。

－「悪霊」を追い出す－

イエスは、「悪霊」を追い出すことで「心の病気」を癒やされた。「こうしてイエスは、ガリラヤ全地にわたり、その会堂に行って、福音を告げ知らせ、悪霊を追い出された」(マルコ 1:39)。また、「悪霊」を追い出すことで「体の病気」も癒やされた。「そのとき、悪霊につかれて、目も見えず、口もきけない人が連れて来られた。イエスが彼をいやされたので、その人はものを言い、目も見えるようになった」(マタイ 12:22)。では、「悪霊」と病気との関係はどうなっているのだろう。それを知るには、「悪霊」の実体を知る必要がある。そこで、話は「悪霊」の実体を知ることから始めたい。

❖ 「悪霊」の実体

日本語の新約聖書で、「悪霊」と訳されているギリシャ語の大半は「ダイモニオン」[δαιμόνιον]である。これは当時の「偶像の神」を言い表す言葉で、その言葉を使い、神の働きに「反対する運動」を表現している。神は真理であり、それに「反対する運動」が真理に逆らう「偽りの情報」の流布であって、「偶像の神」(ダイモニオン)は、まさしくその象徴であった。また、新約聖書で「悪霊」と訳されているギリシャ語には、「悪い」を意味する「ポネーロス」[πονηρός]と、「霊」を意味する「プネウーマ」[πνεῦμα]の二語が用いられている箇所がある。つまり、「悪い＋霊」を「悪霊」と訳している(ルカ 7:21、使徒 19:12, 13, 15, 16、エペソ 6:12)。神の働きに「反対する運動」には姿形はなく、それは「霊」なので、「悪い＋霊」と表現しているのである。

したがって、「悪霊」の実体は、神の働きに「反対する運動」であり、それは真理に逆らう「偽りの情報」の流布である。ならば、神の働きに「反対する運動」の源泉は何なのだろう。それは「死」である。というのも、神の働きは「いのち」であり「平安」であるが、「御霊による思いは、いのちと平安です」(ローマ 8:6)、「死」はそれに「反対する運動」を、すなわち神に逆らう「肉の思い」を展開するからである。「肉の思いは死であり」(ローマ 8:6)。「肉の思い」は、まさに神に逆らう「偽りの情報」である。

そして聖書は、「反対する運動」の源となる「死」を持ち込んだ者を「悪魔」とし、彼を「死」をつかさどる者とする。「死をつかさどる者、つまり悪魔を」(ヘブル 2:14　新共同訳)。この「悪魔」を表現するのに、聖書は「ディアボロス」[διάβολος]を用いている。これは、「敵対者」、「中傷者」を意味する言葉で、特定の誰かを指す言葉ではない。だが、そこに定冠詞を付けることで特定の誰かを指す言葉にし、それを「悪魔」と訳している。さらに言えば、この「ディアボロス」は、ヘブライ語の「サーターン」

[שָׂטָן]の訳語で、「サーターン」は特定の誰かを指す言葉ではなく、「**敵対者**」という一般名詞であり、「**反抗する運動**」の概念を言い表した言葉である。この「サーターン」に定冠詞が付くことで、特定の「**敵対者**」となり、それが日本語の旧約聖書のヨブ記では「サタン」と訳され、ほぼ原語どおりの読み方となっている。

したがって、「悪霊」も「悪魔」も「サタン」も、表現が違っても同じ中身であり、それは「**反抗する運動**」であるということである。その運動を「死」という。「死」は人を滅びに導く運動であり、それと対峙するのが、人をいのちに導く運動である。前者を司るのが「悪魔」であり、後者を司るのが「神」である。そして、「**心の病気**」も「**体の病気**」も、「死」の運動によるのであって、神から出たものではない。イエスはそのことを人に分からせる意図から、「悪霊」を追い出すということをされた。それにより、病気を癒やされた。そこで弟子たちにも、同じようにさせた。「**イエスは、十二人を呼び集めて、彼らに、すべての悪霊を追い出し、病気を直すための、力と権威とをお授けになった**」(ルカ 9:1)。それは、「死」の運動(悪霊)を追い出せば、病気を癒やせるということである。当時は、医学的な知識が乏しい時代であったので、「悪霊」を追い出すことで病気を癒やし、病気の原因は外部から入り込んだ「死」にあることを、神は暗に示されたのであった。

このように、「悪霊」の実体は、神の働きに「**反対する運動**」である。それは「死」による運動であり、この運動を持ち込んだのが「悪魔」である。しかし、「悪魔」の起源については、聖書は沈黙するので分からない。大事なのは、起源ではなく、「悪霊」の実体である(第一巻 70 頁「悪魔の起源」、第一巻 214 頁「ー「悪霊」との戦いー」)。では、「**反対する運動**」は、どのようにして人を病気にしてしまうのだろう。

❖ 病気にしてしまう様

「悪霊」の実体は神の働きに「**反対する運動**」であり、それは人を滅びに導く「死」から出ている。そのため、「**反対する運動**」は人を一生涯「死の恐怖」の奴隷にした。「**一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々**」(ヘブル 2:15)。すると人は、「死の恐怖」から逃れるために様々な「行いの規定」を作り、「行い」が良ければ天国に行けると考え、「行い」によって自他の価値を判断するようになった。しかし、天国の門は「行い」ではなく、キリストを信じる「信仰」である。ゆえに、「行い」によって救われるという考えは「偽りの情報」であり、人の価値を「行い」に置くこともまた「偽りの情報」である。そもそも人は神の部分であり、人の価値は神にある。「**あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です**」(Ⅰコリント 12:27　新共同

訳)。そのことを知らず、人は人の価値を「行い」にあるとする「偽りの情報」を信じてしまい、「心の病気」になった。つまり、「偽りの情報」は真理である神から人を引き離し、心に「不安」をもたらし、「心の病気」をもたらすのである。

また、「反対する運動」は人を滅びに導く運動であるため、その働きは人の体を弱くし、「体の病気」をもたらす。さらには、人の体が弱くなることで、ある微生物が人を脅かす存在へと変わり、人はそれを「病原体」と呼び、それも「体の病気」をもたらす。それだけではない。体が弱くなることで、この世界に存在する物質の中にも、人にとって脅威となるものが現れる。人はそれを「有害物質」と呼び、それもまた「体の病気」をもたらす。

このように、病気は「悪霊」、すなわち「反対する運動」との戦いである。この「反対する運動」は「死」に起因し、それは「偽りの情報」を生み、「病原体」を生み、「有害物質」を生み、それらを媒体に人を病気にする。しかし、イエスの時代は今日のような医学がなかったので、人々は重い病気を「罪の罰」として受け止めた。ゆえに、弟子たちが盲人を見た時、イエスに、「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか」(ヨハネ 9:2) と質問をした。だが、この考えは間違いだったので、イエスは「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません」(ヨハネ 9:3) と断言された。まさしく、病気の原因は罪にあるのではなく、外部から入り込んだ「死」に、すなわち「反対する運動」にある。そこでイエスは、その外部からの運動を分かりやすく「悪霊」と呼び、「悪霊」を追い出すことで病気を癒やされたのである。

例えば、体の病気に対して、イエスは「悪霊」を追い出すことで、人を滅びに導く「反対する運動」の働きを一時的に止め、人の体に抵抗力を戻させ「体の病気」を癒やされた。「イエスは悪霊、それも口をきけなくする悪霊を追い出しておられた。悪霊が出て行くと、口がきけなかった者がものを言い始めた」(ルカ 11:14)。心の病気に対しては、イエスは「神の言葉」の福音を語ることで、「反対する運動」となる「偽りの情報」、すなわち「悪霊」を追い出し、「心の病気」を癒やされた。「福音を告げ知らせ、悪霊を追い出された」(マルコ 1:39)。

ただし、今日では、「体の病気」の原因となる「病原体」や「有害物質」は、かなり解明され、それに対する対処法も大きく進歩している。したがって、「体の病気」に関しては、医師に助けを求めればよい。また、「心の病気」に対しても、対症療法として医

師の支援を受ければよい。とはいえ、どちらの病気も、神と人とを引き離す「死」に起因するので、根本的な癒やしは、神との距離を縮めることにある。それは、「神の言葉」を信じる者になるということである。それゆえ、「体の病気」であれ「心の病気」であれ、「神の言葉」を信じられるように祈ることが肝心である。そうすることで神との距離を縮め、「不安」を排除することを目指す。それこそが、神の目指す真の癒やしなので、「体の病気」であれ「心の病気」であれ、病気を癒やすと言われる「神の言葉」を信じて祈り、神との距離を縮めていくのである。それがそのまま、神と人との距離を縮ませることを邪魔する「反対する運動」との戦いになる。聖書はこれを「悪霊」との戦いとして教えている。そこで、次にそれを見てみたい。

❖ 「悪霊」との戦い

誰もが「心の病気」に、すなわち神と距離があることで生じる「不安」に苦しんでいる。とはいえ、「不安」が増し加わると「精神」は錯乱し、幻覚や妄想を見たり、奇異な行動を取ったりもする。それは今日、「精神病」と呼ばれるが、イエスの時代は「精神」という概念も、「心の病気」という概念もなかったので、そうした症状は、「汚れた霊につかれた人」（マルコ 5:2）、「悪霊につかれた者」（マタイ 8:16）と呼ばれていた。それで、イエスの時代は、「神の言葉」で「悪霊を追い出す」という治療が行われた。「夕方になると、人々は悪霊に取りつかれた者を大勢連れて来た。イエスは言葉で悪霊を追い出し、病人を皆いやされた」（マタイ 8:16　新共同訳）。

先述したように、その「悪霊」の実体は「反対する運動」であり、それは神に逆らう「死」の運動である。神は「真理」であるから、神に逆らう「死」の運動は、「真理」に逆らう「偽りの情報」を展開する。それゆえ、「悪霊」の働きは「偽りの情報」を信じ込ませることに集中する。例えば、「お前は神に愛されないダメな者である」といった「偽りの情報」を、神に逆らう「死」の運動が信じ込ませてくる。そして、この「偽りの情報」が神と人との距離を広げさせ、人を「不安」にし、「心の病気」をもたらす。そこで、イエスがなさった「悪霊どもを追い出す」治療はもっぱら「言葉で」、すなわち「偽りの情報」を締め出す「真理の言葉」で行われた。「真理の言葉」は、神と人との距離を縮めさせるからである。その最上の「真理の言葉」が、罪が赦される「赦しの恵み」の言葉であった。「あなたの罪は赦されています」（ルカ 7:48）。

このことから、「偽りの情報」を締め出す「真理の言葉」、すなわち「神の言葉」には、人を癒やす権威があることが分かる。とはいえ、イエスが十字架に架かるまでは、「死」に打ち勝つ十字架の言葉はまだなかったため、人々はイエスの御名で「悪霊」を追い

出していた。「御名によって悪霊を追い出し」（マタイ 7:22　新共同訳）。それは、イエスに目を向けさせることで、「心の病気」を癒やしていたということである。だが、今はイエスの十字架がある。それによって、罪人であっても神に愛されていることを知ることができるようになり、さらに、イエスが十字架の死から復活されたことによって、人も「死」という「否定」に打ち勝てることを知ることができるようになった。そのため、ここに「愛」と「復活」を教える十字架の言葉が生まれ、私たちを癒やす神の力となったのである。

> 「十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。」（Ⅰコリント 1:18）

こうして、十字架の言葉を受け取らせることで、「悪霊」の実体である「偽りの情報」と戦うようになった。それで聖書は、次のように教えている。

> 「悪魔の策略に対して立ち向かうことができるために、神のすべての武具を身に着けなさい。私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊（色々な偽りの情報）に対するものです。」（エペソ 6:11-12）※（　）は筆者が意味を補足

「悪魔の策略」とは、悪魔が持ち込んだ「死」を背景に、「偽りの情報」を信じ込ませることである。例えば、「死」によって生じた「死の恐怖」を背景に、「人の価値は行いにある」という「偽りの情報」を信じ込ませてくる。そうなれば、人は誰かの行いが悪ければ「赦せない」と思い、人を赦す神に、心を向けられなくなってしまう。ここに「悪魔の策略」があるので、聖書は裁かないで赦すことを強く教えている。

> 「もしあなたがたが人を赦すなら、私もその人を赦します。私が何かを赦したのなら、私の赦したことは、あなたがたのために、キリストの御前で赦したのです。これは、私たちがサタンに欺かれないためです。私たちはサタンの策略を知らないわけではありません。」（Ⅱコリント 2:10-11）

つまり、「悪魔（サタン）の策略」とは、人の心を「偽りの情報」で支配し、人の心が神に向かないようにすることである。「偽りの情報」を以て、神と人との距離を広げさせ、人が神のもとに行かないようにするのである。この「偽りの情報」が「悪霊」の実体なので、悪魔との戦いは「悪霊」との戦いを意味する。それで、聖書は悪魔との

戦いを、「もろもろの悪霊に対するもの」（エペソ 6:12）とし、神の武具をとるようにと指示する。「ですから、邪悪な日に際して対抗できるように、また、いっさいを成し遂げて、堅く立つことができるように、神のすべての武具をとりなさい」（エペソ 6:13）。その武具を、次のように教えている。

> 「では、しっかりと立ちなさい。腰には真理の帯を締め、胸には正義の胸当てを着け、足には平和の福音の備えをはきなさい。これらすべてのものの上に、信仰の大盾を取りなさい。それによって、悪い者が放つ火矢（偽りの情報）を、みな消すことができます。」（エペソ 6:14-16）　※（　）は筆者が意味を補足

神の武具は、「真理の帯」、「正義の胸当て」、「平和の福音」である。その上に「信仰の大盾」がくる。ならば、こうした神の武具の中身は何なのだろう。その中身を、聖書は続けて教えている。

> 「救いのかぶとをかぶり、また御霊の与える剣である、神のことばを受け取りなさい。すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのためには絶えず目をさましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。」（エペソ 6:17-18）

「真理の帯」とは、「救いのかぶと」のことであり、それは「死」から「いのち」に移されたことである。「死からいのちに移っているのです」（ヨハネ 5:24）。その救いの言葉に堅く立つなら、確かに「死」が放つ「偽りの情報」の火矢に勝つことができる。

次に、「正義の胸当て」とは、御霊が与えてくれる「神のことば」である。それは「真理の言葉」なので、それを信じれば、確かに色々な「偽りの情報」の火矢を打ち消すことができる。
そして、「平和の福音」とは、「すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい」である。それは隣人を愛することの実践であり、愛を実践すれば、確かに「偽りの情報」を支えている「死の恐怖」の「恐れ」を締め出すことができる。「全き愛は恐れを締め出します」（Ⅰヨハネ 4:18）。以上が、「悪霊」を追い出すことの実際になる（第一巻 214 頁「－「悪霊」との戦い－」）。

このように、この世界は「悪霊」との戦いであり、それは「死」による運動との戦いであり、「偽りの情報」との戦いである。この「偽りの情報」の火矢が、人に神との距

離を広げさせ、人を「心の病気」にしているので、「偽りの情報」の火矢を神の武具を身にまとい、「神の言葉」を信じる「信仰」で打ち消すのである。「これらすべてのものの上に、信仰の大盾を取りなさい。それによって、悪い者が放つ火矢を、みな消すことができます」（エペソ 6:16）。それゆえ、「偽りの情報」と戦うことを、すなわち「悪霊」と戦うことを聖書は教えている。

また同時に、「死」による運動は「病原体」や「有害物質」を人にもたらし、「体の病気」を引き起こさせたので、「死」による運動を「悪霊」と呼び、イエスはそれを追い出すことで「体の病気」を癒やされた。そうすることの意図は、病気の原因は「死」にあるのであって、罪に対する罰ではないことを教えるためであった。イエスが来られたのは、人を裁くためではなく、人を癒やす（救う）ためであったことを教えるためであった。それで、十字架に架かられた。

> 「そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。」（Ⅰペテロ 2:24）

ここに、「私たちの罪をその身に負われました」とあるが、それはこういう意味である。「罪」とは、神と人との距離がある状態を指すので、神と人との距離を縮めさせ、神と「一つ」になって生きられるようするために十字架に架かられたということである。それゆえ続きに、「私たちが罪を離れ、義のために生きる」とあり、このことが人を癒やすとある。

以上が、「悪霊」を追い出す視点から見た癒やしの話であり、それは第一巻で見た「神の福音」と何ら変わりがない。それは、まさしく「否定」（偽りの情報）の「否定」であり、「偽りの情報」による病気を癒やすことである。では、日常の視点から見る「癒やし」の話をしたい。

－日常の視点から見る「癒やし」－

「病気」の原因は、入り込んだ「死」にある。「死」によって、人の存在が完全に「否定」されてしまったことにある。「死」という滅びに向かう運動が、人が何をしようとも全てを「無」にしてしまうことにある。さらには、入り込んだ「死」によって、神を認識できなくなったことが人を「不安」にし、見える安心をむさぼる「罪人」にしている。しかし、いくら自力での安心を求めても、結局は「死」という滅びに向かう運動には打ち勝てないので、様々な苦しみの症状が「体」にも「心」にも現れる。現れた症状が社会生活に不都合をきたすと病名が付き、「病人」と呼ばれる。だが、病名が付けられなくとも、「死」が入り込んだ時点で、誰もが余命を宣告された「病人」と同じであって、誰もが見える安心をむさぼる「罪人」である。そのため、病を癒やすことも、罪を取り除くことも、それは信仰による「死」との戦いになる。そこで聖書は、そのことを次のように教えている。

> 「信仰による祈りは、病む人を回復させます。主はその人を立たせてくださいます。また、もしその人が罪を犯していたなら、その罪は赦されます。」
>
> (ヤコブ 5:15)

このように、入り込んだ「死」によって人は「病人」になり、「罪人」になった。それゆえ、「神の福音」の真実は「死」からの「癒やし」である。ここでは、その「癒やし」を日常の視点から見ていく。それは、「病人」の姿を時系列で見ることから始める。

❖ 「病人」の姿を時系列で見る

「病人」の姿は赤ちゃんから始まる。赤ちゃんは、初めから余命宣告された「病人」として、すなわち「死」からは逃れられない状態で生まれてくる。「死」とは、正確に言えば神との「分離」であり、それは永遠性の神を認識できない有限性の「体」であり、その「体」では滅びるしかないということである。そして、その「体」では神を認識できないので「不安」が生じる。つまり、赤ちゃんは神が認識できない「不安」を抱えて生まれてくる。その神は霊なので、霊的な「不安」を抱えて生まれてくる。その中では、大声で泣き叫ぶことしかできない。

いずれにせよ、その時点から何かと結びつき、安心を得ようとする行動が始まる。すると、そこには微笑みかけてくれる母親がいるので、赤ちゃんは自分には愛される価値があると感じ、安心する。こうして、赤ちゃんは母親という「人」と結びつくよう

になる。また、母親は赤ちゃんにお乳を飲ませる。すると赤ちゃんは、自分は生きる価値があると感じ、安心するので、お乳という「物」と結びつくようになる。このように、赤ちゃんは愛される価値を感じさせてくれる「人」を見つけ、また生きる価値を感じさせてくれる「物」を見つけ、それと結びつくことで安心する。その体験で、霊的な「不安」を覆い隠すようになる。

その後、赤ちゃんは幼子へと成長し、活動範囲が広がる。そうなると、以前にも増して広い範囲で安心できる「人」や「物」を見つけられるようになるので、それを見つけては結びつこうとする。自分と関わってくれる「人」を見つけると一緒に遊び、また、生きる価値が刺激される「物」を見つけると、それを手に入れて遊ぶ。そのようにして、新しい「人」や「物」を見つけては結びつき、安心を得ようとする。それを以て、さらに霊的な「不安」を覆い隠すようになる。

その後、幼子は青年へと成長し、その活動範囲は格段に広がる。そこで、「人」との関わりでの安心を窮めようと、「人」から良く思われる自分を熱心に目指すようになる。また、「物」との関わりでの安心を窮めようと、安心できる「物」を手に入れるのに必要な「お金」を熱心に求めるようになる。その延長で、大人になっていく。こうして、少しでも多くの安心を手にすることで、霊的な「不安」を覆い隠すようになる。

しかし、どれほど素晴らしい「人」との関わりを手に入れても、またどれほど「お金」を手に入れても、一時の安心しか得られない。「人」との関わりでは、無条件で愛される価値は得られないからである。また、「物」も永遠に生きられる価値を提供してはくれないからである。そのため、それは一時の安心で終わってしまう。加えて言うと、この世にあるものは何であれ、常に失う危険がある。「人」であれば、事故や病気で失うこともある。喧嘩して失うこともある。「お金」であれば使えばなくなり、盗まれることもある。ゆえに、「人」や「お金」と結びつけば結びつくだけ、すなわち多くの「人」との関わりや、多くの「お金」を手にすればするだけ、それを失いはしないかという「心配」が増し加わってしまい、手にした安心をも呑み込んでしまう。そうした中、最後は「死」に滅ぼされてしまい、全ては「無」になる。要するに、何をしようとも霊的な「不安」は覆い隠せないのである。これはもう牢獄の暮らしであって、そこには自由がない。何を選択しても「無」になるので、自由は全くない。

以上が、日常の視点から時系列で見た「病人」の姿である。ならば、一体何が自分の存在を、そして自分の価値を変わることなく「肯定」し続けてくれるのだろう。無論、

人の存在を「肯定」し続けてくれるのは神である。神は「永遠のいのち」を人に得させ、その「永遠のいのち」を豊かにしていくことで、人の存在を「肯定」し続けてくださる。「わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです」（ヨハネ 10:10）。これは、神との関係が回復し（再結合）、神との距離が縮まっていくことを意味する。そのことだけが霊的な「不安」を排除でき、「病気」を癒やしてくれる。ところが、人は神から逃げてしまうのである。

❖ 神から逃げる

人の土台は神なので、人は神を霊的に知っている。しかし、入り込んだ「死」によって有限性となった体の五官では、その神を認識できない。そのため、人は絶えず霊的な「不安」の中にある。この「不安」こそが、人の病気の実体である。そこで、人は「不安」を何とかしようと、五官で認識できる安心と結びつこうとする。それは「人間的な確かさ」であり、それによって霊的な「不安」を覆い隠そうとする。そのため、手にした「人間的な確かさ」が、安心をたくさん提供してくれると、社会生活に不都合をきたす症状は出ない。だが、それが十分な安心を提供できなかったり、それを失ったりすると、途端に社会生活に不都合をきたす症状が出て「病気」と診断される。それでも人は神を求めず、次から次に「人間的な確かさ」を求め、すなわち周りから良く思われる「評判」や、周りから羨ましがられる「富」を求め、それと結びつくことで霊的な「不安」を覆い隠そうとする。そのようにして、自分の真の「病気」、すなわち自分の霊的な「不安」とは向き合おうとしない。

とはいえ、人の余命はますます長くなり、人は自分の真の「病気」と向き合う時間を多く持たなくてはならなくなった。そのことで、人は結びつく先を、これまで以上に見つけ出し、自分の安心を今まで以上に確保しなくてはならなくなった。しかし、先述したように、この世の何と結びついても一時の安心しか得られない。なぜなら、必ず来る「肉体の死」からは逃れられないからである。

その中、人が新たに見つけ出した安心できる場所があった。それは何と、「病気」である。人は自分の苦しみに対し、何らかの「病名」が宣告されることで安心するようになった。「私は病気だから」と安心し、自分の真の「病気」とは向き合わなくなった。「私は病気だから」と開き直ることで、霊的な「不安」を覆い隠し、神であるイエス・キリストの治療を拒むのである。それはつまり、神を「信じる」か「信じない」かの選択で、「信じない」方を選んでしまうということである。

このように、人は神から逃げてしまう。それはひとえに、「人間的な確かさ」を求めるからである。正確に言うと、結びついたものによって得られる安心を手放せないからである。そこで神は、結びついたものが生じさせる困難を静観し、例えば結びついたものを失うという困難を静観し、同時に、人の「潜在意識」に呼びかけ続け、人が降参して神のもとに来るのを待たれる。実は、人が何を手に入れても、しばらくすると心の奥底で「**空しさ**」を覚えてしまうのは、「潜在意識」への神の呼びかけが、手にした「人間的な確かさ」での安心を拒否するからである。つまり、「**空しさ**」は、神からの呼びかけにほかならない。

そもそも、神が人の心に呼びかけるのは、神が人に人格を持たせたからである。人格とは、徹底した自由であり、自発性である。神は人から何でも奪い取ることができるが、この自発性だけは奪い取れない。なぜなら、奪い取れば人はロボットになってしまうからである。それは、人を滅ぼすことを意味する。それゆえ、神は人に呼びかけ、人が神の差し出す御手に掴まるのを待たれる。人が自分の滅びの現状に気づき、神に助けを乞うのを、あの放蕩息子の父親のように待っておられる。そして、神に助けを乞うことが、神を「**信じる**」という「信仰」であり、その「信仰」によって、神は「病人」を癒やされる。これが、日常の視点から見た神の「癒やし」であり、それは神の呼びかけに応答することで行われる。

以上が、「癒やし」の話である。『福音の回復』第一巻で見た福音を、別の視点から見れば、それはまさしく「癒やし」の話である。というのも、「癒やし」も、人を「否定」するものを「否定」する話だからである。それは、第一巻で見てきた福音と全く同じである。というより、神の「癒やし」が「神の福音」である。なぜなら、「神の福音」は、入り込んだ「死」によって、「罪人」という「病人」になった人間を、元の健康な状態に戻すことだからである。

そして、最後に述べておきたいのが、神が目指す真の「癒やし」である。神は入り込んだ「死」が生じさせた、「**体の病気**」、「**心の病気**」を癒やされるが、実はその先がある。神が目指す真の「癒やし」がある。そのことを最後に述べておきたい。

－真の「癒やし」－

イエスは多くの病人を癒やされたが、その際、度々イエスは彼らにこう言われた。「**気をつけて、だれにも何も言わないようにしなさい**」（マルコ 1:44）。目が見えない人たちを見えるように癒やした時は、さらに厳しく言われた。「**すると、彼らの目があいた。イエスは彼らをきびしく戒めて、「決してだれにも知られないように気をつけなさい」と言われた**」（マタイ 9:30）。こうしたイエスの一連の言葉は、何を意味するのだろう。これについては先述したように、「**体の病気**」を癒やすのが神の目的ではなく、「**心の病気**」を癒やすのが本来の目的であったからだという説明をした（本書 121 頁「癒やしの実際」）。

しかし、「**心の病気**」の癒やしも通過点であって、その先にこそ神が目指す真の「癒やし」がある。というのも、この世界は「死」が支配する世界なので、何をどうしようとも「死」が放つ「否定」の火矢を免れることはできないからである。つまり、いくら「**体の病気**」や「**心の病気**」が癒やされても、この世界では一時の話であり、再び「死」が放つ「否定」の火矢によって「体」は病気になり、最後は朽ち果ててしまう。「死」が放つ「否定」の火矢、すなわち「偽りの情報」によって、「心」も病気を繰り返し、止むことのない「偽りの情報」に何度でも苦しめられる。そうである以上、そうした苦しみに打ち勝てるように、神は真の「癒やし」を目指される。無論、神の国に引き上げられれば、「否定」の火矢に苦しむことはもうないが、この地上でその火矢に苦しむことのないよう、神は導かれる。ここでは、それを見ていきたい。それを知るには、神は何に関心があるかを知る必要がある。

❖ 神の関心

人の関心は、遭遇する困難な出来事の解決である。病気の解決、金銭的な問題の解決、仕事で起きた問題の解決など、人を苦しめる外的な出来事の解決に人は関心がある。それゆえ、苦しみの解決を神に祈る。神は、人を苦しめる出来事を解決してくださる方だと信じ、苦しみを覚える出来事の解決を神に望む。人は苦しみを覚える事態を「患難」と呼ぶが、「患難」の解決を神に求める。しかし、神の関心は、人がこの世界で遭遇する「患難」の解決ではない。なぜなら、「死」が支配するこの世界で暮らす以上、人を苦しめる「患難」は避けられないからである。

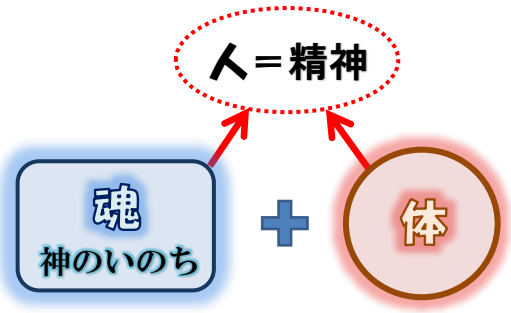
この世界の出来事は何であれ滅びに向かう有限性に属すので、世界を滅びに向かわせる地震や台風、日照りや大雨といった天変地異は避けられない。人が老いていくこと

も、滅びに向かうことで生まれる「偽りの情報」を耳にすることも避けられない。そのため、「患難」を解決することに神の関心はない。「患難」を解決したところで、世界は消えてしまうからである。世界は滅びるしかない「有限性」で出来ているので、それは必然的に「虚無」に服すのである。「被造物が虚無に服した」（ローマ 8:20）。

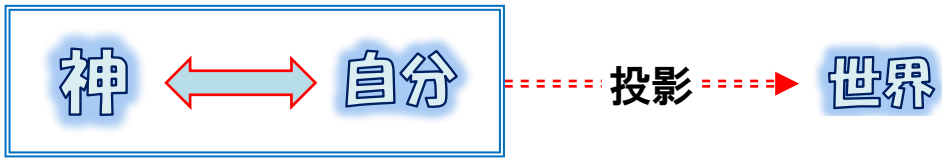
つまり、この世界は「無」である。「無」に対して何をしようが、それは「無」でしかないので、この世界で人が遭遇する「患難」を解決することに、神は関心がない。ならば、何に関心があるかといえば、それは、人が「患難」の中にあっても「平安」を覚えるようになることにある。それこそが神の目指す人の真の「癒やし」にほかならない。その「癒やし」は、神との関係を正しく築くことで得られる。

❖ 神との関係を正しく築く

人は、神の友と呼ばれるように造られた。「彼は神の友と呼ばれたのです」（ヤコブ 2:23）。そのために、神はご自分の「いのち」を人に貸し出し、「神の思い」を人に発信し、神に向かって人を動かした。それにより、人は認識ができ、思考ができるようになった。こうして、人は神の中で生き、動き、存在することになった。「私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです」（使徒 17:28）。



それはつまり、人の土台は神であって、人は神と一対一で向き合った関係にあるということである。これが人の中心であり、その中心が、この世界に投影されている。



目に映る世界の印象は、人の中心である神と人との関係の投影なので、神との関係を正しく築くことができれば、目に映る世界の「患難」にも、「平安」を覚えることができる（本書 12 頁「人の中心」）。これこそが、神が目指す真の「癒やし」である。それは、「患難」の解決ではなく、人の中心である、神との関係を正しく築くことである。

人は、神の友と呼ばれるように造られたので、神の友となる関係を築くことで、目に映る世界の状態に左右されない「平安」が得られる。その「平安」は人の中心で起きることなので、外部の「患難」に左右されることがない。この世が与える平安は「患難」の解決を媒体とするが、神が与える「平安」は、神との関係を媒体にするため、全く異なるのである。それでイエスは、次のように言われた。

> 「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。」
>
> （ヨハネ 14:27）

世が与える平安は、「患難」の解決である。それは、例えば、病気で苦しむ人の病気を治すことであったり、金銭的な困難に苦しむ人に金銭を与えることであったりする。しかし、神が与える「平安」は、それらとは全く異なる。それは、神との関係を正しく築くことでの「平安」であり、すなわち友としての関係を築くことでの「平安」であるため、「患難」には左右されない。それが、神が人に対して目指す真の「癒やし」である。では、「平安」の中身をさらに掘り下げてみたい。

❖ 「平安」の中身

「愛せよ！」という神からの命令を、人は心で聞いている（良心の声）。そこで人は、その声に従い、人を愛そうとする。だが、愛そうとすればするほど愛せない自分の限界に気づいてしまう。その際、神の命令を達成できない限界を、すなわち「罪」を、責められることなく無条件で赦されたならどうだろう。罪人でも愛されるのなら、安心して生きていける。ここに「平安」がある。そこで神は、人の罪を無条件で赦される。「だれかが、わたしの言うことを聞いてそれを守らなくても、わたしはその人をさばきません」（ヨハネ 12:47）。ただ赦すだけでなく、人の限界を補い、その人は正しいと弁護までしてくださる。その方が、イエス・キリストである。

> 「たとえ罪を犯しても、御父のもとに弁護者、正しい方、イエス・キリストがおられます。」（Ⅰヨハネ 2:1　新共同訳）

つまり、人は自分の限界を神に差し出すことで、神がそれを弁護してくださるのである。これこそが神と人との正しい関係であり、この関係を築くことで「患難」に左右されない「平安」を手にすることができる。

ちなみに、御父「のもとに」の原文は「プロス」[πρός] で、それは「～と共に（with）」という意味なので、このように訳されている。NKJV は、「with the Father」と訳している。父と子は「一つ」なので、「わたしと父とは一つです」（ヨハネ 10:30）、イエス・キリストは父なる神と共に、私たちを弁護してくださるということである。それは決して、父なる神に対し、子であるキリストが私たちを弁護するということではない。もしそのようなことになれば、それはもう三位一体の神ではない。キリストが私たちを弁護するときは、三位一体の神が一緒になって弁護してくださっているということである。そうである以上、私たちの見た目は罪人であっても、神の前ではもう「義人」なのである。生き方は未だ古いままで同じに見えても、もう「弁護者」が付いたので、もはや別人である。よって、新しく造られた者という扱いになる。

> 「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」（Ⅱコリント 5:17）

こうして、キリスト者の上には、キリストと共に生きる新しい人生が始まる。キリスト者は自分の限界を知り、それを神が贖ってくださるという新しい人生が始まる。それは見捨てられることがなく、こんな私であっても無条件で愛されているという、信仰による体験である。この体験こそが不動の「平安」の中身であり、真の「癒やし」であり、それは言ってみれば、神と人との距離を「ゼロ」にすることである。

❖ 神と人との距離を「ゼロ」にする

三位一体の神が「一つ」であるように、神と人とも「一つ」になることが神の思いである。「それは、父よ、あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにいるように、彼らがみな一つとなるためです。また、彼らもわたしたちにおるようになるためです」（ヨハネ 17:21）。これを、人との距離を「ゼロ」にするといい、友としての関係を築くという。そうした神との関係が人の中心で築かれていけば、この世界の「患難」の中にあっても「平安」を覚えることができる。

そこで、キリストは十字架に架かられた。その十字架は、神と人との間にあった「隔ての壁」を壊し、神と人とを「一つ」にする。「隔ての壁」は「死」であり、それが人の罪なので、「死のとげは罪であり」（Ⅰコリント 15:56）、十字架は人の罪を無条件で赦すことで「隔ての壁」を壊し、神と人とを「一つ」にするのである。

「キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。（中略）両者を一つのからだとして、十字架によって神と和解させるためなのです。」

（エペソ 2:14-16）

キリストの十字架は、まさしく神と人との距離を「ゼロ」にする神の全き愛である。この全き愛を信仰で受け取り、神に無条件で愛されている自分を知るようになればなるほど、神と人との距離は「ゼロ」に近づき、人はどのような「患難」の中にあっても「平安」でいられる。「体の病気」の中にあっても、「心の病気」の中にあっても、「平安」でいられる。これこそが、神が人に対して目指す真の「癒やし」である。

このように、真の「癒やし」は、「患難」の中にあっても「平安」を覚えるようにすることである。そうなれば、見える「患難」は「軽い患難」になる。

「今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。」（Ⅱコリント 4:17）

「軽い患難」になるのは、神と人との距離が「ゼロ」に近づくからである。神と人とが「一つ」に向かって進み、人が無条件で愛されている自分の「真実な姿」を知るようになるから、神と人との距離は「ゼロ」に近づく。これを、友としての関係を築くという。それを築くことが、「患難」に左右されない真の「癒やし」をもたらす。その「癒やし」のために、キリストは十字架に架かられたのである。そして、神が真の「癒やし」を目指す理由は、この世では誰であれ苦しみを避けられないからである。「体の病気」、「心の病気」、天変地異、予期せぬ災い、予期せぬ失敗、そうしたことで生じる苦しみは避けられないので、その苦しみを凌駕する「平安」を、神との距離を限りなく「ゼロ」に近づけることで、神は人に与えてくださるということである。

では、神との距離が「ゼロ」になるというのは、どういうことなのだろう。それは、自分の「真実な姿」を知るようになることだと述べたが、ならば、自分の「真実な姿」とはどのような姿なのだろうか。それは、無条件で愛されている姿だと述べたが、ならば、どうして人は無条件で愛されるのだろう。そこで、人の「真実な姿」を、徹底的に掘り下げてみたい。

❖ 人の「真実な姿」を掘り下げる

結論から言えば、人の「真実な姿」は「無」である。なぜなら、人は何もない「無」から造られたからである。神は何もないところから天地創造をし、そして人を造られた。見えるものは、まさに見えない「無」から造られたのであって、目に見えるものからできたのではない。「見えるものが目に見えるものからできたのではないことを悟るのです」（ヘブル 11:3）。つまり、人の起源は「無」であり、その「無」を生かすために、神はご自分の「いのち」を吹き込まれた。「いのちの息を吹き込まれた」（創世記 2:7）。したがって、人は自分の力で生きているのではなく、神が私のうちに生きておられる存在である。そのことをパウロは、「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです」（ガラテヤ 2:20）と述べている。

その神は、「無」ではなく「絶対性」である。それは「ある」であって、消えることなく存在し続ける「永遠性」である。これこそが、「真実な姿」を知る物差しである。物差しがなければ、大きい小さい、重い軽いといった判断はできないように、人の「真実な姿」は、「絶対性」を通して初めて知ることができる。その「絶対性」の前では、人はまさしく「無」でしかない。自らの力で存在しているのではない以上、神の助けの中で存在している以上、人は「無」である。何かができる自分に思えても、神の前では何もできない、「無力」の者でしかない。そのことは、神が造られた宇宙の大きさと、自分の大きさを比べれば容易に理解できる。いくら自分が大きく見えても宇宙の大きさと比べれば、その大きさはゼロに等しいからである。それゆえ、神は人を無条件で愛される。どういうことなのか、説明しよう。

赤ちゃんは、何もできない。赤ちゃんは、何もできない自分を知っている。それでも、できることが一つある。それは、助けを求めて泣き叫ぶことである。その様は、あの取税人が、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」（ルカ 18:13）と叫ぶのと何ら変わりがない。しかし、イエスはあの取税人を義とすると、すなわち助けると言われたように、人は何もできない赤ちゃんだからこそ神は助け、無条件で愛するのである。それは、人の「真実な姿」は、何もできない赤ちゃんだからである。それゆえ、お漏らしをしようが（罪を犯そうが）叱ることもなく、その後始末を神は当たり前のようにしてくださる（弁護してくださる）。全ては、何もできないからである。

しかし、赤ちゃんも成長し幼子になると、何かができるようになる。すると親は、幼子を無条件では愛せなくなる。その行いが悪いと叱るようになり、親の期待に添わないと愛さなくなる。さらに成長し青年になると、彼は多くのことができる自分を知る

ようになり、親の言うことを聞かなくなる。こうして、何かができる自分を知り、それを主張するようになることで、人との関係は形式的なものに変化していく。それは一言でいうと、自分は何々ができると自分を高くすることで、人の関心を引く関係である。しかし、それは関心を引くだけで、無条件で愛されているわけではない。無条件で愛されるのは、何もできない自分を知っている赤ちゃんだけである。

人と人との関係がそうであれば、人と神との関係は言うまでもない。人が神の前で、自分は何々ができると主張すればするほど、そのようにして自分の力を誇り、自分を高くすればするほど、神は人を助けられなくなり、神との関係も形式的なものになる。そこでイエスは、次の譬えを話された。

> 「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりはパリサイ人で、もうひとりは取税人であった。パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』」
>
> (ルカ 18:10-12)

パリサイ人は神の前で、自分はこれだけのことができると自分の力を誇り、自分を高くした。そのことで、神からの義を受け取ろうとした。他方、取税人は、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」(ルカ 18:13) と祈ったという。そして、イエスは次のようにこの譬えを締め括られた。

> 「あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」(ルカ 18:14)

イエスは、「自分を低くする者は高くされる」という言葉で締め括られた。これは、神の前で自分は何もできない者であることを、素直に告白できる者を神は助けるということである。これはまさに、人の「真実な姿」は「無」であって、何もできない者であることを示している。人は、自分に何かができれば神に愛されると思っているが、神は人が何もできない者であるからこそ人を愛される。人が「無」であるからこそ、人のうちにあって神が生きることができ、神と人と完全に「一つ」になれる。これを、人の「弱さ」のうちに、神の力は完全に現れるという。

「しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。」（Ⅱコリント 12:9）

このように、人の「真実な姿」は「無」であり、何もできない者なので、平たく言えば「弱さ」しかない者なので、神の力は完全に現れる。人の罪を赦し、人の不足を補うことができる。人を無条件で愛することができる。しかし、悪魔の仕業で「死」が入り込んで以来、人は自分の「真実な姿」が見えなくなった。その結果、人は自分を高くすることを目指すようになった。

❖ 自分を高くする

人は入り込んだ「死」のせいで、「絶対性」である神が見えなくなった。その結果、自分の「真実な姿」を知る唯一の物差しを失った。そこで、人は自分を知る新たな物差しを隣人に求めた。周りと自分を比較することで、自分が何者なのかを知ろうとしたのである。こうして、人は自分と周りとを比べることが常となり、どうすれば少しでも自分を周りよりも高くできるかを目指すようになった。自分にはどのような可能性があるのかを探り、自分には何ができるのかを知ろうとするようになった。その結果、周りの人たちと比べ、できることが多く見つかれば、自分が偉くなったと思うようになった。しかし、それは幻であった。なぜなら、何かができる自分を支えているのは肉の体であり、肉は消えてなくなるからである。何ができようとも、それは一時的であって、やがて何もできなくなる肉の体の死が訪れるからである。それが訪れたなら、そこからはもう、自力で抜け出すことはできない。

この肉体の死は決定事項である以上、何かができるというのは幻であって、真実は何もできない者である。人の中心は神であり、その神が見えれば、そこに対峙する自分の姿は何もできないことがすぐに分かる。だが、その神が見えなくなったために、人は幻の中の自分を、自分の「真実な姿」だと錯覚するようになった。この世の富や名誉で着飾った自分を、「本当の自分」だと思うようになった。これでは、神との関係を築くことができない。神は人の「真実な姿」を知っているので、それは何もできない姿だと知っているので、人を無条件で愛し助けようとされるが、人の側がその助けを自分への錯覚から拒むのである。自分はこれだけのことができるから大丈夫だと、神の助けを拒んでしまう。自分は一人で生きていけると、神の助けを拒否する。

そこで、神は自分を高くする者を低くしようとされる。それは、人に襲いかかる「患難」を静観することで、人を低くしようとされる。なぜなら、「患難」に襲われると、何もできない自分に気づく機会が訪れるからである。それで神は、キリスト者が病気で苦しんでも、それを静観するということも辞さないのである。全ては、人を低くするためである。何もできない自分を告白させ、神に助けを求めさせるためである。しかし、そのおかげで真の「癒やし」に向かうことができる。何があっても愛されている自分を知り、病気という「患難」に左右されない「平安」を手にすることができる。

このように、人は自分を高くするので、神は人を低くされる。人の「真実な姿」は「無」であり、何もできない者なので、平たく言えば「弱さ」しかない者なので、神はそれを人が知るようにされる。「弱さ」しかない自分を神の助けによって知れば、そこに神の力は完全に現れるからである。そこでイエスは、ともするとキリスト者は、神のためにこれだけのことができたと誇ってしまうので、「**自分に言いつけられたことをみな、してしまったら、『私たちは役に立たないしもべです。なすべきことをしただけです』と言いなさい**」（ルカ 17:10）と言われたのである。そして、「弱さ」しかない自分に気づかせようとする神の働きが、『福音の回復』第一巻で見た、福音の「第三ステージ」になる。では、ここまでの話を、パウロの証しで整理してみたい。

❖ パウロの証し

パウロは、神から特別な啓示が与えられていた。神からの言葉を託され、それを人々に伝えていた。また、パウロが病人のために祈ると癒やされた。「**祈ってから、彼の上に手を置いて直してやった**」（使徒 28:8）。パウロの身に着けている物を病人に当てるだけでも癒された。「**パウロの身に着けている手ぬぐいや前掛けをはずして病人に当てると、その病気は去り、悪霊は出て行った**」（使徒 19:12）。そのようなパウロであったが、彼にも病気があった。その病気のことを、彼は次のように述べている。

> 「また、その啓示があまりにもすばらしいからです。そのために私は、高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高ぶることのないように、私を打つための、サタンの使いです。」（Ⅱコリント 12:7）

パウロは病気を、「とげ」と表現し、それは「サタンの使い」だとした。なぜなら病気は、悪魔（サタン）の仕業による「死」が入り込んだことで生じるようになったからである。神が人を病気にしたのではなく、サタンによって入り込んだ「死」が人の体

を朽ちる有限性にし、人は病気を覚えるようになったので、病気のことを「サタンの使い」とし、「とげ」とした。その「とげ」が、自分が高ぶらないよう与えられたとは、キリスト者が病気で苦しんでも、神はそれを静観するということである。

ちなみに、病気も罪も「死」によって生じるようになったので、パウロは、「死のとげは罪であり」（Ⅰコリント 15:56）とも言っている。ただし、この箇所で「とげ」と訳されているのは「ケントロン」[κέντρον]で、サソリやスズメバチなどの「とげ」で、人に致命傷を与える「とげ」を指す。神と人を分離させる「罪」は、人には致命傷となることから、この言葉が用いられている。他方、「肉体に一つのとげを与えられました」の「とげ」は、「スコロプス」[σκόλοψ]で、杭やいばらのような、そうした類の「とげ」という言葉が用いられている。体の病気は、神と人を分離する致命傷ではなく、ただ痛みを伴うだけなので、「スコロプス」が使われている。大事なのは、どちらもサタンの使い」であって、悪魔の仕業による「死」に起源を持つということである。

さて、話を戻そう。パウロは自分の病気の意味を理解していた。それは、自分が高ぶることのないようにするためであったと。しかし、その病気は、あまりにも苦しかったので、パウロは癒やしてほしいと神に真剣に祈った。だが、癒やされなかった。パウロは再び祈った。それでも神は静観し、癒やさなかった。それでもパウロは、あきらなかった。何としても病の苦しみを終わらせたく、三度目の祈りをした。「このことについては、これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました」（Ⅱコリント 12:8）。すると、ついに神は口を開き、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」（Ⅱコリント 12:9）と言われたのである。これは、人の「弱さ」のうちに、神の力が完全に現れるようになることが、神が目指す真の「癒やし」であるということを意味している。このパウロの証しから、「癒やし」の話を総括すると、次のようになる。

人の中心は、人は神と一対一で向き合っている状態である。神が土台となり、人が神に支えられている状態である。その神は「絶対性」であり「永遠性」なので、その前での人の姿は「無」であり、何もできない「弱さ」でしかない。しかし、そうであるからこそ、神は人を無条件で愛し助け、人と「一つ」になることができる。これが人の「真実な姿」である。ところが、人は入り込んだ「死」によって神が見えなくなり、自分と人を比較し、その中で自分を知るようになった。人は見える「有限性」で自分を規定し、自分は何々ができるから幸せだと錯覚するようになった。この錯覚こそが真の「病気」であり、「罪」である。

この「病気」を癒やすには、「有限性」の規定を廃棄させるしかない。それは、この世に対して死ぬということである。死ぬことができれば、神なしでは生きられない「無」の自分が見え、神の力が完全に現れるようになる。神からの「永遠性」の規定を受け取ることができ、神が私のうちあって生きていることを知ることができる。

> 「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。」（ガラテヤ 2:20）

「十字架につけられました」とは、この世に対して死んだということであり、「有限性」の規定を廃棄したということである。それはそのまま、神なしでは生きられない「無」の自分を、何もできない「弱さ」しかない自分を、知るようになったということである。そのことで、「キリストが私のうちに生きておられる」ことを知ることができたことをパウロは証ししている。神と「一つ」になれたことを証ししている。これこそが真の「癒やし」であり、この「癒やし」にこそ神の関心がある。

このように、神は人の「体の病気」や「心の病気」も癒やされるが、神が目指す真の「癒やし」がある。それは、人と「一つ」になることである。この神との関係だけがいつまでも残るので、それこそが人には真の「癒やし」になる。そこで神は、人が自分の「弱さ」に気づけるように助けてくださるというのが、「神の福音」になる。パウロの証しは、そのことを教えている。

ここでは、「癒やし」という視点で「神の福音」を見てきたが、今度は「再結合」という視点で見てみたい。というのも、人は神と「分離」した状態にあり、その状態を「罪人」といい「病人」というので、神による「癒やし」は、分離した神との「再結合」から始まり、その結合が豊かになっていくことだからである。これをイエスは、「わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです」（ヨハネ 10:10）と言われたのである。そういう意味では、次章の「再結合」の話は、見てきた「癒やし」の話の掘り下げであり、最後に述べた、真の「癒やし」の続きの話である。

第六章　「再結合」

「神の福音」は、人に対する「否定」の「否定」であり、それは元の状態に戻すことなので、これを「癒やし」という。そして、人に対する「否定」の起源は「死」であり、それは神との「分離」なので、人に対する「否定」の「否定」は神との「再結合」から始まり、その「再結合」を豊かなものにすることを目指す。そこで、ここでは神との「再結合」という視点で、「神の福音」を見ていく。すると、前章での「癒やし」の話では見えなかった、人が苦しみを覚える「**体の病気**」と「**心の病気**」の下に潜む、人の「**真の病気**」が見えてくる。加えて、神はその「**真の病気**」を癒やそうとされることが見えてくる。人の側は、「**体の病気**」と「**心の病気**」の癒やしを願うが、神が目指すのは、人の「**真の病気**」の癒やしであることが見えてくる。その「**真の病気**」は、広い意味では「**心の病気**」に分類されるが、正確には異なる。「**心の病気**」は、あくまでもこの世界での苦しみを基準に見た症状であり、「**真の病気**」は、あくまでも神との距離を基準に見るからである。いずれにせよ、前章の最後では「－真の「癒やし」－」について触れたが、ここではその話の続きをする。

－神との「再結合」－

「神の福音」は「癒やし」であり、それは神との「再結合」から始まり、その「再結合」を豊かにしていくことである。イエスはこれを、「**わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです**」（ヨハネ 10:10）と言われた。そこで、ここでは神との「再結合」という視点から福音を見ていくが、それは人の現状の話から始まる。

❖　人の現状の話

人は生まれ持った「病気」で苦しんでいる。人は神の「いのち」に支えられ、神による無限の「可能性」を持っているにもかかわらず、死が入り込んだことで、「**死が入り**」（ローマ 5:12）、その「可能性」が死に向かう運動（有限性）で制限され（否定され）、苦しんでいる。ただ「可能性」を思い描くだけで、それが現実へと全く移行しないことに「戸惑い」を覚え、人は苦しんでいる。「永遠性」の土台を持ちながら、ただそれを思い描くことしかできない非現実に「**絶望**」し、苦しんでいる。例えば、無条件で愛される愛を知りながら、かつ無条件でも愛せる愛を知りながら、ただそれを思

い描くことしかできない非現実に「**失望**」し、苦しんでいる。そして、誰もが避けられない「肉体の死」の現実に対し、「**死の恐怖**」を覚えている。

つまり、「**絶望**」、「**失望**」、「**死の恐怖**」といった思いは全て、霊である神との「分離」（死）から生じたものであって、霊的な「不安」の意識化である。とはいえ、そうした思いを人は直視できないので、それを見える安心で覆い隠そうとする。この見える安心の獲得が様々な「罪の行為」を誘発し、人を具体的に苦しめている。これが私たちの現実の姿であって、それは本来の姿ではなく、本来の姿が「死」に制約された「病人」の姿である。その「病人」の姿が、そのまま「罪人」の姿である。

これが、人の現状の話である。そこで、神は神との「分離」を解消すべく、人が神と「再結合」できることを目指す。つまり、神のなさる「癒やし」は、神との「分離」を元に戻す、神との「再結合」なのである。

❖ 神との「再結合」

人は入り込んだ「死」によって神と分離し、神との一致が崩壊して以来、「病人」になり「罪人」になった。人の「体」と「心」は、神との一致の中で機能するのが本来の姿であったが、すなわち人はキリストの体として造られていたが、「**あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です**」（Ⅰコリント 12:27　新共同訳）、入り込んだ「死」によって神との一致が壊れ、「**体の病気**」、「**心の病気**」を覚える「病人」になった。さらには、神との一致が崩れたことで、持っている「可能性」は現実を見ない非現実となり、すなわち「神の思い」を実行できなくなり、人は「罪人」になった。「罪人」になったがゆえに、罪を犯す者になった。罪を犯すから、「罪人」になったのではない。

そうである以上、「死」によって壊れた神との一致を修復しない限り、病気も罪も解決しない。この修復を神との「再結合」といい、それこそが神による「癒やし」となる。そして、この「再結合」は一度行われたら完了ではなく、その後は「再結合」が豊かになっていくことを目指す。

❖ 「再結合」が豊かになっていく

イエス・キリストは神であり、その方が「永遠のいのち」である。「**それで私たちは、真実な方のうちに、すなわち御子イエス・キリストのうちにいるのです。この方こそ、まことの神、永遠のいのちです**」（Ⅰヨハネ 5:20）。それゆえ、人が神と「再結合」す

るというのは、人が「永遠のいのち」を持つようになることを指す。その「永遠のいのち」はイエス・キリストなので、「永遠のいのち」を持った者は、キリストについての御言葉を聞くことで、「イエス・キリスト」を知るようになる。「**その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです**」（ヨハネ 17:3）。

ここで大事なのは、「永遠のいのち」を持つようになる「再結合」が、すなわち救われることが先であり、救われたからこそ（「再結合」したからこそ）、イエス・キリストを信じられるようになるということである。よって、信じている者は「永遠のいのち」を持っていて、もう裁きに会うことがなく、「死」から「いのち」（神）に移った状態にある。「**わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じている者は、永遠のいのちを持っていて、裁きに会うことがなく、すでに死からいのちに移った状態にあるのです**」（ヨハネ 5:24　私訳）。そして、そこから「永遠のいのち」であるキリストとの関係が築かれていく。その関係は「友」としての関係であり、キリストをより多く愛せるようになる関係である。キリストはこれを、「**わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです**」（ヨハネ 10:10）と言われたのである。ならば、どうすればキリストを多く愛せるようになるのだろう。

それには、罪（罪の行為）に気づき、その罪が赦される必要がある。多くの罪に気づき、多くの罪が赦されれば、キリストを多く愛せるようになる。「**だから、言っておく。この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさで分かる。赦されることの少ない者は、愛することも少ない**」（ルカ 7:47　新共同訳）。そして、キリストを多く愛せるようになれば、キリストの体の具現化が「教会」なので、「**教会はキリストの体であり**」（エペソ 1:23　新共同訳）、「教会」を多く愛するようになる。礼拝を大切にし、奉仕に喜びを覚えるようになる。

このように、罪が赦されることで神との「再結合」が豊かになっていく。それは、キリストとの間に「友」としての関係が築かれていくということであり、これが神の「癒やし」である。そして、罪が赦されるというのは「赦しの恵み」を受け取ることであり、それは神の呼びかけに応答する「信仰」によって実現する。これを「神の義」といい、その義は「信仰」に始まり、多くの罪が赦される「赦しの恵み」を受け取る「信仰」へと進ませるのである（第一巻 295 頁「神からの「義」」）。

「福音のうちには神の義（赦しの恵み）が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。」（ローマ 1:17）　※（　）は筆者が意味を補足

神からの「義」は、「信仰に始まり信仰に進ませる」以上、神の関心は、神との「再結合」が豊かになっていくことにある。それは、神と人との一体性が増し加わることであり、神と人との距離が縮まることであり、神と「友」としての関係を築くことである。「わたしはあなたがたを友と呼びました」（ヨハネ 15:15）。ゆえに、イエスの別名を「インマヌエル」という。それは、「訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である」（マタイ 1:23）。いつもともに生きてくださるというのがイエスの別名であり、それを「友」という。要するに、神がともにおられるという福音を、神は啓示してくださったのである。「恐れるな。わたしはあなたとともにいる」（イザヤ 41:10）。それゆえ、神のなさる「癒やし」は、神との距離を縮めさせることに集中する。

❖　神との距離を縮めさせる

神のなさる「癒やし」は、神との「再結合」に始まり、その結合を豊かにしていくことに向かう。それは、神と人との距離を限りなく縮めさせることであり、距離が縮まれば縮まるほど、人である「精神」は「安息」を得られる。それはちょうど、体の器官である「手」は、本体となる体と「一つ」になればなるだけ上手く機能し、「手」は安息でいられるのと同じである。人は「キリスト」の体の器官として造られているので、「あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとりは各器官なのです」（Ⅰコリント 12:27）、「キリスト」の体と結びつけばつくほど「安息」を得られる。

そもそも神は「愛」であり、その「愛」は「統合運動」であるので、神は人と「一つ」になる運動を展開される。それは、三位一体の神が「一つ」であるように、である。「それは、父よ、あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにいるように、彼らがみな一つとなるためです。また、彼らもわたしたちにおるようになるためです」（ヨハネ 17:21）。そこで、神は人を自分のところに引き寄せる運動を展開される。「わたしはすべての人を自分のところに引き寄せます」（ヨハネ 12:32）。そうである以上、神の目には、神が引き寄せようとすることを拒むことが罪となる。それは神を信じないことを意味するので、イエスは、「罪についてとは、彼らがわたしを信じないこと」（ヨハネ 16:9　新共同訳）と言われたのであった。

このように、神が目指す治療は、神との距離を縮めさせる治療である。しかし、人は神と「分離」して以来、神が引き寄せようとすることを拒んでしまう。神と「再結合」

し、キリストを知るようになっても、人は容易にはキリストとの距離を縮めようとはしない。人間関係に喩えると、ただ知り合いになったというだけで満足し、そこから一歩踏み出し、友としての関係を築こうとはしないのである。神の目には、それこそが問題であって、これが人を苦しめている「**真の病気**」として映る（第一巻 270 頁「－神と人との距離を縮める－」）。ただし、神との距離があるというのは物理的な距離ではなく精神的な距離である。人の土台は神なので、物理的な距離があるわけではない。

❖ 「真の病気」

「死」が入り込んで以来、人は「**体の病気**」と「**心の病気**」になり、社会生活にも困難を来すようになって苦しんでいる。だが、これは神からすると「**真の病気**」ではない。神の目に於ける人の「**真の病気**」は、神と距離があることであり、距離があるので、人の中に「安息」がないということである。そこで、人に対する神の治療は、神との距離を縮めさせることに向かう。そのために、神は人の罪を無条件で赦される。その「赦しの恵み」によって、神は人と「一つ」になろうとされる。

つまり、人は「**体の病気**」や「**心の病気**」で自分が苦しんでいると思っているが、あるいは、様々な困難に出会うから苦しんでしまうと思っているが、実はそうではない。それは、神との距離があって「安息」がないことに苦しんでいる。ただその苦しみが、見える困難に投影されたというだけである。したがって、神との距離が縮まれば、どのような「**体の病気**」や「**心の病気**」で苦しもうと、はたまた困難で苦しもうとも、そうした中にあっても「安息」がある。神の「愛」に支えられた「安息」がある。そこでイエスは、この「安息」を「平安」と言い換え、次のように言われたのであった。

> 「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。」
>
> （ヨハネ 14:27）

この世が与える「平安」とは、少しでも「**体の病気**」や「**心の病気**」が改善され、加えて困難な問題も少しでも改善され、社会生活に困難を来さなくなることである。だが、神が与えようとする「平安」は、人が神と「一つ」になる「安息」であり、それこそが神の目指す治療になる。なぜなら、「**体の病気**」も「**心の病気**」も、「死」が支配するこの世界では完治しないからである。困難も、この「死」の世界では無くならない。ゆえに、それらをいくら解決しても一時的な喜びでしかない。しかし、神との

距離が縮まることで、人は神への信仰、希望、愛を増し加えることができ、それはいつまでも残る喜びとなる。「こういうわけで、いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です」（Ⅰコリント 13:13）。そうである以上、神は人との距離を縮めることを目指される。そのことで、神は人と「一つ」になろうとされる。これが分かれば、実際の病気の治療は次のようになる。

❖ 実際の病気の治療

生まれながらに、誰もが「体の病気」、「心の病気」の中にあるので、誰もが苦しみを覚える。その場合、物理的な苦しみの治療はこの世の医者に任せ、私たちはもっぱら、神との「再結合」を豊かにすることを祈る。人を苦しめている「真の病気」は、神と距離があることなので、手にした神との「再結合」が豊かになることを祈る。とはいえ、それは意識しなくても、見た目の病気を、「癒やしてください」と神に祈ることで代弁される。なぜなら、苦しみの中から神に祈ること自体が、すでに神との距離を縮めることになるからである。それゆえ、病気については、この世の医者に任せると同時に、病気が癒やされるように神に祈ればよい。「体の病気」、「心の病気」を祈ることを通して神に向かえば、それが「真の病気」の癒やしとなるのである。

さらに言えば、「体の病気」、「心の病気」になったのが自分ではなく他の人であった場合は、病人に「癒やし主」のことを語り、その方に祈るよう勧めればよい。そうした勧めは、神を信じるかどうかの決断を病人に迫るので、その病人が、神との「再結合」を手にしていても、未だキリストへの信仰を持つに至ってない者であれば、その決断はキリストを信じられるようになる信仰を生起させ、神との距離を縮めさせてくれるのである。また、その病人がクリスチャンであれば、その決断が神との「再結合」を豊かにしてくれるので、それに伴って「安息」が得られる。

このように、「体の病気」や「心の病気」で苦しみを覚えたなら、医者に任せると同時に神に祈るのである。それは、本人は気づかなくても「真の病気」の癒やしを祈ることになるからである。たとえ「体の病気」や「心の病気」が改善されなくても、神と向き合うことで、「弱さ」に働く神の恵みを知り、神との距離が縮まる「安息」を手にすることができる。ということは、見た目の病気が癒やされなくても嘆く必要はない。そのときは、自分の体の病気が癒やされなかったパウロのように、神がなされる「真の病気」の癒やしに気づくべきである。「これを（病気を）私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました。しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分であ

る。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」と言われたのです」（Ⅱコリント 12:8-9）。

勘違いしてはならないのは、神は真に人を幸せにしたいと願っているということである。それは、神との距離が縮まり、無条件で愛されている自分を人が知るようになることにほかならない。なぜなら、それこそが人の心に真実な「安息」をもたらすからである。それで、信仰に生きる人たちは、幸せにするという約束を、この世での形では手にしなかったが、すなわち見えるところの困難は解決しなかったが、神に無条件で愛されている自分を信仰で見て、大いに喜んでいた（安息）。そうであるからこそ、地上では旅人であり寄留者であることを、信仰に生きる人たちは告白することができた。聖書は、そのことを次のように教えている。

> 「これらの人々はみな、信仰の人々として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるかにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり寄留者であることを告白していたのです。」（ヘブル 11:13）

信仰で手にする「安息」こそ、神の目指す治療であり、それこそが神の立てられた「永遠の契約」の成就である。その「永遠の契約」は、以下のとおりであった。

> 「わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に、そしてあなたの後のあなたの子孫との間に、代々にわたる永遠の契約として立てる。わたしがあなたの神、あなたの後の子孫の神となるためである。わたしは、あなたが滞在している地、すなわちカナンの全土を、あなたとあなたの後のあなたの子孫に永遠の所有として与える。わたしは、彼らの神となる。」（創世記 17:7-8）

ここで神が約束された、「カナンの全土を、あなたとあなたの後のあなたの子孫に永遠の所有として与える」の霊的な意味こそ、神が人に与える「安息」である。それは、神との距離を縮めることであり、これが神の目指す治療になる。それが「永遠の契約」の成就であって、それは人に「安息」を得させることにほかならない。

❖ 「安息」を得させる

神が目指す人の治療の第一段階は、神との「再結合」である。霊である神は、人に貸し出した神の「いのち」である「魂」を介して呼びかけ、それに応答する者との「再

結合」を果たされる。それは、神が救いの御手を差し伸べ、その御手に掴まる者を引き寄せてくださるということであり、これを「永遠のいのち」が与えられるという。

次に、神が目指す人の治療の第二段階は、人に与えた「永遠のいのち」を豊かにすることである。霊である神は、「魂」を介して再び人に呼びかけ、人の罪をあぶり出し、人を絶望へと追い込まれる。そうすることで、罪が赦される「赦しの恵み」を受け取らせ、神との距離を縮めさせる。こうして、神は人に与えた「永遠のいのち」を豊かにしていき、人に「安息」を得させる。「**わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです**」（ヨハネ 10:10）。

以上が神の目指す治療であり、それは人である「精神」に「安息」を得させることである。「安息」を得させることが、神の「永遠の契約」である（本書 64 頁「永遠の契約」）。そこで聖書は、次のように教えている。

> 「こういうわけで、神の安息に入るための約束はまだ残っているのですから、あなたがたのうちのひとりでも、万が一にもこれに入れないようなことのないように、私たちは恐れる心を持とうではありませんか。」（ヘブル 4:1）

この「安息」は神との「再結合」によるので、それはそのまま罪が赦される「赦しの恵み」を受け取ることを意味する。それで聖書は、「**あなたがたのうちに病気の人がいますか。その人は教会の長老たちを招き、主の御名によって、オリーブ油を塗って祈ってもらいなさい**」（ヤコブ 5:14）と教え、病人のために祈ると何が起きるかを続けて、次のように教えている。

> 「信仰による祈りは、病む人を回復させます。主はその人を立たせてくださいます。また、もしその人が罪を犯していたなら、その罪は赦されます。」
> （ヤコブ 5:15）

このように、癒やしの祈りで「赦しの恵み」を受け、罪が赦され、神との距離が縮まっていくのである。それが人の「**真の病気**」を癒やすので、この続きに、「**ですから、あなたがたは、互いに罪を言い表し、互いのために祈りなさい。いやされるためです**」（ヤコブ 5:16）とある。要するに、祈って多くの罪が赦されれば、それだけ神との距離が縮まり「安息」が得られるということである。そうである以上、人は罪に気づく度に、「**癒やしてください**」と祈ればよい。すると、神は次のように答えてくださる。

「わたしは、わたしから分離してしまったものを、わたしのところに再び連れ戻そう。なぜなら、それは本来、わたしのものであるからだ！」

これが神の治療である。この治療で大事なことは、神が目指す治療のゴールは、人である「精神」が「安息」に入るということである。それは、神との距離が縮まり、神と「一つ」になることである。無論、そのことで、「体の病気」も「心の病気」も良い方向に向かうことを神も望まれるが、「心の病気」は絶えず「体の病気」の影響を受け、しかも影響を与える「体の病気」は滅びゆく死の世界にいる限り完治することはないので、そうした病気の苦しみの中にあっても人が「安息」でいられることを神は目指される。つまり、「体の病気」や「心の病気」が癒やされるかどうかよりも大事なことは、「安息」を得られるかどうか、である。神との距離が縮まるかどうか、である。そして、その「安息」のために神がなさる神の「わざ」が、「神の言葉」である。ともすると、私たちは神の「わざ」と聞くと、見た目の病気の症状を癒やす奇跡を連想するが、イエスがなさった「わざ」の真実は、イエスが語られた「言葉」であった。

❖ イエスの「わざ」

イエスは、数多くの奇跡を行なった。目が見えない人を見えるようにし、足の悪い人を歩けるようにし、重い皮膚病の人を健康な皮膚にし、耳の聞こえない人を聞こえるようにされた。「目の見えない者が見、足のなえた者が歩き、ツァラアトに冒された者がきよめられ、耳の聞こえない者が聞き」(マタイ 11:5)。ならば、それがイエスの「わざ」だったのだろうか。無論、それもイエスの「わざ」であることに違いはないが、それは食事に喩えれば前菜にすぎない。主菜は「イエスの言葉」である。なぜなら、「イエスの言葉」が死んでいた者を「生きる者」にするからである。

「イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがありません。このことを信じますか。」」(ヨハネ 11:25-26)

「わたしを信じる者」とは「イエスの言葉」を信じる者のことであり、その者は「決して死ぬことがありません」と、イエスは言われたのであった。つまり、「イエスの言葉」を信じる者は、「生きる者」になるということである。「イエスの言葉」を信じる者は、神と「一つ」となって復活するということである。そうである以上、「イエスの言葉」が復活の奇跡をもたらす神の「わざ」である。

そして、「イエスの言葉」を想起させるのが「聖霊」である。「聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます」（ヨハネ 14:26)。「聖霊」が「イエスの言葉」を証しする。「御霊がわたしについてあかしします」（ヨハネ 15:26)。したがって、「イエスの言葉」は、「聖霊」に於いて現存する。その「聖霊」が、いつの時代の人にも「魂」を介し、「イエスの言葉」を語りかけられるので、それに応答するなら（信じるなら)、その者は「生きる者」になれるのである。生まれながらに「死人」であった者が、「生きる者」になれる。イエスは、そのことを次のように言われた。

> 「まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。」（ヨハネ 5:25)

まことに、「死人」を「生きる者」にするのは「神の子の声」、すなわち「イエスの言葉」である。それを心に伝えるのが「聖霊」である。そのため、「聖霊」の働きを無視するなら、すなわち「神の子の声」を聞いても応答しなければ、その者は「死人」のままであって滅びが確定してしまう。そこでイエスは、「まことに、あなたがたに告げます。人はその犯すどんな罪も赦していただけます。また、神をけがすことを言っても、それはみな赦していただけます。しかし、聖霊をけがす者はだれでも、永遠に赦されず、とこしえの罪に定められます」（マルコ 3:28-29）と言われたのであった。

こうして、「聖霊」によって、人はキリスト・イエスに捕らえられる。「キリスト・イエスが私を捕らえてくださったのです」（ピリピ 3:12)。その結果、キリストについての御言葉を聞くことでキリストへの信仰が開始し、「そのように、信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです」（ローマ 10:17)、キリストはイエスであると告白できるようになる。このことで、人は目に見えない「聖霊」の働きを知ることができる。「人となって来たイエス・キリストを告白する霊はみな、神からのものです。それによって神からの霊を知りなさい」（Ⅰヨハネ 4:2)。したがって、イエス・キリストを信じている者はキリストに捕らえられた者であり、「死」から「いのち」に移された者である。そうであるなら、その者の裁き（分ける）は完了しているので、イエスは次のように言われたのである。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じている者は、永遠のいのちを持っていて、裁きに会うことがなく、すでに死からいのちに移った状態にあるのです。」
（ヨハネ 5:24　私訳）

まことに、神の「いのち」である「魂」を介して「聖霊」が語る「イエスの言葉」が、「生きる者」と「死ぬ者」とを分けてしまう。「生きる者と死ぬ者とを分ける（裁く）」（Ⅰペテロ 4:5　私訳）。それゆえ、「イエスの言葉」がイエスの「わざ」であり、「イエスの言葉」を信じることが、イエスの「わざ」を行うことになる。それでイエスは、次のように言われたのであった。

「すると彼らはイエスに言った。「私たちは、神のわざを行うために、何をすべきでしょうか。」イエスは答えて言われた。「あなたがたが、神が遣わした者を信じること、それが神のわざです。」」（ヨハネ 6:28-29）

「イエスの言葉」を信じる者は、イエスの「わざ」を行なっている。そして、その者が「イエスの言葉」を人々に伝えることで、さらに大きな「わざ」を行うことになる。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしを信じる者は、わたしの行うわざを行い、またそれよりもさらに大きなわざを行います」（ヨハネ 14:12）。

このように、イエスは数多くの見える奇跡を行われたが、それは真の「わざ」ではなかった。真の「わざ」は、イエスが語られた言葉であり、その言葉が「生きる者」と「死ぬ者」とを分ける真の奇跡を遂行し、さらには神と人との距離を縮めることができた。それで、イエスは次のように言われたのである。

「イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」（ヨハネ 14:6）

「イエスの言葉」を信じることで人は「生きる者」になり、その後も「イエスの言葉」を信じ続けることで、神との距離が縮まっていく。それは物理的な距離が縮まるというのではなく、共におられる神への信頼が増し加わるということである。友のような関係になっていくということである（安息）。これが神の「わざ」であり、神の「癒やし」である。人を癒やすのは、まさしく「イエスの言葉」であって、「人の言葉」では

ない。「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる」(マタイ 4:4)。「イエスの言葉」こそ、「いのちのパン」なのである。

> 「イエスは言われた。「わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渇くことがありません。」(ヨハネ 6:35)

「イエスの言葉」こそが神の「わざ」であり、人を癒やす「いのちのパン」である。そのパンを食べる者は「生きる者」となり(神との再結合)、その後は、神との再結合が豊かになっていき、「安息」に入るのである。そのようにして、神との距離が縮まっていく。しかし、それには人の側が、自分の「真実な姿」を認める必要がある。

❖ 自分の「真実な姿」

「死」が入り込んだことで、人は神が見えなくなった。そのため、自分の価値を知る術は、人との比較しかない。人と自分を比べることで、自分の価値を知るしかない。そこで、誰もが自分と人とを比べ、自分は何ができるかを知り、少しでも自分の価値を高くし、人を見下そうとする。見下された者は、自分よりも劣る者を見つけ、自分の価値を高くし、人を見下す。あるいは、見下された者は見下した相手の欠点を探し、相手を裁くことで自分の価値を高くし、相手を見下す。こうして、誰もが自分を人との比較で規定し、自分は「これこれ」ができる者だと自らを誇り、人を見下し、裁くのである。そうした生き方に成功し、周りから、「あの人はすごい」と賞賛されたのがパリサイ人である。彼はその誇りを、次のように神に祈った。

> 「神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。」
>
> (ルカ 18:11-12)

「ことにこの取税人のようではないことを、感謝します」とあるように、彼は自分の「真実な姿」を人と比較することで知ろうとした。しかし、誰かと比較し、「これこれ」ができるというのは「真実な姿」ではない。というのも、「真実な姿」は、変化する人と比べては知りようがないからである。変化しない、絶対を物差しにすることで、初めて人の「真実な姿」を知ることができる。その絶対とは「神」である。この方だけが、全く変わらず初めから存在する方なので、絶対である。

そこで、「神」を基準に人を見ると、人は変わり続ける者であり、最後は消えて無くなる存在であることが分かる。そうである以上、「**これこれ**」ができるというのは一時的であって、幻でしかない。つまり、「神」を物差しにして人を見るなら、何もできない「無」であるというのが、人の「真実な姿」である。平たく言えば、何もできない「**弱い者**」であるというのが「真実な姿」である。

そもそも、人の中心は、「神」と自分の関係しかない。人は「神」の前で一人であり、「神」の前にも私しかいない。つまり、人の中心は神との関係であり、その関係が外部の人との関係に投影されているので、自分の「真実な姿」は、神との関係の中でしか知り得ないのである（本書 12 頁「人の中心」）。

そうとも知らず、人は自分と誰かを比べ、あのパリサイ人のように、「**これこれ**」ができると自分を神の前で誇ってしまう。その様はちょうど、小さな虫が、自分は「**これこれ**」ができると人間の前で誇るようなものであって、その様は実に滑稽である。その滑稽さは、神が造られた宇宙の大きさと、自分の大きさを比べればよく分かる。宇宙の大きさに比べれば、人の大きさは無に等しい。それこそが、自分の「真実な姿」である。そこで神は、人が「**これこれ**」ができると自分を誇ってしまうことのないよう、「**知恵ある者は自分の知恵を誇るな。つわものは自分の強さを誇るな**」（エレミヤ 9:23）と注意されてきた。しかし逆に、神の目には、人は何もできない「**弱い者**」であるからこそ、神は人を助け、無条件で愛される。そのことは、赤ちゃんを想像すれば容易に理解できる。

赤ちゃんは、何もできない自分を知っている。親も、赤ちゃんは何もできないことを知っている。それゆえ、親は赤ちゃんを命がけで支え、無条件で愛する。赤ちゃんが親の望まないお漏らしをしても（罪を犯しても）、何も責めずにオムツを取り換え、何もなかったかのように扱う。ここにこそ、神が人を支え、人を無条件で愛する理由がある。それは、人が何もできない「**弱い者**」だからである。「**弱い者**」であるからこそ、そこに神の力が現れ、神は人と「一つ」になることができる。それで神は、パウロに次のように言われたのであった。

> 「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである。」（Ⅱコリント 12:9）

確かに、赤ちゃんは何もできない「**弱い者**」なので、親は彼を無条件で助け、愛する。しかし、赤ちゃんにもできることが一つある。それは、泣き叫ぶことである。彼は、泣き叫ぶことで苦しみを訴えることができる。その訴えを親が聞くと、苦しむ赤ちゃんを抱きかかえ、癒やそうとする。加えて、苦しみを覚えた原因を取り除こうとする。これが、赤ちゃんと親との正しい関係である。神と人も、これと全く同じである。だが、人はそれを知らないので、自分は「**これこれ**」ができると誇ってしまう。そこで神の愛は、何もできない自分に気づかせるために「律法」を突きつけ、加えて、人に襲いかかる「患難」を静観される。すると人は、何もできない自分に気づくことができ、その苦しみを訴える。あの赤ちゃんのように、泣き叫ぶのである。

> 「**神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。**」（ルカ 18:13）

すると神は、その人を助け、「義」としてくださる。「義」とされるのは、「**これこれ**」ができると自分を高くした、パリサイ人ではない。「**あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません**」（ルカ 18:14）。

このように、自分の「真実な姿」は何もできない、「**弱い者**」である。神の助けがなくては、まったく生きられない「**弱い者**」である。それを知るには、人と自分とを比べることで自分を知ろうとしてきた生き方を十字架につけるしかない。そうすれば、自分の「真実な姿」が見えてくる。それは、もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられる姿である。

> 「**私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられる**のです。」（ガラテヤ 2:20）

キリストが私のうちに生きておられる自分が見えるようになることが、神と「一つ」になるということであり、与えられた「永遠のいのち」が豊かになるということである。これこそが、神が目指す「癒やし」であり、そのために「**神の愛**」は、人と自分とを比べることで自分を知ろうとしてきた生き方を、十字架につけようとされる。そして、十字架につけることができれば、「**弱い者**」でしかない自分の「真実な姿」を認められるようになり、そこに神の力が完全に現れるようになる。この「**神の愛**」が、『福音の回復』第一巻で述べた福音の「第三ステージ」になる。

以上が、神との「再結合」から見た福音であり、それは前章で見た「癒やし」を掘り下げた話であった（本書 147 頁「人の「真実な姿」を掘り下げる」）。そこで、前章で見た「癒やし」の話と、見てきた「再結合」との話の総括をしたい。

❖ 総括

「体の病気」も「心の病気」も、そして「罪」も、これらは全て人に対する「否定」であり、「否定」の全ては人に入り込んだ「死」に起源を持つ。人の存在を「否定」する「死」の運動に原因がある。元々は健康であって「義人」であったが、「死」が人の中に住み着いたことで、「体」と「心」に制限が掛かり、本来の働きができなくなってしまったのである。その結果、「病人」になり、「罪人」になった。全ては悪魔の仕業による「死」に原因があり、「死」はまさしく、神から人を「分離」する運動であった。その運動によって、人は「体の病気」を覚え、「心の病気」を覚え、「罪」を覚えるようになった。この「病人」と「罪人」を総称し、「病人」という。

人は「病人」なので、「神の福音」は徹頭徹尾「癒やし」であり、神と人とを「分離」する「否定」と戦い、人を「否定」するものを「否定」する。それは、神と人とを「再結合」させ、それを豊かにしていくことである。人に「永遠のいのち」を得させ、それを豊かにしていくことである。「わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです」（ヨハネ 10:10）。それが、神がなさる「癒やし」であり、福音である。この福音を伝えるために、復活したイエスは、ヨハネを通して諸教会に書き送らせた「ヨハネの黙示録」の最終章で、次のように「神の福音」を綴らせたのである。

> 「御使いはまた、私に水晶のように光るいのちの水の川を見せた。それは神と小羊との御座から出て、都の大通りの中央を流れていた。川の両岸には、いのちの木があって、十二種の実がなり、毎月、実ができた。また、その木の葉は諸国の民をいやした。」（黙示録 22:1-2）

「いのちの水」とは「神の言葉」であり、それが神の御座から出て、「都の大通りの中央を流れていた」という。ここでの「都」は地上の「教会」を指し、「いのちの水」（神の言葉）が「教会」を通して川のように流れていたということである。それゆえ、「川の両岸には、いのちの木があって」とは、「神の言葉」によって「いのち」を得た者たちがいたということであり、「毎月、実ができた」とは、日々「神の言葉」によって人が救われたということである。そして、「その木の葉は諸国の民をいやした」とは、「神の言葉」によって人は癒やされるということである。こうして、神から流れる福音

は人を救い、人を癒やしていくことをイエスは教えられたのであった。それは、神からの報いを「行い」によって手にする話ではなく、「ただで」神から受け取る「贈り物」の話なので、イエスはそれを、この先で次のように綴らせた。

> 「「わたし、イエスは御使いを遣わして、諸教会について、これらのことをあなたがたにあかしした。（中略）渇く者は来なさい。いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。」（黙示録 22:16-17）

「神の福音」は、このように一貫して「癒やし」であり、それは「ただで」受け取るのである。「ダメな者」に罪を悔い改めさせ、その報いとして、神はその者の罪を赦すという話では決してない。もし神による「癒やし」を受け取るのに「**罪の悔い改め**」が必要となれば、それは反省して改めるという「**行い**」によって、すなわち人の「**行い**」の報いとして、「癒やし」が受け取れる話になってしまい、それはもう「**ただで**」ではない。「神の福音」は、人の「**行い**」を訓練し、「ダメな者」を「良き者」にする話ではなく、あくまでも「良き者」についた「否定」による苦しみを神に言い表わせば、神が「**ただで**」その「否定」を洗い流し、「良き者」である自分に気づかせてくれる話である。なぜなら、人の「真実な姿」は、何もできない「**弱い者**」だからである。

そこで、神が「**ただで**」最初に洗い流す汚れは、すなわち「否定」は「死の体」である。神は「死の体」に対抗できる朽ちない「霊の体」を着せることで人に「永遠のいのち」を持たせ、「死の体」の「否定」を洗い流してくださる。これが、神との「再結合」であり、「永遠のいのち」を持つという。

次に、「**ただで**」洗い流す「否定」は「不信仰」であり、神はそれを洗い流すことで、人が「良き者」である自分を知るようにされる。無条件で愛されている自分の「真実な姿」を知るようにする。その「真実な姿」の下に横たわっているのが、何もできない「**弱い者**」の自分であり、これこそが知られざる自分の「真実な姿」なので、神はそれを人が知るように助けてくれる。そのことで、神に拠り頼む「信仰」を育てて、「再結合」を豊かにし、人を癒やしていかれる。人は、それを「**ただで**」受け取ることができるというのが「神の福音」である。

だが、人は神が「**ただで**」私たちを赦し、迎えてくれることが信じられないので、神の「癒やし」を拒んでしまう。それで、イエスは「放蕩息子の譬え」で、放蕩息子の

父親は息子の罪を問うこともなく、「ただで」、すなわち無条件で彼を迎え入れたことを話された。これが「赦しの恵み」であり、この恵みが人を癒やす。

つまり、こういうことである。「病気」の原因は、入り込んだ「死」にある。この世界は、その「死」に支配されているので、この世界にいる限り、「体の病気」も「心の病気」も完治することはない。たとえ「体の病気」が癒やされても一時的であって、やがて機能しなくなってしまう。その「否定」によって、どうしても「心の病気」の症状も発生するので、この世界にいる限り「病気」が完治することはない。そうである以上、祈っても「病気」が癒やされないと言って神につぶやくのも、癒やされないのは自分に信仰がないからと自分を責めるのも誤りである。というのも、神がなさりたい癒やしは、完治しない病気の癒やしではなく、「真の病気」の癒やしだからである。

「真の病気」は、人が神との距離を取ってしまうことである。これを「罪」という。そこで神は、神との距離を縮める治療を、すなわち「罪」を取り除く治療を行う。それが神の目指す癒やしであり、その癒やしによって、完治しない「病気」の苦しみの中にあっても、人は「平安」を得られる。ゆえに、「体の病気」、「心の病気」の症状の治療は医者に任せ、それが上手くいくように祈ればよい。同時に、「真の病気」の癒やしを目指し、神と人との距離を縮めるのである。そのために「赦しの恵み」があり、その恵みはキリストの十字架の血が証ししている。「これは、わたしの契約の血です。罪を赦すために多くの人のために流されるものです」（マタイ 26:28）。この「赦しの恵み」による治療が、「真の病気」の癒やしとなる。

大事なことは、神が私たちの土台である以上、すでに私たちは神に受け入れられている者なのであって、無条件で愛されている「良き者」であるということである。というのも、神の目には、人は何もできない赤ちゃんと同じだからである。それゆえ、神は人を助け、無条件で愛される。この姿を、神は「良き者」という。「神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった」（創世記 1:31）。ただその事実が、入り込んだ「死」によって認識できなくなったにすぎない。そこで、それを再び認識できるようにしてくれるのが「神の福音」であり、そのことで神と人との距離が縮まり、人は癒やされていく。そして、神との距離を取ってしまうことが「罪」なので、この「癒やし」はそのまま、「罪」が取り除かれていく話になる。

したがって、「体の病気」も「心の病気」も、いくら祈っても癒やされないと嘆くのは誤りである。その人は、ただ神の恵みに気づいていないだけで、実は、病気が癒やさ

れるように真剣に祈ったことで、その人は確実に神に近づいている。神との距離が縮まっている。「**真の病気**」の癒やしを受け取っている。見た目の病気は癒やされていなくても、真剣に祈ったことで神による「平安」が増し加わっている。それこそが、祈りに対する答えである。そのことをパウロが証ししている。彼は自らの病気の癒やしを真剣に三度祈っても癒やされなかったが、「**このことについては、これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました**」(Ⅱコリント 12:8)、祈ったことで病気の「弱さ」の中に、神の恵みが働くことを神から教えられた。

> 「しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。」(Ⅱコリント 12:9)

ということは、この恵みに気づくためにも、自らの病気の癒やしは祈り続けたらよいということである。そうすれば、先人たちのように、約束の病気の癒やしを地上で見ることがなくても、それをはるかに見て喜ぶようになっていく。聖書には、そのことが書かれている。

> 「これらの人々はみな、信仰の人々として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるかにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり寄留者であることを告白していたのです。」(ヘブル 11:13)

このように、神が目指す「癒やし」は見た目の癒やしではなく、神との距離を縮めることである。無論、神は見た目の癒やしもされるが、それはゴールではないので、イエスは癒やされたことは黙っているように言われた。「**決してだれにも知られないように気をつけなさい**」(マタイ 9:30)。ゴールは、神との距離を縮めることであり、それは多くの「罪」が赦されるということであって、これが人に「安息」をもたらす。この「癒やし」を、すなわち「赦しの恵み」を、私たちは「**ただで**」受け取れるのであり、神の前で罪を悔い改める必要も、何か良い「**行い**」をする必要もない。あの放蕩息子のように、ただ神の歓迎を素直に受け取ればよい。赤ちゃんのように苦しみを訴え、ただで親からの愛情を受け取ればよい。そのことで、自分が神に受け入れられていたことを知ればよい。それが神と人との距離を縮め、人の「**真の病気**」を癒やし、人に「安息」をもたらす。

こうして、神と「再結合」することで、その結合は豊かなものになっていく。この豊かさが神への「愛」を創造させ、「愛」に逆らう罪を心から悔い改めさせ、「良い行い」へと人を導く。イエスの足に香油を塗った女性のように。

そして、神との「再結合」は、神の呼びかけに応答するだけでよい。神に応答するとは、心を神に向けることなので、これを「**方向を変える**」という。人は「**方向を変える**」だけで、神からの「赦しの恵み」を受け取ることができ、神との「再結合」は実現する。それは「**ただで**」であり、「良い行い」をしたことへの報酬ではない。

そこで新約聖書は、「**方向を変える**」ことを「メタノエオー」[μετανοέω]で表現した。問題は、「メタノエオー」を「**悔い改める**」と訳すことである。その訳のせいで、神との「再結合」には「**罪を悔い改める**」という「良い行い」が必要であるという誤解が生じ、教会の中では「**罪を悔い改めよ**」と叫ばれるようになった。罪を犯すのをやめ、それを悔い改めるから、その「良い行い」の報酬として罪は赦されるのであって、「**ただで**」はないとなった。本当にそうなのか。結論から言うと、聖書には「**悔い改めよ**」というフレーズはあっても、「**罪を 悔い改めよ**」は一箇所もない。信じがたいだろうが、これは事実である。そこで「再結合」の話は、「**罪を悔い改めよ**」の話にも触れておく必要がある。それは、「**目から鱗が落ちる**」話になることだろう。

－「罪を悔い改めよ」－

誰かを傷つける罪を犯せば罪責感に襲われるので、人はその罪を悔い改め、もう同じ過ちを犯さないようにする。また、「**罪には罰**」が世界での標準なので、人は罪を犯すと罰を恐れて、罪を悔い改める。いずれにせよ、この世界での罪の処理は、「**罪を悔い改める**」である。その「**悔い改める**」という行為は、心を過去に向け、過去に対する反省である。しかし、神が求めているのは、過去の反省から心を神に向けることであって、ゴールは過去ではなく神である。過去の反省は大いにすればよいが、それがゴールではない。ゴールは反省の苦しみから心を神に向けることである。というのも、いくら過去の罪を反省しても、罪に対しては何の処理もなされてはいないからである。罪とは、神と「分離」された状態（不安）であるが、その状態は、「**罪を悔い改める**」という反省では解決しない。つまり、過去の反省を促す、「**罪を悔い改めよ**」は神からの要請ではない。それゆえ、聖書に、「**罪を悔い改めよ**」と書かれた箇所は一つもない。信じがたいかもしれないが、これが事実である。ここでは、その事実を確かめる（本書 71 頁「－「罰」は必要なのか－」）。

❖ 「罪を悔い改めよ」は聖書にない

聖書は、「旧約聖書」と「新約聖書」とに分かれる。その聖書を「新改訳聖書 2017」の訳で見てみると、そこには「**罪を悔い改めよ**」と書かれた箇所はどこにもない。ただし、「**悔い改めよ**」と書かれた箇所は「新約聖書」に多数ある。注意したいのは、それは「**悔い改めよ**」であって、「**罪を　悔い改めよ**」ではないということだ。そして、「**悔い改めよ**」と訳されている箇所の原文の大半は「メタノエオー」[μετανοέω]であり、それは「**方向を変える**」という物理的な意味であって、「**反省する**」という意味は全くないということである。したがって、「メタノエオー」は「**悔い改めよ**」と訳されてはいるが、それは罪という病気を反省せよと言っているではなく、罪という病気で苦しむ者に対し、方向を変え、医者であるキリストのもとに行きなさいと言っているのである。「罪の行為」に至ったのであれば、それが赦される（癒やされる）道があるので、その道に「**方向転換**」しなさいと言っている。言い換えれば、「**つらければ、医者に行って診てもらいなさい**」という励ましであって、「メタノエオー」は、そういう意味で使われている。とはいえ、「新改訳聖書 2017」には、「**罪を悔い改めよ**」というフレーズこそないが、それと類似した意味に訳されている箇所は複数ある。どの日本語の聖書でも、その箇所は概ね同じように訳されている。ならば、その訳は正しいのかも見ておきたい。最初は、次の訳である。

「だから、この悪事を悔い改めて、主に祈れ。もしかしたら、心に抱いた思いが赦されるかもしれない。」（使徒 8:22　新改訳 2017）

ここでは、「悪事」という言葉が「悔い改める」の目的語として訳されている。しかし、ギリシャ語の原文を見ると、「悪事」は「悔い改める」の目的語ではない。「悪事」には、「～から（離れて）」を意味する前置詞「アポ」[ἀπό] が付いているので、ここは「悪事から離れて」である。そして、「悔い改める」は「（神の方に）向きを変える」が正しい意味なので、この箇所の意味は、「悪事を犯したなら、心を主に向け、祈りなさい」である。「罪を犯したなら、神の治療を受けなさい」、ということであって、罪の反省を求めているのではない。では、次の訳を見てみよう。

「そして、その苦しみと腫れもののゆえに天の神を冒瀆し、自分の行いを悔い改めようとしなかった。」（黙示録 16:11　新改訳 2017）

ここでも、「自分の行い」が「悔い改める」の目的語として訳されている。しかし、ギリシャ語の原文を見ると、「自分の行い」は「悔い改める」の目的語ではない。この「自分の行い」には、「～の中から」を意味する前置詞「エク」[ἐκ] が付いているので、この箇所の意味は、「自分の行いの中から、（神の方に）向きを変えようとしなかった」である。それは、罪を犯しても神の治療を受けなかった、ということであって、「自分の行いを悔い改めようとしなかった」ではない。では、次の訳を見てみよう。

「（前略）淫らな行いを悔い改めようとしない。」（黙示録 2:21　新改訳 2017）
「（前略）淫らな行いや盗みを悔い改めなかった。」（黙示録 9:21　新改訳 2017）

これらの御言葉も、罪の行為が「悔い改める」の目的語として訳されている。しかし、ギリシャ語の原文を見ると、それは「悔い改める」の目的語ではない。やはり、先に見たと同じ前置詞「エク」[ἐκ]「～の中から」が付いている。それゆえ、これらの箇所はどれも、「罪という行為 **を** 悔い改めなかった」ではなく、「罪という行為 **の中から**、（神の方に）向きを変えなかった」である。では、次の訳も見てみよう。

「（前略）そして、以前に罪を犯していながら、犯した汚れと淫らな行いと好色を悔い改めない多くの人たちのことを、私は嘆くことにならないでしょうか。」（Ⅱコリント 12:21　新改訳 2017）

これも、罪の行為が「悔い改める」の目的語として訳されている。しかし、ギリシャ語の原文を見ると、それは「悔い改める」の目的語ではない。ここでの罪の行為には、「～の上に」、「～のゆえに」を意味する前置詞「エピ」[ἐπί]が付いている。したがって、「犯した汚れと淫らな行いと好色　を　悔い改めない」は、「犯した汚れと淫らな行いと好色　のゆえに、（神の方に）向きを変えようとしなかった」という意味である。この箇所は、罪の行為を繰り返すだけで、神に立ち返ろうとしない様子が書かれているのであって、罪を反省しないという意味ではない。神が問題にするのは、罪人が神の治療を受けようとしないことなので、あくまでもその視点での話が書かれている。そもそも「メタノエオー」は自動詞であり、目的語は不要である。そうである以上、「メタノエオー」を使って、「罪を悔い改める」というフレーズは作りようがない。

このように、新約聖書には、「罪を悔い改めよ」と書かれたところはもとより、「罪の行為を悔い改めよ」と書かれたところすらない。書かれていたのは、「罪ゆえに、心を神に向けよ」であって、人の罪は「病気」ゆえに、神の治療を受けなさい、ということである。だが、「メタノエオー」を「悔い改めよ」と訳すから、何を悔い改めるのかとなり、「罪を」、「悪い行いを」となってしまい、前置詞を無視した意味に訳されてしまう。そのように訳されるのは今に始まったことではなく、昔からである。「メタノエオー」が「悔い改めよ」と訳されたことで、いつの間にかそれは「罪を悔い改めよ」という意味に解されるようになり、誰もが「罪を悔い改めよ」は聖書の教えだと思い込むようになった、というのが事の次第である。

ちなみに、「新改訳聖書 2017」の前身である「新改訳聖書第三版」の「旧約聖書」には、実は「罪を悔い改めよ」と訳された箇所が三箇所あった（イザヤ 59:20、エゼキエル 18:28、33:14）。しかし、それはどれも誤訳なので、改訂版の「新改訳聖書 2017」からは「罪を悔い改めよ」という訳は姿を消し、「背きから立ち返る」（イザヤ 59:20）、「背きから立ち返った」（エゼキエル 18:28）、「罪から立ち返り」（エゼキエル 33:14）となった。すなわち、「否定」の道から、「肯定」の道に「方向転換」する意味に改訂された。そして、ここで「立ち返る」と改訳された箇所の原語は「シューヴ」[שׁוּב]であり、それには「悔い改める」（反省する）という意味は全くないので、ようやく原文どおりに訳されるようになった次第である。

見てきたように、聖書には「罪を悔い改めよ」と書かれた箇所は一箇所もない。ところが、「人間的な標準」の眼鏡は「罪には罰」なので、罪を犯せば神からの罰があると思い込み、罰を赦してもらうには、「罪を悔い改める」必要があるという勝手なストー

リーを作ってしまった。そのため、「罪を悔い改めよ」と、聖書は教えていると信じ込むようになった。罪が赦される「赦しの恵み」は無条件（ただ）であったが、それがいつしか、「罪を悔い改める」という、条件付きの恵みとして解されるようになった。こうした誤解はイエスの時代からあったので、イエスは、ある女性の行為を通してこの誤解を正された。その女性とは、多くの罪が赦された女性である。

❖ 多くの罪が赦された女性

一人の罪深い女性がいた。彼女は、イエスがパリサイ人の家で食卓に着いていることを知ると、香油の壺を持ってイエスのもとに来た。そして、涙でイエスの足をぬらし始め、髪の毛でそれをぬぐい、香油を塗った。この様子を見たパリサイ人は、こう思った。「この人がもし預言者なら、自分に触れている女がだれで、どんな人か分かるはずだ。罪深い女なのに」（ルカ 7:39　新共同訳）。ところが、イエスはパリサイ人ではなく、この女性を正しいとされたのである。それはなぜか。

私たちは、パリサイ人と聞くと悪いイメージを持ってしまうが、彼らは当時、品行方正な者として社会からは尊敬されていた。それに対し、この女性の日頃の行いは、社会からは罪深い者として見られていた。だが、イエスはパリサイ人ではなく、この女性を正しいとされたのであった。イエスはその理由を次のように言われた。「この人を見ないか。わたしがあなたの家に入ったとき、あなたは足を洗う水もくれなかったが、この人は涙でわたしの足をぬらし、髪の毛でぬぐってくれた。（中略）あなたは頭にオリーブ油を塗ってくれなかったが、この人は足に香油を塗ってくれた」（ルカ 7:44-46　新共同訳）。つまり、パリサイ人にはイエスへの愛がなかったが、この女性にはあったので、正しいとされたのである。そしてイエスは、この違いは多くの罪が赦されたかどうかで生じる、と言われた。

> 「だから、言っておく。この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさで分かる。赦されることの少ない者は、愛することも少ない。」
>
> （ルカ 7:47　新共同訳）

この女性は多くの罪を赦されたので、そのことが彼女の中に、神への「愛」を創造させた。それでイエスは、彼女にこう宣言されたのである。

> 「あなたの罪は赦されています」（ルカ 7:48）

ここで「**罪**」と訳された原語は複数形であって、それは心を神に向けられない「罪」の状態から生じる「罪の行為」を指している。そして、イエスが彼女に、「**赦されています**」と言われた際の原語の時制は「現在完了形」であり、イエスはここで、あなたの「罪の行為」はすでに赦されていることを宣言されたのであった。香油を塗ってくれたので、そのお礼に罪を赦すと言われたのではない。このことから、彼女に起きた出来事は、次のとおりであったと推察できる。

この女性は「罪の行為」を重ね、ついに自分自身に「絶望」した。それにより、心に迫る神の呼びかけに対し、ようやく心の戸を神に開くことができた。それは見えない神に、あの取税人のように祈ることができたということである。「**神さま。こんな罪人の私をあわれんでください**」（ルカ 18:13）。すると、彼女は神に強く捕らえられ、言葉では言い表せない霊的な喜びに満たされ、「**こんな自分であっても愛されている**」ということを理屈抜きで知ることができた。そのことが彼女の心に神への「愛」を創造させたので、彼女は聖霊に導かれてイエスのもとに行った。そして、彼女は感謝の涙でイエスの足をぬらし、髪の毛でそれをぬぐい、香油を塗ったのである。イエスはそれを見て、「**あなたの罪は赦されています**」（ルカ 7:48）と言われたのであった。彼女はこの言葉を聞き、あの時、言葉では言い表せない霊的な喜びに満たされたのは、罪が赦されたからだと分かり、自分は「赦しの恵み」を受け取っていたことを知った。それは全て、彼女の中で、神の呼びかけに応答する「信仰」が働いたことによるので、イエスは続けて彼女に、「**あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい**」（ルカ 7:50）と言われた。

まことに、人にとっては、神の赦しを知ること以上に大きなことはない。なぜなら、それが最も大切な神への「愛」を創造するからである。この創造こそが神との距離を縮める「癒やし」であり、「安息」をもたらす。

このように、この女性は自分の罪を告白し、罪を悔い改めたわけではなかったが、それでもイエスからは、「**あなたの罪は赦されています**」（ルカ 7:48）と言われたのである。つまり、この女性は「赦しの恵み」を、「絶望」の中で「**ただで**」受け取り、そのことの感謝からイエスのもとに行き、「**あなたの罪は赦されています**」と言われたということである。イエスは、神による「赦しの恵み」は条件付きの恵みではなく、無条件の恵みであることを、この女性の行為を通してパリサイ人に教えたのであった。加えて、多くの「赦しの恵み」を受け取る生き方が神への「愛」を真に創造し、神と人との距離を縮めることを教えたのであった。それは、心を神に向けられなかった「罪」

の状態が壊れていくということであり、それに伴い、心から「罪の行為」を悔い改められるようになっていくということである。

ところが、パリサイ人が選択したのは、罪に絶望し、無条件で「赦しの恵み」を受け取る道ではなかった。自力で罪の行為を処理する、まさに「**罪を悔い改める**」という道であった。それは、世間からは立派な人として賞賛されるが、そこには罪が無償で赦されるという経験がないので、神への「愛」は全く育たなかった。このことが、神の目には「不義」となる。それで、イエスはこのことを先のパリサイ人に教えるために、五百デナリの借金が赦された者と、五十デナリの借金が赦された者とでは、どちらが金貸しを愛するかという問いかけをし、パリサイ人が、「**よけいに赦してもらったほうだと思います**」（ルカ 7:43）と答えたので、「**あなたの判断は当たっています**」（ルカ 7:43）と言われたのである。こうして、イエスは「赦しの恵み」に対する人々の誤解を是正された。このことから、「赦しの恵み」の中身は確定する。

❖ 「赦しの恵み」

「赦しの恵み」というと、人は刑罰の免除を連想する。しかし、神がなさる「赦しの恵み」は、神が人を無条件で受け入れるということであり、人が神に捕らえられることである。これを、神との「再結合」といい、それは無条件で行われるので、そこに神への「愛」が創造される。先述した女性も、香油を塗るという神への「愛」を創造した。この恵みは喩えるなら、迷える小羊であった人間が、神によって捜し出されるようなものである。それは神との「再結合」であり、その後も羊は迷い出る度に「赦しの恵み」を受け取り、そのことで神との「再結合」が豊かになっていく。すなわち、無条件で羊に「いのち」を得させ、それを豊かにしていくのが「赦しの恵み」であり、イエスはその恵みを与えるために来られたので、「**わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです**」（ヨハネ 10:10）と言われたのであった。

大体にして、無条件で神に受け入れられなければ、人は神に近づくことも、神を素直に愛することもできない。無条件で神に受け入れられなければ、人は神のことを圧倒的な権力者として捉えてしまう。律法に違反すれば、神は容赦なく罰する方として捉え、ただただ「神の裁き」を恐れ、神とは常に一定の距離を取ってしまう。「**主よ。私のような者から離れてください。私は、罪深い人間ですから**」（ルカ 5:8）。これでは、神との距離は縮まらないので、「不安」は増すだけである。それはちょうど、子どもが親から罰せられることを学習すると、親の罰を恐れるようになり、親とは常に一定の距離を取ってしまい、「不安」が増すのと同じである。だが、あの女性はイエスのこと

を知ると、何も恐れることなくイエスに近づき涙した。それは、自分が無条件で受け入れられる「赦しの恵み」を、先に神から受け取っていたからにほかならない。したがって、あの涙は喜びの涙であった。

このように、神に無条件で受け入れられる経験すれば「不安」は除去されていき、あの女性のように喜んで神に近づいていけるようになる。それに伴い、「ダメな者」として拒否してきた自分自身も受け入れられるようになり、隣人も受け入れられるようになり、「愛」が流れ出るようになる。これが「赦しの恵み」であり、それはそのまま人の「癒やし」となる。この罪深い女性の話で重要なことは、彼女は無条件で多くの罪が赦されたということである。彼女がしたことは、自らの罪に「絶望」する中、ただ「魂」を介して行われる神の呼びかけに応答し、心の戸を神に開くことだけであった。こうした神と人とのやりとりについては、聖書に次のように書かれている。

> 「見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところに入って、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。」（黙示録 3:20）

神はここで象徴を使い、「赦しの恵み」は無条件であって、誰であれ心の戸を開けば受け取ることができることを教えられた。しかし、この恵みは言ってみれば、「**あなたは死に値しない！**」という無罪判決を、「**神の裁き**」として受け取ることでもある。それはまことに恐れ多いことなので、むしろ世の習わしに従って罰を受け、その上で赦される方がよいと人は思ってしまう。ところが、神はそうした世の習わしの裁きを断固拒否し、無条件で人を赦すという「**神の裁き**」を下されるのである。そして、人のほうはと言えば、この恵みを受け取ると、先ほどの女性のように、神に何かを捧げたくなる。それこそが、心を神に向けられなかった「罪」の排除を意味する。それに伴い、赦された「罪の行為」に対しては心から悔いるようになる。それゆえ、罪が赦される恵みの下にあるのだから「**罪を犯そう**」、ということには決してならない。

> 「それではどうなのでしょう。私たちは、律法の下にではなく、恵みの下にあるのだから罪を犯そう、ということになるのでしょうか。絶対にそんなことはありません。」（ローマ 6:15）

見てきたように、「赦しの恵み」は刑罰の免除ではない。そもそも罪は「病気」なので、罪への刑罰など存在しない。「**だれかが、わたしの言うことを聞いてそれを守らなく**

ても、わたしはその人をさばきません」（ヨハネ 12:47）。つまり、「赦しの恵み」は、神に無条件で捕らえられる神との「再結合」であって、それを豊かにするためにある。そして、「赦しの恵み」を手にするのに、人間の業は不要である。何かを捧げたから、あるいは自らに罰を課したから、すなわち罪を悔い改めたから受け取れるという話では決してない。それは心を開いて、ただ受け取ればよい恵みである。その恵みは太陽の光のように、誰の上にも平等に降り注いでいるので、ただ光の下に進み出ればよい。すると、そこに「愛」が創造されていき、「愛」に反する「罪の行為」への心からの悔い改めが起きる。したがって、「赦しの恵み」を受け取る条件は「**罪を悔い改めよ**」ではない。このことは、ザアカイの話からも知ることができる。

❖ ザアカイの話

イエスがエリコの町に入られると、そこにはザアカイという取税人の頭がいた。彼は、人をだまして金儲けをしていたので、その町では誰もが知る罪深い者であった。無論、本人も自分が罪深い者であることは知っていた。かといって、自分の罪をどうすることもできなかった。そのような苦しみを抱えていたザアカイであったが、彼はイエスのことを聞き、一目見てみたいと木に登った。その時、イエスは木の上にいたザアカイの方をご覧になり、「**ザアカイ。急いで降りて来なさい。きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから**」（ルカ 19:5）と言われたのである。イエスはこうして、彼の心の戸を叩かれたのであった。

この呼びかけによって、ザアカイには二つの選択が生じた。一つは神の呼びかけに応答し、木から降りて神に近づくという選択である。もう一つは神の呼びかけを無視し、神に近づかないという選択である。彼は前者を選択し、イエスの呼びかけに応答し、急いで降りて来た。「**ザアカイは、急いで降りて来て**」（ルカ 19:6）。これは、先ほどの罪深い女性と同じように、心の戸を開き、無条件で神に受け入れられる「赦しの恵み」を受け取った瞬間である。正確に言うと、罪とは「**神を信じない**」ことであり、「**罪についてとは、彼らがわたしを信じないこと**」（ヨハネ 16:9　新共同訳）、それは「**神と距離を取る**」ことなので、ザアカイがイエスの呼びかけに応答しイエスに近づいたことが、神との距離を縮める「赦しの恵み」の受け取りであった。それは、「**神と距離を取る**」罪が赦された時であり。ザアカイが神と「再結合」し、救われた時であった。無論、本人には救いの自覚も、「赦しの恵み」を受け取った自覚もなかった。だが、神と「再結合」したので、わけも分からず喜びに満たされ、「**大喜びでイエスを迎えた**」（ルカ 19:6）となった。それから、ザアカイはイエスにこう言ったのである。

「主よ。ご覧ください。私の財産の半分を貧しい人たちに施します。また、だれからでも、私がだまし取った物は、四倍にして返します。」（ルカ 19:8）

ザアカイには救われた自覚がなくても、イエスの呼びかけに応答したことで「赦しの恵み」を受け取って救われていた。神との距離が縮まっていた。そのことで、先ほどの罪深い女性と同じように霊的な喜びに満たされていた。そのことが神への「愛」を創造させ、隣人への愛を回復させ、「主よ。ご覧ください。私の財産の半分を貧しい人たちに施します」となったのである。つまり、「赦しの恵み」を受け取った結果、心から「罪を悔い改める」ことができたということである。そこで、イエスは彼にこう言われたのであった。

「きょう、救いがこの家に来ました。」（ルカ 19:9）

イエスはここで、「きょう、救いがこの家に来ました」と言われたのであって、これから救いが来ると「未来形」で言われたのではない。そしてザアカイは、そう言われたことで、自分が覚えたあの喜びは、自分が救われたからだとようやく知ることができた。このように、彼はすでに「赦しの恵み」を受け取っていたので愛が回復し、心から「罪を悔い改める」ことができたのである。心の戸を開き「赦しの恵み」を受け取ったから、すなわち神との距離を縮められたから、そのことで喜びに満たされ、「罪を悔い改める」ことができた。これは、「罪を悔い改める」から救われる、という流れではないことを示している。イエスはこの流れを知るがゆえに、続けて、「人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです」（ルカ 19:10）と言い、ご自分は人を捜し、捕らえるために来たことを宣言されたのであった。それは、「赦しの恵み」を受け取らせるということである。

このザアカイの話からも、罪を悔い改めたなら「赦しの恵み」が受けられる、という話ではないことが分かる。そもそも「赦しの恵み」は刑罰の免除ではない。それは、神の側が人を捜し出して捕らえる「再結合」であり、神との距離が縮まることである。神に捕らえられれば、これまで人を捕らえていた「過去」は白紙になり、神と生きる「未来」に心が開くようになる。それが「赦しの恵み」であって、それは刑罰の免除ではない。そもそも神の目には人は病人なので、刑罰自体がない。そして、「赦しの恵み」を受け取るために人がすることは、ザアカイがしたように、ただ神の呼びかけに応答することだけでよい。これを、神に「心を開く」といい、「信仰」が働くという。この応答だけが重要なので、聖書は繰り返し「心を開く」ようにと勧めている。それ

はつまり、心の向きを変えなさいということであって、新約聖書はそれを「方向を変える」ことを意味する「メタノエオー」で表現した。ところが、それを「悔い改める」と訳したために、「罪を悔い改める」ことが「赦しの恵み」を受け取る条件ということになってしまった。しかし、それは間違いである。「赦しの恵み」は太陽の光と同じように、誰の上にもいつでも降り注がれているので、人の側はただ「心を開く」だけで受け取ることができる。この理解が正しいことは、放蕩息子の譬えを見ても分かる。

❖ 放蕩息子の譬え

放蕩息子の譬えは、弟が父に、「お父さん。私に財産の分け前を下さい」（ルカ 15:12）と言って、父から財産を受け取ると家を出て行った場面から始まる。すると、彼は放蕩に走り、財産を使い果たしてしまい、食べる物もなく絶望に追い込まれてしまった。その時、彼は飢えに耐えかね、父のもとに帰ろうと思った。しかし、自分がしてきたことを父に赦してもらい、再び父に受け入れてもらうには、罰を受けなければならないと思った。そこで、彼は父のところに行って、こう言おうと決心する。「お父さん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。雇い人のひとりにしてください」（ルカ 15:18-19）。こうして、彼は真実に、父の前で「罪を悔い改める」決心をした。それから彼は立ち上がって、父のもとに向かった。だが、その時、信じられないことが起きた。何と遠くから父が走り寄ってきて、彼を抱きしめ、口づけをしたのである。

> 「こうして彼は立ち上がって、自分の父のもとに行った。ところが、まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけ、かわいそうに思い、走り寄って彼を抱き、口づけした。」（ルカ 15:20）

彼は当初、罪を赦してもらうために罰を受ける覚悟だった。そこで、父に会ったなら、「雇い人のひとりにしてください」（ルカ 15:19）と言って、先に「罪を悔い改める」つもりであった。ところが、それを言う前に父が走り寄ってきて、彼を抱きしめ、彼を無条件で受け入れてしまったのである。すなわち、「赦しの恵み」を先に受け取ってしまった。それから彼は父に、「お父さん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません」（ルカ 15:21）と言って、罪を悔い改めた。しかし、悔い改めただけで、そこでは赦してもらうために自らが用意していた罰、「雇い人のひとりにしてください」は、口にしなかった。なぜなら、父に抱きしめられた時、罪が無条件で赦されたことを知ったからである。

このように、「**罪を悔い改める**」ことが「赦しの恵み」を受け取る条件ではない。無論、罪は大いに反省し、悔いたらよい。しかし、神のもとに行かなければ罪は赦されないのである。というより、罪とは「**神を信じない**」ことであり、「**罪についてとは、彼らがわたしを信じないこと**」（ヨハネ 16:9　新共同訳）、それは「**神と距離を取る**」ことなので、神のもとに行くこと自体が「罪の赦し」の受け取りを意味する。したがって、放蕩息子のように神のもとに行くだけでよい。それ自体が、もう罪が赦される「赦しの恵み」を受け取ることであり、受け取れば放蕩息子のように、心から「**罪を悔い改める**」ことができる。このことは、イエスを裏切ったユダの話からも分かる。

❖　ユダの場合

ユダはイエスを裏切り、後にその「罪の行為」を後悔した。そこで、公に自分の罪を告白することで、心から罪を悔い改めた。聖書はその様子を、次のように綴っている。

> 「そのとき、イエスを売ったユダは、イエスが罪に定められたのを知って後悔し、銀貨三十枚を、祭司長、長老たちに返して、「私は罪を犯した。罪のない人の血を売ったりして」と言った。」（マタイ 27:3-4）

ここで「後悔し」と訳されている言葉は「**メタメロマイ**」［μεταμέλομαι］であり、これは「**悔いる**」ことを意味する。自分がしたことを反省し、考え直すことを意味する。つまり、彼は心から「**罪を悔い改めた**」のである。ちなみに、この「**メタメロマイ**」であれば、「悔い改める」という意味に訳さなければならない。しかし、イエスが何度も言われたのは、ヘブライ語の「シューヴ」（**立ち返る**）を、ギリシャ語に訳す際に使われた「**メタノエオー**」（**方向を変える**）であって、「**メタメロマイ**」ではない。それなのに、「**メタノエオー**」を「**悔い改める**」と訳すから誤解が生じてしまった。

さて、ユダは自らの罪を心から反省し、すなわち心から罪を悔い改めたが、それは心を神に向ける（**方向を変える**）ということではなかった。ただ、過去に留まっただけであった。そのため、神との距離は全く縮まらなかった。むしろ、どうせ自分は「ダメな者」だからと、ますます神との距離を深めることになった。それで、ユダの心には苦しみが増し、ついに自死を選択したのであった。「**そして、外に出て行って、首をつった**」（マタイ 27:5）。このユダの例からも、大事なことは「**罪を悔い改める**」ことではなく、心を神に開き、「赦しの恵み」を受け取ることであることが分かる。それは、神のもとに行くことであり、それを旧約聖書はヘブライ語の「シューヴ」（**立ち返**

る）で表現し、新約聖書は「**メタノエオー**」（方向を変える）で表現したのであった。ところが、それを「悔い改める」と訳すから誤解が生じてしまったのである。

そこでもう一度言うが、ユダがした「**メタメロマイ**」が「悔い改める」であって、聖書は明確に、「**メタメロマイ**」と「**メタノエオー**」を区別して使っている。であれば、区別して訳す必要があるにもかかわらず、人の側がそれを同じ意味に訳してしまった。ならば、罪を悔い改めなくてもよいのかとなるが、そのようなことは言っていない。もちろん罪は悔いるべき対象であって、罪を犯さないよう大いに反省すべきである。しかし、自分の罪をいくら悔い改めても、神のもとに行かなければ何の意味もない。つまり、「罪を悔い改める」ことと、心を神に向けることとは全く別の話であって、神が求めているのは、心を神に向けることである。

このように、ユダの例は、「方向を変える」ことの重要性を教えてくれている。したがって、犯した罪で苦しくなったのなら、それは「病気」なので、医者である神のもとに行くことである（方向を変える）。医者である神のもとに行き、治療を受ければよい。治療を受けて、罪が赦されたことを知れば、もう二度と罪では苦しみたくないと、真実に罪を悔い改めるようになる。虫歯で痛みを覚えたなら、まずは歯医者のもとに行って治療をし、治った後は、もう二度と虫歯にはならないように注意を払うのと同じである。そして、「方向を変える」ことを「信仰」ともいう。そこで、「信仰」と「**メタノエオー**」（方向を変える）の関係にも言及しておきたい。そうすれば、「**メタノエオー**」を「悔い改める」と訳すことが、いかに間違っているかが分かる。

❖ 「信仰」と「メタノエオー」の関係

新約聖書で「信仰」と訳されている箇所の原語は「ピスティス」[πίστις]であり、本来の意味は、「信頼を呼び起こすもの」である。それは「誠実な態度」であり、「信実」である。この「ピスティス」に特別な意味を持たせて、宗教用語にしたのがキリスト教であった。ならば、キリスト教は「ピスティス」をどのような意味で使ったのだろう。そこには、どのような概念があったのだろうか。それを知るには、先にキリスト教の福音の形式を知る必要がある。

キリスト教の福音の形式は「告知」である。神（キリスト）が人（イエス）として天から来られ、神の言葉を「告知」したのが福音である。その中身を一言でいえば、それは神からの「招待状」である。宴会の時刻になり、「もう用意ができましたから、おいでください」という「招待状」である。イエスは、これを譬えで話された。

「そこで、イエスは言われた。「ある人が盛大な宴会を催そうとして、大勢の人を招き、宴会の時刻になったので、僕を送り、招いておいた人々に、『もう用意ができましたから、おいでください』と言わせた。」

（ルカ 14:16-17　新共同訳）

この招待状の「告知」に対し、誠実に「行きます」と応答することが「ピスティス」であり、「信仰」である。したがって、「信仰」の概念は、神の「告知」に応答することであって、向きを変え、神のもとに行くことである。神が来なさいと招待しておられるので、それに応答し、自分の方向を変えて神に向かうことがキリスト教に於ける「信仰」の概念である。この概念を言い表しているのが、「メタノエオー」（方向を変える）であり、「ピスティス」と「メタノエオー」は、キリスト教の福音では同じ目的で使われている。それでイエスは、宣教開始の第一声では次のように述べられた。

「時が満ち、神の国が近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」

（マルコ 1:15　新改訳 2017）

「時が満ち、神の国が近づいた」とは、先述した、「宴会の時刻になったので、僕を送り、招いておいた人々に、『もう用意ができましたから、おいでください』」（ルカ 14:17 新共同訳）と同じであり、イエスはここで、神からの招待状を「告知」された。それは、誰もが待ち望んだ「神の国」への招待状であった。イエスはこの「告知」に対し、「方向を変えなさい」（メタノエオー）と言われた。ここでの訳は、「悔い改めて」となっているが、それは誤りである。イエスが言われたのは「悔い改めて」ではなく、あなたを「神の国」へ招待するから、「方向を変えなさい」である。要するに、「神のもとに来なさい」である。そして続けて、その福音（招待状）を「信じなさい」と言い、「メタノエオー」を「信仰」（ピスティス）の動詞で言い換えられた。つまり、「メタノエオー」と「ピスティス」は、キリスト教の福音では同じ目的で使われている。

このように、新約聖書にある「メタノエオー」は「反省する」ではなく、あくまでも「方向を変える」であり、それは神に立ち返ることを言い表している。神が私たちを招待してくれているので、神のもとに立ち返りなさいということで使われている。こうした神の「告知」に対し、「方向を変える」という応答が「信仰」（ピスティス）であり、方向を変える「メタノエオー」と「信仰」（ピスティス）は全く同じ概念である。

さらに言えば、イエスの弟子のヨハネは、「メタノエオー」という言葉が道徳的な意味に解され、罪を反省するという意味に解される危険性をよく分かっていた。そこで彼の書いたヨハネの福音書とヨハネの手紙では、「メタノエオー」という動詞を一度も使わなかった。その代わりに、「ピスティス」の動詞「ピステウオー」を使った。すなわち、「信じる」（ピステウオー）という言葉で、「方向を変える」（メタノエオー）を表現したのである。そのようにして、ヨハネはイエスの言葉の真意を正確に伝えたのであった。パウロも同様に、誤解を招かないよう、極力「メタノエオー」の使用は避け、「ピスティス」並びにその動詞を積極的に使った。このことが分かれば、罪を言い表すなら、罪が赦されるということの意味も分かるようになる。

❖ 「罪を言い表すなら」とは

人は世の習わしに従い、罪の赦しを神から受け取るには、「罪の悔い改め」が先だと思い込んでいる。しかし、聖書にあるのは、神に、罪を言い表すなら 罪が赦されるであって、神に、罪を悔い改めるなら 罪が赦されるではない。

> 「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」（Ⅰヨハネ 1:9）

人は神を愛するように造られているので、神の命令に逆らう罪は「苦しみ」をもたらす。それゆえ、神に「罪を言い表すなら」とは、神に「苦しみ」を言い表すことを意味する。それは、病人が医者に「苦しみ」を言い表すように、である。そうすれば、神は医者なので、「苦しみ」をもたらした罪を赦してくださるということである。「医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです」（マルコ 2:17）。

端的に言えば、神は医者なので、神のもとに行きさえすれば、神は人の様子から真の「苦しみ」を察知し、すなわち「罪」を察知し、赦してくださる。それでイエスは、中風の人が運ばれてきたとき、彼の「苦しみ」の様子のご覧になり、ただそれだけで、「子よ。あなたの罪は赦されました」（マルコ 2:5）と言われたのである。つまり、罪を言い表すなら とは、向きを変え、神のもとに行くことを意味する。放蕩息子の譬えも、そのことを教えている（ルカ 15:11-32）。というのも、「苦しみ」の中にあった放蕩息子が、父のもとに立ち帰ってくる様子を遠くから見た父親は、息子の真の「苦しみ」を、すなわち「罪」（神との分離）を察知し、彼の所に走りより抱きしめたからである。そのようにして、息子の罪（苦しみ）を無条件で赦し、「隔ての壁」を壊した。

そして、罪が赦されることを神との「再結合」という。「再結合」に至ったのは、まさしく「苦しみ」を覚えたおかげである。ならば、どうして人は「苦しみ」を覚えるのだろう。それは、神に捕らえられているからである。神に捕らえられているからこそ、神と分離した状態（罪）に「苦しみ」を覚える。神に捕らえられているからこそ、神の呼びかけを聞くことができ、神の命令に逆らう罪を犯せば「苦しみ」を覚える。この章では、心を開けば神に捕らえられるという言い方をしてきたが、正確に言えば、神に捕らえられているから、心を開く応答ができるというのが正しい。したがって、心を神に開く「信仰」は神から出ている。「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい」（ヘブル 12:2）。神から「信仰」が出ているので、神との「再結合」も可能になる。その「再結合」が「赦しの恵み」であり、これを「神の義」という（第一巻 295 頁「神からの「義」」）。

しかし、神の呼びかけを聞き、「苦しみ」を覚え、神のもとに行く「再結合」を果たしても（罪が赦されても）、すなわち神の呼びかけに応答し、神に引き寄せられても、「肉体の死」までは「死の体」を持ち続けるので、「死」の力は再び私たちを神から引き離してしまう。それは、神と一緒になっても（再結合）、肉の思いに仕えてしまうということである。心では「神の律法」に仕え、肉では「罪の律法」に仕えてしまうということである。「この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです」（ローマ 7:25　新改訳 2017）。その結果、「罪の行為」が繰り返される。それでも「魂」を介し、神は呼びかけ続けてくださるので、それに応答して心を神に開けば再び罪が赦される（神との距離が縮まる）。それによって、一旦手にした神との「再結合」は豊かになり、さらに神を愛するようになる。こうして、多くの罪を赦された者は多く愛するようになる。「だから、言っておく。この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさで分かる」（ルカ 7:47　新共同訳）。

ここで注意することは、神との最初の「再結合」で「霊の体」を着せられ、「永遠のいのち」を持つ者になるということである。それゆえ、その者はもう、心が「死」の力に負け、「罪の行為」に走ったとしても滅びることは決してない。「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません」（ヨハネ 10:28）。すなわち、一度でも神との「再結合」がなされたなら、たとえ「死」の力でも、神の愛から私たちを引き離すことはできないということである。「死も（中略）、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません」（ローマ 8:38-39）。

このように、**罪を言い表すなら** 罪が赦されるというのは、罪は「**苦しみ**」なので、「**苦しみ**」を覚えたなら医者のもとに行くように、神のもとに行くということである。神は医者なので、罪の「**苦しみ**」を覚えたなら、神のもとに行くということである。神のもとに行きさえすれば、神は罪の「**苦しみ**」を癒やしてくださる。これが、罪が赦されるということであり、これを神との「再結合」という。それは、罪が赦される度に神との「再結合」が行われるということではなく、一旦手にした神との「再結合」の強度が、罪が赦される度に増していき、豊かになっていくということである。それは、神との距離が縮まっていくということである。これこそが、イエスの来られた目的であったので、イエスは、「**わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです**」（ヨハネ 10:10）と言われたのである。

したがって、罪を赦す「赦しの恵み」は、神との距離を縮める恵みにほかならない。罪とは神を信じないことであり、「**罪についてとは、彼らがわたしを信じないこと**」（ヨハネ 16:9　新共同訳）、神を信じないことは、「**神と距離を取る**」ことなので、罪が赦されることは神との距離が縮まることを意味するからである。

「罪」＝「神 を信じない」＝「神 と距離を取る」

「罪 が赦される」＝「神 と距離が縮まる」

罪が赦されるのは、神が「赦しの恵み」を無条件で差し出してくださるからであって、人の側がすべきことは、差し出された御手に掴まるだけである。人の側が、罪を悔い改めるから赦されるわけではない。御手に掴まるから、神が人を引き寄せてくださり、神との距離が縮まる。これが「赦しの恵み」である。この「赦しの恵み」は、神との「再結合」に始まり、その後も「**苦しみ**」（罪）を言い表す度に、何度でも受け取っていく。それにより、その「再結合」は豊かになっていく。そこで神は、差し伸べた御手に掴まれと言われる。それが心を神に向けなさい（メタノエオー）ということであって、神を信じなさい（ピステウオー）ということである。つまり、神は人に対し、「**罪を悔い改めよ**」とは言われないのである。

❖ 「罪を悔い改めよ」とは言われない

神は、人の「罪」の原因が人にではなく、悪魔の仕業で入り込んだ「死」にあったことをご存じであった。「**死のとげは罪であり**」（Ⅰコリント 15:56）。神は、人の「罪」は、「死」によって人を支配したということをご存じであった。「**罪が死によって支配**

したように」(ローマ 5:21)。ということは、神からすれば、人の「罪」は死による「病気」ということになるので、神が人となって来られたイエスは、私たちの「病気」を背負い、十字架に架かられたことになる。「まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった」(イザヤ 53:4)。人の「罪」は、まことに神と人とを引き離す「病気」なので、神は人が神に近づけるようにと十字架に架かることで、人のためなら命さえ惜しくないという愛を明らかにされたのである。「キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです」(Ⅰヨハネ 3:16)。こうして、人は安心して神に近づくことができ、その打ち傷により、「神と距離を取る」という罪(病気)が癒やされることになった。

> 「キリストは自ら十字架の上で、私たちの罪をその身に負われた。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるため。その打ち傷のゆえに、あなたがたは癒やされた。」(Ⅰペテロ 2:24　新改訳 2017)

そうである以上、神は人に対し、「罪を悔い改めよ」とは言われないのである。神が言われるのは、「罪という病気で苦しいなら、わたしのところに来なさい」である。

> 「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」(マタイ 11:28)

「重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい」とは、医者が病人にする呼びかけと同じである。それは、「罪を悔い改めよ」ではない。「わたしのところに来なさい」である。医者が病人を治療するように、神も私たちの「苦しみ」(重荷)を癒やすと言っている。したがって、「罪を言い表す」とは、自分の「苦しみ」を言い表すことであり、そうすればキリストの十字架の愛が、「神と距離を取る」罪を、すなわち死による「病気」を癒やし、神との距離を縮めてくれるのである。これを「悪からきよめられる」といい、そのことを教えているのが次の御言葉になる。

> 「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」(Ⅰヨハネ 1:9)

そうである以上、聖書には「罪を悔い改めよ」という教えはない。あるのは、「神のもとに来なさい」であり、「神を信じなさい」である。イエスはそれを「メタノエオー」

（方向を変える）という言葉で表現されたのであるが、人はそれを「人間的な標準」を優先させ、本来の意味とは異なる「悔い改めよ」と訳してしまった。

そもそも神が展開される運動は、神と人とを「一つ」にする愛の運動なので、「キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし」（エペソ 2:14）、それは神と人との距離を縮める運動なので、その運動の御手に掴まり、すなわち神の呼びかけに応答し、神に近づくようにと聖書は教えている。「神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます」（ヤコブ 4:8）。それゆえ、人が「苦しみ」から神に助けを求めることがそのまま、神の呼びかけに応答し、神に近づくことになる。それがそのまま、罪（神と距離を取ること）が赦されることになり、「赦しの恵み」を受け取ることとなる。

このように、「罪」は「病気」なので、神は「罪を悔い改めよ」とは言われない。神が言われるのは、「罪」で「苦しみ」を覚えるなら、「わたしのところに来なさい」である。それを、「メタノエオー」（方向を変える）という言葉で表現されたのであった。それで神は、神との距離を縮めるために（罪を取り除くために）、人が覚える「苦しみ」をあえて「静観」される。「静観」すれば、人は自分の「苦しみ」と向き合うことができ、向き合えば神が差し出す救いの御手の「光」に気づくからである。それに気づけば、その御手に掴まるかどうかの決断に迫られる。そうすることで、神はご自分の差し出す御手に人が掴まれるようにし、人との距離を縮め、「友」と呼ぶ関係を築こうとされる。「わたしはあなたがたを友と呼びました」（ヨハネ 15:15）。それがそのまま、「真の病気」の癒やしとなる。なぜなら、人が神と距離を取ることが人の「真の病気」だからである。その癒やしに必要なのは、神の御手に掴まることである。それを「信仰」という。そこで神は、「わたしを信じなさい」と言われる。

❖ 「わたしを信じなさい」と言われる

神は、「わたしを信じなさい」（ヨハネ 14:1）と言われる。神と人とのやりとりは常に、神の側が呼びかけ、人がそれに応答するという形で進められる。言い換えれば、神が差し出される無条件の恵みを、人が受け取る「決断」をすることで進められる。この「決断」が「信仰」である。神は常に「わたしを信じなさい」と、「信仰」の「決断」を迫ってこられる。その際、神が「わたしを信じなさい」と「決断」を迫ってくるが、それに応えられないために人は「苦しみ」を覚える。「決断」できないのは、人は「苦しみ」を、この世の富や評判が解決してくれると思うからでる。しかし、それは偽物の治療なので、神は人に貸し出したご自分の「いのち」である「魂」を介し、何度で

も「決断」を迫ってくる。そのため、この世の富や評判を手放せない自分に「苦しみ」を覚える。これこそが「苦しみ」の真実であり、「苦しみ」は神が呼びかけてくださっているサインである（第一巻 260 頁「－神は決断を迫る－」）。

このように、神は、「わたしを信じなさい」と言われる。そして、神を信じるというのは、自力で獲得した価値ではなく、神から「贈り物」として賜る価値で生きていくということであり、無条件で神に受け入れられていることを承認することである。承認するなら、私たちはこの世の習わしに従い、自分自身の「行い」の正しさによって、神に受け入れられようとする必要はもうない。「私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております」（ルカ 18:12）。自分自身の「行い」の正しさによって、自分の価値を獲得しようとする必要は全くない。逆に、自分の「行い」の正しさによって、「義」とされる価値を獲得しようとすることは不信仰であり、それは誘惑の何ものでもない。しかし、人は誘惑に負けてしまった。罪を悔い改め、自力で「良い行い」をするから、神はその褒美として「義」と認めてくれたと、すなわち罪が赦されたと思い込んでしまった。そのせいで、聖書は「罪を悔い改めよ」と教えていると錯覚してしまった。ところが、聖書の原文には「罪を悔い改めよ」という表現はどこにもない。その事実に気づいた先人たちは、次のように述べている。

❖ 「罪を悔い改めよ」はおかしいと気づいた先人たち

「赦しの恵み」は無条件で与えられるので、ただ心を神に開き、それを受け取ればよい。ただ、心を神の方向に向けさえすればよい。新約聖書はこのことを、「メタノエオー」（方向を変える）を使って教えている。だが、それが「悔い改める」という意味に訳されたことで誤解が生じてしまった。例えば、「罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝えた」（ルカ 3:3　新共同訳）を見てほしい。この訳では、罪を悔い改めるから罪が赦されるという誤解が生じても仕方がない。しかし、この箇所を正しく訳すなら、「罪の赦しに至る、（神に）立ち返りの洗礼を宣べ伝えた」である。あのルターも、当時の聖書が「メタノエオー」を「悔い改める」という意味に訳していたので、そのように訳された箇所は、原点のギリシャ語で理解する必要があるとした。

> 「簡単に言えば、説教者らが真の悔悛の教えを無視して（「メタノエオー」が意味する本来の教えを無視して）、（中略）悔悛のうち最も安価な部分である赦免を高めようと企てたのです。」（『贖宥の効力についての討論の解説』「ルター著作集第一集第一巻」聖文舎 159 頁 ※（　）は筆者が意味を補足）

ルターは同じ本の中で、イエスの言われた「メタノエオー」とは、キリスト者がその全生涯をかけて神に向きを変えていくということであるとし、罪を反省し、罰を赦免してもらうということではないことを強調した。

キェルケゴールも、「悔い改める」という訳には疑問を持ち、「悔いは罪を取り除くことは出来ない、それはただ罪を悲しむことが出来るだけである」と述べ、それは周りからの非難の武装解除を成し遂げ、周りの人たちを説得するだけだとした（『不安の概念』（423-424）「キェルケゴール著作全集 第三巻（下）」創言社 596-598 頁）。

ブルトマンも、「悔い改める」の本来の意味は、「我意の孤立を脱して神のもとに立ち返ること」とした（ブルトマン著作集第 6 巻『原始キリスト教』新教出版社 237 頁）。そして、それ以前に、哲学者のカントまでもが、罪が赦されるためには、罪の悔い改めが必要とする考えは全く以ておかしいとしていた。

> 「この委員会は、罪の赦しの前に　後悔の念にうちひしがれることが必ず先立つべきだと要求したあと、さらに、罪を悔いる深い悲嘆を要求し、そのうえでその悲嘆について、人間はそれを実際に自分で起こすことができるかどうかと問うのである。否定されるべき、しかも徹底して否定されるべきことというのが、それにたいする答えであった。後悔の念に満たされた罪人は、この後悔の念を特別に神に乞い求めなければならない、というわけである。――後悔の念を起こしてくれるよう、さらに乞わなければならないような人間が、自分の行いをほんとうは悔いていないこと、これはもう明白ではないか。」（『諸学部の争い』W273 「カント全集 18」岩波書店 16 頁）

ここでカントが言いたいことは、罪が赦されるために罪を後悔している者が、さらに罪を後悔できるように祈るのは、「自分の行いをほんとうは悔いていない」ということになるということである。ゆえに、罪が赦されるために、罪を徹底的に悔い改める必要があるとする考えは矛盾する、と言っている。つまり、人が罪の赦しを求めて神の前に出た時点で、もうその人は罪を悔いているのだから、あとは自分の「苦しみ」を言い表すだけでよいということである。全く以て、そのとおりである。

このように、すでに先人たちが、「罪を悔い改めよ」という教会の教えについて異議を唱えていた。確かに、先人たちが疑問を持ったように、見てきたように「罪を悔い改めよ」という教えは聖書に全くない。「罪を悔い改める」から、「罪が赦される」とい

う教えは全くない。人の側は、「罪が赦される」という神からの「義」を、「ただで」受け取ればよいだけである。そもそも「ただで」受け取る時点で、カントが言うように人は罪を十分に悔いているので、改めて神の前で罪を悔い改めることが、罪が赦されることの条件になどなり得ないのである。神の前に「苦しみ」を訴えるということは、すでに反省がなされているということなのである。反省があって、初めて神に助けを求めることができる。

しかし、「罪を悔い改めよ」が神の教えとなると、ゴールは「反省」になってしまう。ただ過去という後ろを見るだけになってしまう。ゴールは「神」であり、神に戻るために反省がある。「苦しみ」を味わいたくないという反省があって、心を神に向けられる。かといって、「反省せよ」と言わなくてもよい。ただ「心を神に向けよ」と言えば、そこには反省がなされるのである。にもかかわらず、「罪を悔い改めよ」と要求することはカントが言うように矛盾でしかない。これでは、心は過去という後ろに向くだけで、前には向かないからである。聖書が教えているのは、心は前に向けることである。

> 「兄弟たち、わたし自身は既に捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。」（ピリピ 3:13-14　新共同訳）

大事なことは、「罪人」は「病人」であるということであり、それゆえ必要なのは、「苦しみ」を覚える度にキリストのもとに行き、「赦しの恵み」による癒やしを受け取るということである。そのことで、キリスト者はルターが言うように、その全生涯をかけて神に向きを変えていき、神との最初の「再結合」で手にした「永遠のいのち」を豊かにしていけばよい。神との「再結合」を深めていき、神への「愛」を増し加えていけばよい。それは、自分の「真実な姿」は「ダメな者」ではなく「良き者」であることを、あの放蕩息子のように知るようになることを意味する。さらに深く言えば、自分は何もできない「弱い者」であることを知るようになるということである。それが「神の福音」の真実である。では、簡単なまとめをしよう。

❖ まとめ

「神の福音」は、人に対する「否定」を「否定」することであった。それは、神との「再結合」に始まり、その「再結合」が豊かになっていくということであった。そのことを、ここでは見てきた。神との「再結合」は、神の呼びかけに応答することであり、

それは神と「再結合」する「赦しの恵み」を、「ただで」受け取る話であった。「ただで」受け取るので、それは「罪を悔い改めよ」という話ではなかったことを見てきた。つまり、人は体の「苦しみ」を覚えたなら医者のもとに行くように、人は心の「苦しみ」を覚えたなら、ただ神のもとに行けばよい。すると、神はその「苦しみ」を癒やしてくださる。これが「神の福音」であり、これを神との「再結合」という。

そこで、新約聖書は「向きを変える」という意味の「メタノエオー」を使い、神のもとへ行くことを促す。それを「悔い改める」と訳すのでおかしくなる。ただし、向きを変えて神のもとに行く際は、そこには必ず「反省」が伴う。「反省」があって、初めて向きを変えることができる。そういう意味では、「メタノエオー」を「悔い改める」と訳すことは間違いとまでは言い切れない。しかし、その場合は、目指すゴールが神ではなく、「反省」になってしまう危険が伴う。イエスを裏切ったユダと同じように、後悔だけで終わってしまう危険性がある。あくまでも目指すべきは、向きを変えて神のもとに行くことであり、そのための「反省」でなければならないので、「悔い改める」と訳さない方がよい。

さて次は、「苦しみ」に焦点を当ててみたい。というのも、見てきたように、「苦しみ」が私たちを神のもとへと導くからである。「苦しみ」を覚えなければ、私たちは神の方に向きを変えることがない。それゆえ、「神の福音」は、「苦しみ」から「苦しみ」へと進む話でもある。そこで次に、その視点から「神の福音」を見ていきたい。

第七章　「苦しみ」から「苦しみ」へ

詩篇の中に、次のような御言葉がある。「私は苦しみの中に【主】を呼び求め、助けを求めてわが神に叫んだ」（詩篇 18:6）、「私の苦しみの日に、あなたは私のとりで、また、私の逃げ場であられたからです」（詩篇 59:16）、「彼が、わたしを呼び求めれば、わたしは、彼に答えよう。わたしは苦しみのときに彼とともにいて、彼を救い彼に誉れを与えよう」（詩篇 91:15）、「この苦しみのときに、彼らが【主】に向かって叫ぶと、主は彼らを苦悩から救い出された」（詩篇 107:6）、「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました」（詩篇 119:71）、「苦しみのうちに、私が【主】に呼ばわると、主は私に答えられた」（詩篇 120:1）。これらは、神と人との接点は「苦しみ」であることを証ししている。ということは、そもそも福音は、神が人と関わる話なので、神と関わる福音は人の「苦しみ」から始まり、人がさらなる「苦しみ」を知るようになることを意味する。そこで、ここでは「苦しみ」という視点から福音を考察する。最初は、「苦しみ」についての話である。

－「苦しみ」について－

誰もが「苦しみ」を覚える。それはどうしてなのだろう。「苦しみ」を避けられないのは、なぜなのだろうか。そもそも、「苦しみ」の正体は何なのだろう。それについてはすでに述べてはいるが（第一巻 97 頁「「苦しみ」を覚える仕組み」、補巻Ⅰ-4 頁「－「苦しみ」の原因－」）、ここではそれを別の角度から見ていく。別の角度から「苦しみ」の正体を探り、そこから「苦しみ」を覚える流れを説明する。そうすれば、「苦しみ」に対応する福音が見えてくる。この章は、そのような流れで話を進めていく。では、「苦しみ」の正体からである。

❖ 「苦しみ」の正体

神は人を造る際、人をご自分に似せて造られた。「さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて」（創世記 1:26）。そのために、神はご自分の「いのち」を人の「体」に貸し出された。「いのちの息を吹き込まれた」（創世記 2:7）。こうして、神の「いのち」が人の土台となり、土台は「魂」と呼ばれ、人は神に似た者となった。すなわち、神の部分となったのである。「あなたがたはキリストの体であり、また、一

人一人はその部分です」(Ⅰコリント 12:27　新共同訳)。その神は「永遠性」なので、神の「いのち」の「魂」からは「永遠」の情報が発信され、それによって人は動かされることになった。「私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです」(使徒 17:28)。これを、人は神の「永遠性」によって規定されているという。この規定のおかげで、人は「永遠」なるものに思いを馳せることができる。

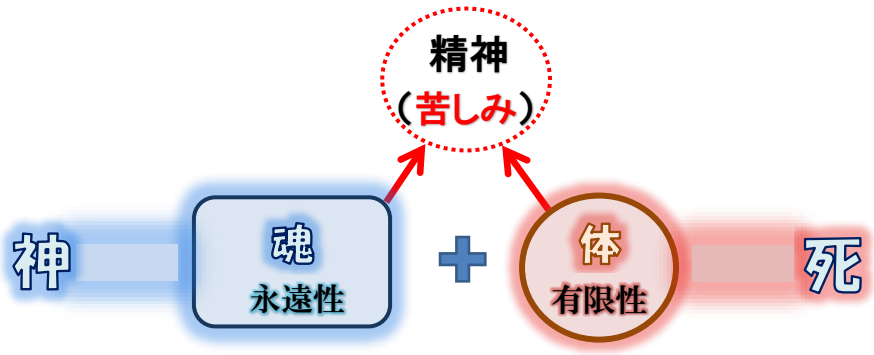
ところが、この世界は悪魔の仕業によって「死」が入り込んで以来、「永遠性」とは真逆の「有限性」によって規定されている。滅びに向かう時間で規定されている。「死」による運命によって規定されている。そのため、そこには人が思いを馳せる「永遠」などない。終わりとなる「死」の現実しかない。そうなると、人は「永遠性」によって規定されているので、その矛盾に「苦しみ」を覚えてしまう。つまり、「永遠性」によって規定されているにもかかわらず、その現実が全く以て見られないことが「苦しみ」の正体である。そこで、このことについては具体例を挙げて説明しよう。

人は、神から発信される「永遠性」の情報を土台として動いている。そのため、人は初めから「永遠性」を知っている。それは神の本性であり、「永遠性」とは変わらないことを意味する。「イエス・キリストは、昨日も今日も、とこしえに変わることがありません」(ヘブル 13:8　新改訳 2017)。人は、この変わらないことを土台として動いているので、変わらない「愛」や変わらない「自由」を知っている。変わらない「愛」とは、無条件で「一つ」になる運動である。「それは、わたしたちが一つであるように、彼らも一つであるためです」(ヨハネ 17:22)。変わらない「自由」とは、制約されない運動である。こうした「永遠性」が人の土台となって人を動かしているので、人は人と「一つ」になろうとし、さらには制約されない自分を目指す。

しかし、「一つ」になろうとすればするほど、人は「苦しみ」を覚えてしまう。なぜなら、この世界は変化する「有限性」なので、変化する時間に伴って人の心も変化するからである。そのため、一時は「一つ」になれても、変化する時間の中にあっては互いの考えも変わり、関係は壊れていく。そもそも「有限性」の世界では、死は避けられない運命として規定されているので、たとえ誰かと「一つ」になれたとしても、必ずどちらかが先に亡くなってしまうので、「一つ」であることを維持することはできない。ここに「苦しみ」が生じる。そのため、人は人と「一つ」になろうとする試みを繰り返す。友を得ては疎遠になっていき、また新たな友を探すということを繰り返す。こうして、この世界にあっては、自分を動かしている変わらない「愛」の現実を見ることがないので、「苦しみ」を覚え続ける。

また、人は変わらない「自由」を知っている。それは制約されない運動であり、それが人を動かしているので、人は制約されない自分を目指す。ところが、この「有限性」の世界は変化する世界であり、その変化は人を制約する。変化とは制約なのである。そこで、親は自分の変化に合わせて子どもを制約し、服従させようとする。すると、子どもは「苦しみ」を覚え、親に反抗する。この社会も変化に合わせて規則を作り、人を制約する。そうなると、人は制約されない「自由」を知っているので反発し、「苦しみ」を覚える。

つまり、人が「苦しみ」を覚えるのは、人の本質は神の「いのち」である「魂」によって、すなわち「永遠性」によって規定され、動かされているにもかかわらず、この世界では「永遠性」の現実を確認できないからである。この世界は滅びに向かう「有限性」であって、そこでは人を動かしている「永遠性」を全く確認できないので、人は「苦しみ」を覚えてしまう。その「有限性」は「死」に根差し、「死」は悪魔の仕業で入り込んだ。「死をつかさどる者、つまり悪魔を」（ヘブル 2:14　新共同訳）。その「死」によって「体」も世界も「有限性」になり、人である「精神」は「魂」が発信する「永遠性」と、「体」が発信する「有限性」とに支えられることになった。この矛盾が、神との「分離」であり、その状態の質的な表現が「苦しみ」なのである。



さらに言えば、人である「精神」は、「魂」と「体」によって機能するので、「体」が滅びればそれと同時に滅びてしまう。よって、「体」が「有限性」になって滅びに向かっている以上、人は生きているようでも死んでいる。「アダムにあってすべての人が死んでいるように」（Ⅰコリント 15:22）。神の目には、その姿は「死人」（ヨハネ 5:25）と同じである。だが、私たちは「永遠性」によって規定され、それに動かされているので、この「有限性」による滅びに対しては恐れを抱いてしまう。ここに「苦しみ」の根がある。したがって、「苦しみ」というのは、「永遠性」によって規定されている私たちが、この「有限性」の世との異質性を示す質的な表現にほかならない。そこで

キェルケゴールは、「「苦しみ」は、この世との異質性を示す質的な表現である」と言い、「苦しみ」があるから「永遠性」を意識できるとする。つまり、「苦しみ」が「永遠性」に目覚めさせ、人を神に導いてくれるということである。

> 「「苦しみ」は、この世との異質性を示す質的な表現である。この異質性（苦しみはその表現である）に永遠なものとの関係、永遠なものの意識が見られる。苦しみのないところでは永遠なものの意識もまた存在しない、そして永遠なものの意識があるところ、そこに苦しみもまた存在する。神が一人の人間を、（この世に対し異質とさせて）永遠へと目ざませるのは、「苦しみ」を通じてである。」（『遺稿集』第二版（日誌）Pap.X４A600「セーレン・キェルケゴールの日誌 第一巻」未来社 163 頁）

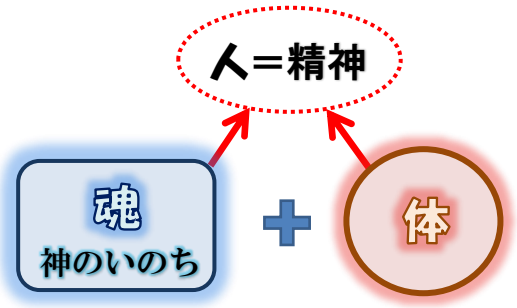
このように、人は神に似せて造られたので、すなわち神の「永遠性」によって規定されたので、変わらない「愛」と「自由」を知っている。それゆえ、「愛」と「自由」を好きに思い描くことができ、それを求めることができる。それが「美」の追求である。だが、思い描くものと、現実の世界とがあまりにも違うので「苦しみ」を覚えてしまう。したがって、「苦しみ」の正体は、「永遠性」によって規定されている私たちが、「永遠性」とは正反対の質によって出来ている「有限性」の世界と向き合った際に覚える異質性にほかならないのである。神の「永遠性」によって規定されているにもかかわらず、この世界に於いては「永遠性」を確認できないことで生じる「不安」が、「苦しみ」の正体である。そうであるなら、「苦しみ」を覚えるのは、人が神に似せて造られていることの印である。人が神と同じ、「永遠性」で規定された者であることの印であり、人が神に無条件で愛されていることの印である。それは、紛れもなく人が「良き者」であることを証ししている（本書 127 頁「「永遠性」の規定」）。

しかし、人は「有限性」の世界に惑わされ、「永遠性」である自分を信じられないために「不安」になり、「苦しみ」を覚える。ゆえに、「苦しみ」は、神が私たちに、「わたしを信じなさい」と決断を迫る心の声なのである。さて、この「苦しみ」の正体の話は重要なので、さらにこれを別の視点からも説明しておきたい。

❖ 「苦しみ」の正体Ⅱ

「苦しみ」の正体を知るには、「人の造り」を知る必要がある。神は初めに大地のちりで「体」を造り、そこに神の「いのち」を吹き込まれた。それが「魂」である。そして、神は「愛」なので、神の「いのち」による「魂」は、人の「体」の中で「愛の運

動」を展開する。それは、「一つ」に結びつける「統合運動」である。この運動によって、「体」は結びつく情報を持ち込むようになり、その情報が「統合運動」の対象となって認識が生じる。さらには、どのように統合すればよいのかとなるので、そこでは思考も開始する。この認識と思考の意識の総合を「精神」と呼ぶ。その「精神」が人なので、聖書はその仕組みを、「**神である【主】は、その大地のちりで人を形造り**（体）、**その鼻にいのちの息を吹き込まれた**（魂）。**それで人は生きるものとなった**（精神が機能するようになった）」（創世記 2:7　新改訳 2017　※（　）は筆者が意味を補足）と教えている。したがって、聖書によると、人とは「魂」と「体」によって機能する「精神」である（第一巻 30 頁「－「人の造り」－」、本書 9 頁「「人の造り」のまとめ」）。



要するに、「魂」は神の「いのち」の部分なので「神の思い」を発信し、加えて、その思いと「体」の持ち込む情報とを結びつけようとするので（統合運動）、そこに認識が生じ、思考する意識である「私」が始まるのである。

ところが、「魂」による「神の思い」の情報は滅びない「**永遠性**」を有し、「体」の持ち込む情報は滅びゆく「**有限性**」を有するため、両者を結びつけることができない。しかし、「魂」が行う、「一つ」に結びつける「統合運動」は神から出た運動なので、その運動は誰にも止められない。そこで、「魂」に支えられている「精神」は、無理にでも「**永遠性**」と「**有限性**」を結びつけようとする。この世界に架空の「**永遠性**」を仕立て、それと結びつけて安心を得ようとする。だが、それは偽りの結びつきなので、そこには「**不安**」が生じ、「**苦しみ**」となる（第一巻 16 頁「第一章　人の「真実な姿」」）。

人はこの「**苦しみ**」のからくりを知らない。そのため、例えば「**苦しみ**」の原因は人にあると思ってしまい、人を憎んでしまう。しかし、「**苦しみ**」の本当の原因は、入り込んだ「死」に、すなわち「**有限性**」に遮られ、「**永遠性**」である神と結びつくことができないことにある。平たく言えば、心を神に向けられない、ということである。この状態が「罪」なので、聖書は「罪」を言い表すのに、「**的が外れている**」ことを意味する「ハマルティア」［ἁμαρτία］を使う。

つまり、こういうことである。「魂」は、神と人とを「一つ」にしようとする「統合運動」を展開するので、「**神よ、わたしの魂はあなたを求める**」（詩篇 42:2　新共同訳）、「魂」は人を神に向かわせる。「**すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです**」（ローマ 11:36　新共同訳）。その運動は誰にも止められないので、人は自分が暮らす世界の「**有限性**」の何かを、神と同じ「**永遠性**」に見立て、それと無理矢理にでも結びつこうとする。しかし、所詮それは偽物の神なので「**空の空**」（伝道者 1:2）でしかなく、人を苦しめる。この「**苦しみ**」を覚える状態が心を神に向けられない状態であり、それが「罪」である。そして、人は「**苦しみ**」を覚えると、何としても「**苦しみ**」から目を背けようとし、快楽をむさぼるようになる。これが「罪の行為」である（本書 107 頁「「罪」と「罪の行為」とは別である」）。

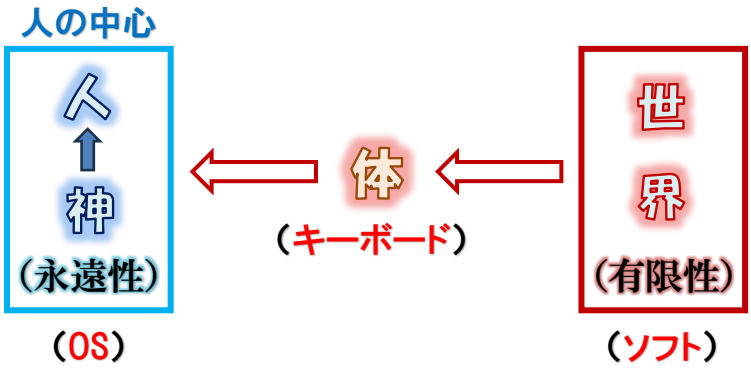
このように、「**苦しみ**」の正体は、神と結びつくことができないことにある。それは、心を神に向けられないということであり、その状態は、悪魔の仕業で入り込んだ「**有限性**」（死）によってもたらされた。「**有限性**」が「**永遠性**」である神との間の「隔ての壁」となり、神と人とを「分離」した。その結果、人は「**永遠性**」で規定されたにもかかわらず、「**有限性**」の規定の中で生きることを強いられてしまった。この状態は、神が造られた本来の状態ではないので、人は「**苦しみ**」を覚えるのである。では、この話をパソコンに重ねて説明してみたい。

❖ パソコンの話

パソコンは機械装置（略して「ハード」）だけでは動かない。ハードが動くには、ハードに具体的な指示をするアプリケーション（略して「ソフト」）が必要である。ただし、ソフトがハードに指示を送るには、両者間の橋渡しをするオペレーティングシステム（略して「OS」）も必要である。OS があって、初めてソフトは動き、ハードも動かせる。その際、OS は隠れた存在であり、目に見えるのはハードと、作業の指示をするソフトである。ただし、そこでのソフトは、ハードとの間を橋渡しする OS の規定に従って書かれたプログラムでなければならない。OS の規定と同じ規定で書かれていなければ動かない。例えば、パソコンを代表する OS は、Windows と macOS であるが、それぞれ規定が異なるので、Windows で動くソフトをそのまま macOS でも動かそうとしても動かない。それを無理矢理動かそうとすれば、苦しむだけである。これと先程の話を重ねると、次のようになる。

人の体が動くには、体の器官（ハード）に具体的な指示を送るソフトと、そのソフトと体の器官（ハード）とを橋渡しする OS が必要である。その OS が人の中心であり、それは神との関係である。神が人の土台であり、人は神によって規定されている。神の「永遠性」で、人は規定されている。これが人の中心であり、それがパソコンの OS に該当する。そして、この世界は、パソコンのソフトに該当する。人は、OS によって動かされる中で、この世界というソフトと関わって生きている。したがって、人の体の器官（ハード）で、この世界のソフトが上手く動くには、そのソフトは人の中心の OS の規定に従っていなければならない。

ところが、ここに問題が生じる。OS に該当する人の中心部分は、神の「永遠性」で規定されているのに、世界というソフトは、「有限性」の規定で書かれているからである。平たく言えば、人は生きる者として規定され、無条件で愛される者として規定され、自由がある者として規定されている。それが人の中心であり、人の体の器官を動かす OS である。しかし、そこに指示を出す世界の情報（ソフト）では、人は死ぬ者であり、無条件では愛されない者であり、自由がない者と規定されているのである。全てが「永遠性」とは真逆の「有限性」で規定されている。そのため、この世界に於けるソフトは動かない。人の中心である OS は、人を「生きる者」（永遠性）だと言っているのに、この世界に於けるソフトは、すなわち、「体」というキーボードを通して打ち込まれてくる世界の情報は、人は「死ぬ者」（有限性）だとする。



このままでは、ソフトが動かない。そこで人は、人の中心となる OS を無視し、ソフトを無理矢理動かし、人の体を動かそうとする。それでも、人の体を動かすには OS が必要なので、人は新たな OS を採用することにした。それが、人の価値は人の「うわべ」にあるとする価値観であり、この価値観が「人間的な標準」となって、この世界に於けるソフト（情報）と、人の体の橋渡しをする新たな OS となり、人を動かすようになった。正確に言えば、悪魔の仕業で入り込んだ「死」によって、人の体も、この世界も「有限性」で規定されたので、そこには自動的に、人の中心となる正規の

OS とは別に、「有限性」同士を結ぶ新たな OS が誕生していた。人は、それを採用したのである。しかし、人の中心となる正規の OS は顕在なので、その行為に対して抵抗する。その結果、人は何をしようとも最終的には、「空の空」（伝道者 1:2）を覚えるようになった。これが、人の「苦しみ」である。

このように、「苦しみ」は、人の中心の OS は神の「永遠性」の規定であるのに対し、この世界に於けるソフト（情報）が、その OS とは異なる「有限性」の規定で書かれているために起きる。そこで人は、この「苦しみ」を回避しようと、自分の中心の「永遠性」の OS を無視し、新たに獲得した「有限性」から、「人間的な標準」の OS を作り、無理矢理自分を動かすようになった。その結果、心を神に向けられなくなり、さらなる「苦しみ」を覚えるようになったということである。それは神と「分離」した状態であって御心ではないので、神はこれを「罪」とした。つまり、「苦しみ」は、心を神に向けられない「罪」の症状にほかならない。

❖ 「苦しみ」は「罪」の症状

「苦しみ」は、人が神と「分離」している状態である。その状態を「死」といい、「罪」という。「死のとげは罪であり」（Ⅰコリント 15:56）。それは的外れの状態なので、聖書は「罪」を、的外れを意味する「ハマルティア」［ἁμαρτία］の単数形を使って表現する（第一巻 183 頁「罪についての整理」）。例えば、次のように。

> 「罪（単数形）を犯している者はみな、不法を行っているのです。罪（単数形）とは律法に逆らうことなのです。」（Ⅰヨハネ 3:4）

ここに、「罪（単数形）とは律法に逆らうこと」とあるが、ここでの「律法」は「永遠性」によって規定されている「神の言葉」のことであり、それに「逆らう」とは、神と人とが「分離」していることを意味する。したがって、「罪（単数形）とは律法に逆らうこと」とは、神と人とが「分離」した状態にあることが「罪」（単数形）であるということである。その状態が「苦しみ」を覚えさせるので、人は「苦しみ」から逃れるために見える安心をむさぼってしまう。これが「罪の行為」であり、「罪の行為」と「苦しみ」は一体の関係にある。ということは、「罪の行為」を言い表すというのは、「苦しみ」を言い表すことでもある。そこで聖書は、この「罪の行為」については、「罪」（ハマルティア）の複数形で表現している。例えば、次のように。

「もし、私たちが自分の罪（複数形）を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪（複数形）を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」（Ⅰヨハネ 1:9）

「罪の行為」を言い表すのは、「**苦しみ**」を言い表すことで代弁される。私たちは日頃、自分の「**苦しみ**」を神に訴え助けを乞うが、それはそのまま自分の「罪の行為」を言い表し、神の赦しを乞うているのである。ゆえに、中風で苦しんでいた人がイエスのもとに運ばれて来た際、その者は声なき声で「**苦しみ**」を訴えると、イエスは、「**子よ。あなたの罪は赦されました**」（マルコ 2:5）と言われたのであった（本書 72 頁「「罪」と「罪の行為」の関係」、本書 107 頁「「罪」と「罪の行為」とは別である」）。

このように、「**苦しみ**」の正体は「罪」であり、さらには「罪」から派生した「罪の行為」である。神は、こうした「罪」を取り除くために来られた。「**キリストが現れたのは罪（複数形）を取り除くためであったことを、あなたがたは知っています**」（Ⅰヨハネ 3:5）。それは、「**苦しみ**」を取り除くために来られたということである。そうである以上、人が「**苦しみ**」を覚えない限り、神との接点はない。この接点が、「神の福音」の始まりである。では、人が「**苦しみ**」を覚える流れを見てみよう。

❖ 「苦しみ」を覚える流れ

「**苦しみ**」は、人を支える「魂」と「体」とが正反対の情報を、人である「精神」に持ち込むことで生じる。「魂」は「精神」に「**永遠性**」の情報を持ち込み、「体」は「精神」に「**有限性**」の情報を持ち込むので、「精神」の中で混乱が生じ、それが「不安」となり、「**苦しみ**」となる。片や「いのち」の情報を持ち込み、片や「死」の情報を持ち込むので、その間に立つ「精神」はどっちつかずの状態になり、「**苦しみ**」を覚える。この話を人の誕生から時系列に見ていくと、次のようになる。

人はこの「**有限性**」の世界に誕生すると同時に、「**有限性**」の世界を覗き見る。すると、そこには可能性が無限に広がるので目眩（めまい）を起こし、「不安」が生じる。人はその「不安」の中で、無限に広がる可能性に希望を抱き、幸福を求めるようになる。それは言ってみれば、この世界に於ける美の追究である。人は、そのことで自分の存在を確かなものにしようとする。この段階では、まだ顕在意識では「**苦しみ**」を覚えない。潜在意識では覚えていても、それが顕在意識にまで至っていない。平たく言えば、「不安」はあっても、それ以上に世界での暮らしが楽しいと感じられるのである。

しかし、「有限性」の世界での可能性を追い求め、それを手に入れても、それは所詮「有限性」であり、時間と共に消えていってしまう。幼子は自分の体の可能性を追求し、立って歩くようになると親からほめられ、幸福を覚えるようになる。だが、その幸福は時間と共に消えていってしまう。また、子どもは一生懸命文字を覚える可能性を追求し、文字を覚える度に親からほめられ、幸福を覚えるようになる。だが、その幸福は時間と共に消えていく。

つまり、人は自分の可能性を追求し、それを達成する度に幸福を覚えるが、その幸福は時間と共に消えていってしまうのである。なぜなら、この世界は、時間が“今”を押し流してしまう世界なので、“今”幸福を覚えても、それは時間に流されていってしまうからである。そうなると、幸福の実体は記憶だけになってしまう。そのような中、人を支えているもう一方の「永遠性」が反撃してくる。追求した幸福の実体は時間に流され、幸福の記憶しか残らないので、そんなものは「無だ！」と反撃してくる。全ては、「空の空。すべては空」（伝道者 1:2）だと反撃してくる。この段階で、人は顕在意識で「苦しみ」を覚えるようになる。潜在意識にあった不安による「苦しみ」が、ようやく表舞台に出てくる。

ここで、人の生き方が二つに分かれる。一つは神に助けを乞う生き方であり、もう一つは今後も可能性を追求する生き方である。多くの者は後者の生き方を選び、さらなる可能性を追求する。そのことで新たな幸福を追い求め、それを以て意識した「苦しみ」を和らげようとする。あくまでも「有限性」の世界に於ける幸福を追い求め、そのことで「苦しみ」を覆い隠そうとする。例えば、「富」の可能性を追求し、手にした富による幸福で「苦しみ」を覆い隠そうとする。また、「評判」の可能性を追求し、手にした評判による幸福で「苦しみ」を覆い隠そうとする。また、人との「愛」の可能性を追求し、手にした愛による幸福で「苦しみ」を覆い隠そうとする。

しかし、どれほど可能性を追求し幸福を覚えても、この世界の時間は滅びに向かって流れているので、やがて幸福の実体も消えてしまい記憶だけとなる。それはつまり、「有限性」の世界では何を手にしても、その幸福は続かないということである。「人はみな草のようで、その栄えは、みな草の花のようだ。草はしおれ、花は散る」（Ⅰペテロ 1:24)。そうなると、人を支えているもう一方の「永遠性」が激しく反撃してくる。その幸福は「無だ！」と。全ては、「空の空。すべては空」（伝道者 1:2）だと。この段階まで進むと、人は以前にも増して激しく「苦しみ」を覚えるようになる。

ここで、再び人の生き方が二つに分かれる。一つは激しく「苦しみ」を覚えたことで神に助けを乞う生き方であり、もう一つは今後も可能性を追求する生き方である。後者は、今度は心の声に従い、道徳的な人間になることである。そのことで、「永遠性」を規定する心の声を少しでも和らげようとするのである。だが、その生き方は周りの目を気にし、良く思われるための芝居をしなければならない。つまり、できもしない「良い行い」を、できたというふりをしなければならない。今度は、それが激しい「苦しみ」を覚えさせる。

このように、人が「苦しみ」を覚える流れは、この滅びゆく世界に幸福（可能性）を追求する流れと重なる。それは、「永遠性」で規定されている私たちが、「有限性」で自らを規定し直そうとすることで生じる。人の本質は「永遠性」で規定されているので、「有限性」で自分を規定しようとすればするほど、本質からの反発を招き、「苦しみ」を覚えてしまうのである。平たく言えば、神に似せて造られ、無条件で愛される「良き者」として規定された者が、条件付きでしか愛されない「ダメな者」として自分を規定し直すから「苦しみ」を覚える（本書 127 頁「「永遠性」の規定」）。しかし、どの段階に於ける「苦しみ」であっても、「苦しみ」を覚えたことで、神が差し出す御手に掴まることができれば「平安」が訪れる。すると、神は人が覚える「苦しみ」をさらに取り除こうとされる。これが「神の福音」である。

❖ 「苦しみ」を取り除く福音

「苦しみ」から解放される道は一つしかない。それは「有限性」の放棄である。神が持つ「永遠性」の規定で造られた者が、「有限性」に於ける可能性によって自分を規定し直そうとすることで「苦しみ」を覚える以上、「苦しみ」から解放される道は「有限性」の放棄しかない。それは、「有限性」の世界に於ける幸福の追求をあきらめ、目には見えない「永遠性」に、すなわち神に身を置くということである。そこで、神の言葉である聖書は、「苦しみ」の原因となった「有限性」に根ざす生き方の完全放棄を要求する。この「有限性」の世界に対して、真に「死ぬ」ことを要求する。キリストがこの世に対して十字架で死なれたように、この世に対して、キリストと共に「死ぬ」ことを要求するのである。

> 「しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが、決してあってはなりません。この十字架につけられて、世は私に対して死に、私も世に対して死にました。」（ガラテヤ 6:14　新改訳 2017）

ならば、私たちキリスト者は、すんなりとこの世界に対して「死ぬ」ことができるのだろうか。この世での幸福を一切捨て、神だけを見上げていくことができるのだろうか。それは、見える安心（有限性）をむさぼる罪は犯さないということであるが、そのようなことが可能なのだろうか。それは絶対に不可能である。不可能であるからこそ、罪は犯さないと言う者がいれば、それは偽り者であると聖書は教えている。

> 「もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。」（Ⅰヨハネ 1:8）

つまり、「有限性」の世界で暮らす限り、「有限性」を完全に無視して生きることなどできないのである。しかし、神の言葉である聖書は「有限性」の完全放棄を要求する。そうなると、放棄できない自分と出会うので、ここに新たな「苦しみ」が生じる。それは、「有限性」の中で暮らす限り無くならない。

だが、その「苦しみ」の中で神に叫べば、そこには神の恵みが待っている。「この苦しみのときに、彼らが【主】に向かって叫ぶと、主は彼らを苦悩から救い出された」（詩篇 107:6）。というのも、「苦しみ」の中での神への叫びは、見える安心をむさぼるしかない「罪の行為」の告白なので、神はその罪を「赦しの恵み」によって受け止めてくださるからである。「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます」（Ⅰヨハネ 1:9）。これは、神の力は、自分の「弱さ」のうちに完全に現れるということを意味する。「わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」（Ⅱコリント 12:9）。

大体にして、人の「真実な姿」は、神の助けがなければ生きられない「弱い者」である。自分は「強い者」のように思えても、やがて滅びる存在である以上、人は「弱い者」である。つまり、変化しない神の前では、見える自分の力は「無」であり、何もできない「弱い者」にすぎない。そうであるからこそ、神は人を助け、無条件で愛される。それはちょうど、何もできない「弱い者」である赤ちゃんが無条件で親に愛されるのと同じである（本書 164 頁「自分の「真実な姿」」）。つまり、神は人を愛するために、神なしでは生きられない「弱い者」として人を造られたのである。その「真実な姿」に気づかせてくれるのが、「苦しみ」である。それで神は人に、「有限性」の世界に対して「死ぬ」ことを要求する。それは、「見える安心」を放棄することを迫るということである。

このように、「苦しみ」を取り除く福音は、人の「真実な姿」に気づかせる「苦しみ」である。人は普段、何かができる自分の姿に惑わされているので、本当は何もできない「弱い者」であることを、「苦しみ」が気づかせてくれる。気づけば「赦しの恵み」に導かれ、神と人とは強く結びつけられる。こうして、「苦しみ」は取り除かれていく。最後にそのことを、アブラハムを例に見てみよう。

❖ アブラハムを苦しめる

神は、「見える安心」の放棄を要求する。そこには一切の妥協がない。これについては、アブラハムを見ればよく分かる。なぜなら、神はアブラハムに対し、彼の「見える安心」であった愛する息子、イサクを神に捧げるように命じたからである「イサクをわたしにささげなさい」(創世記 22：2)。これでは、誰もが神の命令に従えない「苦しみ」(罪責感) を覚えることになるので、それは神が意図的に背負わせた「苦しみ」である。アブラハムも「苦しみ」を覚え、「弱い者」である自分を思い知らされた。

すると、彼にできることは、もう一つしかなかった。それは、神にイサクをゆだねることであった。神はこの信仰に応え、「イサクから出る者が、あなたの子孫と呼ばれる」(創世記 21:12) という神の約束の言葉をアブラハムに思い出させた。するとアブラハムの内側に、「この約束がある以上、イサクを捧げて彼が死んだとしても、神は彼をよみがえらせることができる」という信仰が芽生えた。そこで、アブラハムは刀を取り、イサクをほふろうとした。その時、御使いはアブラハムを止めた。そして、「あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しまないでわたしにささげた」(創世記 22:12) と言った。アブラハムはまだ捧げてはいなかったのに、捧げたと見なされたのである。それにより、彼はイサクを取り戻した。その出来事を、聖書は次のように解説する。

> 「信仰によって、アブラハムは、試みられたときイサクをささげました。彼は約束を与えられていましたが、自分のただひとりの子をささげたのです。神はアブラハムに対して、「イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる」と言われたのですが、彼は、神には人を死者の中からよみがえらせることもできる、と考えました。それで彼は、死者の中からイサクを取り戻したのです。これは型です。」(ヘブル 11:17-19)

こうして、アブラハムはイサクを取り戻すことができた。つまり、「見える安心」を放棄せよという要求は、それを失うことではなく、「見える安心」を神にゆだねることで

あり、そのようにゆだねれば、「**見える安心**」は「信仰による安心」へと姿を変えるということなのである。これを、十字架で「**死ぬ**」という。

大事なことは、「神の福音」は人の「**苦しみ**」を取り除くために、「**有限性**」の放棄を要求し、そのことで新たな（意図的な）「**苦しみ**」を人に背負わせるということである。いや、それは新たな「**苦しみ**」を背負わせたのではない。見た目にはそうであっても、「**有限性**」で自分を規定して生きるしかない「**苦しみ**」の中にいた自分に、ただ気づかせただけである。それを、神の要求に応えられない「罪」の現実として気づかせることで、人が神の助けを乞うように導き、「赦しの恵み」にあずからせるのである。これこそ、アブラハムが神にゆだねたという先ほどの話の裏側である。そして、アブラハムがイサクを取り戻すことができると信じて「平安」を得たように、誰でも神の約束を信じることができれば、「**苦しみ**」のあとは「**平安な義の実**」（ヘブル 12:11）が結ばれるようになる。

このように、アブラハムは「**苦しみ**」を覚え、「**弱い者**」である自分を思い知らされたことで、神の約束を信じることができ「平安」を手にすることができたが、これは「型」である。誰であっても「**苦しみ**」によって「**弱い者**」である自分に気づけば、その「弱さ」を神が受け止めてくださるということの「型」である。したがって、神が「**有限性**」の放棄を要求するのは神の愛なのであって、この愛のおかげで、「**苦しみ**」は神からの「平安」に入れ替えることができる。これが「**苦しみ**」を取り除く福音であり、それは「**苦しみ**」が増し加わることで、神からの「平安」も増し加わる話である。

まことに、「神の福音」は「**苦しみ**」から「**苦しみ**」へと進み、その裏で「平安」から「平安」へと進んでいく。それは「赦しの恵み」を受け取る「信仰」から「信仰」に進むということである。それはつまり、キリスト者はキリストを信じる信仰だけでなく、キリストによる福音にあずかるための「**苦しみ**」をも賜ったということである。

> 「あなたがたは、キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための苦しみをも賜ったのです。」（ピリピ 1:29）

そこで次に、「**苦しみ**」をも賜ったという話をしたい。

－「苦しみ」をも賜った－

「苦しみ」は、人が神と「分離」している状態であり、その状態は御心に反しているので「罪」という。したがって、「苦しみ」は「罪」である。この「罪」を取り除くために神は来られたので、「キリストが現れたのは罪を取り除くためであったことを、あなたがたは知っています」（Ⅰヨハネ 3:5）、「罪」である「苦しみ」は、人と神との接点である。「苦しみ」が、神と人とが出会う場所であった。そこで神は、人と出会うために、人を容赦なく「苦しみ」を意識できる場所へと追い込まれる。「主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである」（ヘブル 12:6）。こうして、キリスト者は神に追い込まれ、新たな「苦しみ」を賜ることになった。では、キリスト者が賜った新たな「苦しみ」とは、何なのだろう。

❖ 新たな「苦しみ」

キリスト者とは、神が人となって来られたことを信じる者である。その方の地上での名はイエスであったので、イエスが約束された救い主キリストだと信じて生きる者をキリスト者という。それは、キリストが歩まれた道は正しいと信じ、同じ道を歩む者である。そのキリストは、「真理」を証しし、「真理」に従われたので、「わたしは、真理のあかしをするために生まれ、このことのために世に来たのです」（ヨハネ 18:37）、キリスト者も「真理」の道を歩む。「真理」とは変わらないことを指すので、キリスト者とは、変わらない「真理」に生きる者である。

ところが、「この世」は変わりゆく世界なので、「この世」で変わらない「真理」に生きるということは、「この世」を敵にまわすということである。実際、キリストは「真理」を語れば語るほど「この世」からは憎まれ、ついには殺されてしまった。そうである以上、キリスト者も「真理」に生きることで、「この世」からは憎まれる者になる。そもそもキリスト者は、すでに神に捕らえられた者であり、「死」から「いのち」に移されているので、「死からいのちに移っているのです」（ヨハネ 5:24）、すなわち「この世」の者ではないので、「この世」からは憎まれてしまう。これこそが、キリスト者になったことで賜った、新たな「苦しみ」である。

> 「わたしは彼らにあなたのみことばを与えました。しかし、世は彼らを憎みました。わたしがこの世のものでないように、彼らもこの世のものでないからです。」（ヨハネ 17:14）

このように、キリスト者はキリストが歩まれた「真理」の道を歩むゆえに、「この世」からは憎まれる。さらに言えば、その「真理」の道は復活の「いのち」に通じているため、滅びに通じる「この世」の道とは決別せざるを得ない。それは、「この世」を捨てる道であり、紛れもなく「**苦しみの道**」であった。そこでキリストは、キリスト者が歩む「**苦しみの道**」を自らが先に進み、その足跡に従うようにと模範を残された。

> 「あなたがたが召されたのは、実にそのためです。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。」（Ⅰペテロ 2:21）

キリスト者に課せられたこの新たな「**苦しみ**」は、二つに大別できる。一つは、「真理」を証しすることによって生じる迫害、すなわち外的な「**苦しみ**」である。もう一つは、「真理」の道が「この世」との決別を要求するため、「この世」を捨てられないことで生じる、内的な「**苦しみ**」である。では、まず内的な「**苦しみ**」から見てみよう。

❖ 内的な「苦しみ」

人は神に似せて造られたので、神と同じ「永遠性」によって規定されている。「永遠性」に根ざして生きるように規定されている。にもかかわらず、「永遠性」とは真逆の「有限性」に根ざして生きようとすれば、そこに矛盾が起きるため、「**苦しみ**」が生じてしまう。平たく言えば、神が人の土台に据えた変わらない「永遠性」の情報、すなわち「真理」の上に、変わりゆく「有限性」の情報、すなわち「**偽りの情報**」を置こうとするので「**苦しみ**」が生じてしまう。この「**苦しみ**」から解放されるには、「**偽りの情報**」を排除するしかない。「**偽りの情報**」に基づいて得た「**見える安心**」を手放す必要がある。そこで、神はキリスト者を「**苦しみ**」から解放するために、「**見える安心**」の放棄を要求する。しかし、苦労して手に入れた「**見える安心**」を放棄することは容易ではないがゆえに、ここに新たな内的な「**苦しみ**」が生じる。ならば、「**見える安心**」を放棄するというのは、具体的にはどういうことなのだろう。

人は「永遠性」によって規定されているにもかかわらず、「この世」が「有限性」であるがゆえに、人は「有限性」に基づいて自分を規定し直し、「この世」に溶け込もうとする。「有限性」の「うわべ」に自分の価値を置き、少しでもその「うわべ」を良く見せることで、周りから良く思われようとする。その際、人から良く思われる「うわべ」の獲得が「**見える安心**」となるため、それを目指すのが「**人間的な標準**」の生き方となる。「**人間的な標準**」とは、「うわべ」で人の価値を判断することなのである。した

がって、「見える安心」を放棄するとは、「人間的な標準」で人を知ろうとはしないことであり、すなわち「うわべ」で人の価値を判断するのをやめることである。

> 「ですから、私たちは今後、人間的な標準で人を知ろうとはしません。かつては人間的な標準でキリストを知っていたとしても、今はもうそのような知り方はしません。」（Ⅱコリント 5:16）

私たちは、「人間的な標準」に従って生きてきた。それは、互いの「うわべ」を比べ、どちらの「うわべ」が良いかで人の価値を判断する生き方であった。「うわべ」の「富」を比べ、人の価値を判断する生き方であった。こうして、誰もがこの「人間的な標準」に従い、少しでも良い「うわべ」を目指し、価値ある者になろうとした。その結果、少しでも自分の価値を見出せる材料が自分の「宝」となった。この「宝」を放棄することが、「見える安心」を放棄するということであり、それは「うわべ」で人の価値を判断するのをやめることである。これを、「この世」の規定に対して「死ぬ」という。しかし、「死ぬ」のは簡単ではないので内なる葛藤が起き、それがキリスト者になったことで新たに生じる内的な「苦しみ」である。

このように、キリスト者とは「真理」に従って生きる者なので、すなわち「永遠性」によって規定された自分を生きる者なので、神はキリスト者に対し、「有限性」によって自分を規定し直すのはやめるよう要求される。それは、「見える安心」の放棄であるため、そこに内的な「苦しみ」が生じる。ならば、「見える安心」をもたらす「宝」には何があるのか。一つは人から良く思われる「**評判**」であり、もう一つは人から羨ましがられる「**富**」である。では、「**評判**」の放棄の実際を見てみよう。

❖ 「評判」の放棄

人から良く思われる「**評判**」は心地よいので、それを放棄すると「この世」での平和を失ってしまう。だが、キリストは「**評判**」を放棄し、「真理」に従って生きたので、「この世」での平和を失った。そこでキリストは、この出来事を次のように話された。

> 「わたしが来たのは地に平和をもたらすためだと思ってはなりません。わたしは、平和をもたらすために来たのではなく、剣をもたらすために来たのです。なぜなら、わたしは人をその父に、娘をその母に、嫁をそのしゅうとめに逆らわせるために来たからです。」（マタイ 10:34-35）

キリストはここで、「真理」に従おうとすれば、「この世」から迫害されて平和を失うことを話された。その迫害は家族からも生じる、と言われた。何と恐ろしいことだろう。人はどこまで迫害に耐えられるというのか。人から悪く思われることに、周りから嫌われ憎まれることに、どこまで耐えられるのか。正直、それには耐えられないのが人である。それは、自分が良く思われる「**評判**」が大事であるということである。そこでは、周りから良く思われようと、「**この世の心づかい**」に走り、神のことを思わないで、人のことを思ってしまう。それで、キリストは次のように注意された。

> 「下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」（マタイ 16:23）

ここまで明確に注意されても、キリストの弟子たちは、どうしても人からの「**評判**」を放棄することができなかった。それで、キリストを裏切ってしまったのである。この出来事は、人から良く思われる「**評判**」を放棄することが、いかに困難であるかを物語っている。しかし、キリストは「**評判**」の放棄を要求する。その要求には一切の妥協がないので、ここに内的な「**苦しみ**」が生じることになる。

このように、キリスト者は「真理」に生きる者であり、すなわちキリストの「いのち」によって生きる者となったがゆえに、その「いのち」を否定する「死」が支配する「この世」は、まさに敵となる。そこで、神は敵と戦うように命じる。それは、「この世」で手にした「**見える安心**」、すなわち人からの「**評判**」を放棄するということである。しかし、キリストの弟子たちがそうであったように、その要求に応えられない自分と出会ってしまう。そうなると、キリスト者は「**苦しみ**」を覚えてしまう。これが内的な「**苦しみ**」であり、それは神の要求に応えられない自分の「不足」と、すなわち自分の「罪」と出会うことで生じる。そこで、この「**苦しみ**」は「罪責感」と呼ばれる。では、次は「**富**」の放棄である。

❖ 「富」の放棄

人から羨ましがられる「**富**」を放棄するというのは、自分の財産を貧しい人にあげるということでもある。それがいかに困難かということを知る話が聖書にある。その話はこうであった。ある時、キリストのもとに青年がやって来た。彼はキリストに、「永遠のいのち」を手にするにはどのような良いことをすればよいかと尋ねた。そのやり取りの中で、キリストは最後に、「**もし、あなたが完全になりたいなら、帰って、あなたの持ち物を売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を**

積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい」（マタイ 19:21）と言われたのである。しかし、彼にはそのようなことは到底できなかった。それは、彼が多くの財産を持っていたからである。「ところが、青年はこのことばを聞くと、悲しんで去って行った。この人は多くの財産を持っていたからである」（マタイ 19:22）。

この話は、「**富**」を放棄することがいかに困難かを教えている。ところが、たとえ困難であっても、キリストが青年に命じたように、神はキリスト者に、「**富**」を放棄することを要求されるのである。そうなると、この青年と同じように、その要求に応えられない自分の「不足」と出会ってしまう。自分の「罪」に出会ってしまう。ここに内的な「**苦しみ**」が生じる。それは神に従えない「罪」による「罪責感」である。

このように、「**見える安心**」をもたらす「宝」は二つある。一つは「**評判**」であり、それは「**この世の心づかい**」に生きさせる。もう一つは「**富**」であり、それは「**富の惑わし**」に生きさせる。この二つの生き方が「真理」である「御言葉」をふさぐので、キリストは「**この世の心づかい**」と「**富の惑わし**」の放棄を要求される。

> 「また、いばらの中に蒔かれるとは、みことばを聞くが、この世の心づかいと富の惑わしとがみことばをふさぐため、実を結ばない人のことです。」
>
> （マタイ 13:22）

キリスト者は、「**この世の心づかい**」と「**富の惑わし**」の放棄を要求されても、それは到底できない。というより、キリストの弟子たちでさえ不可能であった。そのため、この要求の前では、ただ自分の限界を知るしかなく、「**苦しみ**」を覚えるのである。これこそが、キリスト者が賜った内的な「**苦しみ**」である。「**あなたがたは、キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための苦しみをも賜ったのです**」（ピリピ 1:29）。それに加え、キリスト者は外的な「**苦しみ**」をも賜った。その「**苦しみ**」の中身は、キリストの公の生涯を見れば分かる。

❖ 外的な「苦しみ」

キリストが宣教を開始し、十字架で殺されるまでの公の生涯は、人の生き方の模範であり、その姿は「神の律法」の現実そのものであった。なぜなら「神の律法」は、「**心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ**」（マタイ 22:37）に集約され、神を愛するとは「真理」に従って生きることであり、キリストはそれを実践されたからである。「真理」に従って生きるとは、神である「永遠性」に自

分の根拠を置いて生きることであり、それは「有限性」の世界との決別を、すなわち「この世」との分離を意味する。その生き方を、キリストは示されたのであった。それゆえ、キリストは水のバプテスマを受けられた。それは「有限性」の世界との決別を、すなわち「永遠性」である神に根ざして生きることを示していた。また、キリストは「この世」の権威を排除し、地上の「王」としては活動されなかった。逆に、徹底して神のあり方を捨て、ご自分を無にし、仕える姿となられた。自分を「高く」しようとする「人間的な標準」を排除し、自分を卑しくし、実に十字架の死にまでも従われた。

> 「キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。」（ピリピ 2:6-8）

こうして、キリストは徹底して「真理」に従われた。それは、「真理」とは相容れない「この世」に逆らう生き方であった。「この世」の権威を排除し、「この世」では何の肩書きもない者としての生き方であった。その中で、「真理」を証しし続けられたので、周りからは迫害され、馬鹿にされ、罵られ、そして人々はキリストに躓いた。その「苦しみ」を、キリストは十字架の死に至るまで背負われたのであった。これが、外的な「苦しみ」である。それは、「真理」に従い、「真理」を証しすることで生じるのである。

このように、外的な「苦しみ」は、徹底して「真理」に従い、徹底して「真理」を証しすることで生じる。それが神を公に愛することである。つまり、神を公に愛そうとすればするほど、外的な「苦しみ」に遭う。周りからは憎まれ、馬鹿にされ、蔑まれ、決して賞賛されない。キリストはそのことを教えたのであり、そういう意味では、キリスト教は「苦しみ」へと進むことを説く教えであって、この世の繁栄を説く教えではない。それは、「苦しみ」から「苦しみ」へと進む教えである。なぜなら、「苦しみ」の中でこそ、真の「平安」を手にできるからである。「闇」の中でこそ、「闇」に打ち勝つ真の「光」と出会えるからである。そこで話は、「闇」から「光」へと進む。

－「闇」から「光」へ－

キリストは、「真理」に従って生きられた。しかし、「この世」は、人に「いのち」を得させる「真理」に逆らう「死」に支配されていたので、「真理」に従って生きることは「この世」を敵とし、「この世」とは決別する生き方となった。別の言い方を知るなら、「真理」とは変わらないことなので、変わらない「真理」に従って生きれば、変わり続ける「この世」からは敵と見なされてしまうということである。そのため、「真理」に従って生きることは、「**苦しみ**」から「**苦しみ**」へと続く道であった。そのことを、キリストは自らが「真理」に生きることで教えてくださったのである。

そして、キリスト者はキリストが歩まれた道を歩かされる。そのため、キリスト者には新たな「**苦しみ**」が生じることになった。それは、「この世」とは決別できないという「**苦しみ**」である。すなわち、「この世」で手にした安心を捨てられない「**苦しみ**」である。しかし、この「**苦しみ**」は自分の限界に気づかせ、自分の「弱さ」に出会わせてくれる。神の前にへりくだり、心から神に祈らせてくれる。というより、「**苦しみ**」は何であれ、心から神に祈らせてくれる。それでキリストも、「**苦しみ**」となる十字架の死を前に、父なる神に祈られた。「**イエスは、苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた**」（ルカ 22:44）。そして、キリストは十字架で殺された。ところが、その「**苦しみ**」の先には神の栄光が待っていた。それは天に引き上げられ、神の右の座に着座されるという「光」であった。「**キリストは天に上り、御使いたち、および、もろもろの権威と権力を従えて、神の右の座におられます**」（Ｉペテロ 3:22）。すなわち、「**苦しみ**」から「**苦しみ**」へは、「闇」から「光」へと進む話であった。そのことをキリストは、身を以て証しされたのである。ここでは、その話をしたい。最初に見るのは、キリストの「**苦しみ**」の先にあったものである。

❖ キリストの「苦しみ」の先にあったもの

「この世」は、いかにすれば自分を「高く」できるかを競う。というのも、「この世」での人の価値は比較で決まるからである。自分の「うわべ」が周りよりも「高く」なることで価値ある者とされ、そこに人は幸せを覚える。そのため、「この世」では自分を「高く」することを競う。しかし、いくら自分を高くしても、必ず自分よりも高い者が現れるので、自分の価値は定まることなく変化し続ける。無論、自分を高くすることに幸せがあるというのは、変化し続ける「この世」が生み出した「**偽りの情報**」であり、それは変化することのない「真理」ではない。

そこでキリストは、「この世」に逆らい、徹底してご自分を「低く」された。その結果、ついに「この世」では罪人として扱われ、「**彼は罪人たちの中に数えられた**」（ルカ 22:37）、十字架で殺されてしまった。ところが、この「**苦しみ**」の先には神の栄光が待っていた。何と、殺されたはずのキリストはよみがえり、天に引き上げられ、神の右の座に着座されたからである。「**キリストは、罪のために一つの永遠のいけにえをささげて後、神の右の座に着き**」（ヘブル 10:12）。それはまさしく、「**だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです**」（ルカ 18:14）であった。しかし、キリストがよみがえられたことを信じられない弟子たちがいた。そこで、キリストは彼らの前に現れて、次のように言われた。

> 「キリストは、必ず、そのような苦しみを受けて、それから、彼の栄光に入るはずではなかったのですか。」（ルカ 24:26）

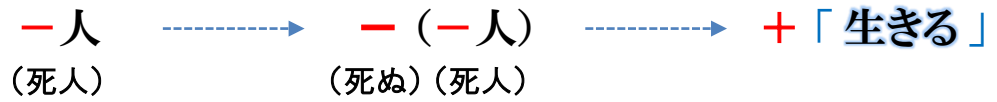
このように、キリストの「苦しみ」の先にあったものは、よみがえるという「栄光」であった。「否定」される「**苦しみ**」の先にあったものは、「肯定」される神の「**栄光**」であった。では、なぜ「否定」の先は「肯定」なのか、その理屈を説明したい。

❖ 「否定」の先は「肯定」

悪魔の仕業により、人の中に「死」が入り込んだ。それ以来、この世界は人が生き続けることを許可しない「死の世界」となり、人は死んだ者となった。「**アダムにあってすべての人が死んでいるように**」（Ⅰコリント 15:22）。人は、見た目には生きていても、必ず滅びるので、実質は死んだ者であった。「**あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者**」（エペソ 2:1）。そうなると、「死人」にとっての唯一の希望は、生き続けることを許可しない「死の世界」との「完全な決別」しかない。それは、「死の世界」に対して「**死ぬ**」ことであり、「**死ぬ**」ことができれば「いのちの世界」に移ることができる。それゆえ、ここにこそ「死人」にとっての唯一の希望がある。それは、人を「否定」する「死の世界」を「否定」することであり、その「否定」の先に、生きられる「肯定」がある。そこで、これを数式で説明したい。

「死の世界」では、人は何をしようと、そこには必ず滅びるという「マイナス」が付く（**－人**）。しかし、その「マイナス」に対し、新たに「マイナス」となる「**死ぬ**」が付けばどうだろう（－（**－人**））。これまでの「マイナス」は「プラス」になる（**＋人**）。つまり、悪魔が持ち込んだ「死」という「マイナス」に、「**死ぬ**」という「マイナス」

が付けば、「生きる」になるのである。ゆえに、「死人」にとっての唯一の希望は、人を「否定」する「死の世界」に対し「死ぬ」ことしかない。



しかし、現状はこの「死の世界」に対し、人は「死ぬ」ことができない。死んだと思っても、体が土に帰るだけで、「土に帰る」（創世記 3:19）、この「死の世界」からは一歩も外に出ることができない。ただ、消滅するだけである。そこで、キリストは私たちに、この「死の世界」に対して「死ぬ」ことができることを示されたのであった。それが十字架である。キリストは十字架で、この「死の世界」に対して「完全な決別」ができることを、すなわち「死ぬ」ことができることを、自らがよみがえることで示された。それゆえ、キリストを信じるバプテスマを受けた私たちはみな、キリストとともに十字架につけられる「死にあずかる」バプテスマを受けたのである。

> 「それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたのではありませんか。」（ローマ 6:3）

こうして、キリスト・イエスにつく「死にあずかるバプテスマ」は、人を「生きる者」とする神の「栄光」をもたらした。「真理」に従うことで、「この世」を敵とすることは「苦しみ」ではあるが、それは「この世」の「否定」の運動に対する「否定」によって生じるゆえに、「苦しみ」の先には人を「肯定」する神の「栄光」が待っている。「否定」に対する「否定」は「肯定」なので、そうなる。

このように、キリストの「苦しみ」は「真理」に従って生きることで生じたが、しかし、それは人を「否定」する「この世」を「否定」する生き方なので、その「苦しみ」の先には、人を「肯定」する「永遠性」が待っている。そこでキリストは、ご自分と同じように十字架を背負って生きるよう、すなわち「この世」を「否定」する生き方をするよう命じられたのである。「自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません」（ルカ 14:27）。だが、そうなればキリストと同じ「苦しみ」に遭うが、キリストがそうであったように、キリスト者も「苦しみ」のあとに堅く立てるようになり、不動の者とされるので、そこには希望がある。このことを聖書は、次のように教えている。

「あらゆる恵みに満ちた神、すなわち、あなたがたをキリストにあってその永遠の栄光の中に招き入れてくださった神ご自身が、あなたがたをしばらくの苦しみのあとで完全にし、堅く立たせ、強くし、不動の者としてくださいます。」（Ⅰペテロ 5:10）

これがキリストの「苦しみ」の先にあるものであり、それはキリスト者を「完全にし、堅く立たせ」るのである。キリスト者は、この結論を「信仰」で見ることができる。それゆえ、「この世」で「苦しみ」に遭う度に、この結論を「信仰」で見て喜ぶことができる。「これらの人々はみな、信仰の人々として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるかにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり寄留者であることを告白していたのです」（ヘブル 11:13）。

つまり、キリストは「苦しみ」のあと、天に引き上げられ神の「栄光」を受け取ったが、その出来事は、「苦しみ」という「闇」の先には「光」があることを示した「型」であった。「この世」で何度もキリスト者は「苦しみ」を覚えるが、その「苦しみ」の先には「光」があることを示した「型」なのである。キリスト者は、この「光」を「信仰」で確認できる。したがって、「苦しみ」から「苦しみ」へという話は、「闇」から「光」へという話であり、それは「信仰」から「信仰」へと進ませる話である。「信仰に始まり信仰に進ませる」（ローマ 1:17）。それで聖書は、次のように教えている。

「あなたがたは、キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための苦しみをも賜ったのです。」（ピリピ 1:29）

「苦しみ」を賜ったとあるが、それは生きた「信仰」を生起させる恵みだからである。

❖ 「信仰」を生起させる恵み

神は人の姿となって来られた。その方がキリストである。「キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました」（ピリピ 2:6-8）。そこでキリストは、「神の律法」の現実を、すなわち神を愛することの模範を示してくださった。その神は「永遠性」なので、神を愛することは「永遠性」を否定する「有限性」の世界を放棄することであった。それは「この世」に対して「死ぬ」ことを意味

するため、そこには「この世」との激しい摩擦が起き、「苦しみ」が生じた。そしてキリストは、これがキリストを信じる者の歩む道であることを示されたのである。

とはいえ、その道が目指すのは「この世」に対して「死ぬ」ことなので、その道を歩めば、「この世」で手にした「見える安心」の放棄が求められる。だが、それは人にとって耐えがたい「苦しみ」である。それでも、神は容赦なく「見える安心」の放棄を要求する。すなわち、容赦なく人を責めて「苦しみ」を背負わせるのである。それは、自分の限界に気づかせ、神により頼む者にするためである。どうにもならない「苦しみ」によって自分の「弱さ」に気づかせ、「弱さ」に働く神の恵みを受け取らせるためである。その恵みは、神からの要求に応えられない限界を、すなわち「不足」を、キリストが代わりに補ってくださる「赦しの恵み」である。

この恵みを受け取るのが「信仰」である。つまり、「苦しみ」は「信仰」を生起させてくれる。「信仰」が生起すれば、「赦しの恵み」を受け取ることができる。すると、神は恵みを受け取った人を完全にし、堅く立たせてくれる。「完全にし、堅く立たせ、強くし、不動の者としてくださいます」（Ⅰペテロ 5:10）。それによって、人はキリストの部分である自分を知り、「あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です」（Ⅰコリント 12:27　新共同訳）、「平安な義の実」を結ばせることができる。それゆえ、神は愛する者を懲らしめ、「苦しみ」を背負わせるのである。全ては「信仰」を生起させ、「平安な義の実」を結ばせるために、である。

> 「そして、あなたがたに向かって子どもに対するように語られたこの勧めを忘れています。「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」…（中略）…すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。」
>
> （ヘブル 12:5-11）

まことに神は、人の「不足」を自らが補うことで、人を「完全にし、堅く立たせ」てくださる。これが神からの「義」であり、それは**イエス・キリストの真実**（人の「不足」を補った十字架の贖い）によるのであって、それは信じる者すべてに現れる。「神の義は、イエス・キリストの真実によって、信じる者すべてに現されたのです。そこ

には何の差別もありません」(ローマ 3:22　聖書協会共同訳)。つまり、信じる「信仰」を生起させることが重要であり、その生起を「苦しみ」が担うのである。

このように、「苦しみ」は、神により頼む「信仰」を生起させる恵みにほかならない。「闇」の中に「光」を見出させる恵みである。私たちはキリストに倣うことで「苦しみ」に襲われるが、その「苦しみ」が、神により頼む「信仰」を生起させてくれるので、「赦しの恵み」を受け取ることができる。それは、神が私たちに代わり、私たちの「不足」を補ってくださる恵みである。そして、「苦しみ」が生起させる「信仰」は、神により頼む生きた「信仰」であり、これを神にゆだねる「信仰」という。

❖　神にゆだねる「信仰」

晩年のアブラハムにとっては、愛する息子イサクこそが「見える安心」であった。人は年を取れば取るほど、自分の世話をしてくれる自分の子を頼るので、そうなる。ところが、神はアブラハムに、その最後の安心すらも手放すことを要求し、イサクを生け贄に捧げよと命じたのであった。しかし、アブラハムには、そのようなことはできなかった。その「苦しみ」によって、自分の限界を思い知らされたアブラハムは、イサクを神にゆだねるしかなかった。すると、神はアブラハムに、「イサクから出る者が、あなたの子孫と呼ばれる」(創世記 21:12) という神の言葉を思い出させたのである。するとアブラハムは、「この約束がある以上、たとえイサクを捧げて彼が死んでも、神は彼をよみがえらせるに違いない」という「信仰」が、アブラハムの内に芽生えた。これにより、アブラハムは「信仰」によって、ついにイサクを捧げる決心ができ、イサクを手にかけようとしたその時、御使いが彼を止めたのであった。それにより、イサクを取り戻した。

> 「信仰によって、アブラハムは、試みられたときイサクをささげました。彼は約束を与えられていましたが、自分のただひとりの子をささげたのです。神はアブラハムに対して、「イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる」と言われたのですが、彼は、神には人を死者の中からよみがえらせることもできる、と考えました。それで彼は、死者の中からイサクを取り戻したのです。これは型です。」(ヘブル 11:17-19)

アブラハムは「信仰」によってイサクを捧げた結果、「イサクを取り戻した」。その「信仰」は、イサクを肉では捧げることができなかったアブラハムの「不足」を、神が補われたからである。ここで大事なのは、神からの「信仰」によって、「イサクを取り戻

した」ということである。つまり、「見える安心」の放棄は、「見える安心」を物理的に失うということではなく、「見える安心」を神にゆだねる、ということなのである。すると、その「見える安心」は、神への「信仰」に変わる。それはまさしく、「見える安心」を、「信仰」による安心として受け取り直すことにほかならない。聖書はそれを、「彼は、死者の中からイサクを取り戻したのです。これは型です」と述べている（本書 206 頁「アブラハムを苦しめる」）。

同様のことは、ヨブの話からも知ることができる。ヨブは、「見える安心」の「**評判**」と「**富**」を失ったことで、ついに神につぶやくが、神とのやり取りの中で自分の限界を知って「**苦しみ**」を覚え、神の前に心からへりくだることができた。「**それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔いています**」（ヨブ 42:6）。それは、「見える安心」を神にゆだねることができたということであり、何があっても神を信頼する者になったということである。それで神は、ヨブの友人にこう言われた。「**わたしのしもべヨブはあなたがたのために祈ろう。わたしは彼を受け入れるので、わたしはあなたがたの恥辱となることはしない**」（ヨブ 42:8）。そして、ヨブが友人たちのために祈ると、神はヨブが失った地上の「**評判**」を元どおりにし、失った「**富**」を倍にされた。「**【主】はヨブの繁栄（評判）を元どおりにされた。【主】はヨブの所有物（富）もすべて二倍に増された**」（ヨブ 42:10 ※（　）は筆者が意味を補足）。なぜなら、そうした「見える安心」はもう、ヨブが神を信頼する「信仰」の前では力を失ったからである。ヨブは二度と、「**評判**」や「**富**」に心を奪われなくなったからである。

この二つの話から分かることは、神は人の「見える安心」を、人が物理的に失うことを望んでいるのではないということである。そもそも、「見える安心」の物理的な廃棄を神が望んでいるなら、私たちはこの世界にある物は何も持てないことになり、この世界では生きられなくなってしまう。ゆえに、そのようなことを神は望んでいるのではない。この「有限性」の世界にあっても、神を第一にできるようになることを望んでおられる。そのためには、アブラハムやヨブのように、人は神に従いきれない自らの限界を知って苦しみ、「見える安心」を神にゆだねる必要がある。そうすれば、神が心配し、「見える安心」以上の安心をくださるのである。それが、「信仰による安心」であり、それは神にゆだねることで手にできる。

> 「あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。」（Ⅰペテロ 5:7）

神にゆだねることで、「見える安心」は「信仰による安心」に変わる。それは「信仰」によって、「見える安心」を受け取り直すことである。したがって、「真理」に従うことで生じた「苦しみ」は、神にゆだねればよい。「苦しみ」という「重荷」は、神のところに持って行けばよい。そうすれば、神が休ませてくれるのである。

> 「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（マタイ 11:28）

このように、「苦しみ」が生起させる「信仰」は、神にゆだねる「信仰」へと進む。キリストが歩まれたと同じ「真理」に従うことで生じる「苦しみ」が、神にゆだねる「信仰」に向かわせてくれる。それは「見える安心」を捨てる道であるが、「見える安心」を捨てられない「苦しみ」が、神にゆだねる「信仰」となる。その「信仰」が、「見える安心」を「信仰による安心」に変えてくれる。つまり、「闇」から「光」に導いてくれる。そして、「光」に向かうことを「この世」に対して死んでいくという。

❖ 「この世」に対して死んでいく

キリストが歩まれたと同じ道を歩む先に、希望がある。キリストを真似して生きることの先に、希望がある。なぜなら、キリストは殺される「苦しみ」を背負われたが、復活されたように、その道の先には復活があるからである。「もし、わたしたちがキリストと一体になってその死の姿にあやかるならば、その復活の姿にもあやかれるでしょう」（ローマ 6:5　新共同訳）。ゆえに、キリスト者はキリストが歩まれたと同じ道を、すなわち「この世」に対して死んでいく道を歩むのである。それは、徐々に死んでいく道であった。徐々に迫害され、さげすまれ、むち打たれ、そして弟子たちにも見捨てられ、最後は天の父からも見捨てられる中、十字架刑によって殺される道であった。それは「苦しみ」が増し加わっていく道であり、「苦しみ」の中で死んでいく道であった。「イエスは、苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた」（ルカ 22:44）。そうである以上、キリストに倣って生きるキリスト者も、「この世」に対して徐々に死んでいく道を歩むことになる。その道は苦難の連続であり、「苦しみ」であるが、その先にはゆるぎない「希望」がある。

> 「それだけではなく、苦難（苦しみ）さえも喜んでいます。それは、苦難（苦しみ）が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと、私たちは知っているからです。」
>
> （ローマ 5:3-4　新改訳 2017）※（　）は筆者が意味を補足

この「希望」を目指し、キリスト者はキリストが歩まれたと同じ道を歩む。正確に言えば、キリスト者はキリストに捕えられた者なので、「キリスト・イエスが私を捕らえてくださったのです」（ピリピ 3:12）、キリストが歩まれた道以外には歩むことができない。つまり、キリスト者はキリストに捕えられたのであって、すでに「新しく造られた者」なのである。古いものは過ぎ去り、すべてが新しくなったということである。「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました」（Ⅱコリント 5:17）。この事実を確信させるのが「信仰」であり、その「信仰」を生起させるのが、キリストが歩まれた道である。それはキリストに捕らえられ、すでに古い自分に死んでいるので、「あなたがたはすでに死んでおり」（コロサイ 3:3）、死んだところの自分を捕える道である（第一巻 199 頁「捕らえられたところの自分を捕らえる」）。

このように、キリストは私たちを捕えたので、私たちに「見える安心」の放棄を要求する。言い換えるなら、キリスト者はキリストの奴隷となったので、「召された者はキリストに属する奴隷」（Ⅰコリント 7:22）、キリストは私たちに「見える安心」の放棄を要求する。そのため、私たちキリスト者は「苦しみ」の道からは逃れられない。私たちはキリストに捕えられた以上、そのキリストが「この世」に対して死なれた以上、私たちもキリストと共に、「この世」に対しては死んでいくしかない。だが、私たちは死ぬことを拒んでしまう。「見える安心」の放棄などできないと、「この世」に対しては死ぬことを拒否する。それでもキリストは死ぬことを要求してくるので、もう全てを神にゆだねるしかない。すると、私たちにできない「不足」をキリストが担い、キリストが一緒になって私たちを死なせてくださるのである。それが「赦しの恵み」であり、十字架の贖いである。この恵みを受け取ると、「平安」が訪れる。

ところが、私たちは「有限性」の世界で暮らしているので、一旦は「見える安心」を放棄できても、またしばらくすると「偽りの情報」に惑わされ、「見える安心」に向かってしまう。すると、以前にも増して「見える安心」の放棄を要求されるようになる。そこで、再び「苦しみ」の中から神に助けを乞い、再び「赦しの恵み」にあずかれる。こうして、私たちは一度で死ぬのではなく、「この世」に対しては、キリストがそうであったように、徐々に死んでいく。ただし、キリストが味わった「苦しみ」は、外的な「苦しみ」であった。キリストが味わった「苦しみ」は、「見える安心」が放棄できない罪によって生じる、内的な「苦しみ」ではない。それはつまり、キリストは、罪

は犯されなかったということである。「罪は犯されませんでした」（ヘブル 4:15）。ならば、キリストが味わった「苦しみ」は何か。

❖ キリストが味わった「苦しみ」

キリストが味わった「苦しみ」は、「真理」を証ししたことで生じた迫害であり、外的な「苦しみ」であった。誰もが自分を信じなくなり、弟子からも裏切られるという、外から来る「苦しみ」であって、私たちのように「偽りの情報」に惑わされ、「見える安心」が捨てられないことで味わう内的な「苦しみ」ではない。私たちとはまるで違う。しかし、私たちが「真理」に従い、「真理」を証しするようになると、「苦しみ」の質は変化していく。内的な「苦しみ」しか味わったことのなかった私たちも、キリストが味わったと同じように、外的な「苦しみ」へと進んでいくことができる。

さらに言えば、キリストは「真理」を証しする前に、悪魔による誘惑に遭われた。これは、人の「苦しみ」は内的な「苦しみ」から始まることを象徴している。それからキリストは、「真理」を証しされた。すると、命が狙われる外的な「苦しみ」に襲われるようになった。私たちも、「真理」であるキリストを証しするようになると、途端に外的な「苦しみ」を味わう。それこそが、キリストが味わった「苦しみ」である。パウロも「真理」を証しするようになったことで激しい迫害に遭い、死の危険を覚悟した。「ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました」（Ⅱコリント 1:9）。しかし、その「苦しみ」によって、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者になったことを証言している。これが、「闇」から「光」の実際である。

> 「ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました。これは、もはや自分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者となるためでした。」
>
> （Ⅱコリント 1:9）

ところが、「この世」では、「肉体の苦行」が神に近づける道だと信じられている。そのせいで、キリスト者も「苦しみ」というと「肉体の苦行」を思い浮かべてしまう。「肉体の苦行」の道を歩むことが、キリストが歩まれた道だと思ってしまう。そこで、誰もが「すがるな。味わうな。さわるな」というような肉の定めに従い、それができるようになることを目指す。すると、周りからは尊ばれるため、「肉体の苦行」の「苦しみ」に希望を抱く。だが、それは「この世」を敵としないので、「この世」に於ける欲望には何の効き目もない。

「もしあなたがたが、キリストとともに死んで、この世の幼稚な教えから離れたのなら、どうして、まだこの世の生き方をしているかのように、「すがるな。味わうな。さわるな」というような定めに縛られるのですか。そのようなものはすべて、用いれば滅びるものについてであって、人間の戒めと教えによるものです。そのようなものは、人間の好き勝手な礼拝とか、謙遜とか、または、肉体の苦行などのゆえに賢いもののように見えますが、肉のほしいままな欲望に対しては、何のききめもないのです。」（コロサイ 2:20-23）

このように、キリストが味わった「苦しみ」は、「この世」から尊ばれる「肉体の苦行」ではない。「この世」から迫害され、見捨てられる外的な「苦しみ」である。それに対し、キリスト者が味わう「苦しみ」は、「見える安心」が放棄できないことによる内的な「苦しみ」と、「真理」であるイエス・キリストを宣べ伝えることで生じる外的な「苦しみ」である。そして、内的な「苦しみ」に勝利するカギは自分の限界に気づき、神に助けを乞うことにある。また、外的な「苦しみ」に勝利するカギも自分の限界に気づき、神に助けを乞うことにある。となれば、自分の限界に気づくことが、「闇」から「光」に移るカギとなる。

❖ 自分の限界に気づくことがカギ

「苦しみ」は何であれ、そのことで自分の限界に気づけば、その人は神にあわれみを乞うことができるようになり、「闇」から「光」に移れる。であれば、自分の限界に早く気づける道を選択した方がよい。その道は、イエス・キリストの救いを、家族や友達に伝道することである。そうすれば、すぐに外的な「苦しみ」に遭うことができる。周りからは嫌がられ、憎まれるようになる。「家族の者がその人の敵となります」（マタイ 10:36）。このことによる「苦しみ」は、直ぐさま自分の限界に、すなわち自分の「弱さ」に気づかせてくれるので、心から神に祈れるようになる。祈れば、内的な「苦しみ」にも勝利できるようになる。そうである以上、キリスト者は初めから伝道すればよい。キリストの証人として生き、福音を宣べ伝えていけばよい。それでイエスは、次のように言われたのであった。

「それから、イエスは彼らにこう言われた。「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい。」（マルコ 16:15）

福音を宣べ伝えていけば、人を恐れる自分と出会える。人に悪く思われることを恐れ、福音を語れない自分の「弱さ」に出会える。そのことが自分を苦しめるので、そこに

チャンスが訪れる。神の前にへりくだり、神に助けを乞える機会が訪れる。こうして、「苦しみ」の「闇」は、神の「光」に呑み込まれていく。つまり、伝道すればするほど、その人は神の前に砕かれていき、「光」を見るようになるということである。それこそが、「この世」に対して死んでいく近道である。死んでいけば、「人の言葉」ではなく、「神の言葉」を心の糧とし「信仰」で生きられるようになる。すると、次のようになる。

> 「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。」（ガラテヤ 2:20）

「信仰によっている」とは、「人の言葉」ではなく、「神の言葉」を心の糧として生きているということである。それは、「私はキリストとともに十字架につけられました」ということであり、「キリストが私のうちに生きておられるのです」ということであると、この御言葉は教えている。つまり、「信仰によっている」とは、「この世」に対して死んでしまったことを意味する。「世は私に対して死に、私も世に対して死にました」（ガラテヤ 6:14　新改訳 2017）。キリスト者は、キリストに捕らえられた者なので、「この世」に対して否が応でも「死ぬ」しかないということである。

このように、キリスト者は「真理」に従って生きることで「苦しみ」をも賜ったが、それは自分の限界に気づくためであり、神により頼む者になるためである。「信仰」によって生きられるようになるためである。このことを、「この世」に対して「死ぬ」という。この死を早めたければ、キリストの証人となって生きることである。そうすれば、確実に自分の限界に気づくことができ、「信仰」によって生きられるようになる。ということは、キリスト者は「この世」に在籍する限り、「この世」ではキリストの証人となって生きられるので、その生涯を「苦しみ」の中で生きられるということである。しかし、それの意味するところは、生涯を神の「光」を感じながら生きられるということであり、それが「闇」から「光」なのである。

このことは、私たちはもう神の子供であって、神の相続人であることを示している。しかも、キリストと共同の相続人である。それゆえ、私たちはキリストが歩まれたと同じ道を歩き、キリストと共に「苦しみ」を覚えることになる。そして、キリストが栄光を受けられように、共にその栄光をも受け取ることになる。そうであれば、現在

の「苦しみ」は、将来私たちに現されるはずの栄光に比べると、それは取るに足りないということになる。

> 「もし子供であれば、相続人でもあります。神の相続人、しかもキリストと共同の相続人です。キリストと共に苦しむなら、共にその栄光をも受けるからです。現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足りないとわたしは思います。」（ローマ 8:17-18　新共同訳）

キリストがこの地上で歩まれた道は、「真理」を証しする道であった。それは、私たちに於いてはキリストの証人となって生きるということであり、「真理」であるキリストを宣べ伝えることである。この生き方が、確実に「闇」の中にいる自分に気づかせ、何が本当の「光」なのかも気づかせてくれるのである。

最後に、整理しておきたい。キリスト者は、キリストに捕らえられた者なので、「キリスト・イエスが私を捕らえてくださったのです」（ピリピ 3:12）、キリストが歩まれた道以外は歩めない。それゆえ、キリストはご自身を、「わたしが道であり」（ヨハネ 14:6）と宣言された。それは「苦しみ」の道なので、キリスト者はその道を歩むことを避ける。すると、そこに新たな「苦しみ」が現れる。ここに皮肉がある。「苦しみ」の道を避けたことで、新たな「苦しみ」が現れるからである。しかし、どちらの「苦しみ」であっても、その「苦しみ」の「闇」が「光」に導いてくれる。だからといって、その「苦しみ」の出所は神ではなく、それは神に逆らう「死」である。神は、ただ人が「苦しみ」の「闇」の中にいることに、自らの「光」で気づかせたというだけである。

以上が、「闇」から「光」の話である。まことの「光」は、人が「苦しみ」の「闇」の中にあって初めて気づけるので、キリストの教えは「光」となり、人が「闇」の中にいることに気づかせるのである。それは、「苦しみ」から「苦しみ」へと向かう話に聞えるが、実は「闇」に勝てるまことの「光」を見出させる話である。

> 「この方にはいのちがあった。このいのちは人の光であった。光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった。」（ヨハネ 1:4-5　新改訳 2017）

では、「苦しみ」から「苦しみ」への総括をしよう。

－総括－

人は神に似せて造られたが、「苦しみ」を覚えるようになった。しかし、その「苦しみ」の中で神と出会うことができた。ところが、神との出会いで、人の中に新たな「苦しみ」が始まった。ここでは、そうした流れ総括する。「苦しみ」を覚えるようになった経緯を見ながら、「苦しみ」から「苦しみ」への話をまとめたい。最初は、神に似せて造られた者が、「苦しみ」を覚えるようになった経緯からである。

❖ 「苦しみ」を覚えるようになった経緯

神は人をご自分に似せて造るために、大地のちりで人の「体」を造り、そこに神の「いのち」を吹き込まれた。その「いのち」が人の土台となり、人は生きる者になった。

> 「神である【主】は、その大地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。それで人は生きるものとなった。」（創世記 2:7　新改訳 2017）

こうして、人は神の「いのち」を土台に据えられ、神の「永遠性」によって規定された。その神は、キリストが十字架で明らかにされたように「無条件の愛」であるゆえに、その規定とは、人が無条件に愛されるという規定であった。また、その神は三位一体であるゆえに、人が神と「一つ」になるという規定でもあった。また、その神は「いのち」であるゆえに、人が「いのち」を持ち続けるという規定でもあった。こうした規定を一言で言えば、それは人に対する神の不変の「肯定」であり、人は「非常に良き者」として定められたということである。「神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった」（創世記 1:31）。

しかし、悪魔は蛇を使ってエバを欺いた。「蛇が悪巧みによってエバを欺いたように」（Ⅱコリント 11:3）。その結果、エバは罪を犯し、一緒にいたアダムも罪を犯してしまった。まことに罪は、悪魔から出た。「罪を犯している者は、悪魔から出た者です」（Ⅰヨハネ 3:8）。その罪によって、神によって規定された「いのち」を否定する「死」が入り込んだ。「一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだ」（ローマ 5:12　新共同訳）。それは人を滅びに導く運動であり、「有限性」と呼ばれている。「有限性」は、滅びに向かって人を変化させ続ける運動であるため、全く変化しない「永遠性」とは対峙し、神の「真理」に逆らう「偽りの情報」を生み出すようになった。こうして、人は「偽りの情報」に惑わされることになり、「永遠性」によって規定されている自分を、「偽りの情報」で規定し直すようになったのである。

その「偽りの情報」は、人の価値は「行い」や「富」によって決まるとささやくので、誰もが周りから評価される「行い」を目指し、また「富」の獲得を目指した。そのことで、自分の価値を「高く」しようとした。ところが、いくら自分を「高く」しても上には上がいるので、誰もが自分のことを「ダメな者」と思うようになった。さらには、「偽りの情報」によれば、人がどれだけ愛されるかは人の価値に左右されるので、誰もが無条件では愛されなくなり、神による人は無条件で愛される者としての規定は、完全に「否定」されてしまった。ここに、「苦しみ」が始まった。

このように、人が「苦しみ」を覚えるようになったのは、人が「永遠性」の「いのち」によって規定されていたにもかかわらず、悪魔の仕業で「死」（有限性）が入り込み、その規定が真っ向から「否定」されたためである。悪魔の仕業により、人の暮らす世界も人の体も「有限性」になり、それが神による人への「永遠性」の規定を「否定」した結果、人は「苦しみ」を覚えるようになった。したがって、「苦しみ」は、人が「永遠性」で規定されていることの印にほかならない。人が神の「永遠性」で、無条件で愛される者として規定されているからこそ、無条件で愛されない現実に「苦しみ」を覚える。それゆえ、「苦しみ」は、人は神の「いのち」を土台にして生きていることの証しなのである。では、その「苦しみ」の具体例を見てみたい。

❖ 「苦しみ」の具体例

誰もが変わり続ける「有限性」の世界で暮らしているので、誰もが変わり続ける「人の言葉」で自らを規定する。しかし、人の土台は変わらない「永遠性」の神なので、人は変わらない「神の言葉」で規定されている。そのため、移り変わる「人の言葉」で自分を規定しようとすれば矛盾が生じ、「苦しみ」を覚えることになる。例えば、人は周りから馬鹿にされたり、悪く言われたりすれば「苦しみ」を覚えるが、それは人が神に無条件で愛される、変わらない「良き者」として規定されているからである。「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している」（イザヤ 43:4）。「高価で尊い」という神の規定が人の土台であるにもかかわらず、それに反する「人の言葉」を信じてしまうために矛盾が生じ、「苦しみ」を覚えるのである。

また、人は「肉体の死」を意識すると「苦しみ」を覚える。それは、人の土台の神は「いのち」であり、人が「いのち」を持ち続けるという規定に支えられているからである。神は人に「いのちの息を吹き込まれた」（創世記 2:7）とあるように、その「いの

ち」は「死」を受け入れないので、「肉体の死」を意識すると「苦しみ」を覚える。なぜなら「肉体の死」の情報は、神からの「いのち」の情報と矛盾するからである。

このように、人は「永遠性」によって規定されているため、それを否定する「有限性」の世界にあっては「苦しみ」を覚える。鳥は空を飛べるように規定されているが、空が飛べなくなる制約を受ければ「苦しみ」を覚えてしまうのと同じである。まさしく「苦しみ」とは、神が定めた本質に対する制約を、人が内に抱えることで生じるのである。その制約とは、神が規定された本質、すなわち「真理」を否定する「偽りの情報」を信じてしまうことである。人の土台である神の「いのち」が規定する「神の思い」を信じないことであり、聖書はこれを「罪」と呼ぶ。「**罪についてとは、彼らがわたしを信じないこと**」(ヨハネ 16:9　新共同訳)。したがって、「苦しみ」は「罪」の症状である。神を信じない「罪」によって生じる症状である。そこで、人に「罪」を犯させてしまう「偽りの情報」についても見ておこう。

❖ 「偽りの情報」

神は「永遠」である。「永遠」とは、変わらないことを意味する。「**イエス・キリストは、昨日も今日も、とこしえに変わることがありません**」(ヘブル 13:8　新改訳 2017)。そして、聖書は変わらないことを「真理」とする。途中で変わったり、滅びたりするものは「真理」ではない。したがって、変わることのない神が「真理」であり、神だけが「いのち」である。「**わたしが道であり、真理であり、いのちなのです**」(ヨハネ 14:6)。そうなると、「いのち」を否定する「死」は「真理」に逆らうので、「死」が支配する世界は、「真理」に逆らう「偽りの情報」の世界ということになる。その「死」を司るのが悪魔なので、「**死をつかさどる者、つまり悪魔を**」(ヘブル 2:14　新共同訳)、悪魔が「偽りの情報」の父ということになる。それでキリストは、悪魔こそが「偽りの父」であると、断言されたのである。

> 「悪魔は初めから人殺しであり、真理に立ってはいません。彼のうちには真理がないからです。彼が偽りを言うときは、自分にふさわしい話し方をしているのです。なぜなら彼は偽り者であり、また偽りの父であるからです。」
>
> (ヨハネ 8:44)

「偽りの父」である悪魔が蛇を使い、アダムとエバに「偽りの情報」を言葉巧みに信じ込ませ、「真理」に逆らう罪を犯させた。そのことで、「真理」である神から人を引き離してしまった。この出来事を聖書では、「死」が入り込んだと表現する。「一人の人

によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだ」(ローマ 5:12　新共同訳)。この「死」によって人は神と「分離」し、神が見えない「有限性」の「体」になり、この世界も「有限性」となった。人も世界も、滅びるしかない存在となった。この状態を聖書は、「アダムにあってすべての人が死んでいる」(Ⅰコリント 15:22) と表現した。そうである以上、悪魔は、まさしく「初めから人殺し」であった。そして、神と「分離」した状態が「罪」であり、人はこの状態を「苦しみ」として感じる。加えて、神と「分離」した状態からは、神の「真理」を否定する「偽りの情報」が生まれた。それは、次のようにして生まれた。

悪魔の仕業で「死」が入り込んだことで、人は滅びゆく「有限性」の世界しか認識できなくなった。そうなると、人の五官は「有限性」の世界で有効な知識を求めるしかないので、それを真理とした。だが、それは「死」を前提とし、「死」を肯定する知識であり、「死」を否定する神の「真理」からすれば「偽りの情報」でしかなかった。こうして、「偽りの情報」が生まれた。しかし問題は、人は「偽りの情報」を真理だと思い込み、それを以て自分を規定するようになったことであった。例えば、「偽りの情報」では、人の価値は人の「うわべ」(有限性) にあるとするので、人は互いの「うわべ」を比べることで自分の価値を知るようになり、誰が価値ある者かを巡って争うようになった。ここに、「罪の行為」の起源がある。

このように、悪魔の仕業で入り込んだ「死」によって「偽りの情報」が生まれた。人は「偽りの情報」に惑わされ罪を犯すようになった。つまり、罪を犯す者は悪魔から出た者であった。「罪を犯している者は、悪魔から出た者です」(Ⅰヨハネ 3:8)。だが、人の中心は神であって、人は神に似せて造られ、「良い者」として規定されていたので、罪を犯すことは人の本来の姿ではなかった。そのため、ここに「苦しみ」が生じた。「私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行っているからです」(ローマ 7:15)。

すると神は、「苦しみ」を覚える者に、救いの御手を差し伸べてくださったので、「闇」の中を歩んでいる者は「光」を見た。「闇の中を歩んでいた民は大きな光を見る」(イザヤ 9:2　新改訳 2017)。それゆえ、その「光」に掴まる者は救われ、「苦しみ」のあったところに「闇」がなくなった。「苦しみのあったところに闇がなくなる」(イザヤ 9:1　新改訳 2017)。人は「苦しみ」の中で神と出会い、神の御手に掴まることで救われることになった。「闇」の中で神の呼びかけを聞き、それに応答することで人は救われることになった。この救いは、「死」から「いのち」に移されることであり、「永遠

のいのち」を持つことであった。「永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです」(ヨハネ 5:24)。それゆえ、これをキリストに捕らえられたという。「キリスト・イエスが私を捕らえてくださったのです」(ピリピ 3:12)。そこで次に、キリストに捕えられた、という話をしたい。

❖ キリストに捕らえられた

キリストを信じている者は「永遠のいのち」を持つ以上、「信じる者は永遠のいのちを持っています」(ヨハネ 6:47　新解釈 2017)、その者はキリストに捕らえられた者である。「私たちは、真実な方のうちに、すなわち御子イエス・キリストのうちにいるのです。この方こそ、まことの神、永遠のいのちです」(Ⅰヨハネ 5:20)。私たちはキリストに捕らえられ、「永遠のいのち」を与えられたからこそ、イエス・キリストを知るようになった。「その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです」(ヨハネ 17:3)。そして、一旦キリストに捕らえられたなら、私たちをキリストの愛から引き離すことはもう誰にもできない。「私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません」(ローマ 8:39)。つまり、キリスト者は、キリストからは逃れられないのである。そうなると、キリストが歩まれる道を、私たちも共に歩むことになる。いや、キリストに捕らえられた私たちは、この地上では「いのち」につながる道を、キリストに引っ張られていく。これは、キリストに拘束される「**くびき**」を負ったということを意味するので、キリストはそのことを次のように言われた。

> 「わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。」
>
> (マタイ 11:29)

キリストによって引っ張られる道は「偽りの情報」を捨てる道であり、「見える安心」を放棄する道である。「偽りの情報」で規定した自分を十字架につけ、「偽りの情報」に基づく「見える安心」を捨てる道である。しかし、それは人の力では到底できないので、ここに新たな「苦しみ」が始まった。だが、心配はいらない。私たちはキリストと共に歩く「**くびき**」を負ったので、キリストが私たちをキリストの道に進めるように助けてくれるからである。自分を十字架につけ、「見える安心」を放棄できるように、いつも私たちを贖い、私たちを背負い、抱いてくださるからである。

「彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって主は彼らを贖い、昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた。」（イザヤ 63:9）

そうである以上、「見える安心」を放棄することができないときは、すなわち神の要求に応えられない自分の「不足」（限界）と出会い、「苦しみ」を覚えたときは、自分を背負ってくださっているキリストに助けを乞えばよい。そうすれば、キリストは私たちの「不足」を代わりに背負い、「偽りの情報」を捨てる道を歩ませてくださる。私たちが歩けるスピードに合わせ、ゆっくりと共に歩んでくださる。そのことで、「平安」を与えてくださる。この「平安」を以て、キリストを体感できる。

このように、私たちはキリストに捕らえられたので、キリストの「くびき」を負っている。私たちは、「見える安心」を放棄する道を、キリストに連れられて歩まされている。それは、「死」から脱出し、「いのち」に向かう道である。しかし、その道を歩むことは困難なので「苦しみ」を覚えてしまう。だが、この「苦しみ」の中で主に向かって叫ぶと、主は私たちを「苦しみ」から救い出してくださる。「この苦しみのときに、彼らが【主】に向かって叫ぶと、主は彼らを苦悩から救い出された」（詩篇 107:6）。この叫びが「信仰」であり、「苦しみ」が神への「信仰」を生起させ、生けるキリストの恵みに出会わせてくれるのである。つまり、「神の福音」は、「信仰」から「信仰」へと進ませる話である。「福音のうちには神の義が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませる」（ローマ 1:17）。その意味するところは、見てきたように、「苦しみ」から「苦しみ」へである。

❖ 「苦しみ」から「苦しみ」へ

神は、「苦しみ」という「闇」の中で輝く「光」である。「光は闇の中に輝いている」（ヨハネ 1:5　新解釈 2017）。このことは、「苦しみ」なくしては、神である「愛」を体感できないことを意味する。病人も、「苦しみ」を覚えるからこそ自分の目に医者が輝き、医者によって癒やされる喜びを体感できる。これと同じである。そして、多くの「苦しみ」を味わった病人は、その「苦しみ」が癒やされれば癒やされるほど医者を信頼し愛するようになるが、それと同じように、罪人は多くの「苦しみ」（罪）をキリストによって癒やされれば癒やされるほど（赦されれば赦されるほど）、キリストを多く愛するようになる。「だから、言っておく。この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさで分かる」（ルカ 7:47　新共同訳）。そのことが、心に「平安な義の実」（ヘブル 12:11）を結ばせてくれる。

そこで、神は人を「苦しみ」から「苦しみ」へと進ませる。神は人に「神の律法」を突きつけ、「見える安心」の放棄を要求することで「苦しみ」へと進ませる。「偽りの情報」に惑わされている罪に気づかせ、それによって「赦しの恵み」を受け取らせ、神の「第一の戒め」、神を愛することが実行できるようにしてくださるのである。ここに、神の目指す「癒やし」がある。

この原理を知る者は、自分の中にある「苦しみ」を見逃さない。「苦しみ」が、神へと向かう「コンパス」になることを知っているからである。そこで、その者は自分の中にある矛盾（苦しみ）から目を離さない。人の中心は「永遠性」（いのち）によって規定されているにもかかわらず、その中心を無視し、「有限性」（死）によって自分を規定しようとする矛盾を熱心に見つけようとする。例えば、キリストを信じている者は「永遠のいのち」を持っていると規定されているにもかかわらず、「信じる者は永遠のいのちを持っています」（ヨハネ 6:47　新改訳 2017）、肉体の死を恐れる矛盾である。この矛盾が「苦しみ」を生じさせているので、この「苦しみ」に目を向ける。そうすれば、神の「光」を見失うことなく、神による「平安」が得られるようになる。

しかし、「苦しみ」に目を向けて歩むことは、すなわち十字架の贖いに目を向けて歩むことは容易ではない。それは、「有限性」の規定（罪）を滅ぼしていく道なので、その道を歩く者は「有限性」の「この世」からすれば最大の敵となる。そこでキリストは、「この世」の支配者である「死」を最後の敵とみなし、「最後の敵である死も滅ぼされます」（Ⅰコリント 15:26）、それと戦われた。私たちが「この世」に在籍する限り、この敵との戦いは続くので、「この世」では「苦しみ」が無くなることはないが、キリストの「くびき」を負ってからは神に背負われているので、この「苦しみ」はもう、私たちを倒せなくなった。「迫害されていますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません」（Ⅱコリント 4:9）。ならば、「苦しみ」はどうなるのかといえば、それは私たちを背負われている神を信頼するかどうかの「信仰」が試されるときとなる。聖書はこれを、キリスト者に於ける「試練」とする。

> 「私の兄弟たち。さまざまな試練（苦しみ）に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。信仰がためされると忍耐が生じるということを、あなたがたは知っているからです。その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります。」（ヤコブ 1:2-4）　※（　）は筆者が意味を補足

こうして、「苦しみ」は神への「信仰」を生起させ、神との距離を縮ませてくれる。それで神は、積極的に人を「苦しみ」に追い込む。神は人に「神の律法」を要求し、また人を襲う「患難」を「静観」することで、人を「苦しみ」に追い込む。正確に言えば、神は「光」なので、「この世」の「闇」を「光」で照らすことで、人が「苦しみ」の中にいることに気づかせているにすぎない。その「光」はキリストを信じたことでより一層強くなるので、ますます「苦しみ」に気づかされる。それにより、「この世」に対して死んでいく。キリストとともに十字架につけられていき、キリストが私のうちに生きておられるという「信仰」に向かっていく。

> 「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。」（ガラテヤ 2:20）

このように、「神の福音」は「苦しみ」から「苦しみ」へと進ませる話にほかならない。ところが「苦しみ」は、「この世」に安らぎを求める私を「否定」し、そのことで神への「信仰」を生起させ、変わることのない神による「平安」を受け取らせるのである。ということは、人が神に近づこうとすればするほど、「苦しみ」も増し加わっていくことになる。人が神と関わろうとすれば、「苦しみ」が生じるということになる。

❖ 神と関わろうとすることで「苦しみ」が生じる

神は「永遠性」である。ゆえに、「有限性」を持ったまま神と関わろうとすれば、「有限性」を手放すことが求められる。「有限性」の富を手放すようにと、迫られる。そこで「苦しみ」が生じる。別の角度から言えば、「神の国」は「永遠性」に属するため、「有限性」のものは持ち込むことができない。そのため、「神の国」に行くことが確定したキリスト者に対し、神は「有限性」の廃棄を求めてこられる。これは見える保証を手放すことを意味するため、ここに「苦しみ」が生じる。さらに別の角度から言えば、キリストを信じる者は、神の救いの御手を片手で掴んだ者なので、神はその手を決して離さず「神の国」へと引き寄せてくださっている。しかし、その者のもう片方の手が「この世」の安心にしがみついて放さないために「苦しみ」が生じる。

こうして、神と関わろうとすることで「苦しみ」が生じる。それでも肉体の死とともに「有限性」は完全に手放すことになるので、神はその者を直ちに「神の国」に引き

上げてくださる。「終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです」(Ⅰコリント15:52)。しかし、「神の国」に引き上げられるまでは、どうしても「この世」の安心にしがみついてしまうために「苦しみ」を覚えてしまう。神は、そのことをご存じであっても、私たちを引き寄せる御手を決して緩めない。ゆえに、私たちが「この世」に留まる「有限性」の体を持つ限り、「苦しみ」が消えることはない。

そこで、神は人が覚える「苦しみ」を和らげるために、「赦しの恵み」を用意してくださった。それは、「有限性」の服を脱ぎ捨てられない「弱さ」を神が受容し、神が人の「弱さ」を担う恵みである。神は、この「赦しの恵み」を以て私たちを引き寄せてくださる。とはいえ、「苦しみ」は「有限性」の世界にいる限り続く。それでも、その「苦しみ」を永遠という物差しから見ると一瞬でしかない。人を待ち受けている「重い永遠の栄光」の前では、今の時の「苦しみ」は一瞬なので、「軽い患難」でしかない。

> 「今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。」(Ⅱコリント4:17)

そうであれば、「苦しみ」は「重い永遠の栄光」への貯金であり、天にたくわえる宝である。「自分の宝は、天にたくわえなさい」(マタイ6:20)。

このように、「永遠性」の神が私たちを引き寄せてくださるが、神の場所には「有限性」は持ち込めないので、「有限性」の安心を手放せない私たちに「苦しみ」が生じる。それは、人が神と関わろうとすることで、「苦しみ」が生じるということである。これがキリスト者の「患難」である。しかし、この「患難」の先に真の「希望」がある。

❖ 真の「希望」

キリスト者は、神に引き寄せられている。しかし、神に至る道は「この世」との決別を意味するので、それは紛れもなく「苦しみ」の道であり、「患難」である。だが、神があえて「患難」の道を歩ませるということは、それは歩くことが可能な道であることを意味する。「患難」が私たちを超えることは決してない、ということである。そうでなければ、それはもう人が歩ける道ではないからである。したがって、「患難」は、耐えることのできる道なのであって、「患難」が生み出す忍耐の先には、真の「希望」があるということである。

「それればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。」（ローマ 5:3-4）

そうであれば、「苦しみ」は真の「希望」への信仰が試される「試練」でしかない。「苦しみ」に遭うたびに、「重い永遠の栄光」の約束を信じられるかどうかが試される試験を受けている。この試験は、「苦しみ」となる「重荷」を、ただ神に差し出せば合格する。神が「重荷」を下ろさせ、休ませてくださるからである。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（マタイ 11:28）

これが「試練」に伴う脱出の道であり、それは自分の「弱さ」に気づき、神に助けを乞う道である。自分の限界に気づき、神に自分をゆだねる道である。

「あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。」（Ⅰペテロ 5:7）

つまりそれは、神の要求に対し、何ができるかではなく、何ができないかを知り、その「不足」を神に贖ってもらう道である。そうであるから、それはもう能力に関係なく、誰もが歩ける道なのである。こうして、神は「試練」とともに脱出の道も備えてくださった。これは、耐えられない「試練」を、神は人に与えないことを意味する。

「あなたがたの会った試練はみな人の知らないものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを、耐えられないほどの試練に会わせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えてくださいます。」（Ⅰコリント 10:13）

このように、キリスト者は神に引き寄せられるので、「苦しみ」（患難）を覚えるが、その先には真の「希望」がある。「苦しみ」は、真の「希望」への信仰が試される「試練」の時となる。これは信仰だけではなく、「苦しみ」をも賜ったということである。

「あなたがたは、キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための苦しみをも賜ったのです。」（ピリピ 1:29）

そうであっても、「苦しみ」に比例し、神の「光」も強くなるので、心は神から離れられなくなっていく。離れられないので、古い自分が死んでいき、キリストが私のうちにあって生きるようになっていく。「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです」(ガラテヤ 2:20)。正確に言えば、神が人の土台なので、土台の神に気づけるようになるということである。こうして、「死」によって「否定」されていた私たちの姿は神によって「否定」され、「否定」の「否定」は「肯定」であるように、神に生かされていく。ここに真の「希望」があり、その結論を私たちはすでに頂いているので、結論に向かって古い自分を脱ぎ捨てていくのである。

> 「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」(Ⅱコリント 5:17)

まことに神から与えられた真の「希望」の結論を、私たちは神から賜った「信仰」で確信することができる。「信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです」(ヘブル 11:1)。よって、「神の福音」が、人を「苦しみ」から「苦しみ」に進ませるのは、「信仰」から「信仰」に進ませるためなのである。

> 「福音のうちには神の義が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。」(ローマ 1:17)

「信仰」に進ませるのは、神が規定した人の「真実な姿」を、人が知るようになるためである。それは、神に無条件で愛されている「良き者」にほかならない。さらに言えば、人が神から無条件で愛されるのは、人の「真実な姿」が、神なしでは生きられない、すなわち何もできない「弱き者」だからである。親が赤ちゃんを無条件で愛するのは、赤ちゃんは何もできない「弱き者」だからであるのと同じである。これこそが人の「真実な姿」なので、人は神に無条件で愛される。すなわち、人は何もできない「弱き者」であることにこそ、真の「希望」がある(本書 164 頁「自分の「真実な姿」」)。

以上が、「苦しみ」から「苦しみ」へを、時系列で見た総括になる。そこで最後に、この総括に基づき、キリスト教の考察を行いたい。

－キリスト教の考察－

『福音の回復』第一巻で述べた「神の福音」の真実を、第二巻では別の視点から見ている。それは、「**苦しみ**」から「**苦しみ**」へと進ませる道のりである。神は「**苦しみ**」を媒体に、人に自分の限界に気づかせて、神を信じる「信仰」から、神にゆだねる「信仰」へと進ませる。それは、「**見える安心**」に生きてきた古い自分に死に、「神の言葉」に生きる新しい自分になっていくことである。正確に言えば、人は初めから「神の言葉」に生きる者として規定されているので、すなわち神に愛される「良き者」として規定されているので、「見よ。それは非常に良かった」（創世記 1:31）、神が人を造られた際の人の「真実な姿」を、人が「信仰」で確認できるようにされていく話である。こうした話を基に、この章の最後はキリスト教の考察をしたい。最初は、キリスト教は「**苦しみ**」に導く教えであるという考察である。

❖ 「苦しみ」に導く教え

「この世」での成功に導くのが、すなわち「この世」での繁栄を与えるのが、キリスト教だと思う人たちが多い。しかし、それは誤解である。正しくは、「この世」での「**苦しみ**」に導くのがキリスト教である。なぜなら、キリスト教は、私たちを「この世」に対して死ぬように導くからである。そのことで、まことの「いのち」を得させる。というのも、「この世」は滅びゆく世界であるので、たとい全世界を手に入れられても、まことの「いのち」を損じたなら、何の得もないからである。そこで、キリスト教の経典である聖書は次のように教えている。

> 「人は、たとい全世界を手に入れても、まことのいのちを損じたら、何の得がありましょう。そのいのちを買い戻すのには、人はいったい何を差し出せばよいでしょう。」（マタイ 16:26）

つまり、人は「この世」から脱出しない限り、「この世」と共に滅び、まことの「いのち」を損じてしまうのである。そこで聖書は、「この世」に対しては死ぬことを（決別することを）、すなわち「この世」からは脱出することを教えている。「**死にあずかるバプテスマ**」（ローマ 6:3）。それは、「この世」で手にした「**見える安心**」を捨て、神による安心を信仰で手にしていくことなので、ここに激しい「**苦しみ**」が生じる。そして聖書は、キリストを信じている者は、まことの「いのち」である「永遠のいのち」を持っていて、すでに「死」から「いのち」に移った状態にあるとする。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じている者は、永遠のいのちを持っていて、裁きに会うことがなく、すでに死からいのちに移った状態にあるのです。」

（ヨハネ 5:24　私訳）

「死」から「いのち」に移ったとは、「この世」に属する者から「神」に属する者に移ったということである。そうなると、神は「この世」の者ではないように、もうキリスト者も「この世」の者ではないということである。そのため、「この世」はキリスト者を憎むのである。ここに、キリスト者の「**苦しみ**」がある。キリストは、そのことを次のように言われている。

「わたしは彼らにあなたのみことばを与えました。しかし、世は彼らを憎みました。わたしがこの世のものでないように、彼らもこの世のものでないからです。」（ヨハネ 17:14）

キリスト者は「永遠のいのち」を与えられたので、もう「この世」の者ではない。そのため、否が応でも「この世」に死んでいくしかない。「この世」と決別するしかない。それは「**見える安心**」との別れになるので、ここに「**苦しみ**」が生じる。

しかし、見方を変えれば、この「**苦しみ**」こそ「永遠」（神）への意識である。というのも、滅んでいく時間に対し、滅びない「永遠」（神）への意識が激突することで、人は滅んでいく時間に死の恐怖を覚え、そこに「**苦しみ**」を覚えるからである。したがって、キリスト教は、人を「**苦しみ**」から「**苦しみ**」に導くことで、「永遠」から「永遠」に導く教えである。それは、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある「永遠のいのち」であって、「**神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです**」（ローマ 6:23）、その行き着く所も「永遠のいのち」であるからである。「**その行き着く所は永遠のいのちです**」（ローマ 6:22）。それはつまり、「永遠のいのち」であるキリストを知り、知ったキリストとの関係が豊かになっていくということである。キリストはこのことを、「**わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです**」（ヨハネ 10:10）と言われたのである。

このように、キリスト教というのは、「苦しみ」に導く教えである。聖書に書かれていることを実行すれば、誰であれ神の要求には応えられない自分の罪に出会い、「**聖書は、逆に、すべての人を罪の下に閉じ込めました**」（ガラテヤ 3:22）、「苦しみ」に追

い込まれていく。それが、キリストの教えである。ということは、「苦しみ」を覚える者はもう、キリスト教に足を踏み入れている。神の呼びかけを聞いている。そして、キリストは、「苦しみ」の先に「喜び」を用意している。「この世」が与えるのとは異なる「平安」を用意している。次はそれを考察したい。

❖ 「平安」を用意している

「苦しみ」は「永遠」への意識であり、「苦しみ」が私たちを神に導いてくれる。それは、「苦しみ」の先に、神による「平安」が用意されているということである。

> 「わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を持つためです。」（ヨハネ 16:33）

つまり、「苦しみ」は、神の「平安」に導く「コンパス」であり、人を苦しめることが目的ではない。「苦しみ」は、あくまでも「永遠」である神の要求に（心の呼びかけに）、人の側が答えられないことで生じる症状（罪）であって、それは自分の限界を、自分の「不足」を、自分の「弱さ」を示す印にすぎない。ゆえに、「苦しみ」によって自分の「弱さ」に気づき、神にあわれみを乞うことができれば、その先には神の恵みが待っている。その恵みは、「苦しみ」という「闇」の中に輝く「光」であり、「闇」はこれに打ち勝てないのである。

> 「この方にはいのちがあった。このいのちは人の光であった。光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった。」（ヨハネ 1:4-5　新改訳 2017）

「闇」が打ち勝てない「光」の恵みとは、神が人の「不足」（闇）を覆い、神の要求を完全に満たしたと見なし、「義」なる者とすることである。「主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです」（Ⅰコリント 6:11）。それは、人の「不足」である「罪」を赦し、神と「一つ」にしてくれるということであり、これを「赦しの恵み」という。その恵みを、キリストは十字架で明らかにされた。そして、キリストは人が「苦しみ」を覚える度にこの恵みを受け取らせ、神と人との距離を縮めようとされる。それが「平安」である。

したがって、目指すべきは「苦しみ」を覚えることではなく、神の恵みによる「平安」を受け取ることにほかならない。受け取る方法はただ一つ、「苦しみ」を覚える自分の

「重荷」を知ったなら、それを神のもとに持って行くだけである。そうすれば、神が「赦しの恵み」で休ませてくれる。これが、神の恵みによる「平安」の受け取りである。

> 「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（マタイ 11:28）

神のもとに「重荷」を持って行くとは、神にあわれみを乞うことであり、神に助けを乞うことである。したがって、人が目指すのは、「苦しみ」を覚える度に神に助けを乞うことである。これを「信仰」といい、この「信仰」で「赦しの恵み」を受け取る。そして、さらに人が目指すのは、人となって来られたキリストが、十字架の死の「苦しみ」のあとは天に引き上げられ、再び神の右の座に座り、神と「一つ」の姿になられたように、「キリストは天に上り、御使いたち、および、もろもろの権威と権力を従えて、神の右の座におられます」（Ⅰペテロ 3:22）、神と「一つ」になることである。なぜなら、人はそのように規定されているからである。「それは、わたしたちが一つであるように、彼らも一つであるためです」（ヨハネ 17:22）。神が「ぶどうの木」であれば、人はその「枝」として規定されているため、「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です」（ヨハネ 15:5）、人は神と「一つ」になれることを目指す。平たく言えば、それは神から友と呼ばれる関係を築くことである。ここに、不変の「平安」を覚える。それは、「この世」が与える平安とは全く異なる。「この世」は変化する世界ゆえに、変化する一時の平安しか与えられないからである。

> 「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。」
>
> （ヨハネ 14:27）

ここに神の計画がある。それは、「この世」とは違う「平安」を与えることである。「それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ」（エレミヤ 29:11）。「苦しみ」に出会う度に、神の恵みに出会い、その度に神との関わりを強固にしていき、神から友と呼ばれる関係を築いていくのである。「彼は神の友と呼ばれたのです」（ヤコブ 2:23）。神と「一つ」となっていき、これが神の与える「平安」となる。ということは、全ての「苦しみ」は、神の恵みと出会うための通過点であり、神の恵みに逃げることを学ぶためということになる。

したがって、人は神から「見える安心」の放棄を要求され、それができない自分の「不足」（限界）と出会って「苦しみ」を覚えるが、それはむしろ良いことである。逆に言えば、人が自らの力で神からの要求を全てクリアーできてしまうと、「苦しみ」は何も生じないので、それでは神の恵みにも出会えなくなってしまう。そこで神は、人にはできないことを要求し、すべての人を罪（不足）の下に閉じ込め、「すべての人を罪の下に閉じ込めました」（ガラテヤ 3:22）、「苦しみ」へと追い込まれる。すると、その「苦しみ」が神により頼む者になるかどうかの「試練」となり、神と「一つ」になる「平安」へと導く。その「平安」が、満ちあふれる「喜び」となる。

> 「苦しみゆえの激しい試練の中にあっても、彼らの満ちあふれる喜びは、その極度の貧しさにもかかわらず、あふれ出て、その惜しみなく施す富となったのです。」（Ⅱコリント 8:2）

このように、キリスト教の神は、「苦しみ」の先に「喜び」を用意しておられる。それゆえ、キリスト教では、「むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい」（Ⅰペテロ 4:13）と教えている。そして、どのような「苦しみ」のときにも、神が私たちを慰めてくださることを経験すれば、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような「苦しみ」の中にいる人をも慰めることができるようになる。

> 「神は、どのような苦しみのときにも、私たちを慰めてくださいます。こうして、私たちも、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような苦しみの中にいる人をも慰めることができるのです。」（Ⅱコリント 1:4）

こうして、キリスト教では、「苦しみ」に遭うことで、神の愛の掟を学ぶのである。「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました」（詩篇 119:71）。そうであれば、「苦しみ」を覚えている者は、まことに正しい道を歩んでいるということになる。その正しい道は、神にゆだねる道に向かっている。次に、それを考察したい。

❖ 神にゆだねる

「苦しみ」だけが、私たちを神の「平安」に導く「コンパス」である。であれば、祈ったのに聞かれなかったとつぶやくのは、もうやめるべきである。そもそも神が人に与えたいのは、人の本当の幸せであり、それは人が考える「見える安心」の幸せとは異なるので、神に祈っても聞かれないという事態が起きる。「願っても受けられないの

は、自分の快楽のために使おうとして、悪い動機で願うからです」（ヤコブ 4:3）。ならば、何が人の本当の幸せかといえば、それは神と「一つ」になっていくことである。そのためには、人の側は「見える安心」を手放す必要がある。これを神にゆだねるといい、神にゆだねることで、「見える安心」は神への「信仰」に置き換わり、神と「一つ」になっていく。そうすれば、アブラハムがイサクを神にゆだねた際、再びイサクを手にしたように、「見える安心」は「信仰」に置き換わって所有することになる。「信仰によって（中略）、死者の中からイサクを取り戻したのです」（ヘブル 11:17-19）（本書 219 頁「神にゆだねる「信仰」」）。

さらに言えば、神にゆだねるというのは、自分の「弱さ」を神の前で認めることである。「弱さ」を認めれば、神が人を支える土台なので、神ご自身が人の「弱さ」を担ってくださる。こうして、神の恵みは「弱さ」のうちに働く。「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」（Ⅱコリント 12:9）。すると、人は「平安」から来る「喜び」に満たされるので、「見える安心」は神への「信仰」に置き換わって所有することになる。

このように、神は私たちから「見える安心」を奪い、すなわち所持する見えるものを廃棄させ、「この世」で裸にしようとしているのではない。「見える安心」を、ただ神にゆだねさせたいのである。ヨブも、「見える安心」となっていた富を奪われ、「苦しみ」に遭ったことで神の前にへりくだることができ、自分自身を神にゆだねることができた。その時、失った富は倍になって戻ってきた（ヨブ記 42:10）。だが、その富は、神を知ったことの「平安」から来る「喜び」に比べると、もはや安心をもたらす力を持たず、ちりあくたに見えてしまう。それゆえ、ヨブと同様の経験をしたパウロは、次のように述べている。

> 「それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。」（ピリピ 3:8）

こうして、キリストを知ったことの「平安」が、すなわちキリストへの「信仰」が、「見える安心」を「ちりあくた」にし、「見える安心」に惑わされないようにしてくれる。したがって、「神の福音」の最後は「信仰」が舞台となる。では、まとめをしよう。

❖ まとめ

「苦しみ」から「苦しみ」へという視点で、最後はキリスト教の考察をした。そこで分かったことは、キリスト教は「苦しみ」に導く教えではあるが、「苦しみ」の先には神が用意した「平安」があるということである。その「平安」は、「この世」が与えるものとは違う。「この世」が与えるものは、その人が努力することで与えられる「評判」であり、「富」である。そのため、その人は努力を怠れば途端に、「この世」が与える平安を失うことになるので、そこでは絶えず緊張感があり、人の目に怯えることになる。しかし、神が用意した「平安」は、不動の神と結びつくことであり、そこでは人の努力は不要である。必要なのは、自分の「弱さ」を認め、神に自分をゆだねるだけである。それが、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」（ルカ 18:13）である。そうすれば、神が用意した「平安」を手にする。これがキリスト教であって、それは「この世」の平安を与える教えではない。

このように、キリスト教は、「この世」での繁栄を与える教えではない。「評判」や「富」を得させる教えではない。人を「苦しみ」に導き、変わることのない神の「平安」を与える教えである。その「平安」は、神に自分をゆだねる「信仰」で手にする。つまり、キリスト教に於ける「神の福音」の最後の舞台は「信仰」である。いや、「神の福音」は、むしろ「信仰」の話である。

以上で、「苦しみ」から「苦しみ」への話は終わるが、キリスト教は「苦しみ」の教えであることを訴えたのがキェルケゴールであった。そのため、この章を書くに当たっては、彼の書籍が大いに参考になった。とはいえ、彼の書籍はたくさんあり、しかも難しいので、キェルケゴールについて学びたければ、私が神学生の時に教えていただいた橋本淳先生著『キェルケゴールにおける「苦悩」の世界』（未来社）がお薦めである。キェルケゴールが生涯をかけて書き綴った多くの書籍と彼の日誌から、彼が何を伝えようとしていたのかが分かりやすくまとめられている。

では、「神の福音」は「信仰」の話であることを述べたので、次は「信仰」の話をする。ただし、「信仰」は神から出たものと、人から出たものがあり、どちらも信じるという点では同じであっても出所が違うので、中身は異なる。そこで、本書は神から出たほうを「信仰」と呼び、人から出たほうを「妄想」と呼ぶことにする。この区別ができないと、聖書の教える「信仰」の話も誤解してしまうので、次章は、「信仰」と「妄想」である。その話が分かれば、見てきた「神の福音」を、さらに深く知ることができる。

第八章　「信仰」と「妄想」

カントは、人間の理性では神を知り得ず、神を知るのは「信仰」であるとした。そして、その「信仰」の場所を空けておくために、「知」を廃棄しなければならないとした。このことは、人間の理性の限界を明らかにした『純粋理性批判』に書かれている。

> 「だからわたしは、信仰のための場所を空けておくために、知を廃棄しなければならなかったのである。」（『純粋理性批判』Bxxx　「純粋理性批判１」光文社古典新訳文庫　175 頁）

では、カントの言う神を知る「信仰」とは何なのだろう。それは「知」を廃棄する以上、すなわち人の「知識」に依存しない以上、それは人の能力に依存しない「信仰」である。したがって、誰にでも持つことが可能な「信仰」ということになる。この世では愚かな者とされようと、無知な者と見なされようと、はたまた概念の形成がこの上なく制限された者であろうとも、この「信仰」は誰でも持つことが可能なものである。カントはこうした理解に立って、「信仰」を次のように想定した。

> 「そもそもこのように信じることは人類全体に可能（「信仰」は誰でも持つことが可能）なはずである（中略）「世の愚かな者」も、無知な人や概念がこのうえなく制限された人でも、そのような啓発と内的確信とを要求できなければならないのであると、このように想定することは正当であり、理性的でもある。」（『たんなる理性の限界内の宗教』A181　「カント全集 10」岩波書店 243 頁　※（　）は筆者が意味を補足）

カントの言うことはもっともである。というのも、「信仰」は誰でも持つことが可能でなければ、救われる人が限定されてしまうからである。神の救いの話は、誰の上にも平等に神が語られている以上、その救いに必要な「信仰」は、人の能力に依存しないものでなければ理屈に合わない。ゆえにカントは、「このように想定することは正当であり、理性的でもある」と言い切ったのである。

ならば、誰でも持つことが可能な「信仰」とは、一体どのようなものだろう。それは人の能力には依存しない以上、神から出た「信仰」ということになる。だが、この世界には人の能力に依存する、すなわち人から出た「信仰」もある。そこで聖書は、誰

でも持つことが可能な神から出た「信仰」を「取税人の信仰」に象徴させ、人から出た人の能力に依存する「信仰」を「パリサイ人の信仰」に象徴させている。ということは、「パリサイ人の信仰」では救いに至らないので、その信仰は「妄想」ということになる。見た目は同じように「信じる」という行為であっても、「妄想」の場合があるということである。ここでは、その違いを詳しく見ていく。

－「信仰」と「妄想」の特徴－

イエスは、「『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです」（マタイ 7:21）と言われた。つまり、「主よ、信じます」という信仰には二種類あるということである。一つは「父のみこころを行う」信仰であり、もう一つは「父のみこころを行わない」信仰である。見た目は同じ「主よ、信じます」であっても、前者は「神の思い」を聞くことで成立し、後者は「肉の思い」を聞くことで成立するので全く異なる。そこで本書は区別するために、前者を「信仰」とし、後者を「妄想」とする。聖書は前者の「信仰」を「取税人の信仰」に重ね、後者の「妄想」を「パリサイ人の信仰」に重ねているので、それを基に、それぞれの特徴を見ていくことにする。最初は、「パリサイ人の信仰」である。

❖ 「パリサイ人の信仰」

「パリサイ人の信仰」は人から出た信仰、すなわち「妄想」であり、そこには以下のような二つの定式がある。

定式 1、「何かをすれば」⋯→「神からの 報酬 がある」

定式 2、「何かをすれば」⋯→「神からの 罰 がある」

定式１は、「何かをすれば、神からの報酬がある」である。この場合の「何かをすれば」とは、神が命じる「行い」であり、「行い」の達成によって神からの報酬があると信じることである。例えば、神社にお参りに行く日本人は、お守りを買うことが神の命じる「行い」であり、それによって災いから守られると信じている。また、聖書の中のパリサイ人は、最高の報酬である天国行きの切符を得るために、神が命じる「行い」を達成しなければならないと信じていた。そこで割礼を行い、安息日を守り、「断食」をし、自分の受けるものはみな、その十分の一を捧げていた。その「行い」によって

天国行きの切符である「義」の報酬が得られると信じていたのである。つまり彼らは、神からの祝福の可否は人の「行い」の能力に依存すると考えていたのであり、それが「パリサイ人の信仰」であった。

定式２は、「何かをすれば、神からの罰がある」である。この場合の「何かをすれば」とは、定式１とは反対に、神の命令に反する「行い」であり、その「行い」に伴い神からの罰があると信じることである。例えば、「これをすると縁起が悪い」と信じたり、あるいは何か災難に遭うと、「これは罪への罰だ」と信じたりするのが定式２である。そこで旧約時代の人たちは、災いを避けるための禁止事項を定めた。例えば、安息日には仕事をしてはいけないということで、仕事となる範囲を詳細に定め、それを守ることで神からの罰を避けられると信じた。これは、罰を避けられるかどうかは、禁止事項を守る人の「行い」能力に依存するということであり、それは「パリサイ人の信仰」に象徴されている。

このように、人から出た信仰には二つの定式がある。それはどちらも、神は人の価値を「行い」で判断し、「行い」によって裁かれるという信仰である。この信仰には「行い」の規定が不可欠となるので、その規定は「律法」となって人を拘束する。ゆえに、この信仰は「律法主義」とも呼ばれる。しかし、この信仰は神からの「義」に導かない「妄想」なので、イエスは何が正しい信仰なのかを教えるために譬えを話された。そこではパリサイ人と取税人が登場し、パリサイ人は次のように祈ったという。

> 「神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。」
>
> （ルカ 18:11-12）

パリサイ人は、「私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております」と、自分は神の命じる「行い」を守っていることを、神に向かって熱心に訴えたという。そう訴えたのは、神から「義」の報酬を得るためであった。しかし、これは「妄想」にすぎないので、イエスは続けて正しい信仰の定式を語られた。それが「取税人の信仰」であり、彼は次のように祈ったという。

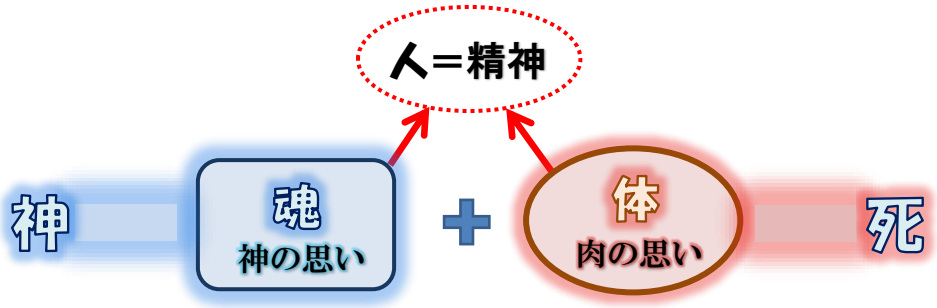
> 「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。」（ルカ 18:13）

取税人は、自分の「行い」のことは何一つ語らなかった。彼には誇れるような「行い」などなかったからである。逆に、彼は神からの命令の「行い」ができない自分の限界（罪）を知っていたので、すなわち自分の「弱さ」を思い知らされていたので、自分をあわれんでくださいと祈っただけであった。それは言ってみれば、自分の“不足”を代わりに補ってくださいとお願いし、御心が行えたと見なしてくださいというようなものである。何という厚かましいお願いか。だが、驚くべきことにこれが「義」と認められる信仰だった。そこでイエスは続けて、**「あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません」**（ルカ 18:14）と言われたのであった。**「パリサイ人の信仰」**は、人の「行い」の能力に依存するので、「行い」ができない人を裁き、自らを高くしてしまい、神の愛に違反していた。それでイエスは、**「なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです」**（ルカ 18:14）と言い、その信仰を認めなかった。

以上が、人から出た**「パリサイ人の信仰」**の特徴であり、「妄想」である。その「妄想」は、人の「行い」に依存する信仰であり、人の価値を「行い」で判断する。では、神から出た**「取税人の信仰」**の特徴を見てみよう。

❖ 「取税人の信仰」

信仰とは、**「聞く」**ことから始まる。**「信仰は聞くことから始まり」**（ローマ 10:17）。ただし、人である「精神」は、対立する二つの声を常に聞いている。一つは、神の「いのち」の部分である「魂」が発信する「神の思い」である。もう一つは、「死」に支配された「体」が発信する「肉の思い」である。**「肉の思いは死であり」**（ローマ 8:6）。そして、先の**「パリサイ人の信仰」**は、死から出た「肉の思い」を聞くことで始まる。それに対し、**「取税人の信仰」**は、神から出た「神の思い」を聞くことで始まる。



つまり、「神の思い」を聞き、それに応答することが**「取税人の信仰」**である。ならば、それはどういうことなのかを説明したい。聖書に、次のことが書かれている。

「彼らはこのようにして、律法の命じる行いが彼らの心に書かれていることを示しています。彼らの良心もいっしょになってあかしし、また、彼らの思いは互いに責め合ったり、また、弁明し合ったりしています。」(ローマ 2:15)

聖書は、神によって「律法の命じる行いが彼らの心に書かれている」と言う。この「律法の命じる行い」とは、誰もが心に持っている「道徳命令」のことであり、神からの「道徳命令」が誰の心にも書かれているということである。その事実を「良心」が証ししていると聖書は言う。したがって、普段人が覚える「良心」は、「神の思い」を発信する「魂」からの声を示す証しであり、誰もが「良心」を介し、「神の思い」を「道徳命令」として聞いているということなのである。

では、神からの「道徳命令」に従うと何が起きるだろう。その命令は「愛せよ」に集約されるが、「愛せよ」を実行すると何が起きるだろう。答えは簡単である。悪魔の仕業で「死」が入り込んで以来、誰もが人を「否定」する「死」の運動に制約されているので、「愛せよ」に従って人を「肯定」しようとすれば、人を「肯定」できない自分に出会う。要は、人を愛せない自分と出会う。人に嫉妬したり、怒りを覚えたりする自分に出会う。それはまさしく、神の命令に従えない罪の下に閉じ込められてしまっている自分である。「すべての人を罪の下に閉じ込めました」(ガラテヤ 3:22)。すると、次の段階が訪れる。

「愛せよ」が実行できない自分と出会っても、心の奥からは「愛せよ」という「神の思い」が聞こえてくるので、「彼らの思いは互いに責め合ったり、また、弁明し合ったりしています」(ローマ 2:15) となり、次第に絶望に追い込まれていく。すると、愛せない自分の無力を補ってほしいと、神に切にあわれみを乞うようになる。それこそが、イエスが譬えで示された、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」(ルカ 18:13) という「取税人の信仰」である。つまり、「取税人の信仰」は、「神の思い」の「道徳命令」を聞くことから始まっている。神から流れ出た「愛せよ」に始まり、その愛の律法が、無力になっている自分に気づかせてくれるので、その無力を肩代わりしてくださるキリストを信じる信仰へと導かれるのである。

「こうして、律法は私たちをキリストへ導くための私たちの養育係となりました。私たちが信仰によって義と認められるためなのです。」(ガラテヤ 3:24)

この「取税人の信仰」は、何々ができるという人の能力によるのではなく、何々ができないという人の無力によって、すなわち人の「弱さ」によって発芽する。それは人の能力に全く依存しない以上、誰でも持つことが可能な「信仰」である。それでイエスは、「取税人の信仰」が人を「義」に導くとされたのであった。「**あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました**」(ルカ 18:14)。これは、神の恵みは、人の「弱さ」のうちに完全に現れることを示している。「**わたしの力は、弱さのうちに完全に現れる**」(Ⅱコリント 12:9)。

そして、ありがたいことに、人を「否定」する「死」の制約が支配する中では、誰もが「弱さ」を持つので、誰もが「神の思い」を聞きさえすれば、救い(義)に必要な「取税人の信仰」を発芽させることができる。これは、誰にでも、救われる機会が等しくあるということである。人はただ、心の奥底で神が「魂」を介して語られる「神の思い」を聞き(潜在意識)、神の命令に従えない自分の罪に気づき、自分の「弱さ」を承認し、神にあわれみを乞えばよいだけである。これが、本書が繰り返し述べてきた、人は神の呼びかけに応答すれば救われるということである。

このように、「取税人の信仰」は「神の思い」を聞くことから始まる。「神の思い」は「愛せよ」に集約されるので、それを聞いて人を愛そうとすれば、愛せない自分の罪に気づき、自分の無力(弱さ)を承認させられ、あの「取税人の信仰」のように、「**神さま。こんな罪人の私をあわれんでください**」(ルカ 18:13)となる。そして、「神の思い」を聞くのは「心」であり、それは「体」を介さないので能力を必要としない。また、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」という「信仰」は「弱さ」を承認することで発芽するため、そこでは「何ができるのか」といった能力を必要としない。ゆえに、これこそが、誰でも持つことが可能な「信仰」となる。

聖書に、「**神は、すべての人が救われて、真理**(キリスト)**を知るようになるのを望んでおられます**」(Ⅰテモテ 2:4 ※(　)は筆者が意味を補足)とあるが、確かに「取税人の信仰」で救われるのであれば、すべての人に等しく救われる機会がある。その「取税人の信仰」の特徴は、まさに人の能力には依存しないということにある。以上のように、信仰には二種類あることを聖書は教えている。

❖　信仰には二種類ある

信仰には二種類ある。一つは人から出た信仰であり、それは「行い」という人の能力に依存する。もう一つは神から出た信仰であり、それは人の能力ではなく、人の「弱

さ」に依存する。前者の信仰は人を救いに導かない**偽物**、すなわち「妄想」であり、後者の信仰は人を救いに導く**本物**の「信仰」である。それで、イエスは言われた。

> 「わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。」
> （マタイ 7:21）

ここでイエスは、「**主よ、主よ**」と言う信仰には、**本物**と**偽物**とがあり、**本物**は、「**父のみこころを行う**」ことであると言われた。ならば、「**みこころ**」とは何か。それは、神が「魂」を介して語っておられる「**愛せよ**」という神の思いである。それを行うと、それができない「罪」に必ず出会い、「弱さ」の承認へと向かう。そうすれば、神にあわれみを乞う信仰が発芽するので、これが「**父のみこころを行う**」ことで生まれる**本物**の信仰である。その信仰で天の御国に入れる。そうなると、「罪」に出会えない信仰は**偽物**であり、「妄想」ということになるので、聖書は次のように教えている。

> 「もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のみことばは私たちのうちにありません。」（Ⅰヨハネ 1:10）

このことは、「**みこころ**」を実行できない「罪」こそが、すなわち「**苦しみ**」が、神と人との接点であることを示している。

❖ 神と人との接点

病人は「**苦しみ**」を覚えるから医者に助けを乞う。すなわち、病人と医者との接点は「**苦しみ**」にある。同様に、神と人との接点も「**苦しみ**」にある。その「**苦しみ**」は、御心を実行できない「罪」の「罪責感」であり、その「罪」の正体は入り込んだ「死」である。「**死のとげは罪であり**」（Ⅰコリント 15:56）。つまり、罪を行なっているのは私ではなく、私のうちに住み着いている「死」（罪）である。「**それを行っているのは、もはや私ではなく、私のうちに住みついている罪なのです**」（ローマ 7:17）。であれば、「罪人」とは、入り込んだ「死」によって発病した「病人」だと言える。

そこでイエスは、神と「罪人」との関係を、医者と「病人」に譬えられた。「**医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです**」（マルコ 2:17）。医者と「病人」の関係ということは、病人は自分の病気に気づかない限り医者を必要としないように、罪人も自分の罪に気

づかなければ神を必要としないということになる。そうならないために、神は人が自分の罪に気づけるよう、「神の思い」を誰の心にも語られるのである（道徳命令）。それによって、人が自分の罪に気づけるようにし、罪の「**苦しみ**」を認められるようにされる。そして、「**苦しみ**」の重荷をわたしのところに持ってくるようにと言われる。

> 「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（マタイ 11:28）

こうして、神は人の「**苦しみ**」を、神と人との接点とされた。人の「**苦しみ**」を神が担い、人を休ませることにされた。しかし、この世界では、何ができるかで人は評価され、その評価が人と関わる接点となる。そのため、人は神との接点は良い「行い」であると思ってしまう。神の律法をどれだけ実行できたかで、神との接点が持てると思ってしまう。だが、それは「**パリサイ人の信仰**」であり、「妄想」にすぎない。

このように、神と人との接点は「**苦しみ**」であり、それは「罪」である。喩えるなら、それは足に付いた泥である。イエスは、このことを弟子たちに教えるために、彼らの足の泥を洗われた。ところが、ペテロがそれを拒むと、イエスは次のように言われた。

> 「ペテロはイエスに言った。「決して私の足をお洗いにならないでください。」イエスは答えられた。「もしわたしが洗わなければ、あなたはわたしと何の関係もありません。」」（ヨハネ 13:8）

ここでイエスは、「**もしわたしが洗わなければ、あなたはわたしと何の関係もありません**」と言うことで、神と人との接点は「罪」にあることを教えられたのである。

以上が、「信仰」と「妄想」の特徴である。救いに必要な「信仰」は、神から出たものであり、人を救わない信仰は、人から出た「妄想」である。神から出たものは「**取税人の信仰**」であり、それは「罪」を神との接点とする。人から出たものは「**パリサイ人の信仰**」であり、それは「行い」を、すなわち能力を神との接点とする。ゆえに、律法の「行い」によって、神からの「義」が受け取れると信じる。しかし、これは「妄想」なので、神は「妄想」と戦われるのである。その戦いが、次項の話である。

－神は「妄想」と戦われる－

神と人を「分離」する「死」が入り込んで以来、人は自分の土台である神を認識できなくなり、認識できるのは、自分の「うわべ」(裸) だけとなった。「**このようにして、ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った**」(創世記 3:7)。そうなると、人は自分の価値を自分の「うわべ」で判断するしかない。ここに、人の価値は「行い」にあるとする「人間的な標準」が生まれ、それに伴い「**罪には罰**」という標準も生まれた。こうした標準から、「**何々をすれば、神からの報酬がある**」、「**何々をすれば、神からの罰がある**」という信仰の定式が生まれた。その結果、人は自分の「行い」によって、神からの「義」の報酬を手にするようになった。すると、そこから様々な「行い」の規定が生まれた。例えば、「**すがるな。味わうな。さわるな**」といった規定である。こうした規定を守れば神からの「義」を報酬として受け取れる、これが「**パリサイ人の信仰**」であり、人から出た信仰であった。しかし、それは「妄想」にすぎない。ゆえに、聖書は次のように教えている。

> 「もしあなたがたが、キリストとともに死んで、この世の幼稚な教えから離れたのなら、どうして、まだこの世の生き方をしているかのように、「すがるな。味わうな。さわるな」というような定めに縛られるのですか。そのようなものはすべて、用いれば滅びるものについてであって、人間の戒めと教えによるものです。」(コロサイ 2:20-22)

そこで、イエスは「妄想」と戦われた。ここでは、その戦いを具体的に見ていく。最初は、キリスト者が「**パリサイ人の信仰**」に汚染される話からである。

❖ 「パリサイ人の信仰」に汚染される

「潜在意識」で「神の思い」を聞き、それに従おうとすれば、人は従えない自分の罪に出会う。それでも「神の思い」を聞くなら、自分の罪に絶望し、「**神さま。こんな罪人の私をあわれんでください**」(ルカ 18:13) となり、「**取税人の信仰**」が発芽する。人はこの「信仰」で救われ、「死人」から生きる者になる。イエスは、この一連の流れを「死人」が神の子の声を聞き、それに応答することで生きる者になると言われた。

> 「まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。」(ヨハネ 5:25)

生きる者になるとは、「永遠のいのち」を持つ者になるということである。ここまでの神とのやり取りは「潜在意識」が担当するので、「永遠のいのち」を持っても自覚がない。そして、「永遠のいのち」を持つと、人はキリストについての御言葉を聞くことでイエス・キリストを知るようになる。「**永遠のいのちとは（中略）イエス・キリストを知ることです**」（ヨハネ 17:3）。イエス・キリストを知るのは「潜在意識」ではなく、「顕在意識」である。ところが、その「顕在意識」を支配しているのは「**パリサイ人の信仰**」なので、キリストを知っても次第に「**パリサイ人の信仰**」の「妄想」に汚染されてしまう。それは、次のようにして汚染される。

「**パリサイ人の信仰**」は人の価値を「行い」で判断するので、「**罪には罰**」を信じる。それが「顕在意識」を支配しているので、イエス・キリストを信じられるようになると、気づかないうちに自分の「行い」を見るようになり、本当に天国に行けるのかと「不安」になってしまう。自分は未だに罪を犯すので、必ず罰を受けると思ってしまい、天国に行けるのかと「不安」になる。そこで、自分が救われていることの確認を、律法の「行い」でしようとする。しかし、聖書は、これに警告を発している。

> 「あなたがたはどこまで道理がわからないのですか。御霊で始まったあなたがたが、いま肉によって完成されるというのですか。」（ガラテヤ 3:3）

なぜ警告するかというと、イエス・キリストを信じている者は「霊の体」が着せられていて、「永遠のいのち」を持っているからである。「**まことに、まことに、あなたがたに言います。信じる者は永遠のいのちを持っています**」（ヨハネ 6:47　新改訳 2017）。それは、確実に天国に行けるということであり、もう救われているということである。このことの確認は、「信仰」でしかできない。だが、気づかぬうちに「**パリサイ人の信仰**」の「妄想」に汚染され、それを律法の「行い」で確認しようとするのである。つまり、「**取税人の信仰**」は発芽してお終いではなく、その「信仰」は引き続き、救われたこの事実を確認するのにも使う必要があるということである。「**信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです**」（ヘブル 11:1　新共同訳）。

このように、キリスト者は気づかぬうちに「**パリサイ人の信仰**」に汚染され、自分の罪を見ると罰を連想し、天国には行けないと思ってしまう。そして、天国に行けることの保証を、肉によって達成しようとしてしまう。しかし、天国に行けることの保証は、「**まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死から**

いのちに移っているのです（**現在完了形**）」（ヨハネ 5:24）と言われたイエスの言葉である。このイエスの言葉は、「信仰」で確認できる。そこでイエスは、「**パリサイ人の信仰**」を象徴する、「**罪には罰**」という「妄想」と戦われたのであった。

❖ 「罪には罰」という「妄想」と戦われた

イエスは、「**罪には罰**」という「**パリサイ人の信仰**」は「妄想」にすぎないことを教えるために、次のように言われた。

> 「だれかが、わたしの言うことを聞いてそれを守らなくても、わたしはその人をさばきません。わたしは世をさばくために来たのではなく、世を救うために来たからです。」（ヨハネ 12:47）

イエスはここで、「**人をさばきません**」と宣言することで、「**罪には罰**」という「妄想」と戦われたのである。その戦いの仕上げが、人の罪のために十字架に架かることであった。そうであるからこそ、次のような出来事があった。それは、目が見えない人と出会ったときの出来事である。その時、弟子たちは、「**先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか**」（ヨハネ 9:2）と質問したので、イエスは次のように答えられた。

> 「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現れるためです。」（ヨハネ 9:3）

ここでイエスは、「**罪には罰**」という「妄想」を完全否定されたのである。それだけではない。人が「**取税人の信仰**」で救われ、神から「永遠のいのち」が与えられたのなら、その者は決して滅びることがないことも、イエスは教えられた。

> 「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。」
>
> （ヨハネ 10:28）

この言葉を信じることができれば、自分の「行い」を見て、本当に天国に行けるのかと「不安」になることもない。とはいえ、この言葉を信じるには、神から出た「**取税人の信仰**」を成長させなければならない。それには、神の前で罪を言い表し、罪が無条件で赦される体験を積み重ねる必要がある。多くの罪が赦されると、神への愛が大

きくなり、「多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさで分かる」（ルカ 7:47　新共同訳）、神の言葉を信じる「信仰」が強くなっていく。すると、「彼らは決して滅びることがなく」というイエスの言葉を、心から信じられるようになる。

このように、人はイエス・キリストを知るようになっても、「何々をすれば、神からの報酬がある」という「妄想」に汚染され、「行い」によって天国に行けるかどうかを判断するようになる。それでイエスは、「罪には罰」という「妄想」と戦われたのである。これは言ってみれば、「妄想」を支えていた律法と戦うことでもあった。

❖　律法と戦う

信仰には二種類あるので、それに対応した律法（規定）も二種類ある。一つは、「何々をすれば、神からの報酬がある」という「妄想」から生まれた「行い」の規定であり、これを「罪の律法」という。もう一つは、人を神に導くために神から出た規定であり、これを「神の律法」という。人は、この二つの律法に仕えている。「ですから、この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです」（ローマ 7:25）。そこでキリストは、「妄想」が生み出した「罪の律法」と戦われた。それは「行い」に関係なく、人の罪を無条件で赦すことで戦われた。それにより、キリストが「罪の律法」を終わらせたので、「行い」に関係なく、信じる人はみな「義」と認められるのである。

> 「キリストが律法を終わらせられたので、信じる人はみな義と認められるのです。」（ローマ 10:4）

キリストが律法を終わらせたおかげで、「罪の律法」の奴隷として生きる「奴隷の信仰」は終わり、自由が戻った。「キリストは、自由を得させるために、私たちを解放してくださいました」（ガラテヤ 5:1）。

このように、「妄想」との戦いは「罪の律法」との戦いでもある。そして、この「妄想」の起源は、悪魔の仕業による「死」にあるので、「妄想」との戦いは「死」を滅ぼすことでもある（本書 113 頁「「律法」への勘違いを是正する」）。

❖　「死」を滅ぼす

「妄想」の起源は、悪魔の仕業で入り込んだ「死」にある。「死をつかさどる者、つまり悪魔を」（ヘブル 2:14　新共同訳）。「死」が永遠の神と人とを「分離」したので、人は永遠には生きられなくなり、最後は土に帰ることになった。「ついに、あなたは土

に帰る」(創世記 3:19)。すると、やがて訪れる死の運命を、人は「罰」として受け止めるようになり、ここに「**罪には罰**」という「人間的な標準」が生まれることになった。何か災いに遭う度に、「**日頃の行いが悪いから、罰が当たった**」となり、何か良い出来事に会うと、「**日頃の行いが良いから、祝福された**」と思うようになった。こうして、「**何々をすれば、神からの報酬がある**」という「妄想」が、人の標準の信仰になった。全ては、「死」が入り込んだことによったのである。

ということは、「妄想」との戦いは「死」を滅ぼすことがゴールとなる。それゆえ、キリストは十字架で「死」を滅ぼされた。「**キリストは死を滅ぼし**」(Ⅱテモテ 1:10)。人は「死」を背負うようになったことで「妄想」に支配されたので、神は「死」を滅ぼされた。神は人と同じ「死」を背負って現れ、ご自分の十字架の死を以て、悪魔の仕業である「死」を滅ぼされたのである。その証しが「復活」であり、全ては一生涯「死の恐怖」の奴隷となった人々を、すなわち「妄想」に惑わされていた人々を解放するためであった。

> 「そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。」(ヘブル 2:14-15)

このように、「妄想」の起源は「死」にあるので、神は十字架で「死」を滅ぼされた。そして、「死」によって生まれた「妄想」が人を苦しめる「罪」となったので、「**死のとげは罪であり**」(Ⅰコリント 15:56)、「妄想」との戦いは「罪」との戦いであった。それはそのまま、「**罪には罰**」を信じ、「**罪にはあわれみ**」を教える神の言葉を信じない「不信仰」との戦いであった。「死」によって生まれた「偽りの情報」を、それは正しいと信じてしまう「不信仰」との戦いであった。

こうして、神は人の「妄想」と徹底的に戦われたのである。人の能力、すなわち人の「行い」に依存する、人から出た信仰と戦われた。なぜなら、そこには救いがないからである。人を救いに導く「信仰」は神から出ていて、誰もがその「信仰」の種を持っているからである。そして、その種を発芽させるのに必要なのが、自分の「弱さ」の承認である。そこで次に、神からの「信仰」について詳しく見てみたい。

－神からの「信仰」－

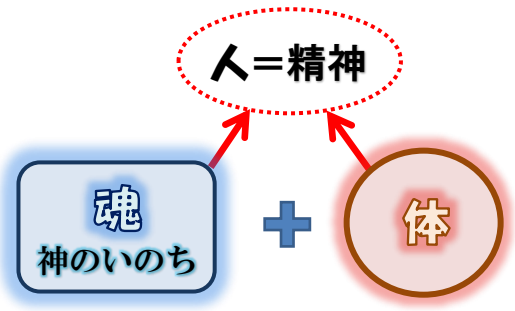
聖書に、「神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます」（Ｉテモテ 2:4）とある。この教えは、当然のことながら、すべての人が救われる機会を平等に有していることが前提となる。そして聖書は、人が救われるには「信仰」が必要だとする。「信仰が義とみなされる」（ローマ 4:5）。そうなると、その「信仰」は、すべての人にとって持つことが**可能なもの**でなければならない。その「信仰」を持つことは、人の能力に全く依存してはならない。であれば、その「信仰」は、神からの賜物でなければならないので、聖書は次のように教えている。

> 「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。」（エペソ 2:8）

このように、救いに必要な「信仰」は神からの「賜物」である。それがすべての人に差し出されているのであれば、あとは受け取るか受け取らないかの選択となる。そうであれば、「信仰」は能力に依存しないので、すべての人にとって持つことが**可能なもの**になる。これを、「信仰」による神の救いの計画という。「信仰による神の救いのご計画」（Ｉテモテ 1:4）。すなわち、神はすべての人に、救いに必要な「信仰」を差し出しておられるということである（賜物）。平たく言えば、救いに必要な「信仰」の**種**を蒔いておられる。ここでは、その「信仰」について見ていく。最初は、「人の造り」の復習からである。

❖ 「人の造り」の復習

人とは「体」が収集する情報を認識し、思考する「精神」である。認識と思考が可能なのは、神の「いのち」に支えられているからである。その神の「いのち」の宿る場所が「魂」であり、「神の思い」を発信する。そのおかげで、「体」が持ち込む情報を「神の思い」によって認識でき、「神の思い」を目指して思考ができる。このときの意識の総合が「精神」であり、それが人である（第一巻 30 頁「－「人の造り」－」）。



そうであれば、すべての人が「神の思い」を心の奥底で聞いていることになるので、すべての人はそれに応答することができる。この応答が「信仰」である。つまり、神からの呼びかけが救いに必要な「信仰」の**種**で、それに応答することで**種**が発芽し、「信仰」になる。まさに救いに必要な「信仰」は、「神の思い」を聞くことから始まる。「**信仰は聞くことから始まり**」（ローマ 10:17）。この「神の思い」は、誰もが初めから無償で与えられているので、それに基づく「信仰」を神からの賜物という。

このように、「人の造り」が分かれば、神からの賜物としての「信仰」の姿が浮き彫りになる。それは、「魂」から発信される「神の思い」である。その思いは「**愛せよ**」に集約されるので、人は人を愛する選択をすれば、立ち所に愛せない自分と出会い、自分の罪に気づく。そうすれば、「**愛せよ**」と命じる「神の思い」に責められるので、その罪を何とかしてほしいと神にあわれみを乞う選択を迫られる。それは、自分の「無力」の承認である。

それだけではない。「神の思い」を発信する「魂」は神の「いのち」の枝であり、それが人の土台であるため、人は神と生きる者として規定されている。「**わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です**」（ヨハネ 15:5）。しかし、入り込んだ「死」によって生きることができなくなったので、「魂」による「神の思い」は「**生きよ**」と命じ、生きられなくなった「無力」の承認も迫ってくる。こうして、「神の思い」は罪と生の両面から、「無力」の承認を迫ってくる。どちらからでもよいので、自分の「無力」を承認できれば「**取税人の信仰**」が発芽し救われる。これが能力に依存しない、誰でも持つことが可能な「信仰」である。では、この救われるまでの話をしたい。

❖ 救われるまでの話

「人の造り」を知れば、誰であれ「神の思い」を心の奥底で聞いていることが分かる。それは、神の命令が心に書かれているということである。その命令は「**愛せよ**」なので、イエスは、「**先生。律法の中で、たいせつな戒めはどれですか**」（マタイ 22:36）と聞かれると、次のように答えられた。

> 「『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』これがたいせつな第一の戒めです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。律法全体と預言者とが、この二つの戒めにかかっているのです。」（マタイ 22:37-40）

この「**愛せよ**」という戒めが、人を支え動かしている。それは、人を「肯定」せよということである。ところが、この世界は、人を「否定」する「死」の運動に支配されているので、人を「肯定」する「**愛せよ**」を実行しようとすると、途端に「死」の運動に邪魔され、「**愛せよ**」を完全には実行できない自分の「不足」に出会ってしまう。それでも、「**愛せよ**」という神からの呼びかけに応答しようとすれば、「**苦しみ**」を覚え、どうしても自分の「不足」を補ってほしいという願いが起き、神にあわれみを乞う選択に迫られる。その選択ができれば、その人は救われる。

それだけではない。誰であれ、神の「いのち」が土台であるため、同時に「**生きよ**」という命令も聞いている。そうなると、生きられない自分の状態を見ると恐怖に襲われる。この生きられない状態こそが「罪」であり、それは入り込んだ「死」によってもたらされた。「**死のとげは罪**」（Ⅰコリント 15:56）。そして、生きられない恐怖からは、生きられない自分の「不足」を補ってほしいという願いが起き、神にあわれみを乞う選択に迫られる。その選択ができれば、その人は救われる。

ただし、「**パリサイ人の信仰**」は、心の奥底で聞く「神の思い」である「**愛せよ**」、「**生きよ**」に対し、従うふりだけをするので自分の「不足」に出会うことがない。従うふりをするので、自分は人を愛せる立派な人であるかのように振る舞い、それによって人からの賞賛を得、生きられない恐怖を覆い隠してしまう。そして、自分は立派なので、天国に行けると思い込む。確かに、パリサイ人の外側は立派で、美しく見えた。だが、その内側は「神の思い」ではなく、「肉の思い」に従っていたので、あらゆる汚れたものがいっぱいな墓と同じだった。

> 「わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは白く塗った墓のようなものです。墓はその外側は美しく見えても、内側は、死人の骨や、あらゆる汚れたものがいっぱいです。」（マタイ 23:27）

これが「**パリサイ人の信仰**」であり、人はその外側の美しさに惑わされ、その生き方を真似してしまう。しかし、この信仰は人を救いには導かないので、これを「妄想」という。救いに導くのは、自分の「不足」に出会い、神にあわれみを乞う「**取税人の信仰**」である。以上が、救われるまでの話となる。

このように、「**愛せよ**」、「**生きよ**」という「神の思い」に従おうとすることが、救いに必要な「信仰」につながる。「神の思い」を聞くことが自分の「不足」に気づかせ、神に助けを乞う、救いに必要な「信仰」に導いてくれる。その「信仰」は、人の能力にではなく、人の「不足」に依存するので、これであれば、誰でも持つことが可能な「信仰」である。なぜなら、誰もが「不足」を持っているからである。それゆえ、聖書は次のように教えている。「**神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます**」（Ⅰテモテ 2:4）。そして、救われたなら、その人は自分の「不足」を補ってくださる「**助け主**」を持つようになるので、もはや「**別人**」である。

❖ 「別人」である

見てきたように、人は「神の思い」に応答すると自分の「不足」に気づくようになる。これを、救いに必要な「信仰」の**種**が蒔かれ、それに応答することで、**種**が**発芽する**という。そして、「不足」に気づけば、神に助けを乞うことが可能になり、神に助けを乞う「信仰」で救われる。これを、発芽した**種**が**実を結ぶ**という。**種**が**実を結ぶ**というのは、神が人の「不足」を補うために、自らが「**助け主**」となってくださるということであり、「**父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります**」（ヨハネ 14:16）、神が人の「不足」を肩代わりし、弁護してくださるということである。こうして、人には「**弁護者**」が付き、四六時中、対応をしてくださることになる。この「**弁護者**」がイエス・キリストであり、その方は聖霊（**助け主**）と共に人の「不足」を肩代わりし、人が罪を犯さないように助けてくださる。

> 「わたしの子たちよ、これらのことを書くのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。たとえ罪を犯しても、御父のもとに弁護者、正しい方、イエス・キリストがおられます。」（Ⅰヨハネ 2:1　新共同訳）

したがって、救われた者は「不足」があっても（罪人であっても）、「**弁護者**」が付くので、もう「**別人**」である（義人である）。この出来事を、「**新しく造られた者**」という。「**だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です**」（Ⅱコリント 5:17）。それは、自分の本質が新しくされたということではなく、自分は以前のまま罪人であっても、イエス・キリストという「**弁護者**」が付いたということである。そういう意味で、その人は「**別人**」である。罪人であっても、「**弁護者**」によって、もう義人という扱いになるからである。

これが分からないと、自分は「**新しく造られた者**」であって、もう罪人ではないからと、自分の肉の力だけで罪を処理するようになる。そのようにして、新しくなった自分を肉の力で証しするようになる。そうなると、パリサイ人のように自らを誇るようになり、他の者を裁くようになる。ゆえに聖書は、「**あなたがたはどこまで道理がわからないのですか。御霊で始まったあなたがたが、いま肉によって完成されるというのですか**」（ガラテヤ 3:3）と警告する。

つまり、こういうことである。神からの「信仰」は私たちを「**別人**」にしてしまうが、それは悪いことをしなくなるように造り変えられるということではない。その生き方は古いままであっても、「**弁護者**」が付くということである。それゆえ、「**愛せよ**」を実行することで、今度からは安心して自分の「不足」の罪に気づくことができる。罪に気づけば、安心して神に助けを乞うことができる。なぜなら、助けを乞う神は 100％味方になってくれる「**弁護者**」だからである。ゆえに、そこでは罪が赦される体験をし、それが神への愛を創造し、神との距離を縮ませてくれる。それに伴い「不安」も弱くなり、見える安心をむさぼる罪も犯さなくなっていく。そして、私たちの最大の「不足」であった「死の体」も「**弁護者**」は補い、「霊の体」で復活させてくださっている。「**「霊の体」が復活させられている**（現在形）」（Ⅰコリント 15:44　私訳）。

このように、神から出た「信仰」には、神ご自身が「**弁護者**」となって付いてくださる。そのおかげで、自分の「不足」、すなわち御心が行えない自分の罪と、これからは安心して向き合えるようになる。それは、自分の「行い」で、自分の罪を覆い隠そうとする必要がなくなったということであり、これが「**新しく造られた者**」の中身である。それはもう、以前の自分とは全く異なる「**別人**」にほかならない。こうして、神から出た「信仰」は人を「**別人**」にし、神との関係を豊かにしていく。

❖　神との関係を豊かにしていく

信仰には、神から出た「信仰」と、人から出た信仰（妄想）がある。神から出た「信仰」は、神と人とを出会わせ、人を神と結合させる救いに導き、さらには結合させた神との関係を豊かにしていく。それは、人に「永遠のいのち」を得させ、その「いのち」を豊かにしていくということである。「**わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです**」（ヨハネ 10:10）。これは、神から出た「信仰」は成長するということであり、「信仰」によって救いが与えられ、その救いの確かさを「信仰」によって確認できるようにするということである。

こうした「信仰」の流れを水の流れに喩えるなら、人の心に神からの「愛の水」が、「永遠のいのち」に向かって流れているということである。それゆえ、神からの「愛の水」を飲むなら、その者は「永遠のいのち」を得、さらにはその「いのち」が豊かになっていき、「永遠のいのち」を持っていることが自覚できるようになる。そこでイエスは、神から出た「信仰」を次のように喩えられた。

> 「しかし、わたしが与える水(愛の水)を飲む者はだれでも、決して渇くことがありません。わたしが与える水(愛の水)は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。」(ヨハネ 4:14)　※(　)は筆者が意味を補足

「わたしが与える水(愛の水)を飲む者」が救われるということは、「愛の水」を飲まない者は、すなわち人を愛そうとしない者は、神と出会えないということになる。それで聖書に、「目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません」(Ⅰヨハネ 4:20)と書かれている。では、人を愛そうとしない者はなぜ神と出会えないのか。それは、人を愛そうとしない者は自分の「不足」、すなわち自分の罪に出会えないため、「自分には罪がない」となり、罪を贖う神とは接点を持てなくなってしまうからである。「もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のみことばは私たちのうちにありません」(Ⅰヨハネ 1:10)

このように、人が神と出会えるのは、あくまでも神から流れ出ている「愛」に従うからである。「愛せよ」という「道徳命令」に従って、人を愛そうとするからである。愛そうと努力するから、自分の限界に気づくことができ、人を愛せない自分の罪とも出会える。御心に向かって努力するから、それができない自分の「不足」にも気づくことができ、「不足」を補ってくださる方を求めるようになる。そのことで、神との関係は豊かになっていく。つまり、「愛せよ」に従う「行い」の中に神との出会いがあり(救い)、神への信頼を増し加えていく「平安」があるということである。「愛せよ」に従う「行い」の中に「信仰」の始まりがあり、「信仰」の成長があるということである。したがって、人を愛する「行い」がなければ、「信仰」は死んだものになる。

> 「たましいを離れたからだが、死んだものであるのと同様に、行いのない信仰は、死んでいるのです。」(ヤコブ 2:26)

ここでの「行い」の目的は、御心が行えるようになることにあるのではなく、あくまでも、御心が行えない自分に気づくことにある。自分の「不足」に気づき、それを承

認することにある。あくまでも、「行い」を命じた「律法」の目的は、それができない違反を示すためであって、自分の「不足」に気づかせるためである。

> 「では、律法とは何でしょうか。それは約束をお受けになった、この子孫が来られるときまで、違反を示すためにつけ加えられたもので、御使いたちを通して仲介者の手で定められたのです。」（ガラテヤ 3:19）

自分の違反（不足）が分かれば、それを補ってほしいとなり、キリストへの「信仰」が生じるようになる。「**こうして、律法は私たちをキリストへ導くための私たちの養育係となりました**」（ガラテヤ 3:24）。しかし、「**パリサイ人の信仰**」にとって「律法」は、自分を高くするための道具であるため、彼らは自分の「不足」を認めようとはしない。ひたすら「律法」の規定で自分と他者とを比べ、どれだけ自分が優れているかを目指す。そして、この「**愛せよ**」という神の「道徳命令」に従う「行い」は、そのまま「死の恐怖」と向き合うことを意味する。

❖ 「死の恐怖」と向き合う

人を救いに導く神からの「信仰」は、神の「いのち」の部分となる「魂」から出ている。それは、「**愛せよ**」という「道徳命令」として現れる。したがって、誰もが「道徳命令」を聞き、この神の呼びかけに応答できる。ここに、神の呼びかけに応答する「信仰」の仕組みがある。カントはこの「信仰」の仕組みを「道徳信仰」と呼び、神から出ている「**愛せよ**」という「道徳命令」は誰もが理性で知り得るので、「理性信仰」とも呼んだ（『実践理性批判』、『たんなる理性の限界内の宗教』）。このように、道徳の「行い」と「信仰」とはセットである。そして、「道徳命令」を実行することで、実は「死の恐怖」と向き合うことになる。なぜそうなのかを説明したい。

「**愛せよ**」は、人を「肯定」する運動である。その運動を実行しようとすればどうなるだろう。この世界は人を「否定」する運動、すなわち「死」が支配しているので、人を「肯定」しようものなら、立ち所に「否定」の運動である「死」が自分に襲いかかってくる。例えば、人を「肯定」する究極の言葉は、「**あなたは死なない！**」である。しかし、そのようなことを人に言えば、おかしな人だと思われる。そして、自分自身の中にも、本当に生きられるのかという疑問が湧いてくる。それはなぜか。この世界には永遠などないからである。誰もが死ぬ以上、人を「肯定」すればするだけ、その人は「死の恐怖」と向き合うことになってしまう。よって、「死の恐怖」に怯えている者は、本人が気づかないだけで、実は「**愛せよ**」という「道徳命令」に応答しようと

している。つまり、「死の恐怖」と向き合うことが、そのまま人を愛する（肯定する）ことであって、御心を行うことになる。

正確に言えば、誰であれ神の「いのち」が、すなわち「神の子」が土台なので、「**土台とはイエス・キリストです**」（Ⅰコリント 3:11）、「**生きよ**」という命令を聞いている。「**死人が神の子の声を聞く**」（ヨハネ 5:25）。そのため、生きられない自分の状態を見ると「死の恐怖」に襲われる。その「死の恐怖」が、人を愛することで（人を肯定することで）力を増すのである。ならば、「死の恐怖」と向き合えば何が起きるだろう。

それは、人を「肯定」できるようになる「**愛の水**」への渇きが起きる。渇きが起きれば、それを飲むようになる。これが「信仰」である。こうして、「**愛せよ**」という神の「道徳命令」に従う「行い」が、今度は神にあわれみを乞う「信仰」になり、人を救いへと導く。しかし、人は「死の恐怖」と向き合おうとはしない。「死の恐怖」を「快楽」や「娯楽」で、あるいは周りからの「賞賛」や見える「富」で覆い隠し、そして、「**たましいよ。これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ、安心して、食べて、飲んで、楽しめ**」（ルカ 12:19）と言って、「死の恐怖」の現実から目を背けてしまう。それは、「**愛せよ**」という、人を「肯定」する運動に従うのをやめ、人を「否定」する「死」の運動に身をゆだねるということであり、人から出た信仰（妄想）に身を置くということである。

このように、「**愛せよ**」という「道徳命令」に応答することは、「死の恐怖」と向き合うことを意味する。「道徳命令」は人の存在を「肯定」するので、それに従えば、そのまま人の存在を「否定」する「死」の運動に立ち向かうことになり、「死の恐怖」に襲われることになる。その「死の恐怖」は、「**愛せよ**」が実行できない罪と合体し、今度は「罪責感」となって人を責め立ててくる。しかし、「死の恐怖」を覚える中、「罪責感」に責め立てられることが、救いに必要な「信仰」を発芽させる。それが「**永遠のいのちへの水**」（ヨハネ 4:14）への渇きを起こさせ、「**愛の水**」を飲む選択に導いてくれる。この選択が、神にあわれみを乞う「信仰」であり、この「信仰」で人は救われる。さらに言えば、「**愛の水**」を飲むのは「**ただ**」なので、人が救われる「信仰」は、人の能力には全く依存しない。「**いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい**」（黙示録 22:17）。ゆえに、この「信仰」は誰でも持つことが可能である。

そして、人は「死の体」を所持しているので、それを脱ぎ捨てるまでは「死の恐怖」が、神の呼びかけ「**愛せよ**」に応答する度に顔を覗かせてくる。それは「罪責感」と

して現れ、人の心を責め立ててくる。だが、その度に神にあわれみを乞うことで、発芽した「信仰」は成長し、「永遠のいのち」を持っている事実を確認できるようになる。これが神からの、人を救いに導く「信仰」である。以上の話が分かれば、人が抱く疑問は解決する。

❖ 疑問は解決する

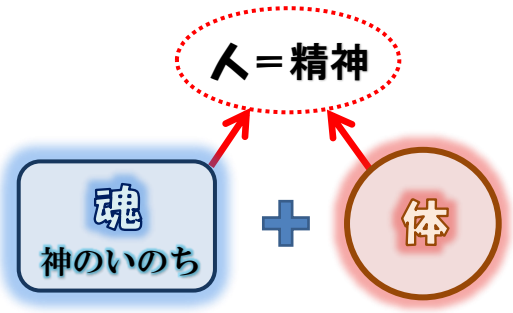
私が小学生の頃、人が救われて天国に行くには、イエス・キリストを信じなければならないと教えられた。しかし、その教えを聞いて、次から次に疑問が湧いてきた。「イエス・キリストのことを聞いたことのない人は誰も、誰も天国に行けないのか？」「ならば、日本にキリスト教が伝来する以前の日本人は、誰も救われなかったのか？」「イエス・キリストが来られたのは約 2000 年ほど前なので、それ以前の人も誰も救われなかったということなのか？」私は、素直に疑問を抱いた。イエス・キリストを信じる信仰を告白する「行い」がなければ、神からの報酬（救い）が得られないとなれば、人の救いは信仰の告白ができる能力に依存することになり、イエス・キリストのことを聞いたことのない人、聞いても言葉を理解できない人、そうした人たちは誰も救われないことになってしまう。これでは不公平ではないかと、疑問を持ったのである。

では、なぜイエス・キリストを信じる信仰を持たなければ救われないと教えるのだろう。それは、人から出た信仰の定式は、「何々をすれば、神からの報酬がある」なので、無意識にその定式で、救いに必要な信仰を見てしまうからである。しかし、いつの時代も、私と同じような疑問を抱く者たちがいて、彼らは様々なアイディアを出し、そうした疑問を解決しようとしてきた。だが、どの解決も聖書的ではなかった。それは当然である。そうしたアイディアも、「何々をすれば、神からの報酬がある」とする、人から出た信仰の定式を基に構築されたものだからである。

例えば、信仰告白がないまま死んでも、死んでから一生懸命良いことをすれば救われるとするアイディアがあるが、これは救いに必要な信仰を、良い行いができるという、人の能力に依存するものである。しかし、見てきたように、聖書には人の能力に依存しない、神からの「信仰」による救いが書かれている。ゆえに、その「信仰」のことが分かれば、救いの疑問自体が払拭される。では、神からの「信仰」とは何か。

人の土台は神の「いのち」であり、それは「魂」と呼ばれ、人である「精神」を直接支えている。そのため、人は「体」を介さずに神の声を聞くことができる。「体」を介

さないので、人の能力には一切依存せずに神の声を聞くことができる。このようにして生じる意識を「潜在意識」と呼び、「体」を介して生じる意識を「顕在意識」という。



つまり、誰もが神の呼びかけを「潜在意識」で聞いているので、この呼びかけに従うなら、人は自分の「不足」に出会い、「不足」を補ってほしいという叫びが生じる。その叫びが、神の呼びかけに対する応答であり、これが人の能力には全く依存しない、人を救う「信仰」である。その「信仰」は、神の呼びかけから始まったので、これを神から出た「信仰」という。イエスは「信仰」によって救われるこの仕組みを、「死人」が神の声を聞き、それに応答すれば、人は「生きる者」になれると言われたのである。

> 「まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。」（ヨハネ 5:25）

聖書は、こうした救いの流れを、次のように教えている。

> 「人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。」
> （ローマ 10:10）

「人は心に信じて義と認められ」の「心に信じて」とは、神の呼びかけに「潜在意識」（心）が応答する（信じる）ということであり、「義と認められ」とは、神がその人を正しいと認め、「霊の体」（永遠のいのち）が着せられるということである。そして、「口で告白して救われるのです」とは、「キリストについての御言葉」を「体」を介し「顕在意識」として聞き、キリストへの信仰を告白できるようになることで「救いの自覚」に至るということである。したがって、キリストを信じる信仰を告白する者は、すでに「永遠のいのち」を持ち、「死」から「いのち」に移されていることになるので、信じている者は、「死からいのちに移っているのです」（ヨハネ 5:24）とイエスは言われたのである。それは、「永遠のいのち」を持つことで、イエス・キリストへの信仰を

告白できるからである。「**その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです**」（ヨハネ 17:3）。

これが、聖書の教えている救いの流れであって、人を救うのは神の呼びかけである。それは人の「体」を介さないで、神が直接行われるので（心の声）、救いが人の「体」の能力に依存することは全くない。ゆえに、キリストのことを知らない人でも、人の言葉を理解できない障がい者であっても、はたまた幼子であっても、何の差別もなく神の呼びかけに応答することが可能である。そこで聖書に、「**神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます**」（Ｉテモテ 2:4）とある。これが分かれば、救いの心配は無用であることに気づく。救いは全て、差別なく人を愛する神がなさるからである。これによって、救いの疑問は聖書的に解決する。

ならば、私たちは何もしなくてよいのか。そうはいかない。私たちは神が救った人に御言葉を届け、救いの自覚に至らせる働きをする（伝道）。ただし、誰が救われているかは分からないので全世界に出て行き、「**イエス・キリストを信じれば救われます**」という福音を伝える。「**全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい**」（マルコ 16:15）（第一巻 114 頁「「救い」を自覚できるようになるまでの話」）。

このように、救いに必要なのは神からの「信仰」である。それは神の呼びかけから始まり、その呼びかけを誰もが心の奥で聞いている。あとは、その呼びかけに応答するだけである。応答すれば、自分の「不足」に気づくので、それを承認することで、神にあわれみを乞う「**取税人の信仰**」が発芽し、救いに至る。その発芽に必要なのは、人の能力による「行い」ではなく、まさしく人の「不足」を認めることなので、そうであれば、誰でも持つことが可能な「信仰」になる。しかし、救いに必要な信仰を、「**何々をすれば、神からの報酬がある**」という、「**パリサイ人の信仰**」の定式に置換してしまうと、途端に人の救いは人の能力に依存するので、救いへの疑問が噴出してしまうことになる。

以上が、神からの「信仰」の話である。さて、ここまでの話が分かれば、「罪が赦される」ことの中身も知ることができる。人の罪を赦すためにキリストは十字架に架かられたが、その十字架の意味が明らかになる。そこで、見てきた「信仰」の話に関連し、十字架の意味を見ておきたい。

－「十字架」の意味－

キリストは、私たちの「罪」を十字架で背負われた。「**そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました**」（Ⅰペテロ 2:24）。その意味については、昔から様々なことが言われてきたが、その意味を正確に知るには、まず「罪」についての正確な理解が必要になる。それは神と分離した状態であり、神に愛されている自分を認識できない「不安」である。キリストは、この「不安」（罪）を排除するために十字架に架かり、どれだけ本気で神が人を愛しておられるのかを明らかにされたのである。「**キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです**」（Ⅰヨハネ 3:16）。

つまり、キリストは十字架で私たちへの愛を示すことによって、「不安」（罪）をなだめる供え物となられたのである。「**神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました**」（Ⅰヨハネ 4:10）。それゆえ、キリストの十字架の打ち傷で、罪という病気は癒やされる。「**キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです**」（Ⅰペテロ 2:24）。これが、先述した十字架の意味であった（本書 124 頁「キリストの十字架の目的」）。今度はその意味を、神からの「信仰」という視点からも見ておきたい。最初は、キリストの十字架は罪を赦すためであったので、「信仰」の視点から、「罪が赦される」ことの中身を見てみよう。

❖ 「罪が赦される」ことの中身

人の土台は神であり、その土台は「魂」と呼ばれ、そこからは「神の思い」が発信されている。その神は愛なので、発信される「神の思い」は「**愛せよ**」に集約される。人が造られた当初、その「**愛せよ**」は重荷ではなかった。自らの意志で、自由に「**愛せよ**」を実行できた。しかし、悪魔の仕業で「死」が入り込んで以来、人の「体」は「死の体」になり、この世界も「死の世界」になり、その全てが人を「否定」する運動に支配されたため、人を「肯定」する「**愛せよ**」は逆風にさらされ、重荷となった。それでも人を動かしているのは、人の土台の神なので、人はなお人を愛そうとする。そうであっても人を愛することは困難なので、やがて「**愛せよ**」は人を拘束する規定となり、「**ねばならない**」という「律法」になった。

こうして、誰もが「律法」によって人を愛せない自分の罪を意識するようになった。それが「罪責感」である。この「罪責感」は、自分の罪を認めるのか、認めないのかの選択を迫る。罪を認めるとは、「**愛せよ**」に従おうとする選択であり、罪を認めない

とは、従うふりをする選択である。前者の選択は、神を真実な方とし、後者の選択は、神を偽り者とする。「**もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです**」（Ⅰヨハネ 1:10)。では、前者を選択するとどうなるだろう。

「罪責感」から自分の罪を認めれば、自分の「不足」を思い知らされることになる（絶望)。そうなると、「不足」を神に補ってもらい、何としても「**愛せよ**」を達成したいという願いが起き、「**神さま。こんな罪人の私をあわれんでください**」（ルカ 18:13）となる。すると、神が「**弁護者**」となって、その人の「不足」を補ってくださる。神がその人の「代理人」となって「不足」を代行し、あたかもその人が「**愛せよ**」を達成したかのようにしてくださるのである。

ならば、なぜ代行が可能かといえば、神と人とは「一つ」だからである。神がぶどうの木であれば、人は枝なので、「**わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です**」（ヨハネ 15:5)、代行が可能になる。たとえば、右手が動かなくなったとき、同じ体を共有する左手が右手の働きを代行するようなものである。つまり、神と人とは一心同体なので、神は正当に人の代行をすることができるということである。神が人に代わって「不足」を補い、その人を「**正しい者**」、すなわち「義人」としてくださる。これが、「**罪が赦される**」ということの中身である。

このように、「**罪が赦される**」ことの中身は、罪を裁かないという消極的な意味ではなく、人が罪を通して思い知らされる「不足」を、人の本体となる神が代わって達成してくださる、という積極的な意味なのである。言い換えれば、解けなかったテスト問題を、神が代わって解き、100 点にしてくださるということである。その実際が、キリストの十字架であった。キリストは人に代わり、人が達成できなくなった「**愛せよ**」を実行されたからである。このことを「**罪が取り除かれる**」といい、「**罪が白紙になる**」という。したがって、キリストの十字架の意味は次のようになる。

❖ 十字架の意味

十字架の意味については、伝統的な理解から見ておこう。まず、人が犯した罪に対する「罰」を、キリストが十字架で代わりに受けてくださったとする「**代償説**」がある。これは宗教改革（16 世紀）以降に形成された。また、「**代償説**」の土台となったアンセルムス（11 世紀）の「**満足説**」もある。これは神の名誉が人間の罪によって損なわれたため、その損害を「満足」させる必要があったが人間には不可能なので、キリストがそれを代わりに果たしたとする説である。それは神の名誉の回復が中心であった。

しかし、これらの説では、人が罪を犯す姿は何も変わらない。喩えるなら、馬鹿息子がした借金を親が払い、そのことで息子は処罰を免れたというだけで、借金を繰り返す息子の姿は何も変わっていない。いつまで経っても息子は、馬鹿息子のままである。

ちなみに、新改訳聖書には、「もしだれかが罪を犯すことがあれば、私たちには、御父の前で弁護する方がいます。義なるイエス・キリストです」（Ⅰヨハネ 2:1）とあるので、一見すると「代償説」も「満足説」も正しいように思えてしまう。しかし、御父「の前で」の原文は「プロス」［πρός］で、この場合は「～と共に（with）」という意味である。ゆえに、New King James Version は「with the Father」と訳している。つまり、父と子は「一つ」なので、「わたしと父とは一つです」（ヨハネ 10:30）、イエス・キリストは父なる神と共に私たちを弁護してくださるということであり、父なる神を満足させるために弁護するという意味ではない。いずれにしても、「代償説」も「満足説」も、罪人は罪人のままである。これでは、「罪」を取り除くために来られたキリストの福音が片手落ちになる。そこで改めて、十字架の意味を考えてみたい。

神は、人をご自分に似せて造られた。ところが、入り込んだ「死」によって人は罪人になり、神の似姿に損害が生じてしまった。そうなると、「神の福音」は、「神の似姿に生じた損害の修復」となる。その修復に関しては、二つの道しかない。一つは、人を神の似姿に「回復する」道であり、もう一つは、罪人として出した損害（罰）を「賠償する」道である。しかし、後者の道では、人を神の似姿に回復することはできない。というのも、「賠償する」というだけでは、私たちの現状は全く変わらないからである。カントはこのことを、次のように書いている。

> 「「神の似姿に生じた損害の修復」に関しては道は二つしかない。すなわち「回復することによる」か、「賠償することによる」か、すなわち原状の回復をとおしてか補償をとおしてか、そのいずれかである。が、後者は不可能である。なぜなら、そうでなければ、私たちは永遠に堕落したままであろうからである、すなわち罰を受けねばなるまいからである。」（『たんなる理性の限界内の宗教のための準備原稿』A110 「カント全集 10」岩波書店 324 頁）

そしてカントは、「神の似姿に生じた損害の修復」は、「神の似姿を回復することによる」以外にはないとし、それが十字架の意味であるとする。

「それゆえ残るのは「神の似姿を回復することによる」以外には、すなわち、「回復された状態で」新しい生命を生きること以外にはない（中略）道徳的に腐敗した人間の「修復」は、「賠償」（すなわち「相応のもの」によってではなく、「回復」によってのみなされうる。」（『たんなる理性の限界内の宗教のための準備原稿』A110 「カント全集 10」岩波書店 324 頁）

こうしてカントは、「神の似姿に生じた損害の修復」を行なったキリストの十字架は、損害を賠償するものでは決してなかったとした。キリストは人の罪の「罰」を、「代理人として罰を自分の身に引き受けるような仲介者」ではなかったとした。むしろ、「愛せよ」を実行することで気づかされる「不足」を、すなわち人が人を自発的に愛することで生じる苦難（不足）を十字架で補った、とする。それは全て、神と「一体」である人を回復するためであると、カントは言う。

「代理人として罰を自分の身に引き受けるような仲介者によってではない。（中略）彼がそれをなすのは、（彼にあっては罰としてではなく、自発的な献身として起こるような）さまざまな苦難によって、私たちが、よき心術の模範である彼の心術となることで、また彼以外の人々も同じように可能な心術への信仰に入ることで、その心術を彼以外の人々のうちに回復するためにである」（『たんなる理性の限界内の宗教のための準備原稿』A110 「カント全集 10」岩波書店 325 頁）

要するに、こういうことである。キリストの十字架は、人が出した損害の「賠償」ではない。罪の「罰」を代わりに背負ったのではない。そうではなく、人の「不足」を、キリストが父なる神と共に補うためであった。そうでない限り、罪人の回復はあり得ないということである。本書も、全く同感である。

つまり、人の土台は神であり、神と人とは「一体」であるため、神は人の「不足」を自分のものとして補うのである。人はその贖いを受け取れば、回復することができる。喩えるなら、近視の人が眼鏡によって見えない「不足」を補えば見えるようになるのと同じである。眼鏡を掛け、眼鏡と自分とを「一体」にすることで「不足」は補われ、見えないという困難は回復する。実際、神が命じる「愛せよ」は、たとえ自分の敵であっても愛することであり、罪人のためにいのちまで捧げることであったが、そのようなことは「死」に支配された者には到底できないので、その「不足」を代わって実行されたのがキリストの十字架の死である。それは、人にできない「愛せよ」の「不

足」を、代わって行なってくださった神の姿にほかならない。罪人に代わり、いのちまで捧げて「**愛せよ**」を実行された姿である。

> 「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」（ローマ 5:8）

そして、「**愛せよ**」に従うことで人が気づく「不足」は、人を愛せないという罪だけではない。さらに大きな「不足」、「死の体」にも気づいてしまう。というのも、「**愛せよ**」に従えば、すなわち人を「肯定」することに従えば、それを「否定」する運動と向き合うことになり、永遠には生きられない「死の体」の「不足」にも気づいてしまうからである。正確に言えば、生きられない「不足」も、人を愛せない「不足」も一体なので、どちらの「不足」に気づいても同じである。そこでキリストは、人が実行できない「**愛せよ**」の「不足」を代わりに行なっただけではなく、永遠には生きられない「不足」も同時に補ってくださった。それは死を滅ぼすことだったので、キリストは十字架の死で、悪魔の仕業による「死」も滅ぼされた。「**その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし**」（ヘブル 2:14）。その証しが「復活」であり、そのことで、いのちと不滅を明らかに示されたのであった。

> 「それが今、私たちの救い主キリスト・イエスの現れによって明らかにされたのです。キリストは死を滅ぼし、福音によって、いのちと不滅を明らかに示されました。」（Ⅱテモテ 1:10）

まことに「死」の制約から、「**愛せよ**」は、私たちにとっては実行不可能な「律法」ののろいとなったが、キリストが十字架で「死」を滅ぼしたことで、その「律法」ののろいから私たちを贖い出してくださったのである。

> 「キリストは、私たちのためにのろわれたものとなって、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました。」（ガラテヤ 3:13）

このように、十字架の意味は、キリストが人の代わりになり、すなわち「**弁護者**」になり、人の「不足」を補うことにある。人の罰を代わりに背負ったということでは決してない。そもそも、罪は「死」による病気なので、「**死のとげは罪であり**」（Ⅰコリント 15:56）、罪を犯しても罰などない。あるのは「癒やし」である。ならば、どのよ

うに人を「癒やし」、回復させるのか。それは、人は神の部分なので、「**あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です**」（Ⅰコリント 12:27　新共同訳）、神が人の「不足」を補うことで回復させるのである。

もう一度言うが、神はご自分の「いのち」を、人の体に吹き込むことで人を造られたのであって、「**いのちの息を吹き込まれた**」（創世記 2:7）、ゆえに人は神の部分であり、神がぶどうの木であれば、人はその枝である。「**わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です**」（ヨハネ 15:5）。それゆえ、「**愛せよ**」を実行できない自分の罪を認め、さらには永遠には生きられない「死の恐怖」を認め、自分の「不足」を思い知るなら幸いである。その者は、本体の神にあわれみを乞えば、すでにキリストが十字架で私たちの「不足」を代わりに補ってくださっているので、その贖いを受け取ることができるからである。これを「**罪が赦される**」といい、ここに新しい歩みが始まる。

❖　新しい歩みの始まり

私たちは、自分の力で自分の「不足」を何とかしようと頑張ってきた。頑張ることで、神に愛されようとしてきた。しかし、キリストの十字架は、そうした生き方を修了させていたのである。というのも、神の呼びかけに応答し、神にあわれみを求めた時点で、人の「不足」を補うために実行したキリストの十字架の贖いを受け取っているからである。それは、「不足」を持っていた私たちは、キリストとともに十字架で葬られたということであり、それはキリストとともに新しい歩みをするためである。

> 「私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。」
>
> （ローマ 6:4）

これまでは、自分の「不足」を隠すために、周りの人が自分のことをどう思うかと心配して生きてきたが、これからは自分の「不足」を、すなわち自分の「弱さ」を認め、その「弱さ」のうちに働かれるキリストの十字架を見上げて生きていくのである。「**わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである**」（Ⅱコリント 12:9）。これは、私たちの誇りは主イエス・キリストの十字架以外には何もないということであり、私たちに「不足」を生じさせた「世」は無力となり、私たちは「世」に対して死んでしまったということを意味する。

「しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが、決してあってはなりません。この十字架につけられて、世は私に対して死に、私も世に対して死にました。」（ガラテヤ 6:14　新改訳 2017）

つまり、私たちはキリストにつぎ合わされて、キリストの死と同じになっているということである。それゆえ、必ずキリストの復活とも同じようになるということである。

「もし私たちが、キリストにつぎ合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活とも同じようになるからです。」
（ローマ 6:5）

ただし、この事実は信仰でしか確認できない。「信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです」（ヘブル 11:1）。

このように、キリストの十字架の意味は、私たちの罰を代わりに背負ったものでも（**代償説**）、代わりに罰を背負うことで父なる神を満足させたものでもない（**満足説**）。キリストの十字架が私たちの罰を背負ったものなら、私たちは未だに罪人であって、何も回復していないことになる。それは息子の失敗の後始末をする親のようであって、息子はそのまま失敗を繰り返すという消極的な話でしかない。失敗しないようになりたければ、自分で頑張れという話でしかない。いや、キリストの十字架はそのようなものではなく、神が自分の子を回復させるために、ご自分の心臓を息子に移植するという、極めて積極的な話である。それは「賠償」などではなく、人の「不足」を神が自らのいのちで補うことで、人の「回復」を目指すという積極的な話なのである。ゆえに聖書は、キリストの十字架によって、私たちは癒やされることを教えている。

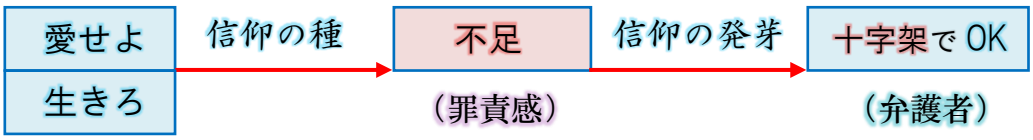
「そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。」（Ⅰペテロ 2:24）

まことに「人間の同情」は、人間が最大限に努力しても、苦しんでいる人と自分を同一にはできないが、「神の同情」は、苦しんでいる人と自らを同一にできる。その証しが十字架なのである。では、「十字架」の意味のまとめをしよう。

❖ 「十字架」の意味のまとめ

「死」が入り込んで以来、人は「**愛せよ**」が実行できない「不足」を**心**に覚え、永遠には生きられないという「不足」を**体**で覚えるようになった。そこで神は、人の**心**と**体**が覚える「不足」を補い、人を神の似姿に「回復」することにした。これが、「神の福音」である。神は、人の「不足」を神が補うために、キリストの十字架を用意された。それゆえ、キリスト者を信じるということは、自分の「不足」を補ったキリストの十字架の贖いを受け取ることであり、新しく造られた者になることなのである。

この「神の福音」は、神が人の心に「**信仰の種**」を蒔くことで始まる。その種は、心に「**愛せよ**」と語り、「**生きよ**」と語る。人は蒔かれた種の声を聞いて、「**愛せよ**」を実行すれば愛せない自分の「不足」を知り（罪責感）、「**生きよ**」を実行すれば永遠には生きられない自分の「不足」を知り（死の恐怖）、神にあわれみを乞う機会が訪れる。その際、あわれみを乞う選択をすれば「**信仰の種**」は発芽し、神からの義を受け取る「**取税人の信仰**」となる。その神からの義は、十字架で人の「不足」を補ってくださった「**弁護者**」、すなわちキリストが十字架の贖いを以て全てを「OK」にしてくださることである。これが、人を回復させる「神の福音」である。



このように、人を回復させて義とする「神の福音」は、神が「**信仰の種**」を蒔かれたことに起源を持つ。その「**信仰の種**」は自分の「不足」に気づかせ、やがて「**取税人の信仰**」となり、人の「不足」を補う「神の福音」を受け取らせてくれる。そして、人の「不足」を補うために、キリストは十字架に架かられたので、「十字架」の意味は、人の「不足」を神が肩代わりされたという積極的な贖いであって、「罰」を肩代わされたという消極的な贖いではない。馬鹿息子がした借金を神が代わりに払い、そのことで馬鹿息子が処罰を免れるという消極的な贖いでは決してない。それでは、馬鹿息子は馬鹿息子のままである。「十字架」の本当の意味は、人は神と一体なので、「**私たちはキリストのからだの部分だからです**」（エペソ 5:30）、神が人の「不足」を補うことで人を回復させるという積極的な贖いである。この事実を知るなら、そこには新しい歩みが始まり、それがクリスチャンの生き方になる。そこで、「信仰」と「妄想」の話は、クリスチャンの生き方の話で締め括りたい。

－クリスチャンの生き方－

一般にクリスチャンは、神の教えに沿って禁止事項のリストを作り、それを自力で達成することで救いを完成させようとする。御霊によって始まった救いの業を、肉の力によって完成させようとする。それは昔から繰り返されてきた過ちであるため、聖書は次のように警告を発している。

> 「あなたがたはどこまで道理がわからないのですか。御霊で始まったあなたがたが、いま肉によって完成されるというのですか。」（ガラテヤ 3:3）

ならば、クリスチャンはどう生きればよいのか。それが、ここでの話である。

❖ クリスチャンの生き方

神がぶどうの木なら、人はその枝である。「**わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です**」（ヨハネ 15:5）。つまり、神と人とは一体の構造になっており、神は人の「不足」を人に代わって正当に補うことができる。ゆえに、神であったキリストは、人の「不足」を十字架にて代わりに補ってくださったのである。それは、私はキリストとともに十字架につけられ、もはや私が生きているのではなく、キリストが私の中にあって生きておられるということである。

> 「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。」（ガラテヤ 2:20）

パウロはここで、人と神との接点はいつの時代も“**今**”なので、キリストの十字架は“**今**”、私の「不足」を補うためのものであり、“**今**”私はキリストとともに十字架につけられたのだと告白したのである。大事なのは、十字架の御業が“**今**”働くという事実である。そうである以上、私は「**いまだ…である**」という「罪人」の姿であっても、「**もはや…ではない**」という「義人」として生きていくのが正解である（本書 321 頁「神と人との出会いの場」）。

では、何が「義人」の生き方なのか。それは自らの「不足」に気づき、神にあわれみを求めるなら、“**今**”神が「不足」を補ってくださる現実を信じて生きることである。いや、すでに十字架で補ってくださっていた事実を信じることである。そうすれば、死にそうに見えても、生きている者として歩むことができる。罵せられるようでも、

殺されない者として生きることができる。悲しんでいるようでも喜んでいる者として、貧しいようでも富んでいる者として、何も持たないようでも、すべてのものを持っている者として生きることができる。

> 「人に知られないようでも、よく知られ、死にそうでも、見よ、生きており、罰せられているようであっても、殺されず、悲しんでいるようでも、いつも喜んでおり、貧しいようでも、多くの人を富ませ、何も持たないようでも、すべてのものを持っています。」（Ⅱコリント 6:9-10）

こうした生き方を、「**キリストをその身に着た**」（ガラテヤ 3:27）という。まことに、キリストを着た者は、「**いまだ…である**」であっても、「**もはや…ではない**」なのである。この恵みに、神から出た「信仰」が導いてくれる。その「信仰」は、自分の「不足」に気づかせ、「不足」を補ってくださるキリストの十字架へと導いてくれるので、クリスチャンは現状が「**いまだ…である**」であっても、「**もはや…ではない**」として生きられる。そして、「**もはや…ではない**」という事実は、神から出た「信仰」で確認できる。「**信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです**」（ヘブル 11:1）。それで聖書は、クリスチャンに次のように命じている。

> 「このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい。」（ローマ 6:11）

聖書は、人の現状は「**いまだ…である**」という「罪人」ではあっても、「**もはや…ではない**」と「思いなさい」と命じている。これが、「罪人」の私はキリストとともに十字架につけられて死に、もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるということの実際である。「**私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです**」（ガラテヤ 2:20）。これを、「**キリストをその身に着た**」という。

ならば、キリストを着ていなかった「**古い皮袋**」のときはというと、何もかも自分でするしかなかったので、自分の「不足」は自分で覆い隠していた。そのため、周りの目が気になり、周りの期待に応える生き方をしてきた。それは、まるで奴隷のくびきを負った生き方だったので、そこには自由など全くなかった。しかし、キリストを信じている今は、キリストという「**新しい皮袋**」をその身に着たので、自分の「不足」をキリストが補ってくださる。それゆえ、「**いまだ…である**」であっても、「**もはや…**

ではない」となる。この事実を、クリスチャンは神から出た「信仰」で確認できるので、実際の歩みもそのようになっていく。これが、クリスチャンの生き方である。

ところが、私たちは「**古い皮袋**」が支配する世界で生きているために惑わされ、再び自分を「**古い皮袋**」に入れてしまう。それはクリスチャンになっても、自分の「不足」を自分の力で補おうとするということである。自分の肉の力で自分の「不足」を補い、周りから認められようとするということである。そのようにして、自分の救いを肉で完成させようとする。これは誰もが陥る罠なので、聖書は、「**あなたがたはどこまで道理がわからないのですか。御霊で始まったあなたがたが、いま肉によって完成されるというのですか**」（ガラテヤ 3:3）と教えている。そうならないためにも、「**いまだ…である**」であっても、「**もはや…ではない**」とする、「**新しい皮袋**」での生き方を目指すべきである。そうでないと、せっかく「不足」を補ってくださる「**弁護者**」によって「**別人**」になったにもかかわらず（本書 261 頁「「別人」である」）、そのことが全く生かされない（第一巻 354 頁「「新しいぶどう酒」は「新しい皮袋」に」）。

> 「だれも新しいぶどう酒を古い皮袋に入れるようなことはしません。そんなことをすれば、ぶどう酒は皮袋を張り裂き、ぶどう酒も皮袋もだめになってしまいます。新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れるのです。」（マルコ 2:22）

このように、クリスチャンの生き方は、自分の「不足」を神が代わって補ってくださることを、いや、すでに十字架で補ってくださったことを信じ、それを“今”受け取る生き方である。そして、人の「不足」の究極は、絶対に避けられない「肉体の死」である。最後は消えて亡くなる「無」である。人はこの現実と向き合い、避けられない「無」となる自分を知れば知るだけ、自分の「不足」を補ってくださるキリストの十字架が見えてくる。見えてくれば、自分が表紙となって生きてきた人生も、実はキリストが私の表紙であったことを知るようになる。するとパウロのように、「**私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです**」（ガラテヤ 2:20）となるのである。

正確に言えば、人は初めから神なしでは生きられない「無」であった。神の中に生き、動き、また存在しているにすぎない者であった。「**私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです**」（使徒 17:28）。ところが、入り込んだ「死」によってそれが見えなくなり、人は自分の力で生きていると錯覚するようになったのである。そこで、

その錯覚の覆いをキリストの十字架が取り除けてくれるということである。では、このことに関連し、イエスが言われた「良い実」の意味を考察したい。

❖ 「良い実」

イエスは、次のように言われた。

> 「良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。」
> （マタイ 7:19）

ならば、「良い実」とは何なのだろう。この世界で「良い実」というのは、道徳に従う「良い行い」を指すが、聖書で「良い実」というのは、隣人を愛することを指す。ゆえにバプテスマのヨハネは、「斧もすでに木の根元に置かれています。だから、良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます」（ルカ 3:9）と述べた際、ならば何をすればよいのか群衆が尋ねてきたので、「下着を二枚持っている者は、一つも持たない者に分けなさい。食べ物を持っている者も、そうしなさい」（ルカ 3:11）と言ったのである。そこで群衆は、「切り倒されて、火に投げ込まれない」ようにするためには、すなわち救いを達成するには、「良い実」を結ばなければならないと思った。そして、「良い実」とは、神が命じる「良い行い」ができることだと思った。

では、神が命じる「良い行い」を目指すとどうなるのだろう。「下着を二枚持っている者は、一つも持たない者に分けなさい。食べ物を持っている者も、そうしなさい」を実行しようとすればどうなるだろうか。下着は一枚だけで、食べ物も一食分だけで、あとは誰かに分け与えよという命令を実行しようとすれば途端に、そのようなことは到底できない自分に出会うことになる。そのような自分に出会えば、神にあわれみを乞うしかなくなる。こうして、神の律法は、私たちをキリストの十字架の贖いに導く養育係となる。「こうして、律法は私たちをキリストへ導くための私たちの養育係となりました」（ガラテヤ 3:24）。

つまり、隣人を愛する「良い実」というのは、自らの限界に気づき、神の前にへりくだり、神にあわれみを乞うことを指すのである。神にあわれみを乞えば神と結びつくことができるので、これが「良い実」であり、神から出た「信仰」である。したがって、「良い実」の最初は、キリストと結びつく再結合であり、これを「永遠のいのち」を持つという。そして、神との間を邪魔する不信仰を取り除いていくことで、神との

結びつきは強度を増す。これを多くの「良い実」を結ぶといい、「永遠のいのち」が豊かになるといい、「平安な義の実」（ヘブル 12:11）を結ぶという。

そもそも、神と結びつかなければ「永遠のいのち」はないので、その者は滅びるしかない。それでイエスは、「良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます」（マタイ 7:19）と言われたのである。さらに言えば、「良い実」を結ぶには、「良い木」に結びついていなければならない。良い実を結ぶ「良い木」とは、イエス・キリストであり、良い実を結ばない「悪い木」とは、この世を支配する「死」である。ゆえにイエスは、「良い実」の話の手前で、「**良い木**が悪い実をならせることはできないし、また、**悪い木**が良い実をならせることもできません」（マタイ 7:18）と言われたのであった。また、別の場面では、次のようにも言われた。

> 「わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。」（ヨハネ 15:4）

このように、「良い実」を結ばせるというのは、キリストと結びつくことであり、キリストから目を離さなければ、「平安な義の実」（ヘブル 12:11）を結ぶようになるということである。しかし、人はこの世界の習わしに従い、「良い実」をならすことの意味を、周りから評価される「良い行い」ができることだと勘違いしてしまった。そこで、自分が救われて天国に行けることの確認を、どれだけ周りから評価される「良い行い」ができるようになるかでするようになった。あのパリサイ人のように、「私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております」（ルカ 18:12）となった。しかし、神が求めていた「良い実」は、自分の限界を知り、神の前にへりくだり、神と結びつこうとすることだったので、イエスは、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」（ルカ 18:13）と祈った取税人を義とすると言われたのである。そして神は、この取税人の祈りに答え、人の「不足」となる罪を背負い、それを補ってくださる。神が人の「不足」を補うのは、神が人の土台ゆえである。

❖ 神が人の土台

神が人の行いに関係なく人の「不足」を補ってくださるのは、すなわち無条件で人を愛されるのは、神が人の土台となる「岩」であって、人を支えておられるからである。「神こそ、わが岩」（詩篇 62:2）。神の「いのち」が人に吹き込まれ、「いのちの息を吹

き込まれた」（創世記 2:7）、神ご自身が人を支えておられるからである。つまり、神がぶどうの木なら、人はその枝だからである。「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です」（ヨハネ 15:5）。そうであるからこそ、神は私たちの「不足」を喜んで補ってくださる。人が苦しむと神も苦しみ、何としても人を贖おうとしてくださる。

> 「彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって主は彼らを贖い、昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた。」（イザヤ 63:9）

正確に言うなら、もう神は十字架で人の「不足」を補ってくださったので、その事実を教えた「十字架の言葉」を信じることにこそ、神の力がある。

> 「十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。」（Ⅰコリント 1:18）

神が人の「不足」を補うのは、人がもう罪を犯さなくなるためである。それゆえ、人が罪を犯せば、神が人の「不足」（罪）を弁護してくださる。

> 「わたしの子たちよ、これらのことを書くのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。たとえ罪を犯しても、御父のもとに弁護者、正しい方、イエス・キリストがおられます。」（Ⅰヨハネ 2:1　新共同訳）

このように、私たちの土台は、神イエス・キリストであって、「その土台とはイエス・キリストです」（Ⅰコリント 3:11）、私たちと神とは「一つ」である。そうである以上、私たちは「良き者」である。というより、初めから私たちの土台は神であって神とは「一つ」なので、私たちは初めから「良き者」であった。「神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった」（創世記 1:31）。ところが、「死」という制約が入り込んだことで、その事実が見えなくなったので、神から出た「信仰」が、見えなくなった「良き者」である私たちを再び見えるようにしてくれるのである。神から出た「信仰」が、私たちの「不足」に気づかせ、それを補ってくださる「弁護者」に導き、「良き者」である私たちを再び見えるようにしてくれる。これが「神の福音」であり、それは「弁護者」に導く神からの「信仰」に始まり、「良き者」である私たちを再び見えるようにする、神からの「信仰」に進ませてくれる。

「福音のうちには神の義が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。」（ローマ 1:17）

したがって、福音を受け取るのに不可欠となる「信仰」は、神からの「賜物」であるという結論になる。「**あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です**」（エペソ 2:8）。この神からの賜物となる「信仰」の“**種**”を、誰もが持っているのである。

❖ 「信仰」の“種”を持っている

人は、自分には「信仰」がないと言う。しかし、それは誤りである。なぜなら、人の土台は神であるゆえ、誰もが神の賜物となる「信仰」の“**種**”を持っているからである。その“**種**”は人の土台である神、すなわち「魂」から発信される神の呼びかけである。その呼びかけは「**愛せよ**」、「**生きよ**」であり、これを「道徳命令」というが、これを誰もが聞いているので、それに応答さえすれば「信仰」が発芽する。

ただし、「道徳命令」に応答するとは、「道徳命令」の「行い」ができない限界を承認することである。それは「弱さ」を認め、神にあわれみを乞うということであり、そうすれば神の力が働き「信仰」が発芽する。まさしく「弱さ」のうちに、神の力は完全に現われるのである。「**わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである**」（Ⅱコリント 12:9）。そうであれば、誰であれ神の呼びかけの“**種**”を発芽させることができ、神への「信仰」を持つことができる。

しかし、人はなかなか自分の「弱さ」を承認しない。ならば、自分の「弱さ」を承認しなければどうなるだろう。承認しなくても神からの呼びかけとなる「道徳命令」は止まらないので、そうなると人は自らの「弱さ」を、すなわち「不足」を自分の努力の「行い」で補おうとする。そこでは、自らの力による自らの「肯定」を目指すので、「**何々をすれば、神からの報酬がある**」という「妄想」の信仰が生まれる。それこそが、救いに至らない「**死に至る罪**」（Ⅰヨハネ 5:16）である。逆に、自分の「不足」を承認すれば、その人は「**罪が赦される恵み**」に導かれるので、神からの「道徳命令」ができない「不足」の罪は、「**死に至らない罪**」（Ⅰヨハネ 5:16）となる。

このように、誰もが神からの「信仰」を発芽させる“**種**”を持っている。それは、誰もが神からの呼びかけを聞いているということである。「**信仰は聞くことから始まり**」（ローマ 10:17）。ゆえに、神からの呼びかけに応答し、自分の「不足」を承認すれば

よい。それは「絶望」する勇気を持つということであり、「絶望」が神にあわれみを乞う「信仰」を発芽させ、ここに救いが成就する。なぜなら、神にあわれみを乞うなら、「愛せよ」に集約される神の「律法」を実行できない人の「不足」を、神が人に代わって十字架で成就してくださるからである。ここに、「律法」の成就がある。

> 「わたしが来たのは律法や預言者を廃棄するためだと思ってはなりません。廃棄するためにではなく、成就するために来たのです。」（マタイ 5:17）

そもそも神の「律法」は「神の思い」であり、神が目指すところなので、「律法」がすたれることは決してない。むしろ、その全部が成就する。「まことに、あなたがたに告げます。天地が滅びうせない限り、律法の中の一点一画でも決してすたれることはありません。全部が成就されます」（マタイ 5:18）。そのためには、人が自らの力で神の「律法」を達成できると思う「妄想」を捨てなければならない。言い換えれば、「律法」を達成し、そのことで神からの報酬が得られると信じる「律法主義」を終わらせなければならない。そこで、キリストは人に代わって「愛せよ」に集約される「律法」を十字架で成し遂げ、ご自分を信じる者は誰であれ（神の呼びかけに応答する者は誰であれ）、義と認められることを明らかにされたのであった。そのようにして、「律法主義」の「妄想」を終わらせたのである。「キリストが律法を終わらせられたので、信じる人はみな義と認められるのです」（ローマ 10:4）。では、まとめをしよう。

❖ まとめ

信仰には二つある。一つは神から出た「信仰」であり、もう一つは人から出た信仰である。前者は人を救いに導く「信仰」であり、後者は人を滅びに導く信仰である。前者は神と人との距離を縮める「信仰」であり、後者は神と人との距離を広げる信仰である。そこで、ここでは後者の信仰を「妄想」と呼び、この章では「信仰」と「妄想」の話をしてきた。その「妄想」の信仰の特徴は、以下のとおりであった。

「何々をすれば」⋯→「神からの 報酬 がある」

「何々をすれば」⋯→「神からの 罰 がある」

つまり、人から出た信仰は、「何々ができる」という人の能力に依存する。それに対し、神から出た「信仰」は人の能力には全く依存しない。それは「何々ができる」という人の能力にではなく、「何々ができない」という人の「弱さ」に依存する。そこで主は、「わたしの力は、弱さのうちに完全に現れる」（Ⅱコリント 12:9）と言われたの

であった。そうであれば、神から出た「信仰」だけが、何の差別もなく、誰でも持つことが可能な「信仰」となるので、聖書は神から出た「信仰」で人は救われることを教えている。そう教えることで、人の「妄想」を排除する。その排除の様子が、聖書にはパリサイ人、あるいは律法学者たちとの戦いに象徴されている。したがって、あの戦いは過去の話ではなく、私たちを支配している「妄想」と、“今”神が戦われていることを示した「型」にほかならない。

そこで問いたい。「**何々をすれば**」神が喜び、祝福してくださるという「妄想」を信じていないかを。信じているがゆえに、イエスは「放蕩息子の譬え」を話された。放蕩息子は父親の意に反し、放蕩を繰り返した。しかし、父親は彼を最上の物で祝福した。逆に、放蕩息子の兄は父親の意に従い頑張ったのに、最上の物で祝福されたことはなかった。それは兄が、「**何々をすれば**」神が喜び、祝福してくださるという「妄想」を信じて頑張っていたからである。それで兄は、いくら頑張っても、最上の物での祝福が得られなかった。それとは対象的に、弟は神から出た「信仰」によって自分の「弱さ」を承認できたので、父親は最上の物での祝福を彼に与え、彼の「弱さ」を補ったのである。こうしてイエスは、「**何々をすれば**」神が喜び、祝福してくださるというのは「妄想」にすぎないことを教えられた。まことに信仰には二つある。一つは放蕩息子のように自分の「弱さ」を承認する「信仰」であり、それは人を救いに導く。もう一つは兄のように自分の「行い」を誇る信仰であり、それは人を嫉妬と怒りに導く。「放蕩息子の譬え」は、そのことを教えてくれている。

このように、信じるという信仰は、救いに至る「信仰」と、救いには至らない「妄想」とに分けられる。前者は神から出たものであり、後者は人から出たものである。神から出た「信仰」は人の「弱さ」に根差し、人から出た「妄想」は人の能力、すなわち「行い」に根差している。いずれにせよ、イエス・キリストを信じている者は、神から出た「信仰」で救われたのである。その「信仰」は、神の呼びかけを「潜在意識」で聞くことから始まり、聞くことで「弱さ」に気づかされ、その「弱さ」の承認を以て発芽する。人は、この発芽した「信仰」で救われる。救われるとは、朽ちない「霊の体」を着せられることであり、「永遠のいのち」を持つようになることである。

そして、「永遠のいのち」を持つようになると、今度は「顕在意識」にてイエス・キリストのことを聞くことで、その方を信じられるようになる。「**その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです**」（ヨハネ 17:3）。イエス・キリストを信じられたなら、それを告白する

ことで自分が救われたことを自覚できるようになる。「人は心に信じて義と認められ(神の呼びかけに応答して救われ)、口で告白して救われるのです(口で信仰を告白して救いの自覚に至る)」(ローマ 10:10　※(　)は筆者が意味を補足)。だが、「顕在意識」は「妄想」が支配する場所なので、自分が救われたことを自覚できるようになった途端、人は自分の「行い」を見るようになり、本当に自分は救われていて天国に行けるのかと心配になる。そこで、自分の救いを確かなものにするために、肉の「行い」を以て救いの完成を目指すようになる。こうして、神から出た「信仰」は次第に除け者にされていく。それで聖書は、神から出た「信仰」で始まったことを、いま肉によって完成させることのないようにと注意を促すのである。「御霊で始まったあなたがたが、いま肉によって完成されるというのですか」(ガラテヤ 3:3)。

この注意が意味するところは、見た目が未だ「罪人」であっても、キリストが自分の「不足」を補ってくださったので、すでに「義人」であるという事実を、神から出た「信仰」で確認するようにということである。つまり、神から出た「信仰」は人を救い、その救いの確かさを知るようにしてくれるということである。これを、「信仰に始まり信仰に進ませる」(ローマ 1:17)という。ここで重要なのは、イエス・キリストを信じられるのは、自分から出たことではなく、神から出たことだということである。

> 「シモン・ペテロが答えて言った。「あなたは、生ける神の御子キリストです。」するとイエスは、彼に答えて言われた。「バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です。」(マタイ 16:16-17)

ここでイエスはペテロに、「生ける神の御子キリスト」と告白できたのは、人の力ではなく、神によることを告げられたのであった。ということは、人の救いに関しては、「私が福音を語らなかったので、親は救われなかった」とはならないのである。人を救えるのは神だけなので、決してそのような話にはならない。ならば、キリスト者の責任といえば、それは神が救った人に福音を届け、救われたことの自覚が持てるように手助けすることである。自覚が持てれば、その人は真の平安を目指して生きることができる。よみがえりの希望を以て、生きることができる。つらいときは、キリストの御名で祈ることができる。そのためにも福音を伝えるのがキリスト者の責任となる。ただ、誰が神によって救われているのかは分からないので、誰にでも福音を伝え、キリストを信じられるように祈る。このように、神から出た「信仰」が人を救い、人はそれを刈り取るという流れになる。そこでイエスは、この流れをこう言われた。

「こういうわけで、『ひとりが種を蒔き、ほかの者が刈り取る』ということわざは、ほんとうなのです。わたしは、あなたがたに自分で労苦しなかったものを刈り取らせるために、あなたがたを遣わしました。ほかの人々が労苦して、あなたがたはその労苦の実を得ているのです。」（ヨハネ 4:37-38）

以上が、「信仰」と「妄想」のまとめである。この章では「信仰」の視点から「神の福音」を見たが、それは第一巻で見た福音の内容と同じであった。では、最後にカントの話をし、この章を締め括りたい。

❖ カントの話

この第八章での冒頭で、人が救われるのに必要な「信仰」は、誰でも持つことが可能な「信仰」でなければならないとするカントの考えを取り上げた。そしてカントは、それは誰もが心で聞いている神の呼びかけ、すなわち「道徳命令」に従う「信仰」であることを論じた（『実践理性批判』）。これに付け加えると、カントは、その「信仰」を正しく教えているのは聖書だけとした（『諸学部の争い』）。しかし、人は聖書が教える「信仰」を人から出た信仰に置換し、それを「妄想」に変えてしまったとしたのである。そこで本書はカントに倣い、人から出た信仰を「妄想」と呼んできた。

「祭祀という宗教的行為により、神の前で義とされることに関して何かをなし遂げるという妄想は、宗教的迷信であるが、同じように神との交わりと称するものへの努力によって、これを引き起こそうと思う妄想、これは宗教的狂信である。」（『たんなる理性の限界内の宗教』A174 「カント全集 10」岩波書店 234 頁）

このように、カントは人から出た信仰を「妄想」とし、その信仰の定式を聖書に持ち込むことの危険性を真に認識していた。その定式は、「罪には罰」という「人間的な標準」から生まれたのである。さらにカントは、私たちが神からの「道徳命令」に従うことで、自分の行いの「不足分」に出会うことができれば、どのようにしてかは分からないにせよ、それを何としても補ってくれる、人類への神の愛を信じられるようになるとした。これがカントの言う、救われるのに必要な「信仰」であり、それは本書が述べてきた「信仰」と同じ理解である。

「人類への神の愛は、人類が能力のおよぶかぎり神の意志にしたがおうと努力するならば、その誠実な心術を考慮して私たちの行いの不足分を、どのようにしてかは分からないにせよ、補ってくれるだろうと信じられる」(『たんなる理性の限界内の宗教』A120 「カント全集 10」岩波書店 160 頁)

このカントに影響されたのがキェルケゴールであり、彼はカントの「信仰」に関する考え方を発展させた。カントは「道徳命令」に従うことが「信仰」の一部であると考えたが、キェルケゴールはこれを更に深め、人が実存するためには、すなわち死んでいた自分が生きるようになるには、神との個人的な関係を持つ必要があるとし、そこに焦点を当てた「信仰」を論じた。彼は個人の実存に焦点を当て、人々が直面する絶望や不安を乗り越えるには、すなわち「死」の運動を乗り越えるには、神との直接的な関係が必要であることを説いた。その考え方は実存主義による弁証法的神学となり、20 世紀を代表する神学者カール・バルトやパウル・ティリッヒをはじめ、多くの神学者に影響を与えた。その実存主義による弁証法的神学とは、人の実存に目を向け、そこでは何が問題なのかを明らかにし、その問題の答えを聖書に求めるという神学である。それこそが、本書が採用した神学であり、本書はそれに、聖書は神の言葉であると信じる信仰を加えて書いてきた。尚、こうしたカントの「信仰」理解、またキェルケゴールの実存主義については、第四巻の【哲学と聖書】の中で詳しく書いている。

以上で、「信仰」と「妄想」の話は終了するが、ここまでの話から「神の福音」に覆いを掛けているのは、まさしく「人間的な標準」であることが明白になった。そこで本書は、「人間的な標準」を排除し、神から見た人の「真実な姿」を基準に、「神の福音」の真実を知る作業を行なってきた。それを、現代人にも理解できる表現にすることを試みてきた。すなわち、従来からある「義認」、「聖化」、「栄化」という表現ではなく、少しでも現代人が「神の福音」の実体を正確に把握できるように、今日の「人間学」で使用されている表現で説明してきたのである。

さて、この『神の福音』第二巻、**【「神の福音」の真実(応用編)】**では、第一巻で述べた「神の福音」の真実を、別の視点から見ている。そこで次章では、「愛」の視点から「神の福音」の真実を見ていく。それは、「愛」が神から流れ出ているという話である。

第九章　「愛」が神から流れ出ている

神は「愛」である。「**神は愛です**」（Ｉヨハネ 4:16)。その神が人の土台であるゆえ、人の土台からは神の「愛」が流れ出ている。「**愛は神から出ているのです**」（Ｉヨハネ 4:7)。そして、その「愛」が人を動かしている。ゆえに本章では、「愛」は神から流れ出ているという視点に立ち、「神の福音」を眺めてみたい。それには、「愛」の中身を知る必要がある。そこで、まず「愛」の源泉の三位一体の神について見てみよう。

－三位一体の神－

目の前に「彫刻」がある。すると、その「彫刻」から、それを造った人がいることが分かる。しかし、その「彫刻」を見るだけでは、作者の好きな食べ物や健康状態、家族の様子までは知ることができない。それについては、本人から教えてもらわなければ分からない。同様に、人は「人間」を見て、「人間」を造った方がおられることまでは分かる。だが、その方のことについては教えてもらわなければ知る由もない。潜在意識は「魂」から発信される「神の思い」を受け取っているので、「人間」を造られた方のことは漠然と知ることはできても、具体的なことまでは知り得ない。それで、人はその方をとりあえず神と呼び、各々が勝手に神を想像するようになった。しかし、それはあくまでも想像であり、神については、神の側から教えてもらわなければ分からない。そこで神は、ご自分のことを私たちに啓示してくださった。それは、いかなる内容であったのか。それを見ると、ここで知りたい三位一体の神が見えてくる。

❖　神からの啓示

神からの啓示をまとめたのが聖書である。その聖書によれば、神の姿は、「**父、子、聖霊**」という三つの異なる存在様式に区分される。加えて、それは分割できない「一つ」の実体であり、区分される「**父、子、聖霊**」の本質は同等である。ゆえに、誰が上で誰が下という関係でもない。これが、聖書の教える「三位一体の神」である。ならば、なぜ神は「**父と子**」という言い方をされたのだろう。それは、次の理由からである。

「父」という存在は、「子」がいて初めて成立する。「子」がいなければ、「父」は存在しない。同様に、「子」という存在も「父」がいて初めて成立する。「父」がいなけれ

ば、「子」も存在しない。つまり、「父と子」という言い方は、互いの存在には、互いを必要とすることを言い表している。互いは区別されるが、互いは互いを必要とし、「一つ」であることを言い表すために、「父と子」という言い方がなされているだけで、間違っても、主従関係を言い表しているわけではない。

いずれにせよ、「父と子」は「一つ」なので、神の関係様式では「子」であったキリストは、「わたしと父とは一つです」（ヨハネ 10:30）と言い、自分の栄光を現すことは「父」の栄光を現すことだと言われた。「あなたの子があなたの栄光を現すために、子の栄光を現してください」（ヨハネ 17:1）。ならば、「聖霊」とは何なのだろう。「聖霊」は「子」の栄光を現し、「御霊はわたしの栄光を現します」（ヨハネ 16:14）、「父と子」の思いを私たちの中に届けてくださる方だという。「私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです」（ローマ 5:5）。したがって、「父、子、聖霊」は「一つ」の実体であって、その関係は同等であり、一体として活動する。

このように、神が啓示された神の姿は、「父、子、聖霊」の三つに区分されるが、それは分割できない「一つ」の実体である。「父、子、聖霊」は、いずれも始まりも終わりもない永遠の存在であり、互いに区別されつつも、同質・同等の神として一体である。一体であるということは、互いに互いを必要とし、互いは互いの中で存在する関係にあるということである。繰り返すが、そこには上下関係はない。これを三位一体の神といい、それを体系的に上手くまとめた最初の人がアウグスティヌスであった（『三位一体論』）。しかし、「子」であるイエスが、「父」と同等の神であるということに対しては、誤解が繰り返されてきた。

❖ イエスへの誤解

聖書によれば、「子」であるキリストは人（肉）から生まれ、「キリストは肉において現れ」（Ⅰテモテ 3:16）、「父」の栄光のために生きられた。「キリストが神の栄光のために」（ローマ 15:7）。夫は妻の頭であるように、「父」なる神は「子」であるキリストの頭であった。「女の頭は男、そしてキリストの頭は神である」（Ⅰコリント 11:3 新共同訳）。したがって、「子」であるキリストは、「父」なる神のものであった。「キリストは神のものです」（Ⅰコリント 3:23）。それで、「子」は「父」に従われたのである。「御子自身も、すべてを御自分に服従させてくださった方に服従されます」（Ⅰコリント 15:28　新共同訳）。こうした一連の御言葉から、「父」が上で、「子」が下であるという誤解が繰り返された。平たく言えば、「父」が社長であり、「子」が部下であるということである。正直、私は小さい頃、そう思っていた。

また、こうした一連の御言葉に加え、「主が昔そのわざをなし始められるとき、そのわざの初めとして、わたしを造られた」（箴言 8:22　口語訳）、「御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です」（コロサイ 1:15）等の御言葉も加わり、神が最初に造られたのがキリストであるという考えが生まれた（アリウス主義）。初めからの神は、「父」だけであったということである。さらには、イエスは人間であったが、神にまで引き上げられたという「養子論」も生まれた。

確かに、イエスは自らを「神」であると、直接的な表現で告白されたことはなかった。また、地上では人間として生きられたので、「父」に従順であった。しかし、聖書全体を読めば、このようなイエスへの誤解は生まれない。というのも、イエスは繰り返し、間接的に自らが神であることを表現しておられたからである。例えば、「わたしと父とは一つです」（ヨハネ 10:30）と言われた。例えば、「わたしが王であることは、あなたが言うとおりです」（ヨハネ 18:37）と言われた。例えば、その昔、神はご自分のことをモーセに、「わたしは、『わたしはある』という者である」（出エジプト 3:14）と言われたので、イエスもご自分のことを、「アブラハムが生まれる前から、『わたしはある』なのです」（ヨハネ 8:58　新改訳 2017）と言われた。こうした発言から、イエスが神であることが十分に示されている。

このように、イエスへの誤解は繰り返されてきた。「子」であるイエスが、「父」と同等の神であるということに対しては、誤解が繰り返されてきた。では、なぜイエスは、ご自分が神であることを隠されたのだろう。人が自分を誤解しようと、あくまでも「父」の栄光のために生きられたのは、なぜなのだろうか。

❖　イエスは神であることを隠された

イエスは、自分は「神」であると、直接的な表現で告白されたことはなかった。逆に、神であることを隠し、人に仕える姿を取られた。それは見える「納得」ではなく、「信仰」でしかイエスが神であることを知り得なくするためである。それゆえ、イエスは人（肉）から生まれ、その肉の父と母が知られていても、自分の父は「神」だと主張されたのであった。「神を自分の父と呼んでおられた」（ヨハネ 5:18）。いずれにせよ、イエスは真実な自分の姿を隠蔽された。そして、次のように述べられた。

> 「わたしはさばきのためにこの世に来ました。それは、目の見えない者が見えるようになり、見える者が盲目となるためです。」（ヨハネ 9:39）

「見える者が盲目となるためです」とは、自分は神を知っていると自分の知恵を誇る者たちが、自分の知恵によっては神を知ることがないため、ということである。ここに、神の知恵があった。「事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです」（Ⅰコリント 1:21）。それは全て、人の知恵に関係なく、信じる者を救うためであった。「それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです」（Ⅰコリント 1:21）。こうした理由から、イエスは敢えて、人に躓きが起きる道を選ばれたのである。

実際、イエスは人間の姿であるのになぜ神だと言えるのか、なぜ神が十字架につけられたのか、そうした躓きがいつの時代も絶えず起きた。しかし、イエスに対する躓きが起きるがゆえに、「納得」を目指す理性を排除することができ、ただ信じる「信仰」が神と出会う唯一の手段となった。ここに神からの義がある。したがって、イエスの真実な姿を見えなくすることが神の義であった。「義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなること」（ヨハネ 16:10　新共同訳）。それでイエスは、「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ずに信じる者は幸いです」（ヨハネ 20:29）と言われたのである。

とはいえ、イエスは陰で、ご自分を信じる者たちのために「父」に祈っておられた。「わたしは、ただこの人々のためだけでなく、彼らのことばによってわたしを信じる人々のためにもお願いします」（ヨハネ 17:20）。それは、イエスの姿が人間であっても、本当は始めから「父」と一緒にいた「神」であったので、ご自分の名の下で彼らが神と「一つ」になれるようにという祈りであった。

> 「それは、父よ、あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにいるように、彼らがみな一つとなるためです。また、彼らもわたしたちにおるようになるためです。」（ヨハネ 17:21）

この祈りから分かることは、地上で与えられていた「イエス」という名こそ、神の名であったということである。「聖なる父。あなたがわたしに下さっているあなたの御名の中に、彼らを保ってください」（ヨハネ 17:11）。

このように、イエスは神であることを隠された。それは、「信仰」でしか、イエスが神であることを知り得なくするためであった。「信仰」で、イエスと神とが「一つ」であ

ることが分かれば、イエスの名の下で人々が神と「一つ」になれるからである。「それはわたしたちと同様に、彼らが一つとなるためです」（ヨハネ 17:11）。ゆえにイエスは、「わたしを見た者は、父を見たのです」（ヨハネ 14:9）と言われたのである。

さらに言えば、イエスは神であることを隠されたのは、キリスト者の生き方の模範を示すためでもあった。そこでイエスは、徹底して人間として生き、「父」に従順を示されたのである。「キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました」（Ⅰペテロ 2:21）。さらに深く言えば、イエスが「父」に従順でいられたのは、「父」と完全に一致していたからである。つまり、「父」に従ったのではなく、「父」と一致していたということである。それゆえ、イエスとの出会いが神との出会いとなった。

❖ イエスとの出会いが神との出会い

三位一体の神の結論はこうなる。神の関係様式では「子」であったキリストは、世の始まる前から知られていた「神」であり、その神が、この「終わりの時」にイエスという名で、私たちのための約束を成就するために現れたということである。

> 「キリストは、世の始まる前から知られていましたが、この終わりの時に、あなたがたのために、現れてくださいました。」（Ⅰペテロ 1:20）

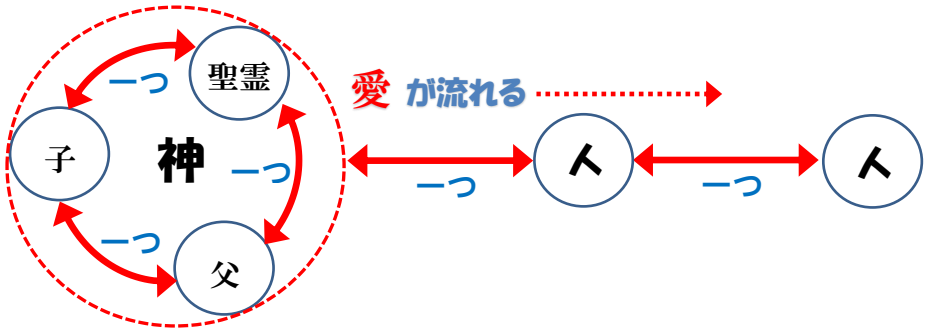
そこで、イエスには「キリスト」（メシア）という称号が与えられた。それは当時の人たちには「終わりの時の王」を指す言葉であり、「救済者」を意味した。また、「ダビデの子」、「神の子」という称号も与えられたが、それは「王」を意味した。さらには、この世の悪を終わらせ、新しい世界を実現する「人の子」という称号も与えられた。そして何より、当時は「主」が礼拝の対象であったが、その「主」という称号も与えられた。「主」について簡単に述べると、イスラエルの人々は、御名である「YHWH」（ヤハウェ）の名をみだりに唱えてはならないという戒めに従い、御名を口にするときは「主」（アドナーイ）［אֲדֹנָי］という一般の言葉に言い換えていた。その「アドナーイ」を七十人訳聖書（ヘブライ語をギリシャ語に翻訳した聖書）は、「主」（キュリオス）［κύριος］と訳した。その「主」（キュリオス）が、イエスであるとなったのである。こうして、イエスを通し、神がほめたたえられることになった。

> 「すべての口が、「イエス・キリストは主である」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。」（ピリピ 2:11）

このように、イエスは「キリスト」であり、「**主**」であり、ほめたたえられるべき神であった。「**このキリストは万物の上にあり、とこしえにほめたたえられる神です**」（ローマ 9:5）。人に与えられている神の御名は、「イエス・キリスト」しかなかった。「**天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人に与えられていない**」（使徒 4:12）。それゆえ、イエスとの出会いが神との出会いとなった。これが、神が私たちに啓示された神の姿であり、この姿から神の「愛」の中身を知ることができる。

❖ 「愛」の中身

「父、子、聖霊」は区別されても同等であり、互いが互いを必要とする「一つ」の実体、「三位一体の神」である。そうであれば、互いは互いの中で存在するので、互いは互いを無条件で受容することになる。こうした神の姿を、聖書は「愛」と呼ぶ。「**神は愛です**」（Ⅰヨハネ 4:16）。したがって、「愛」とは無条件で受容し合う運動であり、「一つ」となる「統合運動」である。その「愛」が、神から流れ出ている。「**愛は神から出ているのです**」（Ⅰヨハネ 4:7）。そうなると、神が人の土台なので、流れ出た「愛」は私たちの心に注がれる。「**神の愛が私たちの心に注がれているからです**」（ローマ 5:5）。注がれた「愛」は「統合運動」なので、神と人とを「一つ」にしようとする。「**すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです**」（ローマ 11:36 新共同訳）。それから、人と人とを「一つ」にしようとする。「**彼らが完全に一つになるためです**」（ヨハネ 17:23　新改訳 2017）。人の中心は、神と人とが一対一で向き合っているので、神は人とご自分を「一つ」にし、人と人とを「一つ」にしようとされるのである（本書 12 頁「人の中心」）。この関係を図にすると、以下のようになる。



このように、「愛」とは「一つ」となる「統合運動」である。言い換えれば、それは無条件で受容する運動であり、無条件で結びつける運動である。それが、神から流れ出ている「愛」の中身となる。そこで次に、この「愛」の流れを見てみよう。

－「愛」の流れ－

人とは、「体」からの情報を認識し、思考する存在である。思考は意識であり、意識の総合を「精神」というので、人とは「精神」である。ただし、何かを認識するには、先に認識する対象（客体）がなければならない。そこで、神は人を造る前に天と地を造り、その大地に動植物を造られた。そして、そうした「客体」の情報を人が受け取れるように、「客体」と同質の材料で、すなわち大地の「ちり」で、神は人の「体」を造られた。そこに、今度は「客体」の情報を認識するのに必要な物差しとして、神の「いのち」を吹き込まれた。それが「魂」である。すると、神の「いのち」は「愛」であるゆえに、その「魂」は「統合運動」を開始した。その結果、「体」が収集する「客体」の情報への認識が始まり、思考する「精神」が機能するようになった。こうして、人は生きる者となった。聖書は、人についてはそのように教えている。

> 「神である【主】は、その大地のちりで人を形造り（**体**）、その鼻にいのちの息を吹き込まれた（**魂**）。それで人は生きるものとなった（**思考する「精神」が機能するようになった**）。」
>
> （創世記 2:7　新改訳 2017）※（　）は筆者が意味を補足

このようにして、神からの「愛」は、神の「いのち」の「魂」から、人（精神）に向かって流れ出るようになった。では、人に流れ出た「統合運動」の「愛」は、どのように神と人を、そして人と人を「統合」するのだろう。それは、「言葉」によってである。「愛」は「言葉」となって現れ、「統合」を図る。

❖ 「愛」は「言葉」となる

人である「精神」を動かしているのは、神の「いのち」による「魂」である。その神は「愛」ゆえ、「魂」は「統合運動」を展開する。この「統合運動」によって、「精神」は、「体」が収集する「客体」の情報を認識し、それらを結びつけようとして思考を始める。例えば、自然界にある多くの「客体」の情報を「精神」は眺め、その中に共通項を見出そうとする。そして、それらを「花」や「木」や「山」と名づけて、一つのまとまりとして「統合」しようとする。それから、「花」「木」「山」といった個別の統合を、今度は「自然」というより大きな枠組みで再び「統合」しようとする。このようにして、「客体」の情報が統合されるたびに、共通項としての「概念」が形成され、それが「言葉」となる。

このように、神から流れ出ている「愛」は「統合運動」なので、それは「体」が収集する「客体」の情報を「統合」しようとする。その過程で「概念」が形成され、「言葉」が生まれる。したがって、「言葉」は神から流れ出る「統合運動」の賜物であり、神ご自身の現れになる。「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった」（ヨハネ 1:1）。この「言葉」によって、思考する「精神」は機能するので、人は神の「愛」に生かされていることになる。こうして、神から流れ出ている「統合運動」（愛）は「言葉」となり、さらなる「統合」へと人を牽引する。

❖ 「言葉」は人を牽引する

「魂」が展開する「統合運動」は、太陽の動きを誰も止められないように、それは誰にも止められない。なぜなら、神の「愛」は一方的に流れ出る、「アガペー」だからである。そのため、「統合運動」は「体」が収集する「客体」の情報を次から次に共通項で「統合」していく。すると、そこに「概念」が形成されて「言葉」となるので、「精神」は「言葉」を使い、さらなる「統合」を思考する。その「統合」の目指す先は神である。しかし、悪魔の仕業で「死」が入り込み、この世界では神が見えなくなった。「死」という制約が、全く制約を受けない神を見えなくさせてしまった。それでも、神の「いのち」である「魂」は神を目指すので、「神よ、わたしの魂はあなたを求める」（詩篇 42:2　新共同訳）、「精神」は、「魂」によって「神の思い」を聞いている。そのため、神のことを思い描くことはできる。

例えば、神は何ものにも制約されない「自由」であるゆえ、人は「自由」を思い描くことができる。過去や未来に行ける自分や、何でもできる自分、死後も生きている自分を自由に思い描ける。こうした「自由」を可能にしてくれる神を、人は思い描くことができる。しかし、神が見えない以上、人は「言葉」の「概念」で、何でもできる神を想像するほかない。その方は目指す最高の存在であるゆえ、神への想像は、現状の世界での最高を夢見ることへと置き換えられてしまう。その結果、人は夢を追い求めるようになり、その夢から、この世界で自分が獲得できる「理想」を描き、それを神の代わりに目指すしかなかった。

そこで、ある人は音楽に於ける「理想」を思い描き、最高の音楽を目指すようになった。ある人は社会に於ける「理想」を思い描き、最高の社会を目指すようになった。ある人は文学に於ける「理想」を思い描き、最高の文学を目指すようになった。ある人は家庭に於ける「理想」を思い描き、最高の家庭を目指すようになった。ある人は富に於ける「理想」を思い描き、最高の富を目指すようになった。こうして、目指す

神は「理想」に置き換えられ、人は自分が何を求めているのかが分からなくなった。それは、まさしく神と「分離」している状態であり、その状態を「罪」という（本書72頁「「罪」について」、第一巻183頁「罪についての整理」）。この「罪」は、悪魔の仕業で入り込んだ「死」によるものである。「死のとげは罪であり」（Ⅰコリント15:56）。

そして、想像する「理想」は人の環境や人の能力によって異なるため、世界には多くの「理想」が生まれ、そこに至る多くの「可能性」の追求が起こり、そのことが文明の発展をもたらした。同時に、目指す「理想」は見える神として崇める人もいたので、世界には数多くの偶像宗教も発展することになった。ただし、そうした偶像宗教は神からの「愛」が生み出したのではなく、悪魔の仕業で入り込んだ「死」が、神からの「愛」の運動を邪魔することで生まれたので、偶像宗教の出所は悪魔である。

さらに言えば、目指す「理想」の違いから、人は争いも繰り返してきた。だが、「統合運動」の「愛」が人を牽引するので、争うとつらくなる。そこで、「平和」を「言葉」で言い表し、人との「平和」も目指してきた。そのようにして、人は目に見える兄弟との「統合」を目指すことで、実は神との「統合」を目指してきた。「目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません」（Ⅰヨハネ4:20）。

このように、神から流れ出ている「愛」は「統合運動」なので、「体」が収集する「客体」の情報の共通項を見つけ出させ、そこに「概念」を形成させて「言葉」を持たせる。そして、「言葉」で神との「統合」を目指させる。しかし、「死」が支配する世界では神が見えないので、神を「理想」として描くほかなく、「理想」を神として目指すのである。これが、「言葉」が人を牽引する様である。それは、「言葉」が人を生かす糧であることを意味する。それでイエスは、「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる」（マタイ4:4）と言われたのであった。さて、「統合運動」である「愛」が目指す先は神なので、「愛」は「信仰」の源泉にもなった。

> 補足：「魂」による「統合運動」が「概念」を生み「言葉」生むことを最初に説明した人はカントである（『純粋理性批判』）。

❖ 「愛」は「信仰」の源泉

人を神に導くのは、神から流れ出ている「愛」である。神から出た「愛」、すなわち神との「統合運動」が人を神に向かわせている。「すべてのものは、神から出て、神によ

って保たれ、神に向かっているのです」（ローマ 11:36　新共同訳）。ここに「信仰」の源泉がある。その流れは、次のとおりである。

「統合運動」は、人との「平和」を目指させる「道徳命令」でもあるので、「統合運動」は人を愛せない自分の罪に気づかせてくれる。人がその罪を認められるなら、その罪は「死の恐怖」と結びついて人を苦しめる。すると「統合運動」（愛）は、神にあわれみを乞うよう、その人を誘導する。その誘導に応答するなら、その人は救われ、見えなかった神を知るようになる。

つまり、神が呼びかけ（統合運動）、それに応答することで、人は救われる。この応答が「信仰」であり、「信仰」が見えなかった神を知るようにし、自分は「理想」を求めることで見えない神を求めていたことに気づかせてくれる。加えて、その神がイエス・キリストであったと知るようにしてくれる。ゆえに、「信仰」は自分自身から出たのではなく、神からの賜物なのである。「**あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です**」（エペソ 2:8）。こうして、神からの賜物である「信仰」が、人を神であるイエス・キリストに、すなわち「**永遠のいのち**」に導く。イエスは、こうした仕組みを次のように言われた。

> 「しかし、わたしが与える水（**愛**）を飲む者はだれでも、決して渇くことがありません。わたしが与える水（**愛**）は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水（**愛**）がわき出ます。」（ヨハネ 4:14）　※（　）は筆者が意味を補足

ここでイエスは、「**永遠のいのち**」に導かれるには、「愛」の水を飲む必要があることを教えられた。この「愛」の水が神の呼びかけであって、その水を飲むことが神の呼びかけに応答することであり、それを「信仰」という。神の呼びかけに応答できるのは、神が呼びかけてくださるからであり、自分自身によるのでは決してない。それゆえ、「愛」の水を飲む「信仰」は神からの賜物であり、その「信仰」で「**永遠のいのち**」へと導かれる。それは、まことの神と、その神と「一つ」であるイエス・キリストを知るようになることを意味するので、イエスは次のようにも言われた。

> 「その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。」（ヨハネ 17:3）

こうして、「統合運動」である「愛」は「信仰」となり、私たちを「**永遠のいのち**」へと導き、イエス・キリストと「一つ」にする。しかし、神からの「愛」の水を飲むのを拒むなら神との「統合」はないので、すなわち「**永遠のいのち**」を持てないので、「肉体の死」と同時に滅びることになる。

さらに言えば、神からの「愛」の水を飲み「**永遠のいのち**」を持つようになっても、やはりこの世界では神が見えないので、そこには絶えず神を「理想」に置き換え、見える安心を求めてしまう誘惑がある。平たく言えば、それは神に安心を求めるのか、それとも富に安心を求めるのかである。キリスト者は、誰もがこの誘惑に陥ってしまうので、この誘惑を「試練」という。そこで神は、キリスト者を「試練」から救い出そうと、神が与えた「信仰」を後押しする。それにより、「信仰」が目に見えない神を目指して動き出すのである。これが、神が用意された脱出の道である。

> 「あなたがたの会った試練はみな人の知らないものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを、耐えられないほどの試練に会わせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えてくださいます。」（Ⅰコリント 10:13）

また、神からの「愛」の水を飲まないで、拒否し続ける人たちもいる。それでも「統合」を目指す「愛」の水に流されているので、その場合は、人との「統合」を目指すことになる。平たく言えば、人から良く思われる自分を目指すのである。だが、それを目指す限り、たとい全財産を貧しい人に分け与えても、あるいは命さえ犠牲にしても、そこには神との「統合」を受け入れる「愛」がないので、何の役にも立たない。

> 「また、たとい私が持っている物の全部を貧しい人たちに分け与え、また私のからだを焼かれるために渡しても、愛がなければ、何の役にも立ちません。」
> （Ⅰコリント 13:3）

このように、神から流れ出る「愛」は、見えない神と結びつく「信仰」の源泉になっている。人を「**永遠のいのち**」に導く源泉になっている。なぜなら、イエス・キリストこそ、まことの神、「**永遠のいのち**」だからである。

> 「すなわち御子イエス・キリストのうちにいるのです。この方こそ、まことの神、永遠のいのちです。」（Ⅰヨハネ 5:20）

したがって、「愛」の水を飲めば「**永遠のいのち**」を持ち、イエス・キリストの御名を信じられるようになり、神と「一つ」になれる。そうなると、人とも純粋に「一つ」になることを目指すようになる。これが「愛」の正しい流れなので、「神の命令」は第一に、イエス・キリストの御名を信じ、そして互いに愛し合うこととなる。

> 「神の命令とは、私たちが御子イエス・キリストの御名を信じ、キリストが命じられたとおりに、私たちが互いに愛し合うことです。」（Ⅰヨハネ 3:23）

この「神の命令」からも分かるように、いくら互いに愛し合っても、イエス・キリストと結びついていなければ「愛」が正しく流れているとは言えないのである。「愛」の運動の中心は神との「統合」であって、イエス・キリストを持つことである。この御言葉は、その「統合」によって、真実に人との「統合」も目指せるようになり、真実に「**互いに愛し合う**」ようになれることを教えている。

愛 ＝ 統合運動 → 神と人の統合 → 人と人の統合

逆に言えば、「**目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません**」（Ⅰヨハネ 4:20）となる。こうして、神から流れ出る「愛」はイエス・キリストを信じる「信仰」の源泉となり、イエス・キリストによって互いを結び合わせ、「愛」のうちに人を建て上げていくのである。

> 「キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分がその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。」
>
> （エペソ 4:16）

このことから、今度は「愛」の実際が見えてくる。

－「愛」の実際－

「愛」とは、私たちを「永遠のいのち」へと導き、イエス・キリストと「一つ」にし、人と人とも「一つ」にする「統合運動」である。異なる人格を「一つ」にする力こそ「愛」である。それで聖書は、「キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし」（エペソ 2:14）と教えている。では、二つのものを一つにするには何が必要か。それは、条件を付けずに相手を受け入れる「無条件の受容」である。条件を付けた途端、「一つ」にはなれない。したがって、「愛」の実際とは「無条件の受容」であり、それはまず「赦しの恵み」を受け取ることから始まる。では、その実際を見てみよう。

❖ 「無条件の受容」

「愛」の実際は、「無条件の受容」である。それは寛容であり、親切であり、妬んだり、怒ったり、自慢したりせず、さらには自分の利益を求めたりもしない。それで聖書は、「愛」については次のように教えている。

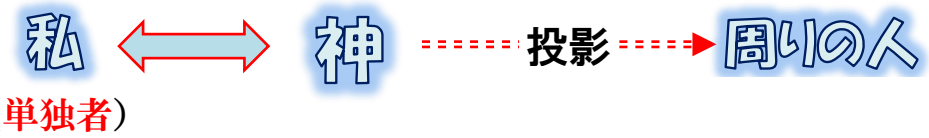
> 「愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、不正を喜ばずに真理を喜びます。」
>
> （Ⅰコリント 13:4-6）

そうした「無条件の受容」の「愛」を実行するには、先にイエス・キリストと、すなわち神と「一つ」になる必要があるので、この「愛」の教えには続きがある。

> 「（愛とは）すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます。」（Ⅰコリント 13:7）　※（　）は筆者が意味を補足

「すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し」とは、何があっても神の言葉を信じ、神に期待するということであり、期待には忍耐を必要とするので、「すべてを耐え忍びます」とある。これは、「心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ」（マルコ 12:30）の言い換えであり、神との全面的な「統合」を言い表している。要するに、イエス・キリストを自分の中心にしっかりと持つことが「愛」の根底であることを教えている。

その理由は、人は神と一対一で向き合って生きている「単独者」だからである。「**私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです**」（使徒 17:28）。人の中心には、神と私だけが存在し、私の前には神しかおられないからである。「**私はいつも【主】を前にしています**」（詩篇 16:8　新改訳 2017）。神の前にも私しかいないし、神が私を背負っておられるからである。「**わたしは背負う**」（イザヤ 46:4）。それで聖書は、「**人の道は【主】の目の前にあり、主はその道筋のすべてに心を配っておられる**」（箴言 5:21）と教えている。このように、人は誰もが一人一人、神と向き合って生きている。まさしく人の中心は神との関係であり、その関係が周りの人との関係に投影される。したがって、神を愛せない者は人も愛せないので、まずは神を愛するように聖書は教えているのである（補巻Ⅰ-25 頁「人は「単独者」である」）。



（**単独者**）

ちなみに、人は「単独者」であることが分からないと、聖書に書かれている福音を深く理解することはできない。そのことを生涯かけて訴えたのがキェルケゴールであった（参考：『後書』、正式名は『哲学的断片への結びの学問外れな後書』）。この「単独者」については、ネットの記事でも書いているので参考にしてほしい（「苦しみ」と「苦しみ」の解決（７）人は「単独者」である　三谷和司 ： 論説・コラム ： クリスチャントゥデイ）。

このように、「愛」の実際は「**無条件の受容**」であり、それはイエス・キリストを、すなわち神を自分の中心に持つことであり、それが土台となって、人への「**無条件の受容**」に向かい、「**愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません**」となる。すると、無条件では愛せない自分の限界に気づき、それによって再び神との関係が構築され、神との結びつきは豊かになっていく。それに応じて、人との関係も豊かになっていき、再び無条件では愛せない自分の限界と出会い、そのことで再び神との関係が構築され、神との結びつきが豊かになっていく。これを繰り返すことで、神と友としての関係が築かれていく。そうしたことから、イエスは、その関係が築かれた弟子たちに、「**わたしはあなたがたを友と呼びました**」（ヨハネ 15:15）と言われたのである。さて、このことから「**互いに愛し合う**」ことの実際が見えてくる。

❖ **「互いに愛し合う」**

聖書は、「愛する者たち。私たちは、互いに愛し合いましょう」（Ⅰヨハネ 4:7）と教えている。その「愛」は神から出ていることを、聖書は続けて教えている。「愛は神から出ているのです」（Ⅰヨハネ 4:7）。ということは、互いに愛し合う者は神を知っていることになるので、そのことが続けて書かれている。「愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています」（Ⅰヨハネ 4:7）。知っている神とはイエス・キリストのことなので、さらにこの先には次のように書かれている。「それで私たちは、真実な方のうちに、すなわち御子イエス・キリストのうちにいるのです。この方こそ、まことの神、永遠のいのちです」（Ⅰヨハネ 5:20）。

こうした一連の教えから、神から出ている「愛」は、イエス・キリストを豊かに持たせる運動であることが分かる。それは、イエス・キリストを心の脇にではなく、心の中心に持たせる運動である。「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです」（ガラテヤ 2:20）。その運動に従えば、「互いに愛し合う」ことの実際は以下のようになる。

未信者に対しては、イエス・キリストを豊かに持てるように御言葉を語り、信者に対しては、イエス・キリストによる「平安」を持てるように御言葉を語る。つまり、イエス・キリストを信じ、信頼するように語ることが、「互いに愛し合う」ことの実際になる。なぜなら、神から流れ出る「愛」は、神との「統合運動」だからである。

未信者に御言葉を語っていれば、未信者が神の呼びかけに応答して救われた際、語られた御言葉がその者のうちにイエス・キリストへの信仰を育てる。また、信者に対して御言葉を語っていれば、信者が困難に遭遇した際、語られた御言葉がその者のうちにイエス・キリストへの信頼を育てる。そのようにすることで、未信者も信者も、イエス・キリストとの結びつきを豊かにしていくことができる。まさしく「愛」は神との「統合」を目指す。「愛」は初めに「永遠のいのち」を得させ、すなわちイエス・キリストを知るようにさせ、それからその関係を豊かにしていくのである。「わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです」（ヨハネ 10:10）。

そして、兄弟に御言葉を語る際に必要なのが、「愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません」という「無条件の受容」の「愛」である。というのも、「無条件の受容」となる「全き愛」がなければ、相手に対する「恐れ」に負けてしまい、御言葉を語ることなどできないからである。「全き愛は恐れを締め出します」（Ⅰヨハネ 4:18）。

そのため、御言葉を語るには「全き愛」を持つ必要がある。それは、「過去」を白紙にする「赦しの恵み」を神から受け取るということである。まずは自分が「赦しの恵み」を受け取って、神の「全き愛」を持つのである。そうすれば、「恐れ」が締め出され、愛をもって御言葉の真理を語ることができ、相手はそれを「聞く」ことで信仰が成長し、キリストを豊かに持てるようになる。「愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができるためなのです」（エペソ 4:15）。これが「互いに愛し合う」ことの実際であり、それは肉による同情ではない。キリストを届ける霊的な同情である。それゆえ、詰まるところ、これは御父および御子イエス・キリストとの交わりを、人は人を介してしているということである。「私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです」（Ⅰヨハネ 1:3）。

このように、「互いに愛し合う」ことの実際は、中心に神を持つように励まし合うことなのである。「永遠のいのち」を得、それを豊かにしていくために、御言葉を信じるように励まし合うことが、互いに愛し合うことの実際になる。そして、中心に神を持つとは、神に愛されている自分を知るということであり、その「愛」を知ることで、真に人を愛することができるようになる。具体的に言えば、自分の罪が神に赦されたことを知るなら、人の罪も赦せるようになるということである。これが神の望む、「互いに愛し合う」ことの実際である。

つまり、中心に神の「愛」を持たない善行は、神が望む「愛」の姿ではないということである。それで聖書に、「私のからだを焼かれるために渡しても、愛がなければ、何の役にも立ちません」（Ⅰコリント 13:3）とある。しかし、この「愛がなければ」の意味は、別の意味に解釈されるのが常である。そこで、「愛」がなければとはどういうことなのか、もう少し深く述べておきたい。

❖ 「愛」がないとは

「愛がなければ、何の役にも立ちません」の一般的な解釈は、一つは「愛」という行為がなければ無価値である。寛容で、親切で、自慢しない行為でないと価値がないという解釈である。もう一つは、動機が「愛」でなければ価値がないということである。自慢したり、高慢になったりする見返りを求めない動機でないと価値がないという解釈である。というのも、この御言葉の続きに、「愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、不正を喜ばずに真理を喜びます」（Ⅰコリント 13:4-6）とあるからである。確かにこれは、「愛」という行為の実際と、

「愛」に根差した動機を教えている。しかし、それは言葉の「表層」に留まる解釈であって、この言葉の「表層」を支える教えが続きに書かれている。「すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます」（Ⅰコリント 13:7）。これは神に向けられた「信仰」の実際であり、神を土台として生きることが書かれている。

つまり、「愛がなければ」とは、神との結びつきがなければということである。結びつきがなければ「永遠のいのち」を持たないので、肉体の死と同時に滅んでしまう。そうなれば、この地上でどんなに「立派だ！」と言われる行為をしようとも意味がないので、「私のからだを焼かれるために渡しても、愛がなければ、何の役にも立ちません」（Ⅰコリント 13:3）とある。大事なのは「愛」を持つこと、すなわち「神」を持つことであるというのが、ここでの意味である。それで聖書にはこうある。

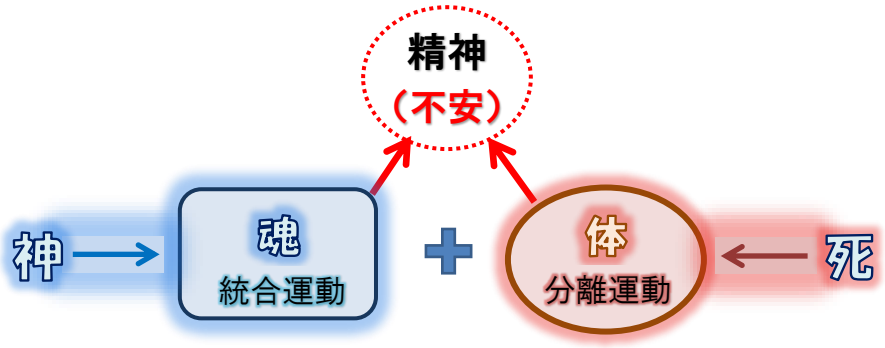
> 「高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」（ローマ 8:39）

「神の愛から、私たちを引き離すことはできません」とは、神との関係が回復したなら、その者は決して滅びることがないということである。イエスはそのことを、わたしを信じる者は「永遠のいのち」を持っていると言われた。「まことに、まことに、あなたがたに言います。信じる者は永遠のいのちを持っています」（ヨハネ 6:47　新改訳 2017）。これこそが「愛」の実際であり、それはイエス・キリストを信じて生きることである。「愛」は「統合運動」なので、それを受け入れ神と結びつき、神を信頼して生きることが「愛」の実際である。「愛がなければ」とは、そういう意味である。これは、人間存在そのものの構造を、神との関係を軸に読み解くことができなければ見えてこない解釈であり、これを本書では「存在論」に根差した解釈と呼ぶ。

そして、神に愛されている自分を知ることを「愛」の水を飲むといい、飲むことを「信仰」という。しかし、人は神の「愛」の水を飲まないで、神との結びつきを持たない「愛」を目指す。いや、正確には「愛」の水が飲めないのでそうなる。それは、神の「愛」に反抗する思いを持っているからである。そこで、次にその実際を見てみたい。

－「愛」に反抗する思い－

人である「精神」に流れてくるのは、神からの「愛」の運動だけではない。悪魔の仕業によって「死」が入り込んだので、「死」の運動も流れてくる。「死」が、人の「体」もこの世界も「有限性」にし、「永遠性」である神を認識できなくさせたので、「体」からは神と人とを断絶させる「分離運動」の情報が「精神」に流れてくる。神は「魂」を介し、神と人とを結合させる「統合運動」の情報を「精神」に流し、「死」は「体」を介し、神と人とを断絶させる「分離運動」の情報を「精神」に流すのである。それは相反する情報なので、その狭間に立たされた人である「精神」はどっちつかずの状態に陥ってしまう。これが、「不安」の構造である。



このように、悪魔の仕業で「死」が入り込んで以来、人である「精神」は「統合運動」を具現化した「御霊の思い」と、「分離運動」を具現化した「肉の思い」とを持つようになった。そして、「肉の思い」は、絶えず「御霊の思い」に反抗する。「肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です。というのは、肉の思いは神に対して反抗するものだからです」（ローマ 8:6-7）。反抗する「肉の思い」の姿は、ちょうど川の流れを変えてしまう大きな岩のようである。というのも、「肉の思い」によって、実際「愛」の流れは変わってしまったからである。「無条件の受容」であった「愛」が、「条件付きの受容」に変わってしまった。「愛」は結びつこうとする運動であり、それは「無条件」で結びつくことを目指すが、「肉の思い」によって「条件付き」で結びつこうとする流れに変わってしまったのである。平たく言えば、異なる運動によって「不安」を覚えた「精神」が、そのように妥協したということである。

❖ 「条件付きの結びつき」

神から流れ出る「愛」は「統合運動」であり、人と神を、さらには人と人を結びつけようとする。それは、異なる者同士を結びつけることになるので、結びつくには「無

条件の受容」が必須となる。そこで、神から流れ出る「愛」は「無条件の受容」による、「無条件の結びつき」を展開する。

愛 ＝ 統合運動 ＝ 無条件の受容 → 無条件の結びつき

しかし、悪魔の仕業で入り込んだ「死」は「肉の思い」を生じさせ、「無条件の結びつき」に対して反抗する。そのため、異なる者同士が結びつくには、反抗する「肉の思い」も満足させる必要がある。その結果、「無条件の結びつき」であった「愛」は、「肉の思い」を満足させるという「条件」が加わり、「条件付きの結びつき」となった。とはいえ、どこまで満足させればよいかは「肉の思い」の反抗に対し、どれだけ妥協するかで異なる。それで「条件付きの結びつき」は、おおよそ三つの形に分類される。

一つ目は、「肉の思い」に全面的に妥協した場合である。その場合は、相手を無視した一方的な結びつきになる。人はこの形を「エロース」と呼び、「肉の愛」とする。例えば、快楽が目的で相手と関わるのがそうである。また、暴力によって相手と関わるのも、相手に逆らうことで関わるのも、そうである。このように、これは自分の「肉の思い」の満足を優先した関わりなので、相手の人格を無視した結びつきとなる。

二つ目は、「肉の思い」に半分程度妥協した場合である。その場合は、相手に「条件」を突きつけての結びつきとなる。人はこの形を「フィリア」と呼び、「人の愛」とする。例えば、親が子どもに良い成績を期待し、良い成績を取ったらほめてあげるのがそうである。また、人に良い容貌を期待し、良い容貌ゆえに関わろうとするのがそうである。このように、これは相手の人格を少し犠牲にした結びつきとなる。

三つ目は、「肉の思い」に一切妥協しない場合である。その場合は、「無条件の受容」を目指す「御霊の思い」が全面に出るので、「無条件」での結びつきとなる。聖書はこの形を「アガペー」と呼び、「神の愛」とする。例えば、ご自分を殺そうとした人たちを、それでも「無条件」で赦し、彼らを受け入れられたイエスの行動がそうである。「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです」(ルカ 23:34)。このように、これは相手の人格を生かした結びつきとなる。

以上のように、「条件付きの結びつき」は、おおよそ三つの形に分類される。ただし、三つ目は限りなく「無条件」なので、「条件付きの結びつき」は概ね二つの関わり方に分類される。ここでは理解を容易にするために三つに分類したが、実際は「条件」の

内容によって細かく分類される。だが、どのように分類しようとも、結びつこうとする運動の源流は神から流れ出ている「愛」である。ただ、神から流れ出た「愛」が「肉の思い」という大きな岩に邪魔され、先述したような形の流れに分類されたにすぎない。すなわち、どのような形で人と関わって結びつこうとも、誰もが素晴らしい「神の愛」を持っているということなのである。とはいえ、「肉の思い」を満足させる「条件付きの結びつき」は、そのまま「苦しみの構図」になっている。

❖ 苦しみの構図

神から流れ出る「愛」は「統合運動」なので、「無条件の結びつき」を目指す。異なる人格をありのままで結びつけようとする。これを「愛する」という。ところが、入り込んだ「死」により、「愛」に逆らう「肉の思い」も入り込み、「無条件の結びつき」は「条件付きの結びつき」になってしまった。それは「肉の思い」に妥協することによる結びつきである。それにより、少しでも相反する二つの思いの狭間での「不安」を回避しようとする。ならば、「肉の思い」に妥協するとは、どういうことなのだろう。「御霊の思い」は隣人を「愛する」ことなので、それに逆らう「肉の思い」は、自分が「愛される」ことを求める。それは自分が承認されることである。つまり、「肉の思い」は、自分が承認されることで満足するので、それに対する妥協である。

しかし、承認されるには、相手の期待に応えなければならない。例えば、親は子どもが「良い成績」を取ることを期待する。すると、子どもの方は「良い成績」を取れば親から良い子だと承認されるので、それを「条件」に親と結びつこうとする。親は親で、自分の子の成績が良ければ周りから「良い親」として承認されるので、そのようにして周囲と関わろうとする（結びつこうとする）。さらに言うと、自分が承認されるというのは、人の関心を引くことでもある。そこで、人は人の関心を引く行動にも出る。例えば、周りが持っていない物を身につけたり、周りとは異なる行動をしたり、はたまた悪いことをしたりして人の関心を引こうとする。関心を引くことができれば、自分の存在が承認されたことになり、「肉の思い」は満足するからである。こうして、人は相手の期待に応えることを「条件」に、さらには人の関心を引くことを「条件」にして、人と関わり、自分が「愛される」（承認される）ことを求める。これが「肉の思い」に妥協した「条件付きの結びつき」の実体である。

そうなると、こうした「条件」は人を拘束する「律法」になる。「ねばならない」という形式の「律法」になる。つまりこれは、結びつこうとする相手に「律法」を突きつけるのである。そのため、相手が「律法」を達成できないと結びつくことができない

ので（関われないので）、苦しみを覚える。この苦しみは「怒り」となって現れる。ここに、「律法」が「怒り」を招くという構図が生まれる。「**律法は怒りを招く**」（ローマ 4:15）。例えば、親は子どもが「**良い成績**」を取ることを期待しても、子どもがその期待に応えられないと、自分の期待をないがしろにされたと感じて苦しみを覚え、その苦しみは子どもへの「怒り」となって姿を現す。

さらに言えば、結びつくための「律法」を再三突きつけても、その「律法」を相手が全く以て達成できなければ、その相手とは結びつくことができず、結びつこうとする「愛」の流れは塞がれてしまう。そうなると苦痛を覚え、相手に対する「敵意」となって姿を現す。例えば、親は子どもが「**良い成績**」を取ることを再三期待しても、子どもがそれにどうしても応えられないと、子どもに対して「敵意」を抱くようになる。ここに、「律法」が「怒り」を超えた「敵意」を生じさせる、という構図が生まれる。「**敵意とは、さまざまの規定から成り立っている戒めの律法なのです**」（エペソ 2:15）。要するに、「**条件付きの結びつき**」には必ず「怒り」や「敵意」が副産物として付きまとい、人を苦しめてしまうということである。その「敵意」は最悪、人々を戦争にまで駆り立てる。まさしく「死」のとげが「罪」（肉の思い）となり、その「罪」の力が「律法」となって人を苦しめているのである。

> 「死のとげは罪であり、罪の力は律法です。」（Ⅰコリント 15:56）

このように、苦しみの真の構図は、愛するのに、「条件」（律法）を付けてしまうことにある。「**無条件では愛せない**」ことにこそ、苦しみの構図がある。端的に言えば、愛したいのに、愛せないから苦しむ。また、人から愛されるには、相手の「条件」を満たす自分を演じなければならないので、これも人を苦しめる。愛されるために相手の期待（条件）に応えようと、相手の好む自分を演じて苦しむ。つまり、人の内側からは「**無条件の結びつき**」を目指す「愛」が流れ出ているのに、それが「死」による「肉の思い」によって邪魔され、上手く流れなくなって人は苦しんでいるのである。「**無条件の結びつき**」を展開する「愛」による「統合運動」が、「死」による「分離運動」（肉の思い）のせいで「**条件付きの結びつき**」しかできなくなり、人は苦しんでいる。

これが苦しみの構図であり、苦しみの原因は、愛するのに（結びつくのに）、「条件付きの結びつき」しかできないことにある。「条件」（律法）なしには、すなわち「無条件では愛せない」ことにある。言い換えれば、これは愛の神と人との間に距離があるということであり、人が苦しみを覚える根本の原因は、神との距離にこそある。しかし、人はこの苦しみの構図に気づかないので、「無条件では愛せない」ことで生じる苦しみを、誤った形で癒やそうとする（本書 157 頁「真の病気」）。

❖ 誤った形での癒やし

人は神の「愛」に動かされ、人と「無条件」で結びつこうとする。しかし、入り込んだ「死」によって「肉の思い」が生じ、結びつこうとする相手に対し、結びつくための「条件」（律法）を突きつけてしまう。「頭が良くなければならない」、「容姿が良くなければならない」、「お金持ちでなければならない」など、それは様々である。そのため、結びつこうとした相手が「条件」（律法）を達成できないと、その相手と結びつくことができないので、結びつこうとする「愛」は不完全燃焼となり、人は「怒り」を覚える。その「怒り」は、「条件」（律法）を突きつけた本人からすれば、自分は「傷ついた」となり、「赦せない」となる。また同時に、「条件」（律法）を突きつけられた相手からすれば、「自分はこんなに頑張ったのに、どうして認めてくれないのか」となり、やはりこちらも自分は「傷ついた」となって「赦せない」となる。これが苦しみの構図である。つまり、「死」のとげが「罪」であり、「罪の力」が「律法」（条件）なのである。「死のとげは罪であり、罪の力は律法です」（Ⅰコリント 15:56）。

さて、人は「赦せない」という苦しみを覚えたならどうするだろう。何としても苦しみを癒やそうとする。そこで、ある人は自分の苦しみを周りに訴え、人の同情を得ることで苦しみを癒やそうとする。また、ある人は突きつけた「律法」が達成できなかった相手に怒り、苦しみを覚えたなら、再び同じ「律法」を突きつけ、何としても達成させることで苦しみを癒やそうとする。また、ある人は「赦せない」と怒り、相手に謝罪を求め、謝罪によって苦しみを癒やそうとする。しかし、人の苦しみの構図は、「無条件では愛せない」ことにあるので、どんなに同情を求めても、あるいは再び「律法」を突きつけても、あるいは謝罪を求めても、それでは何も解決しない。たとえそれが上手くいったとしても、覚えた苦しみに対しては一時の痛み止めにしかならない。そのため、「もう疲れた」と言って人との関わりをやめ、苦しみから逃れようとする者も出てくるが、それでは神から流れ出ている「一つ」となる「愛」からは遠ざかってしまうので、今度は「孤独」という苦しみに襲われることになる。

このように、人は苦しみの構図に気づかないので、誤った形で苦しみを癒やそうとする。そのせいで、逆に苦しみの傷口を広げてしまう。もう一度言うが、人の苦しみは、愛するのに「条件」（律法）を突きつけてしまうことにある。「**無条件では愛せない**」ことにある。手にした「律法」のせいで、愛したくても愛せないから「**自分は傷ついた**」となり、「**赦せない**」となる。そうである以上、苦しみの解決は、自分が手にした「律法」を放棄することでしか得られない。それは、愛の神との距離を縮めることを意味する。だが、人は自分が手にした「律法」はそのままにし、何としても結びつきたい相手に、自分が手にした「律法」を達成させることで苦しみを癒やそうとする。

ちなみに、「律法」を突きつける先は人だけではない。人が目指すのは神との結びつきなので、神に対しても、「**神はこうあるべきだ**」という「律法」を突きつけてしまう。そのため、自分が考える神とは異なる神の話を聞くと納得できないとなり、「**躓いた**」と言って怒る。「**これはひどいことばだ。そんなことをだれが聞いておられようか**」（ヨハネ 6:60）。すると、躓きによる苦しみを癒やそうと、自分が納得できる神の話を要求するようになる。しかし、苦しみとなった躓きは、神に「律法」を突きつけたからであって、「律法」を突きつける限り、いくら自分が納得できる話を聞いて癒やされても、いつかは別の話で躓いてしまう。ゆえに、苦しみが癒やされることはない。しかし、人はこの苦しみの構図に気づかないので、神については、自分が手にした「律法」で納得できる神の話を求め続け、躓きを繰り返してしまう。

つまり結論は、誰かがあなたを苦しめているのでは決してないということである。入り込んだ「死」のせいで、「律法」を通してでなければ人を愛せなくなって苦しんでいる。喩えるなら、神の「愛」を流す霊的な血管が詰まり、流れが悪くなって苦しんでいる。流れが悪くなることを「病気」というが、人は「病気」で苦しんでいる。しかし、人はその事実を知らないので、誤った形での癒やしを求めてしまう。ならば、この場合の正しい癒やしは、「愛」の流れを悪くさせている悪い部位の排除しかない。それは「律法」の排除であり、「律法」を生んだ「肉の思い」の排除であり、「肉の思い」を生じさせた「死」の排除である。それができるのは神だけなので、神は徹頭徹尾、悪い部位を取り除く「癒やし」を目指される。それによって神との距離を縮めさせ、平安を得させようとされる（補巻Ⅰ）。そこで次は、神による「癒やし」である。

－神による「癒やし」－

神は「愛」であり、神からは「愛」が流れ出ている。その「愛」は「統合運動」であるゆえ、「無条件の結びつき」を目指す。この運動が人を動かしている。ところが、入り込んできた「死」よって、この「統合運動」が邪魔されるようになった。それはちょうど、血管にポリープができ、血の流れが悪くなるようなものである。そうなると、脳梗塞を引き起こしたり、心筋梗塞を引き起こしたりと、体は色々な症状で苦しむようになるが、心の苦しみもこれと全く同じ構図である。神から流れ出てくる「愛」の流れが、「死」よる「肉の思い」によって悪くなり、「無条件の結びつき」が「条件付きの結びつき」になってしまったために苦しんでいるのである。正確に言えば、「肉の思い」のために目指す神との距離が埋まらなくなり、それが人を苦しめている。

このように、人は、人を動かす「愛」の流れが悪くなる「病気」で苦しんでいる。「愛」が流れ出る血管に、ポリープ（肉の思い）が出来、本来の流れが滞るようになったことで苦しんでいる。悪魔の仕業によって「死」が入り込み、「死をつかさどる者、つまり悪魔を」（ヘブル 2:14　新共同訳）、その「死」によって「肉の思い」が生じ、「肉の思いは死であり」（ローマ 8:6）、それによって「無条件の結びつき」が、「条件付きの結びつき」にさせられてしまい、苦しんでいる。そのせいで、目指す神に近づけなくなったために苦しんでいる。それはちょうど、本来であれば動くはずの体が動かなくなり、苦しみを覚えるようなものである。

であれば、人の苦しみは悪魔の仕業で入り込んだ「死」によるのであって、本人のせいではない。「死」が、人を無条件で愛させない「罪」となり人の中に住み着き、人を苦しめている。したがって、人を無条件で愛せないのは、もはや「私」ではなく、私の中に住み着いている「罪」である。「ですから、それを行っているのは、もはや私ではなく、私のうちに住みついている罪なのです」（ローマ 7:17）。そうなると、「罪人」は「病人」と同じ立ち位置になる。このことは、イエスの言葉を見ても明らかである。

> 「医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」（マルコ 2:17）

イエスがこのように言われたのは、人を「罪人」という「病人」にした「死」に打ち勝てるのは神だけであり、ご自分がその神であったからである。神であるイエスだけが人の「病気」を癒せる唯一の「医者」であった。それゆえ、イエスは十字架の贖いによって、「死」による「肉の思い」を、すなわち「悪」を人から排除し、本来の「愛」の流れを回復してくださる。そのことで、人の苦しみを癒やしてくださる。ならば、どのような手順で神は「悪」を排除し、人の苦しみを癒やされるのだろう。

❖ 苦しみを癒やす

神は、人が覚える苦しみを「静観」することから始める。それはつまり、人の土台である神は「光」であるゆえ、ただひたすら土台から「光」を照らすことで「闇」の存在を明らかにし、人が自分を苦しめる「闇」と向き合えるようにされるということである。人はその「光」を「**愛せよ**」と命じる心の声として知っているため、それが人の「闇」となる罪を責め立てる。そうなると、人は必死になって愛せないことの弁明をする。「**彼らはこのようにして、律法の命じる行いが彼らの心に書かれていることを示しています。彼らの良心もいっしょになってあかしし、また、彼らの思いは互いに責め合ったり、また、弁明し合ったりしています**」(ローマ 2:15)。しかし、いくら弁明しても、「光」は「**愛せよ**」と責め立ててくるので、ついには人を愛せない自分の罪を認めるようになる。「**私は、自分でしたいと思う善を行わないで、かえって、したくない悪を行っています**」(ローマ 7:19)。そして、神に助けを乞う。

また同時に、神からの「光」は避けられない「肉体の死」を浮き彫りにし、「死の恐怖」と向き合わせ、神に助けを乞えるようにする。こうして、神は「光」を照らすことで人に呼びかけ、人はそれに応答する。この応答が「信仰」であり、それによって十字架の贖いである「**赦しの恵み**」を受け取り、神と「和解」する。その最初の「和解」で、「**永遠のいのち**」を持つようになる(救い)。ただし、その救いは神の「癒やし」の第一歩にすぎない。ここから本格的な「肉の思い」の排除が行われていく。というのも、「**永遠のいのち**」を持たせたことで、神からの「光」が以前にも増して強力になり、そのことが本格的な「肉の思い」の排除に向かわせるからである。加えて、「**永遠のいのち**」を持たせたことで聖霊の助けが得られるようになり、その助けによって聖書の言葉も信じられるようになり、聖書の言葉がさらなる「光」となって人を責め立てるようになる。そのことが本格的な「肉の思い」の排除に向かわせる。そのようにして、神はあくまでも「光」として輝き、そのことで人の「闇」を明らかにし、人が助けを乞うようになるまで「静観」されるのである。

こうして、「光」が輝くことで人は自分の「闇」と向き合うことになる。そうなると、愛せなくて「怒り」を覚えてしまう相手が心に浮かんでくる。そこに今度は聖書の言葉が「**愛せよ**」と命じてくるので、誰もが聖書によって罪の下に閉じ込められてしまう。「**しかし聖書は、すべてのものを罪の下に閉じ込めました**」（ガラテヤ 3:22　新改訳 2017）。これでは、神に助けを乞うしかない。それはちょうど、どうにもならない自分の病気に気づけば、医者に助けを乞うしかないのと同じである。そこで、人は神の前で自分の苦しみとなった罪を言い表すのである。そうすれば、人の「病気」を癒やせる唯一の「医者」である神は、人の苦しみの原因となった罪を、すなわち「肉の思い」を終わらせてくれる。それが、罪を神が無条件で赦すということである。

> 「**もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。**」（Ⅰヨハネ 1:9）

これを、「**赦しの恵み**」を体験するという。この「**赦しの恵み**」の体験は一回だけではない。人は「死」が支配する世界で暮らしているので、一時は「肉の思い」の悪からきよめられて心が神に向いても、しばらくすると「肉の思い」がまた顔を覗かせるようになる。そのため、「**赦しの恵み**」は、苦しみを覚える度に必要とし、この体験は繰り返されることになる。繰り返すことで、次第に「肉の思い」の悪からもきよめられていく。つまり、「死」が支配する世界では、苦しみを覚える「瞬間」が、すなわち苦しみを覚える“**今**”が、神と出会える時となる。その“**今**”は何度も訪れる。

しかし、何度も罪を繰り返し、その度に「**赦しの恵み**」にあずかっていると、本当にこれでよいのかと心配になることがある。だが、何も心配はいらない。それはちょうど、人は病気になることは避けられないので、繰り返し医者の治療を受けるのと同じである。そして、自分の罪を真に認めて「**赦しの恵み**」を受けるという体験を繰り返せば、何が「罪」であるかが分かるようになっていく。それは結局のところ、「律法」の達成を以て自分の義（正しさ）を証明し、そのことで、人にも神にも認めてもらおうとする「承認欲求」だと知るようになる。それは神を頼らず、自らの力で自らを「肯定」しようとする行為であり、自分を高くすることで自分を認めてもらおうとする「傲慢」であることが分かるようになる。すると、次第に「傲慢」の罪を告白するようになり、そのようにして自分を心から低くするようになっていく。する神は、その者を高くされる。「**なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は**

高くされるからです」(ルカ 18:14)。これが、神がなさる「肉の思い」の排除であり、それがそのまま神との距離を縮め、人の苦しみを癒やすのである。

このように、神は「赦しの恵み」によって人の罪を無条件で赦し、苦しみを引き起こした「悪」(肉の思い) から、すなわち愛するのに「条件」を付けさせる「律法」から私たちをきよめ、苦しみを癒やされる。正確に言うと、神の目には人の罪はすでに赦されているので、その事実を知らせることで癒やされる。この癒やしに必要なことは、兎にも角にも自分の罪に気づくことである。そこで神は、人の「苦しみ」を「静観」される。そのおかげで「苦しみ」を覚える自分と向き合うことができる。すると、必ず自分の罪に気づける。というより、自分には罪がないと言うのであれば、それは神の「光」である「神の言葉」が働いていないのであり、神を偽り者にしている。

> 「もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のみことばは私たちのうちにありません。」(Ⅰヨハネ 1:10)

「神の言葉」は誰もが自分の罪に気づけるよう、「あなたの敵を愛しなさい。あなたを憎む者に善を行いなさい」(ルカ 6:27-30) と教え、「無条件の結びつき」以外は罪として説いている。そうすることで全ての人を罪の下に閉じ込めるので、「罪を犯してはいないと言うなら」、それは「神の言葉」が働いていないのである。こうして、「神の言葉」が自分の罪に気づかせ、罪が赦される「赦しの恵み」を受け取らせてくれる。まさに「神の言葉」は、人を責めるためではなく人を助けるためにある。なぜなら、この罪の赦しが人を癒やし、それが人を苦しめてきた「律法」を終わらせるからである。では、なぜ罪が赦されることで癒やされるのか、その仕組みを見てみたい。それを知るには、「肉の思い」の始まりを正確に知る必要がある。

❖ 「肉の思い」の始まり

人の土台は「神の愛」であって、それは「無条件の結びつき」を求める運動であるので、その運動が人を動かしている。そのため、人は人と無条件で結びつくことができないと苦しみを覚える。愛するのに「条件」を、すなわち「律法」の達成を要求すると、本来の運動に制限が掛かり苦しみを覚えてしまう。それはちょうど、歩けるはずの足に制限が掛かって歩けなくなると、苦しみを覚えるのと同じである。

ならば、人が結びつこうとして、最初に「条件」を付けた相手は一体誰なのか。それは信じがたいかもしれないが、「自分自身」である。自分を受け入れるのに「条件」を

付けるようになったことが、「**無条件では愛せない**」ことの始まりである。その後、その「条件」が隣人へと広がり、神へと広がった。そのことは、愛するのに「条件」を付けさせる「肉の思い」がどのように始まったかを見ると容易に分かる。

「肉の思い」は、入り込んだ「死」によって始まった。ゆえに、「肉の思い」の正体は「死」である。「**肉の思いは死であり**」(ローマ 8:6)。この御言葉は、「**肉の思い**」が「**死**」を招くという意味ではなく、「**肉の思い**」の正体は「**死**」であるという意味である。なぜなら、この箇所の原文の構造は、「**肉の思い** is **死**」となっているからである。これについては、この後の「付録」で詳しく説明する（本書 385 頁「文法の話」)。ならば「死」は何かというと、それは終わりに向かって変化し続ける運動であり、この運動が変化しない神と人とを「分離」させてしまった。入り込んだ「死」は、人の体と世界を「有限性」にし、「永遠性」の神と「分離」させてしまった。その「死」が、アダムの罪に伴い入り込んだので、「**一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように**」(ローマ 5:12　新共同訳)、今日では誰もが「有限性」の体で生まれてくることになったのである。

ところが、「有限性」の体では同じ「有限性」しか知覚できないので、すなわち内側で自分を支えている「永遠性」の神は知覚できないので、誰もが「不安」を覚えることになった。これは自分に関しては、自分の外側しか見えなくなったということであり、その外側は神が見えない「有限性」なので、その「制約」された自分の姿に「**恐れ**」を抱くことになった。そうなると、人は「**恐れ**」を抱く自分の姿を何かで覆い隠し、その姿を少しでも良く見せることで「**恐れ**」を見ないようにするしかない。自分を着飾ることで(「条件」を付けることで)、「**恐れ**」を抱く自分を受け入れるのである。これを「肉の思い」という。この「肉の思い」を最初に持ったのがアダムとエバであり、聖書は彼らが「有限性」の体になった途端、二人に何が起きたかを綴っている。

> 「**このようにして、ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った。そこで、彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った。**」(創世記 3:7)

聖書によると、アダムとエバは「有限性」の体になると同時に、今日の私たちと同じように、自分の外側しか見えなくなった。自分の内側を支えている神は見えなくなった。神は、アダムとエバの土台であり、そこからは彼らを生かす「愛」が流れ出ているにもかかわらず、その事実が知覚できなくなったのである。自分に関して知覚でき

るのは、自分の外側だけとなった。この「制約」のせいで、アダムとエバは自分の外側（裸）に「**恐れ**」を覚え、自分の姿を無条件では愛せなくなってしまった（不安）。そこで、「**恐れ**」を覚える外側の姿を「**いちじくの葉**」で着飾ることで、自分自身を愛そうとした。「**恐れ**」を覚える自分の姿を着飾ることで、自分を愛そうとした。その様子が、この創世記 3:7 には見事に描かれている。それゆえ、この続きに、「**私は裸なので、恐れて、隠れました**」（創世記 3:10）と書かれている。

このように、「死」が入り込んだことで、人は自分の姿に「恐れ」を覚えるようになり、自分自身を受け入れるのに、自分の外側が、すなわち自分の「うわべ」が良くなければならないという「条件」を付けるようになった。その流れはこうであった。人の土台は「制約」されない神であり、人は「制約」されない自分を知っていた。ところが、「死」という「制約」が「体」に入り込んだことで「制約」されない自分が見えなくなり、自分の姿に「恐れ」を覚えるようになった。そこで、自分の「うわべ」を良くすることで自分を愛そうとしたのである。こうして、アダム以来、誰もが自分の姿に「恐れ」を覚えるようになり、「条件」を付けて自分を愛するようになった。

正確に言えば、入り込んだ「死」によって、人は神に愛されている自分が見えなくなったので、自分は神に責められていると感じるようになったということである。人はその責めを「恐れ」、自分の姿を直視できなくなり、自分の姿を見る場合は何かで自分の姿を覆い隠してからとなったのである。これこそが、自分を受け入れるのに「条件」を付けるようになったことの始まりである。つまり、人は心の奥で「責め」を感じるようになったので自分の姿を「恐れ」、その「恐れ」から、「うわべ」を良くするという「条件」を付けて自分を愛するようになったということである。その様子を聖書は、「**私は裸なので、恐れて、隠れました**」（創世記 3:10）と綴っている。これが「肉の思い」の始まりである。

そして「肉の思い」は、「**こんな自分だから神に愛されない**」という思いとなり、神に愛されるには「条件」が必要であるという思いを抱かせた。こうして、人と神との間に距離が生まれてしまい、ここに人の苦しみが始まった。なぜなら、人は神との「統合運動」に動かされているからである。そこで神は、「**あなたは、どこにいるのか**」（創世記 3:9）と呼びかけ、人との距離を縮めようとされたのである。これが「神の福音」の開始である。それは、「肉の思い」の始まりと同時に始まった。以上の風景が理解できると、どうして罪が赦されることで癒やされるのか、その仕組みも分かる。

❖ 癒やされる仕組み

「死」は「制約」であり、「制約」が入り込んだことで人は本来の「行い」ができなくなり、自分の姿に「恐れ」を覚えることになった。この「恐れ」が「罪責感」の源になり、誰もが潜在意識に於いて、「**こんな罪深い自分が愛されるはずもない**」というセルフイメージを持ってしまった。そのせいで、愛されるには「うわべ」を良くしなければと思うようになった。こうして、人は人に対して良い「うわべ」という「条件」を求めるようになり、「**無条件では愛せない**」となった。互いの「うわべ」を比べ、それが少しでも良くないと愛せなくなった。しかし、それは「魂」を介して流れ出ている「**無条件で愛せよ**」と命じる「御霊の思い」に真っ向から逆らっているので、そのことで誰もが苦しみを意識するようになったのである。

死 → **自分の姿を** **恐れる** → **愛するのに** **条件** **を付ける** → **苦しみ**

したがって、苦しみから解放されるには、「**こんな罪深い自分が愛されるはずもない**」というセルフイメージを壊すしかない。そこで、神は罪を言い表すよう人に命じ、言い表したなら無条件で赦すと言われたのである（**赦しの恵み**）。それは、罪人であっても関係なく、無条件で愛される自分を知るようにさせるためである。それを知れば、「**こんな罪深い自分が愛されるはずもない**」というセルフイメージが崩れ始める。それは「肉の思い」による「条件」から、すなわち神の「愛」に逆らう「悪」からきよめられ、神との距離が縮まっていくことを意味する。そこで聖書は、「**もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます**」（Ⅰヨハネ 1:9）と教えている。この「**赦しの恵み**」の経験により、人は自分を愛せるようになり隣人も愛せるようになる。「**あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ**」（マルコ 12:31）。これが癒やされる仕組みであり、そこには多くの罪が赦されれば、多く愛せるようになるという原理がある。

> 「ですから、わたしはあなたに言います。この人は多くの罪を赦されています。彼女は多く愛したのですから。赦されることの少ない者は、愛することも少ないのです。」（ルカ 7:47　新改訳 2017）

このように、人の「苦しみ」は、「**こんな罪深い自分が愛されるはずもない**」という、「うわべ」で人の価値を判断する「肉の思い」から来ているので、神は無条件で人を愛する「**赦しの恵み**」を実行し、その「肉の思い」を壊される。それによって「苦しみ」から解放し、人を癒やされる。ゆえに、「苦しみ」はそのまま、神の癒やしを受け取る

チケットになる。「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました」（詩篇 119:71）。そして、誰もが「苦しみ」の中で生きているので、神の癒やしを受け取るチケットを持っている。そのような流れで、神は「肉の思い」による「律法」（条件）を終わらせ、すなわち「条件付きの結びつき」を終わらせ、ご自分の立てられた「永遠の契約」を成就されるのである。

❖ 「永遠の契約」の成就

私たちは何度も「苦しみ」に出会うが、神から流れ出てくる「愛」は、「苦しみ」の原因となった罪に気づかせ、罪を無条件で赦してくださるイエス・キリストに導く。神から流れ出てくる「愛」は、そのようにして神との真実な「統合」に向かわせてくれる。こうして、私たちにとってイエス・キリストは真実な神となる。それこそが、神がアブラハムに立てられた「永遠の契約」、「わたしがあなたの神、あなたの後の子孫の神となるためである」（創世記 17:7）の成就にほかならない。

そして、神から流れ出てくる「愛」は、私たちの罪を無条件で赦される真実な神イエス・キリストへと導くことで、自分を無条件で愛せるようにし、それにより隣人との真実な「統合」にも向かわせてくれる。「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」（マルコ 12:31）。そのことで、「神の愛」を全うさせてくれる。「もし私たちが互いに愛し合うなら、神は私たちのうちにおられ、神の愛が私たちのうちに全うされるのです」（Ⅰヨハネ 4:12）。こうして、私たちが初めから滞在している地、すなわち「神の愛」の全土を所有できるように神がしてくださるのである。それこそが、神がアブラハムに立てられた「永遠の契約」、「わたしは、あなたが滞在している地、すなわちカナンの全土を、あなたとあなたの後のあなたの子孫に永遠の所有として与える」（創世記 17:8）の成就にほかならない。

つまり、神の「愛」は、神に無条件で愛されている自分が認識できないことの「不安」を壊し、神の「愛」が私たちの内に全うされていることを、すなわち神とは「一つ」であることを知るようにする。そのことで、裁きの日に復活する「確信」を持たせてくださるのである。「こうして、愛がわたしたちの内に全うされているので、裁きの日に確信を持つことができます」（Ⅰヨハネ 4:17　新共同訳）。ここに、神が人類に立てられた「永遠の契約」の成就がある。

このように、神から流れ出る「愛」が私たちをイエス・キリストに導き、さらには隣人との真実な「統合」にも向かわせ、神と分離していた「不安」を、神とはすでに「一

つ」である「確信」に変えてくれるのである。イエス・キリストは、そのために十字架に架かり、人への無条件の愛を明らかにし、「神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます」（ローマ 5:8）、さらには「恐れ」の源である「死」を持ち込んだ悪魔も十字架で滅ぼしてくださった。「悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし」（ヘブル 2:14）。それが、神が人類に最初にされた約束、「彼（イエス）は、おまえ（悪魔）の頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとにかみつく」（創世記 3:15 ※（　）は筆者が意味を補足）の成就であり、そして神が人類に立てられた「永遠の契約」の成就である。その内容を一言でいえば、神と「一つ」になるということにほかならない。

神は、「父、子、聖霊」から成り、互いは無条件で受容し合い一つ思いを共有するので、それは「一つ」の実体である（三位一体の神）。こうした神に於ける互いの関わりを「愛」といい、「愛」は神から流れ出ているので、「父、子、聖霊」が「一つ」であるように、その「愛」の流れが神と人を「一つ」にするのである。すると、「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです」（ガラテヤ 2:20）となる。それは、イエス・キリストが十字架で明らかにされた人の「真実な姿」を、自分の姿として持つことを意味する。まことに「愛」は、神と人を、人と人とを「一つ」に結ぶ帯である。「愛は結びの帯として完全なものです」（コロサイ 3:14）。

では、人の「真実な姿」とは何なのだろう。それは、罪人であっても無条件で愛されている姿であり、すなわち罪が赦されている姿である。それは紛れもなく、「神の子」の姿にほかならない。「愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです」（Ⅰヨハネ 3:2）。それゆえ、「神の子」としての姿を、自分の姿として承認することが、イエス・キリストを中心に持つということであって、真に神と「一つ」になることを意味する。これを「神の愛」を持つといい、「神の愛」を持てば、人に対しても「無条件の受容」ができるようになっていく。なぜなら、愛されていることを知る者だけが、愛することができるからである。

こうして、神から流れ出た「愛」は全うされていき、「永遠の契約」の成就となる。それは、神からの愛が見えなかった「不安」が、今度は神からの愛が見える「平安」に変わることを意味する。これが、神による「癒やし」である。ただし、人を癒やす「赦しの恵み」の経験は、先述したように一回限りではない。それは「天国」に引き上げられるまで、繰り返される。そこで今度は、なぜそうなるのかを説明したい。

－繰り返す－

神は「愛」であり、「愛」は「統合運動」である。その神の「いのち」が人の土台なので、そこから「愛」の水がわき出てくる。「愛」の水が、その人のうちで泉となり、「永遠のいのち」である神との統合に向かって流れ出てくる。「わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます」（ヨハネ 4:14)。その「愛」の水は枯渇することなく、わき出てくるので、神との統合には終わりがない。つまり、人のうちからわき続ける「愛」は、一旦、神との統合を果たせば（「永遠のいのち」を得させれば)、統合を果たした神との関係を、さらに豊かなものにしていくということである。「わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです」（ヨハネ 10:10)。その結果、神との関係は、「知り合い」から「友」と呼び合える関係にまで押し上げられる。「わたしはあなたがたを友と呼びました」（ヨハネ 15:15)。言い換えれば、人の側は、神との統合を豊かにすることを拒む罪に何度も気づかされ、何度も罪が赦される「赦しの恵み」を経験するということでる。そのようにして、神に愛されていることに「確信」を持つことができるようになる。「こうして、愛がわたしたちの内に全うされているので、裁きの日に確信を持つことができます」（Ｉヨハネ 4:17　新共同訳)。このように、「赦しの恵み」は繰り返され、神と人との距離は縮まっていき、「知り合い」から「友」になっていく。そこで、ここではその説明をしたい。それは、神と人との出会いの場の話から始まる。

❖　神と人との出会いの場

この世界は、生成と消失を繰り返す。この世界は、消失という「死」に向かって変化しながら動き続け、立ち止まることができない。したがって、この世界では、「過去」、「現在」、「未来」という区別が生まれる。そうであっても必ず「死」が訪れ、「現在」も「未来」も、間違いなく「過去」になる。こうした世界の性質を「有限性」という。さらに言えば、「有限性」では全てが消失し、全ての存在が「否定」されるため、これを「死の世界」という。人が暮らす世界、それはまさに「死の世界」なのである。ならば、神が暮らす世界は、どうなっているのだろう。

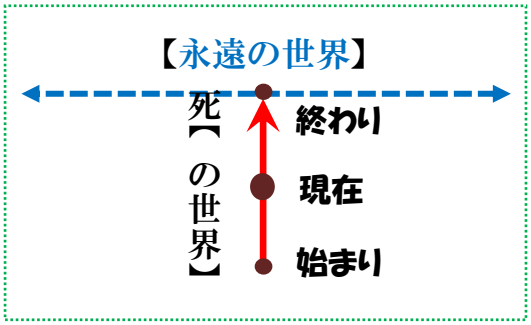
神が暮らす世界は、生成と消失を繰り返すことはない。そこでは消失に向かって変化することがないので、昨日も今日も、神はとこしえに変わることがない。「イエス・キリストは、昨日も今日も、とこしえに変わることがありません」（ヘブル 13:8　新改訳 2017)。それはまさしく動かない世界である。こうした世界の性質を「永遠性」という。そこでは「死」がないので全ての存在が「肯定」される。これが神の暮らす世

界であって、そこは不動の「いのち」が支配する。それは人が暮らす世界とは真逆である。ならば、神と人との出会いの場はどこなのだろう。

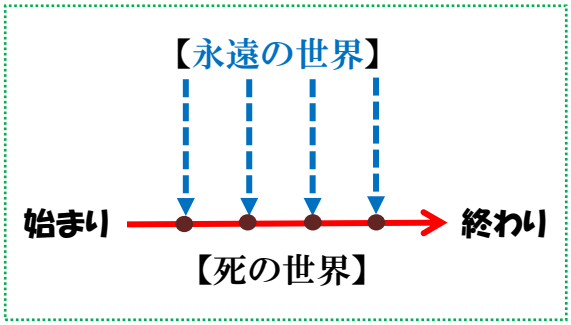
「有限性」は動き続け、「永遠性」は動かないので、動く「有限性」から、動かない「永遠性」を見ると、それは目の前を通り過ぎるだけである。ただ通り過ぎるのではなく、この世界の「有限性」は光の速度で動いていて、あまりにも早いので、全く動かない「永遠性」が目の前を通り過ぎても認識すらできない。それゆえ、この世界では神が見えない。ならば、神と人との出会いは不可能なのだろうか。不可能ではない。「有限性」を横軸にすれば、「永遠性」は「有限性」の「瞬間」に突き刺す「点」となり、神とは「瞬間」、「瞬間」の“今”出会うことができる。つまり、神の目には、人が暮らす「死の世界」の「過去」、「現在」、「未来」、その全てが「永遠の世界」に突き刺さった「点」なのである。聖書は、この神の感覚を次のように表現している。

> 「しかし、愛する人たち。あなたがたは、この一事を見落としてはいけません。すなわち、主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです。」（Ⅱペテロ 3:8）

神の目には、この世界での「時間」は「点」でしかないので、「一日は千年のようであり、千年は一日のようです」とある。要するに、神の御手の中には、この世界の「始まり」から「終わり」までの全てがあるということである。それゆえ神は、「わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。初めであり、終わりである」（黙示録 22:13）と言われたのである。そうなると、神の「永遠の世界」から、始まりがあって終わりがあるこの「死の世界」を見ると、それは「点」でしかない。逆に、始まりがあって終わりがあるこの「死の世界」から「永遠の世界」を見ると、それはいつの時代でも「死の世界」に突き刺さった「瞬間」であって「点」であり、“今”である。そうした関係を図にすると、次のようなイメージになる。



＜イメージ 1＞



＜イメージ 2＞

それで、キリストは十字架の贖いを実行し、この「死の世界」から「永遠の世界」に戻られた後、その霊において、「死の世界」では「過去」となるノアの時代にも行くことができた。「**その霊において、キリストは捕らわれの霊たちのところに行って、みことばを語られたのです。昔、ノアの時代に、箱舟が造られていた間、神が忍耐して待っておられたときに、従わなかった霊たちのことです**」（Ⅰペテロ 3:19-20）。

このように、神と人との出会いの場は、この「死の世界」では「瞬間」の“**今**”である。そこで、いつの時代も変わることのない神は、変わらない福音を携え、“**今**”人と出会ってくださる。ゆえに、「**確かに、今は恵みの時、今は救いの日です**」（Ⅱコリント 6:2）となる（本書 277 頁「クリスチャンの生き方」）。だが、人は“**今**”神と出会って「**赦しの恵み**」を経験しても、その喜びが継続せず、再び苦しみを覚える。それは、手にした喜びがこの世界ではいつの間にか「過去」となり、再び存在が「否定」されるからである。そうなれば苦しみを覚えるので、また神と出会って「**赦しの恵み**」を経験し、喜びを味わう時が来る。これを繰り返すことで神への「愛」が成長し、この「死の世界」にあっても動じなくなっていく。そこで次は、神と出会う「瞬間」の“**今**”を持つのはいつかを考察したい。

❖ 神と出会う「瞬間」

神と出会える「瞬間」は、どうにもならない「苦しみ」を覚える時である。その時、人は立ち止まることができるので、それこそが神と出会える「瞬間」となる。そして、「苦しみ」は自分の存在が「否定」されることへの意識であり、その「否定」は、神と人とを分離した「死」に起因し、その「死」による状態を「罪」というので、「**死のとげは罪であり**」（Ⅰコリント 15:56）、人が「苦しみ」を覚える時は、自分の「罪」の状態と出会っている時である。その時、「**神さま。こんな罪人の私をあわれんでください**」（ルカ 18:13）と祈ることができれば、それが神と出会う「瞬間」の“**今**”となり、それこそが「**赦しの恵み**」を受け取る時となる。

> 「**もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。**」（Ⅰヨハネ 1:9）

「苦しみ」は何であれ、自分の存在が「否定」されることへの意識であり、その意識は神（肯定）を求めているからこそ生じる。神を求めているのに、神と分離している（神が見えない）ために、「苦しみ」が生じている。つまりそれは、心を神（肯定）に向けたくても、向けられないことの意識である。神を信じられないことへの意識であり、

それが罪である。「**罪についてとは、彼らがわたしを信じないこと**」（ヨハネ 16:9　新共同訳）。したがって、「苦しみ」を覚える時は「罪」に出会った時であり、それこそが神と出会える「瞬間」の“**今**”になる。それゆえ、「苦しみ」を覚えたなら、「苦しみ」を神に言い表せばよい。それが神に「罪」を言い表すということであり、そうすれば「**罪が赦される**」体験ができるというのがこの御言葉の教えである。そのことを示す良い例が、中風で苦しんでいた人がイエスのもとに運ばれて来たときの話である。彼は、何も語らず、表情だけで自分の「苦しみ」をイエスに言い表した。それは自分の「罪」を言い表すのと同じだったので、「**子よ。あなたの罪は赦されました**」（マルコ 2:5）と、イエスは言われたのである。こうして、彼は「**罪が赦される**」体験をした。それから、イエスは彼の病気も癒やされたので、彼は歩き出した。

他にも、アダムが神に、「**私は園で、あなたの声を聞きました。それで私は裸なので、恐れて、隠れました**」（創世記 3:10）と、自分の「苦しみ」を言い表したことがあった。するとその後、神によって皮の衣を着せられ、裸であることの「恐れ」が取り除かれた。「**神である【主】は、アダムとその妻のために、皮の衣を作り、彼らに着せてくださった**」（創世記 3:21）。そのことで、アダムも「**罪が赦される**」体験をしたのである。このように、人が「苦しみ」を神に訴えると、「**罪が赦される**」体験ができる。それは、「苦しみ」は何であれ「否定」への意識であり、「否定」が「罪」だからである。したがって、「罪」を言い表すということに対して、身構える必要は全くない。ただ、「苦しみ」を神に訴えればよいからである。

ならば、「苦しみ」を覚える時、人はいつも神に出会えるのかというと、そうはいかない。それは神と出会える「瞬間」が来たというだけであって、そこでは「苦しみ」を神と出会う機会とするのか、それとも見える安心に逃げる機会とするのかが問われる。つまり、「苦しみ」を覚える時は、神と出会う「信仰」を働かせるかどうかが試される「試練」なのである。そこで聖書は、「試練」に会うときは喜べと教えている。「**私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい**」（ヤコブ 1:2）。というのも、その時「信仰」を働かすことができれば、見えない神を信じる忍耐が生じ、「信仰」が成長するからである。ゆえに、先の御言葉の続きに、「**その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります**」（ヤコブ 1:4）と書かれている。まさしく「試練」を通して、人は神との関係を築いていくことができる。

しかし、「苦しみ」を通して神と出会っても、「有限性」の中では、その出会いもすぐに「過去」になり、再び流れる時間の中で、日々の暮らしが始まる。すると、いつの間にか互いを比べるようになり、「**こんな罪深い自分が愛されるはずもない**」という「肉の思い」に襲われてしまう。その折、何らかの困難な出来事に遭遇すると、台頭してきた「肉の思い」が困難な出来事と合体し、具体的な「苦しみ」となる。こうして、再び神と出会う機会が、すなわち「試練」が訪れる。そこで、再び「信仰」を働かせて神と出会い、罪が赦される「**赦しの恵み**」を経験すれば、神への「愛」が以前よりも強く創造されていく。イエスはそれを、「**赦されることの少ない者は、愛することも少ないのです**」（ルカ 7:47　新改訳 2017）と言われた。これは「有限性」の世界で暮らす限り繰り返されるため、神への「愛」を成長させることができる。神の「愛」が目指す「統合」は、このように一回限りの「信仰」で実現されるのではなく、「信仰」の決断が繰り返されることで実現する。それができるは、神との豊かな「統合」を得るようにと、キリスト・イエスが私たちを捕らえてくださっているからである。

> 「わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません。何とかして、自分がキリスト・イエスに捕らえられたところを、捕らえるために努めているのです。」（ピリピ 3:12　私訳）※ 尚、この私訳に関しては第一巻 190 頁「捕らえられたところの自分を捕らえる」を見よ

まことに、私たちは「信仰」に始まり、「信仰」へと進む。「**信仰に始まり信仰に進ませる**」（ローマ 1:17）。「**赦しの恵み**」に始まり、「**赦しの恵み**」へと進み、神との豊かな「統合」が築かれていく。ということは、なぜ自分はまたしても罪を犯すのかと嘆く必要はない。なぜなら、誰もがこの世界では罪人の状態（神が見えない状態）にあり、神の治療を繰り返し必要とするからである。それでイエスは、ペテロから何度まで兄弟の罪を赦すべきかを尋ねられると、「**七度まで、などとはわたしは言いません。七度を七十倍するまでと言います**」（マタイ 18:22）と答えられたのであった。

このように、「有限性」の世界では、神と出会える「瞬間」は自分の存在が「否定」され、「苦しみ」を覚える時である。そして、人は気づかないだけで、常に「苦しみ」の中にある。神と人とを分離する「死」のただ中で、人は絶えず「苦しみ」を味わっている。言い換えれば、神と分離されたこの状態こそが「罪」であり、人は絶えず「罪」の「苦しみ」を負っている（本書 72 頁「「罪」について」）。その「苦しみ」と向き合わせてくれるのが困難な出来事であり、人はそれを患難と呼ぶ。つまり、患難との遭遇こそが神と出会う時となる。そこで聖書は、「**それればかりではなく、患難さえも喜ん**

でいます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです」（ローマ 5:3-4）と教えている。患難に出会う度に、それを神と出会う時とするなら、心の中に「神の愛」の領土を拡大することができ、神との関係はより豊かなものになっていく。こうした営みは、言ってみれば「苦しみ」を通して「問い」を抱き、その答えを神に聞くということでもある。

❖ 「問い」の答えを神に聞く

「苦しみ」を覚えるというのは、自分の存在を制約する「否定」と出会い、自分の限界に気づいたということである。それは自分の存在が「否定」されている意識であり、その意識は神（肯定）を知っているからこそ生まれる。それゆえ、この意識が「問い」を持たせる。なぜなら、人の土台は神であって、神は人の存在を「肯定」するからである。人を支える神は「いのち」（存在）なので、それが「死」（非存在）に制約されると、「なぜそうなるのか」となり、それは真剣な「問い」となる。まさに現状の人間は、「存在」と「非存在」の混合物であって、本来持っているはずの「存在」を、「非存在」に制約されているために、そこに真剣な「問い」を持ってしまう。具体的には、次のようにして「問い」を持つ。

人は何が善いことで、何が悪いことかを知っている。なぜなら、人の土台は善悪を知る神だからである。しかし、人は善いことを知りながらもそれを行わず、自分が憎む悪を行なってしまう。そのため、なぜ自分はそうなのかと真剣な「問い」を持つ。「私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行っているからです」（ローマ 7:15）。それは本人が意識しなくても、自分の存在を「否定」する「罪」（死）に気づいたということである。

また、人を支えているのは神であるゆえ、人は朽ちない「永遠」を知っている。しかし、人を待ち受けているのは「肉体の死」なので、自分は死んだらどうなるのかと、真剣な「問い」を持つ。これは、どうすれば死から逃避できるのかという「問い」でもある。その「問い」を持ったことで、本人が意識しなくても、それは自分の存在を「否定」する「罪」（死）に気づいたということである。

また、人は神に支えられているので、人は心が満たされる神の「愛」を知っている。しかし、この世界では、何をしても心が満たされない。何をしても一時の満足しか得られず、全ては過ぎ去って消えてしまう。全ては「空の空」（伝道者 1:2）であって、全ては「虚無」でしかない。そのため、自分は何をすれば心が満たされるのかと、真

剣な「問い」を持つ。それは本人が意識しなくても、自分の存在を「否定」する「罪」（死）に気づいたということである。

他にも、人の土台は人の存在を「肯定」する神であるゆえ、人の存在を「否定」してくる、すなわち「制約」する出来事に対しては真剣な「問い」を持つ。例えば、暮らしを「制約」する戦争に対しては、「どうして戦争があるのか」と疑問を持ち、体の「制約」に対しては、「なぜ生まれながらに身体に差があるのか」と疑問を持つ。そのようにして、真剣な「問い」を持つ。それは、まさに人を苦しめている「罪」に気づいたからであって、「罪」とは入り込んだ「死」による「否定」の運動であり、「制約」である。「死のとげは罪であり」（Ⅰコリント 15:56）。

だが、人は真剣な「問い」を持っても答えを見つけられない。というより、この世界では答えが見つからないために「問い」となる。せっかく「問い」を持っても答えを見つけられないので、人は「問い」と向き合わない。いや、この世界の見える安心で、「問い」を覆い隠してしまう。しかし、いくら覆い隠しても、この世界の見える安心はいずれ「過去」となって「虚無」に服すことになるので、神は人を静観される。同時に、神は人の心に「光」を照らすことで、人を苦しめている「闇」を明らかにされる。そのようにして、神はこの世界に対する「問い」を人の心の表に引きずり出し、人に真剣な「問い」を再び持たせようとされる。その結果、再び「問い」に向き合うことができたなら、その時、人は神の前にへりくだり、神に「問い」の答えを聞こうとする。すると神は、聖書を通して答えてくださる。例えば、罪を犯してしまう「問い」に対しては、「赦しの恵みを用意してあるから」と答え、「肉体の死」への「問い」に対しては、「永遠のいのちが与えられるから」と答え、「空の空」への「問い」に対しては、「無条件で愛しているから」と答えてくださる。そうなると、それを信じるのか、信じないのかの決断が迫られるので、信じる決断をすれば、聖書の言葉は生きた「神の言葉」となって、心は癒やされていく。

このように、「苦しみ」を覚えるというのは、自分の存在を「制約」する「否定」に出会ったということであり、それこそが人を苦しめる「罪」であって、「罪」との出会いが人に真剣な「問い」を持たせてくれるのである。その「問い」は、人の力では解決できないため、「問い」を真剣に持てば持つほど、その人は神の前にへりくだることができる。「問い」の答えを、神に聞くことができる。すると、神は聖書を通して答えてくださるので、それを信じることで聖書は「神の言葉」となり、心は癒やされていく。しかし、癒やされても、この世界は神の「肯定」を「否定」する「死の世界」なので、

そこには新たな「問い」が生まれる。こうして、「問い」が繰り返され、その度に聖書を通して神と出会い、癒やされていく。このことから、聖書とは何かが確定する。

❖ 聖書とは何か

聖書とは何なのだろう。それは歴史的な資料なのだろうか。確かに、聖書には歴史の出来事が記されている。しかし、そうした出来事は自分が体験する歴史の型であって、そこでの神は、今の私たちに語られているのである。つまり、聖書とは、神が“今”私たちに語りかけている「神の言葉」であり、それゆえ、人は聖書を通して神と具体的に出会える。ただし、それには自分が体験している歴史に対し、真剣な「問い」を持たなければならない。真剣な「問い」がなければ人は神に聞かないので、聞かなければ聖書は「神の言葉」にならない。人が「問い」の答えを求めて神に聞こうとするから、神が啓示された聖書は「神の言葉」になる。聞こうとしなければ、聖書は自分と関わりがない歴史的な資料で終わってしまう。

そこで、神は先述したように、人に「問い」を持たせようとされる。そして、聖書の中に「問い」の答えを見つけさせ、それを信じさせることで人を癒やそうとされる。ゆえにイエスは、「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります」（マタイ 7:7）と教えられたのであった。したがって、真剣な「問い」を持ち、その答えを神に求めて聖書に聞こうとするのが、聖書の霊的な読み方となる。なぜなら、その時は聖書に聞いた答えを信じることができ、聖書は「神の言葉」となるからである。しかし、人は聖書記事の資料の正しさを証明することで、聖書を「神の言葉」にしようとする。その場合の「神の言葉」には、人を癒やす力は全くない。あくまでも聖書の言葉は、それを聞いて信じるからこそ、人を癒やせる「神の言葉」となる。ならば、真剣な「問い」を持つにはどうすればよいのだろう。

真剣な「問い」を持つには、「苦しみ」と向き合うしかない。それは困難を通して自らの限界を知り、自分の「弱さ」を認めることを意味する。認めれば、「問い」は真剣な「問い」となって、その人を神の前にへりくだらせ、答えを神に求めさせてくれる。そういう意味では、「弱さ」のうちにこそ神の力が完全に現れ、聖書は真実に「神の言葉」となる。「しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」と言われたのです」（Ⅱコリント 12:9）。こうして、「弱さ」のうちにあってこそ、「問い」は真剣な「問い」となり、聖書は「神の言葉」となって人を癒やすのである。

そして、この地上は、神の「いのち」を「否定」する「死の世界」なので、この地上で暮らす限り、何度でも自分が「否定」される「苦しみ」と出会う。そうなると、出会う「苦しみ」を通して新たな「問い」を持つことができるので、その時、神の助けによって自分の「弱さ」を認めることができれば、その「問い」は真剣な「問い」となる。そうなれば、出会った「苦しみ」の「問い」を神に告白し、神に答えを求めることができる。こうして、「問い」は自分を「否定」する「苦しみ」から生じ、その「否定」を「罪」というので、「問い」の答えを神に聞くことは、自分の罪（問）を言い表し、神の赦し（答え）を受け取る作業となる。「**もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます**」（Ⅰヨハネ 1:9）。この作業が、「天国」に行くまで繰り返される。それによって人は癒やされていき、神との関係は親密になっていく。神との関係は、「**知り合い**」から「**友**」と呼び合える関係にまで押し上げられていく。

このように、聖書とは、神が“**今**”私たちに語りかけている「神の言葉」であり、そこには、どうにもならない私たちの「問い」（苦しみ）への答えがある。「問い」は、神の「いのち」が「否定」されることで生じるので、この「否定」の世界にいる限り、「問い」がなくなることはない。そのため、この世界で暮らす限り「問い」の答えを聖書に聞けるので、私たちは神と出会える「瞬間」を失うことがない。それは自分の罪に気づいて神にあわれみを乞い（神に問いの答えを求め）、罪が赦されることを（問いの答えを得ることを）繰り返すということである。そのことで、多くの罪が赦される体験ができ、多く神を愛せるようになっていく。「**だから、言っておく。この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさで分かる**」（ルカ 7:47　新共同訳）。

つまり、神から流れ出る「愛」は「肯定」なので、神から流れ出る「愛」は「否定」が支配する中で暮らす人に対しては「問い」を持たせ、その答えを聖書に求めさせ、聖書を「神の言葉」として食べさせるのである。それは、「否定」の「否定」であって、これが「神の福音」の真実にほかならない。こうして、神から流れ出る「愛」は、人への「否定」を「否定」し続けることで、神と人とを「一つ」にし、人を癒やしていく。そういう意味では、神から流れ出る「愛」は、神が人を癒やすために定めた新たな「規定」である。そこで、新たな「規定」という視点で「神の愛」の総括をしたい。

－新たな「規定」－

この世界は滅びに向かって動き続けている。そのため、“今”を持とうとしても、“今”を持つことができない。“今”を持ったと思っても、それはすぐに「過去」となるからである。「未来」もまた、やがて「過去」となる。そのため、「過去」も「未来」も定まらない。全ては、“今”が動き続けるからである。このことが「不安」の原因であり、そこから脱出するには、動かない不動の“今”を持つしかない。そして、不動の“今”とは神であるので、神であるイエス・キリストを持つことが不動の“今”を持つことになる。その方は「愛」であるゆえ、イエス・キリストを持つことは、「神の愛」の「規定」の中で生きることを意味する。それが人を「不安」から「平安」へと導き、人を癒やす。つまり、人は滅びに向かって動き続ける「規定」の中で生きてきたが、イエス・キリストを持つキリスト者になったことで、その「規定」の歴史は終わり、新たな「規定」の歴史が始まったということである。

> 「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」（Ⅱコリント 5:17）

では、新たな「規定」とは一体何なのだろう。

❖ 新たな「規定」

イエス・キリストを持つことは不動の“今”を持つことであり、不動の“今”を持てば、定まらなかった「過去」も「未来」も定まったものとなる。これが新たな「規定」であり、イエス・キリストを信じて生きるキリスト者は、新たな「規定」の中に入れられてしまったのである。その「規定」は第一に、「死」から「いのち」に移され、「永遠のいのち」を持たせられたということである。

> 「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じている者は、永遠のいのちを持っていて、裁きに会うことがなく、すでに死からいのちに移った状態にあるのです。」
>
> （ヨハネ 5:24　私訳）

この第一の「規定」によって、私たちは二度と「死」が支配する世界には戻れなくなった。「神の国」で暮らす者にされてしまった。「いいですか。神の国は、あなたがたのただ中にあるのです」（ルカ 17:21）。それはつまり、国籍が天に移されたというこ

とである。「私たちの国籍は天にあります」（ピリピ 3:20）。こうして、キリスト者に於ける「未来」は、天で暮らす「復活」で確定した。

新たな「規定」の第二は、「過去」は白紙になり、「たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる」（イザヤ 1:18）、「過去」を誇る自由も、「過去」を悔やむ自由も、「過去」を裁く自由も失ったということである。言い換えれば、罪に定められなくなったということであり、「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません」（ローマ 8:1）、もう裁かれなくなったということである。「わたしの言葉を聞いて、それを守らない者がいても、わたしはその者を裁かない」（ヨハネ 12:47　新共同訳）。自分が裁かれないのだから、人も裁けなくなったということである。「人を裁くな」（マタイ 7:1　新共同訳）。こうして、キリスト者に於ける「過去」は、「白紙」で確定した。

このように、キリスト者は神の「規定」の中で生きている。それは、神によって召された者たちは、キリストに属する奴隷になったということである。「召された者はキリストに属する奴隷」（Ⅰコリント 7:22）。キリストの十字架によって、「この世」は私たちに対して死に、私たちも「この世」に対して死んでしまったということである。そうである以上、私たちにとっては、イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはならないのである。

> 「しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが、決してあってはなりません。この十字架につけられて、世は私に対して死に、私も世に対して死にました。」（ガラテヤ 6:14　新改訳 2017）

「この世」に対して死んだということは、キリスト者は「この世」と決別したということである。そうであれば、これからは「この世」とは関わりを持たないで生きていくということなのだろうか。いや、そうではない。「この世」の「規定」に死んでしまったので、すなわち自分が仕えてきた、自分が愛されるための「規定」（律法）に対して死んでしまったので、これからは自由に隣人を愛せるということである。これまでは自分が愛されるために「この世」と関わっていたが、これからは隣人を真実に愛するために「この世」と関われるということである。それは、イエス・キリストの福音を宣べ伝えることを目指す。「私はすべてのことを、福音のためにしています」（Ⅰコリント 9:23）。なぜなら、それだけが真実に隣人を愛することになるからである。これ

こそが新たな「規定」に沿った生き方の始まりであり、それは同時に、「信仰」で生きることを意味する。

❖ 「信仰」で生きる

キリスト者とは、キリストが十字架で成し遂げた御業の「規定」に拘束された者たちである。それは、キリストが十字架で死なれたように、「この世」に対して死に、そしてキリストがよみがえられたようによみがえるという「規定」である。「過去」は「白紙」にされ、「将来」は「復活」と定められた「規定」である。この「規定」によって、神からの「愛」がキリスト者の歴史の中に流れるようになった。こうして、キリスト者は隣人を愛し、神を愛せる道ができた。これが十字架の「規定」であり、「神の愛」による新しい自己理解の「規定」である。

この新たな「規定」に従うなら、見える現実の自分が、いまだ「罪人」であっても、新たな「規定」では、自分は罪に対しては死んだ者なので、「義人」だと思って生きることになる。「**このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい**」（ローマ 6:11）。つまり、キリスト者は、「**もはや…ではない**」と「規定」された自分と、「**いまだ…である**」という現実との狭間にいるので、「**もはや…ではない**」と「規定」された十字架の言葉を信じて生きるのである。すると、次のようになると聖書は教えている。

> 「人に知られないようでも、よく知られ、死にそうでも、見よ、生きており、罰せられているようであっても、殺されず、悲しんでいるようでも、いつも喜んでおり、貧しいようでも、多くの人を富ませ、何も持たないようでも、すべてのものを持っています。」（Ⅱコリント 6:9-10）

「**人に知られないようでも、よく知られ**」とは、人には理解されなくても、神は私のことを理解しているということであり、「**死にそうでも、見よ、生きており**」とは、見た目は死に向かっているようでも、本当は「**永遠のいのち**」を持つ者であるということである。「**罰せられているようであっても、殺されず**」とは、裁かれて罰せられるように見えても、すでに裁かれていて、「死」から「いのち」に移されているということである。「**さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです**」（ヨハネ 5:24）。「**悲しんでいるようでも、いつも喜んでおり**」とは、見た目には困難にぶつかって悲しんでいても、実はそこには「**希望**」があるということであり、「**貧しいようでも、多くの人を富ませ**」とは、取るに足らない者のように見えても、「神の愛」を伝えることの

できる神の大使であるということであり、「何も持たないようでも、すべてのものを持っています」とは、この世界では何も持っていないように見えても、自分は神といつも一緒にいる「神の子」であって、神のものはすべて持っているということである。「子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ」（ルカ15:31　新共同訳）。

こうして、「**いまだ…である**」という自分ではあっても、「**もはや…ではない**」と「規定」された自分を信じて生きていくのである。見えるところがどうであっても、神が啓示された自分の「真実な姿」を信じて生きていく。これを、「信仰」で生きるという（本書 277 頁「ークリスチャンの生き方ー」）。

このように、キリスト者は「信仰」で生きていく。自分の業績を示す「結果」に基礎を置くのではなく、キリストへの「信仰」に基礎を置いて生きていく。それは、キリストによって確定した「将来」を基準に生きていくということである。そうした生き方を目指す者の集まりが「教会」であり、「教会」は紛れもなく、「この世」に対して死に、よみがえった者たちの集まりであって、それは約束された終末の存在にほかならない。そうである以上、“今”が「終わりの時」であり、キリストが十字架で明らかにした「新しい創造」の「規定」（基準）に従って進む「教会」の人々こそ、約束された「神のイスラエル」なのである。

> 「大事なのは新しい創造です。どうか、この基準に従って進む人々、すなわち神のイスラエルの上に、平安とあわれみがありますように。」
>
> （ガラテヤ 6:15-16）

まさに「教会」に集うキリスト者は本人に意識がなくても、「新しい創造」の「規定」の中で生きる者なのである。とはいえ、自分の現実の姿を見ると、本当に「新しい創造」なのかと思ってしまうが、それは何も心配する必要はない。

❖　心配する必要はない

神による「新しい創造」がキリスト者であり、本人に意識がなくても、キリスト者は「神の愛」による「規定」の中で生きている。神の「赦し」を受け、「過去」は白紙になり、「死」から「いのち」に移され、「永遠のいのち」を持っているという「規定」の中で生きている。「永遠のいのちを持っていて、裁きに会うことがなく、すでに死か

らいのちに移った状態にあるのです」（ヨハネ 5:24　私訳）。キリスト者は、まさしく確定した「過去」と「将来」の中で生きているのである。

だが、一体どれだけのキリスト者が、「神の愛」による「規定」、すなわち「死」から「いのち」に移されて「永遠のいのち」を持っているという「規定」を信じられるというのか。自分は「この世」に対して死に、そしてよみがえったという神による「新しい創造」を、どれだけの者が信じられるのか。いや、そのようなことは意識すらしたことのない者が大半だろう。それよりも、目先の問題を神が解決してくださると信じることが関心事になり、「永遠のいのち」を持っていることを信じるのは二の次になる。それでも感情が高揚すれば、「永遠のいのち」を「信じます！」となる。しかし、感情が沈むと「信じられない！」となってしまう。そのようにして、瞬間だけでも「神の愛」による「規定」を、すなわち赦された自分を信じる「信仰」を持とうとはする。

こうして、信じたり、疑ったりを繰り返すのが現実である。しかし、「信じます！」となったり、「信じられない！」となったりするのは、キリスト者の生涯が「神の愛」によって「規定」されているからである。「神の愛」を受け取ったことで、ある時は「信じます！」となり、ある時は「信じられない！」となったりするが、「信じられない！」と落ち込むのは、「神の愛」に生涯を「規定」されている証しなのである。

したがって、信じられなくても、自分を責める必要は決してない。そうした現象は、まさしく「神の愛」が永遠に私たちをキリストに属する者として「規定」したことによるからである。すなわち、「天国」に引き上げられるまでは、その「規定」を「否定」する「死の世界」で暮らすので、どうしても「信じます！」となったり、「信じられない！」となったりしてしまうが、何ものも私たちを「神の愛」の「規定」からは引き離せないので、心配する必要は全くない。

> 「高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」（ローマ 8:39）

そして、聖書は、隣人を愛せるようになる度合いに応じて、「死」から「いのち」に移された「規定」に対し、「確信」が持てるようになることも教えている。

> 「私たちは、自分が死からいのちに移ったことを知っています。それは、兄弟を愛しているからです。」（Ⅰヨハネ 3:14）

このようなことが書かれていると、隣人を愛せない自分の現実の姿を見ると、本当に「死」から「いのち」に移された「新しい創造」にあずかった者なのかと思ってしまうが、何も心配する必要はない。愛せなくても、もう「新しい創造」の「規定」の中で生きているからである。イエス・キリストを信じている者は誰であれ、「神の愛」による「規定」の中で生きている。ただ、その「規定」は「永遠性」であるゆえ、この「有限性」の体では見えないだけである。しかし、見えなくても、「過去」を「赦し」、「死」から「いのち」に移し、「永遠のいのち」を持たせた「規定」なので、「新しい創造」にあずかった者である。この「規定」がまことに真実であることは、隣人を愛する「信仰」で知るようになっていくことを、この御言葉は教えているだけである。

このように、自分の現実はとても「新しい創造」とは思えなくても、何も心配する必要はない。たとえ時間が掛かっても、少しずつ罪を認め、すなわち「苦しみ」を認め、その「苦しみ」を言い表すことで、赦されていた自分に出会っていけばよい。そのことで隣人を愛せるようになっていき、「神の愛」の「規定」の確かさを少しずつ知ればよい。それは、確定した「過去」と「未来」を、すなわち赦された「過去」と、復活する「未来」への「確信」を持てるようになっていくということである。この「神の愛」による「規定」の証しが、キリストの十字架である。そこで次に、改めて十字架の意味を見ておきたい。

❖ 十字架の意味

神は、私たちの罪を取り除くために来られた。「キリストが現れたのは罪を取り除くためであったことを、あなたがたは知っています」（Ⅰヨハネ 3:5）。そうであるなら、私たちを苦しめている「罪」とは何なのだろう。それは、神と分離した状態である。私たちがその状態にあれば、神に愛されている自分が見えないので「不安」が生じる。その「不安」から、私たちは、自力で愛される者になることを目指すようになった。少しでも「うわべ」を良くし、愛されることを目指すのである（承認欲求）。そのことは互いを比べさせ、人を誇らせるように仕向けるので、絶えず嫉妬や争いが起き、それが人を苦しめる。こうして、神と分離した状態の「罪」から、「罪の行為」が生じるようになった（本書 72 頁「「罪」と「罪の行為」の関係」）。

では、どうして人は神と分離し、神に愛されている自分が見えなくなったのか。それは、「永遠」で規定されている神を見えなくさせてしまう「有限」の規定が、アダムの罪によって入り込んだからである。その規定を「死」という。「一人の人によって罪が

世に入り、罪によって死が入り込んだように」(ローマ 5:12　新共同訳)。ゆえに、「死」の働きが「罪」であり、「死のとげは罪であり」(Ⅰコリント 15:56)、「罪」は「死」によって人を支配するようになったのである。「罪が死によって支配したように」(ローマ 5:21)。すると、アダムの罪はどのようにして入り込んだのかとなるが、それは悪魔が蛇を使って、アダムと一緒にいたエバを欺いたからであった。「蛇が悪巧みによってエバを欺いたように」(Ⅱコリント 11:3)。したがって、人を罪人にした「死」は悪魔の仕業であり、罪を犯す者は悪魔から出たのである。そこで、神は悪魔の仕業を滅ぼすために来られたのであった。

> 「罪を犯している者は、悪魔から出た者です。悪魔は初めから罪を犯しているからです。神の子が現れたのは、悪魔のしわざを打ちこわすためです。」
> (Ⅰヨハネ 3:8)

悪魔の仕業は、神と人とを分離する「死」を持ち込むことで、神に愛されている自分を見えなくさせ、そのことによる「不安」から「罪の行為」に走らせることであった。一言でいえば、人を罪人にすることであった。この悪魔の仕業を打ち壊すには、神に愛されている自分を見えるようにすればよい。そこで、神は人の姿となって来られ、「人となって来たイエス・キリスト」(Ⅰヨハネ 4:2)、神に愛されている自分を見えるようにしてくださったのである。その頂点が、キリストの十字架であった。そのことで、どれだけ神が人を愛しておられるかを「見える化」し、神に愛されている自分が見えなくなったことの「不安」を排除できるようにされたのであった。

> 「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」(ローマ 5:8)

そして、「不安」の原因を作った「死」を滅ぼすためにも十字架で死んでくださった。というのも、「死」を滅ぼすということは、死んでもよみがえるということなので、「死」を滅ぼすには、自らが先に死ぬ必要があったからである。それゆえ、キリストは十字架に架かり死なれた。そして、ご自分の十字架の死で「死」を滅ぼし、三日目によみがえられたのである。よみがえることで、自らが「死」を滅ぼしたことを証しされた。それはつまり、「死」を司る悪魔をご自分の死によって滅ぼし、一生涯「罪」の奴隷であった人々を解放されたということである。

「それは、死をつかさどる者、つまり悪魔を御自分の死によって滅ぼし、死の恐怖のために一生涯、奴隷の状態にあった者たちを解放なさるためでした。」
（ヘブル 2:14-15　新共同訳）

大事なことは、この十字架の出来事はキリストを信じる者の上にも起きる、ということである。なぜなら、キリストを信じる者はキリストの体に組み込まれているからである。「あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です」（Ⅰコリント 12:27　新共同訳）。そのため、キリストを信じる者は、キリストの十字架を自分自身のものとして引き受けることになり、自分をキリストと共に十字架につけることになる。したがって、キリストの十字架は過去の出来事ではなく、それは“今”自分に起きている出来事になる。それで、「今は恵みの時、今は救いの日です」（Ⅱコリント 6:2）と聖書に書かれている。つまり、キリストを信じる者は、自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、“今”十字架につけてしまったということである。

「キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです。」（ガラテヤ 5:24）

そうなると、自分は「罪」に対しては死んだ者であって、キリストにあっては生きた者であると思って生きていくのが正しい。「このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい」（ローマ 6:11）。いずれにせよ、これが「罪」を取り除くために神が行われた御業なので、それを信じるのがキリスト者の「信仰」になる。すなわち、「罪」を取り除くのは、自分が神と共に十字架につけられて、共によみがえるほどに神から愛されていることを信じる「信仰」によるのである。そのため、神から愛されていることを「信仰」で知る者は、愛することができる。神に愛され、神に信頼されていることを「信仰」で知る者が、神を信頼することができる。愛というのはすべて、神が私たちを愛してくださったことによるからである。

「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」
（Ⅰヨハネ 4:10）

このように、神は本気で人を愛してくださり、キリストを信じる者が滅びることなく、「永遠のいのち」を持つようにしてくださったのである。「神は、実に、そのひとり子

をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」（ヨハネ 3:16）。それが十字架の意味であり、神から流れ出ている「神の愛」は、人の内側から湧き出ているだけではなく、見える十字架でも「神の愛」を啓示することで「見える化」をし、「罪」を取り除いてくださるということである。それはつまり、神は私たちを「罪」から救い出すために、自らを「見える化」し、十字架に架かられたということである。

> 「キリストは、今の悪の世界から私たちを救い出そうとして、私たちの罪のためにご自身をお捨てになりました。私たちの神であり父である方のみこころによったのです。」（ガラテヤ 1:4）

以上が十字架の意味であり、それが「神の愛」による新たな「規定」にほかならない。そこで、新たな「規定」となった「十字架の言葉」を、改めて見てみたい。

❖ 「十字架の言葉」

キリストの十字架によって、私たちは「神の愛」を知り、平安を得た。それは「死」による様々な規定で私たちを責め立てていた「債務証書」が、十字架に釘付けにされ、無効になったということである。これが「十字架の言葉」である。

> 「私たちに不利な、様々な規定で私たちを責め立てている債務証書を無効にし、それを十字架に釘付けにして取り除いてくださいました。」
>
> （コロサイ 2:14　新改訳 2017）

この「十字架の言葉」は、私たちが「死」から「いのち」に移された出来事を説明している。「死からいのちに移っているのです」（ヨハネ 5:24）。それが、「見よ、すべてが新しくなりました」（Ⅱコリント 5:17）である。したがって、キリストの十字架は、私たちの「罪の罰」を背負ったものではない。私たちを苦しめてきた「罪」を、すなわち「死」を背負い、それを滅ぼしたのである。「死」が支配する古い世界を終わらせ、「いのち」が支配する新しい世界を創造されたということである。

そうである以上、「十字架の言葉」は、この世に対する滅びの審判であって、私たちに対しては、無罪判決の審判にほかならない。ともすると、キリストの十字架は、私たちが犯した罪に対する「罰」を代わりに受けるためのものであった（代償説）とか、キリストの十字架は、人の罪に対する「神の怒り」をなだめるものであった（満足説）

とか、他にも様々なことが言われるが、それらは誤りである。正しくは、私たちをキリストと共に十字架につけ、「死」が支配するこの世に対して死なせる（決別させる）ためであった、である。

> 「しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが、決してあってはなりません。この十字架につけられて、世は私に対して死に、私も世に対して死にました。」（ガラテヤ 6:14　新改訳 2017）

「世に対して死にました」とあるように、この世に対して死ぬことができる十字架が、神が私たちに啓示された希望である。なぜなら、この世に対して死ぬということは、この世との決別を意味するからである。この世は「否定」なので、この世との決別は「否定」を「否定」することであり、「死人」が「否定」され、「生きる者」になることを意味する。まさにキリストは、「死人」であった私たちを「生きる者」にするために十字架に架かられたのであった。「死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです」（ヨハネ 5:25）。したがって、「生きる者」となった私たちは、イエスの十字架の死をこの身に帯びているのである。

> 「いつでもイエスの死をこの身に帯びていますが、それは、イエスのいのちが私たちの身において明らかに示されるためです。」（Ⅱコリント 4:10）

このように、「十字架の言葉」は、「死人」を「生きる者」にする「神の愛」である。「良き者」を「死人」にした「死」を取り除き、「生きる者」にする言葉である。それが、「神の愛」による新たな「規定」であって、この「規定」を「**赦しの恵み**」という。まことに「神の愛」の中心にあるのが、「**赦しの恵み**」である。そこで、「**赦しの恵み**」については詳しく見ておきたい。

❖ 「赦しの恵み」

神は、罪を取り除くために来られた。「キリストが現れたのは罪を取り除くためであったことを、あなたがたは知っています」（Ⅰヨハネ 3:5）。それゆえ、神の福音の中心は罪が赦される「**赦しの恵み**」である。では、罪とは何か。それは、神の命令に逆らうことである。「罪とは律法に逆らうことなのです」（Ⅰヨハネ 3:4）。そのため、罪を犯している者には、神が「遠い神」になる。反対に、「**赦しの恵み**」で罪が赦されると、神が「近い神」になる。こうして、「**赦しの恵み**」は神と人との距離を縮めさせ、神との統合を目指す。なぜなら、それは「神の愛」から流れ出ている「統合運動」だ

からである。では、その「赦しの恵み」を詳しく見てみよう。聖書は、それを次のように教えている。

> 「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」（Ⅰヨハネ 1:9）

ここに「自分の罪を言い表すなら」とあるが、「自分の罪を言い表す」には、先に自分の「罪」を認識できなければならない。認識するには、神の命令を知っていなければならない。感謝なことに、誰もが神の命令を心に書き込まれているので、「律法の命じる行いが彼らの心に書かれている」（ローマ 2:15）、誰もが神の命令に従うかどうかで心は責め合っている。責め合うがゆえに、神の命令に逆らう「罪」を認識できる。それは、誰もが神の呼びかけを聞いているということである。同時に、誰もが神の命令に逆らうしかない状態にあることも神はご存じである。「義人はいない」（ローマ 3:10）。そのため、神の呼びかけは命令と同時に、「わたしのところに来なさい」である。

> 「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（マタイ 11:28）

こうして、神の呼びかけは人に罪を認識させ、神のもとへ行く決心を喚起させる。それはちょうど、医者が人に病気を認識させ、医者の治療を受けるように迫るのと同じである。それゆえ、神のもとへ行く決心をすれば、「その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます」（Ⅰヨハネ 1:9）となる。

では、「罪を赦し」とはどういうことなのだろう。それは、「あなたは無罪だ！」と言い渡されることである。実は、あなたが神の呼びかけに初めて応答した時、神から、「あなたは無罪だ！」と言い渡されて、朽ちない「霊の体」を着せられていた。そのことで、「永遠のいのち」を持つ者にされていた。ただし、それは潜在意識でのことなので意識できなかっただけである。そうなると疑問が湧いてくる。なぜ神は「あなたは無罪だ！」と宣言されるだけで、罪を裁かないのかである。「わたしの言葉を聞いて、それを守らない者がいても、わたしはその者を裁かない」（ヨハネ 12:47　新共同訳）。それこそが、福音理解で最も重要な点である。

この世界では、罪を犯せば「罰」が用意されている。「罰」を与える目的は「是正」である。その人が罪を反省し、同じ罪を犯さないようにするために「罰」を与える。し

かし、神は人が罪を犯しても、「罰」を与えるどころか、「**あなたは無罪だ！**」と宣言されるだけである。そうなると、それの意味するところは一つしかない。それは、あなたは何も「是正」するところがないということである。さらに言えば、罪に対し、「罰」は無力だということである（本書 71 頁「ー「罰」は必要なのかー」）。

では、なぜ罪を犯しても「是正」するところがないのか。その答えは簡単である。人の本質は神の「いのち」なので、そこには「是正」するところが全くないからである。人は神に似せて造られ、それは「**非常に良い者！**」なので、「**神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった**」（創世記 1:31）、どこを見渡しても「是正」するところがない。まことに人は「良き者」であって「ダメな者」ではないので、神は人に対し、「**あなたは無罪だ！**」と宣言されるということである。

ただし、人の現状は、その「良き者」に「死」という覆いが掛かり、その制約のせいで、「良き者」としての姿が見えなくなっている。喩えて言えば、本来であれば動くはずの腕がロープで縛られていて、全く動かなせないということである。その場合、腕に「罰」を与えても全く意味がない。必要なのは、ロープを解く治療である。人の場合もそれと同じである。人の本質（真実な姿）は「良き者」なので、「罰」を与えて「是正」する必要など全くない。必要なのは、「良き者」を縛り付けている死というロープを解き、神に知られている「良き者」を、人が知るようにすることである。そのために、「**あなたは無罪だ！**」と宣言する。喩えて言えば、私たちは、死という泥で汚れた鏡にぼんやり映る自分を見ているので、自分の一部分しか知らない。自分の「真実な姿」を知らないので、神はそれを見えるようにするということである。

> 「**今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが**、その時には顔と顔とを合わせて見ることになります。今、私は一部分しか知りませんが、その時には、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることになります。」（Ⅰコリント 13:12）

ここに、「**今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ています**」とあるように、私たちが見ている自分の姿は、「時間」と「空間」に制約されている姿であり、この制約が「死」である。私たちは自分の「真実な姿」を見ているわけではなく、「時間」と「空間」に制約されたことで起きる現象の自分を見ているということである。「良き者」に「死」という覆いが掛かり、そのことによる「不安」から見える安心をむさぼるようになったが、そうした罪人の姿を見ているということである。だがそれは、「死」に制約され

た姿なのであって、本来の姿ではない。そこで、本来の姿を知る神は、その罪人に対して声高らかに、「あなたは無罪だ！」と宣言されるのである。

この宣言こそ、新たな「規定」であり、すなわち人の本来の「規定」であり、キリスト者はこの「規定」の中で生きる者である。したがって、「あなたは無罪だ！」とする神からの宣言を、信じて受け取ればよい。受け取ることで、見た目には罪人であっても、義人である自分を知るようになっていき、「死」という「悪」の覆いから、きよめられていく。そうなると、「不安」が減少するので、自ずと「罪の行為」も減少していく。それが、「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます」（Ⅰヨハネ 1:9）の意味するところであり、これが「赦しの恵み」である。それは、「あなたは無罪だ！」とする判決にほかならない。それが、神から流れ出ている「愛」である。

❖ 「あなたは無罪だ！」

神は人の罪に対しては「罰」を与えない。与えるのは、「あなたは無罪だ！」とする判決だけである。ただし、それはただの宣言であって、そこには何の印もない。あるのは、「あなたの罪は赦されました」（マルコ 2:5）と言われる神の言葉だけなので、それは信じるしかない。そのため、いくら罪人が「罪は赦されました」を信じ、自分の罪は赦されたと言っても、そのことを証しする印は何もないので、その言葉を周りの人が聞けば躓いてしまう。実際、イエスが罪人に対し、「あなたの罪は赦されました」と言われた際、それを聞いていた周りの人々は躓いてしまった。「この人は、なぜ、あんなことを言うのか。神をけがしているのだ」（マルコ 2:7）。

そこでイエスは、「あなたの罪は赦されました」と宣言された罪人が中風で歩けなかったので、歩けるようにされた。そのようにして、印を見せられた。というのも、当時の人たちは、病気は罪に対する罰だと考えていたので、「彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか」（ヨハネ 9:2）、彼らの目線に合わせ、罪が赦された印として、中風の人を癒やされたのであった。この出来事は、人は罪が赦されたと言われても、それを信じて受け取る前に、赦されることを裏付ける印を求めてしまうことを示している。そこで、人は罪が赦されるための印を勝手に作ってしまった。

例えば、「徳を積めば罪が赦される」といった具合に、「多くの献金を捧げれば罪が赦される」といった具合に、罪が赦されるための印を人は勝手に作った。その印を見て、「あなたの罪は赦されました」とするシステムを作った。だが、「あなたの罪は赦され

ました」とする「赦しの恵み」は「ただ」であり、受け取りさえすればよい。「いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい」（黙示録 22:17）。キリストを信じる者は、「あなたの罪は赦されました」を、ただ信じさえすればよいのである。そこには、何の行いも知恵も必要とはしない。何もできない幼子のように、ただ信じればよい。そうすれば、聖霊によって喜びがあふれる。これこそが、御心にかなったことである。

> 「ちょうどこのとき、イエスは、聖霊によって喜びにあふれて言われた。「天地の主であられる父よ。あなたをほめたたえます。これらのことを、賢い者や知恵のある者には隠して、幼子たちに現してくださいました。そうです、父よ。これがみこころにかなったことでした。」（ルカ 10:21）

まことに、「あなたは無罪だ！」と宣言する「赦しの恵み」には印がない。それは、ただの言葉である。しかし、それは「神の言葉」なので、信じる者には力となり、喜びとなる。そして、「赦しの恵み」がただの言葉であるのは、私たちの本質は神と同じ「愛」であって「善」なので、私たちはそのままでよいからである。つまり、神の目からすれば、人の罪を見つけることができないということなのである。

> 「その日、その時――【主】のことば――イスラエルの咎を探しても、それはない。ユダの罪も見つからない。わたしが残す者を、わたしが赦すからだ。」
> （エレミヤ 50:20　新改訳 2017）

しかし、人はその真実が見えていないので、「あなたは無罪だ！」と言われても疑ってしまう。それゆえ、これには幼子のように「神の言葉」を信じる「信仰」が求められる。すなわち、神の福音は「赦しの恵み」を受け取る「信仰」に始まり（「永遠のいのち」を持つ信仰）、「あなたは無罪だ！」とする「赦しの恵み」の言葉を受け取る「信仰」へと進んでいくのである（「永遠のいのち」を豊かにする信仰）。「信仰に始まり信仰に進ませる」（ローマ 1:17）。こうして「赦しの恵み」に始まり、「赦しの恵み」へと進み、それによって神との豊かな「統合」が築かれていく。言い換えれば、人は神の栄光を表す「良き者」なのであって、栄光から栄光へと、神に近づいていくということである。神の「愛」がそれをする。

> 「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。」
> （Ⅱコリント 3:18）

ここに「栄光から栄光へ」とある。すなわち、「〇から〇に」であって、「×から〇に」ではない。「良き者から良き者へ」であって、「ダメな者から良き者へ」ではない。それは、神にとって人は、ご自分のいのちさえ惜しくないほどに愛したい、「良き者」であるということである。

しかし、人は自分の姿を見て、自分は愛されるはずもない「ダメな者」だと、入り込んだ「死」によって思い込まされてしまった。そして、苦しんでいる。その様子は、アンデルセン童話の『醜いアヒルの子』と全く同じである。これを何とかするのが「神の福音」であり、それは私たちに対し、ただ「神の愛」を信じることを要求する。信じることを求めるだけで、あなたを変えようとするのでは決してない。正確に言えば、信じることで、変わることのない本当の自分の姿を知れば、これまでの偽りの姿の自分を、すなわち罪人の姿の自分を脱ぎ捨てようと、人は戦うようになる。そういう意味では、神は人を変えようとされる。それゆえ、「あなたは無罪だ！」とする「赦しの恵み」が信じられれば、自ずとその人は神と人を愛するように変わっていく。その人の行いは、自ずと良い方向に向かっていく。

このように、「神の福音」の中心は「赦しの恵み」であり、「あなたは無罪だ！」である。この「赦しの恵み」については、イエスがあの有名な放蕩息子の譬えでも話された（ルカ 15:11-32）。それによると、放蕩息子は実に多くの罪を犯し、ついに「罰」を受ける覚悟で父のもとに帰った。だが、父は何の「罰」も与えることなく、彼を抱きしめることで、「あなたは無罪だ！」と、声なき声で宣言したのであった。なぜなら、彼は自分の愛する息子であり、「良き者」であったからである。これが「赦しの恵み」であり、それは自分の「真実な姿」に気づかせてくれる恵みである。そして、人の「真実な姿」は「良き者」であり、それは「弱い者」であるということである。

❖ 「良き者」は「弱い者」

「赦しの恵み」が「神の福音」の中心であり、それは神と人との「統合」を目指す恵みなので、「神の福音」を語ることがそのまま、「神の国」が来たということを意味する。そこでイエスは、神と人との「統合」を邪魔する悪霊どもを追い出す印を見せたなら、「神の国はあなたがたに来ているのです」（ルカ 11:20）と言われたのである。ここで「来ている」と訳されているのは、「プタノー」［φθάνω］であり、意味は「到達する」であり、それがいわゆる過去形となるアオリストで書かれているので、「到達した」である。つまり、神が人となって来られたことで、「神の国」は「すでに来ている」とい

うことである。その「神の国」に人を導き入れるのが「**赦しの恵み**」であり、それを信じて受け取らせることが、すなわち「良き者」である自分に気づかせることが「神の福音」の骨格である。

では、なぜ人が「良き者」なのかというと、神の前では人は何もできない「**弱い者**」だからである。その姿は、「**無**」に等しいからである。「**わたしの一生はあなたの前では無にひとしいのです**」(詩篇 39:5　口語訳)。人は何もできない「**無**」であるからこそ、「**無に等しい**」(Ⅰコリント 1:28)、神なしでは生きられない者である。「**もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです**」(ガラテヤ 2:20)。そうなると、神が人を動かし、生かすしかない。「**私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです**」(使徒 17:28)。その神は「良き者」であり、その方が「**無**」である人を動かす以上、人も「良き者」なのである。つまり、なぜ人が「良き者」なのか、それは神の前では「**無**」に等しい「**弱い者**」だからである。そこで、人の本来の姿が「**弱い者**」であることに気づけるよう神は助けてくださる。すると、神の力は、「弱さ」のうちに完全に現われる。「**わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである**」(Ⅱコリント 12:9)。

このように、人の「真実な姿」は「良き者」であり、その中身は、人は何もできない「**弱い者**」である。それゆえ、親は何もできない赤ちゃんを無条件で愛するように、神は人を無条件で愛される。この神の愛を教えてくれるのが、無条件で罪が赦される「**赦しの恵み**」である。この「**赦しの恵み**」が、神から流れ出ている「愛」である(本書 147 頁「人の「真実な姿」を掘り下げる」)。では、まとめをしたい。

❖ まとめ

「愛」という視点から見た「神の福音」の真実で重要なことは、人を支えているのは神の「いのち」であり、その「いのち」は「魂」と呼ばれ、「魂」からは神からの「愛」が湧き出ているということである。神からの「愛」が、その人のうちで泉となり、人を「永遠のいのち」に導いているので、その「愛」の水を飲みさえすれば、誰であれ「永遠のいのち」を得、それを豊かに持てるようになるのである。

> 「しかし、わたしが与える水(**愛**)を飲む者はだれでも、決して渇くことがありません。わたしが与える水(**愛**)は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水(**愛**)がわき出ます。」(ヨハネ 4:14)　※(　)は筆者が意味を補足

そして、人は神からの「愛」に支えられている以上、私たちは初めから神に無条件で受け入れられている「良き者」である。その意味するところは、先述したように、人は何もできない「弱い者」であるということである。「弱い者」ゆえ、神の支えなしには生きられない。その神に支えられているということは、人は「良き者」なのである。これが、神によって「規定」された人の本質である。

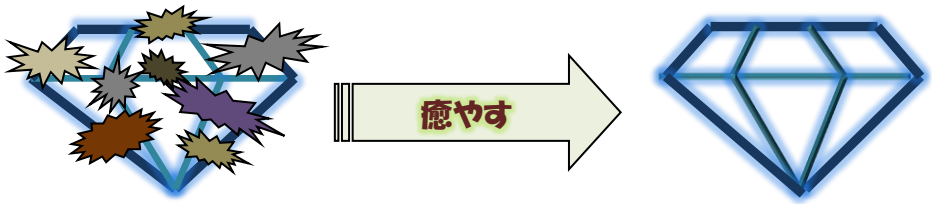
ところが、悪魔の仕業で入り込んだ「死」によって、人は「良き者」である自分が見えなくなり、その「不安」から見える安心にしがみつこうとする。これを「肉の思い」というが、「肉の思い」の出所は、まさしく「死」であった。「肉の思いは死であり」(ローマ 8:6)。この「肉の思い」によって、神から流れ出ている「愛」は上手く流れ出なくなり、すなわち人を愛したくても愛せなくなり、それが人の苦しみとなった。よって、「神の福音」の真実は、「真実な姿」を見えるようにすることであり、徹頭徹尾「癒やし」である。そこには「罰」も「裁き」もない。あるのは、人を癒やす「新しい創造」だけであり、それは信じて受け取るものである。

> 「神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われる（癒やされる）ためである。」
>
> （ヨハネ 3:17） ※（ ）は筆者が原文の意味を補足

つまり、人の苦しみの原点は、入り込んだ「死」によって自分の「真実な姿」を認識できなくなったことにこそある。それは、アンデルセン童話の『醜いアヒルの子』と全く同じ構図である。それゆえ神は、人が主に立ち返るなら、自分の「真実な姿」を認識できなくさせていた覆いを取り除いていくことで、主と同じ姿の自分を見えるようにしてくださる。それが、「栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられていきます」（Ⅱコリント 3:18　新改訳 2017）ということの意味である。「神の福音」は、「ダメな者」を「良き者」にする福音では決してないのである。

> 「確かに今日まで、モーセの書が朗読されるときはいつでも、彼らの心には覆いが掛かっています。しかし、人が主に立ち返るなら、いつでもその覆いは除かれます。主は御霊です。そして、主の御霊がおられるところには自由があります。私たちはみな、覆いを取り除かれた顔に、鏡のように主の栄光を映しつつ、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられていきます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」
>
> （Ⅱコリント 3:15-18　新改訳 2017）

喩えるなら、人は「ダイヤ」であり、それに泥が付いたので、その泥を洗い流して元の輝きに戻す（癒やす）のが、「神の福音」ということである。



このように、人は神に似せて造られた「良き者」である。ただ、その「真実な姿」が、悪魔の仕業で入り込んだ「死」の泥によって見えなくなったにすぎない。そこで神は、人の「真実な姿」を人が知るようにするために来られた。人を裁くためではなく、人を癒やすために来られた。これが、「神の福音」の真実である。

では、『福音の回復』第二巻の最後の話をしたい。それは、見てきた「神の福音」から、キリスト者の生き方には二つあるという話である。一つは、「勝利者」の生き方であり、もう一つは「敗北者」の生き方である。題して、「勝利者」と「敗北者」である。この話を以て、「神の福音」の総括としたい。

第十章　「勝利者」と「敗北者」

誰もが競争に勝ち抜き、「勝利者」になろうとする。誰もが自分を周りよりも高くすることで、「勝利者」になろうとする。誰もが名声や財産を手にすることで、「勝利者」になろうとする。平たく言えば、それは周りから「わー、すごい」と言われることを目指しているということである。良く思われる自分を目指し、周りと自分とを絶えず比べているということである。しかし、この世で良く思われる「勝利者」は、神の前では「敗北者」である。ならば、神の目に於ける「勝利者」とは誰なのか。「敗北者」とは誰なのか。それがここでの話である。最初は、「敗北者」の話である。

－「敗北者」の話－

ここでは、「敗北者」の生き方を見ていく。その理解を深めるために、『走り回る人』という物語を用意した。まずは、その物語を読んでみてほしい。

❖ 『走り回る人』

ある人が、忙しく走り回っている。
少しでも高い地位を手に入れ、
「わー、すごい」と言われる「勝利者」になろうとして、走り回っている。

ある人が、忙しく走り回っている。
少しでも多くの財産を手に入れ、
「わー、すごい」と言われる「勝利者」になろうとして、走り回っている。

だが、その人が走り回っていた場所は、
沈みゆく船の甲板であった。

この物語は、どこか滑稽ではないだろうか。なぜなら、この人は船が沈没していっているにもかかわらず、自分の命を救おうとはせずに、失うしかないもののために走り回っていたからである。イエスも、似たような物語をされた。

ある金持ちが必死になって働いた。その甲斐あって、彼の畑は豊作であった。そこで彼は、もっと大きな倉を建て、そこに作物を蓄えておこうと思った。そして、自分にこう言った。「**たましいよ。これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ、安心して、食べて、飲んで、楽しめ**」(ルカ 12:19)。そこで、神はこう言われた。「**愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。そうしたら、おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか**」(ルカ 12:20)。

この主人公の姿も、どこか滑稽ではないだろうか。なぜなら、自分の命のためには何もせず、自分の死とともに消えてなくなるもののために時間を浪費していたからである。少なくとも神の目には滑稽に映ったからこそ、「**愚か者**」と言われたのである。

つまり、「敗北者」とは、何も残らないもののために、真剣に、真面目に、全力で時間を浪費する者のことである。彼らは忙しく走り回り、富や名誉といった「**見える安心**」を求めるが、それは死によって消えてなくなるのである。富は他人の手に渡り、名誉は忘れられてしまう。そうなれば、一体何のために生きてきたのかとなってしまい、人生を、ただ空しく過ごしたということになる。これが、神の目には「敗北者」であり、「**愚か者**」なのである。彼らは、何も残らないもののために時間を浪費する者たちである。しかし、この世の富や名誉を手にした者は、この世では「勝利者」として賞賛される。ここに、惑わしがある。ならば、いつまでも残るものは何なのだろう。

❖ いつまでも残るもの

聖書は、いつまでも残るものがあることを教えている。

> 「**こういうわけで、いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です。**」(Ⅰコリント 13:13)

いつまでも残るものは、キリストへの信仰、希望、愛である。つまり、キリストとの関係だけがいつまでも残る。人の土台は「キリスト」なので、「**その土台とはイエス・キリストです**」(Ⅰコリント 3:11)、その土台と結びつく建物だけが残る。土台のキリストは神であり「永遠性」なので、「永遠性」で建てた建物だけが残る。それは、「永遠性」の神との関係を築くことで実る、神への「**信仰と希望と愛**」である。

正確に言うなら、「永遠性」の土台には、「永遠性」のものしか建てられない。「永遠性」の土台に、「有限性」のものは建てられない。「有限性」のものは、いつか消えてなくなるからである。したがって、この世で「**見える安心**」を求める競争に勝ち、「**金**」、「**銀**」、「**宝石**」で建物を建てても、また競争に負け、「**木**」、「**草**」、「**わら**」などで建物を建てても、そうした「**見える安心**」は何であれ「有限性」なので、何も残らないのである。そのことは、肉体の死が明らかにするので、聖書は次のように教えている。

> 「もし、だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、わらなどで建てるなら、各人の働きは明瞭になります。その日（肉体の死）がそれを明らかにするのです。」（Ⅰコリント 3:12-13）　※（　）は筆者が原文の意味を補足

肉体の死は焼き尽くす「火」であり、その「火」が、苦労して建てた建物の真価をためす。その建物が「永遠性」であれば残るが、「有限性」であれば焼かれてしまうからである。しかし、土台の「キリスト」は「永遠性」ゆえに残るので、「キリスト」と再結合したキリスト者であれば、たとえ「永遠性」の土台の上に「有限性」の建物を建てたとしても、「火」の中をくぐるようにして助かる。だが、その場合、何も残らないもののために時間を浪費したことになるので、「敗北者」である。

> 「各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現れ、この火がその力で各人の働きの真価をためすからです。もしだれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。もしだれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、自分自身は、火の中をくぐるようにして助かります。」（Ⅰコリント 3:13-15）

このように、いつまでも残るものは、キリストへの信仰、希望、愛である。つまり、人との関係で得たものは幻であって、神との関係で得たものだけが残る。人の土台は神なので、その上には神との関係を築くことで実る「永遠性」の建物しか建てられないのである。そのため、人との関係で築く「有限性」の建物は、肉体の死に焼き尽く

されてしまう。人から愛されようと努力し、「金」、「銀」、「宝石」といった建物を建てても無駄になる。それでもキリスト者の場合は、土台の神と和解しているので、「火の中をくぐるようにして」助かりはするが、無駄な生き方はすべきではないというのが、この御言葉の教えである（補巻Ⅰ-31 頁「建物の話」）。

まことに「敗北者」とは、何も残らないものに時間を浪費する者である。なぜ浪費するかといえば、彼は人と自分を比べ、その中で自分を知ろうとするからである。人との比較の中に喜びを求めるからである。そのために彼は人と向き合い、人との関係を築くことに走り回り、「人の言葉」を主食として生きる。これに対し、「勝利者」は神と向き合い、神との関係を築くことに走り回り、「神の言葉」を主食として生きる。要するに、キリスト者の生き方は二つに分かれる。一つは人と向き合う生き方であり、もう一つは神と向き合う生き方である。そこで聖書は、キリスト者の生き方には二つあることを教えている。

❖ キリスト者の生き方には二つある

聖書は、キリスト者の生き方には二つあることを教えている。一つは「勝利者」の生き方であり、彼のことを「御霊に属する人」という。もう一つは「敗北者」の生き方であり、彼のことを「肉に属する人」という。

> 「さて、兄弟たちよ。私は、あなたがたに向かって、御霊に属する人に対するようには話すことができないで、肉に属する人、キリストにある幼子に対するように話しました。」（Ⅰコリント 3:1）

「御霊に属する人」とは、御霊である神と向き合って生きるキリスト者であり、「肉に属する人」とは、肉である人と向き合って生きるキリスト者である。別の言い方をするなら、「御霊に属する人」とは、神との関係の中で自分を知ろうとするキリスト者であり、「神の言葉」で生きる人のことである。「肉に属する人」とは、人との関係の中で自分を知ろうとするキリスト者であり、「人の言葉」で生きる人のことである。

そうなると、「御霊に属する人」は神と向き合って生きているので、自分と人とを比べることはしない。そのため、人を裁かない。「肉に属する人」は人と向き合って生きているので、自分と人とを比べる。そのため、人を裁き、そこではねたみや争いがある。そして、ただの人のように歩んでいる。

「あなたがたは、まだ肉に属しているからです。あなたがたの間にねたみや争いがあることからすれば、あなたがたは肉に属しているのではありませんか。そして、ただの人のように歩んでいるのではありませんか。」
（Ⅰコリント 3:3）

「肉に属する人」の特徴は、まさしく「ねたみや争いがある」ということである。彼は自分と人とを比べ、人を裁くことで自分を高くし、「勝利者」になろうとする。それゆえ、人を裁くことには弁解の余地はな。それはそのまま「敗北者」の証となるのであって、裁く者は決して「勝利者」ではない。そもそも、人を裁く者は、すなわち人を罪に定める者は、自分自身も罪人であることを忘れてしまっている。

「だから、すべて人を裁く者よ、弁解の余地はない。あなたは、他人を裁きながら、実は自分自身を罪に定めている。あなたも人を裁いて、同じことをしているからです。」（ローマ 2:1　新共同訳）

そうとも知らずに、人は人を裁く。互いに裁き合い、自分の裁きは正しいと、互いに訴え出る。これこそが、「敗北者」の証しである。

「そもそも、互いに訴え合うことが、すでにあなたがたの敗北です。なぜ、むしろ不正をも甘んじて受けないのですか。なぜ、むしろだまされていないのですか。」（Ⅰコリント 6:7）

このように、キリスト者の生き方には二つある。一つは「御霊に属する人」であり、「勝利者」の生き方である。もう一つは「肉に属する人」であり、「敗北者」の生き方である。そして、「敗北者」の特徴は、人との比較の中で自分を知ろうとするので、人を裁き、人を訴えることである。そのことで自分は正しいとし、「勝利者」になろうとする。さらには、「金」、「銀」、「宝石」といった建物を建て、人から愛されようとする。それは、まさに「見える安心」をむさぼる生き方である。しかし、そうした「見える安心」の建物は何一つ残らないので、「敗北者」の特徴は、何も残らないものに時間を浪費することだと言える。では、「勝利者」の話に移ろう。

－「勝利者」の話－

ここからは、「勝利者」（御霊に属する人）の生き方を見ていく。その生き方を知るには、人の中心は神であり、人は神に支えられて動いていることを知る必要がある。そこで、その話から始めたい。

❖　人の中心は神である

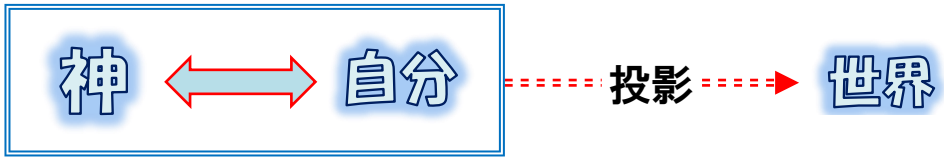
すべての人は神から出て、神によって保たれ、神に向かっている。

> 「すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。」（ローマ 11:36　新共同訳）

したがって、人の中心は神であり、神が私を支え動かし、神の中で私は存在している。

> 「私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです。」（使徒 17:28）

ということは、私の前には神しかおられない。神の前には、私しかいない。この私の姿を「単独者」という。したがって、神との関係が人の中心であり、その関係が人との関係に投影されている（補巻Ⅰ-25 頁「人は「単独者」である」）。



このように、私を支えているのは人との関係ではなく、神との関係である。神との関係が全てであり、その中で人は生きている。その神との関係を知るために、この世界がある。この世界は、まさしく神との関係を映し出すスクリーンである。それゆえ、この世界で手にする富はスクリーンに映っているだけで、それは幻であって何も残らない。「見える安心」は、スクリーンの上映が終われば（肉体の死）、全て消えてしまう。いつまでも残るものは、神との関係の中で手にする、神への信仰と希望と愛しかない。「いつまでも残るものは信仰と希望と愛です」（Ⅰコリント 13:13）。

ところが、悪魔の仕業で入り込んだ「死」のせいで、人は自分の中心が見えなくなった。そうなると、人との関係の中で自分を知り、それを糧に生きるしかない。そこで、

人は自分と周りを比べ、少しでも自分を高くすることを目指す。高くなることで、少しでもおいしい糧を得ようとする。それは、周りから良く思われ、愛されることであり、この世では「勝利者」と呼ばれる。しかし、それは「**肉に属する人**」の生き方であり、「敗北者」の生き方である。ならば、「勝利者」の生き方とは何か。

❖ 「勝利者」の生き方

人は、人と自分を比べ、自分を知ろうとする。世間の目を物差しにし、自分を見ようとする。しかし、世間の目は変化し続けるので、それで自分を見ても自分が何者かは変化するだけ定まらない。変化しない自分の真実な姿を本気で知ろうと思うなら、変化しない不動の物差しで自分を見るしかない。その物差しは「神」である。

そこで、「勝利者」は、変化しない不動の物差しで自分を知ろうとする。それは神の目なので、神の目で自分を見つめ、変化しない自分の真実な姿を知ろうとする。神と自分とを比較し、自分が何者なのかを知ろうとする。その神は何でもでき、できることに制限がないので、これを数式で表すなら「無限」である。対する人はというと、できることに制限があるので、これを数式で表すなら「有限」である。この「有限」の自分を、神の「無限」を物差しにして見ると、「有限」は何であれ「無限」の前では「**ゼロ**」と同じであり「無」である。だが、この世界では、人の能力には大きな差がある。ある人の能力を「100」とすれば、ある人は「10」といった具合に、「有限」の姿には差がある。それでも神の「無限」の前では全てが同じ「**ゼロ**」になり、「無」になり、区別がなくなってしまう。これが神の目に映る、変化しない人の真実な姿である。

$$\frac{100}{無限} = \frac{10}{無限} = \frac{有限}{無限} \cdots\cdots\blacktriangleright 0$$

つまり、「勝利者」は変わらない神と自分を比較し、自分の真実な姿を知ろうとするので、そこでは自分が何もできない「無」であることを知る。知れば、神に自分をゆだねられる。それは、何もできない赤ちゃんが親に身をゆだねるのと同じである。すると親は、赤ちゃんが何もできないことを知っているので、何でもして助ける。同じように、神も助けてくださる。その結果、「勝利者」は、神が私のうちにあって生きておられることを信仰で知るようになる。

「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。今私が肉において生きているいのちは、私を愛し、私のためにご自分を与えてくださった、神の御子に対する信仰によるのです。」
（ガラテヤ 2:20　新改訳 2017）

ここに、まことの喜びがある。赤ちゃんは、親から無条件に愛される自分を知り、笑って喜ぶように、ここに心から笑える喜びがある。したがって、「勝利者」は、神の前で自分が「無」であることに喜びを覚えるのである。それに対し、「敗北者」というのは、この世界で自分は「無」でなく、「何かができる」ことに喜びを覚える。しかし、その「何かができる」はすべて有限性であり、死によって完全に消える。こうして、「勝利者」の喜びは神から来るが、「敗北者」の喜びはこの世界から来る。ところが、「敗北者」の喜びは、この世界と別れを告げる肉体の死を迎えると消滅し、神から来る「勝利者」の喜びは、神への信仰、希望、愛となって、いつまでも残る。

このように、「勝利者」は神と自分とを比較し、自分の真実な姿を知ろうとするので、自分が「無」であること知ることができる。そして、そこに喜びを覚える。なぜなら、自分が「無」であるからこそ、すなわち「弱い者」であるからこそ、神の力が完全に現れることを知るからである。「わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」（Ⅱコリント 12:9）。まことに「勝利者」の生き方は、神と向き合い、神のことを思うのである。神との関係を築くことで、いつまでも残る神への信仰、希望、愛を実らせる。それに対し、「敗北者」の生き方は人と向き合い、人のことを思う。人から良く思われる、「見える安心」の建物を築こうとする。だが、それは何も残らないので、時間を浪費するだけの人生となる。そこでイエスは、神のことを思わないで、人のことを思う「敗北者」の生き方を厳しく叱られたのであった。

「下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」（マタイ 16:23）

このイエスの言葉からも分かるように、神が推奨するのは、神と向き合い、神のことを思う「勝利者」の生き方である。それは、「見える安心」を捨てる生き方である。

❖ 「見える安心」を捨てる

「勝利者」は、神の前で自分が「無」であることに喜びを覚えるので、「見える安心」を排除しようとする。例えば、人からほめられようとして、施しをするようなことは

しない。「だから、施しをするときには、人にほめられたくて会堂や通りで施しをする偽善者たちのように、自分の前でラッパを吹いてはいけません」（マタイ 6:2）。祈るときも、戸をしめて、隠れた所にいる父に祈る。「戸をしめて、隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい」（マタイ 6:6）。断食をするときも、人には分からないようにする。「断食していることが、人には見られないで、隠れた所におられるあなたの父に見られるためです」（マタイ 6:18）。「勝利者」は、神の前で生きるので、そのようにする。そのことで、周りから立派だと思われる「見える安心」を捨てる。さらには、この世での心の支えとなる家族も、すなわち家、妻、兄弟、両親、子どもさえも捨ててしまう。家族という「見える安心」までも、徹底的に捨ててしまう。

> 「まことに、あなたがたに告げます。神の国のために、家、妻、兄弟、両親、子どもを捨てた者で、だれひとりとして、この世にあってその幾倍かを受けない者はなく、後の世で永遠のいのちを受けない者はありません。」
>
> （ルカ 18:29-30）

家族という「見える安心」まで捨てることで、それよりも遙かに勝る安心が、すなわち「安息」が得られる。それはそのまま、後の世での宝になるので、「後の世で永遠のいのちを受けない者はありません」とある。ただし、ここは、「後の世」で初めて「永遠のいのち」を手にするかのように訳されているが、そういう話ではない。これは「後の世」で初めて「永遠のいのち」を手にするということではなく、この世で「見える安心」を捨てる生き方をする者は、手にした「永遠のいのち」を、「後の世」で豊かに持っていないはずがないということを述べている。そもそも、「永遠のいのち」を持っていなければ、「後の世」に行くことなどできない。朽ちない「霊の体」（永遠のいのち）を着せられていなければ、すなわち「血肉のからだ」では、「後の世」の「神の国」を相続できない。「血肉のからだは神の国を相続できません」（Ⅰコリント 15:50）。したがって、この箇所は、イエスが言われた、「わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです」（ヨハネ 10:10）のことを述べている。

そうなると、「勝利者」となりたければ家族まで捨てなければならないのかとなるが、それに対する答えは、「はい。捨てなければなりません」である。だが、ここでいう捨てるという意味は、物理的に捨てるということではなく、神の御手に捨てるということであり、神にゆだねることを意味する。

❖ 神にゆだねること

晩年のアブラハムにとって、愛する息子イサクはかけがえのない家族であった。それは、彼にとっての「見える安心」であった。ところが、神はアブラハムにその安心すらも捨てるように要求し、イサクを生け贄にせよ、と命じられたのである。しかし、それは到底アブラハムにはできなかったので、彼は自分の限界を思い知らされ、「見える安心」のイサクを神にゆだねるに至った。すると神はアブラハムに、「イサクから出る者が、あなたの子孫と呼ばれる」（創世記 21:12）という神の言葉を思い出させ、神であれば人を死者の中からでもよみがえらせることができるという「信仰」を持たせた。こうして、イサクを肉では捧げられなかったアブラハムの弱さを、神は補われた。それにより、アブラハムは「信仰」によって、イサクを捧げることができた。

> 「信仰によって、アブラハムは、試みられたときイサクをささげました。彼は約束を与えられていましたが、自分のただひとりの子をささげたのです。神はアブラハムに対して、「イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる」と言われたのですが、彼は、神には人を死者の中からよみがえらせることもできる、と考えました。それで彼は、死者の中からイサクを取り戻したのです。これは型です。」（ヘブル 11:17-19）

アブラハムは「信仰」によってイサクを捧げた結果、「イサクを取り戻した」という。つまり、神はアブラハムがイサクを殺そうとするのを止め、彼の命を守られたのである。この出来事は「型」である。それは、「見える安心」となる家族を捨てるというのは、家族を神にゆだねるということであり、すると「見える安心」は、神への「信仰」に変わるということである。「見える安心」を、「信仰による安心」として受け取り直すということである。そのことが聖書に、「彼は、死者の中からイサクを取り戻したのです。これは型です」と書かれている（本書 219 頁「神にゆだねる「信仰」」）。

このように、「勝利者」は「見える安心」を捨てる。それは「見える安心」を神にゆだね、神への「信仰」に変えるということである。これが、神の前で自分が「無」であることを知る「信仰」であり、そこに喜びを覚える。なぜなら、自分が「無」であるからこそ、自分のうちに神の力が現れるからである。これ以上の喜びはない。しかし、人は自分を責め、自分を「ダメな者」と思い、必死になって愛される自分になろうとする。そこで次は、自分を責める、「責め」の意識を考察したい。

－「責め」の意識－

誰もが、「責め」の意識を持っている。誰もが心の奥底に、「責め」を感じている。誰もが、自分は責められているという意識に苦しんでいる。この「責め」の意識は、自分の存在が否定されていることへの意識であり、それが人を「敗北者」へと誘導する。「見える安心」を求める生き方に誘導する。そこで、「責め」の意識を考察したい。初めは、「責め」の意識の起源である。

❖ 「責め」の意識の起源

「責め」の意識は、自分の存在が否定されていることへの意識であり、存在を否定する運動を「死」という。その「死」は、悪魔の仕業で入り込み、「死」は人の存在を完全否定してくる。人が生きる上で欠かせない人の体を、完全に滅ぼしてしまう。実は、そのせいで、人は自分が責められていると感じている。したがって、「責め」の意識の起源は「死」であり、「死」は悪魔の仕業によるのである。「死をつかさどる者、つまり悪魔を」（ヘブル 2:14　新共同訳）。では、なぜ「死」が人の存在を否定すると、人は「責め」を意識するのだろう。その仕組みは、どうなっているのだろうか。

❖ 「責め」を意識する仕組み

「永遠」を知らない生き物の中に、その存在を否定する「死」の運動が入り込んでも、彼らは「責め」を意識することはない。例えば、蜂や蟻は、「責め」を意識することはない。なぜなら、彼らには「永遠」を問う中心が与えられていないからである。しかし、人間のように神の「いのち」が吹き込まれ、「永遠」によって規定された中心を持つ者は存在することが肯定されているので、そこに存在を否定する「死」の運動が入り込むと、「永遠」を問うことになる。それが、「責め」の意識を生じさせる。

つまり、人が「責め」を意識するのは、人の中心で、人の存在を肯定している方がおられるからである。人の土台は神であり、その方が人の存在を肯定しているからこそ、それを否定する運動が入り込むと、人は自分の存在が否定されていると感じ「責め」を意識する。そうである以上、「責め」の意識は、人を肯定してくれている神への最高の意識である。ところが、人は「責め」の意識を全く別な意味に捉えてしまう。人はそれを、神が自分を罰していると捉え、自分のことを「ダメな者」と思うようになってしまった。ここに、「死」による惑わしがある。

❖ 「死」による惑わし

入り込んだ「死」は、人の体を滅びに向かう「有限性」に変えてしまった。そのため、「永遠性」である神が見えなくなった。見えなくなっても、人の中心は神であり、人は神の土台の上に建てられているので、神の愛を知っている。自分の存在を肯定し、無条件で愛し支えてくれている神を知っている。知っているからこそ、自分の存在を否定する「死」が入り込んだことで、「**責め**」を意識するのである。しかし、いくら「**責め**」を意識しても、自分を愛してくれている神が見えない。すると、どうなるだろう。

想像してみてほしい。何も知らない無垢な子どもの前から、今まで自分を愛してくれていた親が突然姿を消せば、その子はどう思うかを。その子は、自分が悪いから、親が姿を消してしまったと思ってしまう。自分がもう愛される価値がなくなったので、親が姿を消してしまったと思ってしまう。そうではないだろうか。最初の人に起きたことも同じであった。知っていた神が見えないのは、自分が悪いからとなってしまった。こうして、「**責め**」の意識は、自分が悪いからとなった。

さらには、「死」が入り込んだ世界は、生成と消滅を繰り返すので、天変地異の災いは避けられなくなった。また、人の体も病気を覚えるようになり、「死」の制限から人は失敗もするようになった。そのため、避けられない災いに遭うと、心の奥には自分が悪いから、神に責められているという「**責め**」の意識があるため、人は神に罰せられたと思ってしまう。ここに、「**罪には罰**」という思いが誕生し、人は自分のことを「ダメな者」と思うようになった。災いに遭うたびに、自分は「ダメな者」ゆえ、自分は「悪い者」ゆえ、神から罰せられたのだと思うようになった。こうして、「**罪には罰**」という意識が「人間的な標準」となった。

しかし、ここに「死」による惑わしがある。なぜなら、人を責めているのは神ではなく、「死」だからである。その「死」は悪魔の仕業によるので、悪魔が人を責めている。人はそれを、神が自分を責めていると勘違いし、神に責められなくなるには、神が命じる律法による「行い」が必要だと思うようになった。律法による「行い」によって、神から愛されると思うようになった。それがそのまま、人との関係に投影されるので、人から愛されるには相手の期待（人の律法）に応える「行い」ができなければならないと思うようになった。その結果、誰もが律法による「行い」によって、愛される自分を目指すようになったのである。カインとアベルの話は、まさしくそのことの型である。こうして、人の心に覆いが掛かってしまった。

❖ 覆いが掛かってしまった

「**責め**」の意識の起源は「死」であり、悪魔である。人を責めているのは悪魔であって、神ではない。にもかかわらず、「死」のせいで神が見えなくなったために、人は神に責められていると勘違いするようになった。加えて、避けられない災いを、神からの罰だと思うようになった。こうして、誰もが自分のことを「ダメな者」と思うようになり、「**罪には罰**」という意識が「人間的な標準」となった。これが、心に掛かった覆いである。この覆いのせいで、「神の福音」の真実が見えなくなった。

本書では、この「ダメな者」という意識も、「**罪には罰**」という意識も誤りであることを繰り返し述べてきたが、正確に言えば、それはある意味、正しく自分を見ている。人の存在を否定する「死」の運動が支配するこの世界にあっては、それは正しい意識だからである。何も間違った意識ではない。しかし、そうした意識は、人の存在を肯定する神に支えられているから生じるのであって、つまり、人は「良き者」として造られたからこそ、それを否定する「死」の運動が入り込んだことで生じるのであって、「ダメな者」という意識も、「**罪には罰**」という意識も誤った認識であり、真実ではない。真実は、人が神に無条件で愛されている「良き者」であり、加えて、神の肯定は「死」の否定を否定するので、「**罪には罰**」ではなく、「**罪にはあわれみ**」である。

ところが、人の心には、入り込んだ「死」のせいで、自分は堕落した「ダメな者」であり、「ダメな者」に対して神の罰があるという覆いが掛かってしまった。「ダメな者」ゆえに、神には愛されないという覆いが掛かった。そのため、人は律法の「行い」によって愛される者を目指すようになった。平たく言えば、人と自分を比べ、自分は何ができるかを探し、そのことで周りの関心を引き、愛される者になろうとした。何かができることで愛される者になり、「ダメな者」から「良き者」になろうとしてしまったのである。それが「**見える安心**」であり、それを手に入れるために忙しく走り回るようになった。そのことに、時間を費やすようになった。しかし、何かができるという自分は死と共に消えてしまう幻であり、何も残らない。こうして、何も残らないものに時間を費やすという「敗北者」の生き方が始まったのであった。

このように、悪魔の仕業によって「死」が入り込んで以来、人の心に覆いが掛かってしまい、誤った意識を持つようになった。それは、神から責められているという、「**責め**」の意識であり、様々な災いに遭うたびに抱く「**罪には罰**」という意識である。この意識が、「敗北者」の生き方を誕生させたのである。

❖ 「敗北者」の生き方につながった

「責め」の意識から「罪には罰」という意識が生まれ、そこから人は自分と人を比較し、自分が責められないことを目指すようになった。何ができるかを互いに競い合い、責められるのではなく、愛される自分を目指すようになった。それには、周りよりも勝る「評判」、「お金」、「地位」、「健康」などを手に入れる必要があったので、誰もがそれらの獲得を目指した。その結果、それらを獲得した者は多く愛され、「勝利者」を意識することができ、それが「見える安心」となった。だが、それらは自分の死と同時に手放すことになり、何も残らないので、「見える安心」を目指す生き方は時間の浪費でしかない。この浪費が、「敗北者」の生き方であった。

キリスト者も、以前は「敗北者」の生き方をしていたので、御霊によって救われてもなお、その救いを「見える安心」の獲得で確かめようとする。周りから良く思われる「行い」を頑張ることで、少しでも愛される「評判」を獲得し、そのことで自分の救いを確かめようとする。要するに、救いを、肉の「行い」によって完成させようとするのである。しかし、それは誤りなので、聖書にはこう書かれている。

> 「あなたがたはどこまで道理がわからないのですか。御霊で始まったあなたがたが、いま肉によって完成されるというのですか。」（ガラテヤ 3:3）

このように、「責め」の意識から「罪には罰」という意識が生まれ、それが「敗北者」の生き方につながった。その生き方が、キリスト者の中にも入り込んだのである。まことに「責め」の意識は、誤った方向に流れ出してしまった。それは、「敗北者」の生き方を生み出したのである。そして、その生き方の最大の特徴は、人を裁くことであった。「責め」の意識は、人を裁くという形で流れ出るようになった。

❖ 人を裁いてしまう

なぜ、人は人を裁くことができるのだろう。それは、「責め」の意識があるからである。自分が神から責められ、裁かれていると思うから、人を裁くことで人との関係を築こうとする。なぜなら、神との関係が人の中心であり、それがそのまま人との関係に投影されるからである。それで、神に責められ裁かれていると思う人は、人を責め裁いてしまう。言い換えれば、愛を知らない者は、人を愛することはできないということである。自分が裁かれていると思うから、人を裁くことができる。裁かれると思わなければ、裁くことなどできないのである。思っていないことは、何もできない。そこでイエスは、こう言われたのであった。

「だれかが、わたしの言うことを聞いてそれを守らなくても、わたしはその人をさばきません。わたしは世をさばくために来たのではなく、世を救うために来たからです。」（ヨハネ 12:47）

イエスはここで、「人をさばきません」と宣言することで、自分が神に裁かれていると思うのは「妄想」であって、真実ではないとされた。真実は、あなたが罪人であっても、その「行い」に関係なく愛されているということである。

「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」（ローマ 5:8）

このように、人は神から責められ、裁かれていると勝手に思い込んだことで、人を平気で裁くようになった。当たり前のように人を裁き、そのことで自分を高くするようになった。それゆえ、聖書は次のように警告する。

「だから、すべて人を裁く者よ、弁解の余地はない。あなたは、他人を裁きながら、実は自分自身を罪に定めている。あなたも人を裁いて、同じことをしているからです。」（ローマ 2:1　新共同訳）

そのことも知らずに、人は人を裁く。互いに裁き合い、自分の裁きは正しいと、互いに訴え出る。これこそが、「敗北者」であることの証しである。

「そもそも、互いに訴え合うことが、すでにあなたがたの敗北です。なぜ、むしろ不正をも甘んじて受けないのですか。なぜ、むしろだまされていないのですか。」（Ⅰコリント 6:7）

すなわち、人を裁き、人に対し、赦せないという思いを抱くことは悪魔の策略なのである。悪魔は「死」を人の中に持ち込み、人に「責め」を意識させ、互いが裁き合うように仕向け、神が展開する愛の運動とは真逆の道に進ませたからである。それゆえ、私たちは悪魔の策略に陥ることのないよう、互いに赦し合うべきである。

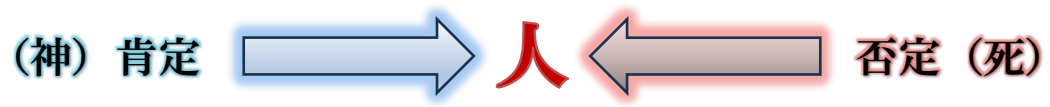
「もしあなたがたが人を赦すなら、私もその人を赦します。私が何かを赦したのなら、私の赦したことは、あなたがたのために、キリストの御前で赦したのです。これは、私たちがサタンに欺かれないためです。私たちはサタンの策略を知らないわけではありません。」（Ⅱコリント 2:10-11）

そこで言いたい。神は人を絶対に責めてはいないと。そもそも「責め」の意識とは、神への最高の意識であり、それ自体が神からの励ましなのである。「主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである」（ヘブル 12:5-6）。

❖ 神からの励まし

先述したように、自分の存在が否定される「責め」の意識が生じるのは、自分の存在を肯定してくれている方が自分の土台におられるからである。その方は神であり、人を無条件で愛し、生きることを無条件に支持してくれている。それがなければ、自分の存在が否定されても何も感じない。つまり、人の意識というのは、それとは反対の意識によって支えているということである。

これは、「すべての作用に対して、同等の大きさで逆向きの反作用がある」という、「作用・反作用の法則」（ニュートンの第三法則）である。**物体 A** が**物体 B** に力を加えるとき、**物体 B** も**物体 A** に対して同じ大きさの反対方向の力を加えるということである。「死」が人を否定する力を人に加えれば、人を支える神は、同じ力で押し返すということである。そうなると、人は二つの異なる運動の板挟みになるので苦しみを覚え、それを「責め」として意識することになる。それゆえ、「責め」の意識は、神が精一杯人を支え励ましているということであり、神への最高の意識なのである。



聖書は、人を否定する「死」の力から生まれた思いを「肉の思い」とし、「肉の思いは死であり」（ローマ 8:6）、人を肯定する神の「いのち」の力から生まれた思いを「御霊の思い」とし、「御霊による思いは、いのち」（ローマ 8:6）、「肉の思い」は神からの「御霊の思い」に反抗することを教えている。「肉の思いは神に対して反抗するものだからです」（ローマ 8:7）。つまり、人は真逆の思いの間に立たされているので苦し

みを覚え、それを「**責め**」として意識するというわけである。しかし、それは、神が精一杯人を支え励ましているということであり、神への最高の意識である。

そして、神から出ている、人を肯定する運動は人を神に向かわせ、「**すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです**」（ローマ 11:36　新共同訳）、神との関係を築かせ、神からは友と呼ばれるようにする。「**彼は神の友と呼ばれたのです**」（ヤコブ 2:23）。これを、手にした「**永遠のいのち**」が豊かになるという。すなわち、私たちは神と和解して「**永遠のいのち**」を神から賜り、「**神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです**」（ローマ 6:23）、神との距離を縮め、神である「**永遠のいのち**」に至る（近づく）のである。「**その行き着く所は永遠のいのちです**」（ローマ 6:22）。これが、神から出ている人を肯定する運動の流れであり、その運動は神と人を「一つ」にすることを目指すので「愛」と呼ばれる。この「愛」は神への「信仰」と「希望」を人のうちに実らせ、「安息」を持たせてくれる。

それに対し、悪魔が持ち込んだ、人を否定する運動は人を死に向かわせ、「**死人は生き返りません**」（イザヤ 26:14）、「**永遠のいのち**」である神と人を引き裂く。この否定の運動から出た「**肉の思い**」に惑わされ、「**肉の思い**」に押されて死に向かうなら、神からの肯定の風はますます強くなり、「**責め**」の苦しみが増し加わり、「絶望」を覚える。しかし、その「絶望」は神が励ましているからこそ生じるので、その時、人を肯定する「**御霊の思い**」に目を向け、神に助けを乞うなら（信仰）、神によって「希望」が見えてくる。神に拠り頼む信仰によって、神の励ましが見えてくる。

このように、「**責め**」の意識の裏には、神の励ましが隠れている。それゆえ、現実から目を逸らさず「**責め**」と向き合うなら、そこには神からの最高の励ましが流れ出ているので、必ず「絶望」を陵駕する神の励ましと出会える。つまり、「**責め**」を覚える者は幸いなのである。「**責め**」によって「**苦しみ**」を覚える者は、自分を支えてくれている神と出会うことができ、神からの励ましを受け取れるからである。

> 「心の貧しい（「責め」を覚える）者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。悲しむ（「苦しみ」を覚える）者は幸いです。その人たちは慰められるから。」（マタイ 5:3-4）　※（　）は筆者が原文の意味を補足

ならば、「**罪の行為**」に伴う「**責め**」の意識はどうなるのか。

❖ 「罪の行為」に伴う「責め」の意識

「**責め**」の意識を最も強く感じるのは、悪いことをしたときである。心の声に逆らい、「**罪の行為**」をすると罪責感と呼ばれる「**責め**」に苦しむ。それは、悪いことをしたので、神が責めているのだろうか。表面的には神に責められているように感じるので、そのような説明を本書はしてきた。しかし、正確に言えば、悪いことをしたときの「**責め**」の意識も、神が責めているのではない。ここでは、そのことを説明したい。

「**責め**」の意識は、人を否定する「死」が入り込んだことから始まった。神が人の存在を肯定するので、人の存在を否定する「死」の運動に対し、自分が責められていると感じるのである。ただし、それは漠然と心の奥で感じるだけである。そして、その「死」の運動は滅びに向かうので、「有限性」である。この「有限性」が人の中に入り込むと、神は滅びない「永遠性」なので、人は神と分離した状態になる。すなわち、神が見えなくなる。「死」は、まさしく神と人とを分離し、神を見えなくさせる。この状態が「罪」である。「**死のとげは罪であり**」（Ⅰコリント 15:56)。すると、人の土台は神なので、土台の神が見えなくなると人は「不安」になる。「不安」になれば、「**作用・反作用の法則**」から、人は自動的に、見える世界に「安心」を求めるようになる。本書はこれを、「**見える安心**」と呼んできた。

その「**見える安心**」の第一は、見える人たちから愛されることである。どうすれば愛されるかを巡って人は競うようになり、誰が多く愛されるかを比べる。また、「**見える安心**」の第二は、見える富である。富の獲得を巡って人は争うようになり、誰が多くの富を持っているかを比べる。こうして、互いに比べ合うことで自分の価値を計り、互いに比べ合うことで、人は互いに裁き合うようになり、怒りや嫉妬を覚える。この怒りや嫉妬が、隣人を傷つける行為へと発展する。

つまり、悪魔の仕業で「死」が入り込み、その「死」が神と人を分離し神を見えなくさせたので、人は「不安」を覚え、「**見える安心**」をむさぼるようになり、そこから人を傷つける「**罪の行為**」を犯すようになり、「**責め**」の意識を強く覚えるようになったのである。正確に言えば、「**見える安心**」をむさぼる行為は全て自分の安心のためなので、それ自体が「**愛せよ**」に逆らう「**罪の行為**」である。その行為が神との分離を強固にするので、神との分離である「罪」によって生じた「**責め**」の意識を増幅する。これが、「**罪の行為**」に伴い、「**責め**」の意識を強く覚えてしまう仕組みである。

しかし、「責め」の意識を強く覚えるようになると、漠然と心の奥で感じていた「責め」の意識が、具体的に認識できる「責め」の意識になる。これが罪責感と呼ばれる意識であり、それは「死」の運動が入り込んだことで心の奥底に生じるようになった「責め」の意識が、具体的な「罪の行為」に伴い顕在化したものである。すなわち、「責め」の意識の元になった神との分離（罪）は認識できないが、「罪の行為」は認識できるので、「責め」の意識が顕在化したということである。したがって、「罪の行為」に伴う「責め」の意識も、神が責めているのではない。「罪の行為」が人を具体的に否定し、具体的に責めている。

このように、入り込んだ「死」は、神と人を分離する「罪」となり、「死のとげは罪であり」（Ⅰコリント 15:56)、その「罪」は人を「不安」にし、「見える安心」をむさぼらせる「罪の行為」となって具体的に人を苦しめ、責めるようになったのである。そのことで、漠然としていた「死」による「責め」の意識が、具体的な「罪の行為」で、具体的に認識できるようになった。悪いことをしたときの「責め」の意識も、それは神が責めているのではなく、神が人を助けようとしている励ましである。ただ人の側では土台の神が見えないので、あたかも神が自分を責めているように感じるだけであって、真実は、神が人を愛している証しにほかならない。そこで、神は人の目線に合わせ、人を愛することを、人を責めると言われたのであった。

> 「そして、あなたがたに向かって子どもに対するように語られたこの勧めを忘れています。「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」（ヘブル 12:5-6）

したがって、「罪の行為」に伴う「責め」の意識も、神からではない。そもそも、神は人を、「罪の行為」を犯さない「良き者」として造られた。しかし、入り込んだ「死」の運動がその「良き者」に「罪の行為」をさせ、「良き者」であることを具体的な行為で否定してくるので、「責め」の意識も具体的に感じるということである。それゆえ、「罪の行為」が人を責めているのであり、それは神と分離する「罪」に起因し、その「罪」の中身は悪魔の仕業による「死」なので、「死のとげは罪であり」（Ⅰコリント 15:56)、人を責めているのは悪魔であって神ではない。神は徹頭徹尾、人を無条件で愛しておられるから、人は自分を否定するものを「責め」として意識する。ゆえに、意識する「責め」は神の愛（肯定）の裏返しであり、「主はその愛する者を懲らしめ」

(ヘブル 12:6)、それは神に対する最高の意識である。そのことを知るには、十字架で死ぬしかない。

❖ 十字架で死ぬ

人は入り込んだ「死」のせいで「責め」を覚えるようになり、同時に、その「死」のせいで土台の神が見えなくなった。そのため、「責め」は神から来ていると思うようになり、神に愛されるには律法の「行い」が必要だと思い込んでしまった。そこで、人の価値を律法の「行い」で判断するようになった。自分の「行い」と人の「行い」を比べて競うようになり、互いに裁き合い責め合うようになった。

こうして、「死」による「責め」の意識は、互いに裁き合うという流れになり、その流れの中で少しでも自分を高くできた者がこの世での「勝利者」となった。しかし、それは「敗北者」の生き方であった。にもかかわらず、人はそれに気づかなかった。それに気づくには、「責め」は神からではなく悪魔から来ていることを知り、加えて、「責め」は神の愛（肯定）の裏返しであることに目が開かれる必要がある。それには、自分がキリストの十字架で死ぬしかない。その手順はこうである。

「責め」を意識し、「苦しみ」を覚えたなら、心を神に向け、神と自分とを比較する。そうすれば、何もできない「無」の自分が見えてくる。それこそが自分の真実な姿であり、人と比べていたときの自分の姿は偽りである。そこで、偽りを信じてきた自分を捨て、神の前の自分の姿を真実とし、それを信仰で受け取る。これを、この世に対し、キリストとともに十字架で死ぬという。「行い」の律法に死ぬという。死ねば、何もできない「無」の自分となるので、そこに神の力が完全に現れ、神が自分のうちで生きていることが分かるようになる。

> 「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。」（ガラテヤ 2:20）

つまり、神の恵みは、私が十字架で死ぬところに働く。自分は、何もできない「無」であるというところに神の恵みは働き、律法の「行い」ができるというところには働かないのである。そうでないと、キリストの死は無意味になってしまう。

> 「私は神の恵みを無にはしません。もし義が律法によって得られるとしたら、それこそキリストの死は無意味です。」（ガラテヤ 2:21）

神の恵みが働くようになれば、人の存在を否定する「責め」は神からではないことを知るようになる。むしろそれは、神の愛（肯定）の裏返しであったことを知るようになる。では、十字架で死ぬことの手順を、さらに具体的に話したい。

第一に、人の中心は神であり、人は神と一対一で向き合って生きていることを信じることである。つまり、人は「単独者」である。聖書がそのように教えている以上、自分がどう思おうとも「単独者」の自分を信じるのである（本書 12 頁「人の中心」）。

第二に、人は神と一対一で向き合って生きているので、人を救うのは神であることを信じることである。神が人に呼びかけ、それに人が応答することで人は救われる。聖書がそのように教えている以上、「死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです」（ヨハネ 5:25）、自分がどう思おうともそれを信じるのである。そして、救われるということは、「死」から「いのち」に移されたということである。「死からいのちに移っているのです」（ヨハネ 5:24）。朽ちない「霊の体」を着せられ、「永遠のいのち」を持ったということである。「永遠のいのちを持っています」（ヨハネ 6:47　新改訳 2017）。それを信じることが二番目である。

第三に、神と一対一で向き合っている状態が人の中心なので、その中心が周りの人との関わりに投影されることを信じることである。つまり、目に見える兄弟を愛していない者は、目に見えない神を愛していないということである。「目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません」（Ⅰヨハネ 4:20）。

第四に、神との関係が人との関係に投影されるので、人を裁き、人を愛さない自分と出会ったなら、人の中心におられる神に心を向けることである。キリストの十字架に心を向け、自分が神に愛されていることを信じるのである。罪が赦され、自分が神から愛されていることを信じ、「死」から「いのち」に移されたことを信じて感謝する。

第五に、何であれ「苦しみ」を覚えたなら、神に助けを乞うことである。そうすれば、神の前では何もできない自分が見えるようになり、神に生かされている自分を知るようになる。こうして、神からの「平安」に包まれていき、「責め」の意識は神の愛への意識であったと知るようになる。これを、十字架で死ぬという。

このように、人を責めているのは神ではなく、悪魔であり、「死」である。ただ神は、人を否定する「死」の運動に対し、人を肯定し続けてくださるので、人を否定する運動を「責め」として意識するということである。人はその意味を誤解し、自分は神から責められていると思い込み、「敗北者」の生き方をするようになってしまった。そこでキリストは、この生き方をやめさせるために、そのような生き方をする古い自分に死ぬことを可能にした十字架を用意してくださったのである。それをどのようにして可能にしたのか。それは、キリストがともに死んでくださることによってである。

> 「私たちは知っています。私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが滅ぼされて、私たちがもはや罪の奴隷でなくなるためです。」（ローマ 6:6　新改訳 2017）

そこで、忘れてはならないのは、キリストがともに死んでくださるのは、私たちがキリストの体の部分だからである。「あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です」（Ⅰコリント 12:27　新共同訳）。神がぶどうの木であれば、私たちはその枝だからである。「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です」（ヨハネ 15:5）。

❖ まとめ

見てきたように、キリスト者の生き方には二つある。一つは「勝利者」（御霊に属する人）の生き方であり、彼は神と向き合って生きる。神と自分を比べ、自分が「無」であることに喜びを覚える。なぜなら、自分が「無」であるからこそ、神の力が完全に現れることを知ったからである。「わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」（Ⅱコリント 12:9）。

もう一つは「敗北者」（肉に属する人）の生き方であり、彼は人と向き合って生きる。人と自分を比べ、自分を人よりも高くすることに喜びを覚える。そのため、人を裁く。これでは神との関係は築かれないので、いくら自分を高くする「見える安心」を苦労して手に入れても、それは何も残らない。残るのは、神との関係で実る神への信仰と希望と愛だけである。つまり、「敗北者」は何も残らないものに時間を浪費し、それこそが救いの完成だと勘違いしている。それはまるで、沈みゆく船の甲板で、「勝利者」になろうと忙しく走り回っている姿なのである。

ある人が、忙しく走り回っている。
少しでも高い地位を手に入れ、

「わー、すごい」と言われる「勝利者」になろうとして、走り回っている。

ある人が、忙しく走り回っている。
少しでも多くの財産を手に入れ、
「わー、すごい」と言われる「勝利者」になろうとして、走り回っている。

だが、その人が走り回っていた場所は、
沈みゆく船の甲板であった。

以上が、「勝利者」と「敗北者」の話である。このように、「勝利者」は、自分に何ができるのかと、自分の肉によって救いを完成させようとはしない。神の前では何もできない自分を知り、ただ神に頼ることで、御霊によって完成させようとする。その完成は、神への信仰、希望、愛を実らせることである。その結果、神から友と呼ばれる関係を築くことである。「**彼は神の友と呼ばれたのです**」(ヤコブ 2:23)。これを、手にした「**永遠のいのち**」が豊かになるという。これこそが、いつまでも残る財産であり、天国に持って行ける唯一の宝になる。

> 「自分の宝は、天にたくわえなさい。そこでは、虫もさびもつかず、盗人が穴をあけて盗むこともありません。」(マタイ 6:20)

これで、『福音の回復』第二巻**【「神の福音」の真実(応用編)】**を終わるが、最後に「付録」として、「**惑わしの仕組み**」の話をしたい。ここまで繰り返し、「**罪には罰**」という「人間的な標準」に惑わされてしまう話をしてきたので、「**惑わしの仕組み**」の話をしておきたい。これは大変面白いので、気楽に読んでほしい。

付録：「惑わしの仕組み」

「神の福音」の真実は、一言でいうと「癒やし」である。悪魔の仕業で「死」が入り込み、人は罪人という病人になったからである。その病気を、「赦しの恵み」が癒やす。そこで、神は人に、「赦しの恵み」を受け取るようにと決断を迫る。それは神を「信じる」ことなので、「信じる」ようにと決断を迫る。ところが、同じ聖書を読んでいるにもかかわらず、人によっては「神の福音」を「癒やし」ではなく、「ダメな者」を「良き者」に造り変える話として読んでしまう。堕落した者に罪を悔い改めさせ、立派な行いをできるようにする話として読んでしまう。同じ聖書を読んでいるにもかかわらず、全く別の意味に取ってしまうのである。

これは明らかに、聖書を読む際に何らかの「惑わし」が働いているとしか言いようがない。その「惑わし」の正体は、「**罪には罰**」という「人間的な標準」である。確かに、「人間的な標準」で神の思いを知ろうとすれば、「神の福音」は堕落した者に罪を悔い改めさせ、立派な人間にする話になってしまう。かつてパウロも、「人間的な標準」で人を知るように、約束のキリストを知ろうとしたので、罪を裁かないイエスを約束のキリストとすることに躓いた。それで、イエスをキリストとして信じる者たちを迫害してしまった。パウロは、この自分の過ちを省みて、次のように述べている。

> 「ですから、私たちは今後、人間的な標準で人を知ろうとはしません。かつては人間的な標準でキリストを知っていたとしても、今はもうそのような知り方はしません。」（Ⅱコリント 5:16）

このように、「惑わし」が起きる原因は、「**罪には罰**」という「人間的な標準」の眼鏡にある。ならば、どうすれば「人間的な標準」の覆いは取り除かれるのだろう。それは簡単である。心を「主」に向けることで取り除かれる。

> 「しかし、人が主に向くなら、そのおおいは取り除かれるのです。」
> （Ⅱコリント 3:16）

「**主に向くなら**」とは、「主」は愛なので、人が「**神の愛**」に向くならということである。「**神の愛**」はキリストの十字架に象徴されるように、それは「**罪にはあわれみ**」であって、「赦しの恵み」である。つまり、聖書を読むのに必要な眼鏡は「赦しの恵み」

であり、その眼鏡を使えば覆いが取り除かれて「神の福音」の真実が見えるようになる。これは、聖書を解き明かす基準を外部（人間的な標準）に求めてはならないということであり、聖書自身が聖書を解釈するということである。「この賜物について話すには、人の知恵に教えられたことばを用いず、御霊に教えられたことばを用います。その御霊のことばをもって御霊のことを解くのです」（Ⅰコリント 2:13）。これが宗教改革で叫ばれた「聖書のみ」の考えである（第一巻 301 頁「－聖書の読み方の基本－」）。

そもそも神は、「わたしの言葉を聞いて、それを守らない者がいても、わたしはその者を裁かない」（ヨハネ 12:47　新共同訳）と言われる以上、さらには、「わたしは、世を裁くためではなく、世を救うために来たからである」（ヨハネ 12:47　新共同訳）と言われる以上、私たちの掛けるべき眼鏡は「罪には罰」ではなく、罪を裁かない「赦しの恵み」である。罪を赦す、「イエス・キリストの十字架」の眼鏡を掛ける必要がある。しかし、人は聖書を解き明かす基準を聖書の外部に、すなわち人の「経験」に置くので惑わされてしまう。神の思いを知るのに、「人間的な標準」の「罪には罰」という外部の「経験」に頼るから「神の福音」が見えなくなってしまう。そこで、「経験」がいかに人を惑わし、真実を見えなくさせてしまうのか、その実験をしてみたい。実験といっても、それは以下の話を読み、それから質問に答えるだけでよい。

❖ 「有名な外科医」の話

> 「アメリカに、有名な外科医がいた。ある日、この有名な外科医のところに、交通事故で大けがをした親子が緊急搬送されてきた。父親はすでに死亡していたが、子どもの方はまだ息をしていた。早速、有名な外科医は子どもの手術に取りかかろうとした。だが、その時、有名な外科医はその子の顔を見るなり、『これは私の息子だ！』と叫んだ。」

さて質問は、交通事故で大けがをした子どもと、「有名な外科医」との関係は一体どのような関係なのかである。父親はすでに死亡しているにもかかわらず、この「有名な外科医」は、『これは私の息子だ！』と叫んだからである。

多くの人は、こう答えるだろう。「有名な外科医」が、『これは私の息子だ！』と叫んだ以上、彼は大けがをした子の「父親」だと。人は「有名な外科医」と聞くと、自らの「経験」から自動的に「男性」を連想するので、この場合は「息子」と「父親」の

関係だと答える。だとすると、死亡した父親というのは一体誰だったのか、という疑問が生じる。そこで、人はその疑問を解決するために様々な解釈を試みる。

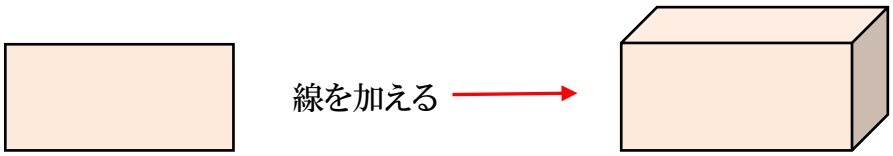
例えば、この「有名な外科医」は離婚し、離婚した妻が子どもを連れて別の男性と再婚し、その人が今回の交通事故で亡くなったと。あるいは、「有名な外科医」は何らかの理由で自分の息子を養子に出し、そこでの父親と交通事故に遭ったと。さらには、この子は誘拐されて行方不明になっていた実の子であり、誘拐した男が交通事故に遭ったと。そのようにして、人は何としても、「有名な外科医」が大けがをした子の「父親」であったことを論証しようと試みる。だが、どの解釈も間違っている。なぜなら、この「有名な外科医」は「女性」であり、大けがをした子どもとの関係は、「息子」と「母親」であったからである。交通事故で死亡したのは自分の夫であり、実の息子が運ばれて来たので、『これは私の息子だ！』と叫んだのである。まさしく、ここに記されたとおりの意味である。

この答えを聞くと、人は一様に納得し、それまでの無理な解釈を取り下げる。そして、一様に思う。「何だ、実に簡単な答えではないか」と。とはいえ、「有名な外科医」と聞くと、誰もが自分の「経験」から「男性」を連想してしまうせいで、こうした簡単な答えでさえ見出せなくなってしまうのである。もう一度言うが、ここでは「有名な外科医」と述べただけであって、それが「男性」だとは一言も言っていない。にもかかわらず、「男性」だと思い込んでしまったのは、「経験」のささやきがあったからにほかならない。そこで、大人よりは「経験」の少ない小学校一年生の男の子に、この「有名な外科医」の話をしたことがある。すると、その男の子はすぐさま、「それはお母さんでしょ！」と答えた。なぜそれが分かったのかと聞くと、「だって、死んだのはお父さんなんだから、『これは私の息子だ！』と言ったのはお母さんしかいないでしょ！！！」と、力強く言い返されてしまった。ならばと、「有名な外科医」と聞いて、男性を想像しなかったのかと男の子に聞き返すと、彼は「う〜ん、そうなの？」と、首をかしげてしまった。私は、この小学校一年生の男の子とのやりとりで、大人はいかに自分の「経験」に惑わされているかを思い知らされた次第である。

このように、積み上げてきた「経験」が人を惑わす。正確に言えば、積み上げてきた「経験」が勝手に意味を補完してしまう。これを、脳の「補完機能」という。実は、この「補完機能」がないと生活に支障をきたす。次に、その話をしたい。

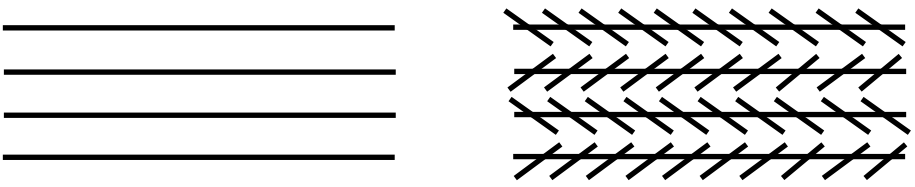
❖ **「補完機能」**

下の図を見てほしい。左側の絵は平面に見える。しかし、それにいくつかの線を加えた右側の絵は立体に見えないだろうか。立体に見えるはずである。



どうして、平面の図が立体に見えてしまうのかといえば、それは、「経験」による補完がなされているからである。これまで積み上げてきた「経験」から、脳は、「**この線の形なら立体だ**」と補完し、脳の中に立体を描かせてしまうのである。これを「補完機能」という。ということは、こうした線の形が立体であることを「経験」していない人は、脳の中で立体は描けないことになる。実際、そうした「経験」のない幼子には、右の図はただの平面にしか見えないという。そうなると、立体を表した図の意味が分からないので、生活に支障をきたすことになる。いずれにせよ、この「補完機能」があるおかげで、人は短い単語のフレーズでもスムーズなコミュニケーションができる。

このように、脳には「補完機能」がある。積み上げてきた「経験」で、見聞きする情報を補完し、生活に支障が出ないようにしている。問題は、その「経験」の中に「**罪には罰**」があるので、「**罪**」と聞けば、人は勝手に「**罰**」を補完してしまうことにある。そこで今度は、「**罪には罰**」という「経験」の乏しい幼子に、アダムとエバが禁断の実を食べるまでの聖書箇所を、分かりやすい言葉で読み聞かせたことがある。それからその子に、アダムとエバは食べてはいけない実を食べたのだから、「**罰**」を与えるべきかどうかを尋ねてみた。するとその子は、「**悪いのは蛇さんでしょ**」と言い、アダムとエバは被害者であるかのように答え、「**罰**」を否定した。幼子にしてみると、この話は、あの「白雪姫」が、おばさんに変装した魔女にだまされ、毒リンゴを食べてしまった話と同じなのである。しかし、「**罪には罰**」という「経験」が豊かな大人は、そのようには答えない。では、下の図を見てほしい。左は平行線である。その平行線に斜め線を付け加えたのが右の図になるが、それはもう平行線には見えないはずである。



この「斜め線」は、真実（並行）を見えなくさせる「覆い」になっている。この平行線を「神の福音」とするなら、私たちの「経験」が「斜め線」であり、それが「神の福音」の真実を見えなくさせる「覆い」になる。例えば、神は、「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している」（イザヤ 43:4）と言われる。しかし、人から良く思われ、愛されようとしてきた「世の心づかい」の「経験」は、「良い行いができなければ愛されるはずはない」とささやき、「自分には、まだ愛される価値がない」と、自動的に「神の言葉」に斜め線を入れてくる。すると、この「神の言葉」が信じられなくなり、パリサイ人のように律法の行いによって神からの義を得ようとする。こうして、神の思いに逆らった生き方を目指すようになる。これが「惑わしの仕組み」である。そこで今度は、惑わしの実際を聖書の言葉で体験してみたい。

❖ 惑わしの実際

「罪には罰」という「経験」を人は積み上げてきたので、どうしても「罪には罰」の定式で聖書を理解しようとする。そのため、例えばエデンの園からの追放の話を、アダムとエバが「罪」を犯したことへの「罰」として読んでしまう。だが、エデンの園からの追放は「罰」ではない。それはイエスが、弟子たちに示された「義」の型であった。なぜならイエスは、「義」とは、弟子たちがもはやイエスを見なくなることであると言われたからである。「義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなること」（ヨハネ 16:10　新共同訳）。見なくなれば、神との関係は信仰で築くしかないので、そこには信仰による「義」が成立するからである。つまり、アダムとエバにとっても神を見なくなることが信仰の「義」につながるので、彼らはエデンの園から追放されたのである。ところが、神が二人にされたことの真実は「経験」に惑わされ、見えなくなってしまった（第一巻 292 頁「－「第三ステージ」の検証－」）。この惑わしは、聖書を訳す際にも起きる。例えば、次の訳を見てほしい。

> 「あなたはイスラエル人に告げて言え。自分の神をのろう者はだれでも、その罪の罰を受ける。」（レビ記 24:15）
>
> 「あなたがたのみだらな行いの報いはあなたがたの上に下り、あなたがたはあなたがたの偶像の罪の罰を負わなければならない。」（エゼキエル 23:49）

これは新改訳聖書第三版の訳で、そこでは「罪の罰」と訳されている。しかし、この箇所の原文はどちらも「ヘット」[חֵטְא]であり、その主たる意味は「罪」であって、「罪の罰」という意味ではない。それゆえ、イエスの時代の七十人訳聖書はどちらも

「罪」を意味する「ハマルティア」[ἁμαρτία]と訳している。ちなみに、新共同訳は同じレビ記 24:15 を、「罪の罰を受ける」ではなく、「罪を負う」と訳し、口語訳はエゼキエル 23:49 を、「罪の罰を負わなければならない」ではなく、「罪を負い」と訳している。それは原文どおりに訳している。では、次の訳も見てほしい。

> 「アロンはモーセに言った。「わが主よ。私たちが愚かで犯しました罪の罰をどうか、私たちに負わせないでください。」（民数記 12:11）
>
> 「しかし、もしそのようにしないなら、今や、あなたがたは【主】に対して罪を犯したのだ。あなたがたの罪の罰があることを思い知りなさい。」
>
> （民数記 32:23）

これも新改訳聖書第三版の訳であるが、そこでは「罪の罰」と訳されている。しかし、この箇所の原文はどちらも「ハッタート」[חַטָּאת]であり、これも主たる意味は「罪」である。それゆえ、イエスの時代の七十人訳聖書はそのどちらも、「罪」を意味する「ハマルティア」[ἁμαρτία]と訳している。つまり、「罪の罰」ではなく、ただ「罪」（岩波訳）と訳すのが正しい。このように、これらの箇所は「罪」と書かれているだけなのに、人の「経験」が勝手に「罰」という意味を補完してしまうのである。

さらに言えば、「罪には罰」の「経験」は、「キリストは自ら十字架の上で、私たちの罪をその身に負われた」（Ⅰペテロ 2:24　新改訳 2017）の意味を、キリストは十字架で、私たちの罪の「罰」を代わりに背負ってくださったという意味に補完する。しかし、ここに書かれているのは、「罪をその身に負われた」であって、キリストが背負われたのは私たちの「罪」であり、罪の「罰」ではない。「罪」とは「死」による分離（とげ）なので、「死のとげは罪であり」（Ⅰコリント 15:56）、「罪をその身に負われた」とは「死」を滅ぼすために、「死」を負われたという意味である。

また、「罪には罰」という「経験」は、アダムが罪を犯したことで神は怒り、神からの「罰」として「死」が入り込んだと解させてくる。だが、聖書に書かれているのは、「罪によって死が入り込んだ」（ローマ 5:12　新共同訳）であって、「罪の罰として死が入り込んだ」ではない。罪を犯すというのは、「神と異なる思い」を持つことなので、「神と異なる思い」を人が持ってしまったことで、神と関われなくなる「死」が入り込んだと書かれているだけである（第一巻 61 頁「「死」は神からの「罰」ではない」）。

このように、人の脳には「補完機能」がある。それは「経験」に基づき、意味を補完する機能である。そのおかげで、平面の図であっても立体の図に見ることができる。人とのコミュニケーションもスムーズにできる。しかし、この「補完機能」が聖書を読む際に、時として悪さをしてしまうのである。そこでさらに、惑わしの実際を聖書で体験してもらいたい。この体験で使うのは、イエスの言われた言葉である。最初は、イエスが言われた、実を結ばない者への言葉である。

❖ 実を結ばない者に対して

以下に、神が望む実を一向に結ばない者に対し、神は何をなさるかを教えたイエスの言葉が書かれている。その言葉の一部を空欄にするので、そこにふさわしいと思う言葉を下記の「A」か「B」かで選んでほしい。この聖書記事を知っていても関係なく、あくまでも自分はどう思うかで選んでみてほしい。

> 「わたしはまことのぶどうの木であり、わたしの父は農夫です。わたしの枝で実を結ばないものはみな、父がそれを［　　］、実を結ぶものはみな、もっと多く実を結ぶために、刈り込みをなさいます。」（ヨハネ 15:1-2）
>
> A：**取り除き**　　B：**持ち上げ**

「人間的な標準」の「経験」に従えば、人の価値は行いの実（成果）で判断するので、実を結ばなければ「罰」を受けて当然となる。人はそういう「経験」を積み上げてきたので、ほとんどの人は「A」の「取り除き」を選ぶ。新改訳も新共同訳も、この箇所を「取り除き」と訳している。それだけではない。著名な英訳聖書はどれも「取り除き」という訳になっている。ただし、その中で、例えば New King James Version の脚注には、「lifts up」（持ち上げる）という訳が記載されている。では、正解はというと、それは「B」である。なぜそうなのかを説明したい。

「A」の「取り除き」が正解となると、「神の国」に行くには実を結ばせることが条件になる。神が啓示された「律法の行い」の実を結ぶことで、人は神から義と認められることになる。だが、そうなると次の御言葉を聖書から削除しなければならない。

> 「人が義と認められるのは、律法の行いによるのではなく、信仰によるというのが、私たちの考えです。」（ローマ 3:28）

聖書は繰り返し、人が義と認められるのは、すなわち救われるのは、「律法の行い」の実によるのではなく、「神の恵み」によることを教えている。「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行いによるのではありません」（エペソ 2:8-9）。人は、「神の恵み」によって「永遠のいのち」が与えられ、救われる。それゆえ、「わたしの枝で実を結ばないものはみな、父がそれを取り除き」（ヨハネ 15:2）という事態は起こり得ない。そのことは、イエスが次のように言われたことからも明らかである。「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません」（ヨハネ 10:28）。

したがって、「A」の「取り除き」は不正解としか言いようがない。正解は、「B」の「持ち上げ」である。そもそも「A」の「取り除き」と訳されたギリシャ語は「アイロー」［αἴρω］で、この言葉の本来の意味は「持ち上げる」である。次に「担ぐ」、「支える」であり、最後に「取り除く」となる（参考：織田昭編『新約聖書ギリシア語小辞典』教文館）。ならば、ここで「アイロー」が使われた意図を考察したい。

イエスはここで、神と私たちとの関係を、「農夫」と「ぶどうの木の枝」の栽培に譬えられた。というのも、当時の人々はぶどう栽培のことならよく知っていたからである。ただし、当時のぶどう栽培は、日本で見られるような棚を作る栽培ではなく、石や支柱で枝を持ち上げる栽培であった。ぶどうの枝はつる性であり、放置すると地面を這い泥がつき実を結ばなかったので、石や支柱で「持ち上げ」、実を結ぶようにしていた。イエスは、こうした誰もが知るぶどう栽培に神と私たちとの関係を重ね、実を結ばない者は「アイロー」すると言われたのである。それは、実を結ぶように「持ち上げる」という意味で言われたのであって、「取り除く」と言われたのではない（参考：ブルース・ウィルキンソン著『ヴァインの祝福』いのちのことば社 39-45 頁）。

つまり、イエスはこの箇所で、わたしにとどまり（イエスを信じ）、神の枝となったのなら（救われたのなら）、神が責任を持って実を結ぶように育てることを話されたのである。私たちは神の枝であり、その枝を神が責任を持って育てるから何も心配する必要はない、という意図で「アイロー」と言われたのであった。逆に言うと、イエスにとどまろうとしない者は、すなわち神の呼びかけに応答しない者は滅ぶしかないので、イエスは「アイロー」と言われた話の先で、「だれでも、もしわたしにとどまっていなければ、枝のように投げ捨てられて、枯れます。人々はそれを寄せ集めて火に投

げ込むので、それは燃えてしまいます」（ヨハネ 15:6）と言い、「神の恵み」による救いがいかに素晴らしいかを対比された。

いずれにせよ、イエスは「アイロー」を肯定的な意味で使っている。そのことは、イエスが言われた次の言葉からも分かる。

> 「彼らをこの世から取り去って（アイロー）くださるようにというのではなく、悪い者から守ってくださるようにお願いします。」（ヨハネ 17:15）

ここでイエスは、弟子たちに襲いかかる患難をご存じだったので、できれば彼らをこの世から「アイロー」してほしいと思ったが、そうはいかないので、彼らを悪い者から守ってくださいと祈られた。つまり、この箇所の「アイロー」は「取り去ってください」という意味ではなく、彼らを患難から守るために、「（天に）引き上げてください」という意味である。とはいえ、天に引き上げる時が来ていないので、それを願うことはしないが、せめて彼らを悪から守ってほしいと祈られたのであった。この祈りからも、イエスが「アイロー」という言葉をご自分の枝となった者たちに対して使うときは、彼らを助けたいという肯定的な意味で使われていたことが分かる。

このように、正解は「B」の「持ち上げ」である。しかし、「人間的な標準」の「経験」では人の価値を行いの実（成果）で判断するので、実を結ばなければ「罰」を受けて当然となる。そのような「経験」を積み上げてきたので、「A」の「取り除き」が正解だと誰もが思い込んでしまう。こうして、「神の福音」に覆いが掛かる。では、もう一つ、イエスの言葉で惑わしを体験してみたい。今度は、ある女がしたことを見たイエスが大いに感動し、ご自分が感動した理由を述べた時の言葉である。

❖ 感動した理由

イエスの体に香油を塗った女性がいた。それを見た弟子たちの何人かは、何ともったいないことをするのかと憤慨し、その女を厳しく責めた。しかし、イエスは、「わたしのために、りっぱなことをしてくれたのです」（マルコ 14:6）と言い、香油を塗った女性に感動したことを話された。そして、感動した理由を、「この女は、〇〇〇をしたのです」と言われたのであった。では、イエスが感動した理由は「A」だったのか、それとも「B」だったのかを選んでほしい。この聖書記事を知っていても関係なく、あくまでも自分はどう思うかで選んでみてほしい。

「彼女は、［　　］のです。埋葬に備えて、わたしのからだに、前もって香油を塗ってくれました。まことに、あなたがたに言います。世界中どこでも、福音が宣べ伝えられるところでは、この人がしたことも、この人の記念として語られます。」（マルコ 14:8-9　新改訳 2017）

A：自分にできることをした　　B：できる限りのことをした

「人間的な標準」の「経験」に従えば、人の価値は行いで判断するので、人は「できる限りのこと」をしなければ価値ある者という評価は得られない。したがって、この世界では、頑張れば頑張るだけ評価され、周りに感動を与えられる。そうした「経験」を人は積み上げてきたので、ほとんどの人は「B」の「できる限りのことをした」を選んでしまう。ならば、この箇所を日本語の聖書は、どう訳しているのだろう。口語訳と新共同訳は、「できる限りのことをした」と訳し、新改訳と新約聖書翻訳委員会訳（岩波書店刊 2004 年）は、「自分にできることをした」と訳している。意見が二つに分かれる。ならば、どちらが正しいのか。それは原文を見れば分かる。

空欄部分のギリシャ語の原文を見ると、そこには「エコー、ポイエオー」という二つの動詞が書かれている。「エコー」［ἔχω］は、「持つ」、「できる」といった意味の動詞で、もう一つの「ポイエオー」［ποιέω］は、「する」、「作る」、「行う」といった意味の動詞である。この二つの動詞は、ここでは過去の一回の動作を表すアオリストという時制で書かれている。したがって、この箇所を直訳すると、「持った（もので）、した」、あるいは「できた、した」となる。

しかし、この直訳では意味が分かりづらいので、聖書を翻訳する際は、分かりやすい文にするための文法解釈と、日本語解釈の作業が入る。このとき、「人間的な標準」の「経験」がささやいてくる。「この女性はできる限りのことをしたから、イエスは感動されたのだ」と。そのささやきに従うと、「できる限りのことをした」という訳になってしまう。だが原文は、「持った（もので）、した」、あるいは「できた、した」であるため、「できる限りのことをした」と訳せば、原文に意味を付け加えたことになり、脚色したという非難は避けられない。そうした非難を避けたければ、人の「経験」がどうささやこうと原文の意味を大切にし、「自分にできることをした」と訳すしかない。そういうわけで二つの訳が生まれたと思われるが、ギリシャ語の原文を見る限り正解は「A」の「自分にできることをした」となる。では、なぜイエスはそのような言い方をされたのだろう。それを知るには、この場面を深く読み解く必要がある。

ここで香油を塗った女性は、ラザロの姉妹マリヤであった。そのラザロは、あるとき病気になり、ついには死んでしまった。死んだあと、イエスはその所に来て、マリヤの姉マルタに、「あなたの兄弟はよみがえります」（ヨハネ 11:23）と言われた。しかし、彼女は信じなかった。そこで、イエスは、かつて「神の言葉」を熱心に聞き入った妹のマリヤ(ルカ 10:38-42)なら、ラザロのよみがえりを信じられるだろうと思い、彼女を呼びに行かせた。ところが、マリヤも、「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかったでしょうに」（ヨハネ 11:32）と言って、もう手遅れですとつぶやいてしまった。マルタもマリヤも、イエスの言葉を信じようとはしなかったのである。それは、イエスの弟子たちも同様であった。すると、イエスは霊の憤りを覚え、涙を流された。「イエスは涙を流された」（ヨハネ 11:35)。それから、イエスはラザロをよみがえらせたのであった。

その奇跡を目の当たりにしたマリヤは、イエスが涙されたわけを悟り、自分は赦されない罪を犯したことに気づいた。しかし、イエスはその罪を責めることはせず、ラザロに巻かれていた布をほどいてやりなさいと、優しく言われただけであった。「ほどいてやって、帰らせなさい」（ヨハネ 11:44)。マリヤはその優しい言葉を聞き、イエスに涙させるほどの罪を犯したにもかかわらず、罪が赦されたことを霊的に悟り、その感謝からイエスを心から信頼し愛するようになった。それゆえ、その後、埋葬に備え、イエスに香油を塗ったのである。確かにそれは高価な香油ではあったが、そこにはイエスにほめられようとする思いは全くなかった。何の見返りも求めてはいなかった。彼女にあったのは、ただ罪が赦されたことへの「感謝」だけであった。この感謝こそ、神に対するまことの「愛」であり、イエスはそれをご覧になったので感動し、「この女は、自分にできることをしたのです」と言われたというのが事の真相である。

この女性とは対照的だったのが、当時の弟子たちである。弟子たちは、偉くなりたいという見返りを求め、一生懸命頑張っていたからである。「さて、弟子たちの間に、自分たちの中で、だれが一番偉いかという議論が持ち上がった」（ルカ 9:46)。イエスから少しでもほめられようと、「立派な行い」を頑張っていた。彼らの「経験」が、「立派な行いがなければ神に愛されるはずがない。頑張らなければ、神は認めてくれない」とささやいたからである。しかし、いくら「立派な行い」を神のためにと頑張っても、それは神のためにしているのではなく、あくまでも自分が偉くなりたいがために、すなわち自分の評価のためにしているにすぎなかった。一口に言えば、自分が愛されるためにしていたのである。ゆえに、それは神への愛ではない。イエスは、そうした弟

子たちの誤りを是正したいと思っておられた。そこで香油を塗った女性に対し、「自分にできることをした」と言い、自らの感動を表現されたということである。

そもそも、神は誰であっても無条件で愛しておられる。なぜなら、神が人の土台であって、人を支えているからである。「私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです」（使徒 17:28）。だが、そこに悪魔の仕業で「死」が入り込み、人の側が、誰であっても無条件で愛しておられる神を認識できなくなり、そのことの不安から罪人になった。罪人は、まさしく「死」による病人であった。それゆえ、神は人を裁かず、癒やされる。罪を無条件で赦し、罪人を愛される。そうである以上、神に愛されようと、神に認められようと頑張る必要は全くない。ただ、無条件で愛されている自分を知ればよい。そうすれば、「自分にできること」を感謝しながらする態度になる。それこそが神の望んでいた人の態度だったので、イエスはその態度をマリヤの行動に見て感動を覚えた、ということである。

このように、ここでの正解は「自分にできることをした」である。それは原文の意味から見ても、この場面の出来事を深く読み解くことから見ても、人は神に支えられているという関係から見ても、正解は、「自分にできることをした」にしかならない。しかし、人は積み上げてきた「経験」に、すなわち「人間的な標準」に惑わされ、勝手に聖書の意味を補完し、「神の福音」に覆いを掛けてしまう。まことに、入り込んだ「死」が人を支配し、「死」を肯定する「人間的な標準」を作らせ、「死」を否定する神に対し、誤ったイメージを持たせてしまうのである。そのせいで、人は聖書を誤った意味に理解するようになったというのが、今日の現状である。

では、最後にもう一つだけ、惑わしの実際を見てみたい。それは、本書が何度も引用している、「死のとげは罪であり」（Ⅰコリント 15:56）の御言葉である。この節の全文は、「死のとげは罪であり、罪の力は律法です」である。これも「人間的な標準」によって、誤った意味に解釈されてきた。しかし、この御言葉の意味は大変重要なので、これについては丁寧に説明をしておきたい。題して、「死のとげは罪」である。

－死のとげは罪－

「死のとげは罪であり、罪の力は律法です。」（Ⅰコリント 15:56）

聖書の意味を様式史から解き明かすことで著名なブルトマン（1884-1976）は、この箇所の意味を次のように解釈する。

> 「罪にさそわれて律法に違反し、この違反が死をもたらす。死は人間の犯した罪の罰である。罪人は《死に価するもの》であって、当然のむくいとして死を「得ている」（ローマ 1:32）」（ブルトマン著作集第 4 巻『新約聖書神学Ⅱ』第 24 章 第 1 節 新教出版社 88 頁）

信仰覚醒運動の聖書的キリスト教の立場に立ったことで著名なシュラッター（1852-1938）は、この箇所の意味を次のように解釈する。

> 「神の意志によって、私たち人間に死の定めが課せられた。（中略）私たちがその意志と態度をもって神に逆らうゆえに、神は御自身と私たちの間に、死のとげに無抵抗に服させる断絶を置くのである。（中略）だが、私たちを神から隔て、私たちから生命を奪う力は、律法を通して罪を握っている。」（シュラッター『新約聖書講解 7』 新教出版社 225 頁）

他にも、『実用聖書注解』（いのちのことば社）は、「死のとげは罪であり」の意味を、「死は人の罪をきっかけにして世界に猛威を振い、人を害する」とし、アダムにあって全ての人は罪を犯したので、罰として人に死が入り込んだという意味に解釈している。また、「罪の力は律法です」は、「律法の故に罪は一層かき立てられ、また罪と定められる」とし、神の律法によって罪の力も明らかになるという意味に解釈している。

これらはどれも、神が人の罪に対して怒り、神と人を断絶する「死」を、神が罰として人に与えたとする解釈である。どれも、「罪には罰」という「人間的な標準」を使って解釈している。中でもブルトマンは、「罪には罰」を前面に打ち出し、「死は人間の犯した罪の罰」とする。その理由を、パウロはローマ 1:32 で、「当然のむくいとして死を「得ている」」と、教えているからだとする。確かに、そこには、こう書かれている。「そのようなことを行えば、死罪に当たるという神の定め」（ローマ 1:32）。しか

し、ローマ 1:32 の「当然のむくいとして死を「得ている」は、手前にある、「彼らは神を知っていながら、その神を神としてあがめず」（ローマ 1:21）の解説であって、神としてあがめられない状態を「死」だと言っているだけである。そして、「死罪に当たるという神の定め」とは、神の呼びかけを拒否すれば滅びるしかないという意味である。それはイエスの教え、「御子を信じる者はさばかれない。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかったので、すでにさばかれている」（ヨハネ 3:18）と同じである。したがって、これは「罪には罰」を述べているのでは決してない。

このように、人には「罪には罰」という「人間的な標準」があるので、「罪」という言葉を見ると自動的に「罰」を補完し、「死のとげは罪であり」を、“罪を犯せば、神の罰として死が来る”という意味に解釈してしまう。つまり、死が人間に対して持つ力は、人の罪によってもたらされるということである。そして、この解釈に誰も何の疑問も抱かない。そのため、本書が繰り返し用いた、「死のとげは罪であり」の解釈に違和感を覚えた人は多いことだろう。しかし、先に見た解釈はどれも、実は原文の意味を完全に無視している。ここでは、そのことを詳しく説明したい。そこで、まずは「死のとげは罪であり」の原文から見ていくことにしよう。

❖ 「死のとげは罪」の原文

τὸ	δὲ	**κέντρον**	τοῦ	**θανάτου**	ἡ	**ἁμαρτία**
（冠詞）	（接続詞）	（**とげ**）	（冠詞）	（**死**）	（冠詞）	（**罪**）

この箇所の原文を見ると、そこには動詞がない。「**死のとげ、罪**」、と書かれているだけである。動詞を省略する言い方は、古典ギリシャ語に於ける格言的な言い方であり、そこで省略される動詞は英語で言うところの「Be」動詞である。さらに古典ギリシャ語は強調したい内容から先に述べるので、先頭の語が必ずしも主語とは限らない。そして、ここでは「**死のとげ**」にも「**罪**」にも冠詞が付いているので、どちらも主語になり得る条件を満たしている。ならば、どちらが主語なのだろう。それは文章から推し量るしかない。ここでは「**罪**」とは何かを説明しているので、「**罪**」が主語であり、「**死のとげ**」は述語である。つまり、「**罪は、死のとげです**」と言っている。それをわざわざ動詞を省略した格言的な表現にし、さらには述語を先にし、「**死のとげ、罪！**」と書いている。そのことで、「**罪**」の正体は「**死**」であることを強調し、「**罪**」は「**死**」に起因することを単刀直入に述べている。ただそれだけであり、“罪を犯せば、神の罰として死が来る”という意味では全くない。

そこで、この話を日本語の例文で説明してみたい。というのも、「**死のとげ、罪！**」という、動詞のない格言的な表現法は、実は日本語にもあるからである。例えば、「**人生は、金です**」という文があったとしよう。それを格言のように言いたければ、しかも「**金**」を強調したければ、日本語ではこう書けばよい。

「金、人生！」

日本語でも動詞を省略し、前後をひっくり返せば「**金**」という言葉は強調され、格言のようになる。「**死のとげ、罪！**」も、これと全く同じである。

では、なぜパウロはこうした表現法を使ったのだろう。それは、罪に対する誤解を解くためであった。罪の原因は「私」にはなく、アダムの罪によって入り込んだ「**死**」にあったが、人は自分の本性に「罪性」があるから罪を犯すと思い込んでいたので、要するに罪の原因は「私」にあると思い込んでいたので、その誤解を解くためにこうした言い方をした。つまり、「**死**」が入り込んだことで、「**罪**」が「私」の中に住み着いた、ということである。それでパウロは、「**ですから、それを行っているのは、もはや私ではなく、私のうちに住みついている罪なのです**」（ローマ 7:17）と書いている。そうしたことから、「**死のとげ、罪！**」と述べることで、「**罪**」の正体は「**死のとげ**」であることを強調したのである。ここでの意味は、あくまでも「**罪** is **死のとげ**」であって、「**罪**」の罰が「**死**」であるという意味では決してない。

ところが、「**死のとげは罪であり**」は先述したように、人が神に逆らう罪を犯したので、神は死という罰を下されたという意味に解されてしまう。「**死のとげ**」の「**とげ**」が「罰」として解され、「**死のとげは罪であり**」は、“**罪を犯せば、神の罰として死が来る**”として解釈される。しかし、ここでの「**とげ**」は、後述するが、「**疫病**」を意味する。さらに言えば、この解釈は文法的にもあり得ない。

❖ 文法の話

「**死のとげは罪であり**」の原文では動詞が省略されており、格言的な言い方になっている。ならば、省略された動詞はというと、「**主語**」と「**述語**」をイコールで結ぶ動詞、「エイミ」[εἰμί]（**である**）である。英語で言うところの「Be」動詞である。そして、ここでの「**主語**」は「**罪**」なので、それを踏まえて訳すと、「**罪は、死のとげである**」という文になる。それは、「**水は、H^2O である**」という文と全く同じ構文である。

こうした構文の場合、「**述語**」は「**主語**」の実体や本質を言い表し、主語の「**正体**」を説明するので、「**主語**」イコール「**述語**」という関係になる（「**主語＝述語**」）。

主語 ＝ **述語**　（述語は主語の正体を説明）

ならば、「水は、H^2O である」という文は、「水の**正体**は、H^2O である」という意味なのか、それとも「水は、H^2O **になる**」という意味なのか。無論、誰もがその意味は、「水の**正体**は、H^2O である」と答えるだろう。であれば、「**罪は、死のとげである**」はどうだろう。これは「**罪の正体は、死のとげである**」という意味なのか、それとも「**罪は、死のとげになる**」という意味なのか、すなわち“**罪を犯せば、神の罰として死が来る**”という意味なのか。無論、「**罪の正体は、死のとげである**」という意味である。それは、「水の**正体**は、H^2O である」と同じである。

「水は、H^2O である」 ＝ 「水の**正体**は、H^2O である」
「**罪は、死のとげである**」 ＝ 「**罪の正体は、死のとげである**」

仮に、「**主語**」と「**述語**」が、英語で言うところの「Become」動詞で結ばれているというのであれば、「**主語＝述語**」ではなく、「**主語→述語**」となるので、その場合は、「**罪は、死のとげになる**」となり、“**罪を犯すと、神の罰として死が来る**”と解すことも可能となる。しかし、ここで「**主語**」と「**述語**」を結んでいる動詞は、あくまでも英語で言うところの「Be」動詞であるので、「**死のとげは罪であり**」を、“**罪を犯せば、神の罰として死が来る**”という意味に解すことは不可能である。それは、原文の文法を完全に無視した私的解釈でしかない。

ちなみに、ギリシャ語の正確な使い方を最初に定義したのが、アリストテレス（紀元前 384-322）であった。彼はギリシャ語の正しい使い方を研究し、ギリシャ語の日常での使い方と、哲学用語での使い方の基礎を築いた。その中で、「**主語＝述語**」の構文については詳しく論じている（『形而上学』第五巻 第 7 章）。聖書は、そのようにして整えられたあとのギリシャ語に沿って書かれたものである。それゆえ、アリストテレスが先の原文「**死のとげ、罪！**」を、“**罪を犯せば、神の罰として死が来る**”と解釈するのを見たなら、ただただ一笑に付すことだろう。したがって、この箇所は、「**罪の正体は、死のとげである**」という意味にしか解せないというのが結論になる。そこで、

この話をさらに納得してもらうために次の文章を読み、それをどのような意味に解すのが正しいかを考えてみてほしい。

「救い主、イエス！」

「救い主、イエス！」と書かれていれば、人はこれをどう受け取るだろう。誰もが、「イエスは救い主である」という意味に受け止めるのではないのか。この場合は「イエス」が主語であり、「救い主」は述語であって、「イエス」の正体は「救い主」であることを説明している文として読むだろう。そうであれば、「死のとげ、罪！」も全く同じではないのか。それは“罪の正体は、死のとげである”という意味に読むのであって、“罪を犯せば、神の罰として死が来る”という意味に読むのでは決してない。

ちなみに、パウロは、「肉の思いは死であり」（ローマ 8:6）も、「死のとげは罪であり」と同じ手法で書いている。こちらの原文にも、英語で言うところの「Be」動詞が省略されている。ただし、こちらは、「肉の思い」にしか冠詞が付いていないので、主語は「肉の思い」である。「肉の思い」とは「罪」の言い換えなので、ここは「罪、死！」ということになり、“罪の正体は、死である”という意味になる。パウロはここでも、「罪」の正体は「死」であることを端的に教えている。

このように、「死のとげは罪であり」を、“罪を犯せば、神の罰として死が来る”と解釈することは文法的にもあり得ない。そもそも「**死のとげ**」の「**とげ**」は、「**罰**」を意味する比喩ではなく、人を苦しめる「**疫病**」を意味する比喩である。とはいえ、「**とげ**」の意味は多くの人が勘違いするので、ここは少し立ち止まって、「**死のとげ**」の「**とげ**」の意味についても触れておきたい。

❖ 「死のとげ」の意味

人は、悪魔の仕業で入り込んだ「**死**」が原因で罪を犯すようになった。そこで聖書は、「罪を犯している者は、悪魔から出た者です」（Ⅰヨハネ 3:8）と教え、悪魔のことを、「死をつかさどる者」（ヘブル 2:14　新共同訳）と教えている。そうなると、人の「**罪**」は人の本性とは無関係ということになる。人の「**罪**」は、あくまでも入り込んだ「**死**」に原因があるということになるので、聖書はそれを、「罪が死によって支配したように」（ローマ 5:21）と教えている。

ということは、人の「**罪**」は、「**死**」がもたらした「**疫病**」ということになるので、神は人を「**罪**」から贖い出すではなく、「**死**」から贖い出すと言われた。

「わたしはよみの力から、彼らを解き放ち、彼らを死から贖おう。」
（ホセア 13:14）

さらに神は、人を支配する「**死**」のことを、続けて次のように言われたのである。

「死よ。おまえのとげはどこにあるのか。よみよ。おまえの針はどこにあるのか。」（ホセア 13:14）

ここでの神の言葉は、同じ内容を違う言葉で反復するというパラレルになっている。これは旧約聖書によく見られる、記憶を助けるための技巧である。それによると、「**死よ。おまえのとげはどこにあるのか**」を、「**よみよ。おまえの針はどこにあるのか**」と言い換えている。「**死**」を「**よみ**」と言い換え、「**とげ**」を「**針**」と言い換えている。

死よ。	おまえの	**とげ**	はどこにあるのか
=		=	
よみよ。	おまえの	**針**	はどこにあるのか

では、この「**とげ**」と「**針**」は、何を言い表しているのだろう。最初に「**とげ**」と訳されているヘブライ語だが、それは「デヴェル」[דֶּבֶר]で、「**疫病**」を意味する（名尾耕作著『旧約聖書ヘブル語大辞典』269-270 頁）。次に、「**針**」と訳されているヘブライ語は「ケテヴ」[קְטֶב]で、それは「**滅び、破壊**」を意味し、詩篇 91:6、イザヤ 28:2 では、その意味で使われている。加えて、人の手に負えない「**悪疫**」（申命記 32:24）も意味する。ということは、ここでいう「**とげ**」と「**針**」は、どちらも人の手に負えない「病」のことであり、人を滅びに導く「**疫病**」を意味することが分かる。パウロは、このホセア書の御言葉をそのまま引用し、「**死のとげは罪であり**」（Ⅰコリント 15:56）と書いたのである。すなわち、「**死のとげは罪であり**」とは、人の「罪」は、死がもたらした「**疫病**」であるという意味である。聖書を聖書の言葉で解釈するのであれば、「**死の とげ**」の「**とげ**」は、あくまでも人を苦しめる「**疫病**」を指す。それを、神からの「**罰**」という意味に解すのは、私的解釈の何ものでもない。

そもそもパウロも、病気を言い表すのに「**とげ**」という言葉を使っている。「**肉体に一つの とげ を与えられました**」（Ⅱコリント 12:7）。ここでの「**とげ**」は、明らかに「病」を指して使っている。ただし、ここで「**とげ**」と訳された原語は「スコロプス」[σκόλοψ]

で、「死のとげは罪であり」の「**とげ**」は「ケントロン」[κέντρον]で単語が違う。前者は先のとがったもの、例えば杭やいばらのような、そうした類の「**とげ**」であり、後者はただ先がとがっているだけではなく、例えばサソリやスズメバチなどの「**とげ**」を意味する。両者とも刺されば痛みが伴うが、サソリやスズメバチには毒があるので、前者よりも非常な苦痛が伴う。つまり、パウロはⅠコリント 15:56 で、「**死の とげ**（ケントロン）、**罪**」と書くことで、罪は死による単なる「病」とは違い、それは人の心に苦しみをもたらす「**疫病**」であることを言い表したのである。そうなると、ますます「罪人」は手に負えない「病人」ということになるので、その治療は神にしかできないということになる。この理解の正しさは、イエスが言われた、「**医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです**」（マルコ 2:17）からも、疑う余地がない。

このように、「**死の とげ**」の「**とげ**」は「**罰**」ではなく、人を苦しめる「**疫病**」を意味する。その「**疫病**」は、「**死**」が神と人を「分離」させたことで生じた「**不安**」であり、この「**不安**」から人は見える安心をむさぼる「罪の行為」に走るので、「**不安**」こそが「**罪**」の正体である。この「**死のとげは罪であり**」（Ⅰコリント 15:56）は、そのことを教えている。そして、「**罪の力は律法です**」という続きがくるので、こちらの意味も見ておきたい。

❖ 「罪の力は律法」の意味

「**罪の力は律法です**」も、原文には動詞がない。そして、「**罪の力**」にも「**律法**」にも冠詞が付いていて、前文の「**死のとげは罪であり**」と同じ様式が取られている。つまり、「**罪の力、律法**」と書かれているだけである。ただし、この場合の主語は「**罪の力**」である。前文の主語が「**罪**」だったので、それを受けての文である以上、ここでは「**罪の力**」が主語となる。この箇所は前文の、「**罪の正体は、死のとげである**」を受け、ならば「その**罪の力**」の正体は何かということで、「**罪の力の正体は、律法である**」と書かれている。そうであれば、「**律法の故に罪は一層かき立てられ、また罪と定められる**」（『実用聖書注解』）という意味でも、「**罪にさそわれて律法に違反し**」（ブルトマン）という意味でもない。ならば、どうして「**罪の力の正体は、律法**」なのか、これについてはすでに述べているが、簡単に復習しておこう（第一巻 65 頁「－「死」と「罪」との関係－」、本書 72 頁「「罪」と「罪の行為」の関係」、本書 113 頁「「律法」への勘違いを是正する」）。

入り込んだ「死」は、滅びに向かう運動を展開する「有限性」であり、それに対して神は、人を生かす運動を展開する「永遠性」である。そのため、人の中に「死」が入り込んだことで神と人は分離し、人は神に愛されている自分が見えなくなった。そのことで「不安」を覚えるようになり、その「不安」の反動から、「**愛されたい**」という願望を持つようになり、愛される自分を目指すようになった。ならば、愛されるには何が必要だろう。それは周りの期待に応えることである。すると周りの期待は、「**ねばならない**」という「**律法**」になり、その「**律法**」を達成することで愛される自分を目指すようになる。それで、「**罪の力の正体は、律法である**」と教えている。

まことに「**罪**」の正体は、神と人を分離する「死」（有限性）であり、その「死」が入り込むと人は神に愛されている自分が見えなくなり「不安」を覚える。つまり、「**罪**」は「不安」である。すると「**罪の力**」は「不安」を媒体に、愛される自分を目指させるので、愛されるための基準となる「**律法**」を持たせる。こうした一連の流れを、「**死のとげは罪であり、罪の力は律法です**」（Ⅰコリント 15:56）と、聖書は教えている。

そして、ここでいう「**律法**」は、自分が愛されるために持った基準なので、それはそのまま人を愛する基準になる。そのため、自分が持った「**律法**」に違反する者を見ると「**怒り**」を覚え、「**律法は怒りを招くものであり**」（ローマ 4:15）、それは「**敵意**」へと発展する。例えば、愛されるために持った「**律法**」に、「**頑張らなければならない**」がある。そのため、頑張っていない人を見ると「**怠け者だ！**」となって「**怒り**」を覚え、それでも相手が何もしなければ、今度は「**敵意**」が生じてしまう。そこで聖書は、「**敵意とは、さまざまの規定から成り立っている戒めの律法なのです**」（エペソ 2:15）と教えている。したがって、「**罪の正体は死の疫病（とげ）であって、その罪の力の正体は、律法なのである**」。だが人は、自分が手にした「**律法**」に、自分の「**怒り**」の原因があることを知らない。あくまでも、相手が悪いから、自分は怒っていると思い込んでいる。ゆえに、相手を憎んでしまう。そこで、簡単な実験をしてみたい。

真夜中に暴走族がやって来て、安眠が妨げられたなら、どのような感情を抱くだろう。誰もが「**怒り**」を覚えることだろう。それを注意してもやめなければ、暴走族に「**敵意**」を覚えることだろう。それは、「**夜は静かにしなければならない**」、「**人に迷惑をかけてはならない**」といった「**律法**」を人が持っているからである。だが、仮に国が次のような「**律法**」を作ったとしよう。それは暴走族によって安眠が妨げられたなら、一回につき、国が十万円を支払うというものである。例えば、一晩で十回暴走族が来たなら百万円もらえる。すると、どうだろう。暴走族の音が、心地よく聞こえてはこ

ないだろうか。そうだとすれば、暴走族への「**怒り**」の原因は、自分が持っている「**律法**」にあったということになる。これは、人が人に対して抱く「**怒り**」の原因も同様である。悪いのは相手ではなく、「**律法**」なのである。それゆえ、「**罪の力は律法です**」（Ⅰコリント 15:56）と、聖書は教えている。

このように、「**罪の力**」は「不安」を媒体に、愛される自分を目指させるが、それには周りの期待に応える必要があるので、周りの期待は「**ねばならない**」という「**律法**」になる。この「**律法**」が人を支配し、人を具体的に苦しめている。それでパウロは、「**罪の力、律法**」と表現した。意味は、「**罪の力の正体は、律法である**」である。したがって、「**死のとげは罪であり、罪の力は律法です**」とは、人が犯す「**罪**」は「**死の疫病**」であり、その「**罪の力**」は「**律法**」ということになる。そういうわけで、この「**罪の力**」である「**律法**」を終わらせるために、キリストは来られたのであった。

> 「キリストが律法を終わらせられたので、信じる人はみな義と認められるのです。」（ローマ 10:4）

まことに人の中に「死」が入り込んだことで、人は自分が愛されるための「**律法**」を持つようになり、それによって「**怒り**」が生じるようになり、人を愛せない「罪人」になった。しかし、「**罪には罰**」という人の「経験」が、その真実に覆いを掛け、人を惑わすのである。そのため、ローマ 5:12 は、次のように訳されてしまう。

❖ ローマ 5:12 の訳

一般に、ローマ 5:12 は以下のように訳されてきた。

> 「このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。すべての人が罪を犯したからです。」（ローマ 5:12　新共同訳）

この箇所は「原罪論」の根拠に使われてきた。「原罪論」では、私たちはアダムの子孫なので、アダムが犯した最初の罪、すなわちアダムの「原罪」が遺伝し、私たちはそれを持っているから罪を犯すとする。アダムが罪を犯した時、彼の中には全人類の種もあったので、アダムが罪を犯した際の「罪性」は全人類に遺伝し、私たちも罪を犯すようになったとする。つまり、アダムが罪を犯した時、実は、すべての人も罪を犯したということである。それゆえ、ローマ 5:12 には、「すべての人が罪を犯したから」

と書かれていて、すべての人が犯した罪の罰として、「死」が入り込んだことを教えているとする。確かに、このローマ 5:12 の訳が正しいのであれば、そうした解釈も可能だろう。だがそうなると、私たちの罪の原因は「死」ではなく、「原罪」にあるとなるので、これまで本書が述べてきた聖書解釈はみな嘘ということになる。

しかし、この訳は間違っている。詳しい説明は『福音の回復』第三巻ですることとして、その間違いを簡単に説明したい。「すべての人が罪を犯したから」という訳は、原文の「エポー」[ἐφ’ ᾧ]を、「because」（なぜなら…だから）と解している。この「エポー」は「エピ」[ἐπί]（…の上で）という前置詞と、「ホー」[ᾧ]（それ）という代名詞の二語から成るので、今後は「エポー」ではなく「エピ、ホー」と記すことにする。そこで、「エピ、ホー」の意味をギリシャ語の辞書、『Liddell-Scott-Jones Greek-English Lexicon』、『Thayer’s Greek Lexicon』、『ギリシア語　新約聖書釈義事典』等で見てみると、どれも「エピ、ホー」を「理由を表す接続詞」を解し、意味を「because」としている。しかし、辞書があって、聖書が書かれたわけではないので、本当に「エピ、ホー」は「because」の意味で使われていたのか確認してみたい。

そこで確認は、例えばローマ書を書いたパウロと同じ時代の歴史家プルタルコスの文章でしてみたい。彼は、「エピ、ホー」を使った文章を複数書いているので、その一つを見れば、パウロの時代「エピ、ホー」がどのような意味で使われていたのかが分かる。では、その「エピ、ホー」の部分だけは訳さないので、文脈から「エピ、ホー」の意味を自分で探ってみてほしい。

「沈黙があり、私も、彼が手紙を読むように、間をおいた。しかし、彼は、私が話を完了し、聴衆が解散されるまでは、手紙を読むことを欲せず、封を切らなかった。「エピ、ホー」、だれもが彼の威厳に驚嘆した。」

「γενομένης δὲ σιωπῆς, κἀμοῦ διαλιπόντος ὅπως ἀναγνῷ τὴν ἐπιστολήν, οὐκ ἠθέλησεν οὐδ’ ἔλυσε πρότερον ἢ διεξελθεῖν ἐμὲ τὸν λόγον καὶ διαλυθῆναι τὸ ακροατήριον· ἐφ’ ᾧ (エピ、ホー) πάντες ἐθαύμασαν τὸ βάρος τοῦ ἀνδρός.」

(Plutarchus De curiositate 522E4-6)

この「エピ、ホー」を辞書に従い「because」として訳すと、「（手紙の）封を切らなかった。なぜなら、だれもが彼の威厳に驚嘆したから」となり、意味不明の文章になる。しかし、「エピ、ホー」を「その結果」として訳すと、「（手紙の）封を切らなかった。

その結果、だれもが彼の威厳に驚嘆した」となり、意味の通じる文章になる。この事例から、「エピ、ホー」には「結果を表す接続詞」の意味があることは明らかである。

これは単なる一例であって、古典ギリシャ語の文献（Thesaurus Linguae Graecae）の中から、「エピ、ホー」が使われている用例をあるだけ調べてみるとよい。そのほとんどは、「結果を表す接続詞」として訳さなければ意味が通じないことが分かる。実は、それを発見したのがジョセフ・A・フィッツマイヤー（1920-2016）であり、彼は従来の「エピ、ホー」の意味に異議を唱えたのである（参考：Joseph A. Fitzmyer『To Advance the Gospel』Eerdmans 2nd ed, 1998, Grand Rapids 349-368 頁）。その結果、近年に出された註解書『Hermeneia series』の『ローマ書』（2006 年出版）では、フィッツマイヤーの主張が「新しい解釈」として取り上げられている（参考：Robert Jewett 『Romans』2006, Fortress Press 375 頁）。さらには、新約聖書のギリシャ語辞書としては最高級の学術的辞書と言われている、ドイツ語で書かれたバウアー（Walter Bauer）の辞書があるが、それを Danker 監修の下で英訳した第三版（2000 年出版）に、フィッツマイヤーの主張が掲載されている。こうしたことから、ローマ 5:12 の「エピ、ホー」は、次のように訳さなければならないことが確定した。

> 「それゆえ、ちょうど一人の人を通して罪がこの世に入り、罪を通して死が入り、まさしくそのように、全ての人たちに死が広がった。その結果、全ての人が罪を犯すようになった。」（ローマ 5:12　私訳）

この文章は、悪魔の仕業でアダムが罪を犯し、その罪に伴い「死」が入り込み、その「死」が全ての人に広がり、その結果、全ての人は罪を犯すようになったことを教えている。今日の私たちが犯す罪の原因は、入り込んだ「死」にあることを教えている。それゆえ、この続きでパウロは、「罪が死によって支配したように」（ローマ 5:21）と書いている。罪は、入り込んだ「死」によって人を支配するようになったということである。さらに先では、「肉の思いは死であり」（ローマ 8:6）と書いている。「肉の思い」は罪の言い換えであり、これも罪の正体が「死」であることを教えている。

このように、人は「罪には罰」という「人間的な標準」の「経験」を積み上げてきたので、「罪にはあわれみ」を教えている聖書の意味を取り違えてしまうのである。すなわち、「経験」が人を惑わしてしまう。「有名な外科医」と聞くと「経験」から「男性」を連想するので、冒頭での例題の文章の意味を取り違えたように、である。まことに注意すべきは、「人間的な標準」にほかならない。

「ですから、私たちは今後、人間的な標準で人を知ろうとはしません。かつては人間的な標準でキリストを知っていたとしても、今はもうそのような知り方はしません。」（Ⅱコリント 5:16）

ちなみに、新改訳第三版の「人間的な標準で」を、新改訳 2017 は「肉にしたがって」と訳し、新共同訳も聖書協会共同訳も「肉に従って」と訳している。英語の「Today' English Version」聖書は、「human standards」（人間的な標準で）と訳している。どちらにも訳せるが、「人間的な標準で」の方が現代人には説明が容易なので、本書ではその訳を採用した。では、「惑わしの仕組み」の総括をしよう。

❖ 「惑わしの仕組み」の総括

見てきたように、人の「経験」は勝手に意味を補完し、人を惑わしてくる。これこそが「惑わしの仕組み」であり、その惑わしによって「神の福音」に覆いが掛かってしまう。「かえって、今日まで、モーセの書が朗読されるときはいつでも、彼らの心にはおおいが掛かっているのです」（Ⅱコリント 3:15）。したがって、この覆いを取りのければ、「神の福音」の真実も見えてくる。それは、人を「否定」するものを「否定」することであり、すなわち人を「癒やす」ことだということが見えてくる。

そして、その覆いを取りのけるのは簡単である。ただ心を、「主」であるイエス・キリストに向けさえすればよい。「しかし、人が主に向くなら、そのおおいは取り除かれるのです」（Ⅱコリント 3:16）。「主に向くなら」とは、「主」は愛なので、人が「愛に向くなら」ということである。そうすれば、「人間的な標準」の「罪には罰」の覆いが取りのけられる。なぜなら、その愛は「イエス・キリストの十字架」が示しているように、「罪にはあわれみ」であって、人を裁くのではなく、癒やすものだからである。

「そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。」（Ⅰペテロ 2:24）

こうして、人が「イエス・キリストの十字架に向くなら」、「罪には罰」の覆いは取りのけられる。このことの教訓は、聖書の意味を解き明かす基準を、聖書の外部に求めてはならないということである。

例えば、人は「死ぬ」と聞けば、「経験」から肉体の死を連想する。しかし、神が言われた「死ぬ」は、禁断の実を食べた時に起きた出来事である。「それを取って食べるとき、あなたは必ず死ぬ」（創世記 2:17）。その出来事は、自分の姿しか認識できなくなる出来事であった。「このようにして、ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った」（創世記 3:7）。したがって、神が言われる「死」とは、人の土台が神であるにもかかわらず、自分の姿しか見えなくなることだと分かる。それは、神を認識できなくなる神との「分離」であって、肉体の死ではない。

ただし、「永遠性」の神が見えなくなるには、「有限性」の体になる必要があるので、「死ぬ」は「有限性」の体になることも意味した。そこで神はそのことを、人はやがて土に帰る運命になったと告げられたのであった。「あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る」（創世記 3:19）。それゆえ、「死ぬ」と聞いたときに、肉体の死を連想することも間違いではない。

いずれにせよ、神の御霊によって書かれた聖書は、その聖書自身がその意味を解くのである。そうでないと、「神の福音」に覆いが掛かってしまう。

> 「この賜物について話すには、人の知恵に教えられたことばを用いず、御霊に教えられたことばを用います。その御霊のことばをもって御霊のことを解くのです。」（Ｉコリント 2:13）

なぜそうなのかと言えば、人の知恵によっては、神のことは知り得ないからである。「事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです」（Ｉコリント 1:21）。すなわち、私たちの持つ信仰は、人間の知恵によって支えられるのではなく、神の力によって支えられなければならないのである。

> 「それは、あなたがたの持つ信仰が、人間の知恵にささえられず、神の力にささえられるためでした。」（Ｉコリント 2:5）

このことをわきまえておかなければ、人は自分の「経験」に容易に惑わされてしまう。以上で、「惑わしの仕組み」の話は終わる。では、『福音の回復』第三巻の話につながる結びをしたい。

❖ 結び

第一巻、第二巻は、ドイツ観念論哲学に於ける「存在論」の視点から人間を探求し、それによって明らかになった人間の問題を解決するために、聖書に答えを求めるという手法で書いた。その「存在論」では、人の土台は神であるとし、存在者（神）と、存在（人間）の関係や意味を問う。この視点に基づき、人間の問題を明らかにし、その解決策を聖書に求めてきた。この手法は、まさしく 20 世紀に台頭した新たな神学である。その基礎を築いたのがキェルケゴールであり、彼の「存在論」の土台となったのがカントの「存在論」であった。そして、キェルケゴールの影響を受けたのが、20 世紀を代表する神学者であるカール・バルト、パウル・ティリッヒ、ルドルフ・ブルトマンである。

だが、この「存在論」では、人の土台を神とするので、これに対しては様々な反発が起き、疑問が投げかけられてきた。そこで、次の第三巻では、投げかけられてきた代表的な疑問を取り上げ、それに答えていく。加えて、そのことに関連する話をする。これらは専門的な話ではあるが、深く学ぶことに興味のある方は読み続けてほしい。それを読むと、これまでの話をさらに深く理解できるようになる。そこで、『福音の回復』第三巻のタイトルは、**【深く学びたい人のために】**とする。